

# 豊 後 府 内 6

中世大友府内町跡第10次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)

2 0 0 7

大分県教育庁埋蔵文化財センター

# 豊 後 府 内 6

中世大友府内町跡第10次調査区

ダイウス堂および祐向寺付近の発掘調査

2007

大分県教育庁埋蔵文化財センター



10次Ⅱ区北調査区墓地遠景(南から:線路の向うが、ダイウス堂推定地)



1号墓ST130の木棺と埋葬状態(東から)



中世大友府内跡の空中写真（1948年：米軍撮影）



10次調査区周辺の空中写真(合成)



10次Ⅰ区調査区の空中写真



10次Ⅱ区南調査区の空中写真



10次Ⅱ区北調査区遠景(南上空から)



10次Ⅱ区北調査区全景



10次Ⅱ区北調査区全景(東区から墓地、手前に道路)



10次Ⅱ区北調査区全景(墓地から西区、手前に道路)





道路SF151  
(西から)



道路SF151の断面



側溝道路SF151の北側側溝の推移 (SD165→SD250→SD270)



SE147の石組井筒

## 序 文

本書は、大分県教育委員会が大分駅付近連続立体交差事業に伴い、大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した中世大友城下町跡第10次調査区の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、かつて九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていました。近年の発掘調査により、大友氏の館やその菩提寺である万寿寺をはじめとした都市のにぎわいにあふれた府内の町の様子が、次第に明らかになってきました。

本書に収録した第10次調査区は、戦国時代の府内の町の景観を描いたとされる「府内古図」によれば、中世府内にあった40余りの町のひとつである「中町」の南端にあたり、かつて日本にキリスト教を伝えたイエズス会の府内教会の南縁にあたります。

調査区からは、ゴミ捨て穴と考えられる土坑、街路、井戸などの町屋の景観をつたえる遺構群や、府内教会の付属墓地の一部と考えられる16世紀後半の墓地が発見されました。初期の府内教会内には病院や孤児院が併設され、後にはイエズス会の最高学問機関であるコレジオもおかれています。墓地の調査によって明らかとなった子供の墓地から成人墓地への変遷は、この教会の発展によるものと考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、こころから感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 小 玉 学 司

# 例 言

1. 本書は大分県大分市顕徳町・元町に所在する中世大友府内町跡第10次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業の実施に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、大分県教育委員会文化課が実施した。
3. 中世大友府内町跡第10次調査はⅠ区とⅡ区に別れ、Ⅰ区は2001（平成13）年7月から2001（平成13）年10月にかけて実施し、坂本嘉弘・榎島隆二・吉田寛・後藤晃一・中田裕樹・阿比留士郎・幡上敬一（大分県教育委員会）が担当した。また、Ⅱ区は2001（平成13）年9月から2002（平成14）年9月にかけて実施し、坂本嘉弘・田中裕介・後藤晃一・榎島隆二・吉田寛・山崎文子・服部真和・中田裕樹・阿比留士郎（大分県教育委員会）が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は大分県教育庁文化課職員のほか、(株)パスコ・(株)明大工業・(株)埋蔵文化財サポートシステムの調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員のほかに、(株)九州文化財研究所・(株)国際航業・(有)九州文化財リサーチが担当した。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。  
SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、  
SA：柵列および柵列状遺構、ST：墓、SH：竪穴住居跡、SP：柱穴および小穴  
SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。  
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）  
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）  
白磁 森田勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）  
備前焼 乗岡実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）  
乗岡実「近世備前焼播鉢の編年案」（『岡山城三之曲輪跡-表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査-』岡山市教育委員会 2002年）  
中国南部産焼締陶器 吉田寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）  
京都系土師器 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）  
塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）  
河野史郎「大友府内4-中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書-」大分市教育委員会 2002年  
瓦 森田克「屋瓦」（『撰津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会）  
動物骨 松井章氏（奈良文化財研究所）の鑑定による。
10. 本書の執筆は第1章を坂本嘉弘・田中裕介、第2・3章を後藤晃一、第4・6章を田中裕介が担当し、そのうち4章第6節は山崎文子と田中が担当した。中世大友府内町跡第10次調査出土人骨の調査を九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座に委託し、舟橋京子（同大学院）・田中良之氏（同大学院教授）らによる分析結果を掲載した（第5章第1節）。中世大友府内町跡第10次調査ほか出土金属遺物の分析を魯禎玟・平尾良光（別府大学大学院文学研究科）から得た（第5章第2節）。なお、執筆分担は目次に明記している。
11. 本書の編集は、田中と後藤が行った。

# 目 次

第1章	はじめに (坂本嘉弘・田中裕介)	
第1節	調査の経緯	1
第2節	遺跡の立地と環境	6
第3節	報告書作成にあたって	8
第4節	第10次調査区について	13
第2章	中世大友府内町跡第10次I区調査区 (後藤晃一)	
第1節	調査の経緯	15
第2節	遺構と遺物	19
第3節	小結	49
第3章	中世大友府内町跡第10次II区南調査区 (後藤晃一)	
第1節	調査の経緯	51
第2節	遺構と遺物	55
第3節	小結	84
第4章	中世大友府内町跡第10次II区北調査区 (田中裕介)	
第1節	調査の方法	87
第2節	基本層序	88
第3節	遺構の概要	88
第4節	古代の遺構と遺物	97
第5節	中世の遺構と遺物	99
第6節	墓地の遺構と遺物 (山崎文子・田中)	252
第7節	小結	285
第5章	自然科学的分析	
第1節	中世大友府内町跡第10次調査出土人骨について (舟橋京子・田中良之)	293
第2節	中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査 (魯禎玆・平尾良光)	303
第6章	総括 (田中裕介)	
第1節	調査の成果	311
第2節	第10次調査区発見の墓地とイエズス会府内教会	313
第3節	イエズス会府内教会の歴史から	322
付 節	遺物の補遺	326

# 細目次

1章 はじめに	SE014	38
第1節 調査の経緯	SE017	40
1. 調査に至る経過	4. 土坑墓	45
2. 調査の経過	ST009	45
3. 調査の体制	5. 包含層・ピット	46
2001(平成13)年度	第3節 小結	49
2002(平成14)年度		
第2節 遺跡の立地と環境	第3章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区	
1. 地理的環境	第1節 調査の経緯	51
2. 歴史的環境	第2節 遺構と遺物	55
第3節 報告書作成にあたって	1. 溝	55
1. 府内古図と道路の名称	SD111	55
2. 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年	SD113	57
3. 整理作業の経過	SD116・SF116・SF124	61
第4節 第10次調査区について	SD117	62
	SD118	64
	2. 土坑	70
	SK101	70
	SK102	71
	SK103	71
	SK104	73
	SK115	76
	SK120・121	76
	SK125	77
	3. 掘立柱建物	78
	SP001・SP002・SP003	78
	SB001	79
	4. 井戸	80
	SE126	80
	5. 包含層	81
	第3節 小結	84
第2章 中世大友府内町跡第10次Ⅰ区調査区	第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区	
第1節 調査の経緯	第1節 調査の方法	87
第2節 遺構と遺物	第2節 基本層序	88
1. 溝	第3節 遺構の概要	88
SD001	第4節 古代の遺構と遺物	97
SD010	遺構の概要	97
SD028	土坑	97
2. 土坑	SK226	97
SK004		
SK005		
SK006		
SK007		
SK008		
SK012		
SK013		
SK015		
SK016		
SK019		
SK022		
SK023		
SK026		
SK027		
SK030		
3. 井戸		

SK301	98	小結	140
小結	98	4.16世紀第2四半期の遺構と遺物	
第5節 中世の遺構と遺物	99	概要	140
1. 遺構の概要	99	溝	141
2. 15世紀代の遺構と遺物		SD140	141
概要	99	井戸	142
道路状遺構 SF151	99	SE235	142
溝	107	SE144	143
SD165	107	SE291	144
SD259・SD277・SD294・SD255	118	土坑	145
井戸	119	SK238	145
SE300	119	SK243	146
土坑	121	SK265	146
SK256	121	SK272	147
SK298	123	SK285	148
SK286	124	SK163	149
SK287	124	SK190	150
SK206・SK207	124	SK191	150
SK199	125	SK276	151
SK203	127	墓?	151
SK212	128	ST192	151
SK251	128	小結	151
S275	129	5.16世紀第3四半期の遺構と遺物	
ピット	131	概要	152
SP183	131	溝	153
SP221	131	SD284	153
SP223	131	SX164	153
SP288	131	井戸	154
小結	131	SE234	154
3.16世紀第1四半期の遺構と遺物		土坑	154
概要	132	SE291 内部土坑	154
溝	132	SK224	155
SD303	132	SK228=SK232	156
SD239=SD245	133	SK278	158
SD176・SD197・SD208	133	SK293	159
土坑	134	SK267	159
SK247	134	小結	160
SK266	135	6.16世紀第4四半期前半の遺構と遺物	
SK227	137	概要	161
SK189	138	溝	162
SK193	139	SD118	162
ピット	140	SD117	164
SP166	140	SD116	166

SD250	168	溝	240
SD270	180	SD204	240
SD131	183	土坑	240
SD230・SK261・SD292	186	SK136	240
井戸	192	SK180	241
SE148	192	SK220	242
土坑	192	SK246	242
SK264	199	ピット	243
SK236	199	SP184	243
SK252 (=S133)	201	SP195	243
SK269 (=S137)	202	SP240	243
SK156	204	SP249	243
SK279	204	SP280	243
SK263	205	SP281	243
SK229	207	SP282	243
SK273	208	10. 近世の遺構と遺物	
SK262	209	概要	244
小結	217	近世初頭	244
7.16世紀第4四半期後半の遺構と遺物		溝	244
概要	218	SD138	244
溝	219	石列	245
SD141	219	SX139	245
SD167	223	土坑	245
SD168	226	SK177	245
井戸	229	近世中期	246
SE147	229	溝	246
SE210	229	SD145	246
土坑	234	土坑	246
S218	234	SK146	246
SK231	235	ピット	247
SK215	237	SP142	247
S134	238	小結	247
小結	238	11. 近世整地層の遺物	
8.16世紀第4四半期の遺構と遺物		第2層整地層出土遺物	247
溝	239	12. 近現代の遺構と遺物	
SD194	239	概要	251
土坑	239	溝	251
SK237	239	SD143	251
ピット	239	13. そのほかの遺物	251
SP213	239	第6節 墓地の遺構と遺物	
SP214	240	概要	252
SP233	240	1. 墓地第1期	255
9.16世紀代の遺構と遺物		3号墓 ST268	255



2. 墓地第 2 期	256	4. まとめ	300
5 号墓 ST154	257	第 2 節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する 自然科学調査	303
6 号墓 ST157	258	1. はじめに	303
7 号墓 ST158	258	2. 資料	303
13 号墓 ST289	259	3. 鉛同位対比の原理	303
14 号墓 ST295	260	4. 分析方法	304
15 号墓 ST296	261	5. 測定値の表し方	304
16 号墓 ST297	262	6. 化学組成	304
17 号墓 ST299	262	7. 結果	305
3. 墓地第 3 期	263	8. 考察	305
1 号墓 ST130	263		
2 号墓 ST135	266	第 6 章 総括	
4 号墓 ST150	266	第 1 節 調査の成果	311
8 号墓 ST149	272	第 2 節 第 10 次調査区発見の墓地とイエズス会 府内教会	313
9 号墓 ST152	277	1. 第 10 次調査区の位置	313
10 号墓 ST260	278	2. 墓地の実態	314
11 号墓 ST257	279	3. 墓地の性格	315
12 号墓 ST274	280	4. まとめ	321
18 号墓 ST290	281	第 3 節 イエズス会府内教会の歴史から	322
4. 墓地まとめ	282	1. ポルトガル人の来住とキリスト教の伝来	322
墓地第 1 期	282	2. 府内教会の始まりと育児院	322
墓地第 2 期	282	3. 教会の拡張	323
墓地第 3 期	283	4. 病院と墓地	323
墓地の構成	284	5. 府内教会の最盛期とコレジオ	324
墓地の性格	284	6. 府内教会の終焉	324
第 7 節 小結		7. イエズス会府内教会の変遷と墓地	325
1. 15 世紀以後の第 10 次北調査区の遺構の変遷	285	付節 遺物の補遺	326
15 世紀	285		
16 世紀第 1 四半期	285		
16 世紀第 2 四半期	286		
16 世紀第 3 四半期	287		
16 世紀第 4 四半期前半	287		
16 世紀第 4 四半期後半	288		
近世	289		
2. 遺構の画期	289		
3. 木棺に転用された唐櫃について	291		
第 5 章 自然科学的分析			
第 1 節 中世大友府内町跡第 10 次調査出土人骨 について	293		
1. はじめに	293		
2. 人骨出土状態	293		
3. 人骨所見	295		

# 挿図目次

## 第1章 はじめに

第1-1図	中世大友城下町跡の発掘調査状況…………… 2	第1-4図	「府内古図」と街路名称の設定…………… 8
第1-2図	大分平野の地形と主要遺跡…………… 4	第1-5図	中世大友城下町跡出土の土師質土器編年図……………10
第1-3図	中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡…………… 7	第1-6図	10次調査区の位置 (1/1000) ……………14

## 第2章 中世大友府内町第10次調査区I区

第2-1図	第10次調査区I区遺構分布図(1/100)……………15	第2-28図	SK019 出土遺物実測図 (1/3)……………35
第2-2図	第10次調査区I区遺構分布図(1/100)……………17	第2-29図	SK022 出土遺物実測図 (1/3)……………35
第2-3図	第10次調査区I区土層図 (1/100) ……18	第2-30図	SK022 遺構図 (1/30) ……………35
第2-4図	SD001 遺構図 (1/60) ……………19	第2-31図	SK023 遺構図 (1/30) ……………36
第2-5図	SD001 出土遺物実測図 (1/3)……………20	第2-32図	SK026 出土遺物実測図 (1/3)……………36
第2-6図	SD001 出土遺物実測図 (1/3)……………21	第2-33図	SK026 遺構図 (1/30) ……………36
第2-7図	SD001 出土遺物実測図 (1/3)……………22	第2-34図	SK027 出土遺物実測図 (1/3)……………37
第2-8図	SD001 出土遺物実測図 (1/3)……………23	第2-35図	SK027 遺構図 (1/30) ……………37
第2-9図	SD010 遺構図 (1/60) ……………24	第2-36図	SK030 遺構図 (1/30) ……………37
第2-10図	SD010 出土遺物実測図 (1/3)……………25	第2-37図	SK030 出土遺物実測図 (1/3)……………37
第2-11図	SD028 遺構図 (1/30) ……………26	第2-38図	SE014 遺構図 (1/200)……………38
第2-12図	SD028 出土遺物実測図 (1/3)……………26	第2-39図	SE014 出土遺物実測図 (1/3)……………39
第2-13図	SK004 遺構図 (1/30) ……………27	第2-40図	SE017 遺構図 (1/40) ……………40
第2-14図	SK004 出土遺物実測図 (1/3)……………27	第2-41図	SE017 土層断面図 (1/40) ……………40
第2-15図	SK005 遺構図 (1/30) ……………28	第2-42図	SE017 出土遺物実測図(1/3・11=1/1)……………41
第2-16図	SK006 遺構図 (1/3) ……………28	第2-43図	SE017 鍬・鋤・篋出土状況 (1/40) ……42
第2-17図	SK006 出土遺物実測図 (1/3)……………29	第2-44図	SE017 出土遺物実測図 (1/3)……………43
第2-18図	SK006 出土遺物実測図 (1/3)……………30	第2-45図	SE017 出土遺物実測図 (1/3)……………44
第2-19図	SK007 遺構図 (1/30) ……………31	第2-46図	ST009 遺構図 (1/30) ……………45
第2-20図	SK008 遺構図 (1/30) ……………31	第2-47図	ST009 出土遺物実測図 (1/3)……………45
第2-21図	SK012 遺構図 (1/30) ……………32	第2-48図	包含層・ピット出土遺物実測図 (1/60)……………47
第2-22図	SK012 出土遺物実測図 (1/3)……………33	第2-49図	包含層・ピット出土遺物実測図 (1/3)……………48
第2-23図	SK013 遺構図 (1/30) ……………33	第2-50図	府内古図C類……………49
第2-24図	SK015 出土遺物実測図 (1/3)……………33	第2-51図	時期別遺構分布図 (1/500)……………50
第2-25図	SK015 遺構図 (1/30) ……………34		
第2-26図	SK016 遺構図 (1/30) ……………34		
第2-27図	SK019 遺構図 (1/30) ……………35		

## 第3章 中世大友府内町第10次調査区II区南調査区

第3-1図	第10次II区南調査区遺構分布図(1/80)……………51	第3-5図	SD111 出土遺物実測図 (1/3)……………56
第3-2図	第10次II区南調査区遺構分布図(1/250)……………53	第3-6図	SD113 遺構図 (1/40) ……………57
第3-3図	第10次II区南調査区土層図 (1/60) ……54	第3-7図	SD113 土層図 (1/30) ……………58
第3-4図	SD111 遺構図 (1/80) ……………55	第3-8図	SD113 出土遺物実測図 (1/3)……………58

第3-9図	SD116・SD117・SD118 土層図 (1/30) .....59	第3-27図	SK115 遺構図 (1/30) .....76
第3-10図	SD116・SD117・SD118 遺構図 (1/100) .....60	第3-28図	SK115 出土遺物実測図 (1/3) .....76
第3-11図	SD116 出土遺物実測図 (1/3) .....62	第3-29図	SK120・SK121 遺構図 (1/30) .....77
第3-12図	SD116 出土遺物実測図 (1/3) .....63	第3-30図	SK120 出土遺物実測図 (1/3) .....77
第3-13図	SD117 出土遺物実測図 (1/3) .....65	第3-31図	SK120 出土遺物実測図 (1/3) .....77
第3-14図	SD117 出土遺物実測図 (1/3、33=1/1) .....66	第3-32図	SK125 遺構図 (1/40) .....78
第3-15図	SD118 出土遺物実測図 (1/3) .....67	第3-33図	SK125 出土遺物実測図 (1/3) .....78
第3-16図	SD118 出土遺物実測図 (1/3) .....68	第3-34図	SP001・SP002 遺構図 (1/30) .....78
第3-17図	SD118 出土遺物実測図 (1/3、30=1/1) .....69	第3-35図	SP003 遺構図 (1/30) .....78
第3-18図	SK101 遺構図 (1/30) .....70	第3-36図	SP003 出土遺物実測図 (1/3) .....78
第3-19図	SK101 出土遺物実測図 (1/3) .....70	第3-37図	SB001 実測図 (1/40) .....79
第3-20図	SK102 出土遺物実測図 (1/3) .....71	第3-38図	SE126 遺構図 (1/40) .....80
第3-21図	SK102 遺構図 (1/30) .....71	第3-39図	SE126 土層図 (1/40) .....80
第3-22図	SK103 出土遺物実測図 (1/3) .....71	第3-40図	SE126 井筒実測図 (1/40) .....81
第3-23図	SK103 遺構図 (1/30) .....71	第3-41図	SE126 出土遺物実測図 (1/3) .....81
第3-24図	SK104 遺構図 (1/60) .....72	第3-42図	包含層出土遺物実測図 (1/3) .....82
第3-25図	SK104 出土遺物実測図 (1/3) .....74	第3-43図	包含層出土遺物実測図 (1/3、59=1/1) .....83
第3-26図	SK104 出土遺物実測図 (1/3) .....75	第3-44図	第10次調査区Ⅰ区・Ⅱ区南調査区遺構変 遷図 (1/400) .....84
		第3-45図	府内古図C類 .....86

#### 第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区

第4-1図	10次調査区の調査位置図 (1/800) .....87	第4-16図②	SD165 出土遺物 (1/3) .....112
第4-2図	調査区の分割 (1/400) .....87	第4-16図③	SD165 出土遺物 (1/3) .....113
第4-3図	層序概念図 .....88	第4-16図④	SD165 出土遺物 (1/3、58・59=1/10、60 =1/1) .....114
第4-4図	古代の遺構 (1/300) .....97	第4-16図⑤	SD165 出土遺物 (1/3) .....115
第4-5図	SK226 (1/30) .....97	第4-16図⑥	SD165 出土遺物 (1/3) .....116
第4-6図	SK301 (1/30) .....98	第4-16図⑦	SD165 出土遺物 (90=1/1、91=1/4、92 ~94=1/10) .....117
第4-7図	15世紀の遺構 (1/300) .....99	第4-16図⑧	SD165 出土遺物 (1/3) .....118
第4-8図	SF151 上層 (1/100) .....100	第4-17図	SD259・SD277・SD294 (1/40) .....119
第4-9図	SF151 中層 (1/100) .....102	第4-18図	SD255 出土遺物 (1/3) .....119
第4-10図	SF151 下層 (1/100) .....104	第4-19図	SE300 (1/30) .....120
第4-11図	SF151 出土遺物①上層・中層 (1=1/1、2 ~22=1/3) .....105	第4-20図	SE300 出土遺物 (1/3) .....120
第4-12図	SF151 出土遺物②下層 (1/3) .....106	第4-21図	SK256 (1/30) .....121
第4-13図	SD165 掘形 (1/100) .....107	第4-22図	SK256 出土遺物 (1/3) .....122
第4-14図	SD165 第4矢板列 (1/100) .....108	第4-23図	SK298 (遺構1/30、遺物1/3) .....123
第4-15図	SD165 B10・C11区の掘削時の埋置土 師器 (1/30) .....109	第4-24図	SK286 (遺構1/30、遺物1=1/3、2 =1/1) .....124
第4-16図①	SD165 出土遺物 (1/3、10・19=1/4) .....111	第4-25図	SK199 (1/30) .....125

第4-26図	SK119 出土遺物 (1/3) ……………126	第4-66図	ST192 出土遺物 (1/3) ……………151
第4-27図	SK203 (1/60) ……………127	第4-67図	16世紀第3四半期の遺構 (1/300) ……152
第4-28図	SK203 出土遺物 (1/3) ……………127	第4-68図	SD284 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……153
第4-29図	SK212 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……128	第4-69図	SX164 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……153
第4-30図	SK251 (1/40) ……………129	第4-70図	SE234 (1/30) ……………154
第4-31図	SK251 出土遺物 (1/3、3=1/4、17=1/1) ……………130	第4-71図	SE234 出土遺物 (1~6=1/1・7~9= 1/3) ……………155
第4-32図	16世紀第1四半期の遺構 (1/300) ……132	第4-72図	SK224 (1/30) ……………155
第4-33図	SD303 (1/80) ……………132	第4-73図	SK224 出土遺物 (1/3、3~5=1/1) ……156
第4-34図	SD239=SD245 (1/60) ……………133	第4-74図	SK228=SK232 (1/30) ……………157
第4-35図	SD239=SD245 出土遺物 (1/3) ……133	第4-75図	SK232 出土遺物 (1/3、15=1/1) ……158
第4-36図	SD176・SD197・SD208 (1/80) ……133	第4-76図	SK278 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……158
第4-37図	SK247 (1/80) ……………134	第4-77図	SK293 (1/30) ……………159
第4-38図	SK247 出土遺物 (1/3) ……………134	第4-78図	SK293 出土遺物 (1/3) ……………159
第4-39図	SK266 (1/30) ……………135	第4-79図	SK215・SK267 (遺構 1/30、遺物 1= 1/3・2=1/1) ……………160
第4-40図	SK266 出土遺物 (1/3、3=1/10) ……136	第4-80図	16世紀第4四半期前半の遺構(1/300) 161
第4-41図	SK227 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……137	第4-81図	SD118 (1/80) ……………162
第4-42図	SK189 (1/30) ……………138	第4-82図	SD118 出土遺物 (1/3、7=1/1) ……163
第4-43図	SK189 出土遺物 (1/3) ……………139	第4-83図	SD117 (1/80) ……………164
第4-44図	SK193 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……139	第4-84図	SD117 出土遺物 (1/3、7=1/4) ……165
第4-45図	16世紀第2四半期の遺構 (1/300) ……141	第4-85図	SD116 (1/80) ……………166
第4-46図	SD140 (1/80) ……………141	第4-86図	SD116 出土遺物 (1/3、16=1/4) ……167
第4-47図	SD140 出土遺物 (1/3) ……………141	第4-87図	SD250 (1/100) ……………169
第4-48図	SE235 (1/30) ……………142	第4-88図①	SD250 出土遺物 (1/3、16=1/4) ……170
第4-49図	SE235 出土遺物 (1/3) ……………142	第4-88図②	SD250 出土遺物 (1/4) ……………171
第4-50図	SE144 (1/30) ……………143	第4-88図③	SD250 出土遺物 (1/3、19=1/4) ……173
第4-51図	SE144 出土遺物 (1/3) ……………144	第4-88図④	SD250 出土遺物 (1/3) ……………174
第4-52図	SE291 (1/30) ……………144	第4-88図⑤	SD250 出土遺物 (1/3) ……………175
第4-53図	SE291 出土遺物 (1/3) ……………145	第4-88図⑥	SD250 出土遺物 (1/3) ……………176
第4-54図	SE238 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……145	第4-88図⑦	SD250 出土遺物 (1/3) ……………177
第4-55図	SK243 (遺構 1/30、遺物 1=1/3、2= 1/2) ……………146	第4-88図⑧	SD250 出土遺物 (86=1/1、87~88= 1/4、89・90=1/10) ……………178
第4-56図	SK265 (1/30) ……………146	第4-88図⑨	SD250 出土遺物 (91~102=1/10、103~ 105=1/3) ……………179
第4-57図	SK265 出土遺物 (1/3、5=1/1) ……147	第4-89図	SD270 (1/100) ……………181
第4-58図	SK272 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……147	第4-90図	SD270 出土遺物 (1/3) ……………182
第4-59図	SK285 (1/30) ……………148	第4-91図	SD131 (1/60) ……………183
第4-60図	SK285 出土遺物 (1/3、5=1/1・6~10= 1/10) ……………149	第4-92図①	SD131 出土遺物 (1/3、4=1/4) ……184
第4-61図	SK163 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……149	第4-92図②	SD131 出土遺物 (1/3) ……………185
第4-62図	SK190 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……150	第4-93図	SD230・SK261・SD292 (1/80) ……186
第4-63図	SK191 (1/30) ……………150	第4-94図	SD230 (1/30) ……………187
第4-64図	SK191 出土遺物 (1/3) ……………150	第4-95図	SK261 (1/30) ……………188
第4-65図	ST192 (1/30) ……………151		

第4-96図	SD292 (1/60) ……………	188	第4-124図	SD168 (1/80) ……………	227
第4-97図①	SD230・SK261 出土遺物 (1/3、1 = 1/4) ……………	190	第4-125図	SD168 出土遺物 (1/3、21 ~ 22 = 1/1) ……	228
第4-97図②	SD261 出土遺物 (1/3、15 = 1/1、16 ~ 17 = 1/4) ……………	191	第4-126図	SE147 (1/30) ……………	230
第4-98図	SD292 出土遺物 (1/3) ……………	192	第4-127図	SE147 (1/3、5 = 1/1・6 = 1/4) ……………	231
第4-99図	SE148 上部廃棄状態 (1/30) ……………	193	第4-128図	SE210 (1/30) ……………	232
第4-100図	SE148 (1/30) ……………	194	第4-129図	SE210 出土遺物 (1/3、6 ~ 8 = 1/1) ……	233
第4-101図①	SE148 井筒石組出土遺物 (1/10) ……………	195	第4-130図	S218 出土遺物 (1/3) ……………	234
第4-101図②	SE148 井筒石組出土遺物 (1/10) ……………	196	第4-131図	SK231 (1/40) ……………	234
第4-102図①	SE148 出土遺物 (1/3) ……………	197	第4-132図①	SK231 出土遺物 (1/3) ……………	236
第4-102図②	SE148 出土遺物 (1/3、24 = 1/10、36 = 1/1) ……	198	第4-132図②	SK231 出土遺物 (1/3) ……………	237
第4-103図	SK264 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………	199	第4-133図	SK215 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………	237
第4-104図	SK236 (1/30) ……………	200	第4-134図	S134 (1/30) ……………	238
第4-105図	SK236 出土遺物 (1/3) ……………	200	第4-135図	SD194 (1/30) ……………	239
第4-106図	SK252 (1/30) ……………	201	第4-136図	SK237 (1/30) ……………	239
第4-107図	SK252 出土遺物 (1/3) ……………	202	第4-137図	SP213 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………	239
第4-108図	SK269 (= S137) (1/30) ……………	202	第4-138図	SD204 (1/30) ……………	240
第4-109図	SK269 出土遺物 (1/3) ……………	203	第4-139図	SK163 (1/30) ……………	241
第4-110図	SK156 (遺構 1/30、遺物 1/1) ……………	204	第4-140図	SK180 出土遺物 (1/3) ……………	241
第4-111図	SK279 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………	205	第4-141図	SK220 (遺構 1/30、遺物 1/3) ……………	242
第4-112図	SK263 (1/30) ……………	205	第4-142図	SK246 (1/30) ……………	242
第4-113図	SK263 (1/3、13 = 1/4) ……………	206	第4-143図	SK246 出土遺物 (1/3) ……………	243
第4-114図	SK229 (1/30) ……………	207	第4-144図	SP195・SP240 出土遺物 (1/3) ……………	243
第4-115図	SK229 出土遺物 (1/3) ……………	208	第4-145図	近世の遺構 (1/300) ……………	244
第4-116図	SK273 (遺構 1/30、遺物 1/3、2 = 1/1) ……………	208	第4-146図	SD138 (1/30) ……………	244
第4-117図	SK262 (1/30) ……………	209	第4-147図	SD138 出土遺物 (1/3) ……………	245
第4-118図①	SK262 出土遺物 (1/3、8 = 1/4) ……………	211	第4-148図	SX139 (1/60) ……………	245
第4-118図②	SK262 出土遺物 (1/3、9・10 = 1/4) ……	212	第4-149図	SK177 出土遺物 (1/3) ……………	245
第4-118図③	SK262 出土遺物 (1/3) ……………	213	第4-150図	SD145 出土遺物 (1/3、3 ~ 4 = 1/2) ……	246
第4-118図④	SK262 出土遺物 (1/3) ……………	214	第4-151図	SK146 出土遺物 (1/3、4 = 1/1) ……………	247
第4-118図⑤	SK262 出土遺物 (1/3) ……………	215	第4-152図	SP142 出土遺物 (1/3) ……………	247
第4-118図⑥	SK262 出土遺物 (1/3) ……………	216	第4-153図①	第2層整地層出土遺物 (1/3、25 = 1/1) ……	248
第4-119図	16世紀第4四半期後半の遺構 (1/300) ……	218	第4-153図②	第2層整地層出土遺物 (1/3、49・63・64・ 67・74 = 1/1・73 = 1/2) ……………	249
第4-120図	SD141 (1/80) ……………	219	第4-154図	その他の遺物 (1/3、3 = 1/1) ……………	251
第4-121図①	SD141 出土遺物 (1/3) ……………	220	第4-155図	墓地とその周辺の遺構配置 (1/80) ……	254
第4-121図②	SD141 出土遺物 (1/3) ……………	221	第4-156図	墓地第1期 (1/150) ……………	255
第4-121図③	SD141 出土遺物 (1/3、55 ~ 57 = 1/1) ……	222	第4-157図	3号墓 ST268 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	256
第4-122図	SD167 (1/80) ……………	224	第4-158図	墓地第2期 (1/150) ……………	257
第4-123図①	SD167 出土遺物 (1/3) ……………	225	第4-159図	5号墓 ST154 (1/10) ……………	257
第4-123図②	SD167 出土遺物 (1/3、35 = 1/2・36 ~ 41 = 1/1) ……………	226	第4-160図	6号墓 ST157 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	258
			第4-161図	7号墓 S T 158 (1/10) ……………	259
			第4-162図	13号墓 ST162 (1/10) ……………	260
			第4-163図	14号墓 ST295 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	261

第4-164図	15号墓 ST296 (1/10) ……………	261	第4-177図	8号墓 ST149 出土遺物 (1~5=1/1、6~13=1/3) ……………	276
第4-165図	16号墓 ST297 (1/10) ……………	262	第4-178図	9号墓 ST152 (1/10) ……………	277
第4-166図	17号墓 ST299 (1/10) ……………	262	第4-179図	9号墓 ST152 出土遺物 (1/3) ……………	278
第4-167図	墓地第3期 (1/150) ……………	263	第4-180図	10号墓 ST260 (1/10) ……………	279
第4-168図	1号墓 ST130 (1/10) ……………	264	第4-181図	10号墓 ST260 出土遺物 (1/1) ……………	279
第4-169図	1号墓 ST130 出土遺物 (1/2) ……………	265	第4-182図	11号墓 ST257 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	280
第4-170図	2号墓 ST135 (遺構 1/30、遺物 1/2) ……	266	第4-183図	12号墓 ST274 (遺構 1/10、遺物 1/3) ……	281
第4-171図	4号墓 ST150 (1/10) ……………	267	第4-184図	18号墓 ST290 (1/10) ……………	281
第4-172図	4号墓 ST150 埋葬人骨出土状態 (1/10) ……	268	第4-185図	15世紀の遺構 (1/400) ……………	285
第4-173図	4号墓 ST150 木棺金具及び釘 (1/2) ……	269	第4-186図	16世紀第1四半期の遺構 (1/400) ……	286
第4-174図	4号墓 ST150 木棺金具及び釘 (1/2)・木棺内上層出土遺物 (1/3) ……………	271	第4-187図	16世紀第2四半期の遺構 (1/400) ……	286
第4-175図	4号墓 ST150 木棺復元図 (1/10) ……………	272	第4-188図	16世紀第3四半期の遺構 (1/400) ……	287
第4-176図①	8号墓 ST149 棺蓋出土状態 (1/10)・木棺想定復元図 ……………	273	第4-189図	16世紀第4四半期前半の遺構 (1/400) ……	288
第4-176図②	8号墓 ST149 埋葬人骨出土状態 (1/10) ……	274	第4-190図	16世紀第4四半期後半の遺構 (1/400) ……	288
第4-176図③	8号墓 ST149 木棺 (1/10) ……………	275	第4-191図	近世の遺構 (1/400) ……………	289
			第4-192図	江戸時代の車長持 ……………	292

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区出土人骨について

図1	3号墓人骨大腿骨病変部(後面) ……………	302	図3	3号墓人骨大腿骨病変部レ線像(後面) ……………	302
図2	3号墓人骨大腿骨病変部(側面) ……………	302	図4	3号墓人骨大腿骨病変部レ線像(側面) ……………	302

### 第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

表1	中世大友府内町跡から出土した金属製品の記載 ……………	303	図4	図3の拡大図 ……………	307
表2	中世大友府内町跡から出土した金属製品の化学合成 ……………	304	図5	今回の金属製品とこれまで測定された府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ……………	308
表3	中世大友府内町跡から出土した金属製品に関する鉛同位体比值 ……………	305	図6	図5の拡大図 ……………	308
図1	中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比 ……………	306	図7	今回の金属製品とこれまで測定された府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ……………	309
図2	図1の拡大図 ……………	306	図8	図7の拡大図 ……………	309
図3	中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比 ……………	307			

## 第6章 総括

第6-1図	府内古図と地籍図による比定 ……………	312	第6-4図	振倉謝公墳 ……………	320
第6-2図	キリシタン墓地 ……………	317	第6-5図	第7次調査SK734出土遺物 (1/3) ……	326
第6-3図	中世大友府内町跡10次調査区の墓地 ……	318			

# 表 目 次

## 第1章 はじめに

第1-1表	中世大友府内町跡発掘調査一覧 ……3
第2章	中世大友府内町第10次調査区I区
第2-1表	第10次調査区I区遺構一覧 ……16
第3章	中世大友府内町第10次調査区II区南調査区
第3-1表	第10次調査II区南調査区遺構一覧 ……52

第4章	中世大友府内町第10次II区北調査区
第4-1表	第10次II区北調査区遺構一覧 ……89
第4-2表	第10次II区北調査区の接合資料一覧 ……96
第4-3表	第10次II区北調査区墓地時期別一覧 ……252
第4-4表	第10次II区北調査区墓地一覧 ……253

## 遺物観察表目次

遺物観察表1	10次I区調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)	遺物観察表12	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)
遺物観察表2	10次I区調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)	遺物観察表13	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑥)
	10次I区調査区遺物観察表(瓦)	遺物観察表14	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑦)
	10次I区調査区遺物観察表(銅銭)	遺物観察表15	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑧)
遺物観察表3	10次I区調査区遺物観察表(土製品・石製品・ 金属製品)	遺物観察表16	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑨)
遺物観察表4	10次II区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)	遺物観察表17	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑩)
遺物観察表5	10次II区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)		10次II区北調査区遺物観察表(石製品①)
遺物観察表6	10次II区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)	遺物観察表18	10次II区北調査区遺物観察表(石製品②)
	10次II区南調査区遺物観察表(瓦)		10次II区北調査区遺物観察表(土製品)
	10次II区南調査区遺物観察表(銅銭)	遺物観察表19	10次II区北調査区遺物観察表(銭貨)
遺物観察表7	10次II区南調査区遺物観察表(土製品・石製品・ 金属製品・木製品)	遺物観察表20	10次II区北調査区遺物観察表(瓦製品①)
遺物観察表8	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)	遺物観察表21	10次II区北調査区遺物観察表(瓦製品②)
遺物観察表9	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)	遺物観察表22	10次II区北調査区遺物観察表(瓦製品③)
遺物観察表10	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)		10次II区北調査区遺物観察表(金属製品①)
遺物観察表11	10次II区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器④)		10次II区北調査区遺物観察表(金属製品②)
			10次II区北調査区遺物観察表(木製品)
			10次II区北調査区遺物観察表(その他)

## 写真図版目次

巻頭図版1	(上) 10次II区北調査区墓地遠景		(下) 10次II区北調査区全景
	(下) 1号墓ST130の木棺と埋葬状態(東から)	巻頭図版6	(上) 10次II区北調査区全景
巻頭図版2	中世大友府内町跡の空中写真	巻頭図版7	(下) 10次II区北調査区全景
巻頭図版3	10次調査区周辺の空中写真(合成)		(上) 道路SF151(西から)
巻頭図版4	(上) 10次I区調査区の空中写真	巻頭図版8	(下) 道路SF151の断面
	(下) 10次II区南調査区の空中写真		(上) 道路SF151の北側側溝の推移
巻頭図版5	(上) 10次II区北調査区遠景(南上空から)		(下) SE147の石組井筒

### 中世大友府内町跡第10次I区調査区

写真図版1	SD001 遺物出土状況(東から)	SK005 遺物出土状況(南から)
	SD001 完掘状況(北から)	SK005 完掘状況(南から)
	SD010・SD028 遺物出土状況(南から)	写真図版2
	SK004 遺物出土状況(北から)	SK006 遺物出土状況(北から)
		SK007 遺物出土状況(南から)

	SK008 遺物出土状況 (東から)		SK030 遺物出土状況 (北から)
	SK012 焼土・炭検出状況 (東から)		ST009 遺物出土状況 (北から)
	SK012 遺物出土状況 (東から)		ST009 遺物出土状況 (南から)
	SK013 遺物出土状況 (北から)		ST009 遺物出土状況 (北から)
	SK015 遺物出土状況 (東から)		ST009 完掘状況 (北から)
	SK022 遺物出土状況 (西から)		SP01 (4-B区) 滑石製スタンプ出土状況
写真図版 3	SK027 遺物出土状況 (南から)		SE014 完掘状況 (北から)
<b>中世大友府内町跡第 10 次 II 区南調査区</b>			
写真図版 4	SE017 検出状況 (北から)		SD117 (11-A区) 在地系土師器出土状況
	SE017 井側検出状況 (北から)		SD117 (11-A区) 在地系土師器出土状況
	SE017 土層断面図 (合成写真)		SD117 (10-A区) 遺物出土状況
	SE017 桶側 2 段目検出状況		SD117 (10-A区) 永楽通寶出土状況
	SE017 桶側箍検出状況		SD117 (10-A区) 漳州窯出土状況
	SE017 桶側 4 段目検出状況		SD117 完掘状況 (西から)
	SE017 井筒内出土鉄・犁・篋	写真図版 8	SD118 (9-A・10-A区) 遺物出土状況 (西から)
写真図版 5	SE126 検出状況		SD118 下駄出土状況
	SE126 井側南隅横棧支柱		SD118 洪武通寶出土状況
	SE126 井側南側横棧接合部		SD118 折敷出土状況
	SE126 井筒		SD118 完掘状況 (西から)
	SD111 遺物出土状況 (西から)	写真図版 9	SD101 遺物出土状況 (北から)
	SD113 (基礎 3) 遺物出土状況 (北から)		SK104 遺物出土状況
	SD113 (基礎 4) 完掘状況 (北から)		SK104 遺物出土状況 (東から)
写真図版 6	SF116・SF124 (西から)		SK115 遺物出土状況 (南から)
	SF116・SF124 (北から)		SK120・SK121 遺物出土状況 (東から)
	SF116・SF124 (石敷)		SB001・SP001・SP002・SD111
	SF116 完掘状況 (西から)		SP003 遺物出土状況
	SF116 京都系土師器出土状況		古代包含層遺物出土状況
	SF116 近世 1 期備前系陶器搦鉢出土状況		
写真図版 7	SD117 (11-A区) 遺物出土状況 (東から)		
<b>中世大友府内町跡第 10 次 II 区北調査区</b>			
写真図版 10	10 次 II 区北調査区全景	写真図版 13	道路 SF151 西半上層
	10 次 II 区北調査区遠景 (西から大分川を望む)		第 1 面の検出状況 (C7 区付近)
写真図版 11	調査区東半 (南西から)		中面道路面 (B8 区付近)
	調査区東半 (南から: 第 4 南北街路が見える)		下層道路面 (B8 区付近)
	調査区西半線路の向こうにはダイウス堂推定地)	写真図版 14	側溝にはさまれた道路 (B8 区)
			東半 (SD165 の矢板列がみえる)
写真図版 12	東区 (中町に面した町屋の遺構)		近世の石列 SX138 (北から)
	道路 SF151 上層		SX138 (西から)
	道路 SF151 中層		近世の溝 SD145 (道路 SF151 の位置に)
	SF151 第 1 面検出状況		SD145
	SF151 と両側溝 SD167 と SD168	写真図版 15	道路 SF151 と南の溝 SD118
			SD117 (右は道路 SF151 上層)
			SD167 と道路 SF151 (B8 区)



	SF151とSD141出土状況(東から:A10区)		土坑SK163(16世紀第2四半期)
	溝SD141出土状況①	写真図版 22	土坑SK164(16世紀第3四半期)
	溝SD141出土状況②		土坑SK224(16世紀第3四半期)祭祀出土状況
	溝SD270と道路SF151(B9区・A10区)		SK224
写真図版 16	溝SD270出土状況(東から:A9・B10区)		土坑SK232(16世紀第3四半期)
	溝SD270とSD250(東から:B7区)		土坑SK293(16世紀第3四半期)
	道路SF151と溝SD270(東から:A10区)		溝SD230(16世紀第4四半期前半)
写真図版 17	北側溝群と道路SF151(東から:B10区)		土坑SK261(16世紀第4四半期前半)出土状況
	溝SD165矢板痕跡(第3矢板列:B9区)	写真図版 23	SK261 埋土除去後
	SD165第4矢板列の杭痕(B8区)		SK261
	SD165矢板痕		溝SD292(16世紀第4四半期前半)
	SD165第4矢板列の杭痕(C7区)		土坑SK236(16世紀第4四半期前半)出土状態
	SD165完掘状態(西から:B9区)		SK236動物骨出土状態
	SD165完掘状態(西南から:B9区)		SK236土器出土状態
	SD165動物骨出土状況		SK236完掘状態
写真図版 18	SD165第4矢板列の掘形内埋置土師器群		土坑SK269(16世紀第4四半期前半)
	SD189(南から:南2区)	写真図版 24	土坑SK279(16世紀第4四半期前半)
	SD194(B6区)		土坑SK263(16世紀第4四半期前半)
	井戸SE300(15世紀)とSE210(東から)		SK263断面
	井戸SE235(16世紀第2四半期)北から		SK263完掘状態
	SE235の井筒		土坑SK229(16世紀第4四半期前半)
	井戸SE144(16世紀第2四半期前半)		SK229完掘状態
	井戸SE234(16世紀第3四半期)		土坑SK262(16世紀第4四半期前半)出土状態
写真図版 19	SE234の井筒	写真図版 25	土坑SK231(16世紀第4四半期後半)
	井戸SE148検出状況		土坑SK215(16世紀第4四半期後半)
	SE148井筒と破壊のあと出現		土坑SK237(16世紀第4四半期後半)
	SE148石組井筒をこわしてふさいでいる		土坑SK220
	SE148井筒内大石でふさぐ		現地説明会(2002.)風景①
	SE148石組井筒出土状況		墓地の区画溝SD131(東から)2001年度
	SE148井筒2段目の石組		調査時
	SE148石組の基礎出現		SD131(西から)
写真図版 20	SE148井筒基底の桶出土	写真図版 26	墓地全景(南から)
	井戸SE210(16世紀第4四半期)		墓地全景(西から)
	SE210の井筒桶		墓地全景(北東から)
	土坑SK226(古代)		墓地全景(北東から)
	土坑SK256(15世紀後半)	写真図版 27	墓地西部(南から)
	土坑SK119(15世紀前半)		墓地中部(南から)
	土坑SK212(15世紀)		墓地中部(南から)
	溝SD239(16世紀第1四半期)		墓地東部(南から)
写真図版 21	土坑SK266(15世紀~16世紀第1四半期)	写真図版 28	1号墓ST130(南から)
	土坑SK227(16世紀第1四半期)出土状況		ST130(北から)
	SK227完掘状態		ST130木棺
	土坑SK193(16世紀第1四半期)		ST130北半(東から)
	土坑SK238(16世紀第2四半期)		ST130全景(西から)
	土坑SK265(16世紀第2四半期)	写真図版 29	2号墓ST135(西から)
	土坑SK272(16世紀第2四半期)		3号墓ST268棺底出土状態(東から)
	土坑SK285(16世紀第2四半期)		3号墓ST268埋葬状態

写真図版 30	4号墓 ST150 埋葬状態 (南から) 4号墓 ST150 西側板・角材痕跡 4号墓 ST150 東側板・角材痕跡 4号墓 ST150 北小口板・角材痕跡 4号墓 ST150 金具 12 出土状態 4号墓 ST150 金具 1 出土状態 4号墓 ST150 金具 2 出土状態 4号墓 ST150 金具 11 出土状態 4号墓 ST150 釘 25 出土状態	写真図版 33	8号墓 ST149 北小口・角材出土状態 8号墓 ST149 南小口・角材出土状態 9号墓 ST152 埋葬状態 10号墓 ST260 埋葬状態
写真図版 31	5号墓 ST154 埋葬状態 6号墓 ST157 埋葬状態 7号墓 ST158 埋葬状態	写真図版 34	11号墓 ST257 出土状態 (南から) 11号墓 ST257 ガラス玉出土状態 12号墓 ST274 埋葬状態 13号墓 ST289 埋葬状態 14号墓 ST295 埋葬状態
写真図版 32	8号墓 ST149 埋葬状態 8号墓 ST149 木棺出土状態 8号墓 ST149 棺蓋落下状況 8号墓 ST149 木棺底部	写真図版 35	15号墓 ST296 人骨出土状態 16号墓 ST297 出土状態 18号墓 ST290 調査風景 (夏の夕暮れ) 現地説明会②

中世大友府中世大友府内町跡第 10 次 I 区調査区

写真図版 36	SD001 出土遺物 SD010 出土遺物 SK004 出土遺物 SK006 出土遺物 SK019 出土遺物 SK022 出土遺物 SK026 出土遺物	写真図版 37	SK027 出土遺物 SK030 出土遺物 SE014 出土遺物 SE017 出土遺物 ST009 出土遺物 包含層・ピット出土遺物
---------	--	---------	---

中世大友府内町跡第 10 次 II 区南調査区

写真図版 38	SD111 出土遺物 SD113 出土遺物 SD116 出土遺物 SD117 出土遺物 SD118 出土遺物		SK115 出土遺物 SK121 出土遺物 SP003 出土遺物 包含層出土遺物
写真図版 39	SK104 出土遺物		

中世大友府内町跡第 10 次 II 区北調査区

写真図版 40	SD165 出土遺物 SD255 出土遺物 SK251 出土遺物 SK266 出土遺物		SE148 出土遺物 SK264 出土遺物 SK263 出土遺物 SK262 出土遺物
写真図版 41	SK265 出土遺物 SK163 出土遺物 SK224 出土遺物 SK232 出土遺物 SD118 出土遺物	写真図版 45	SD168 出土遺物 S218 出土遺物 SP213 出土遺物 第 2 層整地層出土遺物 ST268 出土遺物 ST295 出土遺物 ST150 出土遺物
写真図版 42	SD116 出土遺物 SD250 出土遺物		ST150 出土遺物 ST152 出土遺物 ST257 出土遺物
写真図版 43	SD270 出土遺物 SD131 出土遺物 SK261 出土遺物	写真図版 46	ST150 出土遺物 ST152 出土遺物 ST257 出土遺物 第 7 次調査 SK734 出土遺物
写真図版 44	SK261 出土遺物 SD292 出土遺物		

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯

### 1. 調査に至る経過

県都大分

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から九州の玄関口としての役割を果たしてきた。なかでも大分川河口部西岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海航路に加え鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は東九州の交通の要衝となった。そうしたなか1911(明治44)年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

都市拡大

しかし、昭和40年代以降の自動車交通量の増加に伴い、大分駅周辺の交通状況も変化を起し、周辺の鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。また、拡大する大分市中心街にとって、鉄道線路そのものが市街地を分断する要因ともなった。そこで、これらを解消するため1970(昭和45)年に「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立された。この動きは、25年後の1995(平成7)年に「大分駅付近連続立体交差事業」として採択され、具体化することになった。

大分駅高架化

中世都市府内府内古図

一方、大分川河口部西岸沿いには、のちにキリシタンとなり南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、道路・屋敷地の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は1955(昭和30)年に刊行された『大分市史』の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に問題を残した。その後、1987(昭和62)年に刊行された『大分市史』中巻では新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知遺跡となった。

中世大友城下町跡

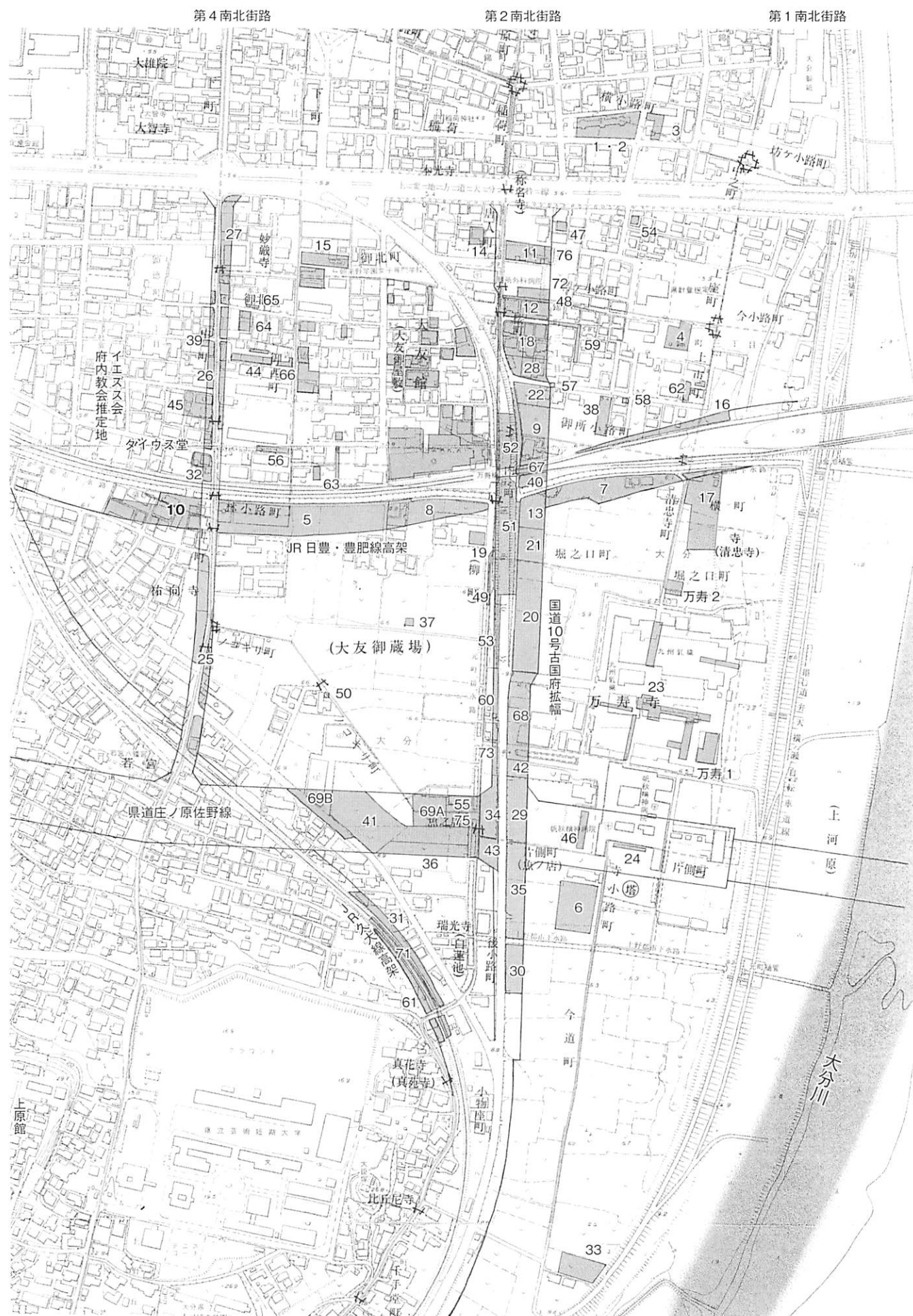
こうして大分駅高架化事業である「大分駅付近連続立体交差事業」は、この戦国時代の「府内」を東西に貫く土木工事となり、しかもこの中世都市の中核部である大友氏館の南側を通過するものであった。そこで大分県教育委員会では、事業主体者である大分県土木建築部と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査の経過

大友氏館跡と府内町跡

大分駅付近連続立体交差事業に伴う、大分県教育委員会による中世大友城下町跡の発掘調査は、1999(平成11)年8月から始まる。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、1996(平成8)年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴い、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。すなわち、同じ遺跡を大分県と大分市という2つの組織が発掘調査することとなった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友氏館部分は「大友氏館跡」、都市域部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。また、遺構実測をする際には、国土座標を必ず使用することにした。(のちに万寿寺跡も調査次数を別にすることになった)

こうして、1999(平成11)年8月、大分駅付近連続立体交差事業に伴う発掘調査として、「府内町跡5次調査」が開始された。そして、2000(平成12)年から「府内町跡7次調査」と「府内町跡8次調査」が加わり、21世紀を迎えた2001(平成13)年には「府内町跡7次調査」を継続するとともに「府内町跡10次調査」と「府内町跡16次調査」を実施した。そして、2002(平成14)



第1-1図 中世大友府内町跡発掘調査状況 (数字は調査回数)

第1-1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧

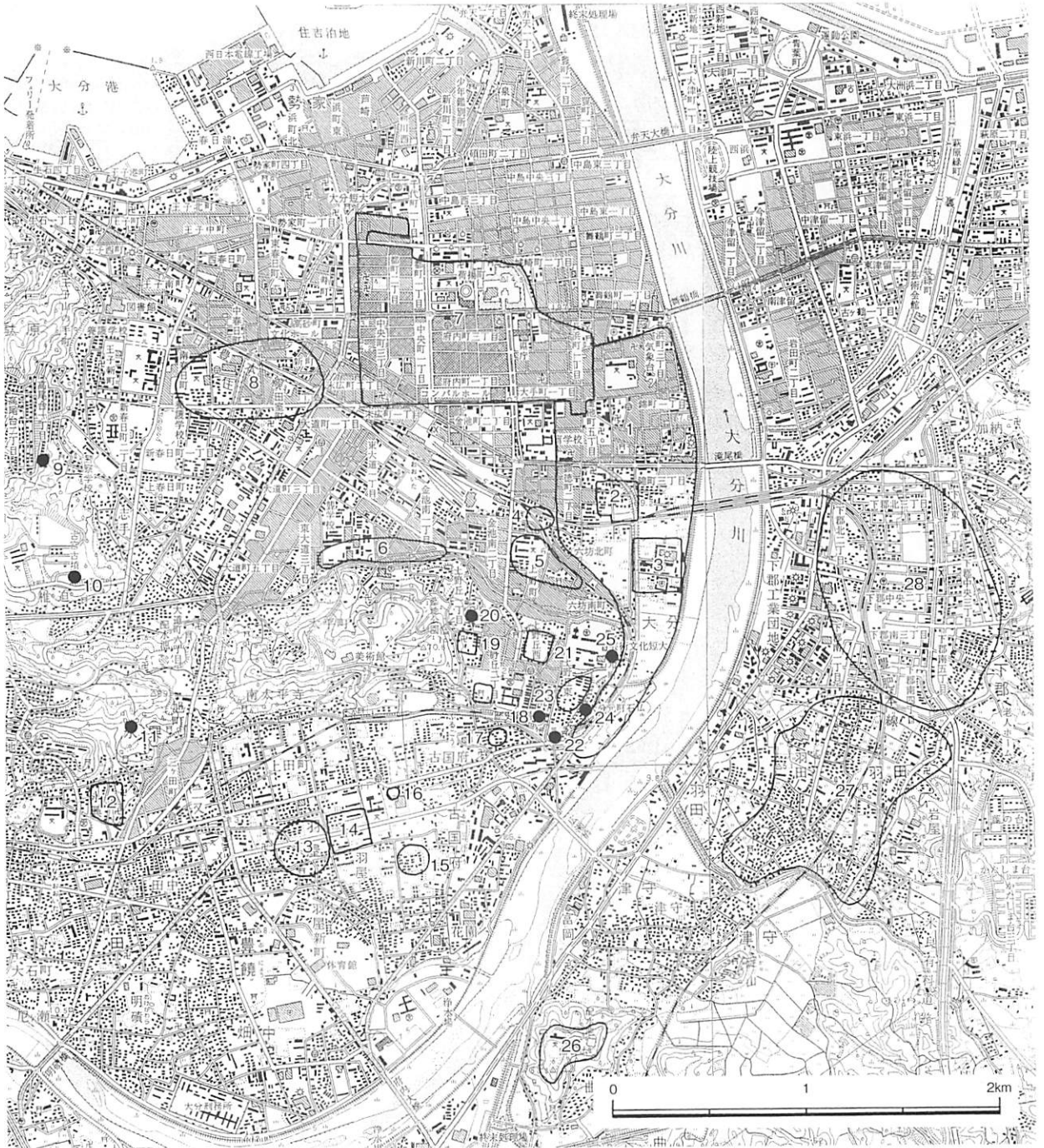
2006(平成18)年12月現在

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	1996・7(平成8・9)年度	区画整理移転事業	横小路町	2004(平成16)年3月	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	1996・7(平成8・9)年度	区画整理移転事業	横小路町	2004(平成16)年3月	
府内町跡3次	大分市教委	1997(平成9)年度	区画整理移転事業	横小路町	2003(平成15)年3月	10基の備前焼の甕蔵
府内町跡4次	大分市教委	1998(平成10)年度	マンション建設	上市町	2002(平成14)年3月	名ヶ小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県教委	1999~2001(平成11~13)年度	JR日豊・豊肥線高架	御蔵場	2005(平成17)年3月	御蔵場の北の道路
府内町跡6次	大分市教委	1999(平成11)年度	JA葬祭場	寺小路町・万寿寺		万寿寺の南限の堀?
府内町跡7次	大分県教委	2000.1(平成12・13)年度	JR日豊・豊肥線高架	清忠寺町	2006(平成18)年3月	古代大型建物群、第1南北街路、清忠寺町、御所小路町
府内町跡8次	大分県教委	2000(平成12)年度	JR日豊・豊肥線高架	柳町・館の南側	2005(平成17)年3月	15世紀の溝・土塁
府内町跡9次	大分県教委	2000.1(平成12・13)年度	国道10号拡幅	御所小路町	2005(平成17)年3月	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	2001・2(平成13・14)年度	JR日豊・豊肥線高架	上町・中町・ダイウス堂	2007(平成19)年3月	教会墓地、町屋、道路
府内町跡11次	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	称名寺		称名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	大友館・桜町・名ヶ小路町	2006(平成18)年3月	大友館の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	御内町	2005(平成17)年3月	ヴェロニカメダイ出土
府内町跡14次	大分市教委	2001(平成13)年度	マンション建設	唐人町	2003(平成15)年3月	井戸
府内町跡15次	大分市教委	2001(平成13)年度	スーパー建設	御北町		
府内町跡16次	大分県教委	2001(平成13)年度	JR日豊・豊肥線高架	上市町	2006(平成18)年3月	上市町短冊形地割の町屋、御所小路町
府内町跡17次	大分市教委	2002(平成14)年度	ポンプ場建設	横町・清忠寺		横町の街路・鍛冶屋跡
府内町跡18次西	大分県教委	2001(平成13)年度	国道10号拡幅	大友館・街路	2006(平成18)年3月	大友館と第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	桜町	2006(平成18)年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	2001(平成13)年度	国庫補助 範囲確認	柳町?		陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	万寿寺	2007(平成19)年3月	礎盤建物・北境の堀
府内町跡21次	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	堀之口町	2005(平成17)年3月	府内型メダイ出土
府内町跡22次	大分県教委	2002(平成14)年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	2006(平成18)年3月	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	2002(平成14)年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺		
府内町跡24次	大分市教委	2002(平成14)年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺・寺小路町		万寿寺の塔の確認
府内町跡25-1次	大分市教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	ノコギリ町		
府内町跡25-2次	大分市教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	祐向寺	2006(平成18)年3月	16世紀代の掘立柱建物群
府内町跡25-3次	大分市教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	上町		
府内町跡25-4次	大分市教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	上町		16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-5次	大分市教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	町外		
府内町跡25-6次	大分市教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	祐向寺	2006(平成18)年3月	
府内町跡26-1次	大分市教委	2003(平成15)年度	市道拡幅	中町・ダイウス堂付近	2006(平成18)年3月	
府内町跡27-1次	大分市教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	妙厳寺		
府内町跡27-2次	大分市教委	2004(平成16)年度	市道拡幅	御北町		
府内町跡28次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	桜町	2006(平成18)年3月	
府内町跡29次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	万寿寺		万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	後小路町		14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	2003(平成15)年度	JR久大線高架	瑞光寺		
府内町跡32次	大分市教委	2003(平成15)年度	個人・市道拡幅	中町・ダイウス堂付近	2006(平成18)年3月	
府内町跡33次	大分市教委	2003(平成15)年度	国庫補助 範囲確認	府内町の南限付近	2003(平成15)年3月	15・16世紀後半の大溝
府内町跡34次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	柳町		万寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	2003(平成15)年度	国道10号拡幅	後小路町・万寿寺		
府内町跡36次	大分県教委	2003(平成15)年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町		
府内町跡37次	大分市教委	2003(平成15)年度	アパート建設	御蔵場		
府内町跡38次	大分市教委	2003(平成15)年度	アパート建設	御所小路町		推定御所小路跡・南北大溝
府内町跡39次	大分市教委	2003(平成15)年度	アパート建設	中町		
府内町跡40次	大分県教委	2004(平成16)年度	JR日豊・豊肥線高架	御内町		
府内町跡41次	大分県教委	2004(平成16)年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町		御蔵場の周辺の街路と町屋
府内町跡42次	大分県教委	2004(平成16)年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡43次	大分県教委	2004(平成16)年度	国道10号拡幅	万寿寺		万寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡44次	大分市教委	2004(平成16)年度	アパート建設	御西町		
府内町跡45次	大分市教委	2004(平成16)年度	アパート建設	中町・コレジオ付近		
府内町跡46次	大分市教委	2004(平成16)年度	駐車場建設	万寿寺		
府内町跡47次	大分市教委	2004(平成16)年度	店舗建設	称名寺		
府内町跡48次	大分県教委	2004(平成16)年度	工業用水管	妙ヶ小路	2006(平成18)年3月	名ヶ小路
府内町跡49次	大分県教委	2004(平成16)年度	工業用水管	柳町・街路		
府内町跡50次	大分市教委	2004(平成16)年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街路		御蔵場の西側の街路と側溝
府内町跡51次	大分県教委	2005(平成17)年度	国道10号拡幅	第2南北街路・御内町		万寿寺西北隅・大友館東南隅
府内町跡52次	大分県教委	2005(平成17)年度	国道10号拡幅	第2南北街路・大友氏館		第2南北街路・大友館の東部
府内町跡53次	大分市教委	2005(平成17)年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡54次	大分市教委	2005(平成17)年度	浄化槽	称名寺の東		
府内町跡55次	大分県教委	2005(平成17)年度	庄原佐野線	御蔵場		
府内町跡56次	大分市教委	2005(平成17)年度	国庫補助 範囲確認	御西町		
府内町跡57次	大分市教委	2005(平成17)年度	市下水道	名ヶ小路町		
府内町跡58次	大分市教委	2005(平成17)年度	アパート建設	御所小路町		
府内町跡59次	大分市教委	2005(平成17)年度	市下水道	桜町		
府内町跡60次	大分市教委	2005(平成17)年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡61次	大分県教委	2005(平成17)年度	JR久大線高架	瑞光寺		
府内町跡62次	大分市教委	2005(平成17)年度	確認調査	第1南北街路		街路跡
府内町跡63次	大分市教委	2006(平成18)年度	確認調査	御西町		
府内町跡64次	大分市教委	2005(平成17)年度	アパート建設	御西町		
府内町跡65次	大分市教委	2005(平成17)年度	確認調査	御西町		
府内町跡66次	大分市教委	2005・6(平成17・18)年度	確認調査	御西町・大友館		
府内町跡67次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町		
府内町跡68次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡69次	大分県教委	2006(平成18)年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		A・B区
府内町跡70次	大分市教委	2006(平成18)年度	市下水道工事	来迎寺		
府内町跡71次	大分県教委	2006(平成18)年度	JR久大線高架	瑞光寺		蔭ヶ池の一部
府内町跡72次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	称名寺		
府内町跡73次	大分市教委	2006(平成18)年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡74次	大分市教委	2006(平成18)年度	民間共同住宅建設	大雄院の北側		
府内町跡75次	大分県教委	2006(平成18)年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		
府内町跡76次	大分県教委	2006(平成18)年度	国道10号拡幅	称名寺		

東西に横断

年8月に「府内町跡10次調査」が完了し、この事業に伴う主要部分の発掘調査は終了した。その結果、大分駅付近連続立体交差事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査は、都市遺跡の中央に、東西に横断する巨大なトレンチを入れることになったものである。

本報告書は、このうちの、2001(平成13)年から2002(平成14)年に調査した「府内町跡10次調査」の報告書である。



1. 中世大友城下町跡
2. 大友氏館跡
3. 万寿寺跡
4. 上野町・顕徳寺遺跡
5. 若宮八幡宮遺跡
6. 東大道遺跡
7. 府内城・城下町
8. 東田室遺跡
9. 亀甲古墳
10. 古宮古墳
11. 永興千人塚古墳
12. 永興寺遺跡
13. 羽屋園遺跡
14. 金剛宝戒寺跡
15. 石明遺跡
16. 町口遺跡
17. 岩屋寺遺跡
18. 円寿寺
19. 金剛宝戒寺
20. 上野廃寺
21. 大友上原館跡
22. 岩屋寺石仏
23. 上野龍王畑遺跡
24. 元町石仏
25. 大臣塚古墳
26. 守岡遺跡
27. 羽田遺跡
28. 下郡遺跡群

第1-2図 大分平野の地形と主要遺跡

### 3. 調査の体制

この大分駅付近連続立体交差事業の発掘調査は1999（平成11）年8月から開始されたが、この事業区域の北側に隣接して「大友氏館跡」が想定されており、この地域に対して2001（平成11）年度から国指定史跡にするための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者を2000（平成12）年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとなり、2000（平成12）年度から、大分駅付近連続立体交差事業の一部として開催した。2001（平成13）年度以降は本格的に開始された、国土交通省の国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査の事業で開催し、指導を受けた。

本書に報告する2001・2002（平成13・14）年に発掘調査した府内町跡10次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

#### 2001（平成13）年度

調査指導	調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）
	文化課長	工藤正徳
現場総括	参事兼課長補佐	麻生祐治
	参事兼課長補佐	清水宗昭
	大型県事業担当主幹	坂本嘉弘
	主査	田中裕介（府内町跡7・16次調査担当）
10次担当	主任	槇島隆二（府内町跡5次B調査担当）
	主任	吉田 寛（府内町跡5次A調査担当）
	主任	後藤晃一（府内町跡10次I区、II区南調査区担当 本書掲載）
	嘱託	服部真知、中田裕樹、阿比留志郎、木村宣夫

#### 2002（平成14）年度

調査指導	調査指導者	河原純之（川村学園女子大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 五野井隆史（東京大学史料編纂所教授） 田中良之（九州大学大学院教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当主任調査官） 山田拓伸（大分県立歴史博物館調査課主幹研究員） 高橋公一（高槻市教育委員会文化財課技師）
	文化課長	岩男康晴
現場総括	参事兼課長補佐	麻生祐治
	参事兼課長補佐	清水宗昭
	主幹	高橋 徹
	大型県事業担当主幹	栗田勝弘
10次担当	副主幹	田中裕介（府内町跡10次II区北調査区担当、本書掲載）
	嘱託	山崎文子、河野哲郎、古庄博之、戸田英佑、松田幸之助

なお調査中特に意見を賜った方々のご芳名は以下のとおり。

故加藤知弘（大分大学名誉教授）、河野史郎・上野淳也（大分市教委）、長田大輔（野津町教委）、宮小路賀宏（九州文化財リサーチ）。

## 第2節 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

大分県内には、各所に小規模な平野が展開する。そうしたなか中世以降今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる地域は、政治経済の中心地であった。この地域は、東側を大分川が北流し、北側に別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約30～40mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80m～100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

中世都市 中世大友城下町跡はその大分川西岸沿いに形成された都市遺跡である。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

周辺状況 北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や原地形が残されている部分の観察から、低湿地の広がり確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続いている。しかし2004年度の中世大友府内町跡第41次調査において、ノコギリ町西側の低地部で、規格的な溝が発見された。16世紀にはいまだ宅地としては利用されていないものの、すでに湿地ではなく畑地などに利用されるようになったものと推定される。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

### 2 歴史的環境

別府湾に近い大分川西岸地域が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目され始めるのは7世紀後半からである。その代表的な遺跡としてあげられるのが、国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大海人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)あるいは稚臣(わかみ)の墓と想定されている<sup>註1</sup>。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡、羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘形をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「大分評衙」の遺構と想定されている<sup>註2</sup>。

その後8世紀に設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡、羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された上野龍王畑遺跡では8世紀～10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地塀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている<sup>註3</sup>。上野丘陵の西部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている上野廃寺が存在する。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部一帯は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治文化宗教の中心地であったと考えられている。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の1053(天

註1 後藤宗俊「古宮古墳考」『大分県地方史』117、大分県地方史研究会1985(『東九州歴史考古学論考』山口書店1991に収載。)

註2 坪根伸也・塩地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」『大分県地方史』163、大分県地方史研究会1996

註3 高橋信武「大分県大分市上野遺跡群龍王畑遺跡」『日本考古学年報』50(1997年度版)、日本考古学協会、1999



勝津留

喜元)年、1059(康平2)年、1077(承保4)年に「勝津留(かちがつる)畠四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。11世紀の勝津留開発は、この自然堤防が一旦荒廃し、再開発の対象となったことを示している。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留畠」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初源的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは1242(仁治3)年の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示すという。

河原市

守護館

しかし、こうした状況は考古資料で証明できていないわけではない。「勝津留畠」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に下向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

万寿寺

14世紀代になると、1306(徳治元)年に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立され、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

上原館

16世紀の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の東岸にある下郡遺跡群や津守・片島地区では方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的存在である守岡城があり、一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館がある。その南の古国府地区には町口遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。



1. 中世大友城下町跡 2. 高崎城 3. 金谷迫城 4. 賀来氏館 5. 尼ヶ城遺跡 6. 雄城城 7. 石明遺跡 8. 町口遺跡 9. 岩屋寺遺跡  
10. 上原館跡 11. 東大道遺跡 12. 守岡城跡 13. 津守遺跡 14. 片島遺跡 15. 下郡遺跡 16. 千歳城跡 17. 猪野新土居遺跡  
18. 猪野中原遺跡 19. 横尾遺跡 20. 沖ノ浜(推定)

第1-3図 中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡(1901年の25,000分の1図より集成)

### 第3節 報告書作成にあたって

#### 1 府内古図と道路の名称

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古図」は、現在の地図との整合性を求める作業が一部で行われた<sup>註1</sup>が、永く文献史学ではその信憑性が疑われてきた<sup>註2</sup>。しかし、1970年代の中頃から、他の文書からの検討がおこなわれ<sup>註3</sup>、その信頼性が増してきた<sup>註4</sup>。

府内古図

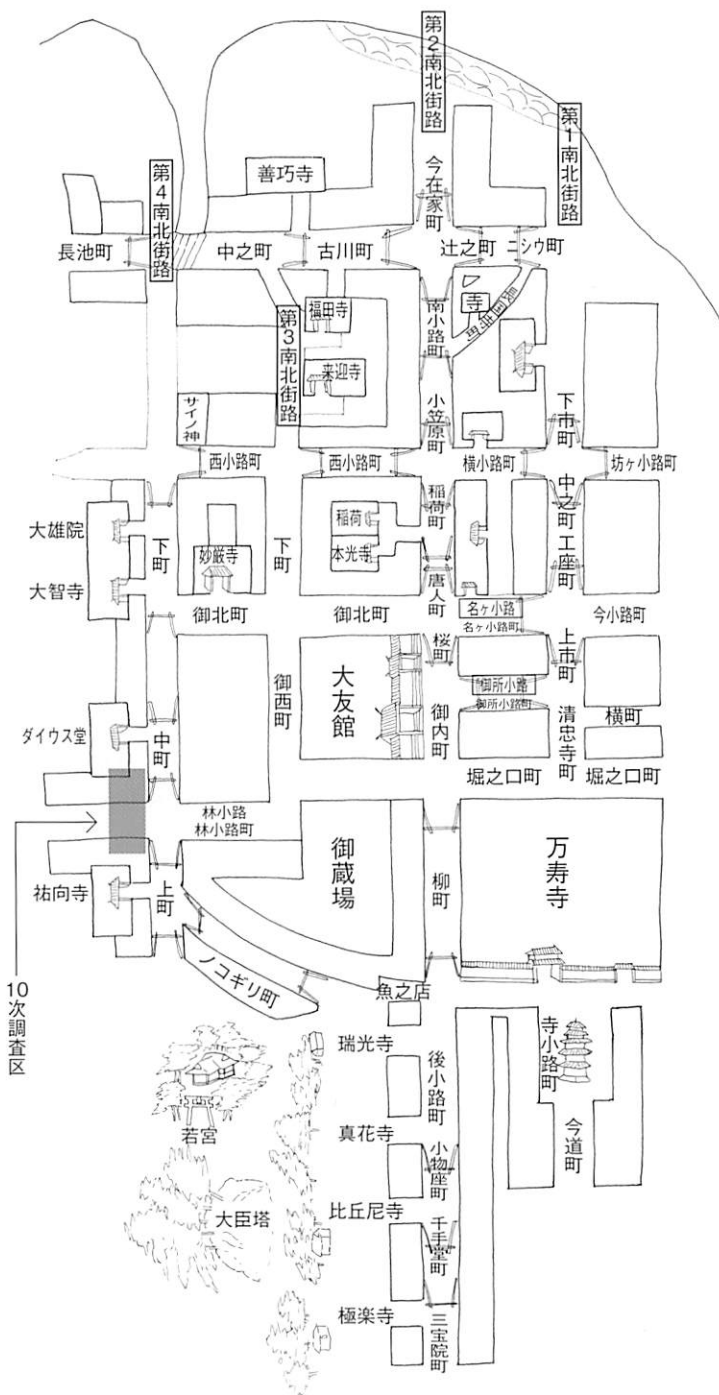
「大分市史」

そして、『大分市史』<sup>註5</sup>が1980年代後半に編集されたおり、それまで知られていた「府内古図」の原図と思われる絵図が確認された。そこで、明治時代の地籍図との照合をはかり、現在もその地に存在する大智寺・稲荷などを基点とし、「府内古図」を大分川西岸の現在の地図に写す作業を行った。その結果、ほぼ正確にその位置を把握することが出来た。発掘調査は、この地図を頼りに町屋の名称や道路の位置等を推測しながら実施している。

現地比定

しかし、現在3種類12枚が確認されている「府内古図」は、その研究<sup>註6</sup>

古図の研究



第1-4図 「府内古図」と街路名称の設定  
(「府内古図」A類をトレースし、一部改変)

註1 大分市『大分市史』上巻 大分市史編纂審議会 1955

註2 外山幹夫『大友宗麟』吉川弘文館 1975

註3 渡辺澄夫「古代中世の大分」『大分県地方史』73 大分県地方史研究会 1974

註4 橋本操六「旧府内城下図の信憑性」『大分県地方史』94 大分県地方史研究会 1979

註5 大分市『大分市史』中・付図5.1987

註6 木村幾多郎「府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報 1992年度版』大分市歴史資料館 1993

名称の統一 によると成立年代は、1634（寛永13）年を遡らず、A類・B類・C類に分類され、その順で新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされた。報告書作成にあたり、こうした各「府内古図」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じた。すなわち、「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」もB・C類にはあるが、A類には見られない。さらに、府内の町中を走る幾筋もの街路の名称もまたそうである。

街路名称 「府内古図」には4本の南北の街路と5本の東西の街路が描かれている。南北の街路についてはこれまで、大分川側から一之大路・二之大路・三之大路・四之大路<sup>註7</sup>や、市町筋・大路筋・寺町筋<sup>註8</sup>、南北路1・南北路2・南北路3・南北路4<sup>註9</sup>などと仮称されてきた。本報告書では、全てが町を貫く大路ではないことや、文章との混乱などを考え、大分川側から第1南北街路・第2南北街路・第3南北街路・第4南北街路とした。街路としたのは、ルイス・フロイスの日本史の訳文が「街路」とされており、都市内の道路の意味でこの名称を使用した。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町があり、それぞれ、「御所小路」「名ヶ小路」とした。「御蔵場」については、将来検討することを含め、そのまま使用する。

## 2 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年

古文書によると、大分川の西岸地域は11世紀に「市河」として登場し、以後、「府中」「府内」と呼ばれながら、17世紀初頭に近世府内城下町に移転するまで、人々の活動が継続して存続する。発掘調査を実施するにあたり、大分市教育委員会と大分県教育委員会の複数の職員が担当することが予測され、お互い年代的な共通認識を持つ必要が生じた。そこで、継続的に存続したと考えられる中世大友城下町跡の出土遺物の大半を占める土師質土器の編年の確立を、この遺跡のみで目指すことにした。

土師器編年研究 豊後地域の11世紀から17世紀初頭の土師質土器の編年は、臼杵石仏群の調査<sup>註10</sup>や玖珠町伐株山城跡<sup>註11</sup>で試みられ、上野淳也<sup>註12</sup>と塩地潤一<sup>註13</sup>は16世紀代の土師質土器の編年案を提示している。また、坪根伸也・塩地潤一は大分県内で蓄積した8世紀から16世紀までの発掘資料の編年を試みている<sup>註14</sup>。さらに、最近では後藤一重が、別府湾を挟んで中世大友城下町跡の対岸にある八坂遺跡群の出土土師質土器を編年している<sup>註15</sup>。

14世紀初頭 以上のような研究成果を元にまとめたのが第1～5図の編年表である。現時点で、遺構出土のまとまりのある最古の資料は1～18の、府内町第35次調査S017出土資料である。溝状遺構に廃棄された状態で出土したもので、土師質土器の皿1～6は、口径が8.3cm、器高1.3cm、底径6.5cmであるが、7・8は器高が1.9cmと高い。また、坏9・10は、口径が12.7cm、器高3.8cm、底径は6.6cmの底径が小さいタイプであるが、11～16は、口径が12.1cm、器高3.3cm、底径は8.6cmで、

註7 鹿毛敏夫「文献・絵図からみた大友館と府内の町－都市と国際性－」「南蛮都市・豊後府内－都市と交易－」中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001

註8 木村幾多郎「府内と府内古図」「南蛮都市・豊後府内－都市と交易－」中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001

註9 池邊千太郎・上野淳也「大友府内6－中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書－」大分市教育委員会 2003

註10 菊田 徹「臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」臼杵市教育委員会 1982

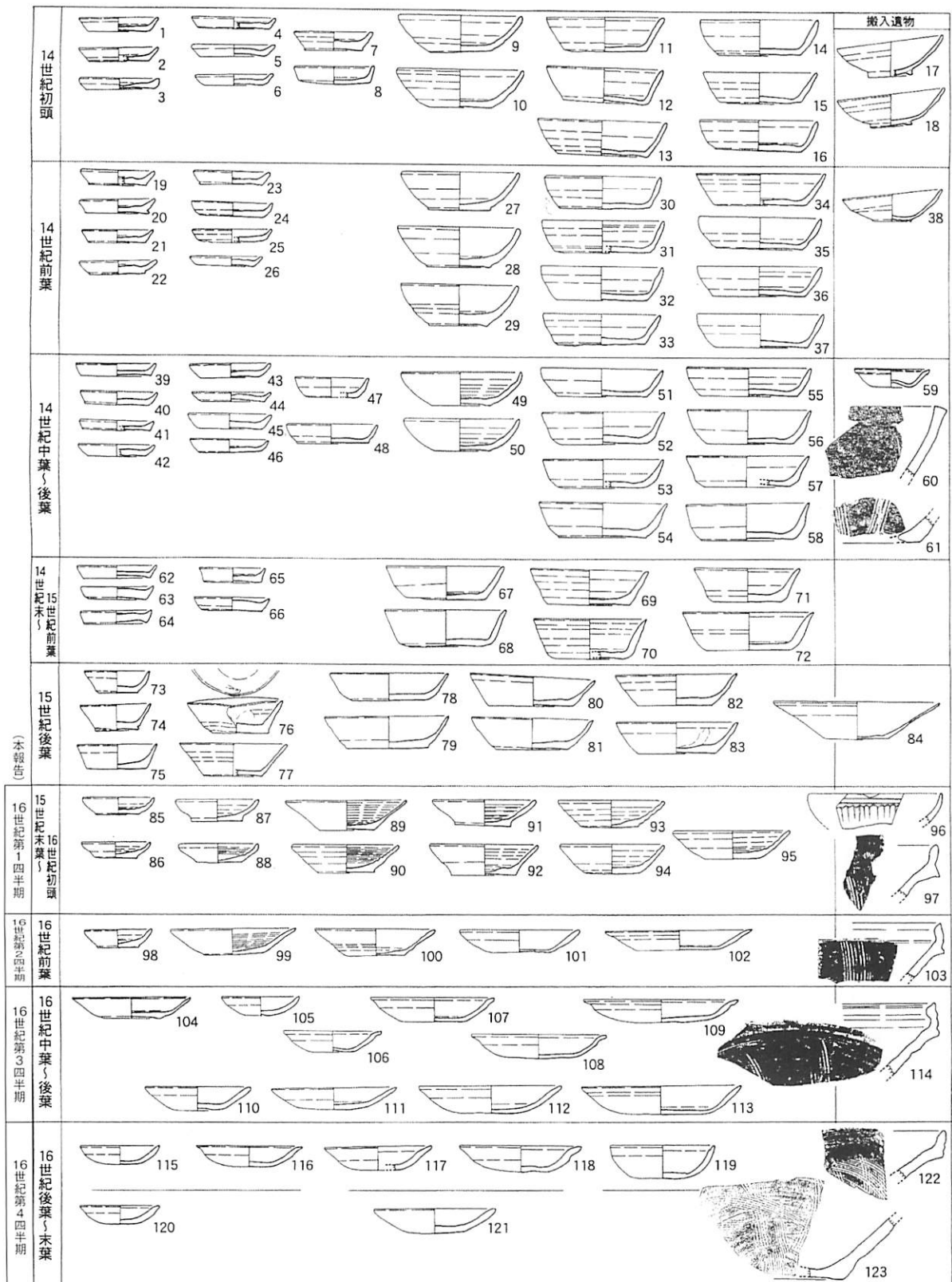
註11 渋谷忠章・後藤一重「切株山城跡」玖珠町教育委員会 1984

註12 上野淳也「千人塚遺跡出土の土師質土器皿について」「千人塚遺跡」緒方町教育委員会 1999

註13 塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」「中近世土器の基礎研究 XIV」日本中世土器研究会 1999

註14 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」「大分・大友土器研究会論集」大分・大友土器研究会 2000

註15 後藤一重「八坂の遺跡」大分県文化財調査報告書第150輯 大分県教育委員会 2003



第1-5図 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年図

底径が大きい。11～16の底部から口縁部にかけての器壁の厚さはほぼ一定であるか、やや口縁部にかけて脹らむ。これらの遺物に、口径11.1cm、器高3.4cm、高台の底径4.4cmの17・18の吉備系土師器が伴う。この吉備系土師器は岡山県鹿田遺跡での研究によると14世紀前葉に位置づけられている<sup>註16</sup>が、この土師器の器形変化の特徴は、口径と底部高台の縮小化である。中世大友城下町跡で次に編年される府内町第30次調査S115からは、さらに新しい傾向の吉備系土師器が出土していることから、14世紀初頭に位置づける。

## 14世紀前葉

その府内町第30次調査S115は、小土坑に一括廃棄された土器群である。19～38は代表的な資料であるが、組成は口径が8.1cm、器高1.4cm、底径6.4cmの皿、口径12.3cm、器高4.0cm、底径は6.3cmの底径が小さいタイプ、口径12.6cm、器高3.2cm、底径は9.0cmの底径が大きいタイプがある。この底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、口縁部が肥厚する傾向が強い。この土器群には38の口径10.2cm、器高2.9cm、底径4.0cmの吉備系土師器が伴う。この土器は、17・18よりさらに口径が小さく、高台も断面三角形で矮小化している。こうしたことから、この時期を14世紀前葉に位置付ける。

## 14世紀中～後葉

39～61の資料は府内町第30次調査S109出土の資料である。この遺構は大型の土坑で、中位と間層を挟んで下位から一括廃棄された状態で土器が出土した。図示したのは中位出土の代表的な資料である。組成は皿が口径8.1cm、器高1.2cm、底径6.6cmの39～46のタイプが主体をしめ、口径が小さく器高が高い47、口径が大きい48なども見られる。坏は、口径12.1cm、器高3.3cm、底径は5.6cmの底径が小さいタイプと、口径12.6cm、器高3.3cm、底径は9.1cmの底径が大きいタイプがある。底径の小さいタイプはやや小振りになり、内面に凹線状の整形痕が残る。また底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、底部に近い部分が肥厚し、口縁部にかけて外反し、口縁端部が尖る傾向が強い。この土器群には59の口径7.3cm、器高1.5cmの京都系土師器と60・61の備前焼播鉢が伴う。京都系土師器は、小森俊寛・村上憲章による13世紀末から14世紀中頃に定型化し15世紀末まで見られる白色系薄手のヘソ皿である<sup>註17</sup>。また、備前焼播鉢は、乗岡実の編年案<sup>註18</sup>では14世紀後半にあたる。これらの資料から、この土器群を14世紀後葉と考える。

## 15世紀前葉

62～72は府内町第20次A調査S1505出土の資料である。出土量は多くないが、組成は皿が口径7.7cm、器高1.4cm、底径6.3cmで、底部が厚い。前時期に比較すると小振りになる。坏は、口径12.3cm、器高3.8cm、底径は7.9cmで、前時期より器高が高く、底径が小さくなる。口縁部は回転を利用し引き出すようにし、器高を高くして反らせ、端部は尖る。時期を決定できる明確な資料はないが、前後の関係から15世紀前葉と考える。

## 15世紀後葉

73～84の資料は大友氏館跡1次調査S008出土資料である<sup>註19</sup>。遺物は庭園遺構に切られる長方形の土坑から廃棄された状態で出土している。73～75の小型の坏の口径は6.9cm・7.5cm・8.6cm、器高は2.4cm～2.7cm、底径は4.0cm・4.7cm・6.3cmである。また、76・77の中型の坏は口径10.2cm・11.4cm、器高は3.3cm・3.5cm、底径は6.2cmである。そして、坏の口径は12.8cm、器高3.2cm、底径8.0cmが平均である。こうした在地土器は、前時期までの皿と坏の基本的な組成が見られず、小型・中型の坏が一定量みられ、法量分化の傾向が見られる。しかし、色調は橙褐色系・淡褐色と前時期と同じである。こうした在地系土器に、口径17.6cm、器高5.5cm、底径は6.6cmの84の色調が白色の薄手の坏が伴う。この土器は、周防の大内氏館跡の編年によると15世紀後葉に位置づけられている<sup>註20</sup>。しかし、中世大友城下町跡では、この後、在地系土器の色調が赤褐色化し、

註16 山本悦世「吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究 VIII』日本中世土器研究会 1992

註17 小森俊寛・村上憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996

註18 乗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000

註19 高島豊「XXII 大友館跡第1次調査」『大分市埋蔵文化財年報10 1998年度』大分市教育委員会 1999

5次B  
16世紀  
第1四半期

それに薄手の白色系土器が伴う時期がある。このため、この時期を、15世紀中葉から後葉と考える。

85～97は府内町跡5次B調査区出土の資料である。85・87・91はSK245、86・93はSK134、90・94はSD230、95・97はSK234でいずれも土坑に廃棄された状態で出土した。また、88・89・92・96は大規模な区画溝であるSD251の下層からの出土である。図示した土器の口径は85・86が7.6cm・7.2cm、87・88が8.8cm・8.5cm、91・93・94が10.8cm、90が11.4cm、95が12.0cm、89が12.9cmで境界は不明であるが法量分化が明確である。こうした在地系土器は、前時期の薄手の白色系土器の影響を受けて成立したと考えられ、内面に回転を利用した強い螺旋状の指ナデや工具による螺旋状の沈線が見られる。色調も赤褐色で、73～83までの資料とは異なる。またこの土器は、より古式のもの、製作時の粘土塊からの切り離しの際の痕跡か、底部の外端が直立し、口縁端部にかけて内湾し、口唇部断面は「コ」の字状になる。内面の強い螺旋状のナデは内底部までおよび、えぐれている。これが新しくなるにつれ、底部からの立ち上がり94・95のように丸みを帯び、口縁部は外反し、口唇部断面は丸みを帯びる。また、内底部の中央は横ナデで平坦に仕上げている。これらの土器には、15世紀代の青磁碗<sup>註21</sup>や中世6期の備前焼播鉢が伴い、京都系土師器を伴わないことから、15世紀末葉から16世紀初頭と考える。本報告では16世紀第1四半期とする。

ロクロ目  
土師器

16世紀  
第2四半期

98～103は府内町跡5次調査区出土である。98・99・102は5次A調査区のSD7の上層で近接して出土した一括性の強い土器である。100・101は5次B調査のSK121、103はSK206出土の土器である。在地系土器は、99に見られるように、底部からの立ち上がりが丸みを帯び、口縁部は明らかに外反し、口唇部断面は尖るように丸み帯びる。内面は螺旋状の工具による沈線文があり、内底部は平坦に仕上げている。この土器群には非ロクロ系土師器である京都系土師器が伴う。在地系土師器が赤色系であるのに対し、京都系土師器は白色系である。器形は、側面観が扁平な「逆台形」をし、口縁断面は紡錘形で端部は丸い。器壁は薄く、特に底部は薄い。この新しい土師器作りの影響か、京都系土師器の胎土でロクロ成形したものや、100のように外面下位に段が付くものなどが見られる。京都系土師器の導入時期は、周防国大内氏との関連や、京都からの直接的な導入などが考えられているが、ここでは塩地潤一・小野貴史<sup>註22</sup>が論じた「式三献」に代表される室町幕府からの儀礼の導入時期である天文6年（1537）とし、本報告では16世紀第2四半期とする。

16世紀  
第3四半期

104～114は府内町跡5次B調査区出土の資料である。104～109はSD105、それに切られたSD106から出土した。110～113、114はSK222出土である。SD105からは多くの京都系土師器が出土しており、その口径は約8.2cm・10.5cm前後、12～13cm、14.3cm前後、16cmの5法量に明確に分かれる。口縁部は外面を強い指ナデで仕上げ、凹線状に窪むため、急に外反する形態になる。この資料より新しい遺構から出土した110～113は若干大型化し、器高も高くなる。114は中世6期16世紀代の備前焼播鉢である。この資料は、前後の関係から、16世紀中葉と考える。本報告では16世紀第3四半期とする。

16世紀  
第4四半期

115～123の資料の内、116・119は大友氏館跡1次調査の庭園の池Ⅲ期からの出土で、それ以外は府内町跡4次調査出土である。前時期に比べると、器壁が厚くなり口径に比べ器高が高くなる。また119のように坏形に近い形態の非ロクロ系土師器がみられる。その出現時期は、遡る可能性もあるが、この時期から明確に伴う。これらと一緒に出土する備前焼播鉢は、斜めスリ目で1570年以後の16世紀後葉から末葉に編年されている近世1期のものである。また府内町4次調査区は府内古図の上市町の一角にあたり、報告書<sup>註23</sup>によると2度の火災にかかわる層と処理土坑があり、

註20 古賀信幸「大内氏館跡 VIII・大内氏関連町並遺跡 I」『大内氏遺跡発掘調査報告書 XII』山口市埋蔵文化財調査報告第35集 山口市教育委員会 1991

註21 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2、日本貿易陶磁研究会 1982

註22 塩地潤一「九州出土の京都系土師器Ⅱ」『中近世土器の基礎研究 XIV』日本中世土器研究会 1999

1587年 ひとつは1587(天正15)年の島津氏侵攻、もうひとつを1596(慶長元)年の慶長大地震に起因する  
 1596年 と考えている。こうしたことから、これらの時期を16世紀後葉から末葉と考える。本報告では  
 16世紀第4四半期とし、近世府内城下町に移転する17世紀のごく初期を含む。

### 3 整理作業の経過

整理 中世大友府内町跡第10次調査区の整理作業を、2002(平成14)年度は現場事務所で仮整理を行い、  
 2005(平成17)年度から本格的な整理作業を開始した。実質1ヵ年で整理をおこなった出土遺物  
 は700箱あまり、出土遺物量は約数万点におよび、その中から約1500点を選択して実測をおこな  
 った。

実測 整理作業のうち、水洗・注記・接合の基礎作業には石井蓉子、今別府洋、安部典子、田畑里美、  
 姫野真知子、伊賀円香、平田美智子があたり、特に接合作業は入念に行った。

トレース 実測作業は安部明美、高井光子、土崎弘子、山口美紀、金丸涼子、田嶋智子、田中裕介が分担し  
 てあたり、一部は九州文化財研究所がおこなった。

浄書には、藤澤香織、権藤聡子、土崎弘子、安部明美、金丸涼子、高井光子、山口美紀、長野と  
 よみ、小野千恵美、上田はるみがあたり、一部を九州文化財研究所がおこなった。

編集作業には田中裕介、後藤晃一、権藤聡子、河原英明、藤澤香織、安部明美、高井光子、山口  
 美紀が主にあたり、長野とよみ、小野千恵美、上田はるみの協力をえた。

現地調査 銭貨の整理は、畦津宏幸(嘱託;現佐伯市教委)があたり、一覧表等の作成には藤澤香織があたった。  
 写真の撮影は田中裕介、後藤晃一があたり、陶磁器全般については吉田寛の教示をえた。

なお現場発掘調査には、以下の方々があたった。現地の航空写真は九州航空、実測は県調査員の  
 ほかに九州文化財リサーチがあたり、発掘作業は秋吉雅子、麻生持子、足立正子、阿部笑子、安部  
 喜代、安東隆司、伊東早智子、伊東真由美、井上志津子、今村千代子、今村嘉子、上野信子、江藤  
 恒亀、江藤美津江、大久保覚至、荻昭八、甲斐千年、金子るり、亀井美加、河野次雄、河辺フサ子、  
 神田裕子、木本優子、釘宮邦孝、小石庸子、小出愛美子、児玉恵美代、後藤和子、後藤小夜、後藤  
 タツ子、後藤美智代、坂本栄作、佐藤朱美、佐藤勝枝、佐藤恭子、佐藤忠士、佐藤俊信、柴田敏夫、  
 生野恒子、菅かえで、関谷直美、大福逸夫、高倉常子、高橋抄子、田辺昭一、堤賢治、堤鈴子、堤  
 光江、那賀文子、長尾恒子、中野聖子、藤塚千鶴、藤本聡、三浦賀一郎、三浦聡子、薬師寺由記子、  
 山本準二郎、畑本ひとみ、和気昌子、渡辺悦子。以上の方々があたった。

人骨の調査には九州大学大学院生、舟橋京子、板倉有大、岡崎健治があたった。

### 第4節 第10次調査区について

第10次調査区は、大分県大分市大字大分字顕徳寺に属し、現在の住居表示では大分市六坊北町  
 に当たる。調査区は東西に長く、西側をI区、東側をII区として調査を行った。II区については高  
 架工事との調整から南北にわけて、南を先に調査した。そのため事実上調査区を3回にわけて発掘  
 したことになる。その位置は第1-6図のとおりで、字顕徳寺の南部にあたり、調査区の東端は中  
 世大友府内城下町の第4南北街路に接する。また調査区のうちII区北は『府内古図』のダイウス堂  
 推定地にあたる土地の南東端と重なることがわかる<sup>註1</sup>。ダイウス堂とは1553年から1587年まで存  
 在したイエズス会府内教会にほかならない<sup>註2</sup>。同時に古図からは西に抜ける道路や南側には祐向寺

ダイウス堂  
推定地

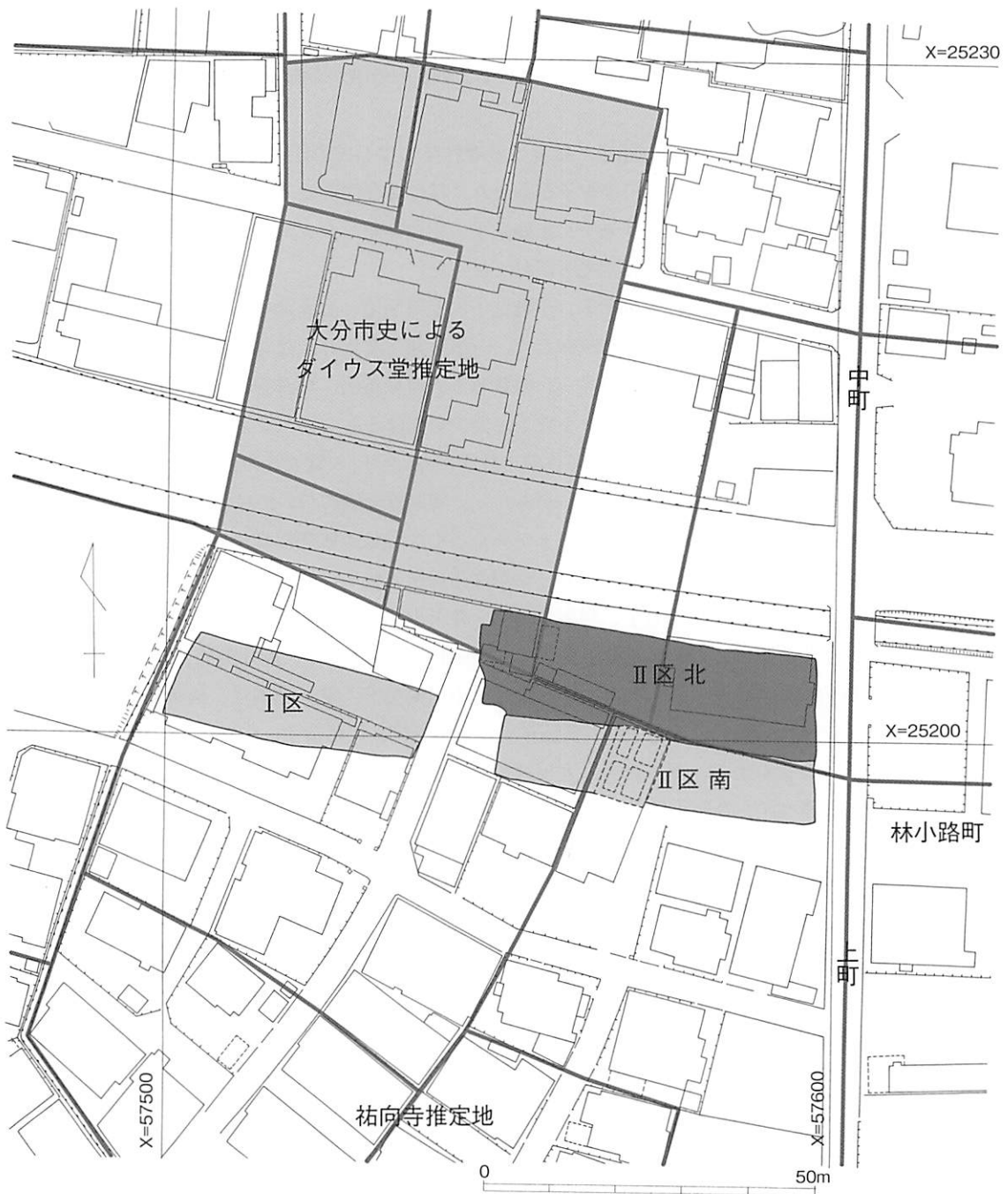
祐向寺

註23 河野史郎「大友府内4-中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書-」大分市教育委員会2002

小野貴史「大友氏における「式三献」について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会2001

が付近に存在することも想定される位置に当たった。

以上から、I区については城下町遺跡に西端の状況が、II区では東西道路の位置とその周辺の上町および中町の道路に面した状況、さらにその背後の府内教会および祐向寺の遺構の特定を課題として調査は行われた。



※網ラインは、1889年の字境界

第1-6図 10次調査区の位置 (1/1000)

註1 『大分市史』中、付図「地籍図に残る戦国時代の府内」1987、大分市

註2 五野井隆史「豊後府内の教会領域について」『東京大学資料編纂所研究紀要』14.2004.



## 第2章 中世大友府内町跡第10次I区調査区

### 第1節 調査の経緯

中世大友府内町跡第10次I区調査区は大分県大分市上野六坊北町に所在し、標高約3.5mの沖積低地上に立地する。本調査は、大分駅周辺総合整備事業に伴い大分県教育委員会が2000年に試掘調査を実施、翌2001年7月から12月までかけて本調査を実施した。

試掘調査は、本調査区西半部において南北3m×東西42mのトレンチを入れて実施された。調査の結果、トレンチ内西端で方形の土坑が1基、さらに数基の土坑、ピット等が検出された、特に西端で検出された方形土坑は骨片が出土していることから土坑墓と推測された（本報告書でST009）。

祐向寺

本調査区は、「府内古図」によれば、南側に「祐向寺」が存在していたとされる場所に位置する。そこで前述の土坑墓の存在、さらには試掘時のトレンチ内から五輪塔の部材が出土しているなどのこともあり、本調査において祐向寺の存在を立証し、寺域の確定がなされるのではないかと期待があった。ところが「府内古図」の描写は最近の発掘調査成果から、1570

大友義統治世

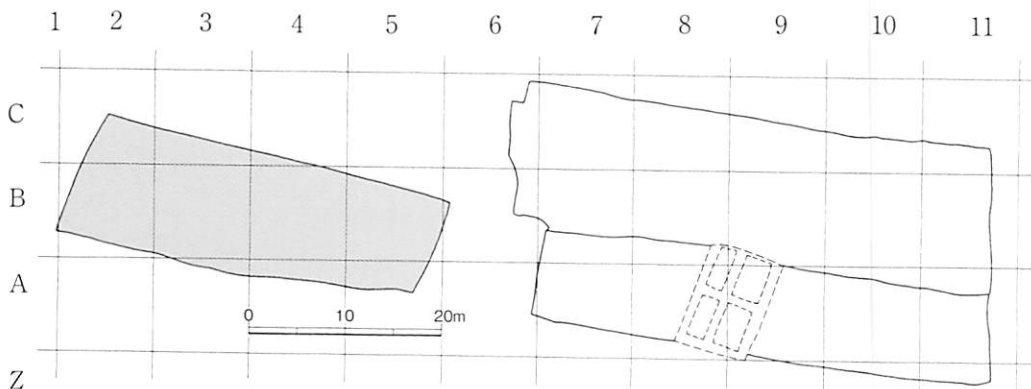
年以降の大友義統治世下における府内の町の様子であることが分かってきており、前述の土坑墓は15世紀代の可能性が高く時代が合わない。発掘調査の結果、本調査区は大きくこの土坑墓の時期である15世紀代の画期と、16世紀後半代の画期が認められており、府内古図の描写の時期は後者の画期に該当する。本調査区中央部は若干高く東西に地形の落ち込みがみられ、16世紀後半にこの低地を覆うように整地されたものと考えられる。整地層を切ったかなりのピットや土坑、さらには井戸等が掘られており、その景観は町屋そのものである。府内古図には祐向寺の北側に町屋が描かれており、本調査区はその町屋の姿が掘り出されたものと考えられる。

町屋

なお、もう一つの画期である15世紀代は16世紀後半のそれとは全く異なる景観が想定できる。前述の祐向寺の存続期間（開山が15世紀代以前に遡れば）によっては、15世紀代の姿は祐向寺の寺域を反映したものであるのかもしれない。いずれにしても、祐向寺に関しては文献的裏付けも乏しく、今後の祐向寺該当地域の発掘調査が進むことを待つしかない。

国土座標

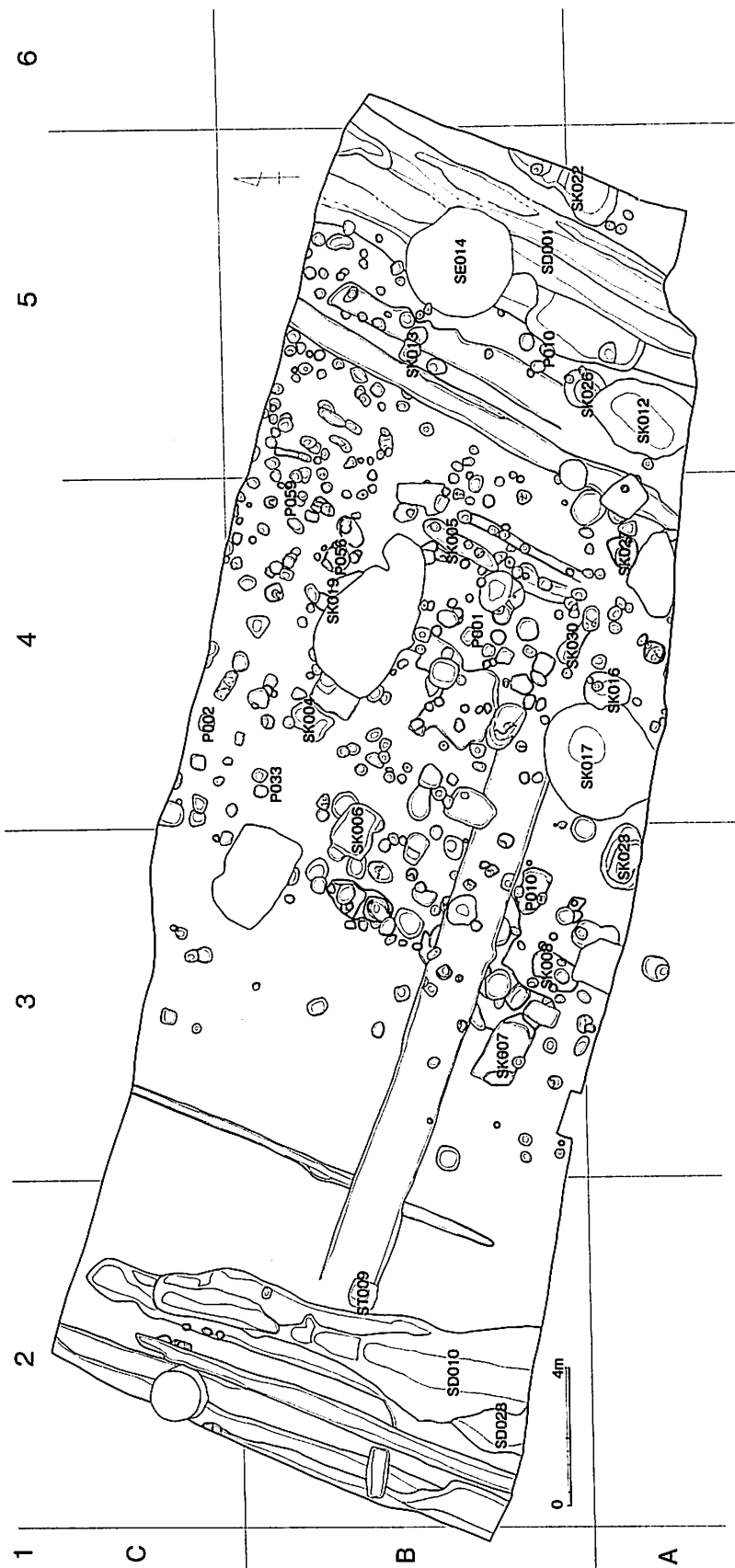
なお、中世大友府内町跡府内町跡第10次調査区においては、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へ1～11、北から南へC・B・A・Zのアルファベットを付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。本章で報告する第10次I区調査区については、東西1～6区、南北C・B・A区、の位置に相当する（第2-1図）。



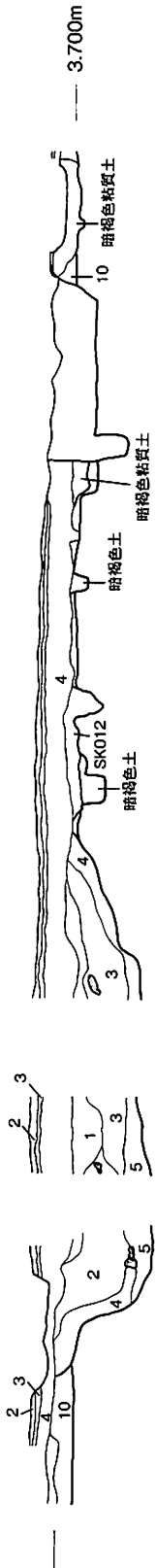
第2-1図 第10次I区調査区遺構分布図(1/800)

第2-1表 第10次調査I区遺構一覧

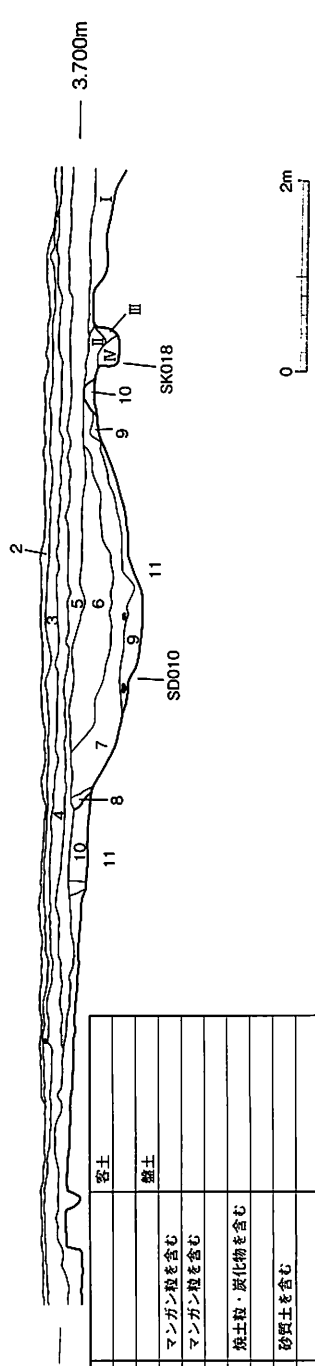
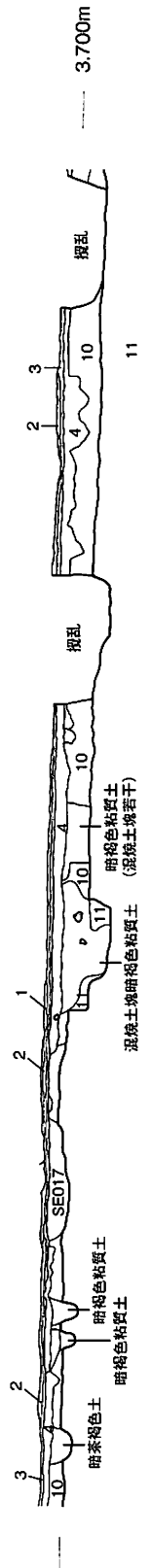
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の位置	遺構の性格	遺構の時期	特記事項	掲載頁
S001	SD001	5A・5B区	溝	16世紀後葉	京都系土師器2期・景徳鎮窯系青花(C群・E群)・龍泉窯系青磁・白磁・備前系陶器・瓦質土器	19
S004	SK004	4B区	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器	27
S005	SK005	4B区	土坑	16世紀後葉		28
S006	SK006	3B・4B区	土坑	16世紀後葉	備前系陶器・瓦質土器・石臼	28
S007	SK007	3B区	土坑	15世紀後葉～16世紀後葉		31
S008	SK008	3B区	土坑	15世紀後葉～16世紀後葉		31
S009	ST009	2B区	土坑墓	15世紀		45
S010	SD010	2B・2C区	溝	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器・龍泉窯系青磁・瓦質土器・土鍾	24
S012	SK012	5A区	土坑	16世紀後葉	京都系土師器2期・在地系土師質土器・龍泉窯系青磁・瓦質土器	32
S013	SK013	5B区	土坑	15世紀後葉～16世紀後葉		33
S014	SE014	5B区	井戸	15世紀代	在地系土師質土器・龍泉窯系青磁・白磁・備前系陶器・土鍾	38
S015	SK015	5A・5B区	土坑	15世紀後半～16世紀前葉	龍泉窯系青磁(人形手)・備前系陶器插鉢(中世5期～6期段階)	33
S016	SK016	4A区	土坑	16世紀後葉	16世紀後半の井戸SE017を切っている	34
S017	SE017	4A・4B区	井戸	16世紀後葉	京都系土師器2期・景徳鎮窯系青花・龍泉窯系青磁・備前系陶器・瓦質土器・銅銭・鉄製傘・鉄製鎌・鉄製籠	40
S019	SK019	4B区	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器	35
S022	SK022	5A・5B区	土坑	15世紀前半	備前系陶器插鉢(中世3～4期)	35
S023	SK023	3A区	土坑	15世紀後半～16世紀前葉		36
S026	SK026	5A・5B区	土坑	15世紀前半	備前系陶器插鉢(中世3～4期)	36
S027	SK027	4A区	土坑	14世紀	備前系陶器	37
S028	SD028	2B区	溝	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器	26
S030	SK030	4A・4B区	土坑	15世紀後葉～16世紀後葉	瓦質土器・青銅製品	37



第2-2図 第10次I区調査区遺構分布図 (1/200)



SD001	1層	灰茶褐色粘質土
	2層	暗褐色砂質土
	3層	灰褐色粘質土 炭・焼土を多量に含む
	4層	灰褐色砂質土
	5層	暗灰色強粘質土 炭を多量に含む
SK012		暗褐色土
		炭・焼土を多量に含む



中世水田層	1層	明灰茶褐色粘質土	粘土
	2層	黄褐色粘質土	粘土
	3層	淡灰褐色粘質土	マンガン粒を含む
	4層	灰褐色粘質土	マンガン粒を含む
	5層	暗褐色粘質土	焼土粒・炭化物を含む
SD010	6層	暗褐色粘質土	砂質土を含む
	7層	暗褐色粘質土	
	8層	暗褐色粘質土	
	9層	暗褐色粘質土	
	10層	暗褐色粘質土	
16世紀後半 整地層	11層	暗褐色砂質土	古代~縄文遺物を含む
SK018	I層	暗黄灰褐色粘質土	マンガン粒を含む
	II層	暗灰褐色粘質土	
	III層	灰褐色粘質土	
	IV層	暗黄灰褐色砂質土	

第2-3図 第10次I区調査区 南壁土層図 (1/80)

## 第2節 遺構と遺物

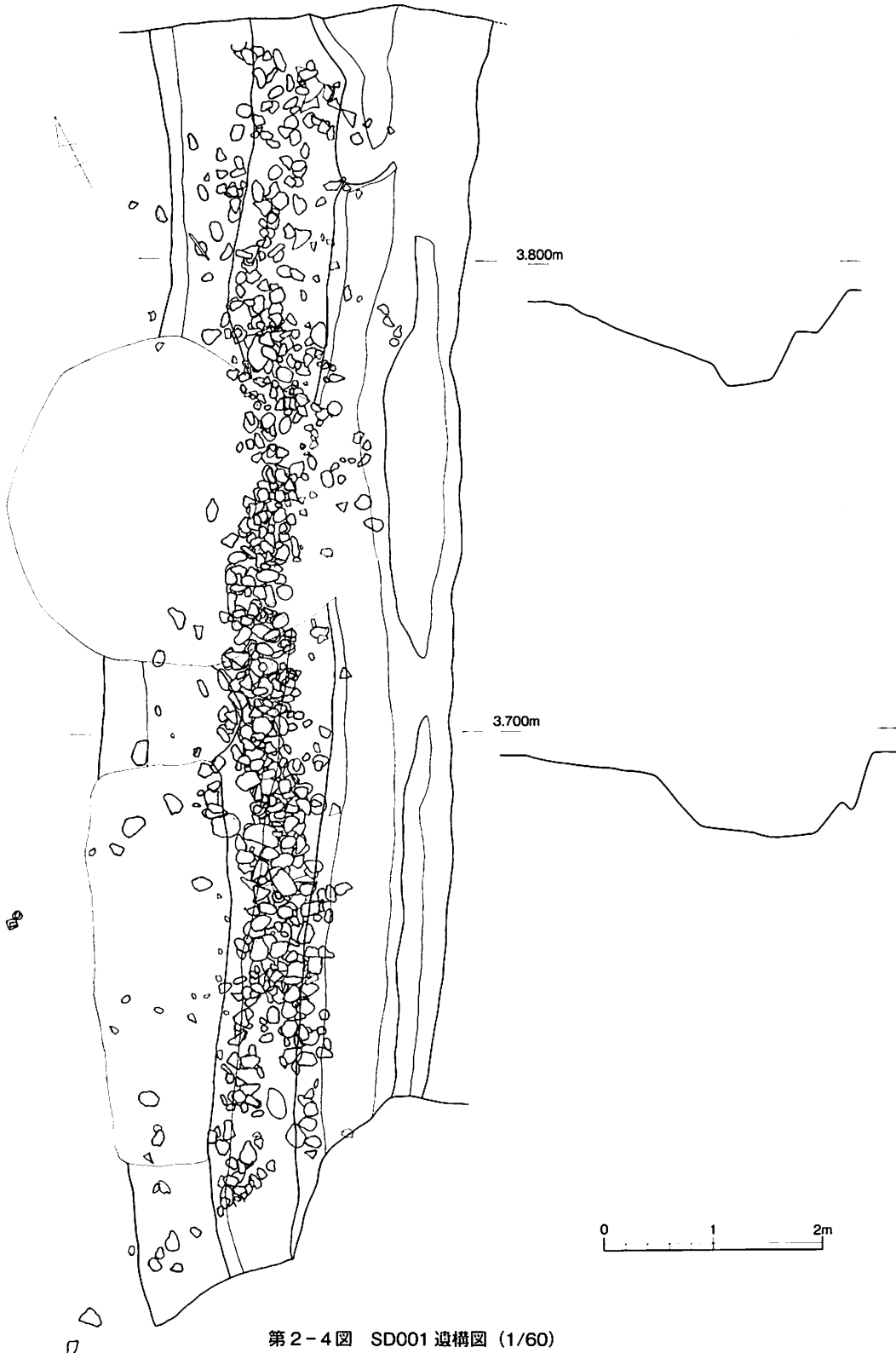
### 1. 溝

#### SD001 (第2-4図)

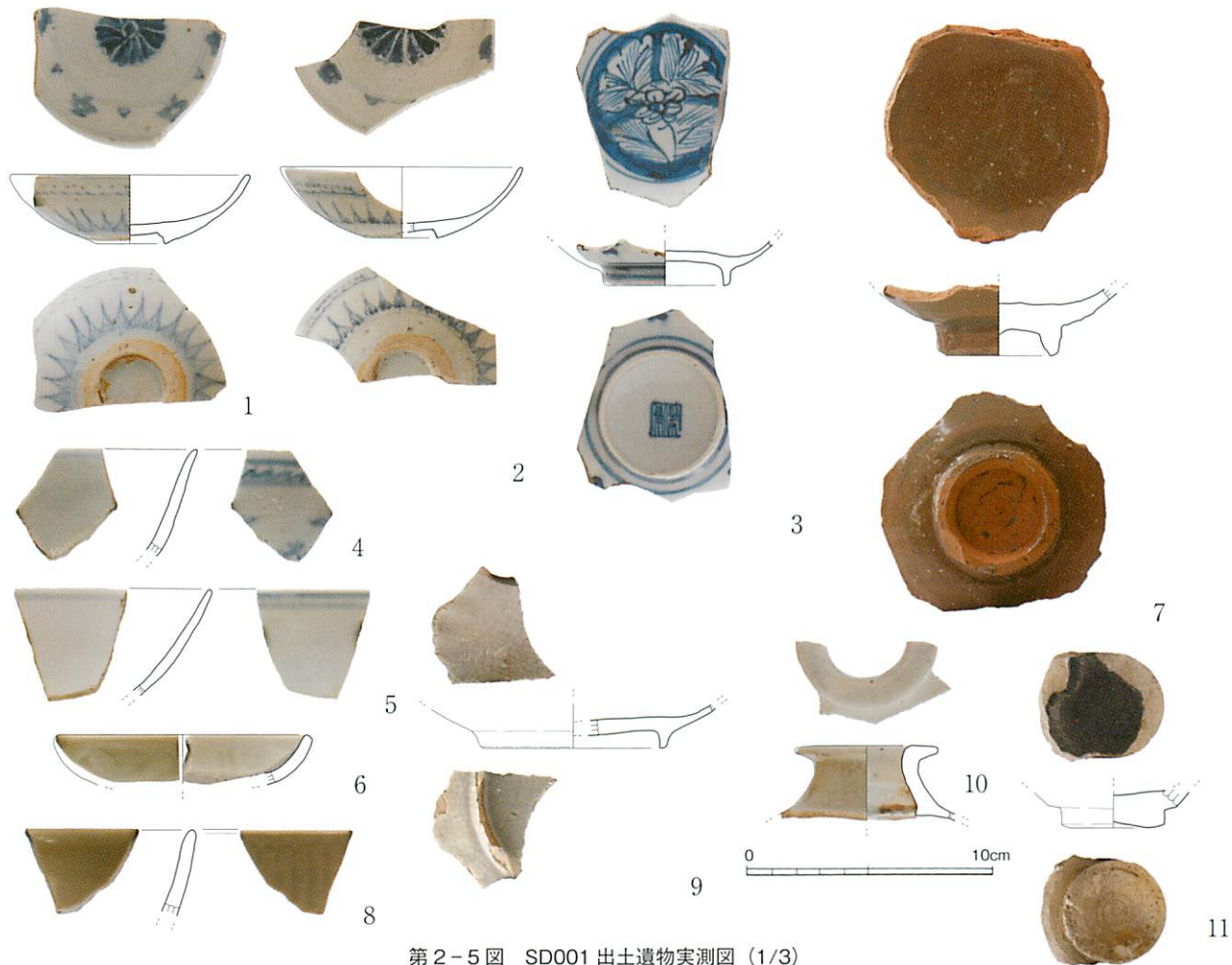
大量の石

調査区の東側隅を南北に延びる溝で、検出された長さは約17.3m、幅約4.9m、深さは最も深いところで約1.3m、方位はN-30°-Eで東に振っている。溝内からは、遺物と共に大量の石も出土しており、周囲の町屋等に使用された石が、溝の廃絶に伴い放り込まれたものであろう。

また、SD001は中央部付近で井戸SE014と切り合っている。井戸SE014については、当初そのプラ



第2-4図 SD001 遺構図 (1/60)



第2-5図 SD001 出土遺物実測図 (1/3)

ン等を含めて明確ではなく、溝の掘り下げ後にその存在がはっきりと確認できたことから、溝SD001に切られていたものと考えられる。井戸SE014から出土する遺物は、後に詳述するが、土師質土器はロクロ成形による在地系ものが中心となり、備前系陶器の播鉢等も乗岡編年の中世3期～5期のものが主体となって検出されていることから、15世紀段階ごろの位置づけができそうであり、したがって切り合い関係からしてSD001は15世紀以降の所産である。

次に、溝内から出土する遺物から見てみると、SD001からは塩地編年の京都系土師器2期のものが出土し、さらに景德鎮窯青花碗のE群が出土していることなどから、16世紀後葉の位置づけが可能であり、前述の切り合い関係とも矛盾しない。特に時期を隔てた遺物の出土も見られないことから、溝の掘削も埋没も16世紀後半に位置づけられよう。

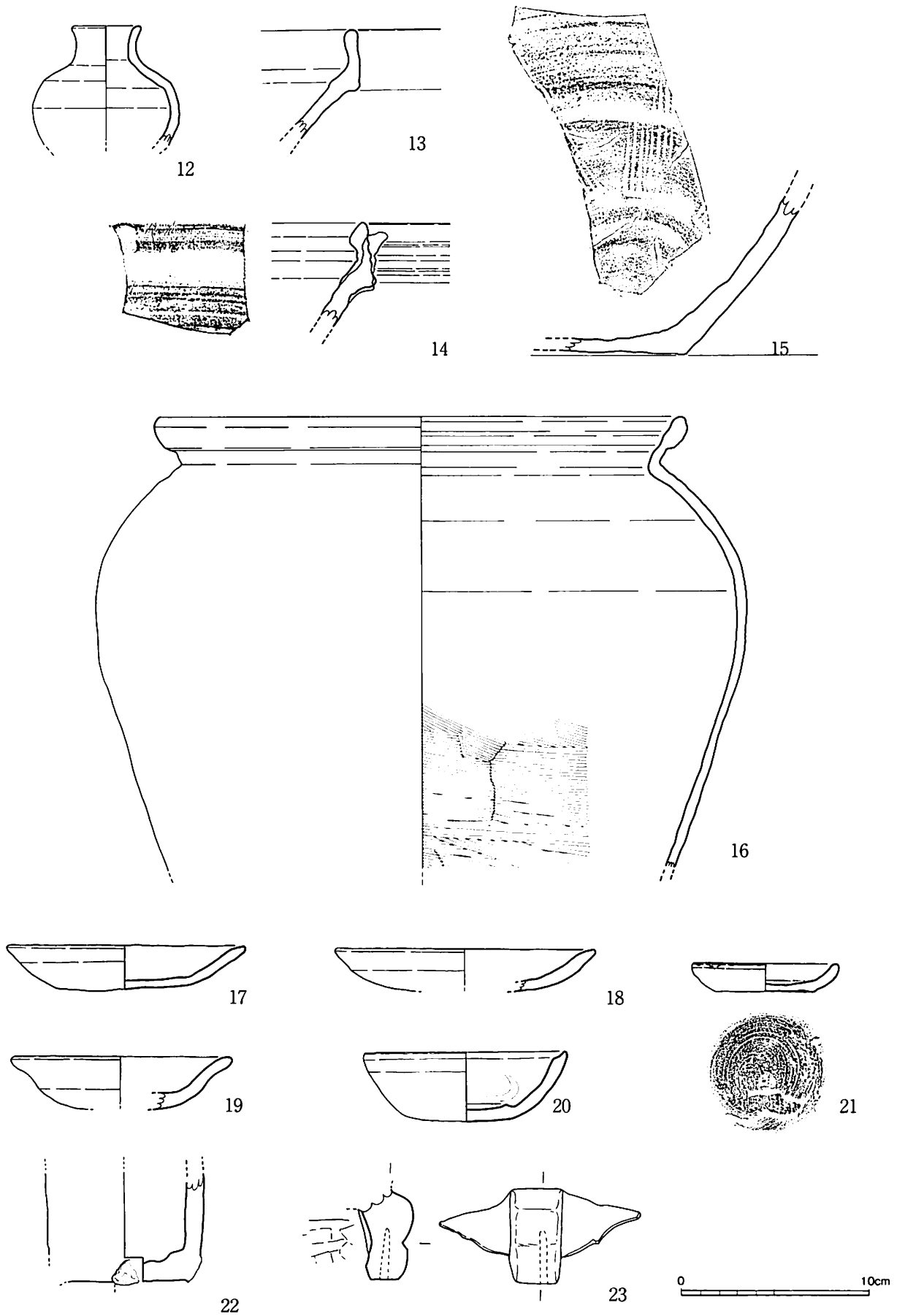
16世紀後半

出土遺物(第2-5～8図)

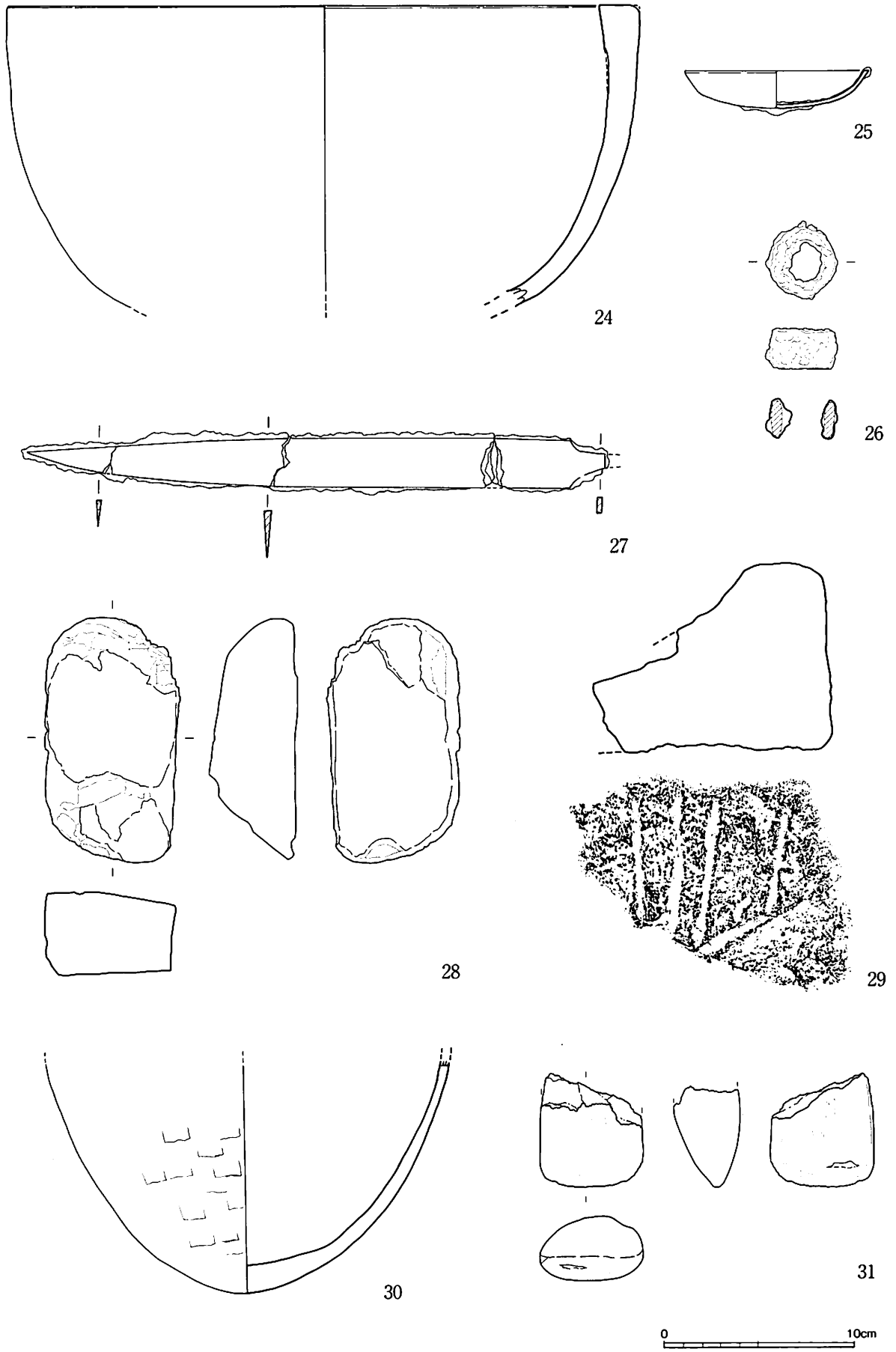
1・2は、中国景德鎮窯系青花皿で、両者ともいわゆる碁笥底を呈し、胴部外面には芭蕉葉文、内面見込には捻花を施す。小野正敏編年のC群にあたる。3～5は景德鎮系の碗で、3は見込部分が盛り上がるいわゆる饅頭心を呈し、小野正敏編年のE群にあたる。6～8は龍泉窯系の青磁で、6は皿、7・8は碗である。7は外面に鎬蓮弁が認められ、蓮弁の形状からして、14世紀代のものと思われ、混入したものと考えられる。9・10は中国産の白磁で、9は皿の高台部、10は瓶の口縁部である。11は瀬戸美濃系陶器の天目碗の高台部である。12～16は、備前系陶器で、12は壺、13～15は播鉢である。ナナムスリメ等は確認できないが、13・14の口縁部形態からすると、乗岡編年の中世6期～近世1期の段階に比定できそうである。16は大甕でやはり前述の播鉢と同様の段階に位置づけられよう。17～20は京都系土師器である。17～19は皿、20は坏である。17は器壁が薄く、ナデも明瞭でない

小野編年E群

中世6期～  
近世1期

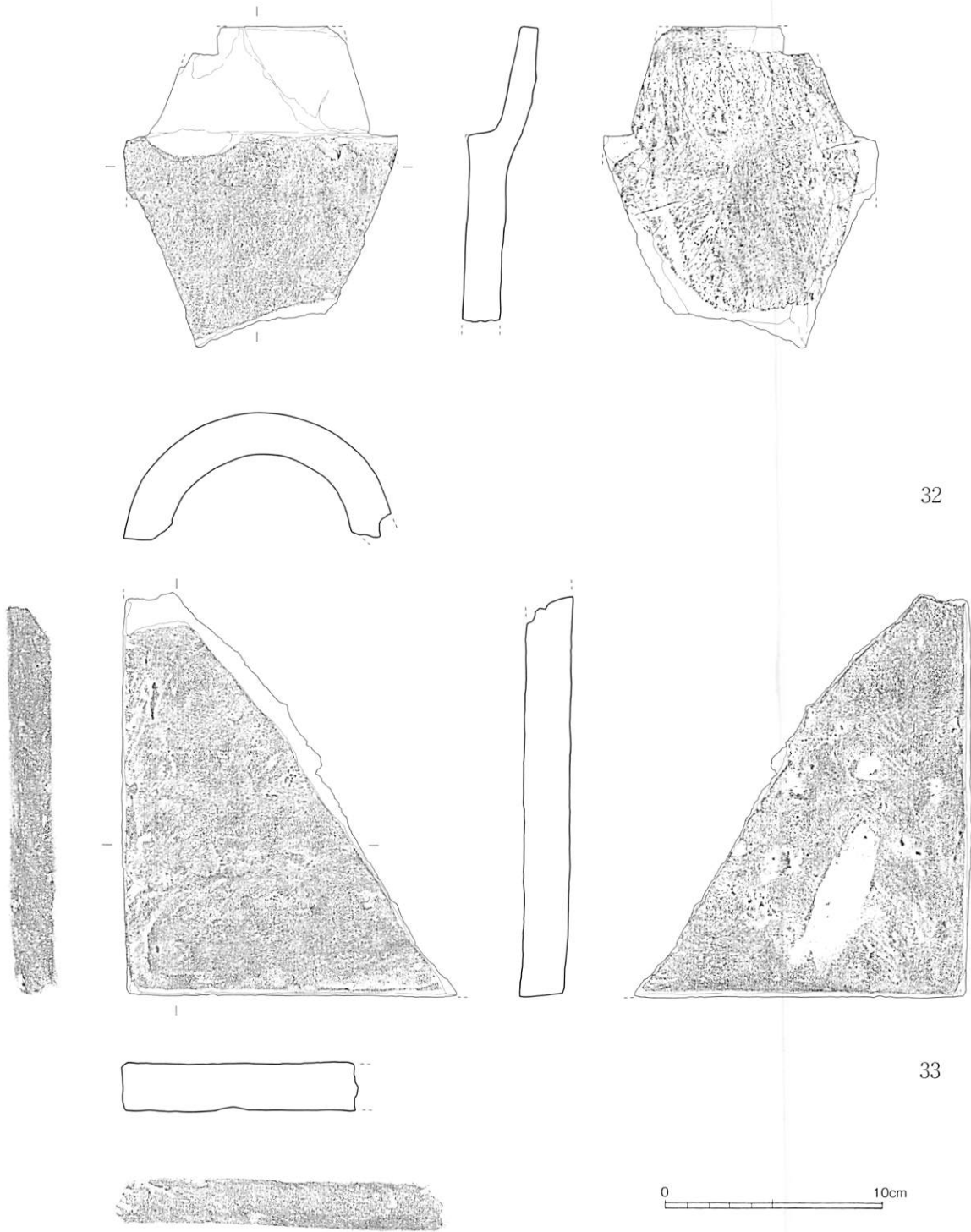


第2-6図 SD001 出土遺物実測図 (1/3)



第2-7図 SD001 出土遺物実測図 (1/3)





第2-8図 SD001 出土遺物実測図 (1/3)

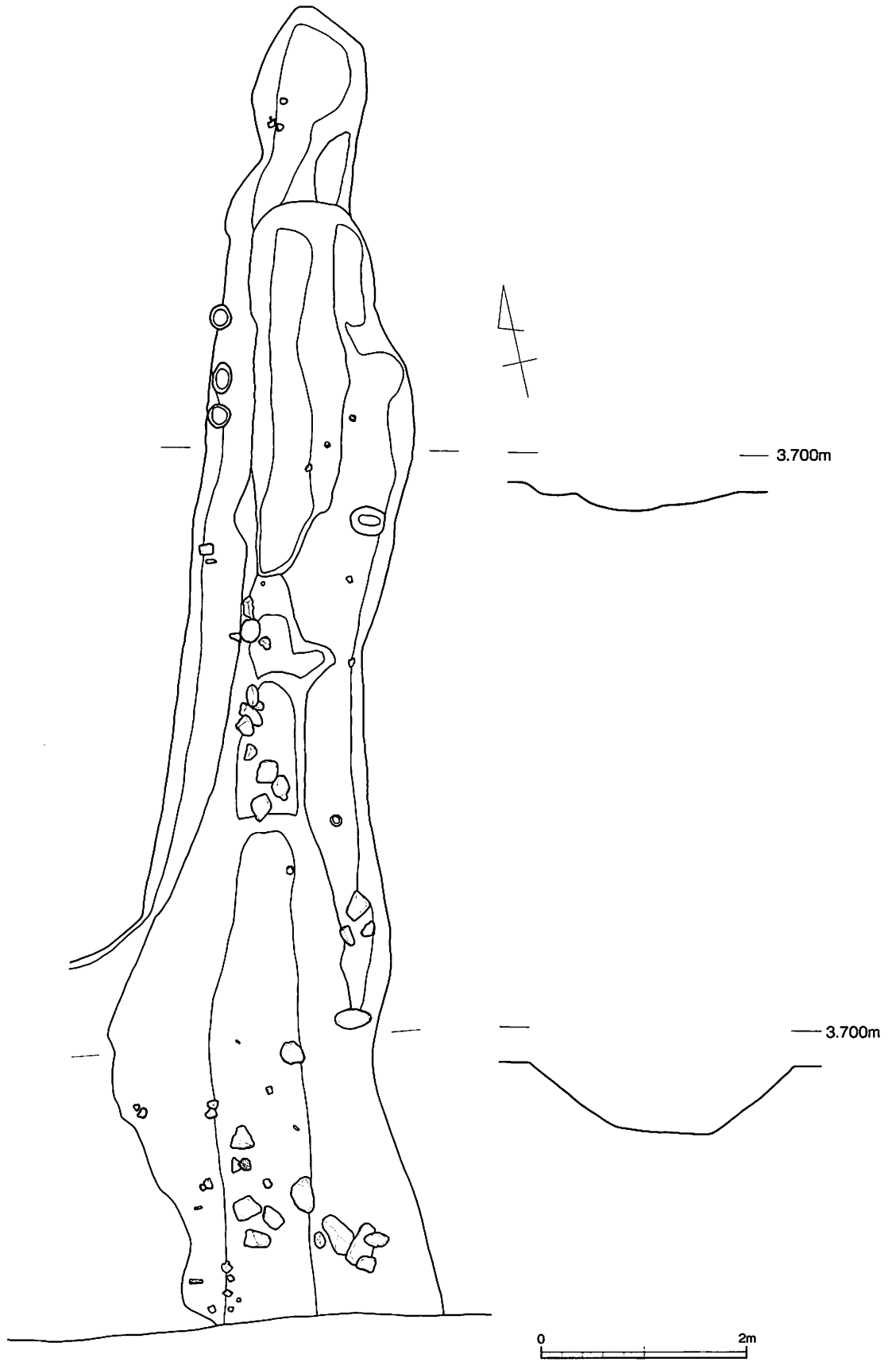
京都系土師器  
2期

ことから、古い様相を呈しているが、18は器壁が厚く、口縁部下のナデも明瞭であることから、2期以降の位置づけが可能であり、坏の共伴とも整合する。21は、底部に糸切り痕を残す在地系土師質土器の小皿である。口唇部にススが付着しており、灯明皿と思われる。他の遺物の時期関係からみて混入しているものと考えられる。22～24は瓦質土器で、22は香炉、23は火鉢の脚部、24は鉢である。

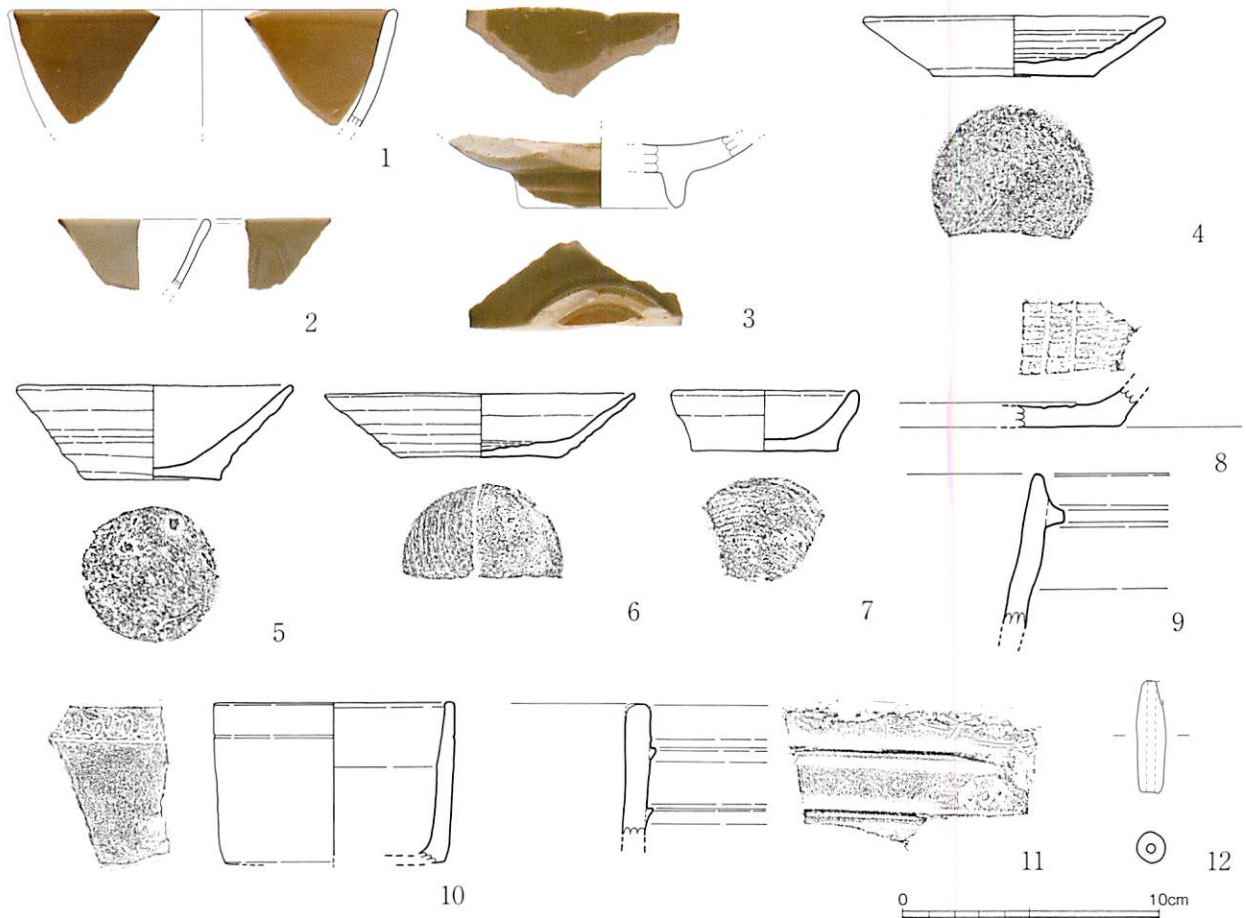
鉄製の碗

25～27は鉄製品で、25は鉄製の碗、26は環状製品であるが、用途は不明である。27は刀子である。28・29は石製品で、28は流紋岩製の砥石、29は凝灰岩製の石臼である。30・31は混入遺物で、30は古墳時代の土師器の甕、31は磨製石斧である。32は軒丸瓦、33は塼である。

SD010



第2-9図 SD010遺構図 (1/60)



第2-10図 SD010 出土遺物実測図 (1/3)

SD010 (第2-9図)

調査区西側隅を南北方向に延びる溝である。最大幅2.6m、深さは検出面から計測して約0.7mある。確認できている長さは17.4mであるが、溝の北側部分は調査区外には延びず、終端部となっていると考えられる。溝内からは、SD001ほどではないが、遺物と共にかかなりの石が出土しており、SD001同様に周囲の町屋に使用されていたものが、溝の廃絶に伴って放り込まれたものであろう。溝の方向性から見ると、SD001とほぼ同方位を示しているが、出土する遺物は14～15世紀のものが主体となり、SD001とはかなり時期差（SD001は16世紀後半が主体）が認められるため、両溝は併存していない。しかしこの両溝に加えてその他本調査区内で検出される溝は、すべて同方向の方位性を持っている点に注目すると、ある程度の期間（少なくとも1～2世紀の間）は同じような空間認識が存在していた可能性は十分にあり得るであろう。

出土遺物 (第2-10図)

1～3は龍泉窯系青磁で、1・2は碗の口縁部である。2は胴部に蓮弁が確認でき、まだ蓮弁の形状が幅広であることから、14世紀代に位置づけられよう。3は碗もしくは皿の高台部である。4～7は在地系土師質土器である。4～6は皿で口縁部が直線的に開き、内外面にロクロ目を顕著に残す。7は小皿で、いずれも坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭頃に位置づけられる。8は古瀬戸の卸皿である。

9～11は、在地産の瓦質土器で、9は鉢の口縁部で、突帯が巡らされる。10は香炉である。口縁部下に刻印による七宝文を巡らす。11は火鉢の口縁部と考えられ、二条の突帯間に刻印による文様が施される。12は土錘である。以上のように遺物は14世紀～15世紀のものが見られるが、遺構の時期は、15世紀末葉～16世紀初頭頃とみなすのが妥当であろう。

町屋に使用された石

同じような空間認識

龍泉窯系青磁

在地系土師質土器

七宝文

15世紀末葉～16世紀初頭

SD028 (第2-11図)

調査区西側隅B-2区に位置する。SD010に切られているため、残存長1.2m、残存幅0.75m、深さは確認できる範囲で、0.13mほどである。残存部分が少ないためにどのような形状であったか詳細はつかめないが、残存部がこれだけであることを考えると、SD010よりも規模は小さく、方位もほとんど同方向に伸びていたのであろう。さらにSD010は調査区北側で終わっていたが、その先にSD028も検出されていない。したがってSD028がSD010と同方位に伸びる溝だったとしても、やはりSD010以上に北側には伸びない溝であったと考えられる。

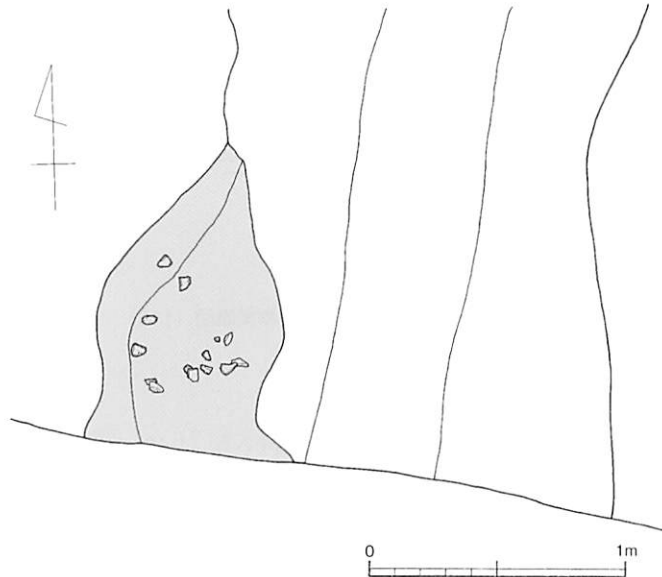
15世紀中葉

SD028から出土する遺物は、希少であるため時期の認定は困難であるが、15世紀中葉段階の在地系土師質土器が出土しており、その頃の位置づけが可能であろう。SD028を切っているSD010もほぼ同じような時期の遺物が見られることから、両者にはさほど時期差が無かったか、もしくは同一の溝の掘り返しであった可能性、さらには同一溝の異なる堆積の一部という認識も考慮に入れておく必要がある。

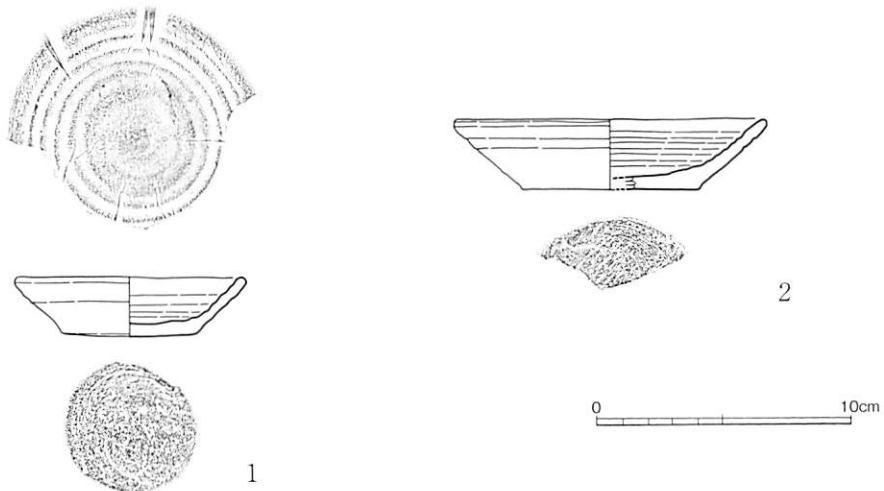
出土遺物(第2-12図)

内面にロクロ目

1・2ともに在地系の土師質土器の皿である。口縁部が外に向かって直線的に広がり、内面に顕著なロクロ目を残す。坂本編年で15世紀末葉~16世紀初頭頃に位置づけられるものと考えられる。



第2-11図 SD028 遺構図 (1/30)



第2-12図 SD028 出土遺物実測図 (1/3)

2. 土坑

SK004 (第2-13図)

2つの土坑

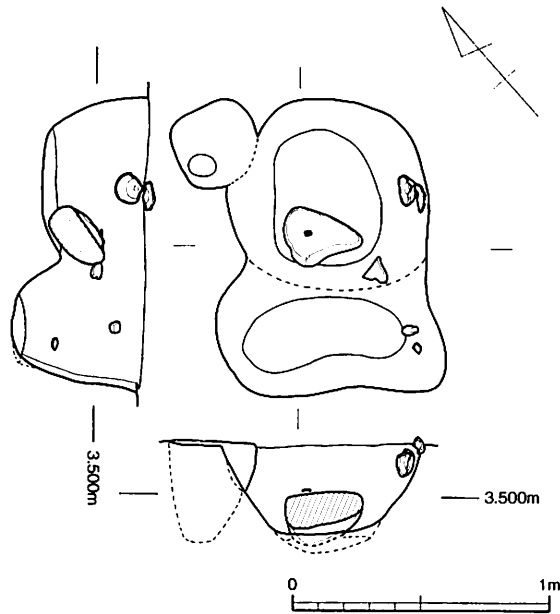
調査区中央北側のB-4区に位置する土坑である。長径が南北方向1.17m、短径が東西方向で0.74m、深さは最も深いところで0.53mほどである。図2-13から分かるように、南北で異なる形状の底面が確認され、深さも違うこと等を勘案すると、2つの異なった土坑が切り合っていたものと考えられる。検出時には切り合いのラインが明確に把握できなかったため、両者併せてSK004として扱い、遺物も共に取り上げた。しかしながら遺構図から分かるように、土坑中央部で出土した礫の流れ込み具合から判断すると、北側の土坑が南側の土坑を切って存在していた可能性が高いと思われる。したがって図2-13では、その推定ラインを点線で図示している。

土坑から出土する遺物は希少であるが、15世紀中頃段階の在地系土師質土器が出土していることから、該期の所産と考えられる。南北2基の土坑は切り合っているが、さほど時期差はないものと考えられる。

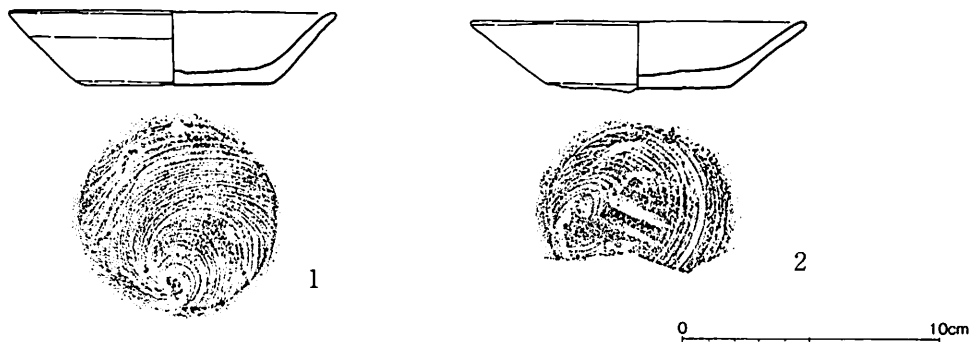
出土遺物(第2-14図)

在地系土師質土器

1・2ともに在地系の土師質土器の皿である。底部から口縁部に向かって直線的に外方向に広がる形態で、坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。



第2-13図 SK004 遺構図 (1/30)



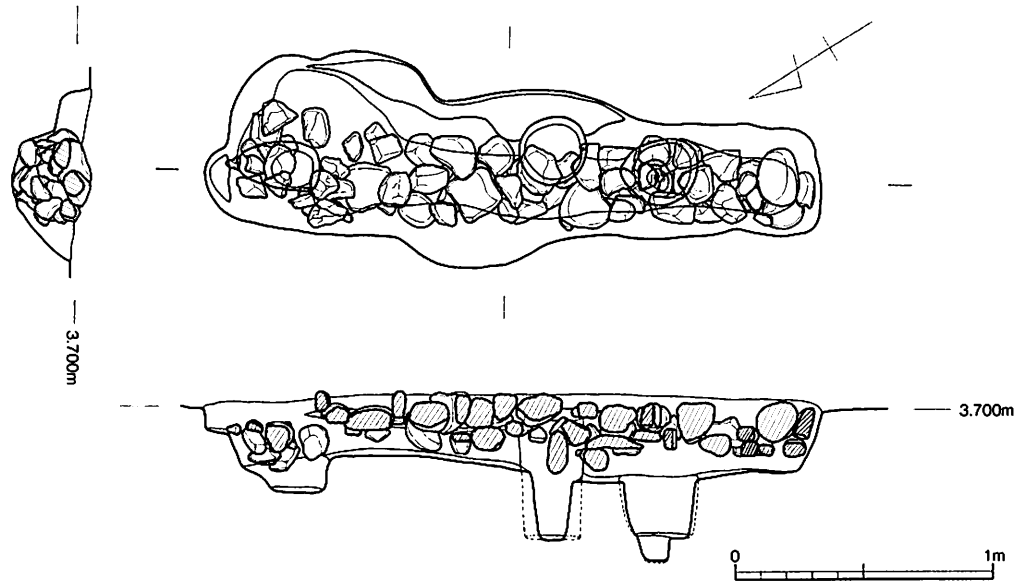
第2-14図 SK004 出土遺物実測図 (1/3)

SK005 (第2-15図)

調査区中央B-4区に位置する土坑である。長径2.46m、短径0.69mの細長い長方形プランを呈す。深さはもっとも深いところで0.66m、浅いところで0.24mであるが、深いところは切り合っているピットの深さである可能性が高く、本遺構の深さは、実際は0.3m前後と思われる。本土坑の主軸はSD001とほぼ同方向を示しており、細長いそのプランを見ると、何らかの区画溝の一部が残存して検出されているのかもしれない。遺構内からは大量の礫が出土しているが、この土坑の時期を認定できる遺物の出土は見られない。ただ、ほぼ同方位を示しているSD010との関連性を重視すれば、SD001が16世紀後葉に位置づけられることから、その時期の所産とすることが可能であろう。

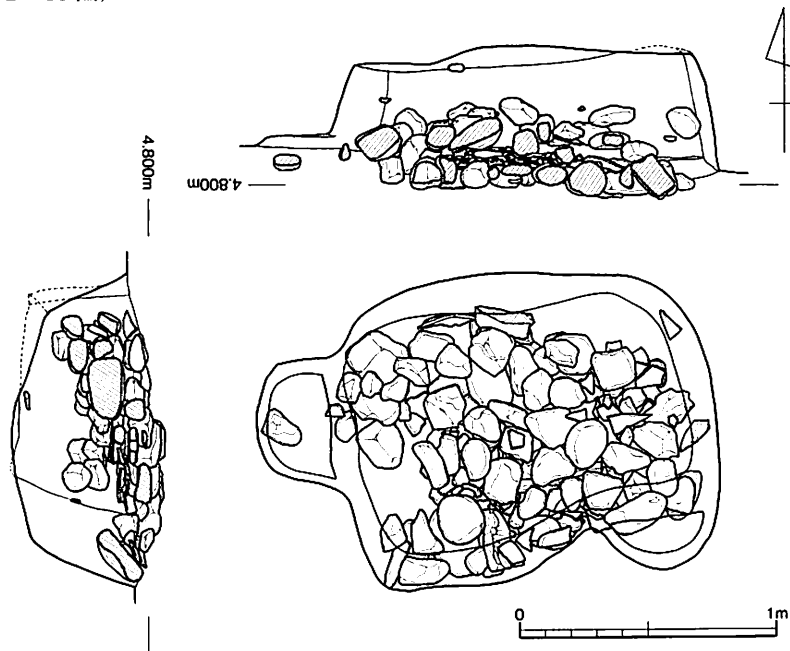
大量の礫

16世紀後葉



第2-15図 SK005 遺構図 (1/30)

SK006 (第2-16図)



第2-16図 SK006 遺構図 (1/30)

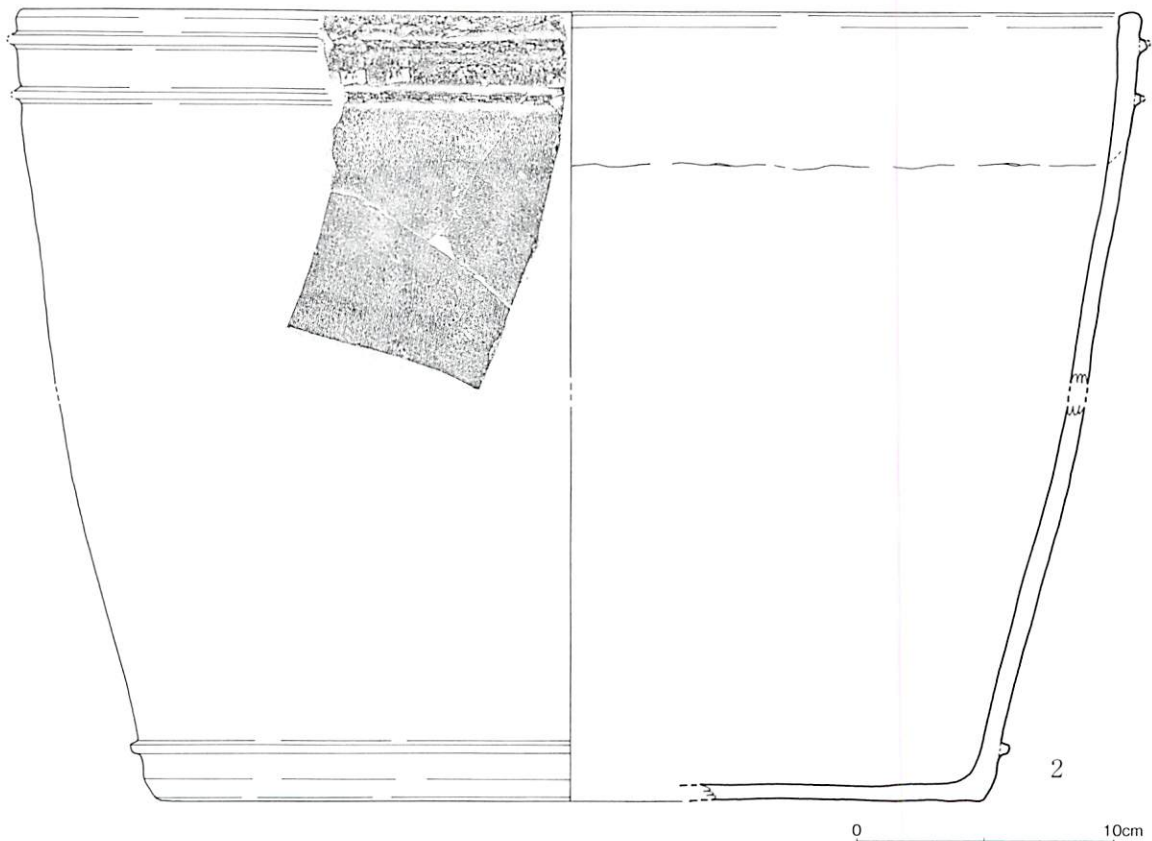
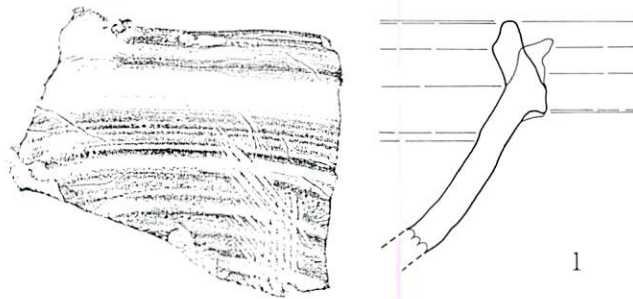
調査区のほぼ中央付近、B-3・4区に位置する土坑である。長径1.83m、短径1.22mの隅丸長方形の平面プランを有す。深さは検出面から計測して0.54mほどである。遺構内からは遺物と共に、大量の礫が検出された。礫は土坑底面に接するようにはなく、底面から若干上にまとまって検出されていることから、土坑に敷き詰められていたのではなく、土坑を埋める際に廃棄されたものと解するのが妥当と考えられる。礫が土坑の形成とは無関係で、単に大量に廃棄されているという観点に立てば、この土坑は廃棄土坑として位置づけるべきであろう。平面プランが隅丸方形である点や礫の大量の混入という点に着目すれば、他の何らかの施設である可能性も考慮に入れておく必要があるが、現段階その他の施設の様相を示す遺物の出土状況等も認められず、廃棄土坑として位置づけておきたい。なお、廃棄された大量の礫は、調査区内を南北に延びる溝SD001内から出土する礫と同様に、町屋で屋根等に使用されたものであることが考えられる。後述するように、本土坑内から出土する遺物に、近世1期の備前系陶器の挿鉢が出土していることから土坑の時期はSD001と併存した可能性のある16世紀後葉に位置づけられ、そうした場合16世紀後葉期の町屋等の廃棄土坑としての位置づけが可能であろう。

大量の礫

廃棄土坑

町屋

16世紀後葉

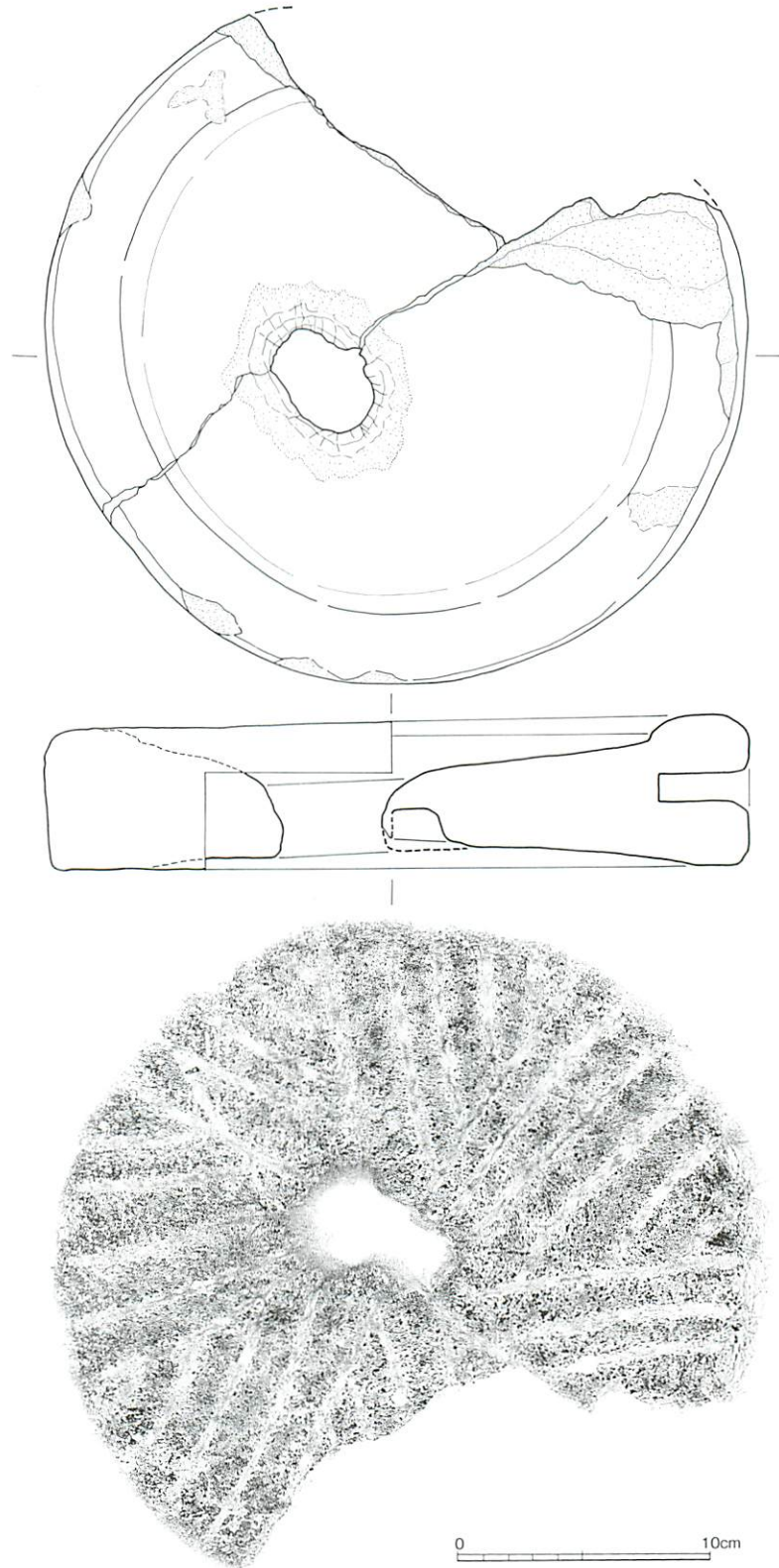


第2-17図 SK006 出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第2-17・18図）

近世1期

1は備前系陶器の播鉢で、スリメの状況は不確定だが、口縁部の形態等からみて、近世1期、ナメスリメを有する段階のものと考えられる。2は瓦質土器の火鉢と考えられ、口縁部下に2条の突帯を巡らし突帯間に文様を施す。3は安山岩製の石臼で、上臼である。



3

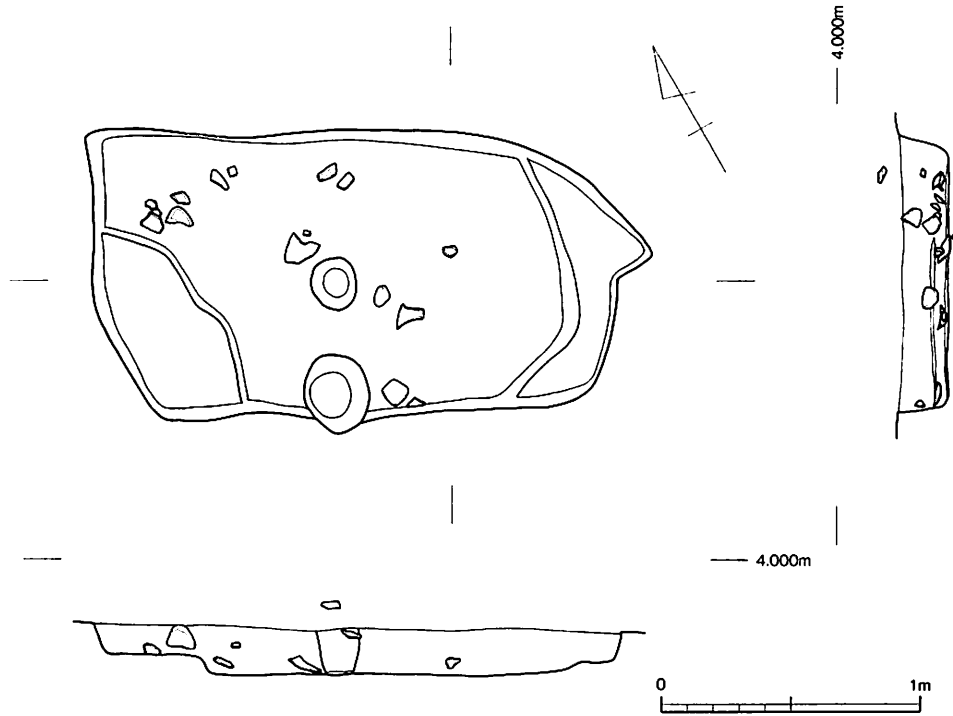
第2-18図 SK006 出土遺物実測図（1/4）



SK007 (第2 - 19 図)

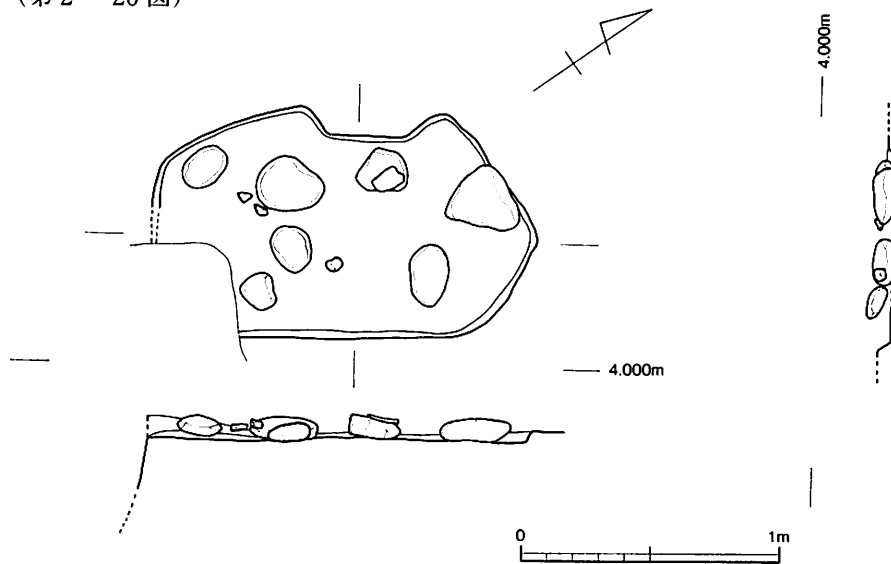
3 - B区に位置する土坑で、長径2.07m、短径1.11mの東西方向に長い長方形プランを呈す。深さは浅く0.18mほどしかない。遺物の出土状況は希薄で、遺物から土坑の時期を認定するのは不可能である。しかしこの土坑の方位に着眼してみると(図2-2参照)、東西方向の主軸は、W-30° -Nの方位を示し、北側に30° 振っていることがわかる。実はこの方位は本調査区を南北方向に走る溝(SD001・010・028)と直交する方位であり、よってこれらの溝で規格されるいずれかのプランに伴うものであることが考えられる。现阶段、各溝の時期幅は15世紀後葉～16世紀後葉の中で捉えられており、したがって土坑の時期もその間で考えておくのが妥当であろう。

溝に直交する方位



第2-19 図 SK007 遺構図 (1/30)

SK008 (第2 - 20 図)



第2-20 図 SK008 遺構図 (1/30)

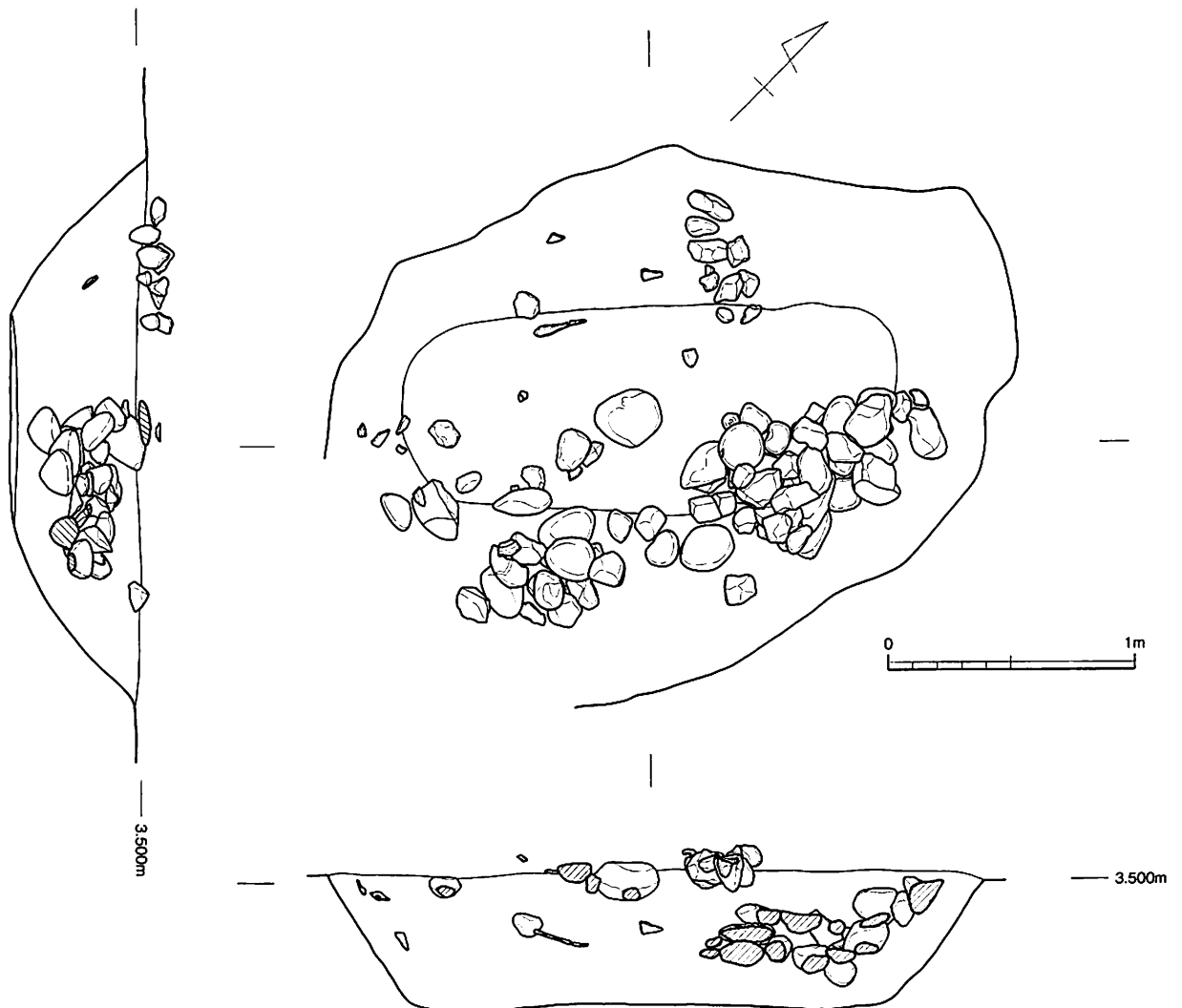
3-B区に位置する土坑で、長径1.53m、短径0.81mの南北方向に長い長方形プランを呈すが、南側の一部分は攪乱によって削られている。全体的に深さは浅く0.05mほどしかない。土坑内からは礫が複数出土しており、廃棄土坑の可能性もあるが詳細は不明である。遺物の出土状況も希薄で、遺物から土坑の時期を認定するのは不可能である。しかしSK007同様にこの土坑の方位に着眼してみると(第2-2図参照)、南北方向の主軸は、N-30°-Eの方位を示し、東側に30°振っている。これは溝(SD001・010・028)と平行する方位を示す。よって本遺構もこれらの溝で規格されるいずれかのプランに伴うものであると考えられ、15世紀~16世紀後半頃の所産でと考えるのが妥当であろう。

礫が複数出土  
溝と平行する

SK012 (第2-21図)

5-A区に位置する土坑で、長径2.75m、短径2.24mの楕円形プランを呈す。深さはもっとも深いところで0.57mほどある。土坑内からは遺物と共に大量の礫さらには炭や焼土も出土しており、廃棄土坑と考えられる。出土する遺物の中には京都系土師器2期のものが見られ、遺構自体は16世紀後半代のものであると考えられる。そうした場合、ほぼ同時期の所産と考えられる溝SD001がすぐ東を流れており、併存もしくは同時期に廃絶された可能性が高く、強い関連性が認められる。また本土坑の底面の形状をみると溝SD001とほぼ同方位を示す隅丸長方形を示しており、両者に共通した規格性が感じられる。したがって、本土坑はSD001に画された町屋等の裏手に掘られた廃棄

廃棄土坑  
SD001と同方位  
町屋の裏手



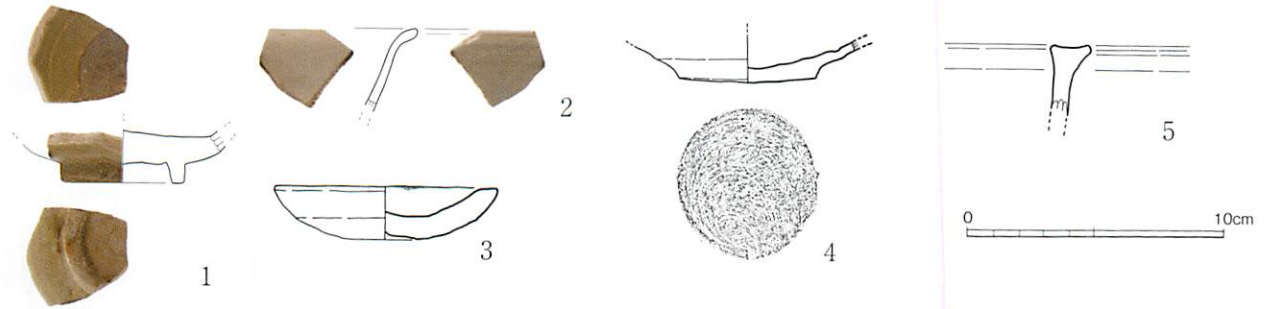
第2-21図 SK012遺構図(1/30)

土坑であると考えられ、中世大友府内町跡の町屋でよく見られるのものの一つである。

出土遺物 (第2 - 22 図)

龍泉窯系青磁  
京都系土師器  
2期

1・2は龍泉窯系青磁で、1は碗の底部、2は皿の口縁部である。破片が小片のため、文様構成等は把握できない。3は京都系土師器の皿で、器壁が比較的厚く2期以降のものと思われる。4は在地系土師質土器の皿、5は瓦質土器の鉢の口縁部である。

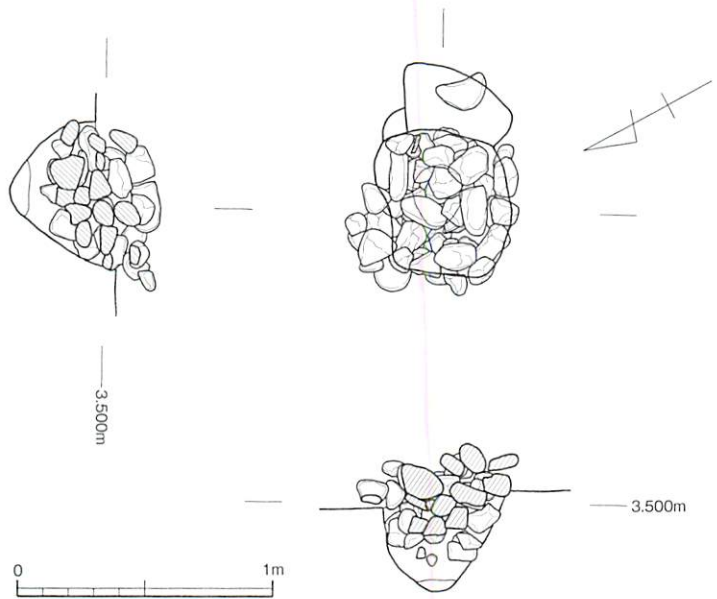


第2-22 図 SK012 出土遺物実測図 (1/3)

SK013 (第2 - 23 図)

大量の礫

5 - B 区に位置する土坑で、長径 0.83m、短径 0.48m の楕円形プランを呈す。深さはもっとも深いところで 0.38m ほどである。土坑内には大量の礫が詰まっている。遺物の出土がないため、この土坑の時期や性格については不明であるが、出土する礫の最上部のレベルを見ると実際の堀形はまだ上だったと考えられ、そのレベルからみると 15 世紀後葉～ 16 世紀後葉のものであろう。



第2-23 図 SK013 遺構図 (1/30)

15 世紀後葉～  
16 世紀後葉

SK015 (第2 - 25 図)

5 - A 区と 5 - B 区にまたがって位置し、長径 3.42m、短径 1.41m の隅丸長方形プランを呈す土坑であるが、東側部分は SD001 によって掘削されている。深さはもっとも深いところで 0.35m ほどで、さほど深くない。土坑内からは遺物と共に多くの礫も出土しており、廃棄土坑と考えられる。

土坑の時期については、中世 5 期～ 6 期の備前系陶器挿鉢が出



第2-24 図 SK015 出土遺物実測図 (1/3)

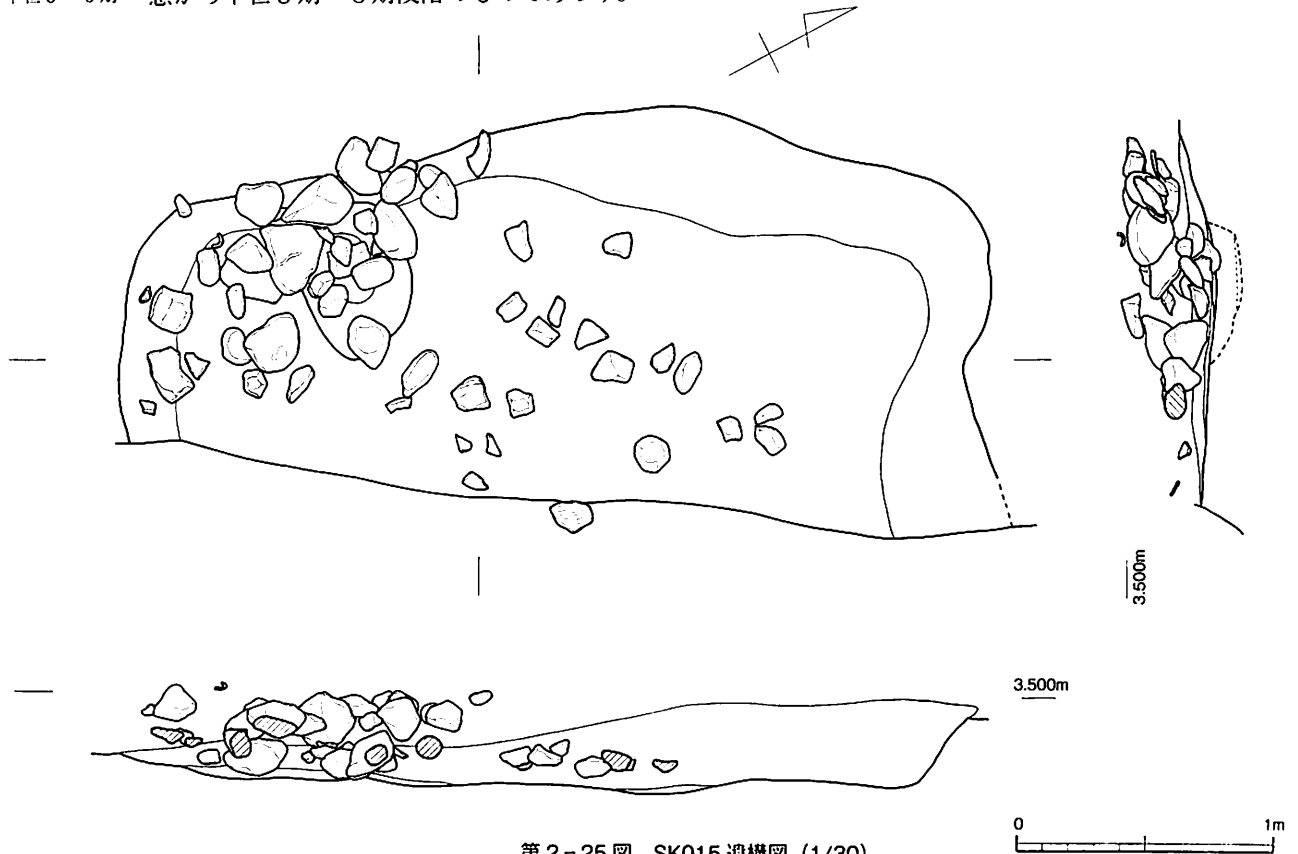
土していることから、15世紀後半から16世紀前葉段階に比定され、SD001との切り合い関係とも矛盾しない。

出土遺物 (第2-24図)

人形手

1・2は龍泉窯系青磁で、1は碗である。1の見込みには陰刻による人物像が描かれ、いわゆる「人形手」である。2は瓶の把手部分と思われる。3は備前系陶器播鉢の口縁部であるが、口縁部の形

中世5~6期 態から中世5期~6期段階のものであろう。



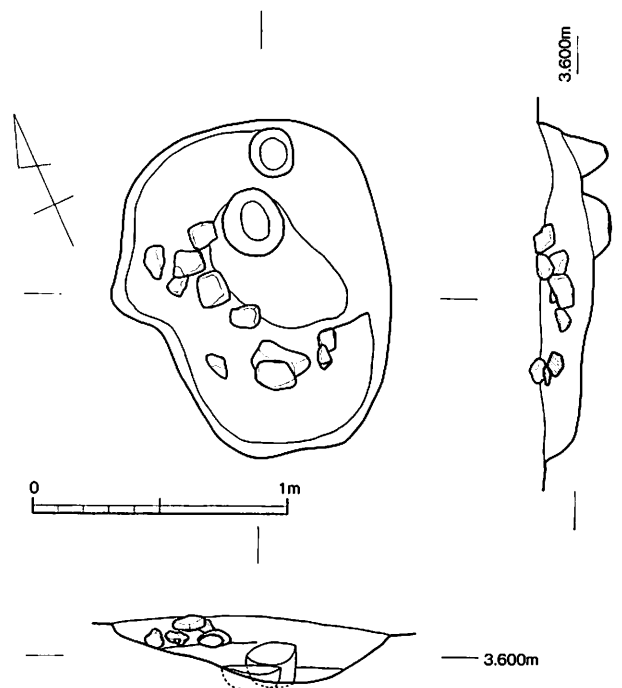
第2-25図 SK015遺構図 (1/30)

SK016 (第2-26図)

4-A区に位置し、長径1.34m、短径1.11mの楕円形プランを呈す土坑である。深さはもっとも深いところで0.26mほどで、さほど深くない。土坑内からは礫が出土している。時期を認定できるような遺物の出土は見られず、土坑の時期判定は困難であるが、16世紀後葉の井戸であるSE017を切って造られている点や、他の遺構の密集している中に立地している点などを加味すると16世紀後葉の位置づけが可能かと思われる。また礫の混入状況から恐らくは廃棄土坑的性格を有する土坑と思われるが、詳細は不明である。

SE017を切る

廃棄土坑



第2-26図 SK016遺構図 (1/30)

SK019 (第2-27図)

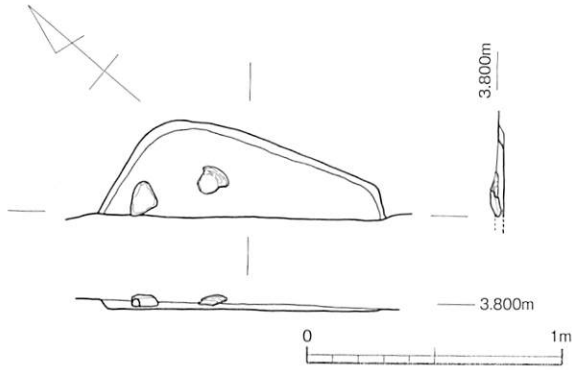
4-B区に位置し、長径1.14m、短径0.33mで隅丸長方形を呈すものと思われる。深さはもっとも深いところでも、0.03mと浅い。出土する土師質土器から15世紀末葉～16世紀初頭の所産かと思われる。

15世紀末葉～  
16世紀初頭

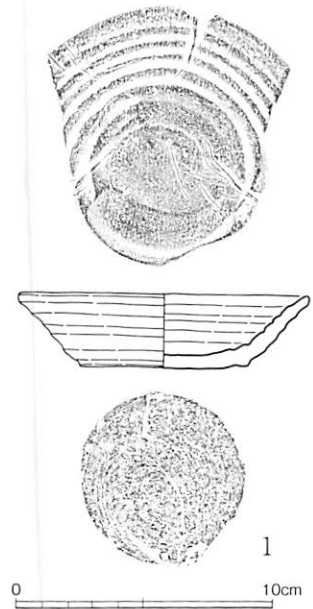
出土遺物 (第2-28図)

ロクロ目

1は在地系土師質土器の皿で、内外面にロクロ目を顕著に残す。



第2-27図 SK019 遺構図 (1/30)



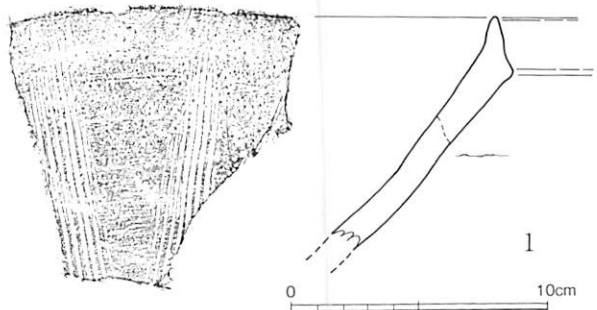
第2-28図 SK019 出土遺物実測図 (1/3)

SK022 (第2-30図)

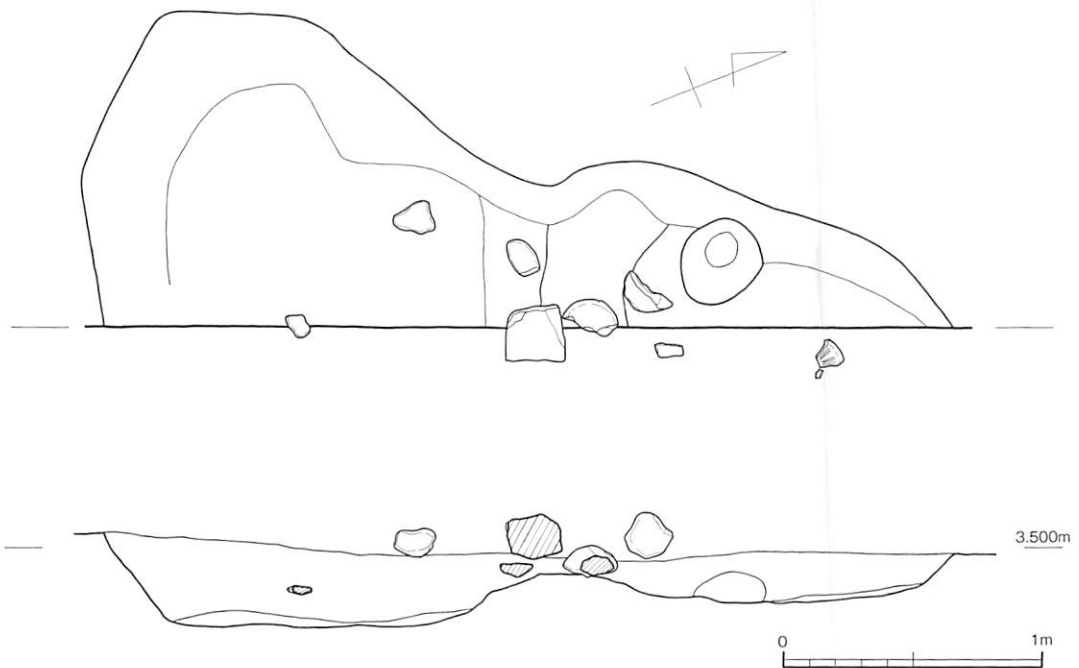
5-A・B区に位置し、長径3.35m、短径2.06mで東側部分は調査区外にさらに広がるものと思われる。深さは0.33mほどである。遺物と共に礫が若干出土しており廃棄行為に伴う土坑と思われる。時期を認定できる遺物は少ないが、備前系陶器挿鉢から15世紀前半の所産と思われる。

廃棄行為

15世紀前半



第2-29図 SK022 出土遺物実測図 (1/3)



第2-30図 SK022 遺構図 (1/30)

出土遺物 (第2-29図)

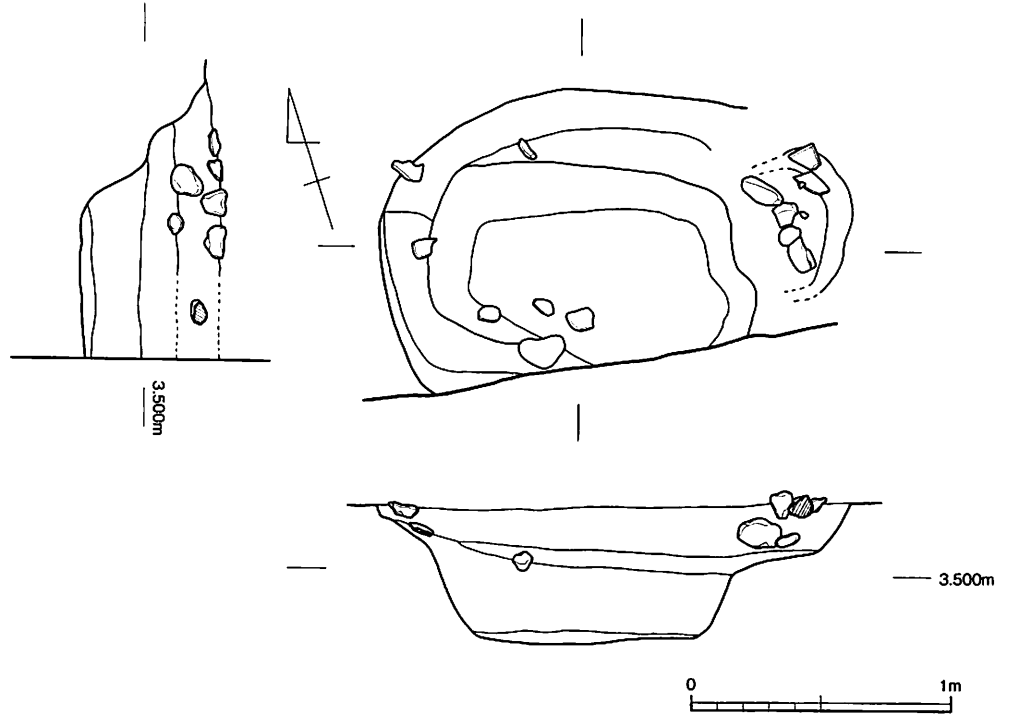
中世4期

1は備前系陶器の播鉢で、乗岡編年の中世4期に位置づけられると考えられ、他の良好な資料が見られないため、本資料をもって遺構の時期を15世紀代と位置づけておく。

SK023 (第2-31図)

廃棄土坑

3-A区に位置し、長径1.84m、短径1.08mで南側部分は調査区外にさらに広がるものと思われる。深さは0.56mほどである。遺物と共に礫が若干出土しており廃棄土坑と思われる。



第2-31図 SK023遺構図 (1/30)

SK026 (第2-33図)

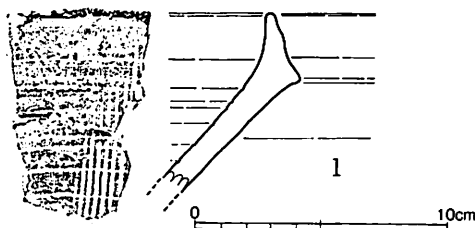
15世紀

5-A・B区に位置し、長径1.11m、短径1.10mで東側部分は調査区外にさらに広がるものと思われる。深さは0.38mほどである。16世紀後半に比定されるSK012に切られており、それ以前の所産である。出土する遺物の中に時期認定ができるものが少ないが、1点15世紀段階の備前系陶器播鉢が出土しており、土坑の時期もとりあえずその時期にあてておきたい。

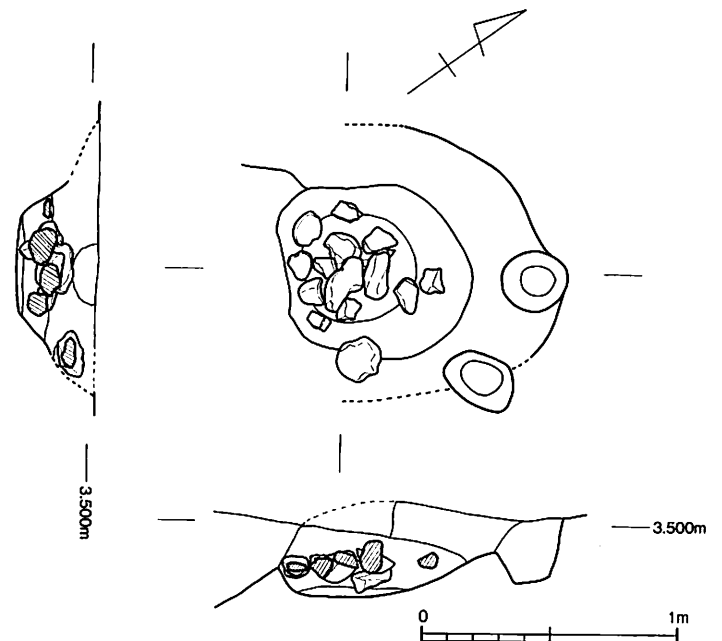
出土遺物 (第2-32図)

中世4期

1は備前系陶器の播鉢で、口縁部の形態から乗岡編年の中世4期に位置づけられると考えられる。



第2-32図 SK026出土遺物実測図 (1/3)



第2-33図 SK026遺構図 (1/30)

SK027 (第2 - 35 図)

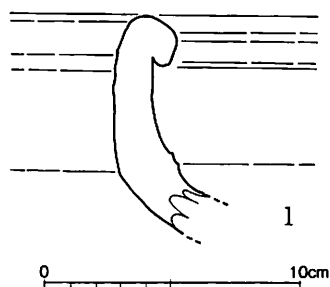
4 - A 区に位置し、長径 0.9m、短径 0.77m の楕円形プランを呈す。深さは 0.24m ほどである。土坑内には遺物と共に大量の礫が入っている。時期を認定しうる遺物が希少である。

大量の礫

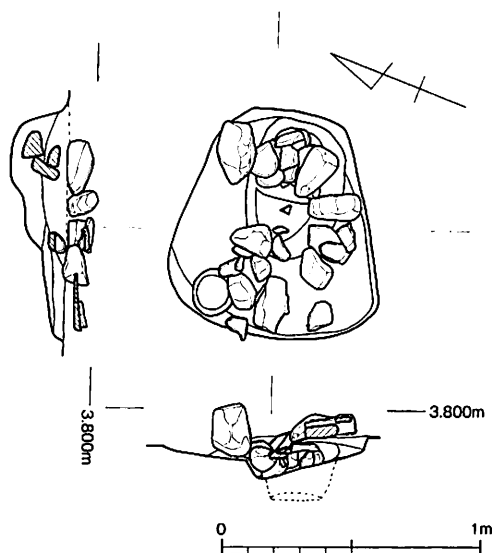
出土遺物 (第2 - 34 図)

1 は備前系陶器の大甕の口縁部で、14 世紀代と考えられる。

備前系陶器  
大甕



第2 - 34 図 SK027 出土遺物実測図 (1/3)



第2 - 35 図 SK027 遺構図 (1/30)

SK030 (第2 - 36 図)

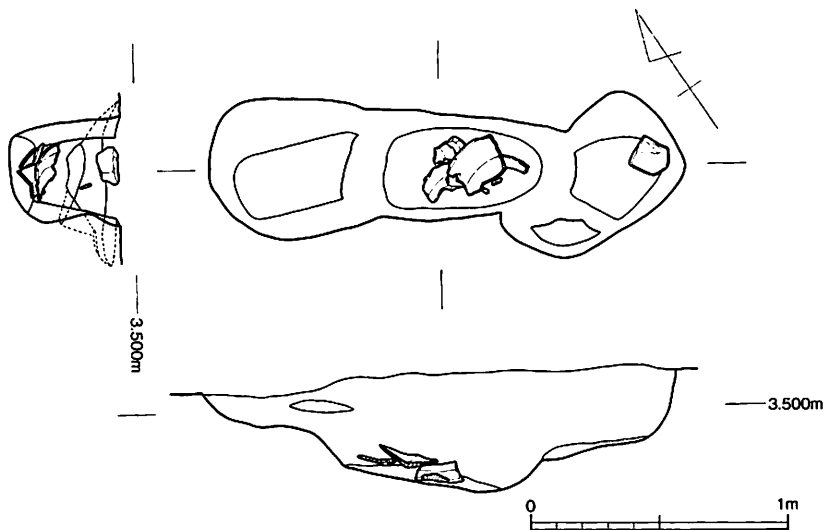
4 - A・B 区に位置し、長径 1.88m、短径 0.42m の規模であるが、実際は3つの小円形土坑が切り合っているものと思われる。深さは一番深いところで 0.48m ほどである。遺構の時期は遺物から判定できないが、方位的にみて 15 ~ 16 世紀後葉代の区画内に収まるものであろう。

15 ~ 16 世紀  
後葉

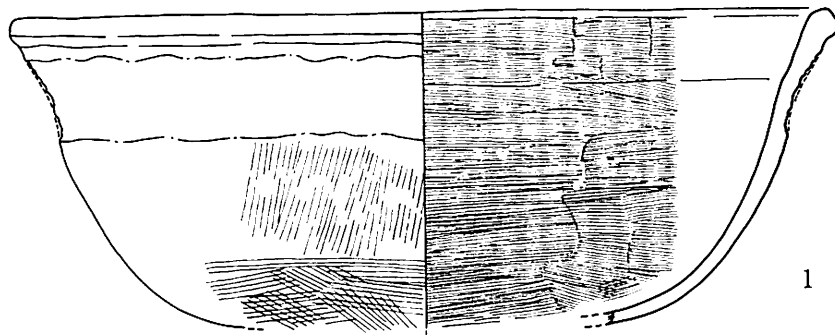
出土遺物 (第2 - 37 図)

1 は瓦質土器の土鍋、2 は円錐形を呈する青銅製品で、用途は不明である。

瓦質土器土鍋



第2 - 36 図 SK030 遺構図 (1/30)



第2 - 37 図 SK030 出土遺物実測図 (1は1/3.2は1/2)

### 3. 井戸

#### SE014 (第2 - 38 図)

5 - B 区に位置する井戸である。当初この井戸の存在は明確に把握できていなかった。第2 - 38 図の位置関係からもわかるように、井戸の大半は溝 SD001 に切られており、わずかに残った円周部分の一画が確認できているのみであった。したがって検出時は土坑の一部か、もしくは SD001 の掘形の一部であろうという認識の元掘り下げを行った。切り合い関係からまず SD001 を掘り下げていったが、SD001 の底面に達したにもかかわらず、この部分はまだ地山が確認できず、その時点で初めてこの遺構は土坑でも溝の一部でもなく、井戸であろうという認識に至った。最終的には標高 1.94m まで掘り下がったところで、水が大量に湧き出したため、それ以上の掘り下げは不可能となった。そのため、遺構実測図では底面の表現がなされていない。確認されている範囲で推定する限り、規模は直径約 2.3 m 前後のものであったろうと思われる。

なお井筒に使用された部材等は出土しておらず、桶枠によるものか、また方形枠を伴う曲物によるものかといった構造については不明である。したがって井戸の形態から時期の認定は不可能であるが、遺構内からは比較的時期的にまとまった資料が出土しており、それらの出土遺物の示す時期から、15 世紀段階のものと考えられる。本調査区では該期の遺構として溝 SD010 等があるが、その区画に伴う遺構である可能性もある。

#### 出土遺物 (第2 - 39 図)

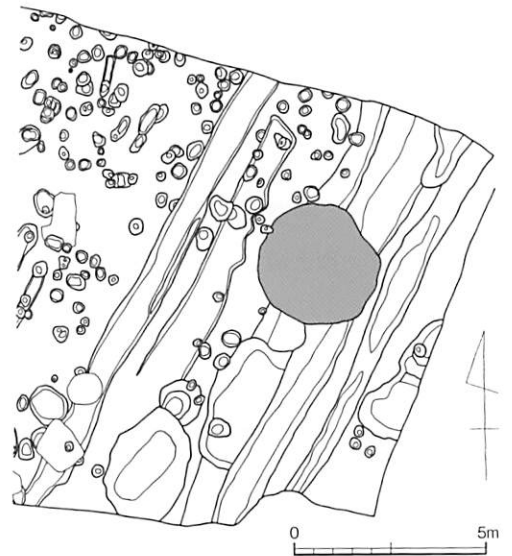
1 ~ 3 は龍泉窯系青磁で、1 は碗の底部破片で、見込は蛇の目釉剥ぎが施され、外面高台内部は輪状に釉が削り取られている。2 は皿の口縁部で、菊花状を呈す。3 は碗の口縁部で、胴部外面には蓮弁文が見られる。蓮弁文は細線化し、幅も狭くなっているが、剣頭と細線が単位を意識して構成されている。したがって上田編年によれば 15 世紀後半代に位置づけられる一群と考えられ、他の 1・2 の碗と皿も同時期に位置づけられよう。4・5 は中国産の白磁で、4 は皿、5 は碗の底部付近の胴部片である。この内 4 の皿はまだ口縁部が外反せず、胴部から内湾気味に立ち上がっている。前述の青磁と共伴するものであろう。

6 ~ 9 はロクロ成形による在地系の土師質土器である。6・8・9 は坏もしくは皿で、7 は小皿である。特に 6 は胴部にロクロ目を残し、底部から口縁部に向かって直線的に外方向に開く。坂本編年で 15 世紀末葉 ~ 16 世紀初頭に比定される資料であろう。

10 ~ 15 は備前系陶器の播鉢である。10 ~ 12 は口縁部が上方に拡張が始まり、口縁部外面下角の垂下が顕著になっている形態から、乗岡編年の中世 4 期に比定されると考えられる。13・14 については、口縁帯が形成される段階で、特に 13 は口縁部端部のナデが強くなり先細りしており、近世 1 期の特徴を示している。この 13・14 の 2 点の資料については、他の遺物の大半が 15 世紀代に位置づけられることを考慮に入れると、隣接して切り合っている 16 世紀後半代の溝 SD001 からの流れ込みと捉えるのが妥当であろう。また、15 の資料については、スリメはナナメスリメであるが、口縁帯がまだ発達しておらず、乗岡編年の中世 3 期に比定されるものと考えられる。

16 は土錘である。以上、SE014 から出土する遺物は、その大半を 15 世紀代のもので占めており遺構の時期もその時期に当てて大過なからう。

SD001 に切られる



第2 - 38 図 SE014 遺構図 (1/200)

15 世紀段階

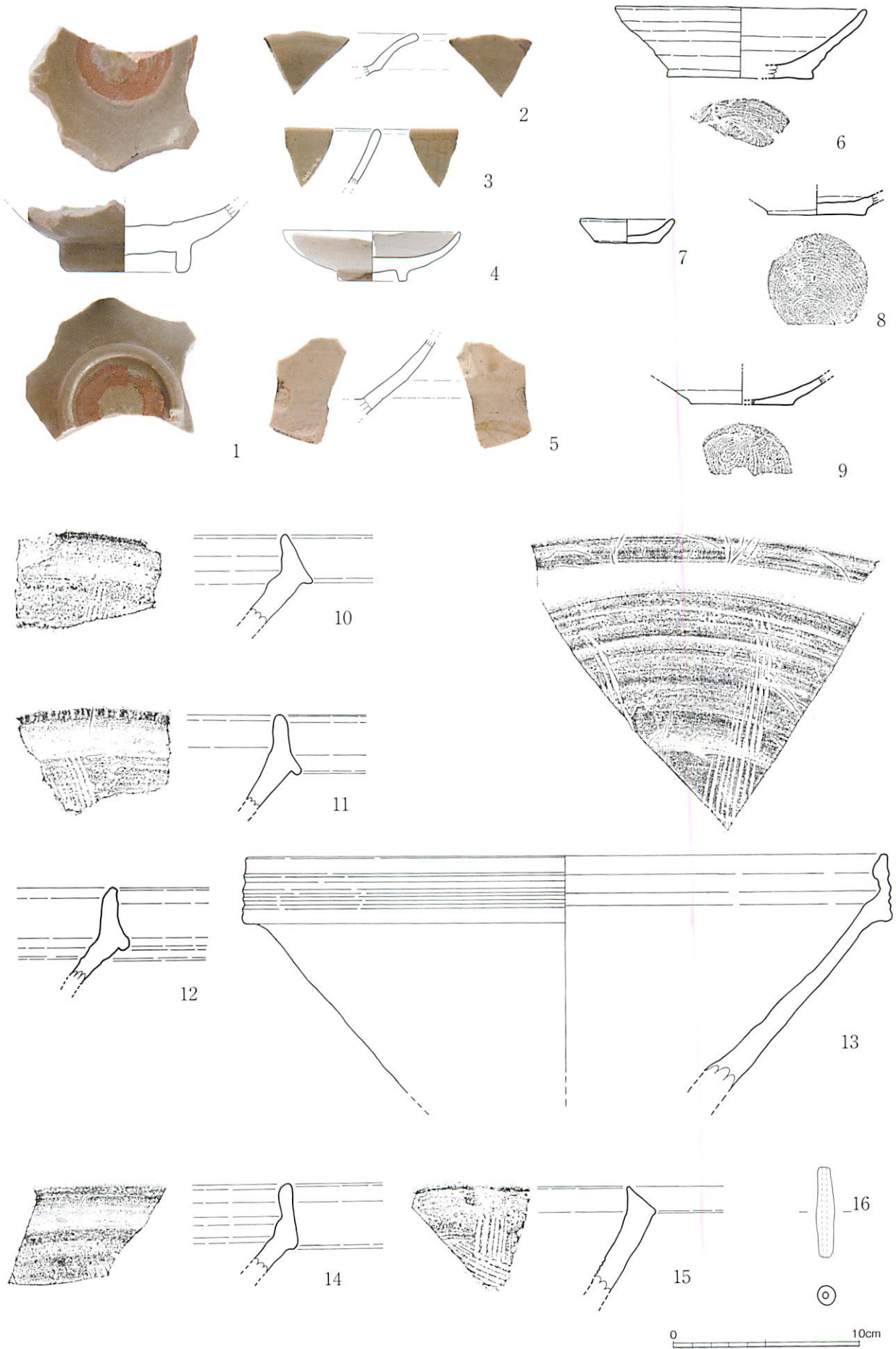
龍泉窯系青磁

中国産白磁

在地系土師質土器

備前系播鉢





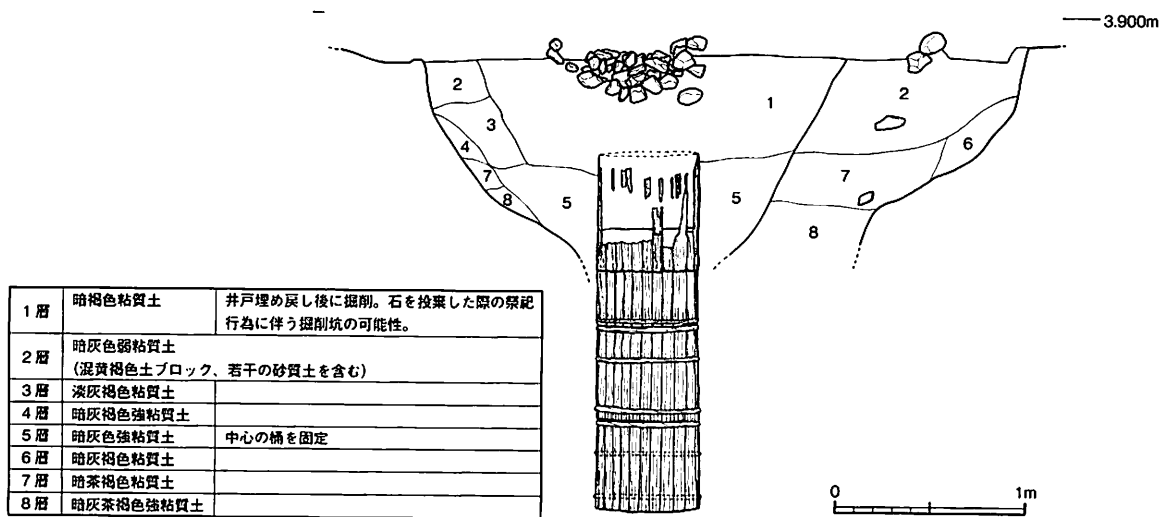
第2-39図 SE014出土遺物実測図(1/3)

SE017 (第2-38図)

4-A・4-B区にまたがって位置する井戸である。井戸の掘形<sup>註1</sup>は直径約3.2mのほぼ円形を呈する。深さは約2.4mを計測したが、途中からかなりの水が湧き出し、検出中の井筒も崩壊するなどの状況となったため、それ以上の掘削は不可能となった。したがって実際の井戸の掘形の深さはまだあると考えられる。ただ、湧水点が現在と当時余り変わっていないならば、深くなってもさほど下がらない可能性もある。井側を構成するのは円形桶側で、底の無い桶を3段重ねた状況が確認された。桶は短冊形の<sup>く</sup>樽板<sup>な</sup>を<sup>が</sup>箍<sup>で</sup>巻いて固定している。土層を確認すると(第2-41図)井戸の



第2-40図 SE017 遺構図 (1/40)

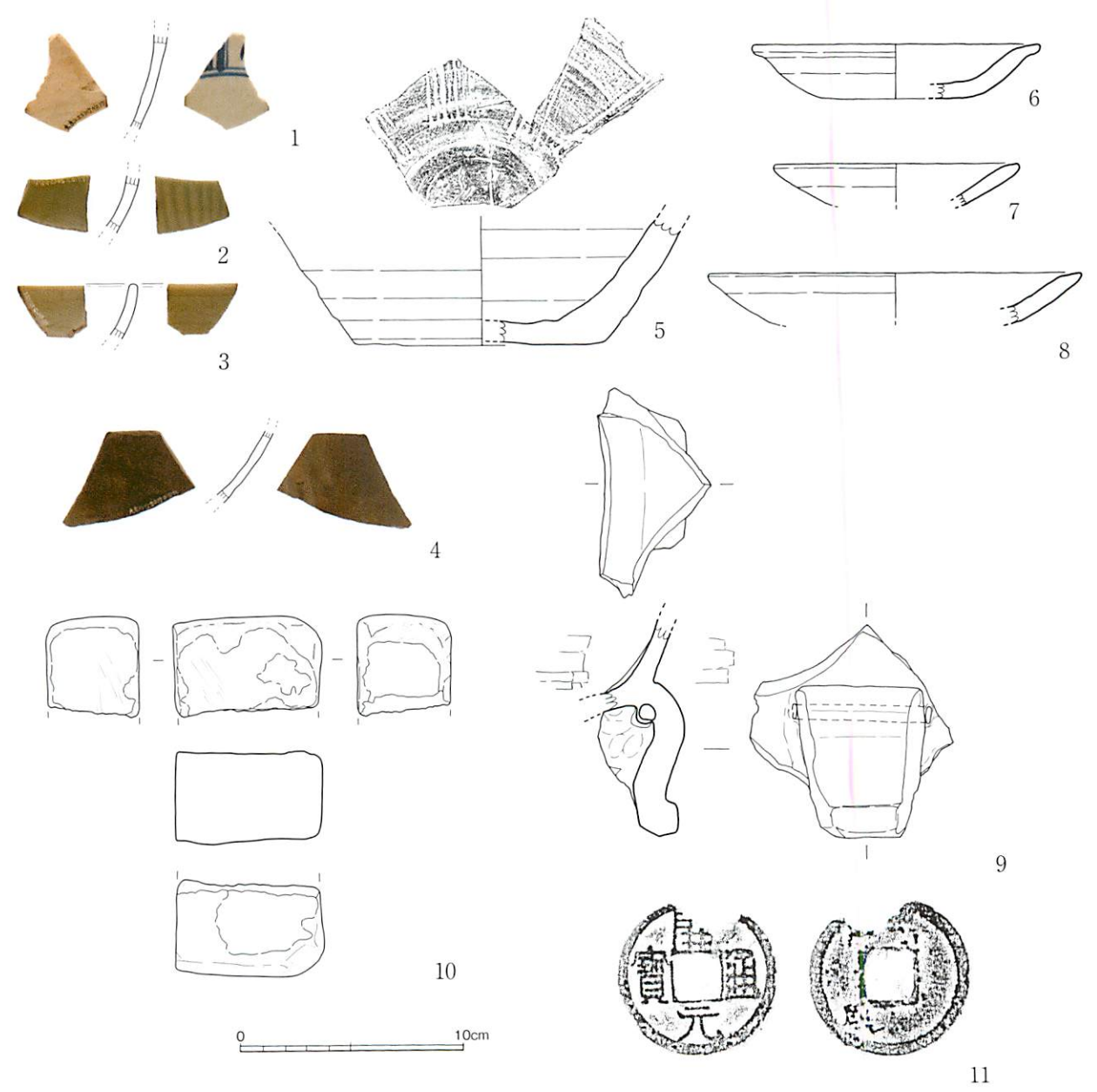


第2-41図 SE017 土層断面図 (1/40)

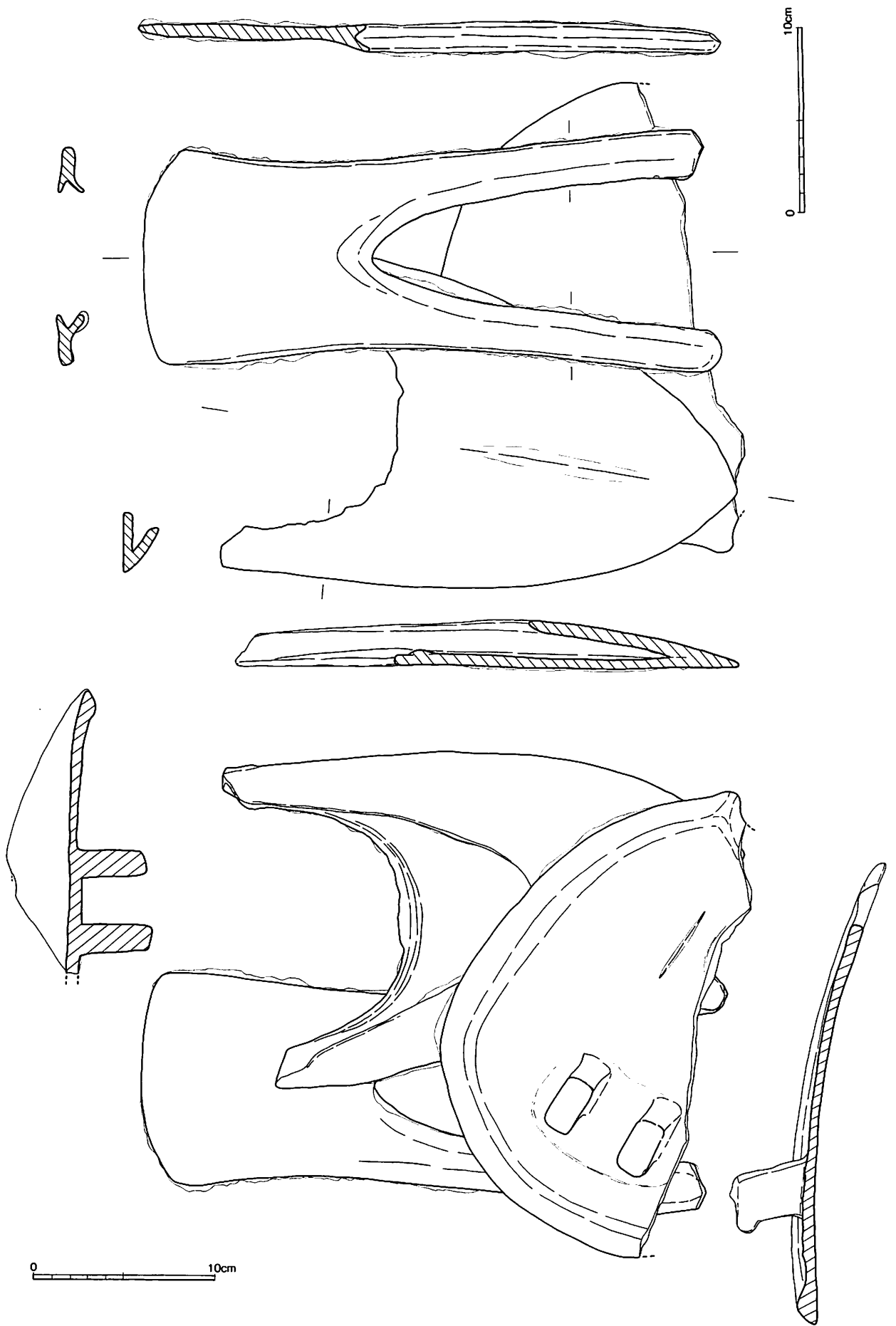
註1 井戸の構造名称は草戸千軒町遺跡発掘調査報告書に準拠する。(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V-中世瀬戸内の集落遺跡-』 1996年)

掘形の中央部、丁度桶側のあたりに新たな掘りこみのラインが確認できる。その新たな掘りこみラインのあたりから上部には、桶側が消失しており、これは桶側が腐食して消失したと考えるよりも、  
 抜き取られた  
 地盤沈下  
 抜き取られたと考えるのが妥当であろう。したがって桶側の付近にみられる新たな掘り込みラインは、井戸廃棄時に桶を抜き取るために掘られた痕跡であると解される。そして抜き取られた部分は、後に地盤沈下の恐れがあったのであろう、かなりの礫が集中して埋められていた。また、このように抜き取りによる掘り返しが行われた結果、井戸の上部構造である井桁部分の痕跡は全く失われてしまっている。中世大友府内町跡で検出される井戸では、これまで井桁の確認がなされておらず、抜き取り行為は比較的通常のことであった可能性がある。

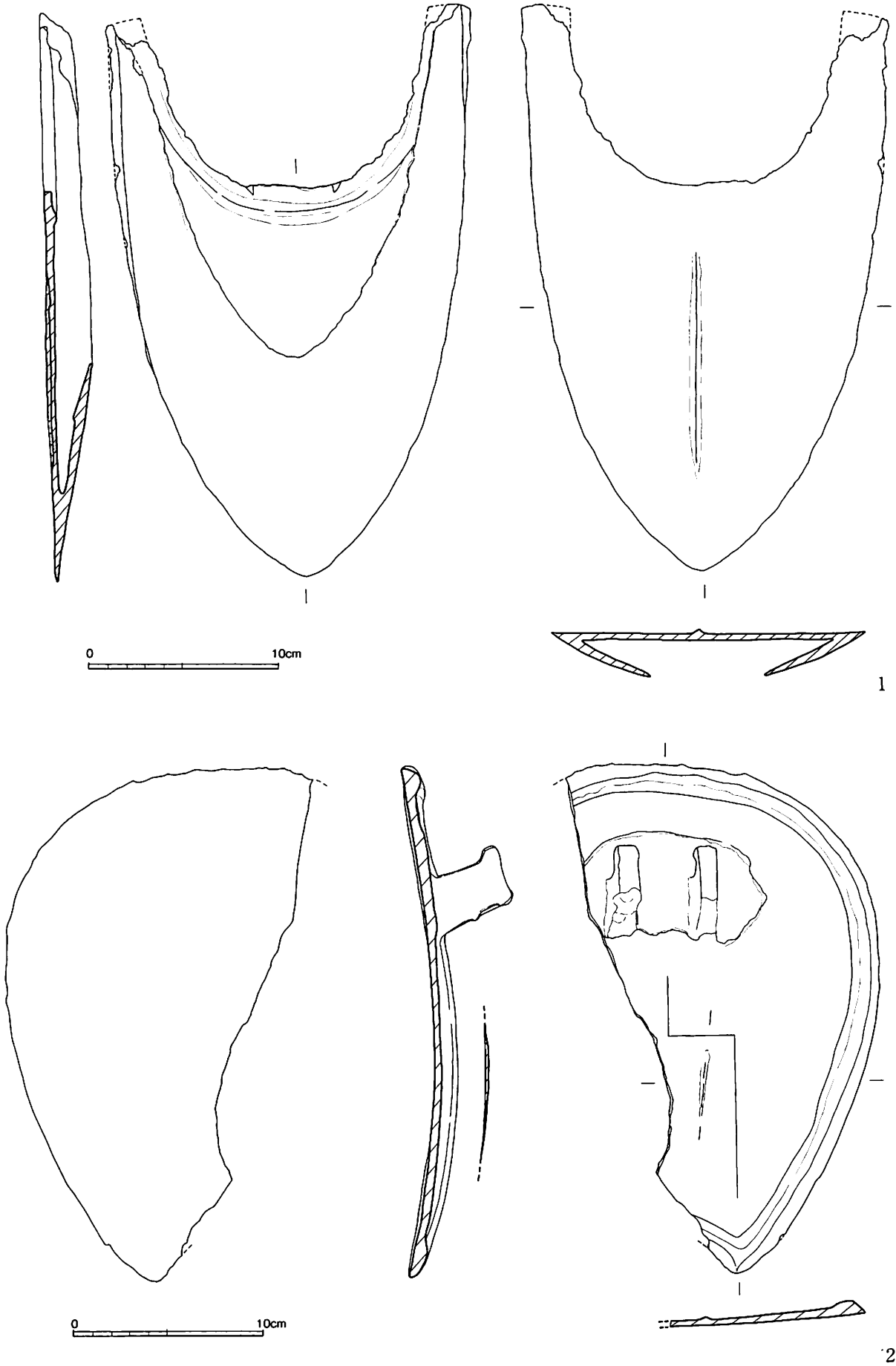
桶側の中及び井戸掘形の中から出土する遺物は、16世紀後半のものが主体を占め、井戸の使用時期及び廃絶期は共に16世紀後葉であろう。中世大友府内町跡で確認される16世紀後半代の井戸は、その大半が桶側によるものであるが、中には石組みのもの、桶側に石組みを組み合わせるもの等がある。本遺構は水が湧き出して、桶側が崩壊してしまったこともあり、最下層の井筒の状況は不明であるが、おそらく最下部から上部まですべて桶を積み上げた構造であったと思われる、こうし



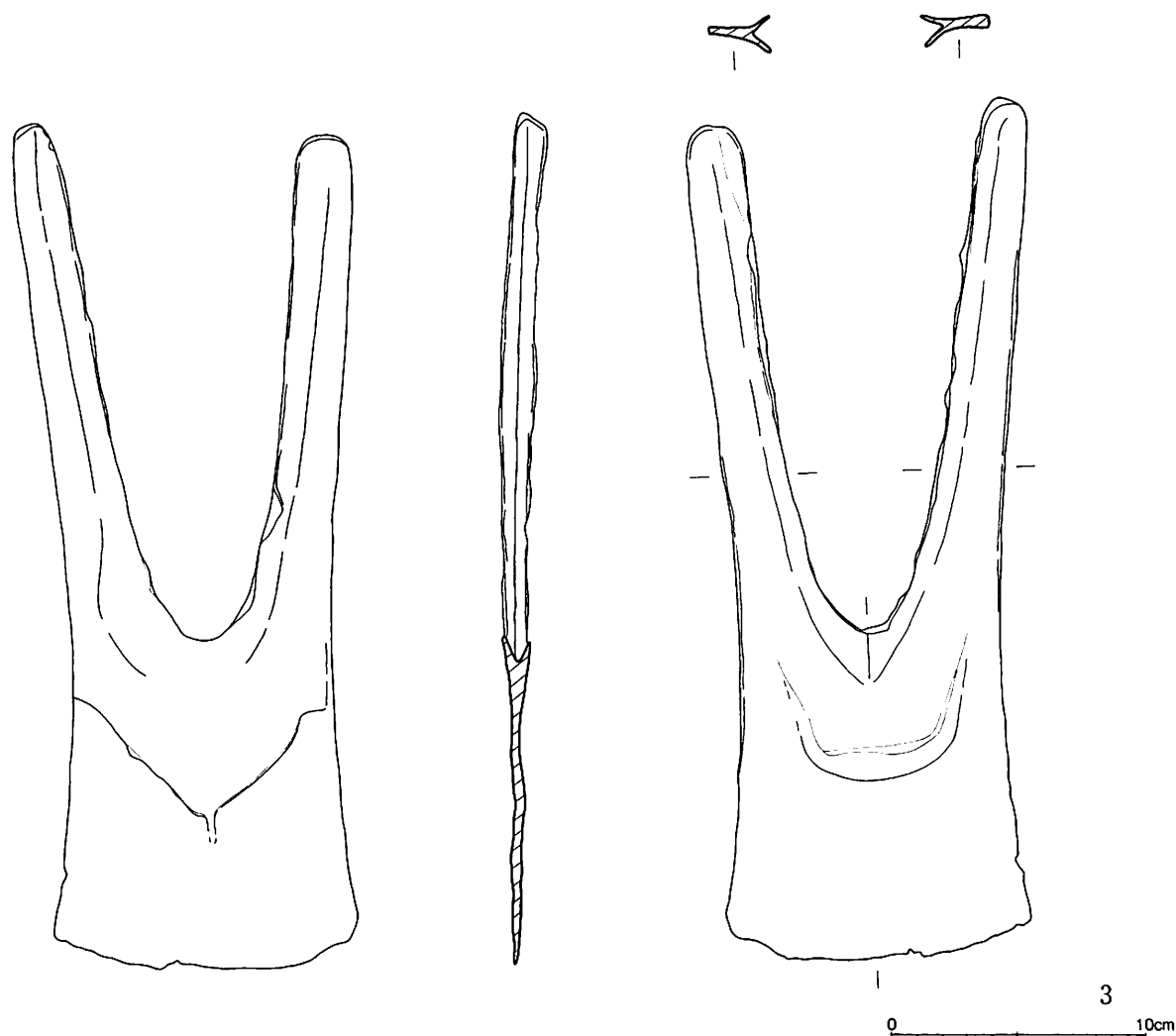
第2-42図 SE017 出土遺物実測図 (1/3) ※11のみ1/1



第2-43図 SE017 鉢・髹先・髹へう出土状況 (1/4)



第2-44図 SE017 出土遺物実測図 (1/3)



第2-45図 SE017 出土遺物実測図 (1/3)

町屋

た構造の井戸は、中世大友府内町跡の町屋によく見られるものである。

道路

また、本井戸と時期的に近い遺構としてSD001がある。府内古図によると、本調査区の北側には東西方向に走る道路が描かれている。そしてその道路に面するように町屋と思われる描写がなされている。この絵図が正しいとすると、本調査区は北側を道路、東側を南北方向に延びる溝SD001に画された町屋の一面である可能性があり、本井戸SE017は北側の道路に面した町屋の裏手に位置するものと考えられる。

町屋の裏手

出土遺物 (第2-39図・第2-43~45図)

景德鎮窯系  
青花

1は景德鎮窯系青花の破片である。表にラマ式蓮弁のような図柄が見られる。瓶の一部か。2・3は龍泉窯系青磁碗である。2は胴部に蓮弁文が施されるが、蓮弁の幅が狭くなっており15世紀後半以降の特徴を示している。3は口縁部外面に二条の界線による文様帯が施される。4は朝鮮王朝産舟徳利である。

龍泉窯系青磁

舟徳利

京都系土師器  
2期

5は備前系陶器の播鉢、6~8は京都系土師器である。京都系土師器は器壁が比較的厚く、口唇部下のナデも明瞭であることから、2期に位置づけられる。9は瓦質土器の火鉢の脚部である。

10は開元通寶で、初鑄年は621年、直径2.4cm、重さ2.1gである。

犁先、犁ヘラ、  
鉄

なお、桶側内の底の方から、鉄製犁が出土した。第2-43図はその出土した際の状況を図に示した。図から判るように、犁先・犁ヘラ・鉄先が3点付着した状況で出土した。第2-44・45図はそれらを切り離し、それぞれを図示している。第2-44図の1は犁の犁先である。一方の面は平らで、もう一方の面は鑄状を呈す。犁床部分にとりつくための袋部分がある。第2-44図の2

すき  
は犁ヘラである。ハート形を呈し上下に若干湾曲している。裏側には2カ所隆起部が設けられ、  
りちゅう  
犁柱に取り付けられる部分であろう。第2-45図の3は鍬である。これは犁とは直接関係ないが、  
犁と共にこの鍬も同時に井筒に放り込まれているところを見ると、何か祭祀的意味合いを有している  
のかもしれない。

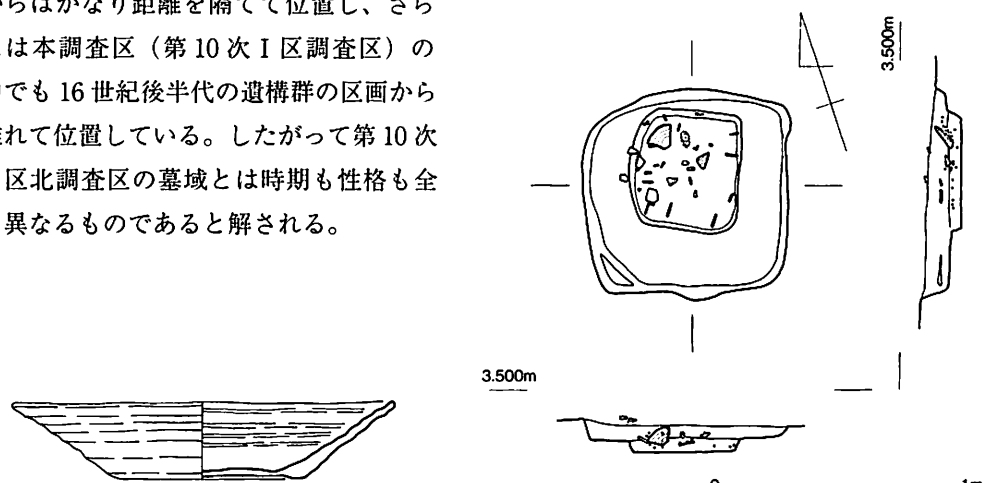
#### 4. 土坑墓

##### ST009 (第2-46図)

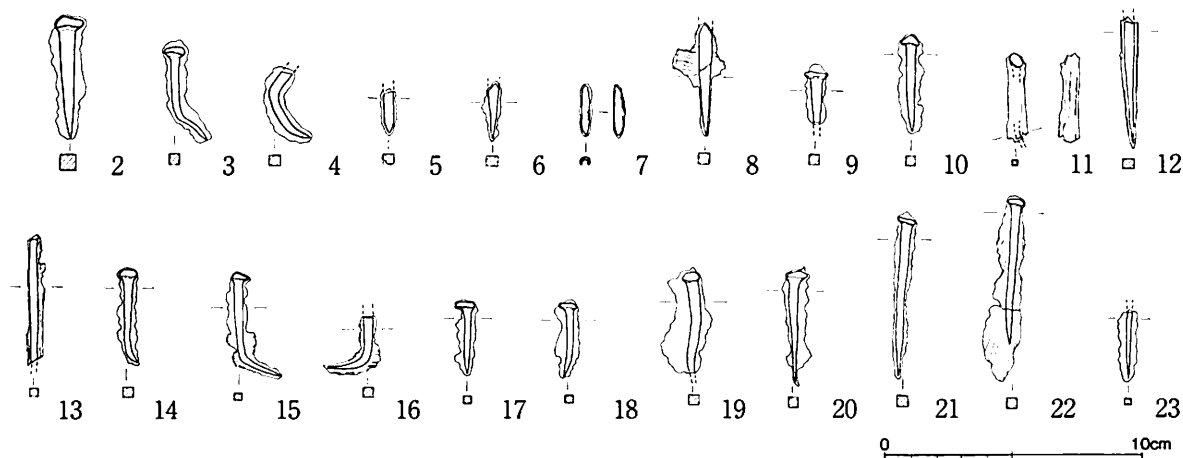
2-B区に位置する土坑墓である。長径0.84m、短径0.81mのほぼ方形の掘形を呈し、掘形内中央部北側よりの部分に、長径0.48m、短径0.42mの方形の棺を納めたと思われる痕跡が認められる。棺部分の深さは0.14m程しか無く、上部はかなりの削平を受けているものと思われる。この棺部分の中から大量の釘と土師質土器等が出土している。骨片は確認できているが、残りはさほどよくなく埋葬方法の詳細は不明である。棺のサイズからして座棺か小児墓であった可能性が考えられる。この内小児墓については、北西に隣接して位置する第10次II区北調査区(本報告書第4章)において、数多く検出されている。しかしそれらの一群は16世紀後半が主体となっているのに対して、本土坑墓ST009は出土する土師質土器の形態から15世紀代に遡る可能性が高い。また第10次II区北調査区小児墓群は比較的まとまって検出されているのに比べ、ST009はその一群からはかなり距離を隔てて位置し、さらには本調査区(第10次I区調査区)の中でも16世紀後半代の遺構群の区画から離れて位置している。したがって第10次II区北調査区の墓域とは時期も性格も全く異なるものであると解される。

釘

15世紀代



第2-46図 ST009遺構図(1/30)



第2-47図 ST009出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第2 - 47 図）

胎土が白色

1 は薄手の器壁で、内外面にロクロ目を顕著に残す土師質土器皿である。胎土は白色を呈し在地のものとは異なる。15 世紀後半代に位置づけられる。2～23 は鉄製の釘である。棺に使用されていたものであろう。

5. 包含層・ピット

遺構空閑地

包含層・ピットから出土した遺物をここでは一括して掲載する。包含層出土遺物は調査区西側からグリッド毎に取上げを行った。一番西側の1 - B 区は調査の端わずかな部分で、中世の遺物が出土している。続いて東側へ順に2 - B 区も中世の遺物が中心に出土している。3 - B 区は本調査区において遺構空閑地になっている部分で、中世の遺物の出土は少ない。ここでは縄文土器や古墳時代の土器等が出土している。4 - A・B 区は遺構が最も集中するエリアで、中世の遺物がかなり出土している。本項で掲載した遺物は4 - A 区出土の縄文土器を除いて、すべてピットから出土したものでいずれも中世のものである。ただ、本調査区における大きな时期的な画期は、他の土坑や溝から見る限り、15 世紀代と16 世紀後半代であるが、出土する遺物から、各ピットがそのいずれの画期に相当するものかは認定しがたい。本調査区東端に位置する5 - A・B 区においても中世の遺物が中心となって出土するが、土錘が比較的まとまって出土しているのが特徴的である。また、古代の土師質土器が出土しているが、本調査区の東側に隣接してある第10次Ⅱ区南調査区において、古代の包含層が確認されている。この包含層が部分的に本調査区まで広がっている可能性もある。

第10次Ⅱ区南調査区

出土遺物（第2 - 48 図・第2 - 49 図）

龍泉窯系青磁

1 は4 - B 区のピット内（P59）から出土した。龍泉窯系青磁皿で胴部は稜をもって口縁部に向かってゆるやかに外反する。15 世紀代の所産か。2 は1 - B 区から出土した、中国産天目碗の高台部である。3 は1 - B 区から出土した備前系陶器播鉢で、口縁部が立ち上がって口縁帯ができあがっている。しかし口縁部外面の凹線が未発達である。またスリメもまだナナメスリメではなく、乗岡編年の中世5 期に該当するものと考えられる。

備前系陶器

在地系土師質土器

4 は4 - A 区のピット内（P02）から出土した在地系の土師質土器小皿である。口縁部が外傾して広がり、坂本編年で15 世紀末葉～16 世紀初頭に位置づけられるものと考えられる。5 は1 - B 区から出土した在地系土師質土器の皿である。口唇部にススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと考えられる。胴部から口縁部に向けて外に開くように立ち上がり、内面にはロクロ成形痕が顕著に残る。坂本編年の15 世紀末葉～16 世紀前葉に位置づけられるものと考えられる。6 は一括資料で在地系土師質土器の耳皿である。7 は、5 - B 区のピット内（P10）から出土した在地系土師質土器で、上部皿部分の中央部から底部まで孔が貫通しており燭台である。8 は5 - B 区から出土した瓦質土器火鉢の脚部である。脚部の下方向からと脚部上部横方向に穿孔が認められる。

瓦質土器

土錘

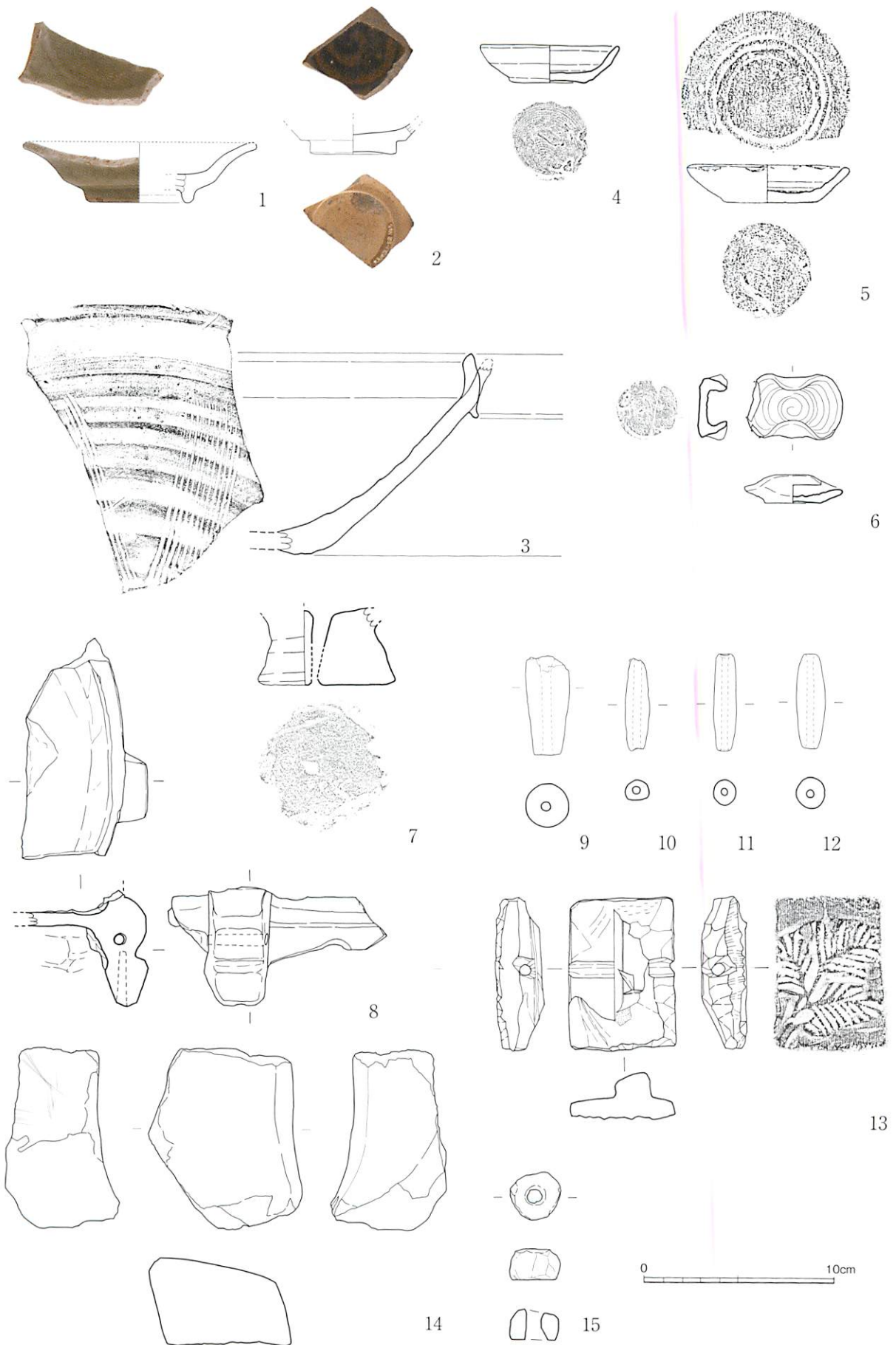
9～12 は土錘である。9（2 - B 区出土）を除きすべて、5 - B 区からの出土である。土錘については本調査区の西側に位置する上野遺跡でまとまった資料が検出されており<sup>註1</sup>、本調査区一帯では土錘の出土が比較的顕著である。13 は4 - B 区のピット内（P001）から出土した滑石製のスタンプである。上部のつまみ部分と目される所では、横方向の穿孔がなされており、紐等を通していたのであろうか。またスタンプ面では、木の葉状の模様が陽刻されており、粘土等の何か柔らかいものに押しつけて模様を映し込んだのではなかろうか。14 は4 - B 区のピット（P056）から出土した砥石である。石材は砂岩と思われる。15 は3 - B 区のピット内（P010）から出土した環状の石製品である。軽石できており、用途は不明である。16 は前述の砥石と共に4 - B 区のピット（P056）から出土した埴である。17 は4 - B 区のピット内（P033）から出土した銅銭であ

砥石

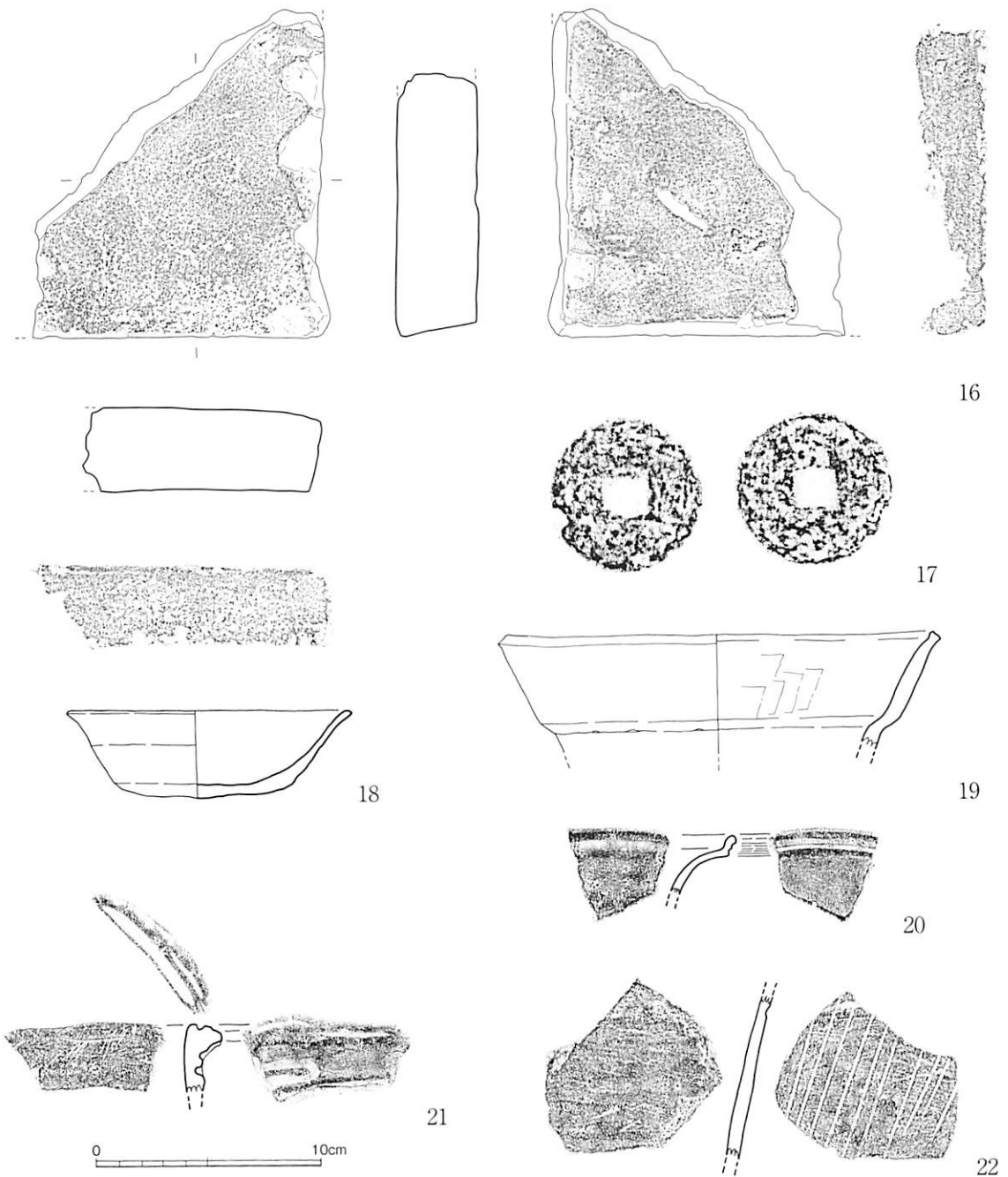
埴

註1 【上野町遺跡・顕徳寺遺跡】（大分県文化財調査報告164）2004. 大分県教育委員会





第2-48図 包含層・ピット 出土遺物実測図 (1/3)



第2-49図 包含層・ピット 出土遺物実測図 (1/3) ※17のみ1/1

るが、腐食が激しく表面の文字は確認できない。またピット内から出土した銅銭という点においては、地鎮の意味があるのかもしれない。

18～22においては、中世の遺物ではない。18は5-A区から出土した古代の土師器碗で、東に隣接する第10次Ⅱ区南調査区の古代包含層がここまで広がっていた可能性がある。19は古墳時代前期 3-B区から出土した古墳時代前期の甕の口縁部である。20は4-A区から出土した縄文土器で後期末～晩期初頭の浅鉢である。21は3-B区から出土した縄文土器で口唇部及び口縁部直下に太めの沈線を施す。後期鐘崎式である。22は3-B区から出土した縄文時代前期曾畑式の深鉢で、胴部外面に沈線文が施される。

### 第3節 小結

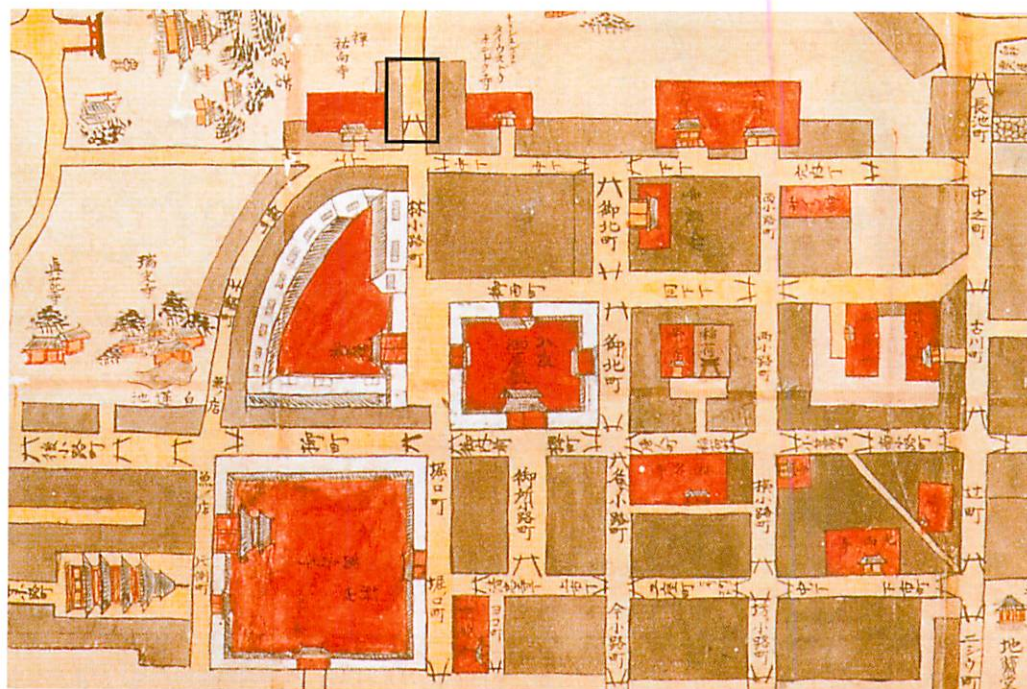
以上第10次調査区I区については、大きく2つの画期が認められた。一つは15世紀代・もう一つは16世紀後半代である。最後にこの2つの画期について今一度整理し、本調査区の性格についてまとめておきたい。本調査区の具体的イメージを得ることのできる「府内古図」との兼ね合いから、新しい順に見ていきたいと思う。

#### 第1画期（16世紀後葉代）

大友義統治世 近年の発掘調査成果により、府内古図の描写する時期は、大友宗麟の息子である大友義統治世段階  
天正元年 における府内の姿であることが分かってきた。大友義統が宗麟より家督を継ぐのは1573年(天正元年)のことであり、したがって本調査区で得られた一つの画期である16世紀後葉代とは、まさしくこの府内古図が描いた世界である。そこで、府内古図の描写と本調査区の位置関係を照らし合わせてみると、第2-50図の□で囲った部分が該当すると考えられる。当初は、試掘により土坑墓や五輪塔の出土したことから、府内古図に描かれている「祐向寺」との関係が明らかにされると考えられていた。ところが土坑墓は15世紀代のものであり、府内古図の世界とは時期が異なる。そこで府内古図を今一度よく見てみると、祐向寺の北側には町屋の描写があることが看取される。

本調査区で明確に16世紀後葉代と認定できる遺構を拾ったのが第2-51図(赤色の部分)である。これを見ると東側に溝SD001が南北方向に延びており、それと方位を同じくして(あるいは同じ方位を意識して)16世紀後葉代の遺構が展開していることが窺われる。遺構の内訳は、廃棄土坑、井戸、ピットである。こうした遺構の構成は、中世大友府内町跡においては町屋の裏手でみられる一般的光景である。これらの遺構の北側にはピット群があり、さらに第3章で触れるが、本調査区の東側に隣接して位置する第10次II区南調査区においては、府内古図で描かれているものと考えられる東西方向の道路を検出されており、この延長部は本調査区の北側に位置するものと想定される。したがって、本調査区で検出された遺構の配置は、北側に延びてきていると想定される道路に面した町屋の裏手を示しており、特にその裏手の部分が検出されているものと考えられる。

また、遺構が集中して分布するのは本調査区の中央部付近で終わり、それより西側では遺構が希薄になる。16世紀後葉代の遺構に関してみれば、ほとんど認められない。したがってこの部分が町屋の終端部



第2-50図 府内古図 C類

第2画期（15世紀代）

15世紀代から  
同じ方向性  
土坑墓 ST009  
府内古図A～  
C類

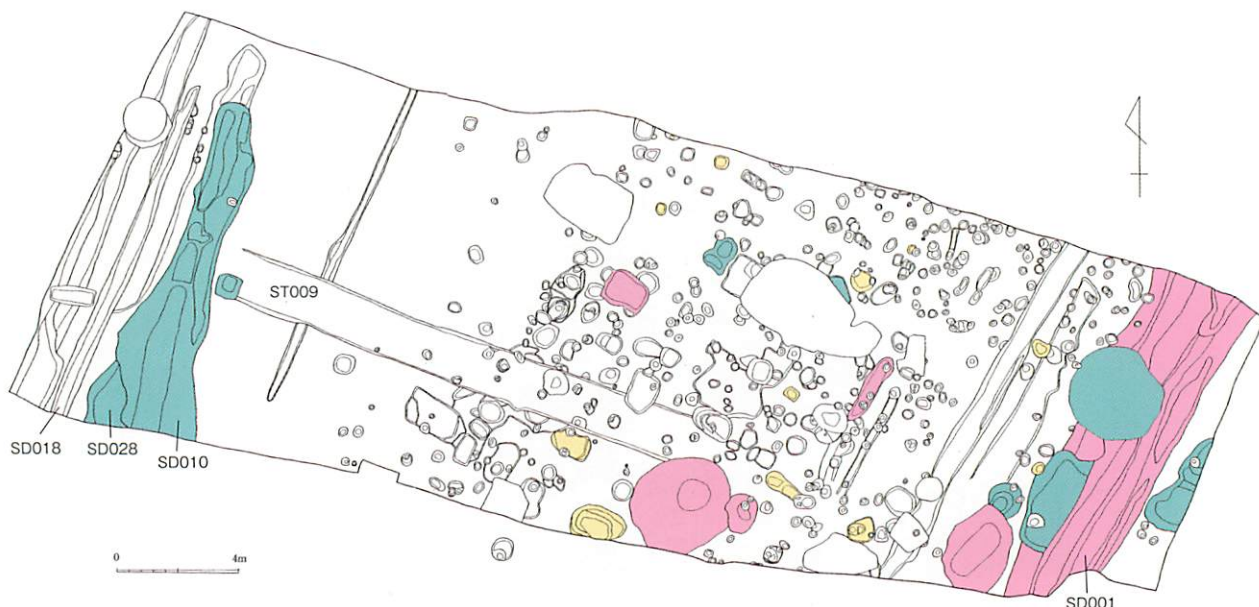
この画期の遺構は、16世紀後葉代とは異なって本調査区内全体に点在している（第2-51図の青色の部分は、15世紀代の遺構。黄色の部分は15世紀～16世紀の範疇で位置づけられる遺構）。ただ、西側隅で検出された溝はその方位が、16世紀後半代の溝と同じであり、15世紀代から同じ方向性をもった空間認識が存在していたことを想定させる。この画期で注目すべき遺構は土坑墓 ST009 である。当初はこの遺構の存在から、府内古図に描かれる祐向寺との関係が注目されていた（府内古図には大きくA類～C類までであるが<sup>註1</sup>、いずれにも「祐向寺」は記載されている）。ただ前述のように府内古図の描写が16世紀後半の世界であることから、直接両者に関連性を求めるのは難しい。

墓域

また土坑墓 ST009 と他の15世紀代の遺構との関連を見てみると、まず土坑墓 ST009 のすぐ西側に溝 SD010・SD028 が存在する。この内 SD010 とは非常に至近距離にあるが、前述のように上部がかなり削平されている可能性があるため、したがって両者は併存していない可能性が高い。SD028 については、これがもし SD010 と別の溝であれば併存しているかもしれない。また、その他の遺構については、明確に同時期であろうとされる遺構が ST009 のそばにはほとんど認められず、かなり距離を隔てて東側に土坑や井戸が認められる。したがってこの土坑墓 ST009 は居住空間とは異なった区画に存在していたと考えられる。ではこの ST009 の周囲一帯が、ある時期墓域だったのかということになると、他に墓が見つからない以上立証のしようがない。ただ前述のようにすぐ西側に隣接している溝 SD010・SD028、さらにはそれらの西側に存在する SD018（出土遺物が希少なため時期は不明）等が、この土坑墓 ST009 よりも新しく、その造成に伴って他の墓群が消失したとするならば、ある時期の墓域の存在を想定することも可能であろう。

五輪塔

なおこの祐向寺がいつから、いつまで存在したかは現時点では文献上の記録もなく不明である。もし開山が15世紀代以前まで遡れば本調査区と全く関係ないともいえない。そうした場合、土坑墓の存在や試掘時に検出された五輪塔等も、祐向寺の関連のものである可能性は十分にある。今後周囲の発掘調査等が行われて祐向寺の存在が明確になってくれば、解明されていくであろう。



第2-51図 時期別遺構分布図（1/500）

註1 府内古図の分類については、木村幾多郎氏の分類に準拠する。（木村幾多郎「府内と府内古図」（『南蛮都市・豊後府内』大分市教育委員会・中世都市研究会編）2001年）

## 第3章

### 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区

#### 第1節 調査の経緯

中世大友府内町跡第10次Ⅱ区南調査区は大分県大分市上野六坊北町に所在し、標高約3.5mの沖積低地上に立地する。本調査は、大分駅周辺総合整備事業に伴い大分県教育委員会が2000年に試掘調査を実施、翌2001年7月から2002年3月までかけて本調査を実施した。

第5次調査区  
A区  
SD431  
SD116～118

本調査区の東側には、第5次調査区A区が隣接して位置しており、当初は調査区西端部で検出された溝SD431の延長部が検出されるのではないかと想定されていた。そして実際、第10次Ⅱ区南調査区で、方位的には符合しそうな溝が東西方向で検出された（SD116～118）。ところが本調査区の溝の時期は16世紀後半が主体となっているのに対し、第5次調査区A区で検出された溝SD431は15世紀後葉と位置づけられており、同一のものではないことが判明した。また、溝の時期に注目すれば、第5次調査区A区のSD101・SD103等が方位的に関係ありそうであるが、第10次Ⅱ区南調査区の溝（SD116～118）に比べると規模がかなり違うために、一連のものとするには無理がありそうである。したがって本調査区は、隣接する第5次調査区A区とは別に区画を有して、遺構群が展開しているとみなした方がよさそうである。

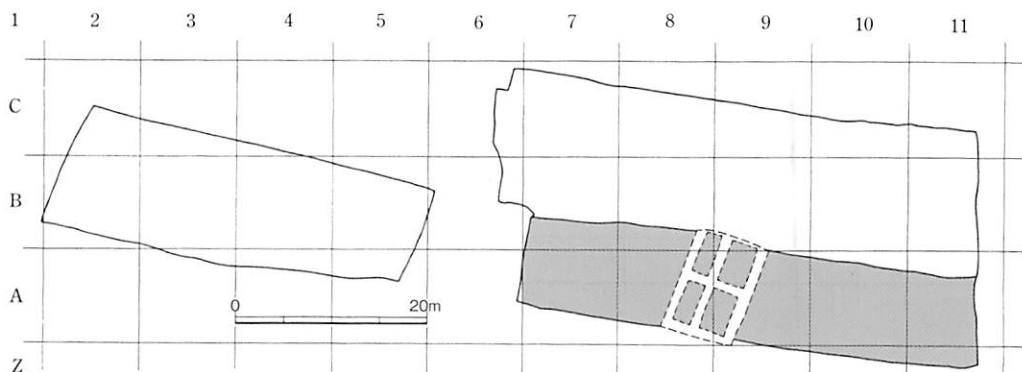
ダイウス堂  
キリシタン墓  
祐向寺

また「府内古図」によれば、南側に「祐向寺」、北側には「ダイウス堂」が存在したとされる場所に位置する。北側のダイウス堂については、本調査区の北側に隣接して位置する第10次Ⅱ区北調査区で、キリシタン墓と思われる木棺墓が見つかるなど、府内古図の描写と符合する状況が現れてきている。一方南側の祐向寺については、その存在を証拠づけるような遺物や遺構が、本調査区では確認できなかった。本報告書第2章の第10次Ⅰ区調査区でも触れたように、府内古図ではこの祐向寺の北側には町屋の描写がなされており、実際はその町屋部分に調査区があたっている可能性が高いと思われる。また、さらに注目すべき点は、府内古図で祐向寺・町屋とダイウス堂との間に東西方向に延びる道路が描かれている点である。本調査区及び北側に隣接する第10次Ⅱ区北調査区では、その道路と思われる遺構が検出された。

東西方向の道路

国土座標

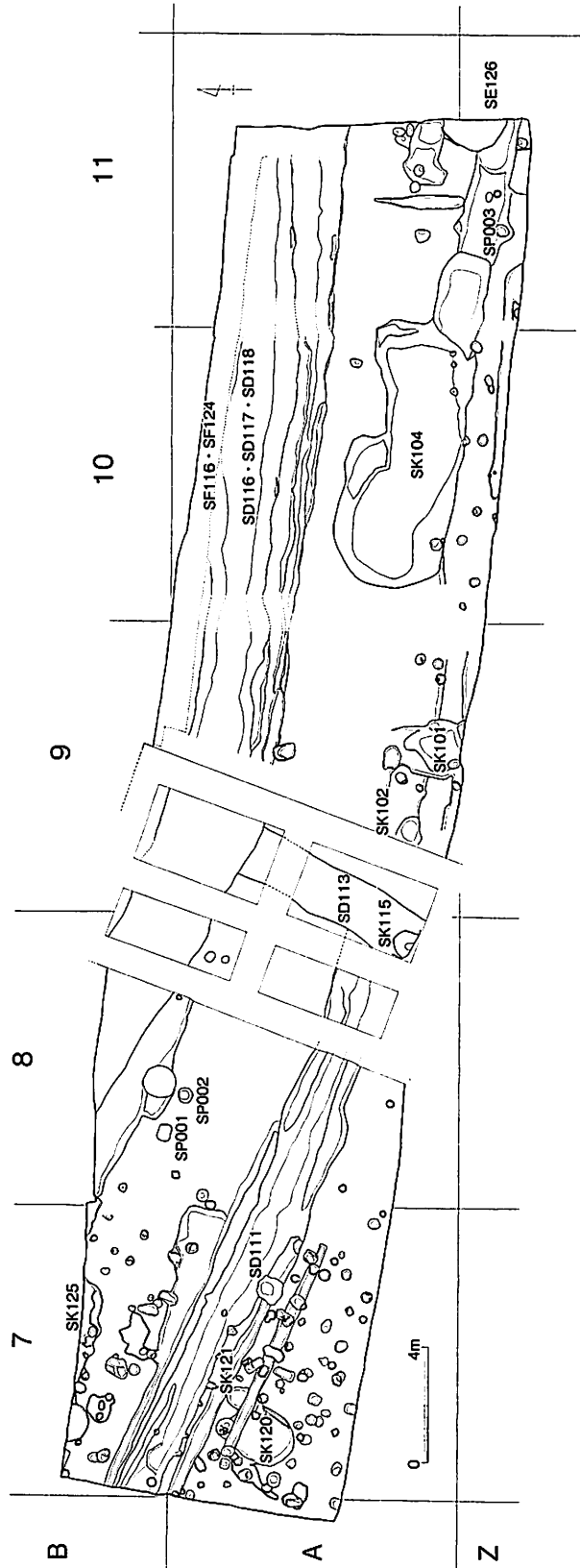
なお、中世大友府内町跡府内町跡第10次Ⅱ区南調査区においては、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へ1～11、北から南へC・B・A・Zのアルファベットを付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている。本章で報告する第10次Ⅱ区南調査区については、東西6～11区、南北B・A・Z区、の位置に相当する（第3-1図）。



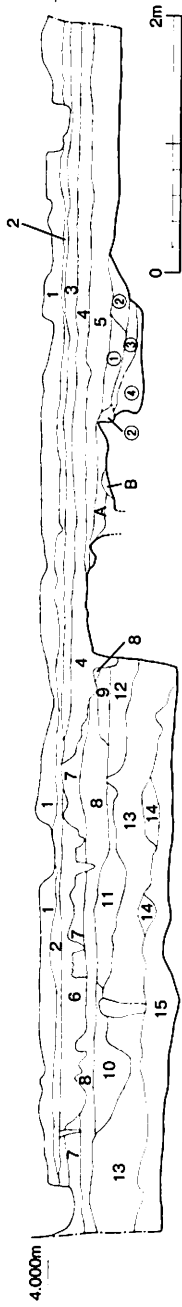
第3-1図 第10次Ⅱ区南調査区遺構分布図 (1/800)

第3-1表 中世大友府内町跡 第10次Ⅱ区南調査区遺構一覧

遺構番号	旧遺構番号	遺構の位置	遺構の性格	遺構の時期	備考	掲載頁
S126	SE126	11A・11Z区	井戸	14世紀初頭	龍泉窯系青磁碗(選弁文)	80
S113	SD113	9A区・基礎3・基礎4	溝	15世紀末葉～16世紀初頭	龍泉窯系青磁碗(選弁文)・在地系土師質土器皿・土師質土器(焼塩壺の蓋)・瓦質土器(火鉢)	57
S101	SK101	9A・9Z区	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器皿	70
S120	SK120	7A区	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	備前系陶器播鉢(中世6期)・在地系土師質土器小皿	76
S121	SK121	7A区	土坑	15世紀末葉～16世紀初頭	備前系陶器播鉢(中世6期)・在地系土師質土器小皿	76
11Z区P01	SP003	11Z区	Pit	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器皿	78
S111	SD111	7A・7B・8A区	溝	16世紀後葉	景德鎮窯系青花・青磁、白磁、肥前系陶器・備前系陶器・京都系土師器・土錘・紙石	55
S116	SD116	8B・8A・9A・10A・11A区・基礎1・基礎3	溝	16世紀後葉	景德鎮窯系青花皿(E群)・龍泉窯系青磁壺・中国産陶器壺・中国産白磁皿(E群)・景德鎮窯系白磁(饅頭心)・備前系陶器播鉢(近世1期)・京都系土師器皿(2期)・在地系土師質土器(皿・小皿)・瓦質土器(火鉢)・土錘	61
S116(道路)	SD116(道路)	9A・10A・11A区	石敷道路	16世紀後葉		61
S117	SD117	8B・8A・9A・10A・11A区・基礎1・基礎3	溝	16世紀後葉	中国産白磁皿(口弁付)・景德鎮窯系青磁皿・備前系陶器播鉢(近世1期)・京都系土師器皿(2期)・在地系土師質土器皿・瓦質土器(角火鉢・鉢)・土師質土器燗台・茶臼・土錘・青銅製品・宝篋印塔・水菜通寶	62
S118	SD118	8B・8A・9A・10A・11A区・基礎1・基礎3	溝	16世紀後葉	景德鎮窯系青花碗(E群)・龍泉窯系青磁碗(選弁文・印花文)・中国産陶器壺・中国産白磁(皿・壺)・産地不明陶器碗(朝鮮産?)・備前系陶器(壺・播鉢・火鉢)・京都系土師器・土師質土器燗台・瓦質土器鉢・土錘・木器(漆器碗・折敷・下駄)・軒丸瓦・洪武通寶	64
S102	SK102	9A区	土坑	16世紀後葉	京都系土師器(2期)	71
S103	SK103	9A区	土坑	16世紀後葉	在地系土師質土器皿・瓦質土器茶釜(SD116・SD117・SD118で出土した破片と接合)	71
S104	SK104	10A・10Z・11A・11Z区	土坑	16世紀後葉	景德鎮窯系青花壺(唐草文・ラマ式選弁を描いたSD111(第3-5図の1)・包含層(8-A区・10-A区第3-42図の2・3)出土遺物と同一個体)・景德鎮窯系青花皿(F群)・中国産白磁碗・龍泉窯系青磁・備前系陶器(壺・播鉢)・京都系土師器皿(2期)・土師質土器燗台・在地系土師質土器皿・六連式焼塩用製塩土器・瓦質土器(香炉)・土錘・陶の羽口・青銅製弁・石臼・平瓦	72
S115	SK115	8A区	土坑?	16世紀後葉	京都系土師器(2期)・瓦質土器火鉢	76
S125	SK125	7B区	土坑	16世紀後葉	京都系土師器皿(2期)	77
SB01	SB01	7A区	建物	16世紀後葉?		79
8B区P01	SP001	8B区	柱穴	16世紀後葉?		78
8A区P02	SP002	8A区	柱穴	16世紀後葉?		78

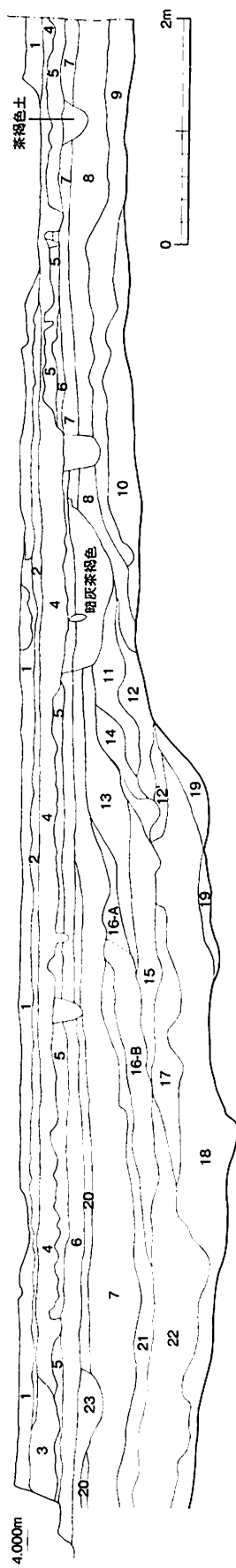


第3-2图 第10次Ⅱ区南調査区遺構分布图 (1/250)



1層	暗灰色粘質土	
2層	黄褐色粘質土	礫土
3層	灰褐色弱粘質土	マンガン粒多く含む
4層	灰褐色弱粘質土	マンガン粒少量含む
5層	灰褐色弱粘質土	マンガン粒多く含む
6層	黒褐色弱粘質土	炭・焼土を含む
7層	黄褐色粘質土	
8層	淡灰褐色粘質土	
9層	黄褐色土	
10層	暗褐色土	マンガンをほとんど含まない
11層	暗褐色土	マンガン粒を若干含む
12層	暗黄褐色土	マンガン粒多く含む
13層	灰褐色土	マンガン粒を若干含む
14層	暗褐色砂質土	

①層	暗褐色弱粘質土	焼土粒を若干含む
②層	暗灰褐色弱粘質土	焼土粒を若干含む
③層	暗褐色粘質土	
④層	暗灰褐色粘質土	
A層	灰褐色土	
B層	暗灰褐色土	



1層	暗灰色粘質土	
2層	黄褐色粘質土	
3層	灰褐色粘質土	礫土
4層	黒褐色弱粘質土	炭・焼土を含む
5層	黄褐色粘質土	
6層	明黄褐色土	
7層	淡灰褐色粘質土	マンガンを若干含む
8層	灰褐色土	
9層	褐色土	
10層	暗茶褐色砂質土	
11層	暗灰色粘質土	黄褐色土ブロックを含む
12層	明茶褐色粘砂土	鉄分を多く含む
12'層	明茶褐色粘砂土	鉄分を多く含む、粘性若干強い
7A・B区1層		
7A・B区2層		
7A・B区6層		
7A・B区7層		
7A・B区8層		
7A・B区13層		
7A・B区15層		

13層	明灰褐色粘砂土	
14層	暗灰褐色粘砂土	
15層	暗灰褐色粘砂土	
16層A	暗灰色粘砂土	黄褐色土ブロックを含む
16層B	暗灰色粘砂土	黄褐色土ブロックを含む、色調やや暗い
17層	明灰褐色粘砂土	
18層	明灰褐色粘質土	
19層	明灰褐色粘質土	
20層	赤褐色粘質土	
21層	灰褐色粘質土	
22層	黒灰色粘質土	
23層	灰白色土	

第3-3図 第10次Ⅱ区南調査区土層図 (1/60)



## 第2節 遺構と遺物

### 1. 溝

#### SD111 (第3-4図)

本調査区の西側7A区・7B区・8A区にわたって確認された。確認できた長さは16.6m、幅2.1mほどである。溝の東側はマンションの基礎部分が残っている関係でそこで分断され、その先は調査区の南に出て行ってしまふと思われる。溝の西側は調査区を越えてさらに延びていくと考えられるが、その延びた先には第10次Ⅰ区調査区があり、そこではこの溝SD111は確認できていない。方位的には、W-25°-Nと約25°北に振っており、第10次Ⅰ区調査区で検出されたSD001がW-30°-Nであるため、わずかにずれるものの直交する可能性がある。もし直交するのであれば、第10次Ⅰ区調査区のすぐ北側外で直角に折れてSD001に連結するか、もしくはSD001の手前で終わっている可能性もある。第10次Ⅰ区調査区のSD001は16世紀後葉代のものと考えられているが、溝SD111も出土する遺物からほぼ同じくらいの時期に位置づけられるため、両者は併存していても問題はない。

ところでSD111の方位は前述のように、W-30°-Nと約30°北に振っているが、この軸は中世大友府内町跡では特異な方位である。坂本氏によれば16世紀後半は中世大友府内町跡の町造りは、一般にN-4°-E(東西方向で言えばW-4°-N)と4°振った方位で行われているとされている<sup>註1</sup>。本調査区の東側に隣接する第5次調査で検出されている16世紀代の東西方向の溝も、いずれもW-4°-Nの方位を示している。このことから、SD111は第5次調査区以東、さらに言えば第4街路以東の区画とは異なった町造りのもとに形成されたと考

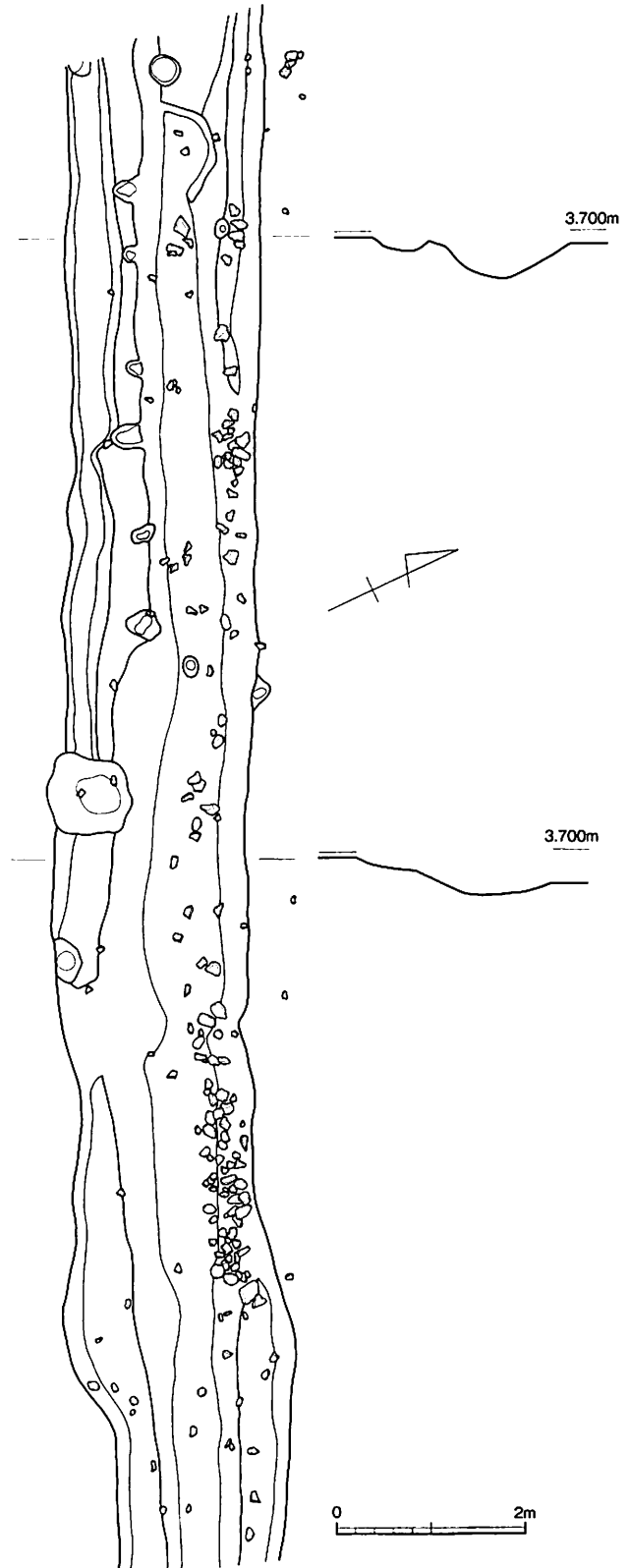
W-25°-N北  
に振る

直交

16世紀後葉

N-4°-E

第4街路以東



第3-4図 SD111遺構図(1/80)

えられる。本調査区が中世大友府内町跡の中でも西側の縁辺部で、さらに最も西側を画する南北の街路である第4南北街路の外側（西側）に位置する所以であるかもしれない。

出土遺物（第3-5図）

ラマ式蓮弁

1は景德鎮窯系青花の壺である。内面は釉がかからず、外面はラマ式蓮弁が施文される。同一個体と思われる破片が、本調査区内の他の遺構でも見つかっている。包含層（8-A区・10-A区）から2点、土坑SK104から1点出土している。

景德鎮窯系青磁

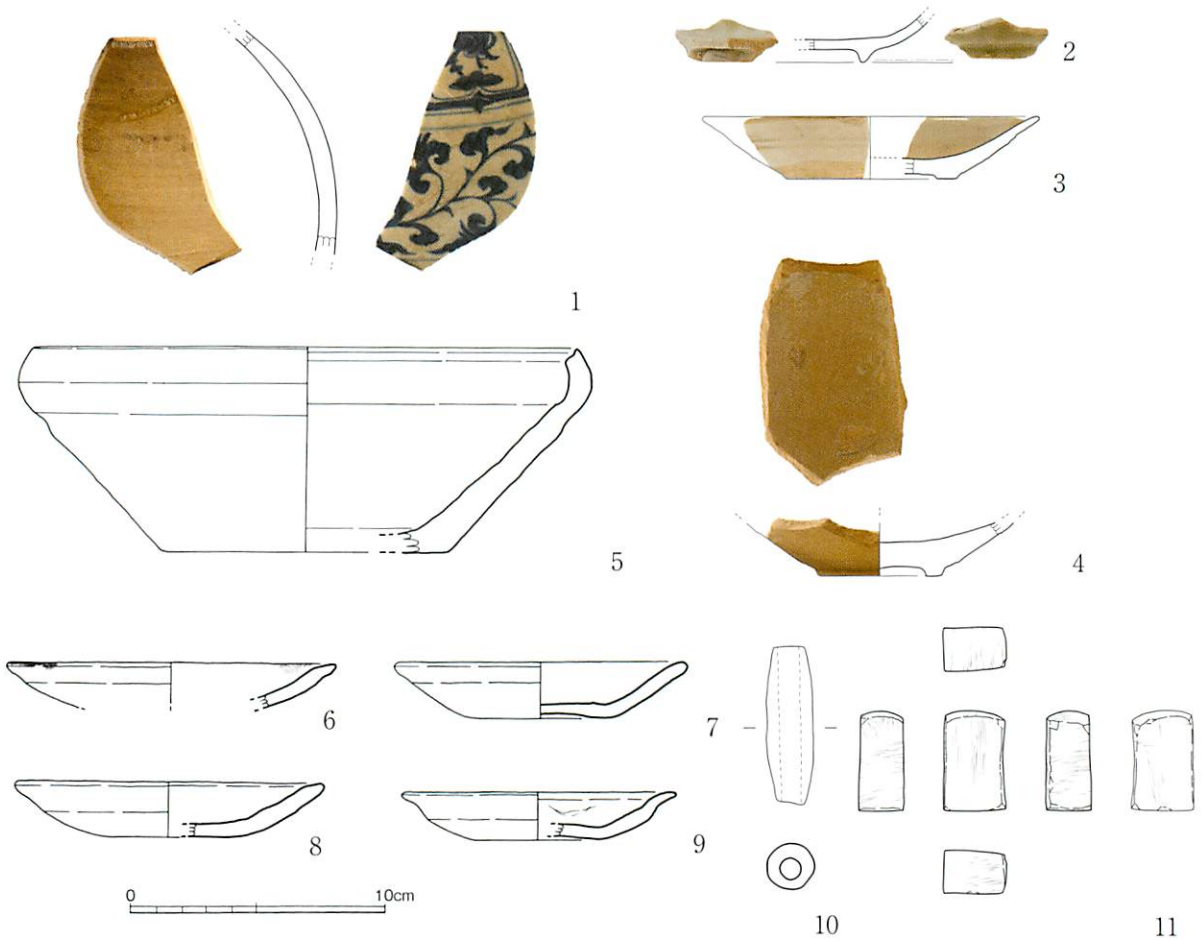
2は景德鎮窯系の青磁の皿である。3は中国産の白磁の皿で、底部から口縁部にかけて直線的に開く。高台部外面は釉剥ぎである。

胎土目

4は肥前系陶器の皿で、見込に胎土目が残る。混入品と思われる。5は備前系陶器の鉢で、口縁部は未発達で口縁部外面に凹線も施されない。

京都系土師器2期

6~9は京都系土師器の皿である。器壁はそれほど厚くないが、口縁部下のナデが明瞭になっているので、2期の段階に位置づけられよう。10は土錘、11は砥石である。石英粗面岩である。



第3-5図 SD111 出土遺物実測図（1/3）

註1 坂本嘉弘「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」（『南蛮都市・豊後府内』大分市教育委員会・中世都市研究会編）2001年

なお、坂本氏は14世紀後半～15世紀中頃まではN-10°-Eという軸が存在するとしているが、SD111はこの方位にもあわない。

SD113 (第3-6図)

9-A区内を南北に延びる溝である。ちょうどマンションの基礎部分が残っている中で検出されたため、調査できなかった部分がある。溝の北側はSD116・SD117・SD118によって切られており確認できない。本調査区の北側に位置する第10次Ⅱ区北調査区でも延長部分は確認されていないことから、北の方へはさほど展開しないと思われる。南側は調査区を越えて延びていくものと思われる。確認できている長さで7.0m、幅2.0m、深さは1.7mほどである。出土する遺物は

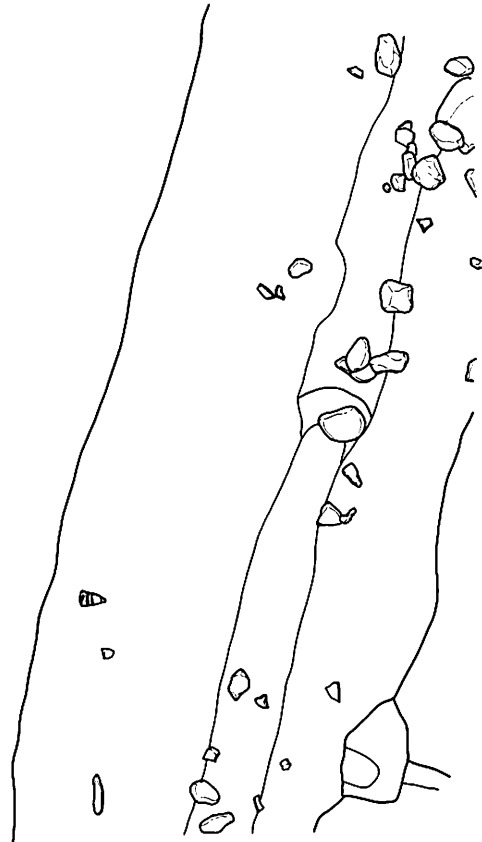
15世紀後半～  
16世紀前葉

15世紀後半～16世紀前葉のものが中心となっており、前述のSD116～118(16世紀後半代)との切り合い関係と矛盾しない。

SD111に直交

溝の方位は確認できている範囲が短いので、あまり正確なことはいえないが、N-30°-Eぐらいであろう。この方位は前述のSD111の方位にはほぼ直交する。ただSD111とは時期が全く異なるため両者に直接の関係はないが、中世大友府内町跡の一般的軸線(14世紀後半～15世紀中頃はN-10°-E、16世紀後半はN-4°-E)と異なる区画造りがなされていたのが、15世紀代まで遡ることが示唆される。本調査区の西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区で検出された15世紀代の溝もほぼ同じ軸線を有しており、第4南北街路以西は、15世紀代から異なった軸を意識した区画造りがなされていたことが想定される。

15世紀代



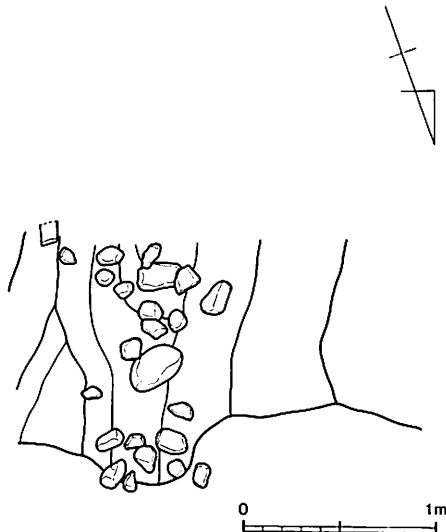
出土遺物(第3-8図)

龍泉窯系青磁

1・2は龍泉窯系青磁碗で、1は高台部、2は口縁部である。2は胴部に蓮弁文が見られるが、蓮弁の幅狭くなっている。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識している段階で上田編年の15世紀後葉～16世紀前葉に位置づけられると思われる。

在地系土師質土器

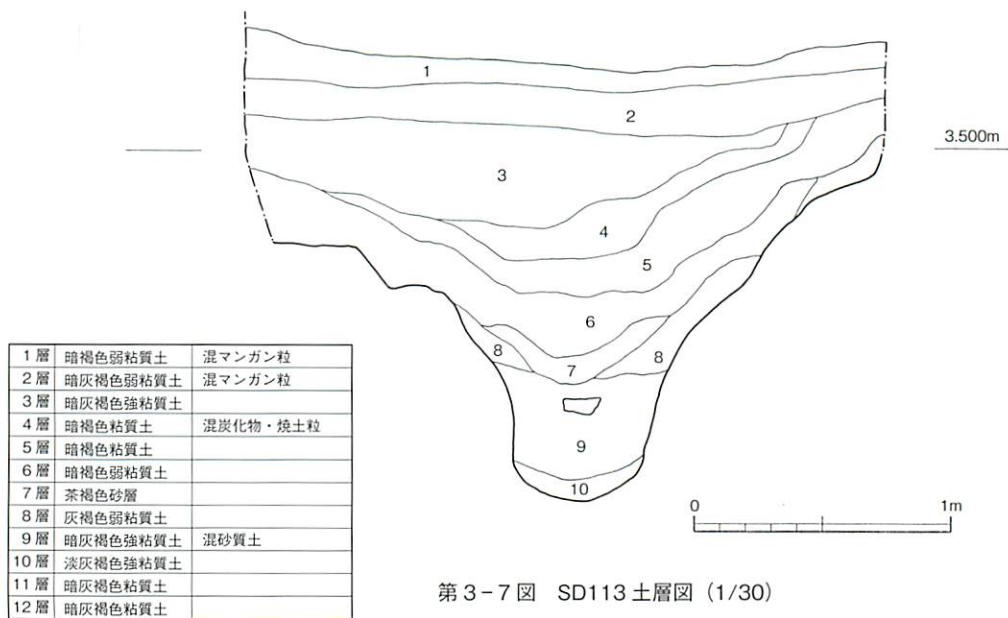
3～6は在地系の土師質土器皿で、底部から口縁部に外に向けて開くように立ち上がり、内外面にロクロ目を顕著に残す。坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる資料である。7は土師質土器



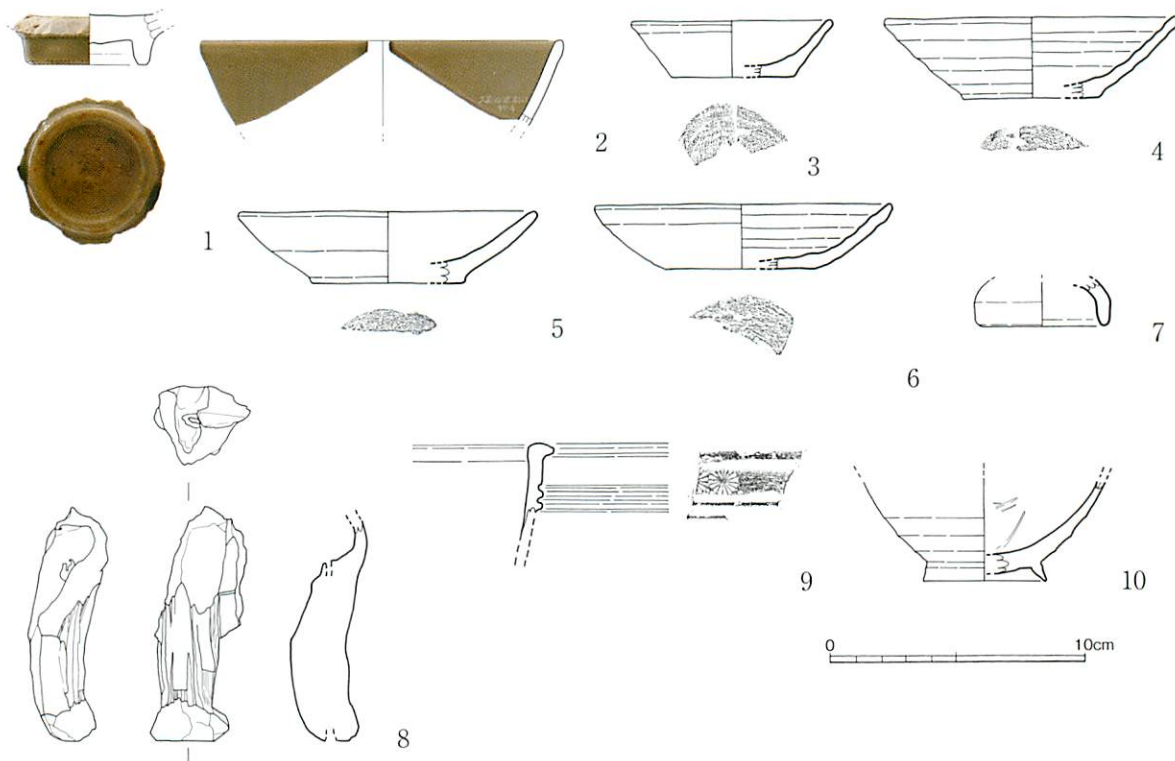
第3-6図 SD113遺構図(1/40)

瓦質土器

で焼塩壺の蓋と思われる。8～10は瓦質土器である。8は火鉢の脚部、9は火鉢の口縁部である。9は口縁部下に巡る突帯間に文様帯が施される。10は塊である。高台部分は断面が三角形を呈する。



第3-7図 SD113土層図 (1/30)

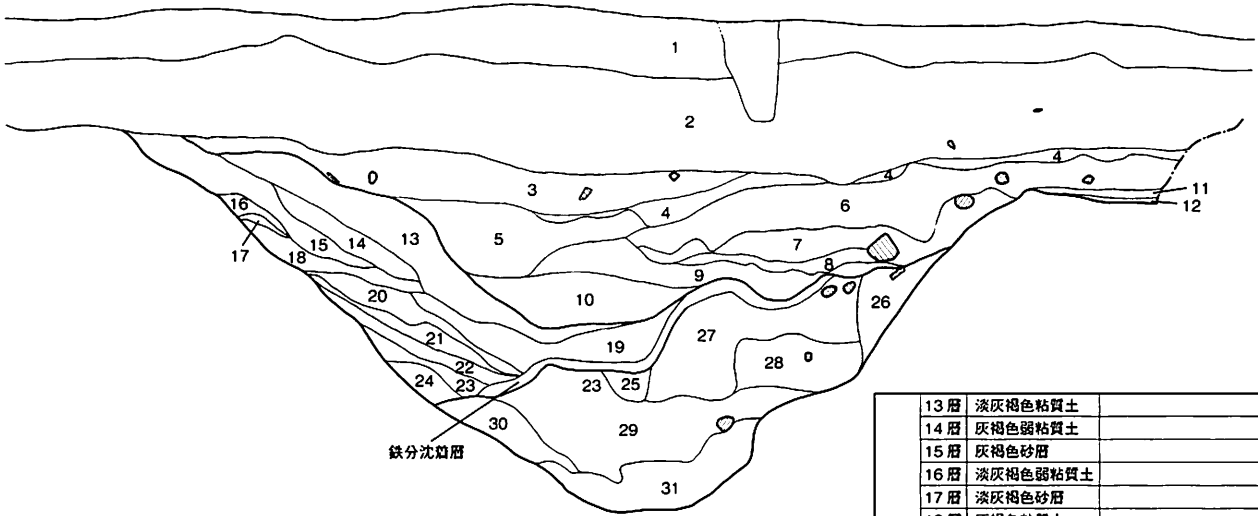


第3-8図 SD113出土遺物実測図 (1/3)

SD116・117・118

Section1

4.000m

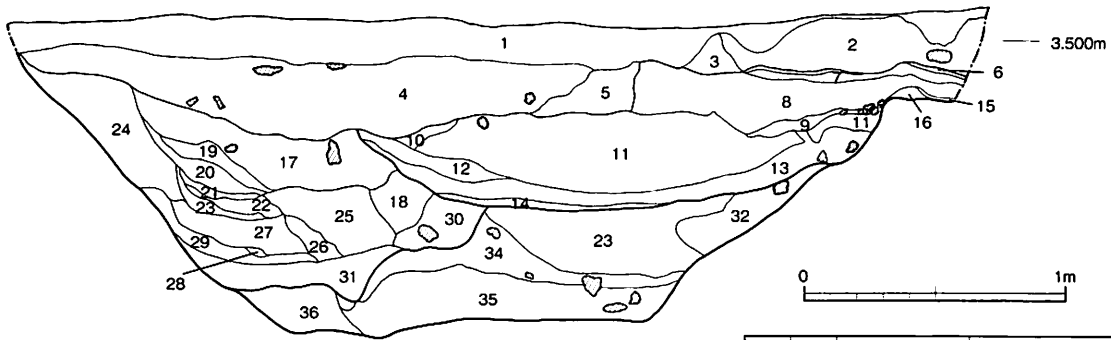


SD116	1層	暗灰褐色弱粘質土	マンガン粒を多く含む	
	2層	暗褐色弱粘質土	マンガン粒を含む	
	3層	暗茶褐色粘質土		4層(道路面)の自然沈下後に堆積
	4層	灰色シルト層		道路面
	5層	灰茶褐色粘質土		
	6層	灰褐色砂層		
	7層	灰色シルト層		
	8層	茶褐色砂層		
	9層	灰色シルト層	暗灰色粘質土を含む	
	10層	灰褐色粘質土		
	11層	灰色シルト層		
	12層	茶褐色弱粘質土	鉄分を含む	

SD117	13層	淡灰褐色粘質土	
	14層	灰褐色弱粘質土	
	15層	灰褐色砂層	
	16層	淡灰褐色弱粘質土	
	17層	淡灰褐色砂層	
	18層	灰褐色粘質土	
	19層	灰褐色強粘質土	
	20層	暗黄褐色砂層	
SD118	21層	19層と同様	
	22層	淡灰褐色弱粘質土	灰白色砂層を含む
	23層	灰褐色強粘質土	炭・焼土粒を含む
	24層	灰茶褐色強粘質土	
	25層	暗褐色強粘質土	
	26層	暗灰褐色粘質土	茶褐色土ブロックを含む
	27層	暗灰色強粘質土	
	28層	淡灰褐色強粘質土	
	29層	黒灰色強粘質土	
	30層	暗灰色強粘質土	砂粒を若干含む
	31層	暗灰色砂質土	

Section2

3.500m



SD116	1層	暗褐色弱粘質土	マンガン粒を含む		
	2層	灰褐色土	黄褐色土を多く含む		
	3層	灰褐色土			
	4層	暗茶褐色粘質土			
	5層	暗褐色土			
	6層	灰色シルト層		第1道路面	
	7層	灰褐色弱粘質土	炭・焼土を含む		
	8層	灰褐色土	淡灰褐色粘質土ブロックを含む	道路面形成層(第1道路)	
	9層	暗灰色粘質土			
	10層	灰褐色粘質土			
	11層	Section1の8~10層に対応	凸レンズ状に堆積	第2道路の側溝の可能性	
	12層	灰褐色弱粘質土	茶褐色砂層を含む		
	13層	黄褐色細砂層	砂粒子が極めて小さい		
	14層	灰色シルト層			
	第2道路形成層	15層	暗灰褐色粘質土		
	16層	黄灰褐色土		道路(石敷道路)形成面(第2道路)	

SD117	17層	淡灰褐色粘質土	
	18層	暗灰褐色粘質土	赤褐色土ブロックを含む
	19層	暗褐色粘質土	灰色粘土・マンガン粒を多く含む
	20層	暗褐色砂層	
	21層	暗灰褐色粘質土	
	22層	暗黄褐色砂層	
	23層	暗灰褐色粘質土	
	24層	暗褐色弱粘質土	マンガン粒を含む
	25層	灰褐色強粘質土	
	26層	22層とほぼ同じ	
	27層	暗灰褐色粘質土	黄茶褐色砂質土を若干含む
SD118	28層	灰褐色粘質土ブロック	
	29層	灰褐色砂層	
	30層	暗灰褐色粘質土	
	31層	灰茶褐色強粘質土	
	32層	地山崩落の砂層	(地山は砂層)
	33層	暗灰色強粘質土	
	34層	淡灰褐色強粘質土	
	35層	黒灰色強粘質土	地山の灰白色粘土ブロックを含む
	36層	暗灰色砂質土	

第3-9図 SD116・SD117・SD118土層図(1/30)



第3-10図 SF124・SD116・SD117・SD118遺構図(1/100)

## SD116・SF116・SF124 (第3-9・10図・付図)

SD116は8-B・8-A・9-A・10-A・11-A区に渡って、本調査区北側を東西に走る道路遺構及び溝である。第3-2図の遺構分布図から分かるように、本調査区北側9-A区から11-A区にかけてはW-5~7°-Nの方向で東西方向へ延び、8-A区と9-A区の境界付近で北側にカーブ W-30°-Nの方位で北側に急にカーブしていく。ちょうどその屈折部分に、現代の建物の基礎部分が残っており、所々がそれによって分断されて明瞭には把握できない。ただ、基礎部分の合間には削平を受けておらず、掘り下げは可能であった。明確に遺構に帰属しえない資料については、基礎によって分断された4つの箇所それぞれ名称を付し、その単位で遺物の取り上げを行った。その4つの箇所の名称は、北西隅が「基礎1」その南が「基礎2」、基礎1の東側が「基礎3」、基礎3の南側が「基礎4」となる。したがってこのSD116は基礎1・基礎3内を通過していることになる。この基礎1・基礎3内ではSD116以外に後に詳述するSD117・SD118が重なってSD116下に存在しており、さらに基礎3内においては南側部分にSD113が存在する。そこで上から順次掘り下げを行い、把握できる限りで遺物を各遺構へ帰属させた。

なお、第3-10図及び付図ではSD116~118の遺構実測図を載せているが、前述の基礎部分は遺構の掘形が正確に把握しがたいこともあり、この基礎部分以東のみを掲載した。

ところでSD116は道路部分とその直下にある溝の両方を指す。遺構検出時は、道路遺構と考えられる硬化面及びシルト層の広がり確認され、それが南側でとぎれる部分から溝があると考えられていた。そのため両者に時期差がないと考え、SD116の名称を両遺構に付し、道路部分から出土した遺物をSD116(道路)、溝内から出土した遺物をSD116として取り上げた。しかしながら、第3-9図の土層図から分かるように、SD116(道路)の硬化面及びシルト層は溝SD116の直上に広がっており、溝SD116が埋没後に、道路面であるSD116(道路)が形成されていることが判明し、両者は全く別物であるという認識に至った。したがってこれ以降は、SD116(道路)をSF116と呼称することとする。ただ、溝SD116の廃絶とSF116の形成は一連の作業であったと考えられ、本調査区内においては溝SD116内から出土する遺物とSF116内から出土する遺物に大きな時期差は認められない。ただSF116の北側には、砂利敷き道路面SF124が存在しており、両者は位置的にみても一連のものである可能性がある。SF124からは、本調査区内ではさほど遺物の出土が見られず、あってもSD116と近い時期の遺物しか見られないが、本調査区の北側に位置する第10次Ⅱ区北調査区では、砂利敷き道路面が慶長期以降まで存続していることが確認されている。SF116のシルト層とSF124の砂利敷き道路面の形成が一連の道路形成によるものなのか、時間差があるものなのかは、土層から確認できていないが、砂利敷き道路面が慶長期以降まで存続している期間を考えると、何枚かの道路形成層が存在したとするのが無難であろう。ただ道路の位置や方位はほとんどずれることなく、代々空間認識は踏襲されているようである。

また、SF116のシルト層の南側に溝状の窪みがある(第3-9図 Section 1の3層、Section 2の4層)。道路の側溝とするには掘形が明確ではない。またSection 1をみると、シルト層は南側へ向け(図中では左方向へ向け)下がっているのが看取できる。これは直下に溝SD116~118が存在するために、沈下したものと考えられる。したがって溝状の窪みも、直下に溝が存在していることを考えると、自然発生的に形成された溝と考えるのが無難であろう。

## 出土遺物(第3-11・12図)

1は景德鎮窯系青花皿で、見込と高台内に文様が見られる。口縁部の形態が不明であるが、小野編年のE群か。2は龍泉窯系青磁の壺である。口縁部が短く立ち上がり、胴部は丸みを持つ。3は中国産陶器の壺と思われる口縁部である。口縁部は短く屈曲し、口縁上面に平らな面が形成される。4は、中国産の白磁皿である。口縁部が端反り、森田編年のE群にあたると思われる。16世紀代に位置づけられる。5は景德鎮窯系白磁で見込部分が緩やかに盛り上がり、いわゆる饅頭心を呈す。

高台内には「富貴佳器」の字款を描く。6は、備前系陶器の播鉢で、口縁帯が発達し、口縁部外面に凹線が巡る。口端のナデが強く先細りとなる。また内面は、ナナメスリメが施される。乗岡編年の近世1期

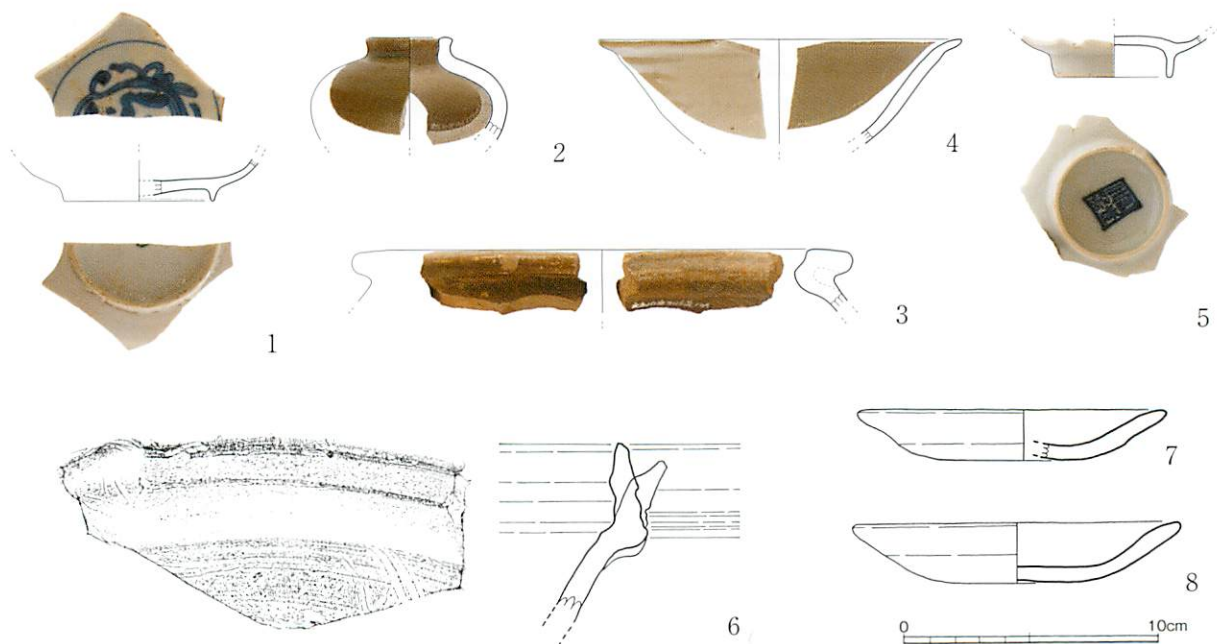
7～12は京都系土師器の皿である。器壁が厚くなってきており、11は口縁部下のナデが強くなって稜をなしている。2期の段階に位置づけられると考えられる。13～24は在地系土師質土器で、13～14・16～22は皿、15・23は坏、24は小皿である。この内皿については、いずれも口縁部が底部から直線的に開くタイプで、13・14・20・21などは内面にロクロ目を顕著に残す。坂本編年の15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる一群であろう。また、坏については、まず15については、胴部が若干内湾気味に立ち上がっており、他の一群より古い様相を示している。混入品と思われる。23は前述の皿と同時期と思われ、24の小皿も同時期の所産であろう。

25・26は土師質土器の燭台である。25は底まで穿孔が届かないが、26は欠損して不明だが、底まで穿孔されていそうである。27・28は瓦質土器で、27は火鉢の脚部、28は火鉢の口縁部である。28は口縁部下の2条の突帯間に文様帯が巡り、雷文が印刻されている。29・30は土錘である。

SD117 (第3-9・10図・付図)

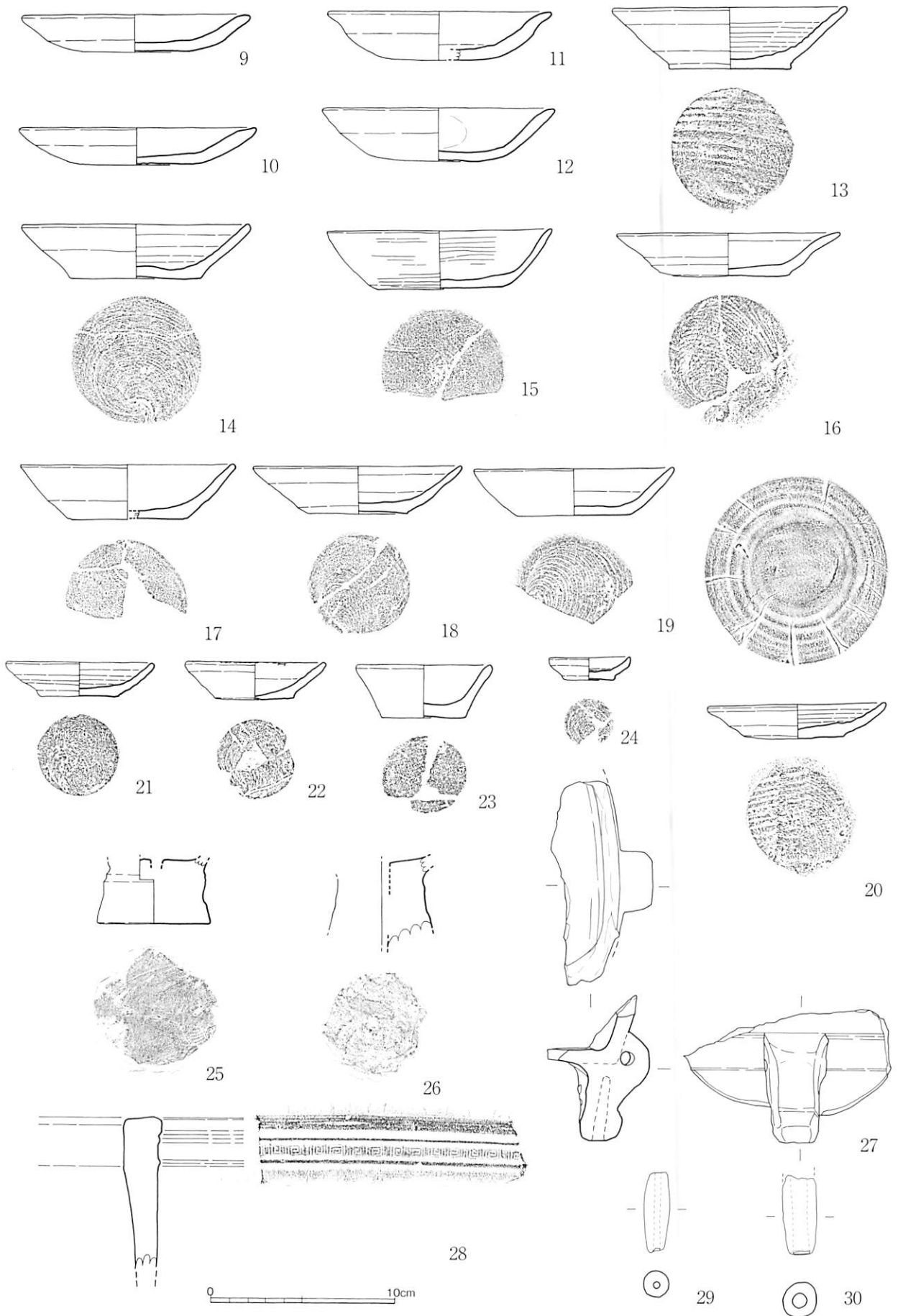
SD116の下に位置し、SD116にほとんど併行して延びる。8-B・8-A・9-A・10-A・11-A区にわたる。北側部分をSD116に切られているため、幅は推定で2.5m程度、深さは0.9m前後であったと考えられる。このSD117の下にSD118があるが、両者が接するあたりに厚い鉄分の沈着層が見られる(第3-9図Section 1参照)。

SD117の形成時期であるが、SD116に切られているため時期的にそれより当然古い。しかも内外面にロクロ目を残し、底部から口縁部に向けて直線的に開く在地系土師質土器皿が大量に出土した。この形態の土師質土器は坂本編年により15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられているため、当初はこのSD117はその時期まで遡るのではないかと考えられていた。ところが、同じ埋土の中から、SD116とほぼ同形態の京都系土師器が出土し、さらには後述するがこのSD117に切られているSD118からナナメスリメを有する近世1期の備前系陶器播鉢も出土していることから、16世紀後半以前には遡り得ないことが判明した。よって、大量に出土する内外面にロクロ目を残す在地系土師質土器は、この時期まで残ると考えた方がよさそうである。



第3-11図 SD116出土遺物実測図(1/3)





第3-12図 SD116 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第3 - 13・14 図）

口禿げ 1は中国産白磁の皿の口縁部である。口縁部はいわゆる口禿げで、13～14世紀のものと思われる。2は景德鎮窯系青磁皿の高台部分である。3は、備前系陶器の播鉢で、口縁帯が発達し、口縁部外面の凹線も多条化している。また口縁部端部はナデが強く先細りしており、スリメの形態は不明だが、乗岡編年の近世1期に位置づけられよう。

近世1期 4～11は京都系土師器の皿である。5・6のように口縁部下のナデが強く、稜を持つような形態が出てきており、塩地編年の2期に位置づけられる。SD116で出土している京都系土師器と形態的にみて同じ時期に位置づけられる。最低3法量以上はありそうである。また11については、口唇部ススの付着が認められ、灯明皿として使用されていたと思われる。

京都系土師器 2期 12～25は在地系土師質土器の皿である。底部から口縁部に向けて直線的に開き、内外面にロクロ目を顕著に残すタイプの一群である。ロクロ目については外面はナデ消されて、内面のみ残るものもある。また、底部は糸切り痕が残る。法量分化も認められ、3法量以上はありそうである。これらの形態は、坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる一群であるが、4～11の京都系土師器と共伴していることから、16世紀後葉まで下げられる。混入したとするには、出土する量が多すぎるので、このタイプの一群は16世紀後葉まで残ると考えるのが妥当であろう。中世大友府内町跡では第13次調査区で、このタイプの在地系土師質土器と2期の京都系土師器が互いかなりの量で共伴して出土している例がある。

内外面ロクロ目 26・27は瓦質土器で、26は角火鉢の一部と思われる。27は鉢の底部で高台が付く。28は土師質土器の燭台で、穿孔は底部まで及ばない。29は、茶臼の下臼で、砂岩製である。30は土錘、31は棒状の青銅製品で、用途は不明である。32は宝篋印塔、33は永楽通寶で、初鑄造年は1408年、直径2.4cm、重さ3.1gである。

SD118（第3 - 9・10 図・付図）

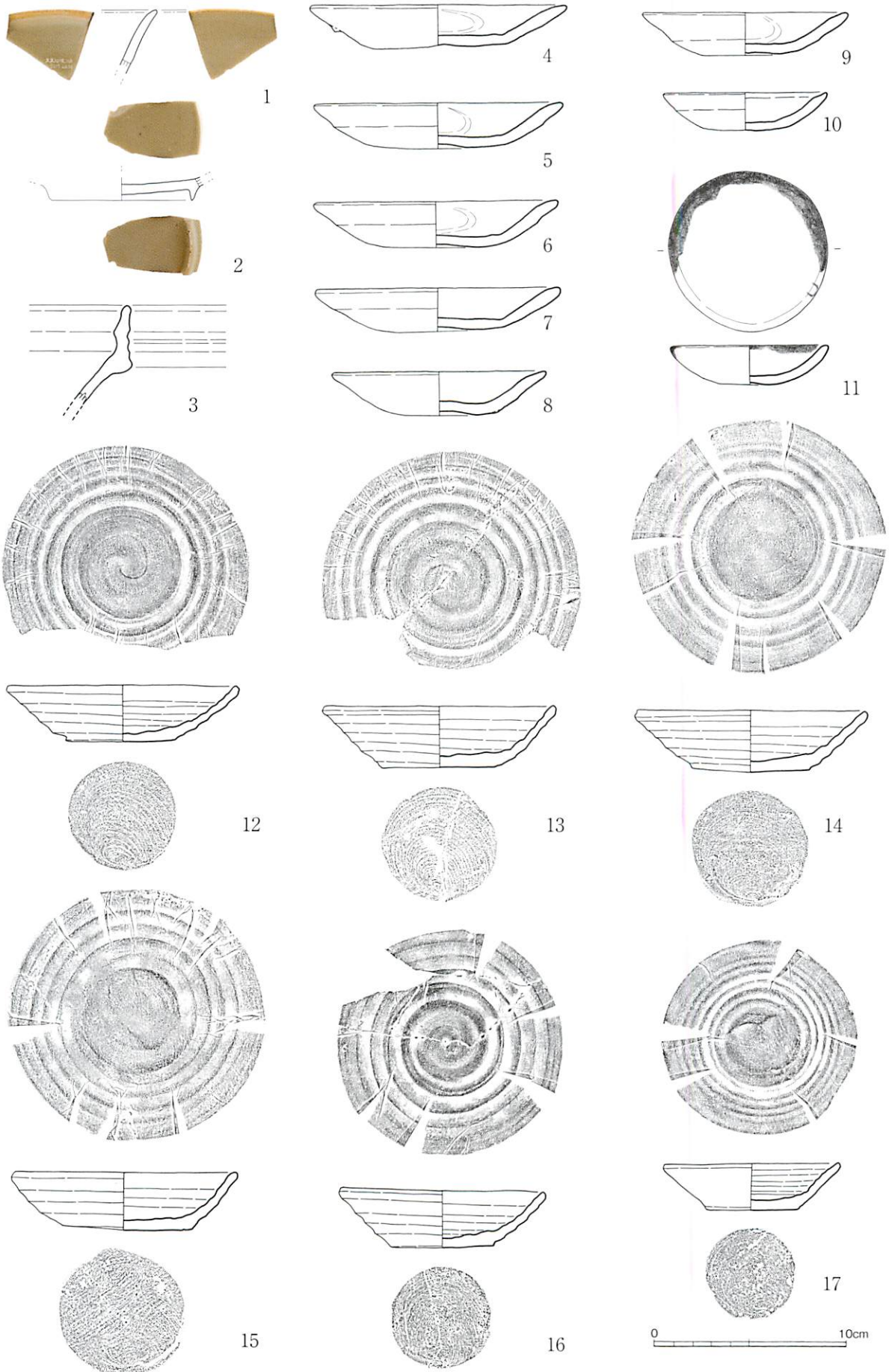
帯水層 動植物遺体 SD116・117の直下をほぼ併行して延びる溝で、溝の上部はSD116とSD117に切られているため幅は不明である。深さは底部の標高が2.0m程で、深さから考えてもSD116・SD117よりもはるかに大きい規模の溝であったと考えられる。埋土は下の方が泥炭層となっており、帯水していたことを示す。この帯水層のおかげで有機質の残りが非常に良く、木器類がかなり良好な状態で出土した。また動植物遺体も多数も出土しており様々なものがこの溝に廃棄されていた様子が窺われる。

出土遺物（第3 - 15～17 図）

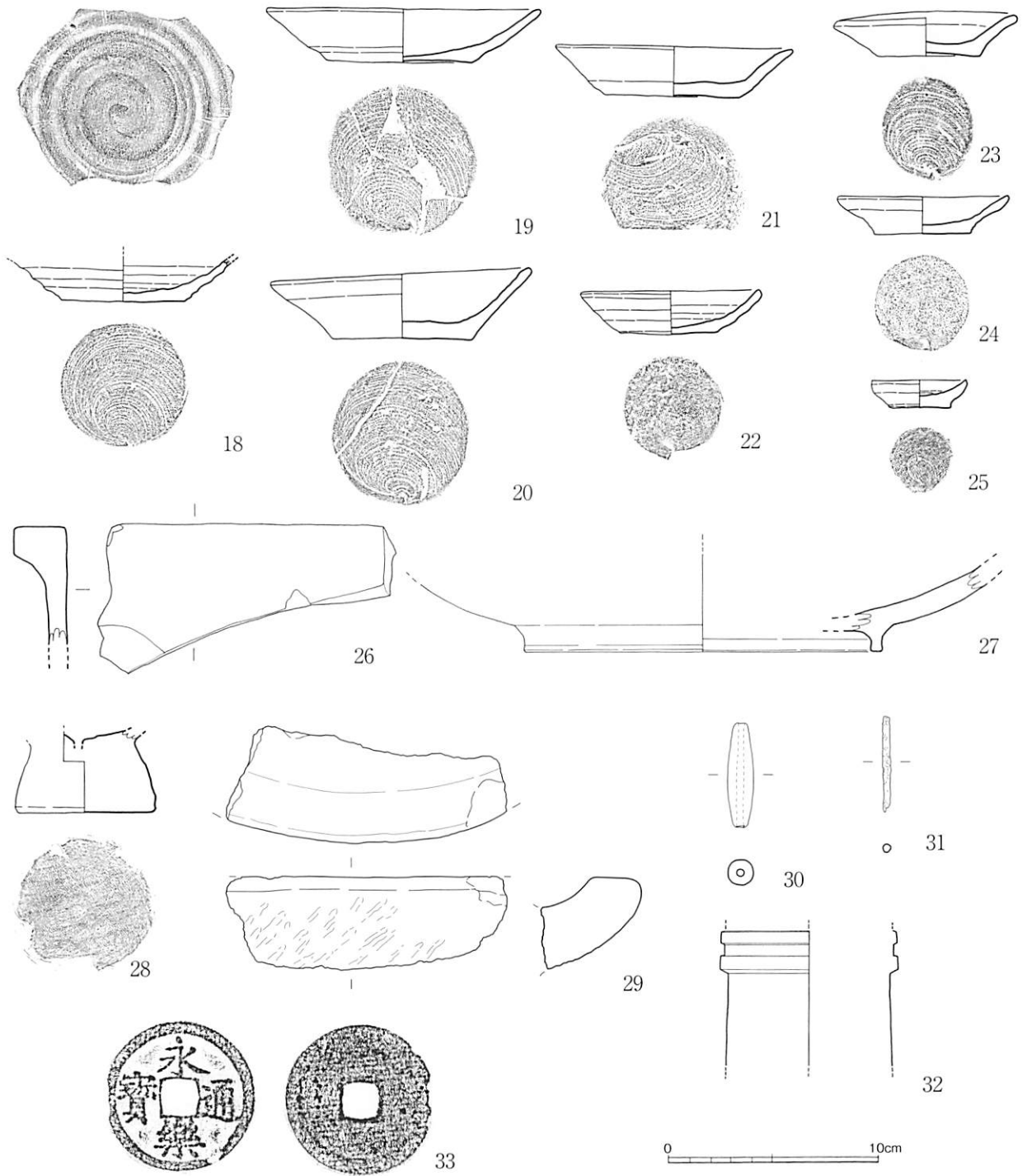
饅頭心 1は景德鎮窯系青花の碗である。見込み部分が緩やかに盛り上がるいわゆる饅頭心を呈す。見込み部分には人物像が、高台内には「宣徳年製」の文字が見られ、E群の碗である。2～4は、龍泉窯系青磁の碗である。胴部には蓮弁文が見られる。蓮弁の幅は短くなっているが、細線と剣頭が1つの単位をなしている。15世紀末～16世紀前葉に位置づけられる。3は、見込に印花文が施される。5は中国産陶器の壺の底部である。6は中国産白磁の皿で口縁部が端反りする。16世紀代に位置づけられる。また、被熱しており、部分的に黒色になっている。7は中国産白磁の壺の底部と思われる。高台部は露胎となっている。8は産地不明陶器碗で、朝鮮産かもしれない。

蓮弁文 印花文 9～14は備前系陶器で、9は壺の底部、10～12は播鉢である。10は口縁帯が発達し、外面の凹線が多条化する。口縁部端部はナデが強く先細りする。近世1期に位置づけられる。同時期のものと思われるのが12でナナメスリメを有する。11は口縁部外面の凹線が未発達で、若干古く中世6期頃に位置づけられよう。13・14は大甕の口縁部である。

ナナメスリメ



第3-13図 SD117 出土遺物実測図 (1/3)



第3-14図 SD117 出土遺物実測図 (1/3) ※33のみ1/1

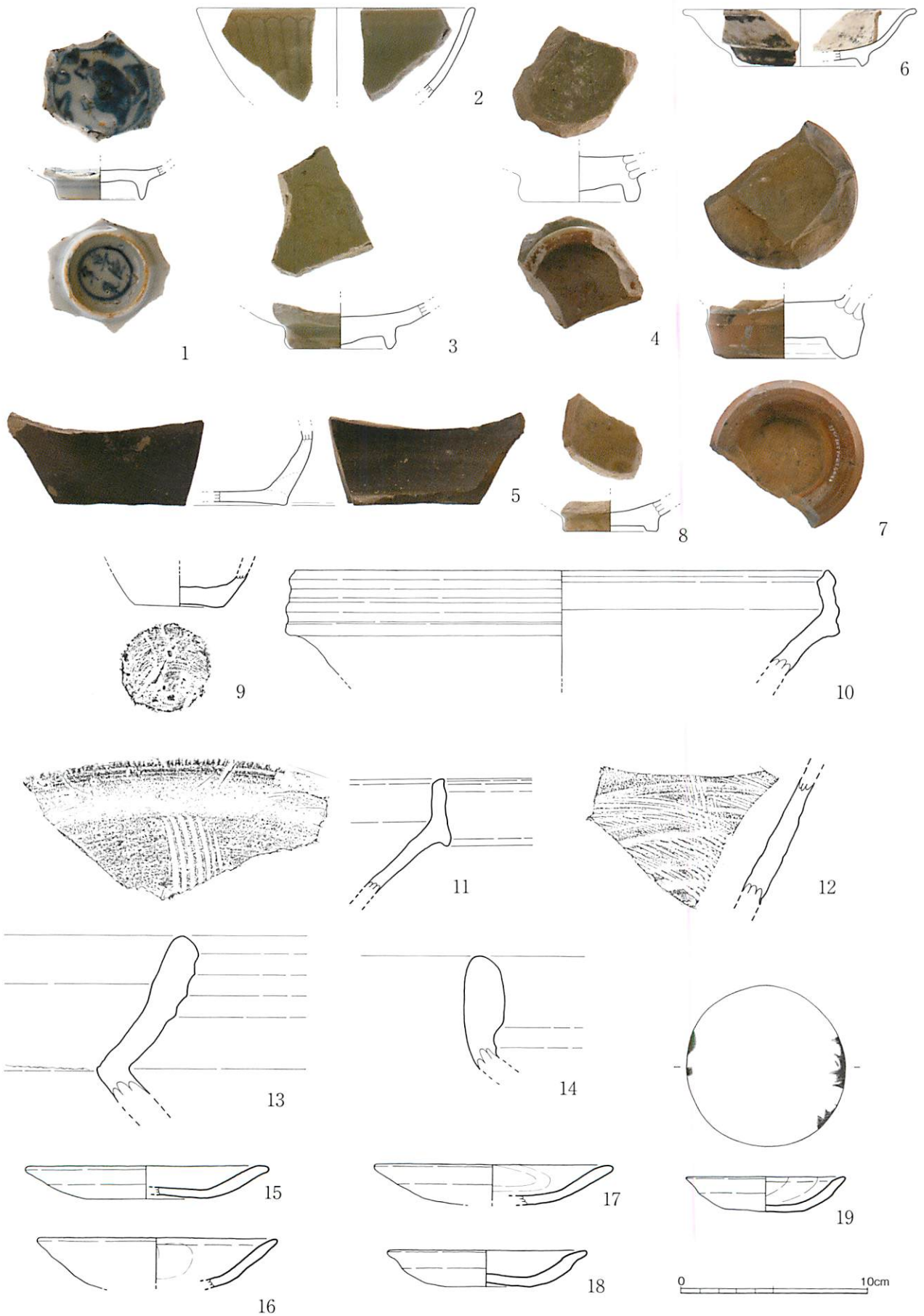
15～19は京都系土師器で、18・19は口唇部下のナデが明瞭で2期に位置づけられよう。19は口唇部にススの付着がみられ、灯明皿として使用している。20は土師質土器の燭台で、21は瓦質土器である。21は鉢で口縁部に2条の突帯が巡りその間に文様が施される。22は土鍾である。

23～27は木器で、23・24は漆器椀である。24は高台が高く発達している。25は折敷の縁の板と思われる。竹釘か何かで止めたと思われる釘穴が穿たれる。26・27は下駄である。いずれも連菌下駄である。28は軒丸瓦の瓦頭で珠文が巡っている。29は塼である。30は洪武通寶で初铸造年は1368年で重さ2.2g、直径2.2cmである。

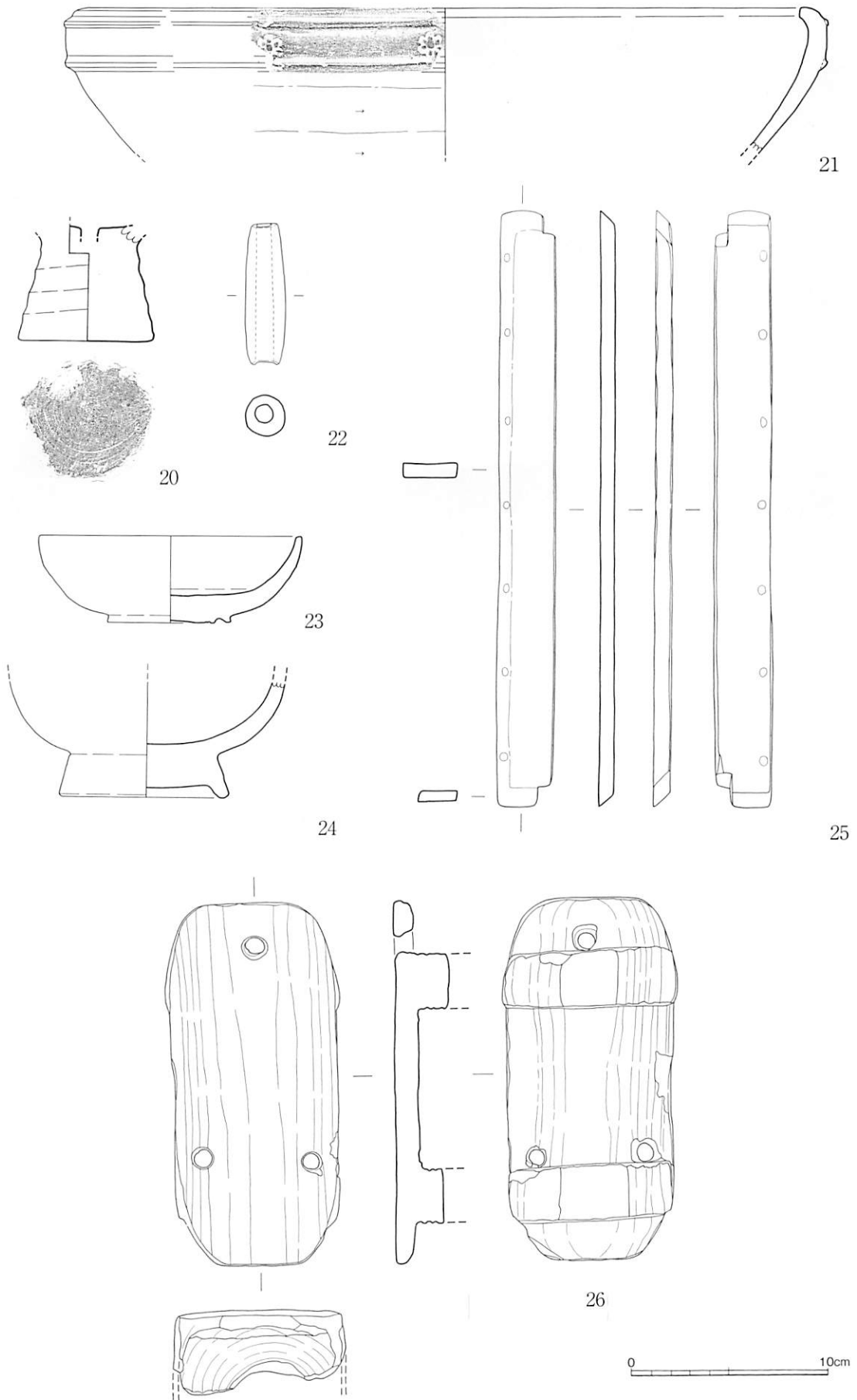
灯明皿

漆器椀

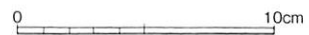
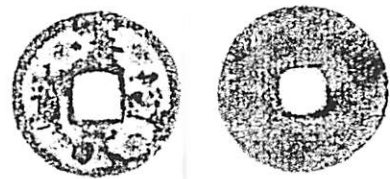
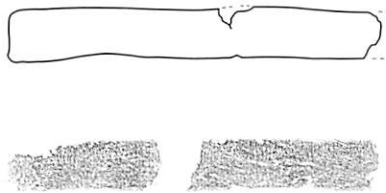
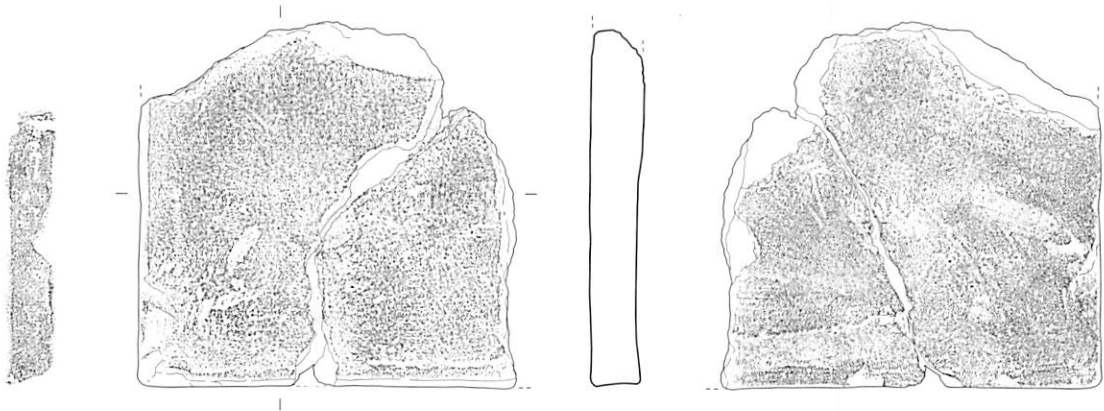
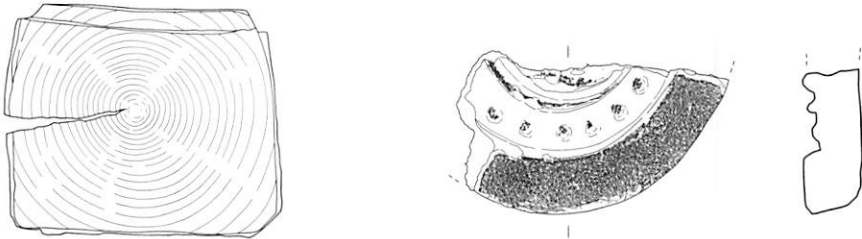
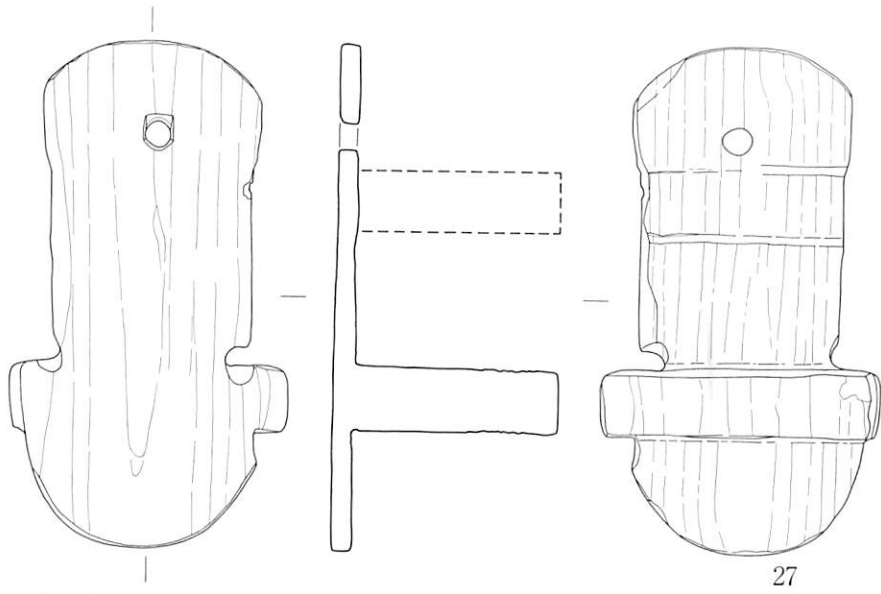
連菌下駄



第3-15図 SD118 出土遺物実測図 (1/3)



第3-16図 SD118 出土遺物実測図 (1/3)



第3-17図 SD118 出土遺物実測図(1/3) ※30のみ1/1

2. 土坑

SK101 (第3-18図)

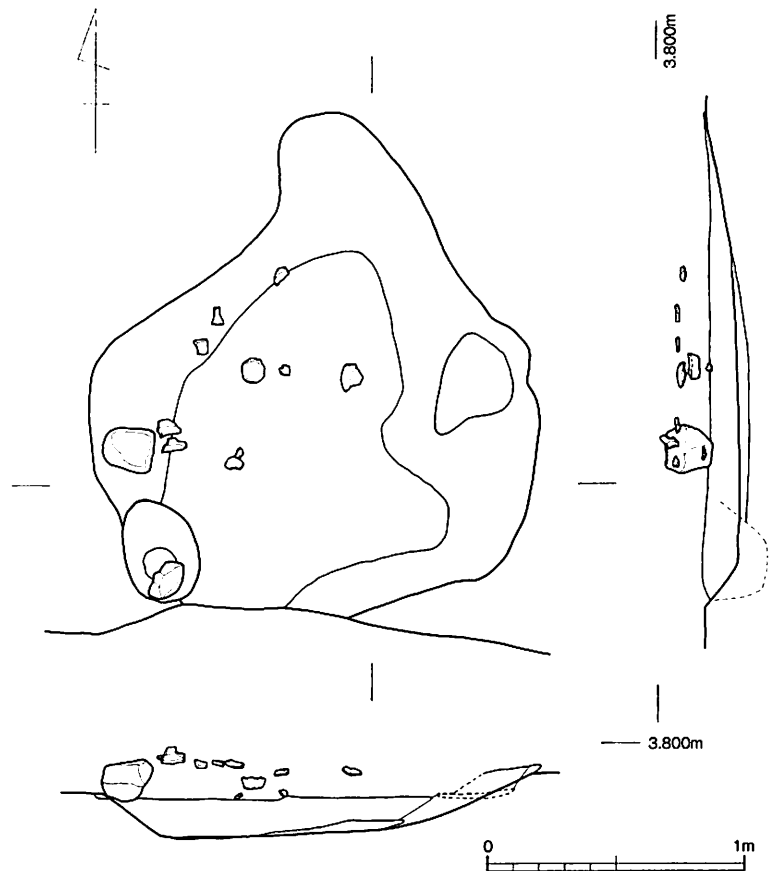
廃棄土坑

長径2 m、短径1.8 mの不定形プランを呈す。深さは0.15 mほどで浅く、上部はかなり削平を受けているものと思われる。出土量は少ないが、遺物と礫が混ざって出土している状況を見ると、廃棄土坑であったのではないかとと思われる。遺構の時期は、出土する在地系の土師質土器が坂本編年で15世紀後葉～16世紀前葉に位置づけられるため、その頃に比定できる。しかし、この土坑のすぐ北側を東西に延びるSD117では、SK101で出土する土師質土器と同形態のものが大量に出土している。SD117の項でも触れたように、SD117は2期の京都系土師器が相伴しているため、16世紀後葉に位置づけられ、この形態の土師質土器はその段階まで残るとした。したがって本遺構も16世紀後葉まで含めて、時期設定をしておくのが無難であろう。

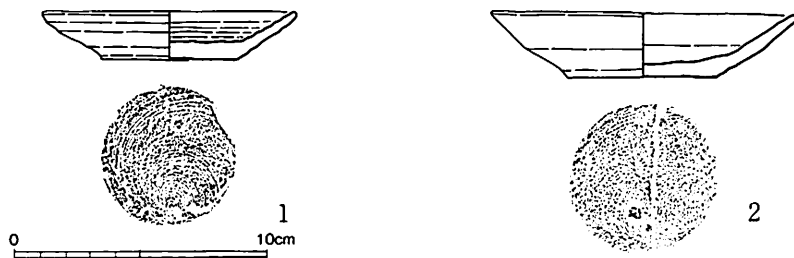
出土遺物 (第3-19図)

内外面ロクロ目

1・2は在地系の土師質土器皿で、底部から口縁部に向けて直線的に開くように立ち上がる。内外面にはロクロ目を顕著に残し、底部には糸切り痕が残る。坂本編年で15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる資料である。



第3-18図 SK101 遺構図 (1/30)



第3-19図 SK101 出土遺物実測図 (1/3)



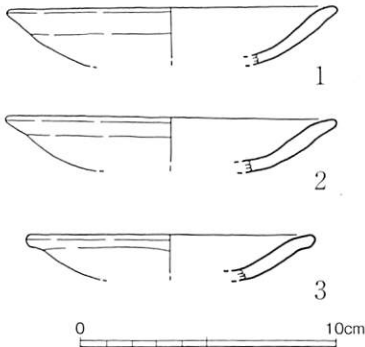
SK102 (第3-21図)

長径約1.0m、短径0.8mの楕円プランを呈す。西側は一部現代の建物の基礎のために削平されている。深さは0.7mほどあり、平面プランの規模にしては深い。遺物の出土量も希薄で、どのような性格の土坑なのか認定しがたい。土坑の時期は、時期が認定できる出土遺物が、2期の京都系土師器のみであり、よって16世紀後葉頃に位置づけておく。

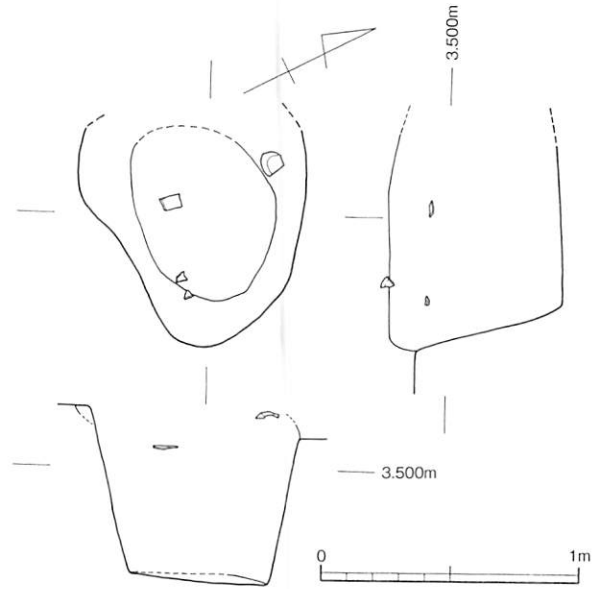
出土遺物 (第3-20図)

1~3とも京都系土師器である。口縁部下のナデが強くなっており、2期の特徴を示している。

京都系土師器  
2期



第3-20図 SK102 出土遺物実測図 (1/3)



第3-21図 SK102 遺構図 (1/30)

SK103 (第3-23図)

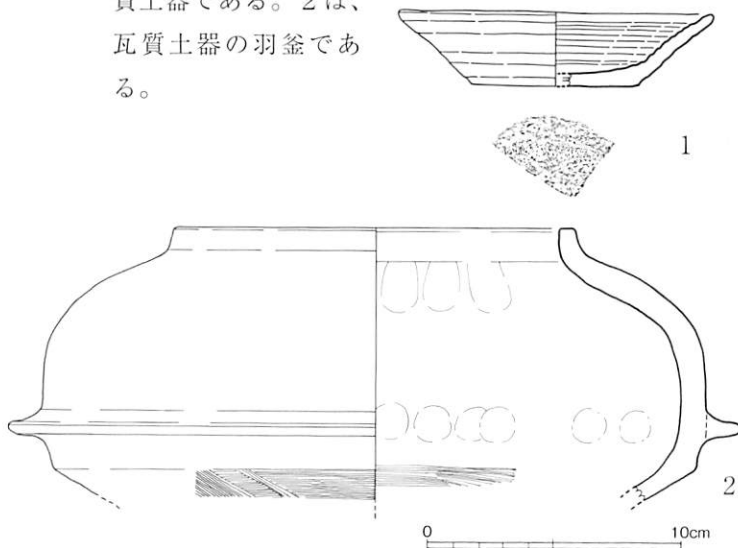
長径約0.8m、短径0.6mの楕円プランを呈す。深さは0.17mほどで上部は削平されているかもしれない。遺物の出土量も希薄であるが、恐らく廃棄土坑であろう。なお土坑の時期については、出土した羽釜の破片がSK104、SD116・SD117・SD118で出土した破片と接合した。SK104、SD116・SD117・SD118はすべて16世紀後葉に位置づけられていることから、SK103もその時期に比定される。

廃棄土坑

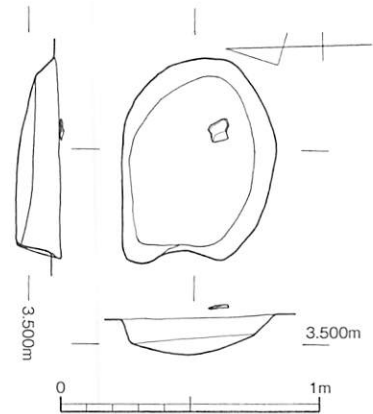
出土遺物 (第3-22図)

1は底部から口縁部に向けて直線的に外に開き、内外面にロクロ目を顕著に残す在地系土師質土器である。2は、瓦質土器の羽釜である。

内外面ロクロ目



第3-22図 SK103 出土遺物実測図 (1/3)



第3-23図 SK103 遺構図 (1/30)

SK104 (第3 - 24 図)



第3-24 図 SK104 遺構図 (1/60)

## SK104 (第3 - 24 図)

10 - A・10 - Z・11 - A・11 - Z 区にわたって位置する土坑で、長径 9.1 m、短径 2.6 m の規模を有す。西側部分 (図中では上方) が楕円形状、東側部分 (図中では下方) は方形に近い形を有す。したがって二つの別の土坑が切り合っているという見方もあるが、出土遺物に明らかに時期差を示すようなものは見られない。仮に二つの別の土坑が切り合っていたとしても、さほど時間差をおかず両者は形成されているものと考えられる。土坑の深さは深いところでも 0.3 m ほどで、出土する遺物の量から見ると、浅いように見受けられる。上方が削平を受けている可能性もある。

大量の礫と遺物

土坑内からは大量の礫と遺物が出土しており、明らかに廃棄行為に伴う土坑である。しかし、通常廃棄土坑としているものは、これほどまでに掘形が大きくなく、廃棄行為に伴い炭の層が堆積していたりすることが多い。そこで本土坑については、通常の廃棄土坑とは異なった性格を考慮に入れておかねばならない。

土取遺構

まず、このように広い範囲で土坑が重なって掘られていた例としては、第2南北街路に面した、府内古図でいうと「御内町」と称される町屋あたりで検出されている。この土坑は土取の遺構かもしれないと捉えられている<sup>註1</sup>。もう一つの例としては、第51・52次調査区で検出された連続する土坑群がある。これらの土坑群は、第2南北街路の直下で検出された。いずれも街路構築直前に掘られ、ただちに埋め戻されていた。ただ土坑の深さはいずれも比較的深い。

第2南北街路

SK104 がいずれの例に近いかという点であるが、まず土坑の広がりや深さから見ると、前者の土取遺構のそれに近い。しかし土取遺構内の場合、中から遺物が出るもののさほど量が多くはない。これに対し SK104 は中からかなり多くの遺物や礫が出土しており、土坑の深さを考えると、遺物の包含密度はかなり高いといえる。さらに、この SK104 が検出された周囲には、同時期の遺構が溝 SD116・117・118 以外にほとんどなく、当時空閑地であった可能性がある。こうした空閑地に土坑が掘られたというロケーションは、第2南北街路直下で検出された土坑群のそれに近い。第2南北街路直下の土坑群では、比較的遺物の出土も豊富で、遺物の時期も SK104 に近い。よって、本土坑 SK104 は、当時溝 SD116～118 が機能していた期間のいずれかの時期に、それらの溝と、恐らく本調査区の南に展開していたであろう生活空間との間に生じた空閑地に掘られ、そう長くはない時間で埋め戻されたものであろうと解される。

空閑地

## 出土遺物 (第3 - 25・26 図)

ラマ式蓮弁

1 は景德鎮窯系青花の壺で、外面に唐草文が描かれる。ラマ式蓮弁を描いた SD111 (第3 - 5 図の1)・包含層 (8 - A 区・10 - A 区 第3 - 42 図の2・3) 出土遺物と同一個体と思われる。

つば皿

2 は景德鎮窯系青花の皿で、口縁部が折れてつばがつくいわゆるつば皿で、小野編年の F 群である。

ナナメスリメ

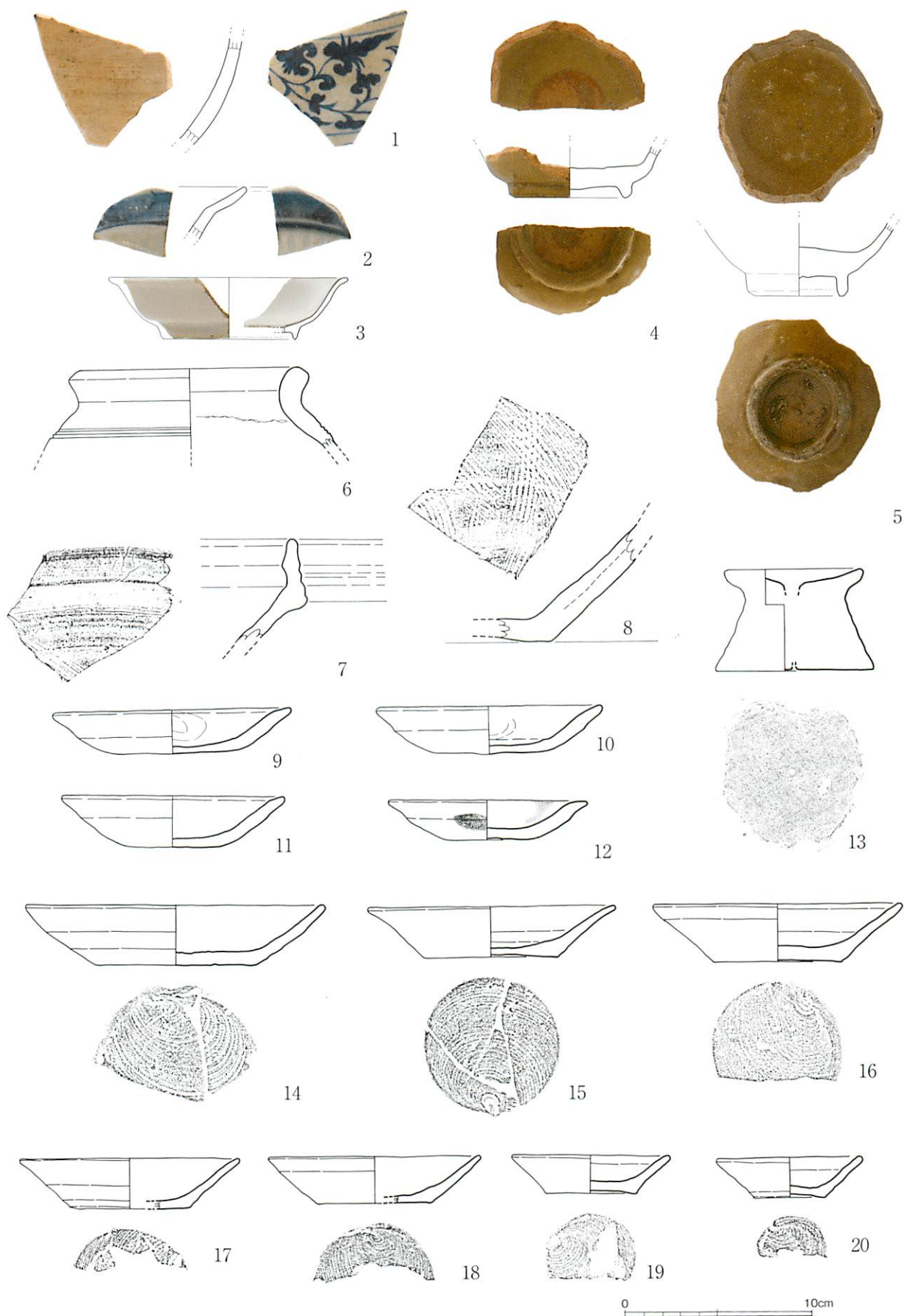
3 は中国産白磁の碗で、口縁部が端反り 16 世紀代の特徴を示している。4・5 は龍泉窯系青磁の碗である。6～8 は備前系陶器で 6 は壺、7・8 は播鉢である。7 は口縁帯が発達し、口縁端部のナデも強い。口縁外面の凹線も多条化する。8 は内面にナナメスリメが施される。7・8 いずれも近世 1 期に位置づけられる。

六連式焼塩用製塩土器

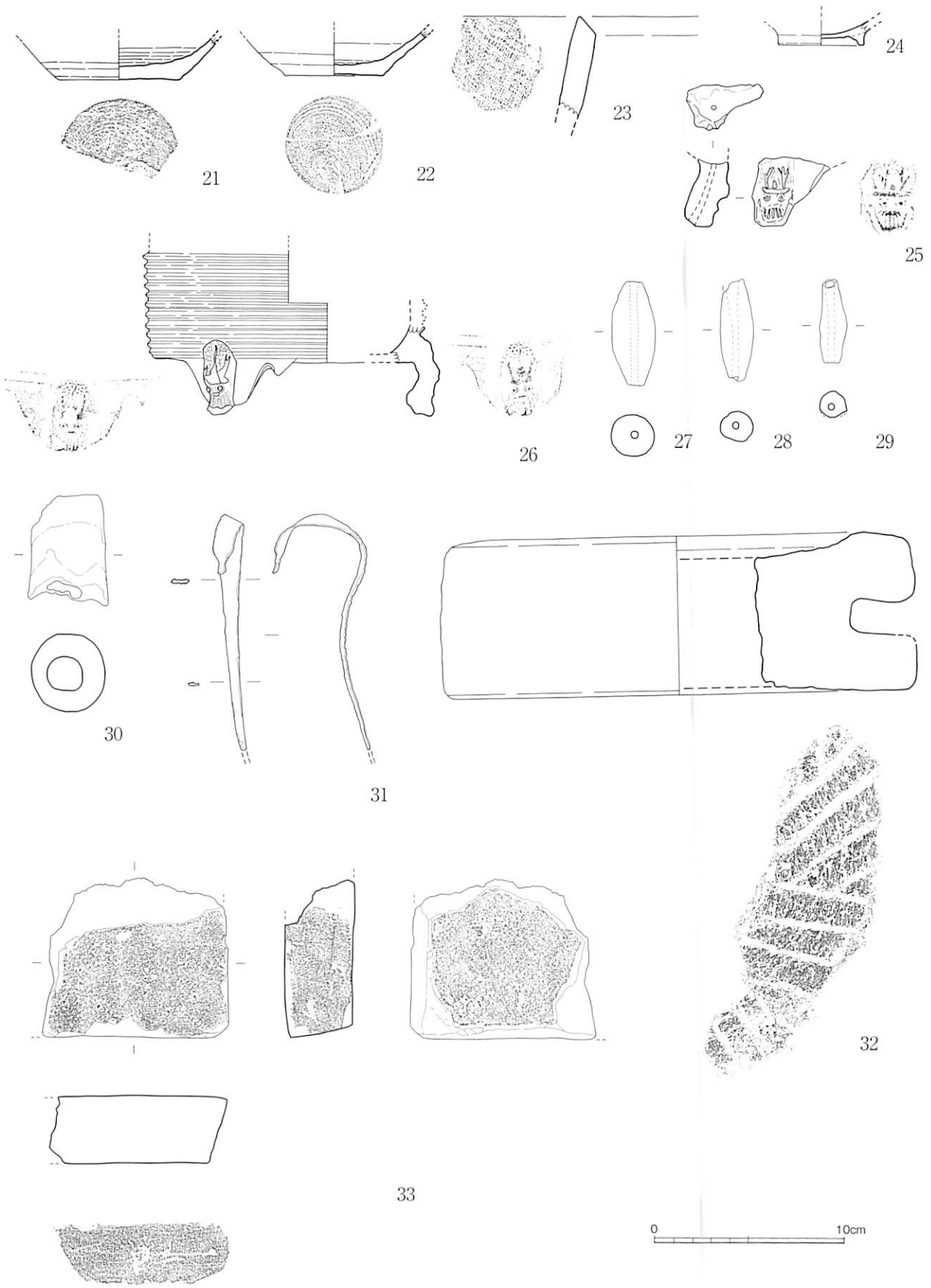
9～12 は京都系土師器皿で、口縁部下のナデが強く 2 期に位置づけられる。13 は土師質土器の燗台である。底面まで穿孔が見られる。14～22 は在地系土師質土器の皿で、底部から口縁部に向けて直線的に開く。内面にロクロ目を残すものがみられる。23 は、六連式焼塩用製塩土器の口縁部である。24～26 は瓦質土器で、24 は碗の底部、25・26 は香炉である。脚部に龍が象られている。

27～29 は土錘、30 は鞆の羽口である。31 は青銅製の筭、32 は石臼の上臼である。33 は埴である。

註1 【豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区】(一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)大分県教育庁埋蔵文化財センター)2005年



第3-25図 SK104 出土遺物実測図 (1/3)



第3-26図 SK104 出土遺物実測図 (1/3)

SK115 (第3 - 27 図)

廃棄土坑

8 - A 区、現代の建物の基礎（基礎 4）内の南隅に位置する。確認できている範囲で長径 1.0 m、短径 0.7 m だが、実際は南にまだ広がると考えられる。深さは 0.6 m ほどである。土坑内からは礫に混ざって遺物がかかり出土しており、また炭の堆積も見られるため廃棄土坑と考えられる。

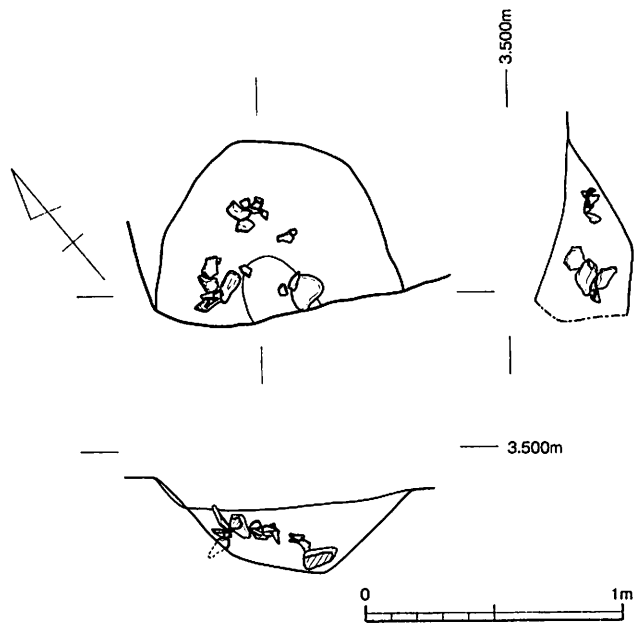
なお本土坑は SD113 と切り合っているが、南側の土層観察から、SK115 が SD113 を切っていることが確認されている。SK115 からは 2 期の京都系土師器が出土しているので、16 世紀後葉に位置づけられ、SD113 で出土する遺物と時期的な前後関係は矛盾しない。

16 世紀後葉

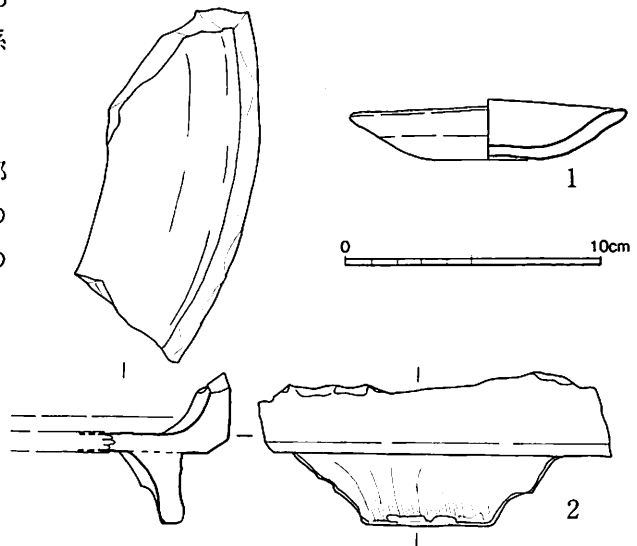
出土遺物 (第3 - 28 図)

1 は京都系土師器である。口縁部下のナデが強くなっており、2 期の特徴を示している。2 は瓦質土器の火鉢である。

火鉢



第3 - 27 図 SK115 遺構図 (1/30)



第3 - 28 図 SK115 出土遺物実測図 (1/3)

SK120・121 (第3 - 29 図)

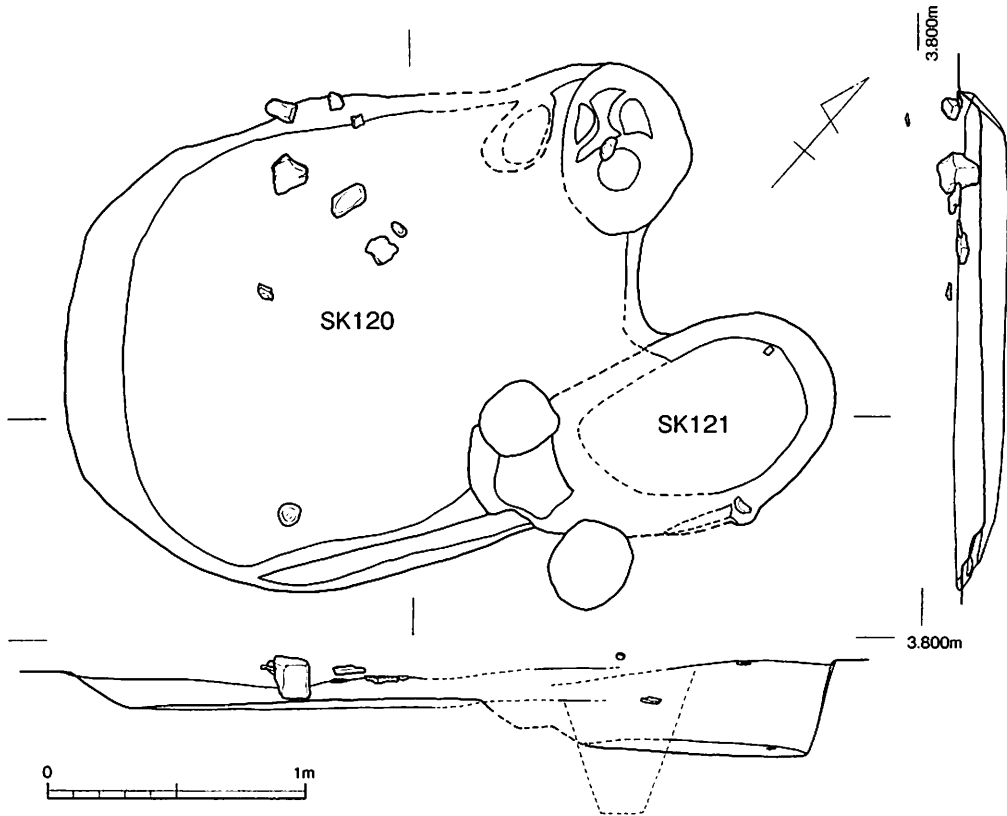
15 世紀末葉～  
16 世紀初頭

7 - A 区に位置する土坑で、2 基の土坑が切り合っている。南側の大きい方で隅丸方形プランを呈する土坑が SK120 で、長径 2.4 m、短径 1.9 m の規模を有す。深さは 0.12 m ほどで浅い。一方北側の小さい方の土坑が SK121 で、長径 1.4 m、短径 0.8 m の楕円形の掘形を呈す。深さは 0.38 m と SK120 よりも深い。ちょうど両者が接するあたりを溝 SD112 が通過して切っており、両土坑の切り合い関係は現地では検出不能であった。また両土坑から出土する遺物も希薄で、遺物からも両土坑の前後関係を認定するのは難しい。さらに両土坑を切って通過している SD112 も遺物の出土が無く、それからも時期の推測は不可能であるが、SK120 からは備前系陶器播鉢と在地系土師質土器が出土しており、その形態から 15 世紀末葉から 16 世紀初頭頃の位置づけが可能である。SK121 もさほど時期を違えないものと思われる。

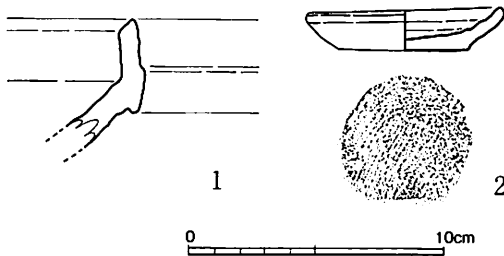
出土遺物 (第3 - 30 図・第3 - 31 図)

内面ロクロ目

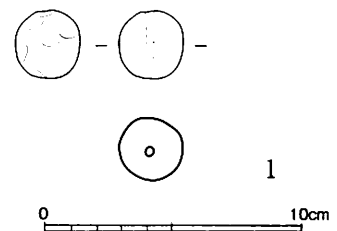
第3 - 30 図の 1 は備前系陶器播鉢で、口縁の形態から中世 6 期に比定される。2 は在地系土師質土器の小皿で内面にロクロ目を有し、15 世紀末葉～ 16 世紀初頭に位置づけられる。



第3-29図 SK120・SK121 遺構図 (1/30)



第3-30図 SK120 出土遺物実測図 (1/3)



第3-31図 SK121 出土遺物実測図 (1/3)

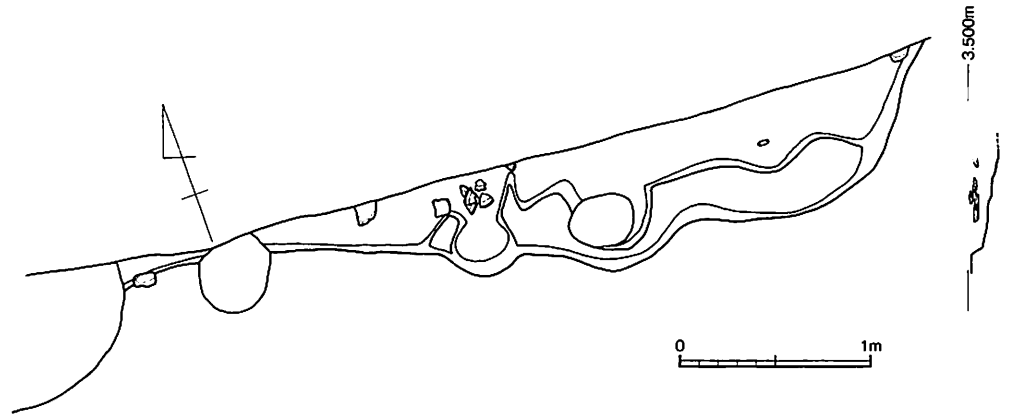
SK125 (第3-32図)

16世紀後葉

7-B区に位置する土坑で確認できている範囲で長径4.4m、短径0.7mの規模を有すが、実際はさらに北に展開する。深さも確認できているところで0.24mほどである。掘形は段を有して下がっており、数基の土抗が切り合っているのかもしれない。出土する遺物から、16世紀後葉に位置付けられよう。

出土遺物 (第3-33図)

1・2ともに京都系土師器の皿ですが、2は口縁部下のナデが強くなってきており、塩地編年の2期に近い。



第3-32図 SK125 遺構図 (1/40)



第3-33図 SK125 出土遺物実測図 (1/3)

### 3. 掘立柱建物

SP001・SP002・SP003 (第3-34図・第3-35図)

磔が充填

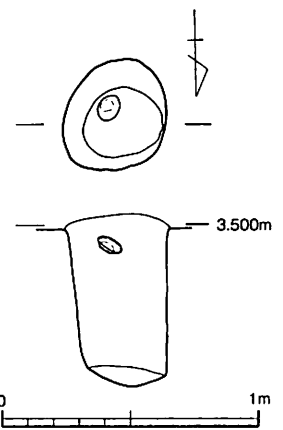
SP001は8-B区に位置し、径0.53m、深さ0.36m、中には磔が充填されている。SP002は8-A区に位置し、径は0.52m、深さ0.17mでやはり磔が充填されていた。両者の間は約1.5mで、磔の充填されている状況や径がほぼ同じ点などから、対になるものと思われる。遺物が出土していないため時期は不明だが、SD116～118のすぐ縁辺に位置し、軸も平行していることから、何らかの関係があるものと思われる。

SP003は11-Z区に位置し、径0.44m、深さ0.63mで、出土する遺物から15世紀末葉～16世紀初頭に位置づけられる。

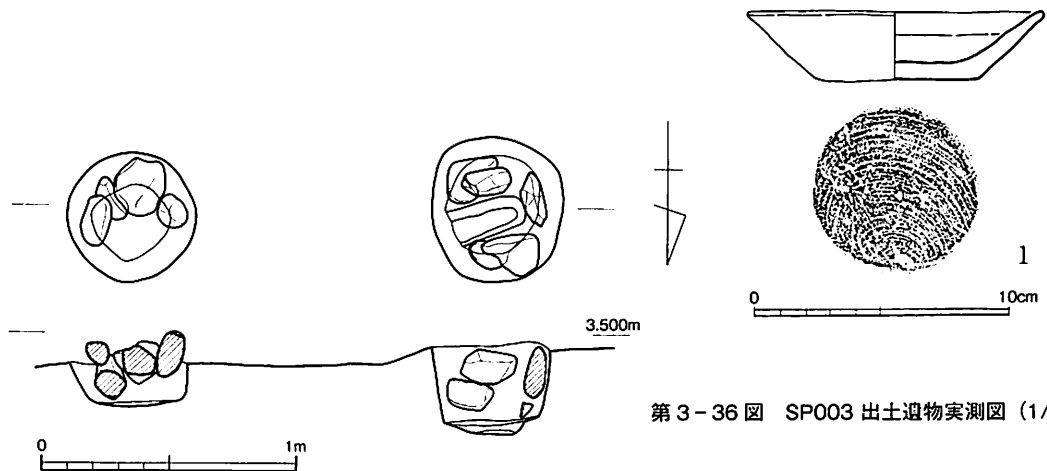
出土遺物 (第3-36図)

在地系土師質土器

1は底部から口縁に向けて直線的に開く在地系土師質土器皿である。



第3-35図 SP003 遺構図 (1/30)



第3-36図 SP003 出土遺物実測図 (1/3)

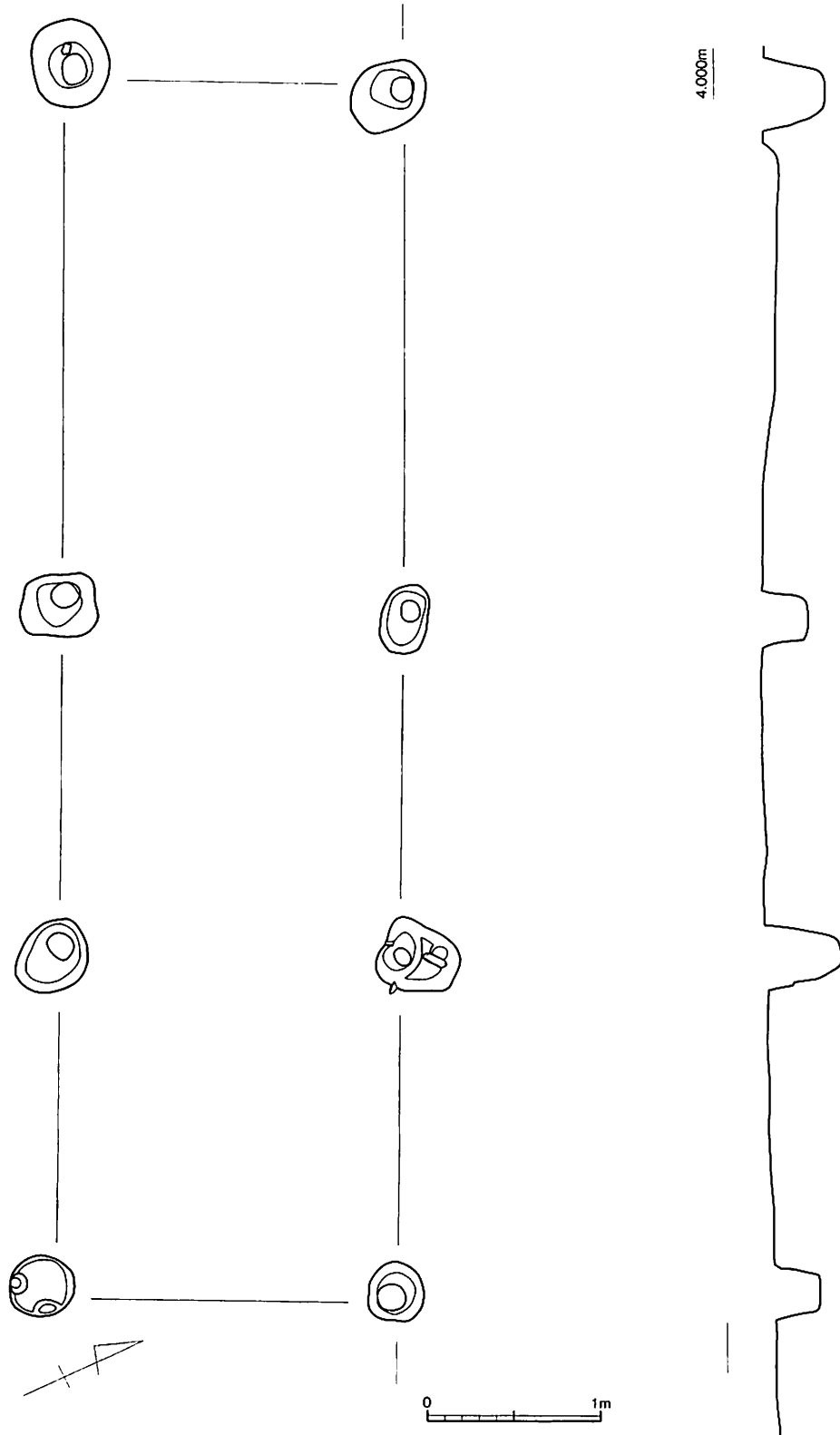
第3-34図 SP001・SP002 遺構図 (1/30)



SB001 (第3 - 37区)

7 - A区に位置する掘立柱建物である。図示しているのは1間×3間であるが、実際は南にまだ展開していると思われる。各ピットからは柱痕も確認され、それらの間を計測すると、短いところで約1.97m、長いところで約3mある。これは間尺になおすと、短い所で6尺5寸にあたる。また長いところはそのちょうど1.5倍にあたる。建物の軸は、W - 30° - Eの方位を示し、SD111・SD116 ~ 118や第10次調査Ⅰ区で検出された16世紀後葉の町屋の区画に平行する。

6尺5寸



第3 - 37図 SB001 実測図 (1/40)

4. 井戸

SE126 (第3 - 38 ~ 40 図)

方形

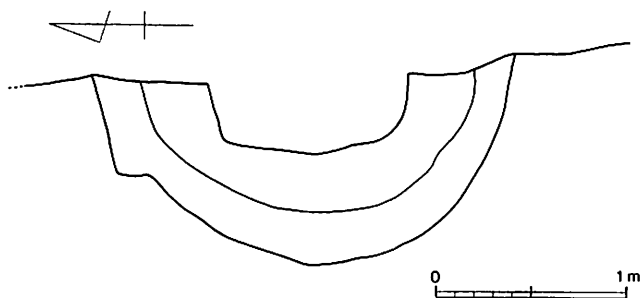
11 - A・Z 区に位置する井戸である。東半分は現在道路となっているため、完掘はできなかった。確認できている範囲で井戸掘形の直径は約 2.2 m ほどである。井側は方形に縦板を組む。縦板の四隅には柱を立て、柄穴を設けて横棧を組んでいる。そして底で取水もしくは浄水のために設けられる井筒には曲物を使用されている。草戸千軒町遺跡で分類された「縦板組隅柱横棧型」に相当する<sup>註1</sup>。草戸千軒町遺跡ではこのタイプは 13 世紀中葉 ~ 14 世紀初頭に多いとし、中世大友府内町跡でも 14 世紀代によく見られる。出土遺物が希少であるが、13 世紀末 ~ 14 世紀初頭頃の龍泉窯系青磁碗が出土しており、該期に比定できよう。

縦板組隅柱横棧型

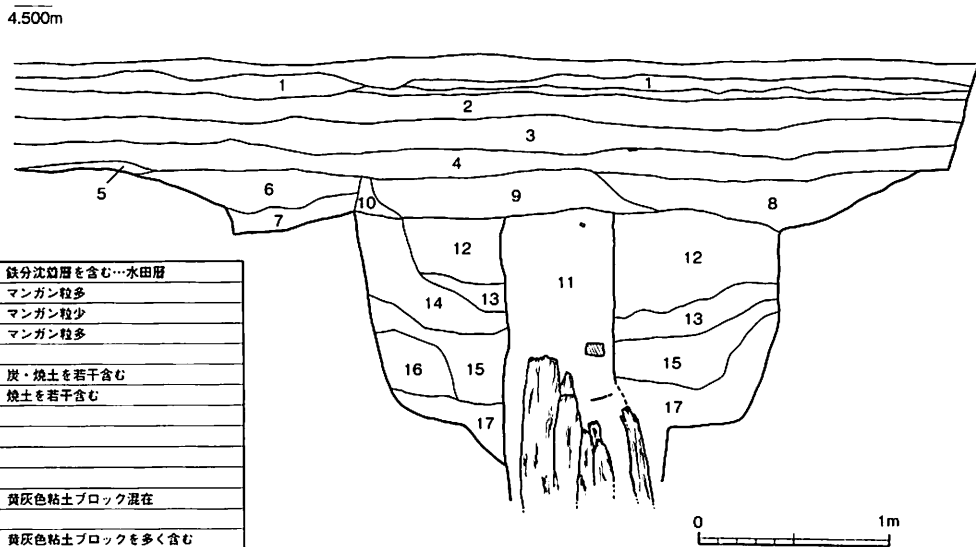
なお井側の規模は、約 1 m の正方形で、曲物は 2 つサイズの異なるものが重なって出土した。出土遺物 (第 3 - 41 図)

鎚蓮弁文

1 は龍泉窯系青磁碗で、胴部に鎚蓮弁文が描かれる。



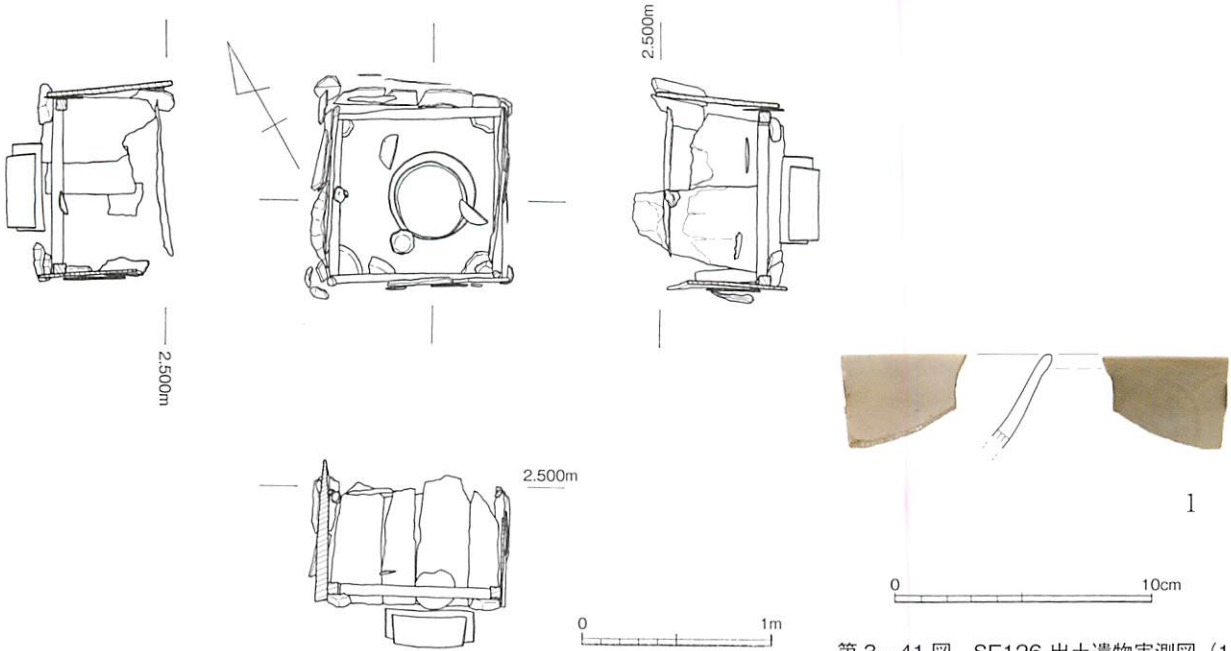
第 3 - 38 図 SE126 遺構図 (1/40)



1層	茶褐色弱粘質土	鉄分沈着層を含む…水田層
2層	灰褐色弱粘質土	マンガン粒多
3層	灰褐色弱粘質土	マンガン粒少
4層	灰褐色弱粘質土	マンガン粒多
5層	灰褐色弱粘質土	
6層	暗褐色弱粘質土	炭・焼土を若干含む
7層	暗褐色弱粘質土	焼土を若干含む
8層	暗灰褐色弱粘質土	
9層	暗茶褐色弱粘質土	
10層	暗褐色砂質土	
11層	暗灰褐色砂質土	
12層	暗灰褐色砂質土	黄灰色粘土ブロック混在
13層	暗灰褐色弱粘質土	
14層	暗褐色砂質土	黄灰色粘土ブロックを多く含む
15層	暗灰色粘質土	
16層	灰褐色砂質土	
17層	灰褐色粘質土	黄灰色粘土ブロック多く含む

第 3 - 39 図 SE126 土層図 (1/40)

註 1 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V 中世瀬戸内の集落遺跡」1996



第3-41図 SE126 出土遺物実測図 (1/30)

第3-40図 SE126 井筒実測図 (1/40)

包含層 (第3-42・43図)

1は景德鎮窯系青花の碗である。見込み部分が緩やかに盛り上がるいわゆる饅頭心である。文様は見込み分に2重界線が巡り、その中に瑞果が描かれる。高台内には「福」の字款が描かれる。小野編年のE群にあたる。2・3は景德鎮窯系青花の壺で、表面にラマ式蓮弁が描かれる。SD111 (第3-5図の1)・SK104 (第3-25図の1)と同一個体と思われる。4は龍泉窯系青磁の碗で、胴部には蓮弁が描かれる。蓮弁の幅は狭くなっている。5・6は中国産白磁の皿で、5は口縁部が端反り、16世紀に位置づけられる。7は中国産陶器の壺の底部で、被熱している。8は中国産翡翠釉の皿である。9は中国産の陶器と思われる。渦巻状の施文がされ釉がかけられている。10は肥前系陶器の瓶の底部で、11は産地不明陶器の碗である。

12・13は京都系土師器の皿で、2期のものと思われる。14は薄手の灰白色を呈する土師質土器で在地のものとは異なる。口縁部に穿孔が1箇所見られる。15～17は在地系土師質土器の小皿である。17は口唇部にススが付着し、灯明皿として使用されたと思われる。15は14世紀代、16は15世紀末葉～16世紀初頭、17は15世紀代か。18～20は土師質土器で焼塩壺の蓋と思われる。21は瓦質土器の香炉である。口縁部下に文様帯が巡り、花文が配される。22は瓦質土器であるが、器形は不明である。底部周辺に雷文のような文様が連続して配され、その上に双頭炭手流雲文が三角形に配される。他に例をみない特殊な文様構成で、陶磁器の模倣形態かもしれない。

23～44は土錘で、大きく長さ6～7cm、幅2cm前後の一群と、長さ5cm前後、幅1.5cm前後の一群とに分かれる。45は土製の鞆の羽口である。46・47は青銅製品である。46は竿秤の錘である。釣鐘形をしており、上部には竿につるすための穿孔がある。鉛同位対比分析の結果華南産の鉛が使用されていることが判明した。詳細は第5章第2節の分析の項を参照されたい。47は用途不明製品であるが、何かの把手であろうか。48～50は砥石、49は石臼の上臼、50は姫島産黒曜石の石核である。53～55は六連式焼塩用製塩土器、56は古代の土師器である。57は古墳時代中期の甕、58は古墳時代前期の高坏である。59は大観通寶である。

ラマ式蓮弁

肥前系陶器

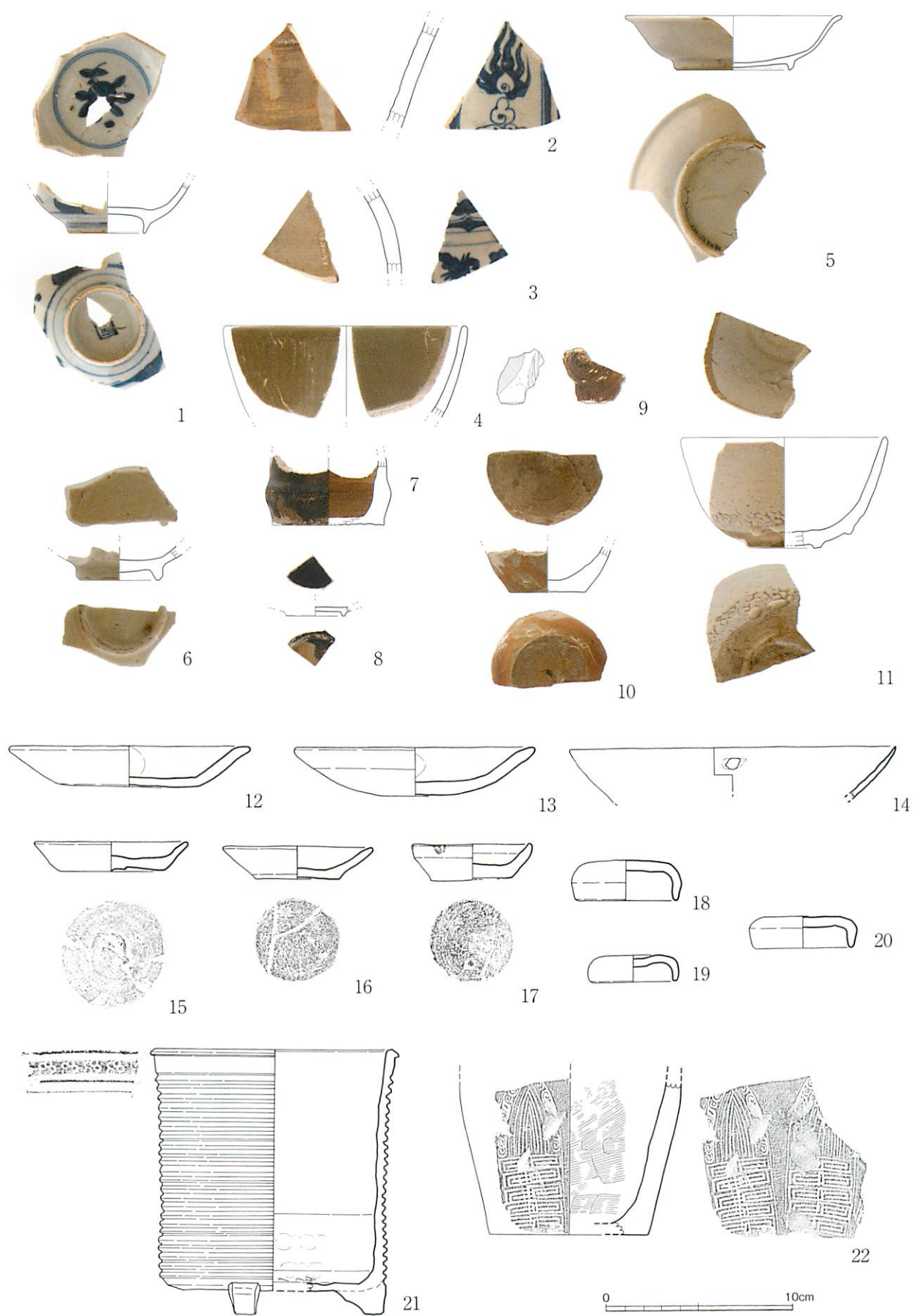
香炉

双頭炭手流雲文

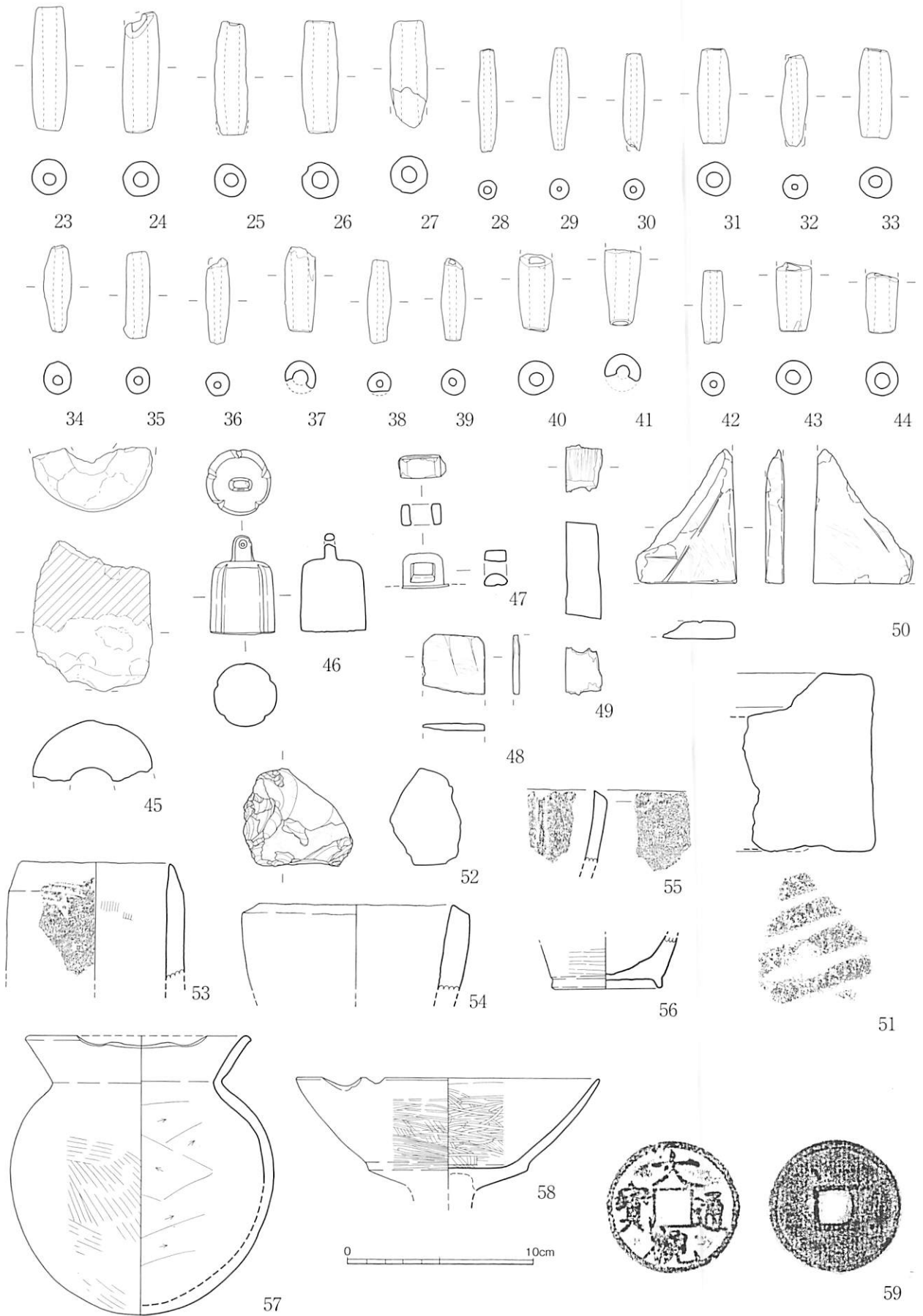
竿秤の錘

華南産の鉛

六連式焼塩用製塩土器



第3-42図 包含層出土遺物実測図 (1/3)



第3-43図 包含層 出土遺物実測図 (1/3) ※ 59のみ 1/1

## 第3節 小結

以上各遺構から得られた所見を統合し、第10次Ⅱ区南調査区における景観の変遷について、整理をしておきたい。(第3-44図参照)

[古代]

製塩土器

7-A・B区・8-A・B区で古代の包含層が検出されている。しかし該期の遺構は検出されておらず、古代にどのような景観をなしていたかは不明である。ただ製塩土器が多数出土しており、本調査区の西側に位置する上野町遺跡からは、多数の土錘が出土しているなど、海岸部における集落の特徴を表している。

[14世紀]

方形縦板組  
隅柱横浅型

中世において遺構が確認できるのは、14世紀段階が初現である。代表的な遺構としては、井戸SE126がある。方形縦板組隅柱横浅型のしっかりした井戸であるが、本調査区において、14世紀代と特定できる遺構はこれのみである。西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区でも14世紀に位置づけられるのは土坑1基しかなく、この時期の具体的な景観は復元できない。ところでこのあと詳述するが、SE126が位置する周囲は、15世紀後半以降は空閑地となっている場所である。したがって、15世紀代以降とは全く異なった空間認識が14世紀代にあったことが判る。

[15世紀後葉～16世紀初頭]

在地系土師  
質土器

この時期の遺構は、主に底部から口縁部に向けて直線的に開き、ロクロ目を顕著に残す在地系土師質土器皿を出土する遺構である。中世6期の備前系陶器搦鉢や幅の狭まった蓮弁を有する龍泉窯系青磁等が共伴する。しかし、中には在地系土師質土器のみを出土する遺構もある(SK101・SP003等)。実はこの在地系土師質土器皿は、本調査区においてはSD116～SD118やSK104等で京都系土師器2期、近世1期の備前系陶器搦鉢等と共伴し、この時期まで残ることが確認されている。したがって在地系土師質土器皿のみ出土している遺構については、16世紀後葉まで下る可能性を考えておかなければならない。

北側は空閑地

さてこれらの遺構の位置関係であるが、検出遺構がさほど多くないので、景観の復元は難しいが、いずれも調査区南側に集中し、北側は空閑地になっている可能性がある。ただSD113のみは調査区を南北に延びており、北側まで展開する可能性があるが、調査区中央部分から北側はSD116～118によって切られており、さらに本調査区の北側に位置する第10次Ⅱ区北調査区においても検出されていない。したがって、この遺構もさほど北側へは展開せず、南側へ延びていくものと思われる。なおこの溝の方位はN-30°-Eと振っており、本調査区西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区で検出された15世紀後半の溝の区画と平行する。

[16世紀後葉～]

北側へカーブ

祐向寺と  
ダイウス堂

16世紀後葉  
以降の府内の  
姿

この時期の遺構でまず注目されるのは溝SD116～118の方位である。9-A区～11-A区までW-4°-Nほどで延びてきて、そこから西側へいくにしたがい急に北側へカーブし、約W-30°-Nの方位となる。もう一つの溝SD111もカーブした後の方位に平行して延びている。この溝の屈曲は、府内古図(C類)(第3-45図)からも窺われる。府内古図では溝の描写はなく、祐向寺とダイウス堂の間を通る道路が北側へ(絵図中では右側へ)カーブしていく様子が描かれている。本調査区ではこの溝は16世紀後葉に掘られ、末葉までには埋まってしまうことが判っている。そして、埋まった後はその上に方位を踏襲して道路が形成されている。最近の発掘調査成果から、府内古図は16世紀後葉以降の府内の姿を描いたと考えられており、絵図はこの溝が埋まった後の道路の屈曲を描いたものと考えられる。

また、この屈曲した後の方位は、西側に隣接する第10次Ⅰ区調査区で検出された町屋の区画に直交する。本調査区では第3-44図の遺構分布変遷図をみると、ピットや土坑群が3-



第3-44図 第10次Ⅰ区・Ⅱ区南調査区遺構変遷図 (1/400)

町屋の裏手

B区～4-B区あたりにかけ非常に密集しているのが判るが、その密集しているブロックは、東より角度を振って位置している。方位的には約N-30°-Eぐらいを指す。この第10次I区調査区では、確認された井戸や廃棄土坑はいずれもこのブロックの南側に集中しており、北側方向に向けて位置している町屋の裏手の状況を示しているものと思われる。

さらに目を転じて第10次II区南調査区の7-A区を見てみると、同じように東よりに角度を振って、掘立柱建物SB110が建っている<sup>註1</sup>。この掘立柱建物は確認されているのが一部分であるため、正確な規模等は判らないが、恐らく南へまだ展開するものと思われる。また、西側の一間は柱間が1.5倍広いが、この建物が北を向いていたのか、西を向いていたのか判断しかねる。いずれにしてもこの建物部分が、ある区画の前面であることには違いはないと思われる。

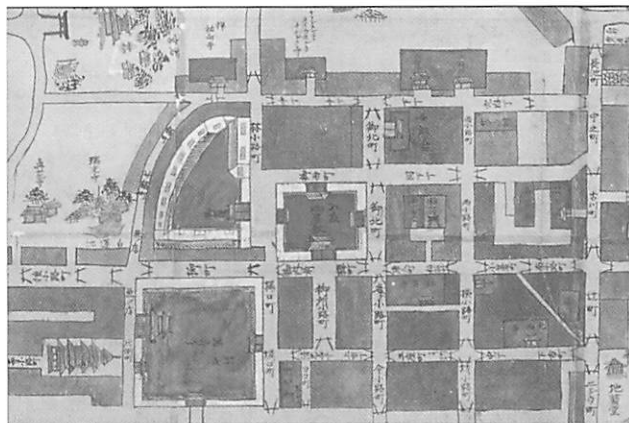
異なる区画

こうして見ると、第10次I区調査区の町屋の区画と、第10次II区南調査区の掘立柱建物の区画は同じ方向性をもって位置しているが、前面のラインはよく見ると東西方向で若干ずれていることが判る。これは第10次I区調査区の5-A区においては、南北に延びる溝SD001が存在しており、それを境にその東西は別の区画がなされていることによる。この異なる区画は、単に町屋の並びを区画しただけなのか、あるいは性格の異なる施設が存在する故の区画なのかは、現時点では即答できない。ただ、第10次II区南調査区においては、SD116～SD118やSK104から、まとまった量で京都系土師器皿や在地系土師質土器皿が出土しており、中世大友府内町跡で一般的にみられる町屋の遺物出土状況とは異なる点は考慮する必要がある。これが、府内古図に描かれる「祐向寺」に関係するものなのか、近くに武家屋敷的性格のものがあったことによるものなのか、今後さらなる検証を要する。

遺構の空閑地  
道路

巨大な土坑

なお、この区画の前面では興味深い状況が認められる。第10次I区調査区の町屋の前面は調査区外なので不明だが、第10次II区南調査区の掘立柱建物の区画のラインの前面は、それから東の8～11区に目を転じていくと、ずっと遺構の空閑地に成っていることが判る。これは、この区画がSD116～SD118と併存していれば、当然必要な空閑地である。この空閑地が一定期間存在していれば、ここが道路であった可能性も出てくるが、現時点で道路はさらに北に検出されており、本調査区内では、その痕跡は確認できていない。ただ、空閑地に存在する巨大な土坑SK104などは、例えば第51次調査区等で道路の下から連続して土坑が検出されるなどの例もあることから、中世大友府内町跡で見られる空閑地利用の一つの例として注目される。



第3-45図 府内古図 C類

註1 この掘立柱建物SB001からは遺物の出土がないため、それからの時期の認定はできないが、この掘立柱建物SB001は15世紀末葉～16世紀初頭の土坑SK120・SK121を切って存在している点や柱間が6尺5寸である点などから、16世紀後葉の可能性が高い。



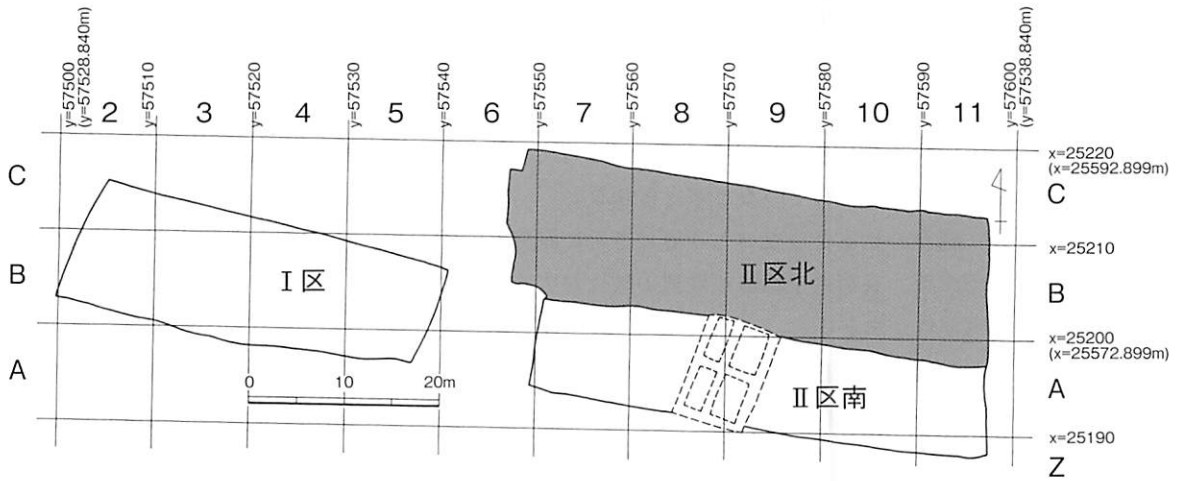
## 第4章 中世大友府内町跡第10次Ⅱ区北調査区

### 第1節 調査の方法 (第4-1・2図)

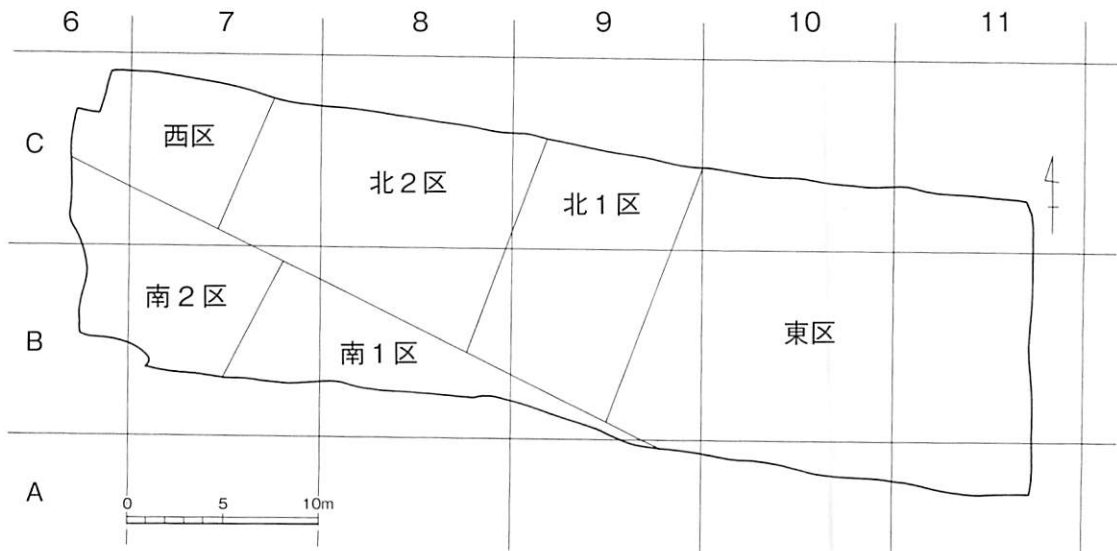
現在の地籍の区割りにもとづいて、東から順に東区、北1区、北2区、西区、南1区、南2区の6区に分ける6つに地区割りをして調査をおこなった。そのうち、西区は地籍図の復元から教会跡地とかつて推定された地片に重なる(第1章第4節参照)。なお北2区の北部は、前年度のⅡ区南調査時に一部先行して調査している。S130～140までがその際検出された遺構である。

座標 測量および実測においては、旧国土座標に基づいた正方位の10m方眼を組んで使用した。南北にアルファベットを用い、東西には算用数字を用いた。

記録方法 測量は光波トランシットを用いて、原則として20分の1、遺構の状況に応じて10分の1図を作成した。墓地および人骨については必要に応じて5分の1図を作成した。また調査区全体の断面土層図を10分の1で作成した。写真は35ミリ白黒とカラーリバーサルポジを基本に、必要に応じて6×9中型カメラを使用し、メモとしてデジタルカメラを使用した。



第4-1図 10次調査区の調査位置図 (1/800)  
( )内は、世界測地系



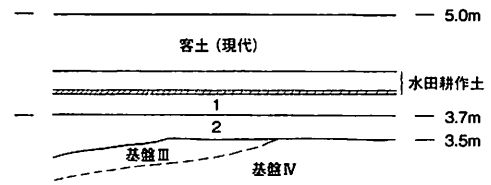
第4-2図 調査区の分割 (1/400)

第2節 基本層序（第4-3図・付図8）

以下に基本層序を上から下にむかって説明する。

現代の客土

客土：水田を埋めて宅地を造成した際の整地層である。1948年の米軍撮影の空中写真では、この場所はまだ水田であるので、その後のものである。



第4-3図 層序概念図

水田層

最終水田耕作土：暗灰色土。宅地化される直前の水田の耕作土である。下部に赤く硬化した水田床土の面が広がる。

近世前期

第1層：マンガン沈着のはげしい明茶色土。細かく見ると更に多数の水田床面を観察できる。近世から近代に水田層である。

整地

第2層：マンガン沈着のある暗茶褐色土。調査区全体にひろがる整地層である。彫三島碗、絵唐津皿、京都系土師器4期の皿など17世紀前半の遺物を最新のものとする。おそらく17世紀＝近世前期の整地層と推定される。この層の上面および掘下げ途中で発見された遺構はすべて近世の遺構であった。この層の上面は水平でマンガンの沈着が激しく、水田の床面であったことを示す。下部の基盤層との境界は不整合面をなしているため、整地前に一度東側を削り西側をかさ上げする削平が行われていると考えられる。

地山

細かく見ると3ないし4層にさらに細分可能である。その最下層に当たる2c層に彫三島碗、絵唐津皿、京都系土師器4期皿の破片が広く分布しており、造成の時期も17世紀初頭にさかのぼる可能性がある。

基盤Ⅲ層：黄色粘土層。基本的には無遺物層であるが、場所によっては古代以前の遺物が含まれる。

基盤Ⅳ層：黄色砂層。無遺物層。

基盤Ⅲ・Ⅳ層は中世大友府内町跡が立地する微高地を形成する、遺跡にとっては地山となっている。10次調査区の位置する辺りはその微高地の西縁に当たるため、基盤層は西に低く東に高く堆積している。そのため調査区西半では第2層が厚く、東側では第2層を除去するとすぐに、基盤Ⅲ層がさらに基盤Ⅳ層が露出する状況である。

第3節 遺構の概要（第4-1表、第4-2表、付図4）

2001年調査

北2区の北部は前年2001年度のII区南調査時に一部先行して調査している。S130～140までがその際検出された遺構である。その際の土層所見より、第2層の存在とその下で戦国時代の遺構が検出されることが判明していたので、調査はまず重機によって客土と最終水田耕作土と第1層土を除去し、第2層上面で最初の遺構検出作業をおこなった。その場で攪乱を識別し、まず攪乱土坑の清掃を行い断面観察をおこなって、第2層以下の遺構の深さを観察した。同時に調査区内に抜き取ることが不可能な建物基礎のコンクリート杭が多数残っていた。このためこの杭が残る調査区東半は第1層から人力で掘下げた。第2層上の遺物は少なく近世から近代の水田耕作に関わる遺構のみで、現在の宅地の境界や地籍図の地割りの境界と一致する溝や石列であった。

2層上面

2層除去後

その後第2層をすべて人力で掘下げたが、その途中で遺構を発見することはまれで、第2層そのものは長期間の堆積というよりは一気に埋められた整地層と考えられた。第2層を除去した面は、基盤層の自然層である。この面において奈良時代から戦国時代末までの遺構が約160基検出された（付図4）。それらの遺構を層位的に区分することは不可能であったので、遺構の切合関係を徹底的に検討した。それでも後の整理段階で訂正した切りあいが二三存在したが、ほぼ出土遺物の

第4-1表 10次Ⅱ区北調査区遺構一覧表

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
1層	近世水田層	17世紀後半以後	-	全面	-	-	-	近現代遺物	-	-	88
2層	整地層	16世紀末～17世紀前半	-	全面(東区を除く)	-	最下部に絵唐津・彫三島	-	-	-	-	88
SD116	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	南2区・南1区	-	上層は黄色土ブロック。凝灰岩礫散在。	SD117を切り、SD168とS190に切られる。	-	須恵器、土師器	-	166
SD117	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	南2区・南1区	-	凝灰岩礫多い。	SD118を切り、SD116に切られる。	京都系土師器2期	無し	人為的埋め戻し。	164
SD118	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	南2区・南1区	-	礫多く、最下部はグライ化	SK302を切り、SD117に切られる。	人面石、	須恵器甕	-	162
ST130	1号墓	16世紀第4四半期前半	C7区	北2区	-	木棺墓。伸展葬。	SD165を切り、SD167に切られる。	鉄釘	-	木棺墓(長方形)	263
SD131	溝	16世紀第4四半期前半	C8・C9区	北1・北2区	-	単層：暗茶褐色土。凝灰岩礫集中。	SK252、Sk256とSK269を切る。	京都系土師器3期	須恵器、土師器	区画溝	183
S133	→SK255										201
S134	集積遺構	16世紀第4四半期後半	C8区	北1・北2区	-	礫群	SK252を切る。	京都系土師器2期皿	-	-	238
ST135	2号墓	16世紀第4四半期前半	C7区	北2区	-	-	-	16世紀第2四半期の遺物	-	16世紀第2四半期の遺物の可能性あり	266
SK136	土坑	16世紀	C8・C9区	北2区	-	礫廃棄土坑。	SD131と重複SK137に切られる。	備前焼	-	-	240
S137	→SK269										202
SD138	溝	17世紀初頭	C8区	北2区		礫多い。	SD131に切られる(調査時の所見)	唐津焼 凝灰釉陶器	-	切りあいの所見は間違いか。	244
SX139	石列	近世中期	C7区	北2区	2層中出土	礫が西に面する。	SD145の下、SF151の上	-	-	石材に五輪塔の部材を利用。	245
SD140	溝	16世紀第2四半期	C6・C7区	西区	-	-	SK247、SK301とSD303を切る。	京都系土師器1期皿	無し	-	141
SD141	溝	16世紀第4四半期後半	B10・B11区	東区	2層直下検出	上面は道路面？大量の凝灰岩礫混じる。	SD165、SK251=SK302を切る。	礫多量・焼土層廃棄・五輪塔廃棄	須恵器。土師器	-	219
SP142	ピット	近世中期	B9区	北1区	2層上面	単層：暗黄褐色土(マンガン沈着あり)	2層を切る。	唐津碗 凝灰釉	-	ピットの複合・上部からのしみて遺構でないかも。	247
SD143	水路痕跡	近現代	C9・B9・B10区	北1区・東区	2層上面	単層：マンガンの沈着	2層を切る。	-	-	上層からのしみて、近世の水路の位置を反映。	251
SE144	井戸	16世紀第2四半期	C10・B10区	東区	2層1回目後	井筒は木製桶。	SD197を切り、SK224に切られる。	糸切り土師・ロクロ目土師 京都系土師器2期	-	掘形円形。小型=武家屋敷にある。完掘せず。	143
SD145	水田側溝	近世中期	C7・B7・B8・B9区	境界	1層下部	小溝が3回以上重複する。	SK146に切られる。	近世陶器(唐津朝毛目碗)	-	この溝が近代の地籍境となる。	246
SK146	土坑	18世紀後半以後	C7区	境界	1層下部	単層：灰色砂層	SD145を切る。	唐津焼碗、 鑄鉢	朝鮮王朝産砂目陶器	方形箱型	246
SE147	井戸	1587年以後	C10区	東区	2層1回目後	井筒は木製桶。埋め戻し時の内部土坑あり。	SK225に切られる。	彫三島埴片(掘形内)	-	掘形円形。井筒内に礫廃棄。完掘せず。	229
SE148	井戸	16世紀第4四半期	C9区	北1区	2層2回目後	方形石組井筒、最下層木製桶	SK278とSP288を切る。SK264とSK236に切られる。	近世1期の備前焼甕口縁。	無し	掘形円形	192
ST149	8号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層1回目後	唐櫃、釘で小口を止める。	ピットとSK163、ST289(13号墓)、ST295(14号墓)を切る。ST274(12号墓)に切られる。	鉄釘	古代黒色土器	木棺墓(小児墓)覆土内に京都系土師器片多し。	272
ST150	4号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層1回目後検出	唐櫃、釘で小口を止める。	SD277とSD294を切る。	最上部に絵唐津、釘、京都系土師器2期	-	転用木棺墓(成人墓)	266
SF151	石敷き道路	16世紀第1四半期	C6・C7・B7・B8・B9・B11区	境界	2層除去後検出	1層(砂利層)を路面にその下に2層(灰色砂層)を基礎にした1単位の道路面(貝殻混じる)が最高7面存在する。	SD-167・168に切られる。 2層土で埋没	上層に京都系土師器Ⅱ期小皿	-	-	99

第3節 遺構の概要

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
ST152	9号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層除去後、基盤IV層上面で検出。	方形木棺(屈葬東向き北頭位)	S153とSD255を切る。	頭骨	-	二段掘り墓坑の可能性のこる。	277
S153	浅い溝	-	C7・C8区	北2区	2層除去後、基盤IV層上面で検出。	単層：2層土	ST257(12号墓)を切り、ST152(9号墓)に切られる。	-	-	性格不明	-
ST154	5号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	2層除去後検出	-	なし。	頭骨・歯	-	木棺墓(乳児墓)20×30cm	257
SP155	ピット	-	B8区	北2区	2層除去後検出	単層：2層土	なし。	-	-	-	-
SK156	廃棄土坑	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層除去後検出	単層：2層土	SK163とSD165を切る。	動物骨片・銅銭(元豊通宝1078)1枚・漳州青花片	-	浅い皿状、底面凸凹	204
ST157	6号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	2層除去後検出	木棺痕跡	なし。	鉄釘1点、頭骨	古代須恵器・土師器	木棺墓(幼児墓)	258
ST158	7号墓	16世紀-第3四半期	C8区	北2区	2層除去後検出	木棺痕跡	なし。	歯と頭骨。	-	木棺墓(幼児墓)、北半掘りすぎ。	258
SP159	ピット	-	B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	浅い皿状：柱穴ではない	-
SP160	ピット	-	B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	なし。	-	-	浅い皿状：柱穴ではない	-
SP161	ピット	-	B11区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	なし。	-	-	浅い皿状：柱穴ではない	-
SP162	柱穴	-	B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	SK237を切る。	-	-	-	-
SK163	廃棄土坑	16世紀第2四半期	C8区	北2区	2層除去後検出	単層：2層土	ST149(8号墓)・SK156に切られる。SD-165を切る？	土鈴1点完形品、ロクロ目土師器片、骨片	-	浅い不整底部	149
SX164	溝状くぼみ	16世紀第3四半期	C9区	北1区	2層除去後検出	単層：2層土で、小礫多い。	なし。	京都系土師器2期	-	地形のくぼみか、底面でこぼこ。	153
SD165	溝	15世紀後半～16世紀第3四半期	東西溝	西区・北1区・北2区	2層除去後検出	矢板による土留めが北側にある3回の掘りなおし痕あり。	SX251とSE300を切り、SX139の下、SK163に切られる？、SD168、SD250とSD292に切られる。	-	須恵器	S130を切る？、水路G区で糸土師の埋納あり。	107
SP166	柱穴	16世紀第1四半期	B6区	南2区	2層除去後地山上で検出	単層：2層土	なし。	ロクロ目土師のみ。	無し	-	140
SD167	溝	16世紀第4四半期後半	東西溝	西区・北1区・北2区	2層除去後検出	礫集中箇所あり	SD165・SF151とSD250、SD270を切る。	キセル	古代須恵器・土師器	何回か切りあった溝の最上位の溝。	223
SD168	溝	16世紀第4四半期後半	東西溝	南2区・南1区	2層除去後検出	-	SD116の上、SF151とS190を切る。	中国景德鎮窯系青花皿F群	円筒埴輪、古代の須恵器・土師器	-	226
SP169	ピット	-	B10区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	-	瓦片	-	-	-
SP170	ピット	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SP171	不整ピット	-	B10区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	-	-	-	-	-
SK172	不整土坑	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	底部凸凹。遺構か疑問。	-
SP173	柱穴	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	-	-	-	-
SP174	ピット	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SP175	柱穴	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SD176	溝(建物基礎)	16世紀第1四半期以前	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	SP195と重複。ピットに切られる。	無し。	-	SD197と一連の遺構。底部に浅いピットが連なる建物の基礎あるいは壁の下部。	133
SK177	土坑	近世初頭	B11区	東区	基盤IV層上	-	SP179を切る。	キセルの火皿	-	底部凸凹	245
SP178	柱穴	-	C11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	SK203とSD204を切る。	土器片あり。	-	-	-
SP179	小ピット	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	SK177に切られる。	土師器片1	-	-	-
SK180	土坑	16世紀	C11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	中国褐釉陶器土師器	-	底部凸凹	241
SP181	ピット	-	B11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	土器片あり。	-	-	-
SK182	土坑	-	C11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	-	-	-	-	-
SP183	ピット	15世紀	C11区	東区	基盤IV層上	単層：2層土	なし。	糸切りの在地形土師器底部。	-	2つのピットからなる。	131

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
SP184	柱穴	16世紀 第2四半期以後	C11区	東区	基盤Ⅳ層上	単層：2層土	なし。	京都系 土師器1期皿	-	-	243
SP185	柱穴	-	C11区	東区	基盤Ⅳ層上	方形往復	なし。	-	-	-	-
SP186	不整ピット	-	C10区	東区	基盤Ⅳ層上	-	-	-	-	-	-
SP187	柱穴	-	C10区	東区	基盤Ⅳ層上	礫あり。	-	銅製品1	-	-	-
SP188	柱穴	-	C10区	東区	基盤Ⅳ層上	-	-	-	-	-	-
SK189	長い土坑	16世紀 第1四半期	B6・ B7区	南2区	基盤Ⅲ層上	単層：2層土。人頭大の礫含む。	SK227を切り、SK191とST192にきられる。	ロクロ目土師、系切り土師、動物骨	無し	底面に浅い溝有り。廃棄土坑として埋没。	138
SK190	土坑？溝？	16世紀 第2四半期	B7区	南2区	基盤Ⅳ層上	-	SD168とSK191にきられる。SD116を切るか？	京都系土師器皿	無し	-	150
SK191	土坑	16世紀 第2四半期	B6区	南2区	2層除去後検出	単層：真っ黒い炭泥じり土充滿。	SD189とSK190を切り、ST192に切られる。	京都系土師器2期、銅製の袈裟金具。	古代土師碗	-	150
ST192	墓？	16世紀 第2四半期	B7区	南2区	-	-	SD189とSK191を切る。	釘、京都系土師器1期	無し	木棺墓の可能性有り。	151
SK193	土坑	16世紀 第1四半期	B6区	南2区	基盤Ⅲ層上面	3回の廃棄有り。	SK226とSK227を切り、SD194と柱穴に切られる。	上層に係切り土師器	無し	廃棄土坑。	139
SD194	溝	16世紀 第4四半期	B6区	南2区	基盤Ⅲ層上面	単層：2層土	SK193を切り、SD168に切られる。	瓦質火鉢	-	SD168にとりつく溝か。	239
SP195	柱穴	16世紀前半	B11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	-	SD176と重複。	瓦質銅系土師	-	-	243
SP196	柱穴	-	B11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	単層：2層土	-	-	-	-	-
SD197	溝（建物基礎）	16世紀 第1四半期以前	B10・B11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	単層：2層土	SE144に切られる。	無し	-	溝SD176と一連の遺構。遺物の基礎あるいは壁の下部。	133
SK198	土坑	-	C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	やわらかい暗色粗砂層と硬い暗色粘土のラミナ状堆積＝木成。	なし。	-	-	L字形土坑。	-
SK199	2つの土坑の重複（A/B）	15世紀 前半（B⇒A）	C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	炭屑	S201とSP213に切られる。	白磁、系切り土師器のみ	-	土師器埋納、祭祀遺構。	125
SP200	ピット	-	B10区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	-	なし。	-	-	-	-
S-201	小ピット	-	-	-	-	-	SK199を切る。	-	-	-	-
SP202	自然ピット	-	B11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	単層：2層土	-	土器片あり。	-	-	-
SK203	土坑	15世紀	C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	単層：2層土	SP178とSD204に切られ、P216とSP217と重複。	系切り土師のみ	-	境界につくられた浅い土坑。	127
SD204	溝	16世紀	C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	上下2層：上層は黄色粘土層（基盤Ⅲ層上）。	SK203を切り、SP178とピットに切られる。	瓦質火鉢土師器	-	建物の基礎あるいは壁の下部。	240
SP205	小ピット	-	C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	単層：2層土	なし。	-	-	-	-
SK206	土坑？	15世紀	C10・C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	単層：2層土	SK207とSE234に切られる。	無し。	-	底面凸凹。	124
SK207	土坑？	15世紀	C10・C11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	-	SK206を切り、SE234に切られる。	無し。	-	底面凸凹。	124
SD208	溝（建物基礎）	16世紀 第1四半期以前	B10・B11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	底部に浅いピットが連なる。一部にぐり石。	SK212を切る。	無し。	-	建物の基礎あるいは壁の下部。	133
SK209	土坑	-	B10区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	-	なし。	-	-	-	-
SE210	井戸	16世紀 第4四半期	B10区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	井筒は木製桶。底には小礫で固めている。掘形内には礫と地山ブロック多い。	Sd141,SD165,SK265,SK266,SK272とSD292を切る。	近世1期の備前焼甕口椀。	-	-	229
S-211	-	-	B10区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	-	-	-	-	-	-
SK212	土坑	15世紀	B11区	東区	基盤Ⅳ層上検出。	砂と黄色土ブロックの互層。礫は少ない。	SD208に切られる。	系切り土師 京都系土師器	-	-	128
SP213	ピット	16世紀 第4四半期	C11区	東区	-	-	SK199を切る。	華南三彩	-	-	239

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
SP214	ビット	16世紀第4四半期	C11区	東区	—	—	なし。	備前焼壺(接合資料4)。	—	浅いビット。	239
SK215	土坑	16世紀第4四半期後半	B9区	東区	2層除去後検出	単層：黒灰色軟質土(小礫混じり)。	SK263,SK267とSK279、SK293を切る。	京都系土師器2期皿	弥生土器	—	237
SP216	柱穴	—	C11区	東区	SK203の底面で検出。	単層：2層土	SK203と重複。	—	—	—	—
SP217	柱穴	—	C11区	東区	SK203の底面で検出。	単層：2層土、礫はいる。	SK203と重複。	—	—	—	—
S-218	不明	1587年以後	B11区	東区	基盤IV層上検出。	—	SK220を切る。	彫三島出土	—	—	234
S-219	—	—	B11区	東区	基盤IV層上検出。	—	Sk220を切る。	—	—	—	—
SK220	土坑	16世紀	B11区	東区	基盤IV層上検出。	焼土、円礫小礫多い。	S217とS218に切られる。	銅銭1枚	古代土師器	—	242
SP221	ビット	15世紀	C10区	東区	基盤IV層上検出。	—	なし。	糸切り土師のみ	無し	—	131
SP222	ビット	—	C10区	東区	基盤IV層上検出。	—	なし。	—	—	—	—
SP223	ビット	15世紀	C10区	東区	基盤IV層上検出。	—	SD245に切られる。	糸切り土師のみ	白磁碗	—	131
SK224	土坑	16世紀第3四半期	C10・B10区	東区	基盤IV層上検出。	—	SE144とSD245を切る。	完形の土師器を上向きにおく。	—	埋納祭祀遺構。	155
SP225	ビット	—	C10区	東区	—	—	SE147を切る。	—	—	—	—
SK226	土坑2基	古代	B6区	南2区	2層除去後検出	底面に炭層堆積。上層は基盤III層土。	SK193に切られる。	古代の土師器碎片のみ。	—	人為的埋め戻し。南側の土坑が北を切る。	97
SK227	土坑	16世紀第1四半期	B6区	南2区	基盤III層上検出	上下二層に分かれ、上層は基盤III層粘土で埋め戻して密閉している。下層には礫が集中。	SK189とSK193とビットに切られる。	ロクロ目土師のみ。	無し	南方向からの埋め戻し。	137
SK228=SK232	土坑	16世紀第3四半期	C9・C10区	北1区	2層除去後検出	単層：黄色土小ブロック混じりの暗黄褐色土(小円礫、1cm大の炭焼土)、人頭大の礫多い。	SK275とSK276を切り、SK228に切られる。	京都系土師器2期の大型片集中。	縄文晩期深鉢	複数の土坑の重複	156
SK229	土坑(方形)	16世紀第4四半期前半	B9区	北1区	2層除去後検出	単層：2層土、大型礫散在。	SD230を切り、SD165、SK228とSK232に切られる。	京都系土師器2期皿	須恵器、製塩土器	廃棄土坑。3つの土坑の切りあいか。	207
SD230	溝	16世紀第4四半期前半	B9区	北1区	2層除去後検出	暗黄褐色微砂質土(1cm大の黄色土ブロック、炭焼土多く含む)。	SD284を切り、SK229とSK273に切られる。	京都系土師器3期皿	無し	SK261からの排水溝か	186
SK231	超大型方形土坑	16世紀第4四半期後半	B9・10区	東区	2層除去後検出	凝集中。凝灰岩と結晶片岩が多い。	SK261,SK262とSK263、SE291を切り、SD141に切られる。	中国景徳鎮窯系青花皿F群彫三島碗	古代の須恵器	—	235
SK232	土坑	—	—	—	—	—	—	—	—	(=SK228)	156
SP233	不整ビット	16世紀第4四半期	B9区	北1区	2層除去後検出	単層：2層土	SD284と重複。	京都系土師器3期皿	無し	—	240
SE234	井戸	16世紀後半	C10区	東区	2層除去後検出	井筒は小型木製桶。	SK235(=243)を切る。	掘形内：銅銭2、京都系土師器2期片。動物骨。	青磁皿	掘形に銅銭埋納。小型桶は武家屋敷に多い。湧水のため、完掘できず。	154
SE235	井戸	16世紀第2四半期	C10区	東区	2層除去後検出	素掘りか?内部土坑(=SK243)	SK206、SK207を切り、SE234に切られる。	ロクロ目土師、京都系土師器1期	無し	—	142
SK236	土坑(堅穴遺構)	16世紀第4四半期前半	C9区	北1区	2層除去後検出	柱穴7本の方形堅穴遺構。凝灰岩礫多い。	SE148とSK264、SK275を切り、SK252に切られる。	完形の土師器皿が逆さにおかれる。内部に灰が詰まる。	古代の製塩土器	土器埋納の祭祀遺構。	199
SK237	長円形土坑	16世紀第4四半期	B10区	東区	2層除去後検出	単層：暗黄褐色砂質土(1cm大の炭焼土含む)。	SK266を切り、SP162に切られる。	鉄釘。	—	—	239
SK238	土坑	16世紀第2四半期	B10区	東区	2層除去後検出	薄い炭層が何回も広がる。	SK271を切り、SP249に切られる。	京都系土師器1期皿	無し	何度か火を焚いたあとあり。	145
SD239	溝(=SD245)	16世紀第1四半期	B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	SK265に切られる。	糸切り土師器、備前焼。	無し	—	133
SP240	柱穴	16世紀第2四半期以後	B10区	東区	2層除去後検出	—	SK266と重複。	京都系土師器1期皿。	—	—	243

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
SP241	柱穴	-	B10区	東区	2層除去後検出	-	SK266と重複。	-	-	-	-
SP242	柱穴	-	B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	-	-	-	-	-
SK243	土坑	16世紀第2四半期	C10区	東区	2層除去後検出	板材出土。	SE234に切られる。	土師器ほか	-	SE235の内部土坑	146
SK244	土坑	-	C10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	ピットに切られ、SD245と重複。	-	-	-	-
SD245	溝 (=SD239)	16世紀第1四半期	C10・B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土	SP221, SP223を切り、SK224に切られる。SK244と重複。	土師器燵台A1類	古代土師器	-	133
SK246	土坑	16世紀第2四半期以後	C7区	西区	2層除去後検出	-	SK247を切る。	-	古代須恵器 古代土師器	-	242
SK247	超大型方形土坑	16世紀第1四半期	C7区	西区	2層除去後検出	-	SD140, SK246とSK268(3号墓)とSD303に切られる。	ロクロ目土師皿完形品、備前焼亀、白磁	無し	一部を調査したのみ。	134
SP248	柱穴	-	C7区	西区	2層除去後検出	単層：2層土	-	-	-	-	-
SP249	ピット	16世紀後半	B10区	東区	2層除去後検出	-	SK238を切る。	鉄器	-	-	243
SD250	溝(V字溝)	16世紀第4四半期前半	東西溝	中央	SD167の底面で検出。	礫多い。最上層に粘土ブロック多い。	SD165を切り、SD167, SD270に切られる。	近世1期の備前焼壺I1縁、上層から完形の京都系土師器2期小皿。	須恵器ほか	埋没前に埋め戻し。	168
SK251 = SK302	大型土坑 (SK302を含む)	15世紀後半	B11区	東区	-	礫が散在。砂礫と粘土の互層 = 人為的な埋め戻し。	SD141とSD165, S280, S281, S282に切られる。	完形の糸切り土師あり。	-	-	128
SK252 = S133	土坑	16世紀第4四半期前半	C9区	北1区	-	礫集中。焼土集中	SK236を切り、SD131, SK134, SK269に切られる。	中国漳州窯系青花 京都系土師器3期皿 動物骨多い。	古代の須恵器・土師器	祭祀遺構か。	201
SP253	小ピット	-	C8区	北2区	基盤2層上検出。	単層：2層土	小溝を切る?	-	-	-	-
SP254	柱穴	-	C8区	北2区	-	-	SD255を切る。	-	-	→ SP290	-
SD255	溝	15世紀	C7・C8区	北2区	-	明灰褐色土：小礫(礫が砕けたような粗い堅い土)を多く含む。	SD259, SD294を切り、ST149(8号墓)、ST152(9号墓)、SP254, ST257(11号墓)、ST274(12号墓)、ST296(15号墓)に切られる。	完形糸切り土師器1枚上面で検出。 京都系土師器なし。	-	墓地以前の区画溝	118
SK256	土坑	15世紀後半	C8区	北2区	-	焼土ブロックと多量の礫を含む。	SD131, SD259, ST297(16号墓)とST299(17号墓)に切られる。	牛馬骨、焼土炭、糸切り土師器	-	-	121
ST257	11号墓	16世紀第4四半期前半	C7区	北2区	基盤IV層上で検出	長方形、人骨、乳歯	SD255を切り、S153に切られる。	ガラス玉1点	-	幼児墓	279
SP258	ピット	-	C8区	北2区	基盤IV層上で検出	単層：2層土と地山ブロックとの混層(C)。	-	-	-	-	-
SD259	溝	15世紀	C7・C8区	北2区	基盤IV層上で検出	-	SK256を切り、SD255とST260に切られる。	-	-	墓地以前の区画溝	118
ST260	10号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	基盤IV層上で検出	長方形木棺。	SD259を切る。	無し。	-	東西方向。小児伸展葬。	278
SK261	石組土坑	16世紀第4四半期前半	B10区	東区	SK231の底面で検出。	SD292と接続。大型礫で石組み。小礫充滿。2層土。	SE291を切りSK231に切られる。	中国漳州窯系青花	古代土師器	水溜遺構か。	186
SK262	廃棄土坑	16世紀第4四半期前半	B10区	東区	SK231の底面で検出。	瓦礫充滿。	SE291とSD292を切り、SK231に切られる。	近世1期の備前焼	-	井戸封じの内部土坑か。	209
SK263	土坑(長方形・集石)	16世紀第4四半期前半	B9区	東区	SK231の底面で検出。	人頭大の礫充滿。	SK279をきり、SK215とSK231に切られる。	中国漳州窯系青花	-	-	205
SK264	土坑	16世紀第4四半期前半	C9区	北1区	SE148掘り下げ中検出。	単層：2層土	SE148を切り、SK236に切られる。	中国製焼締陶器描鉢(接合資料18)	古代土師器	ほとんど遺物なし。	199
SK265	土坑	16世紀第2四半期	B10区	東区	2層除去後検出	単層：2層土(茶褐色土)	SD239とSK266を切り、SE210, S231, SK262, SE291, SD292に切られる。	底部糸切り土師ほか(接合資料10)	-	-	146

第3節 遺構の概要

遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
SK266	土坑	16世紀第1四半期	B10区	東区	2層除去後検出	底面に炭焼土混じりの黒色土が堆積。	SE210, SK237, SK265, SK272に切られる。	内面にロクロ目のある土師器。糸切り土師小皿	古代須恵器、古土師器	黒色土の上に土師器。祭祀行為が行われたか。	135
SK267	土坑	16世紀第3四半期	C9・B9区	東区	2層除去後検出	単層：小砂利混じり層。	SK293を切り、SK215に切られる。	銅銭1枚。京都系土師器	-	-	159
ST268	3号墓	16世紀第2四半期	C7区	西区	SK247掘り下げ中検出。	木桶か。埋葬。	SK247を切る。	人骨。定形の糸切り土師器皿3枚。	古代の須恵器	土師器は内向きの棺内埋葬。	255
SK269 (=S137)	集石土坑2基	16世紀第4四半期前半	C9区	北1区	SK137bの下で検出。	2つの集石土坑が切り合う。ともに暗褐色土の単層でほぼそそである。	SK252を切り、SD131に切られる。	拳火の礫。	-	-	202
SD270	溝	16世紀第4四半期前半	東西溝	中央	-	-	SD250を切り、SD141とSD167に切られる。	京都系土師器3期皿 近世1期の備前焼	古代の須恵器土師器	a～g区に分けて調査。上部V字形、下部箱形。	180
SK271	土坑	15世紀	B10区	東区	-	-	SK238とSK266に切られる。	-	-	-	-
SK272	土坑	16世紀第2四半期	B10区	東区	-	上下2層：1層＝暗褐色土(1cm大の炭、2～3cm大の焼土ブロック多い)。2層＝暗茶褐色粘質土(礫多い)。	SK266を切り、SE210に切られる。	埴、瓦、壁土	-	炭焼土の集中箇所あり。火災処理土坑	147
SK273	土坑	16世紀第4四半期前半	B9区	東区	-	上部に焼土混じり層堆積。下の1層：暗褐色微砂質土(5mm大の炭焼土多い)。	SD230を切り、SK261と重複	鉄、壁土	-	焼土等集中。	208
ST274	12号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	2層除去後検出	方形木棺。小児屈葬(北頭位。東向き)	ST149(8号墓)とSD255を切る。	足下に京都系土師器片。	古代土師器	-	280
S-275	土坑	15世紀?	C9区	北1区	2層除去後検出	単層：2層土(黄色粘土ブロック多い)。	SK236とSK232に切られる。	須恵器片のみ	-	底面凸凹、自然遺構の可能性あり。	129
SK276	土坑	16世紀第2四半期	C9区	北1区	2層除去後検出	単層：2層土(黄色粘土ブロック多い)。	SK232に切られる。	京都系土師器1期皿。	-	SK228の一部か?	151
SD277	溝	16世紀	C8区	北2区	2層除去後検出	単層：灰色粘質土	ST150(M4)に切られる。	瓦質土器片のみ。	-	断面円形の浅い溝。	108
SK278	土坑	16世紀第3四半期	C9・10区	東区	-	上下2層：1層＝暗茶褐色粘質土(マンガン含む)。2層＝暗黒灰色粘質土(5cm大の礫含む)。その間に炭含む黒色層あり。	SE148に切られる。	京都系土師器2期転用埴埴、中国焼埴陶器四耳埴。	-	-	158
SK279	集石土坑	16世紀第4四半期前半	B9区	北1区	-	単層：2層土。礫魔集	SK293を切り、SK215とSK263に切られる。	瓦片多い。	須恵器	-	204
SP280	ピット	16世紀	B11区	東区	-	-	S251を切る。	糸切り土師	-	-	243
SP281	ピット	16世紀	B11区	東区	-	-	S251を切る。	土師器	-	-	243
SP282	ピット	16世紀	B11区	東区	-	-	S251を切る。	糸切り土師	-	-	243
SK283	土坑	-	B10区	東区	2層除去後検出	掘り下げるとSK285とSK286になる。	SK285とSK286を切る。	-	-	-	-
SD284	溝	16世紀第3四半期	C9・B9区	北1区	-	単層：暗褐色土と黄色砂層との混層。	SP288を切り、SE148とSD230に切られる。	京都系土師器2期	無し	-	153
SK285	土坑	16世紀第2四半期	B10区	東区	SK283の下で検出。	礫集中。最下層に焼土炭層。	SK286とSK287を切り、SK283に切られる。	遺物散在。京都系土師器1期皿、ロクロ目土師	-	-	148
SK286	土坑	16世紀	B10区	東区	SK283の下で検出。	上下2層：1層＝暗茶褐色粘質土(黄色粘土ブロック多く、小礫炭焼土含む)。2層＝軟質暗茶褐色土(1cm大の炭多い)。	SK283とSK285に切られる。	-	-	-	124
SK287	小土坑	16世紀	B10区	東区	攪乱坑の底面で検出。	単層：やや硬い小礫と暗黄褐色土の混層。	SK285に切られる。	-	-	-	124
SP288	ピット	16世紀	C9区	北1区	基盤III層直上	単層：C層土(地山ブロック多い)。	SE148とSD284に切られる。	糸切り土師のみ。	無し	-	131



遺構	性格	時期	グリッド位置	位置	検出層位	構成遺構・層序	切合関係	最新の出土遺物	残留遺物	備考	掲載頁
ST289	13号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	基盤III層直上	土坑墓?幼児埋葬	ST149(8号墓)に切られる。	無し。	-	幼児埋葬	259
ST290	18号墓	16世紀第4四半期前半	C8区	北2区	-	骨出土。	-	無し。	-	-	281
SE291	井戸	16世紀第2四半期	B9・10区	東区	SK262の下で検出。	井筒は木製桶。内部土坑(2~3mm)大の炭焼土を多く含む暗褐色土。	S261とSK262に切られる。	井筒内から京都系土師器1期皿	-	湧水のため、完掘できず。第3四半期まで使用。	144
SD292	溝	16世紀第4四半期前半	B10区	東区	SK262の下で検出。	S261に接続	SD165とSK265を切り、SE210とSK262に切られる。	京都系土師器2期皿	須恵器。土師器。黒色土器A類、製塩土器	-	186
SK293	廃棄土坑	16世紀第3四半期	C9区	北1区	-	単層:暗褐色軟質土	SK215.SK267.SK279に切られる。	瓦質火鉢(接合資料15)、京土師2期皿	無し	礫含む。	159
SD294	溝	15世紀後半~16世紀前半	C8区	北2区	2層除去後検出	単層:小礫を少量含む灰色粘土層	ST150(4号墓)とSD255に切られる。	底部糸切の土師器片のみで、京都系土師器を含まない。	-	西に向かって浅くなり、SK298付近で消える。	118
ST295	14号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	2層除去後検出	土坑墓?幼児頭骨	ST149(8号墓)に切られる。	糸切り土師小皿1枚。	-	頭骨に被せるように土師小皿出土。	260
ST296	15号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	-	木棺?幼児頭骨	SD255とSK298を切る。	鉄釘1点。	-	-	261
ST297	16号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	-	幼児頭骨	SK256を切る。	無し。	-	-	262
SK298	土坑	15世紀以前	C8区	北2区	-	-	SD255とSK256、SD294を切り、ST296(15号墓)とST299(17号墓)に切られる。	糸切りの在地形土師器	-	炭片多く含む。土師器の皿を伏せた上で検出。	123
ST299	17号墓	16世紀第3四半期	C8区	北2区	-	土坑墓	SK256とSK298を切る。	人骨片	-	-	262
SE300	井戸	15世紀	B10区	東区	SD165の底面	井筒は木製桶。抜き取られている。底面礫敷き。	SD165に切られる。	底面に曲物。	-	-	119
SK301	土坑	古代	C7区	西区	-	礫多く含む。	SD140とSD165、SK247に切られる。	古代の土師器碎片のみ。	無し	-	98
SK302	土坑(S251の一部)		A11区	東区			SD118とSD141に切られる。			⇒SK302	128
SD303	溝	16世紀第1四半期	C6・C7区	西区	-	やわらかい淡褐色微砂層のラミナ状堆積=水成	SK247を切り、SD140に切られる。	糸切り土師のみ	無し	-	132

年代観と合致した。そうして識別した遺構の一覧が第4-1表である。

#### 時期区分

時期比定は最新の出土遺物の時期から15世紀は前半と後半の2時期に、16世紀は4分の1世紀25年単位で4時期に区分した。その上で切合関係に矛盾がないか検討し、最新土器による時期比定より切合関係から見た時期が新しい場合には、切合関係にしたがった。さらに出土土器の接合関係から検証をおこなった。切合関係のない遺構が同時期であることを検証することができた接合資料は40例である(第4-2表)。

#### 遺構の相関

ひとつの遺構を単位として、遺構の切合関係と、時期比定をまとめたのが付図4下の遺構相関表である。この表をもとに以下のように遺構を古代、15世紀、16世紀第1四半期・第2四半期・第3四半期・第4四半期、近世にわけて記述する。

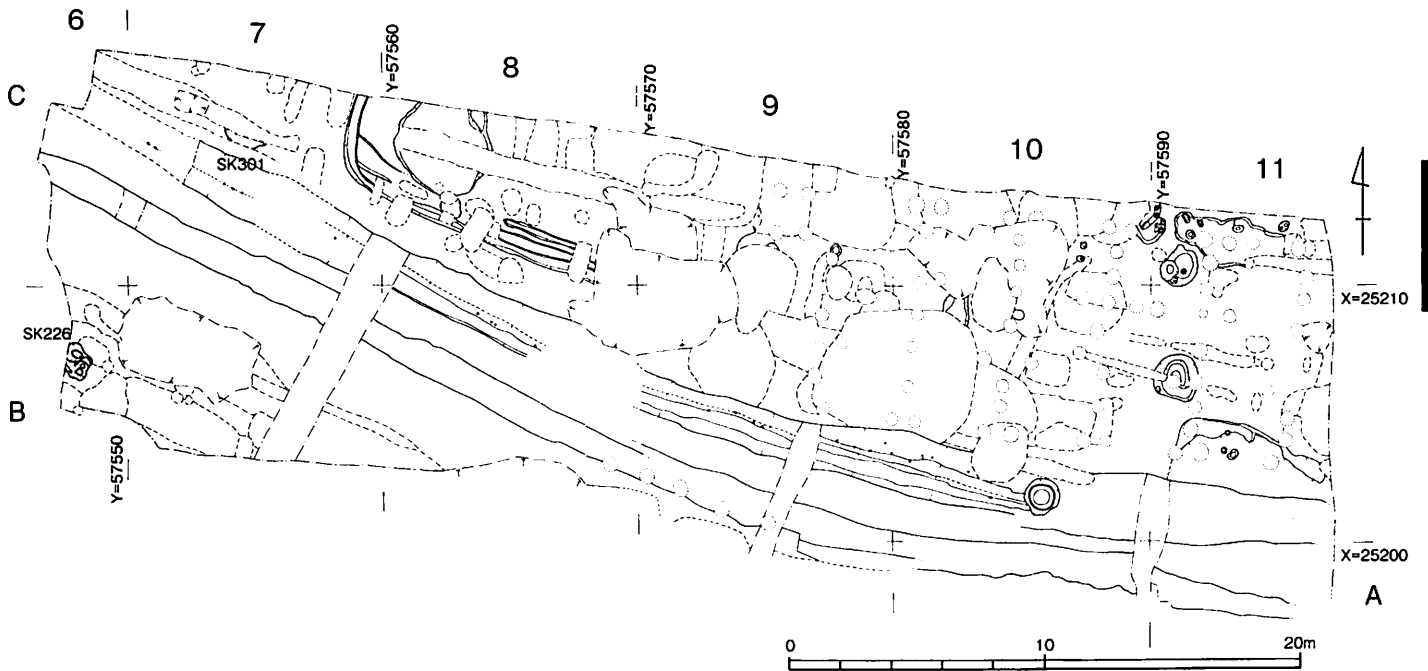
第4-2、第10次Ⅱ区北調査区の接合資料一覧

番号	遺物	破片の出土した遺構	切合関係のない遺構	時期	掲載図番号
接合資料1	瓦質鉢	SD250, SD168, SD116 (南), S124 (南), S104 (南)	SD116, SD250	16世紀第4四半期前半	第4-88図④34
接合資料2	瓦質風炉	SD131, SD116, SD118, SD250, SE148, SK263	SD131, SD116, SD250, SE148 井筒内, SK263	16世紀第4四半期前半	第4-92図①5
接合資料3	備前焼壺	SD250, SK231, SK261	SD250, SK261	16世紀第4四半期前半	第4-97図2
接合資料4	備前焼短頸甕	SD116, SD118, SD131, S137, SD141, SD168, SD250, SE148 井筒内	SD116, SD131, SD250, SE148 井筒内, SK262, SK263, SP214	16世紀第4四半期前半	第4-102図①21
接合資料5	防長系瓦質鉢	SD141, SD165, SD250, SE210	SD165	16世紀第3四半期以前	第4-16図⑤71
接合資料6	瓦質火鉢	SD167, SD250, SE148 井筒内, SK262	SD250, SE148 井筒内, SK262	16世紀第4四半期前半	第4-88図③29
接合資料7	備前焼水差し	SD141, SD250, SK261, SK262	SD250, SK261, SK262, 5次 ASX16, SX26	16世紀第4四半期前半	第4-118図①3
接合資料8	中国製焼締陶器鉢C類	SD141, SD167, SD250, SD292, SK231	SD250, SD292	16世紀第4四半期前半	第4-98図2
接合資料9	彫三島碗	SE148, SK231, S218	SE148, SK231, S218	16世紀第4四半期後半	第4-130図1
接合資料10	瓦燈	SD141, SD165 瓶形内, SD250, SD265	SD165 瓶形内, SK265	16世紀第2四半期	第4-57図1
接合資料11	中国製焼締陶器鉢B類	SD131, SE147, SK231, SK269, 第2層	SD131, SE147, SK231, SK269	16世紀第4四半期後半	第4-92図①2
接合資料12	中国焼締陶器小型四耳甕	SF151, SD141 上部, SD167, SD168, SK278, SX164	SD141 上部, SK278, SX164	16世紀第3四半期	第4-76図1
接合資料13	瀬戸美濃系天目碗	SD141, SK262	SD141, SK262	16世紀第4四半期前半	第4-118図①2
接合資料14	備前焼壺	SD116, SD131, SD167, SD250, SK231	SD116, SD131, SD250, SK231	16世紀第4四半期前半	第4-92図①3
接合資料15	瓦質火鉢口縁	SD118, SD141, SD165, SD167, SD250, SK228, SK261, SK293	SD165, SK228, SK261, SK293	16世紀第3四半期	第4-78図1
接合資料16	備前焼鉢	SD118, SD250, SK252, SK261	SD118, SD250, SK252, SK261	16世紀第4四半期前半	第4-88図①13
接合資料17	瓦質火鉢	SD118, SD250, SK229	SD118, SD250, SK229	16世紀第4四半期前半	第4-115図2
接合資料18	中国製焼締陶器掃鉢	SD116, SK264	SD116, SK264	16世紀第4四半期前半	第4-103図2
接合資料19	中国黒褐釉陶器壺	SD118, SD141, SD250, SD167, SD292, SF151, SK231, SK261, SK262	SD118, SD250, SD292, SF151, SK261, SK262	16世紀第4四半期前半	第4-98図1
接合資料20	中国景徳窯系荷花碗	SK252, SK263	SK252, SK263	16世紀第4四半期前半	第4-107図2 第4-109図3 第4-113図3
接合資料21	瓦質茶釜	SD131, SD141, SD167, SE210 瓶形内, SK231	SD131, SD141, SD167, SE210 瓶形内, SK231	16世紀第4四半期後半	第4-129図3
接合資料22	信楽焼壺	SD116, SD167, SD168, SD250, SD292, SE148 井筒内, SK261	SD250, SD292, SE148 井筒内, SK261	16世紀第4四半期前半	第4-97図1
接合資料23	白磁皿	SD167, SE148, SE210, SK231	SD167, SE148, SE210, SK231	16世紀第4四半期後半	第4-132図①1
接合資料24	瀬戸美濃系陶器皿	SD284, SK231	SD284, SK231	16世紀第3四半期	第4-68図1
接合資料25	中国漳州窯系荷花皿	SD131・SE148, SK269 上部	SD131・SE148, SK269 上部	16世紀第4四半期前半	第4-102図②27
接合資料26	備前焼甕	SD118, SD168, SD250, SD270, SK231, SK261, SK262	SD250, SK261, SK262	16世紀第4四半期前半	第4-118図①8
接合資料27	備前焼甕	SE148 井筒内, SK231, SK262, SK269	SE148 井筒内, SK262, SK269	16世紀第4四半期前半	第4-118図②9
接合資料28	中国製黒褐釉陶器壺	SD131, SD167, SD250, SK231, SK236, SK252, SK269, 2号泉 (ST135)	SD250, SK231, SK236, SK269, 2号泉 (ST135)	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料29	中国製褐釉陶器	SD131, SD141, SK135, SK146, SK269	SD141, SK269	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料30	須恵器甕	SD116, SD250, SD270	SD116, SD250	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料31	備前焼甕	SD270, SK262	SD270, SK262	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料32	備前焼甕	SD250, SK262	SD250, SK262	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料33	備前焼甕	SD250, SD116	SD250, SD116	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料34	備前焼甕	SK261, SK262	SK261, SK262	16世紀第4四半期前半	なし。
接合資料35	備前焼甕	SD116, SD117, SD118, SD141, SD250, SF151, SK262	SD118, SD250, SF151, SK262	16世紀第4四半期前半	第4-88図14
接合資料36	中国漳州窯系荷花碗	SD250, SK156	SD250, SK156	16世紀第4四半期前半	第4-88図①10
接合資料37	白磁皿	SE234, SK286	SE234, SK286	15世紀	第4-24図1
接合資料38	埴	SD250, SD262	SD250, SD262	16世紀第4四半期前半	第4-118図③27
接合資料39	埴	SK262, SK263	SK262, SK263	16世紀第4四半期前半	第4-118図④28
接合資料40	京都系土師器3期の埴	SD131, SE148 井筒内	SD131, SE148 井筒内	16世紀第4四半期前半	第4-92図①10

### 第4節 古代の遺構と遺物

遺構の概要（第4-4図、付図5上）

10次Ⅱ区北調査区においては、中世以前にさかのぼる古代の遺構は極めて少ない。いずれも切合関係から見て、相対的に最古に位置づけられる層序から検出され、中世以後の遺物を含まないことを判断の主な材料とした。その結果以下の2つないし3つの土坑を見出した。



第4-4図 古代の遺構 (1/300)

#### 土坑

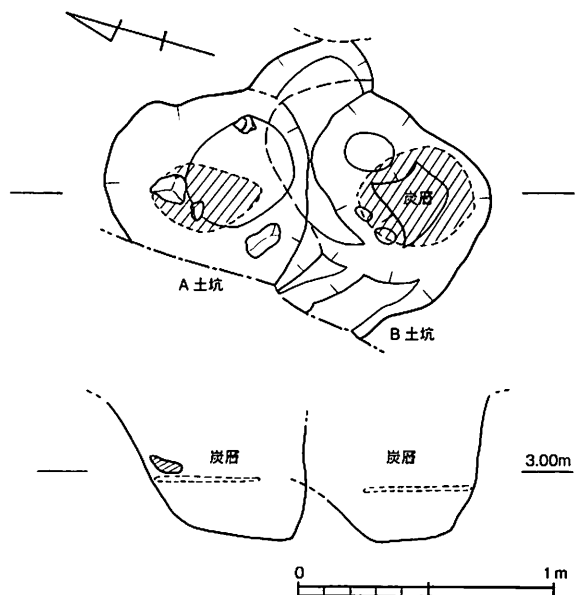
SK226（第4-5図）

二つの土坑

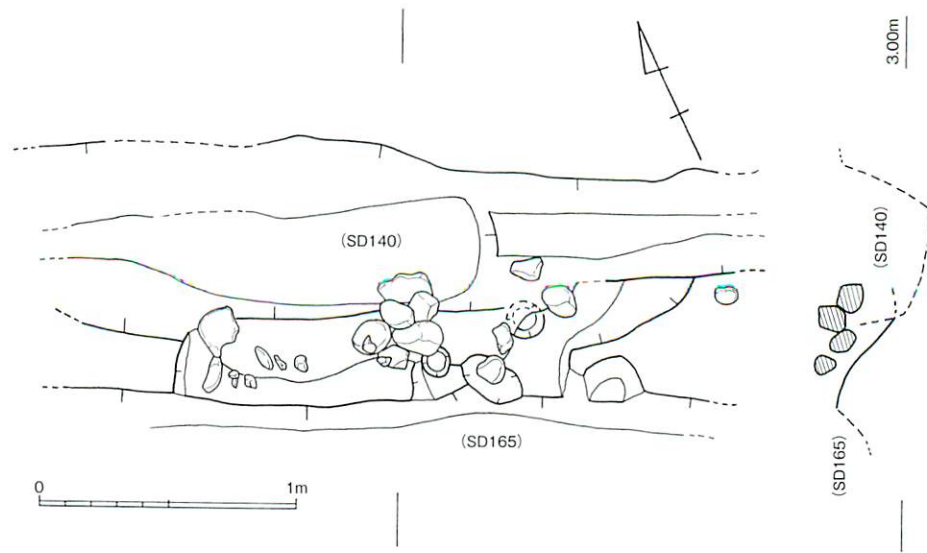
B6区（南2区）において第Ⅱ層除去後に検出した土坑である。調査の過程で円形にちかい土坑2基が重なっていることが判明した。

古いほうをSK226A土坑、新しいほうをSK226B土坑とした。上部を土坑SK193(16世紀第1四半期)にきられていた。A土坑は長さ0.8m、幅0.7m以上、深さ0.6m、B土坑は長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.6m。2つの土坑とも底面近くに炭層といえる黒色土の堆積があり、最上部には厚く基盤Ⅲ層の土が埋め戻すように堆積していた。内部の埋土からは図示できないほど碎片の古代の土師器壺が出土している。ともに廃棄土坑として使われた後、埋め戻されたものと考えられる。この土坑は切り合い上、最下層の遺構である、中世の遺物を全く含まないところから古代の遺構と推定される。

廃棄土坑



第4-5図 SK226 (1/30)



第4-6図 SK301 (1/30)

#### SK301 (第4-6図)

廃棄土坑

C7区(西区)で、溝SD140とSD165にその大半をさらに大型土坑SK247によって切られた土坑である。残存した部分が狭いため形態は不明である。長さ2.1m、幅0.4m以上、深さ0.4m。内部には礫を多く含み、古代の土師器坏破片が出土している。廃棄土坑と推定される。相対的に最も古く、中世の遺物を全く含まないところから古代の遺構と推定される。

#### 小結

8・9世紀

10次調査区ではI区南で8世紀後半の井戸と包含層を調査しており、II区北の廃棄土坑もそのような8ないし9世紀の生活の跡と関連する遺構と考えられる。以下に述べる中世の遺構の中には、かなり多くの古代の遺物、特に8ないし9世紀の遺物が含まれており、なかには円面硯の破片が出土している。遺跡東部の7次調査区では官衙的な配置をとる掘立柱建物群も発見されており、中世大友府内町跡と重なるよう<sup>註1</sup>にかなり広範に古代の遺構が存在するものと見られる。

註1、田中裕介編『豊後府内3』2006、大分県教育庁埋蔵文化財センター

## 第5節 中世の遺構と遺物

### 1 遺構の概要 (付図4)

中世の遺構と認定したものは、基盤Ⅲ層上面で発見された遺構のうち内部から底部糸切の土師器以後の遺物を含むものである。以下に述べるように遺物の中には13ないし14世紀にさかのぼるものもあるが、遺構の時期としては15ないし16世紀がほとんどである。とくに16世紀第4四半期の遺構数が多い。

### 2 15世紀代の遺構と遺物

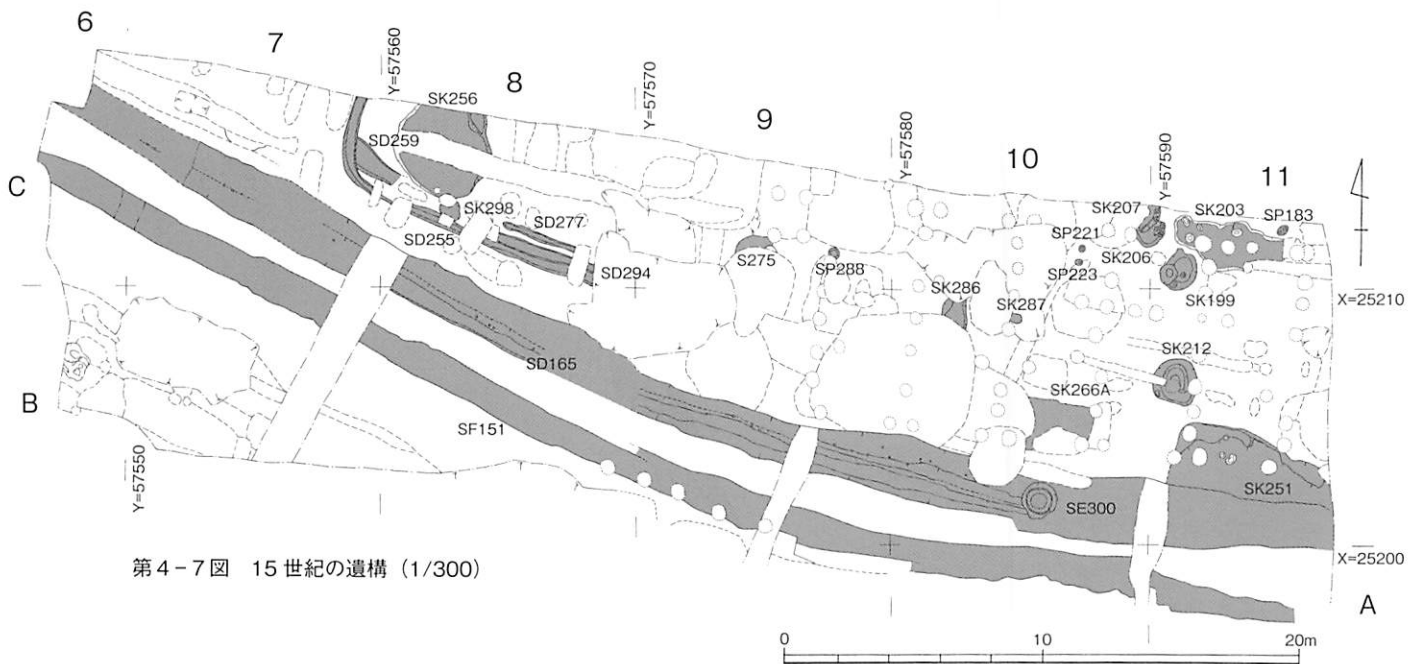
概要 (第4-7図、付図5上)

ここで15世紀代に認定した遺構は、ロクロ目土師器以後の16世紀代の土師器をまったく含まず、さらに遺構の切合関係上16世紀以後の遺構より古いことが明らかな遺構である。その多くは15世紀代の型式と認められる土師器を出土した遺構である。

東西道路

15世紀の後半(厳密に見れば末に近いと考えられる)の道路状遺構SF151とその北側の道路側溝を兼ねた水路である溝SD165とが、調査区の中央東西に伸びる。SF151の第7硬化面と水路SD165の第4矢板列が対応する。それ以外の15世紀代と考えられる遺構はその東西道路の北側にあたるC8区付近の北2区とBC10/11区の東区の2箇所に分布が分かれる。C11~B11区付近は本来第4南北街路に面した場所にあたる。

中町



第4-7図 15世紀の遺構 (1/300)

#### 道路状遺構

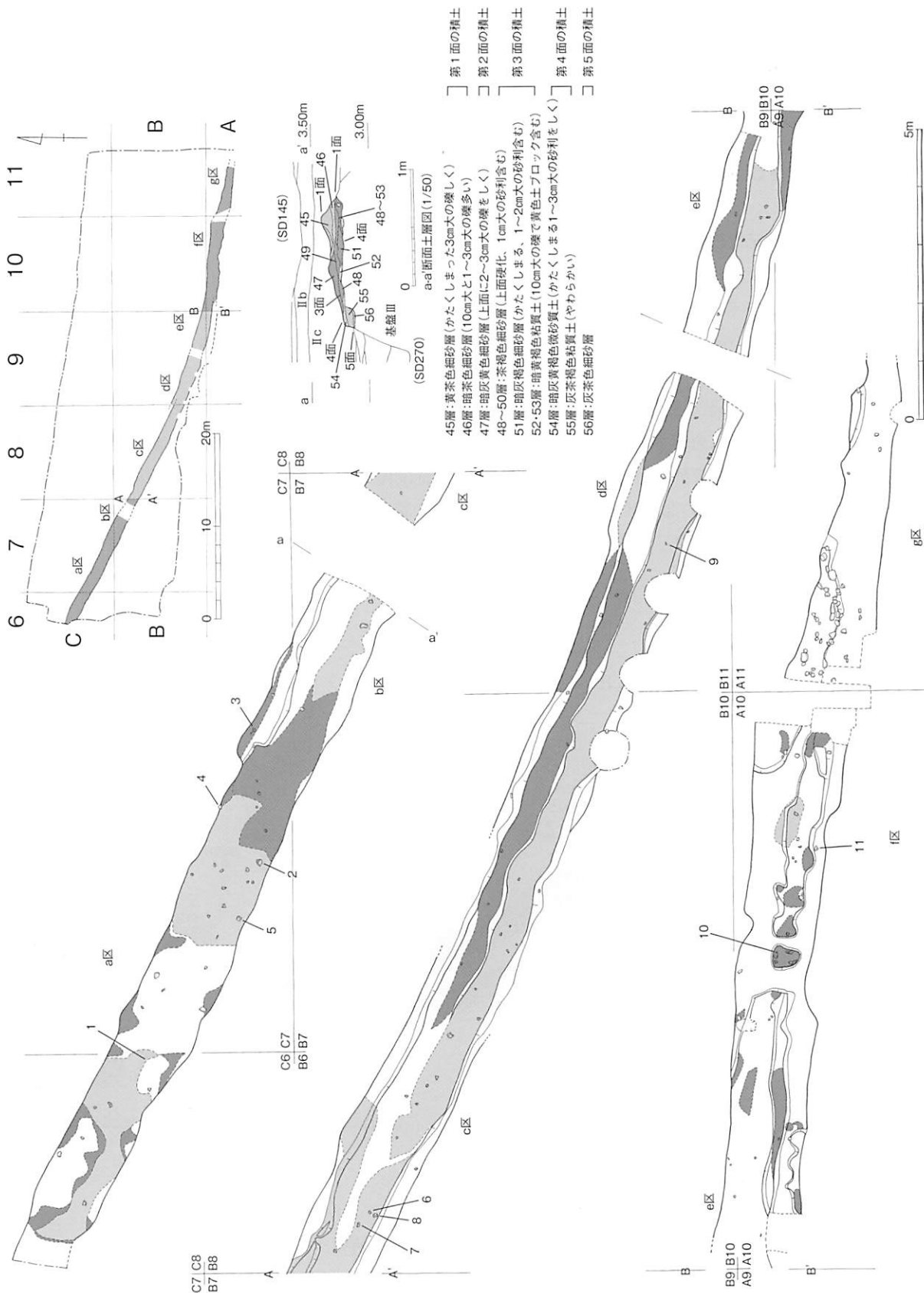
SF151 (第4-8~10図、付図8)

東西道路

第2層除去後に検出した道路状遺構で、調査区全体を横切っておおよそ東西方向に伸びている。次に述べる溝SD165、SD250、SD270と並行して西に向かうほど北にゆっくりと曲がっていく。また第4南北街路とも直交しないので、方位を基準に建設された道路ではない。52mにわたって検出し、最高7面の硬化面を確認した。どの面をはかっても東西両端での比高差は10~20cmほどで、緩やかに西に向かって低くなっている。第4硬化面の舗装以後は砂利層を上部に、その下に粘土層を敷く舗装を1単位とした硬化面を作っている。それ以前の第5面以下には砂利等による表面

自然地形に沿う

道路面7回



の舗装はなされていない。道路は15世紀後葉に建設され、まったく同じ場所を踏襲して16世紀末あるいは17世紀初頭の中世都市府内が廃絶する時期まで存続している。SD250、SD270、SD116～SD118、SD167、SD168などの道路状遺構SF151に並行する多くの溝によって道路の両端を切られ

幅は5m以上 ているため、一見幅1m程度の細い道路状遺構に見えるが、SD165のみが北側に側溝として機能していた建設当初から16世紀第3四半期までは、少なくとも5m以上の道路幅を持っていたものと推定される。その後第4四半期に両側に溝を持つようになると道路幅は2m以下にまで狭くなり、最終段階の16世紀末には再びSD167・SD168とセットになって大幅に拡幅されたようである。

長大な遺構であるためa～g区に分けて掘下げている。以下に上層から下層に向けて記述する。

#### 上層（第4－8図）

第1・2硬化面 第2硬化面以上の遺構と遺物を上層として記録した。したがって第4－8図に記録した道路硬化面のうち、南側のやや高くなっている部分が第1硬化面で、その周囲で低く表現されている部分が第2硬化面にあたる。

第1硬化面 礫敷きの道路舗装面。断続的に検出した道路面で10cm大の円礫をまじえた1～3cm大の小礫を混ぜた暗茶褐色細砂層（B7区a－a'断面の46層、B9区b－b'断面の35層）を敷き、その上に5cm大の礫を敷き詰めて舗装している（同45層、同34層）。上面の高さはC6区で約3.4m、B10区で3.5mと東に行くほどわずかに高くなる。断面を観察できた幅1mほどをみると、水平ではなく中央が高くなっている。さらにこの硬化面を北側に追うとSD270につながる、いっぽう南側ではSD116に対応するようである。さらにこの第1硬化面が使用されている間に当初側溝となっていたSD270とSD116は人為的に埋め戻されて、SD270はSD167に、SD116はSD168におき変わっている。SD167とSD168は溝というよりは浅い溝状の窪みともいべき遺構で、断面を見る限り明確に硬化した道路面とは認識できないが、この上から切り込む遺構はまったくなく、側溝として機能していた痕跡もない。したがってSF151第1硬化面の最終段階とSD167およびSD167の底面をひとつの道路とみなすと、幅8m以上の道路が16世紀第4四半期後半に整備されたことになる。

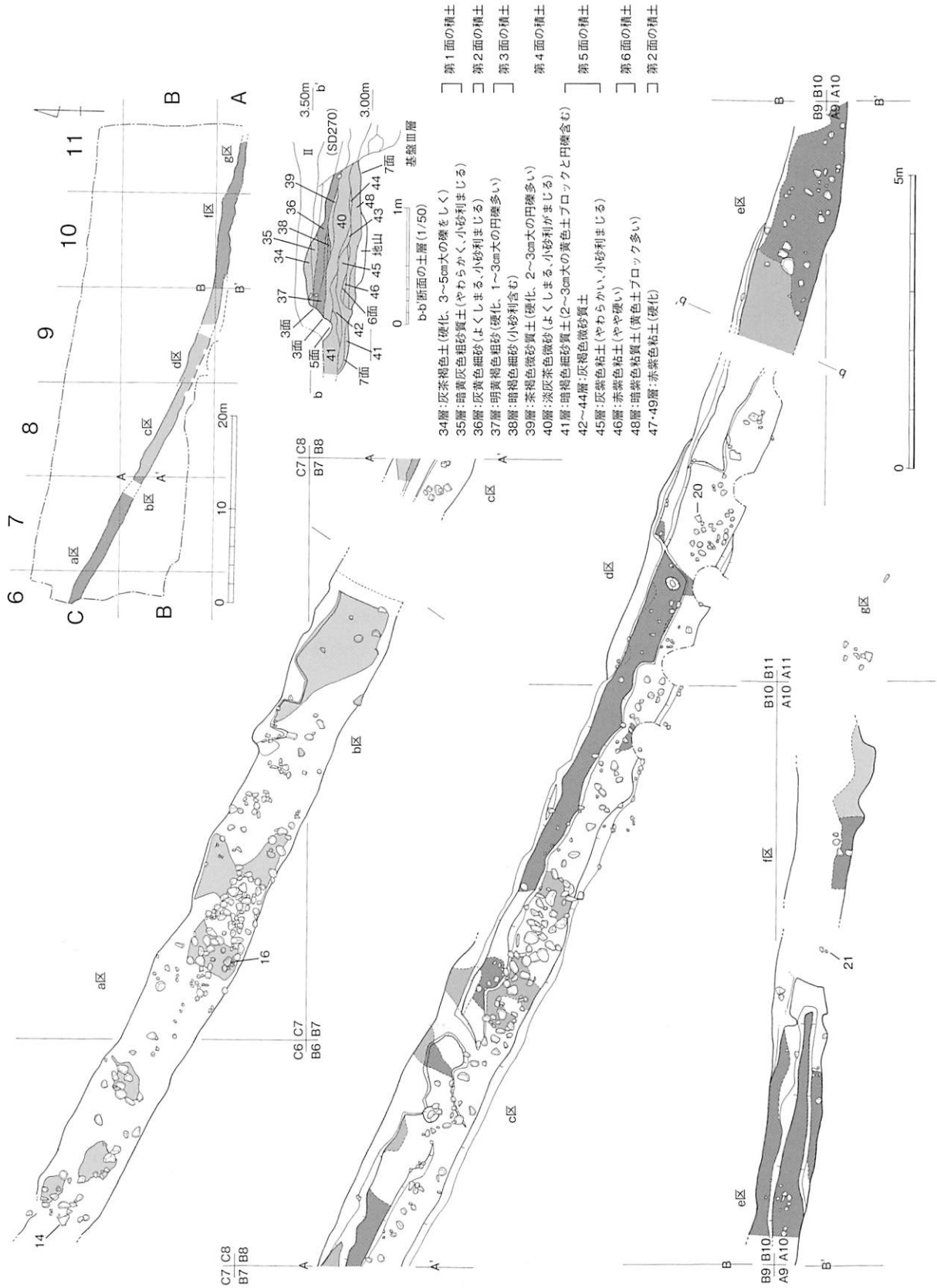
第2硬化面 礫敷きの道路舗装面。第1硬化面の5～10cm直下で、2～3cm大の小礫を混ぜたよくしまった暗灰黄色細砂層（B7区a－a'断面の47層、B9区b－b'断面の36層、SD250の12層・18層）を敷き舗装する。北側の側溝はSD250の上層、南側の側溝はSD117に対応する。そうすると道路の幅はおおよそ2mほどに想定できる。対応する溝の時期から見て、16世紀第4四半期の前半に舗装された道路と見られる。

#### 中層（第4－9図）

第3・4硬化面 第4硬化面以上の遺構と遺物を中層として記録した。したがって第4－9図に記録した道路硬化面のうち、やや高くなっている部分が第3硬化面で、その周囲で低く表現されている部が第4硬化面にあたる。

第3硬化面 小砂利敷きの道路舗装面。礫混じりの硬化面として断続的に検出した道路面で、10cm大の円礫をまじえた1cm大の小礫を混ぜ硬くしまった茶褐色細砂層（B7区a－a'断面の48～51層、B9区b－b'断面の37・38層）を敷き舗装している。上面の高さはC6区で約3.3m、B10区で3.35mと東に行くほどわずかに高くなる。断面は観察できた幅1.3mほどをみると水平ではなく北が高くなっている。さらにこの硬化面を北側に追うとSD250掘形ラインにつながる。いっぽう南側ではSD118に対応するようである。SD250とSD118が第3硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区a－a'断面でおおよそ2mである。対応する溝の時期から見て、16世紀第4四半期の前半に舗装された道路と見られる。

第4硬化面 小砂利敷きの道路舗装面。礫混じりの硬化面として断続的に検出した道路面で、5cm大の円礫を交えた1～3cm大の小礫を混ぜ硬くしまった暗灰黄褐色微砂層（B7区a－a'断面の54層、B9区b－b'断面の39層）を敷き、その上に礫の多い砂質土を敷き詰めて舗装している（同55層、同40層）。上面の高さは第3硬化面より5cm程度低い。断面は観察できた幅1.3mほどをみるとおおよそ水平だが、硬化面が波打っており下部の道路面が比較的柔らかかったことをし



側溝

めしている。この道路面の北側の側溝は、SD165の第1矢板列の段階の溝が対応すると推定される。これに対して南側では対応する溝が確認できないのでなんともいえないが、SD118になる以前に水路が存在した可能性は否定できない。SD165が第4硬化面の側溝として機能していたとすれば、そ

第4-9図 SF151 中層 (1/100)



第3四半期 のときの道路幅はB7区 a - a' 断面ですくなくとも3m以上である。対応する溝の時期から見て、16世紀第3四半期ごろに舗装された道路と見られる。

#### 下層（第4 - 10図）

第5～7硬化面 第4硬化面以下の遺構と遺物を下層として記録した。第4 - 10図に記録した礫や砂利の集中する部分は第4硬化面を舗装する際に混ぜられた礫や砂利である。その周囲の礫がほとんどない部分第5硬化面から第7硬化面であるが、その3面は平面的に掘り分けることができなかったので、図面上では一括して表現されている。

側溝 第5硬化面 砂質土の硬化面。第1～4硬化面ほど硬くない灰褐色微砂質土層（B7区 a - a' 断面の56層、B9区 b - b' 断面の41～45層）で下層の45層は粘土質である。平面的に確認することはむずかしいので、東西の高低差はわからない。断面をみるとおよそ水平だが硬化面が波打っている。この道路面の北側の側溝は、SD165の第2矢板列の段階の溝に対応すると推定される。これに対して南側ではSD116～118が後に掘られたため対応する溝が確認できない。SD165第2矢板列の溝が第5硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区 a - a' 断面ですくなくとも3m以上である。対応する溝の時期から見て、16世紀第3四半期ごろに舗装された道路と見られる。

側溝 第6硬化面 粘質土の硬化面。やや硬化した粘質土層（B9区 b - b' 断面の46・48層）である。下部の48層は基盤層に由来する黄色粘土のブロックを含み、明らかに人為的な積み土である。第5硬化面同様平面的に確認するのはむずかしいので、東西両端の高低差はわからない。断面をみると硬化面は波打っている。この道路面の北側の側溝は、SD165の第3矢板列の段階の溝に対応すると推定される。これに対して南側ではSD116～118が後に掘られたため対応する溝が確認できない。SD165第3矢板列の溝が第6硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区 a - a' 断面ですくなくとも3.3m以上である。対応する溝の時期から見て、16世紀第2四半期ごろに舗装された道路と見られる。

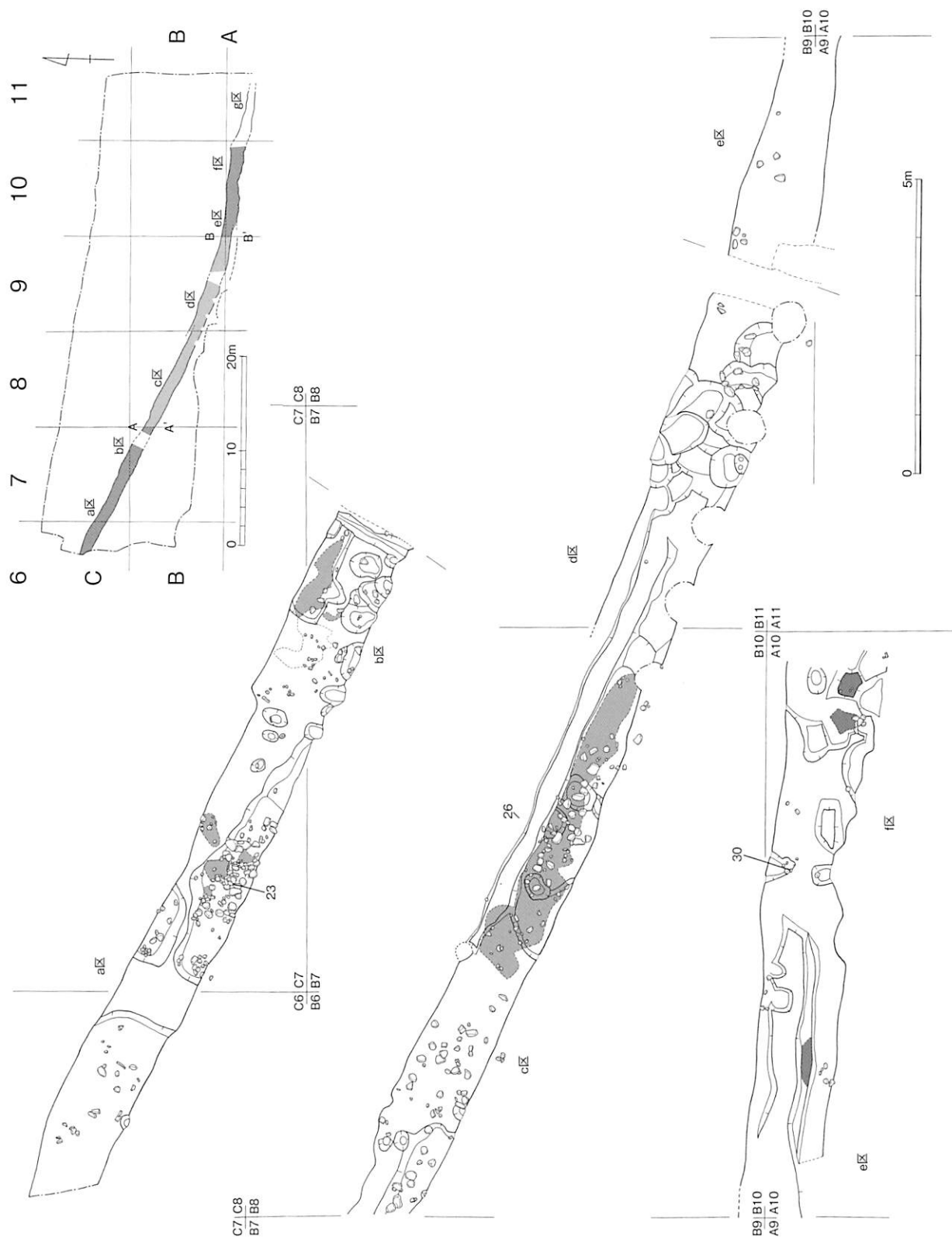
側溝 第7硬化面 粘質土の硬化面。硬くしまった粘質土（B9区 b - b' 断面の47・49層）の下は、基盤ⅢあるいはⅣ層の地山である。一旦地山面を削った上で47・49層を道路の床土として敷いている。道路状遺構SF151建設当初の道路層である。道路面上面の高さはわからないが、地山面に高さをみると東に行くほどわずかに高くなる。この道路面の北側溝にあたるのは、SD165第4矢板列段階の溝と推定される。これに対して南側ではSD116～118が後に掘られたため対応する溝が確認できない。SD165第4矢板列の溝が第7硬化面の側溝として機能していたとすれば、そのときの道路幅はB7区 a - a' 断面ですくなくとも3.3m以上である。対応する溝の時期から見て、15世紀後葉～末ごろに建設されたと見られる。

#### SF151 出土遺物（第4 - 11図）

道路1・2面 上層 第2層下部と道路第1面および道路第2面構築土の中に入っている遺物である。SD270に対応する。16世紀第4四半期の遺物である。1はC6区出土の完形の中国銅銭、元豊通寶（北宋1078年初鑄・行書体）。2はC7区出土の双頭巖手竜雲文の刻印をほどこす瓦質火鉢の脚部。3はC7区出土の備前焼小型の鉢口縁。4と5はC7区出土の埴、ともに厚さ3cm前後の厚手の製品。6はB8区出土の15世紀後葉生産中世5期の備前焼壺口縁。7はB8区出土の16世紀前葉にあたる中世6a期の備前焼播鉢の口縁部。8はB8区出土の16世紀末近世1b期の備前焼播鉢口縁部。9はB9区出土の端部をへら調整しない管状土錘B類<sup>註1</sup>。10はA10区出土の中世5b期の備前焼播鉢口縁。11はA10区出土の京都系土師器2期の皿で、口縁に打ち欠きがある。12はA11区出土の中国景德鎮窯系毛彫り碗。13は15世紀前半中世4期の備前焼壺の口縁部。なおSD118・SD250・SK262出土片と接合した完形の備前焼壺（接合資料35）の破片が出土しているほかに、上層からは青磁碗、

礫まじりの破片

註1 田中裕介編『豊後府内3』P274 2006、大分県教育庁埋蔵文化財センター

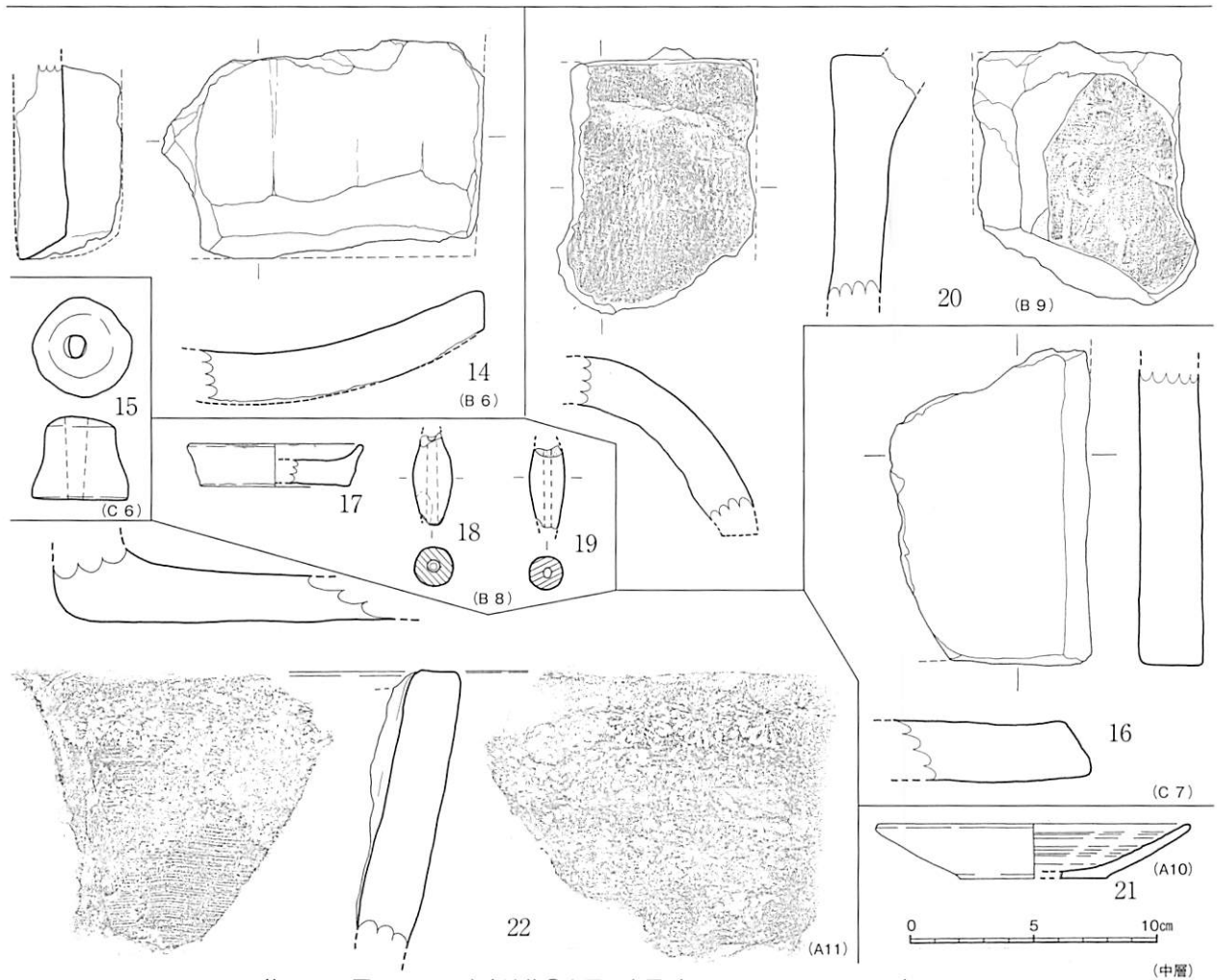
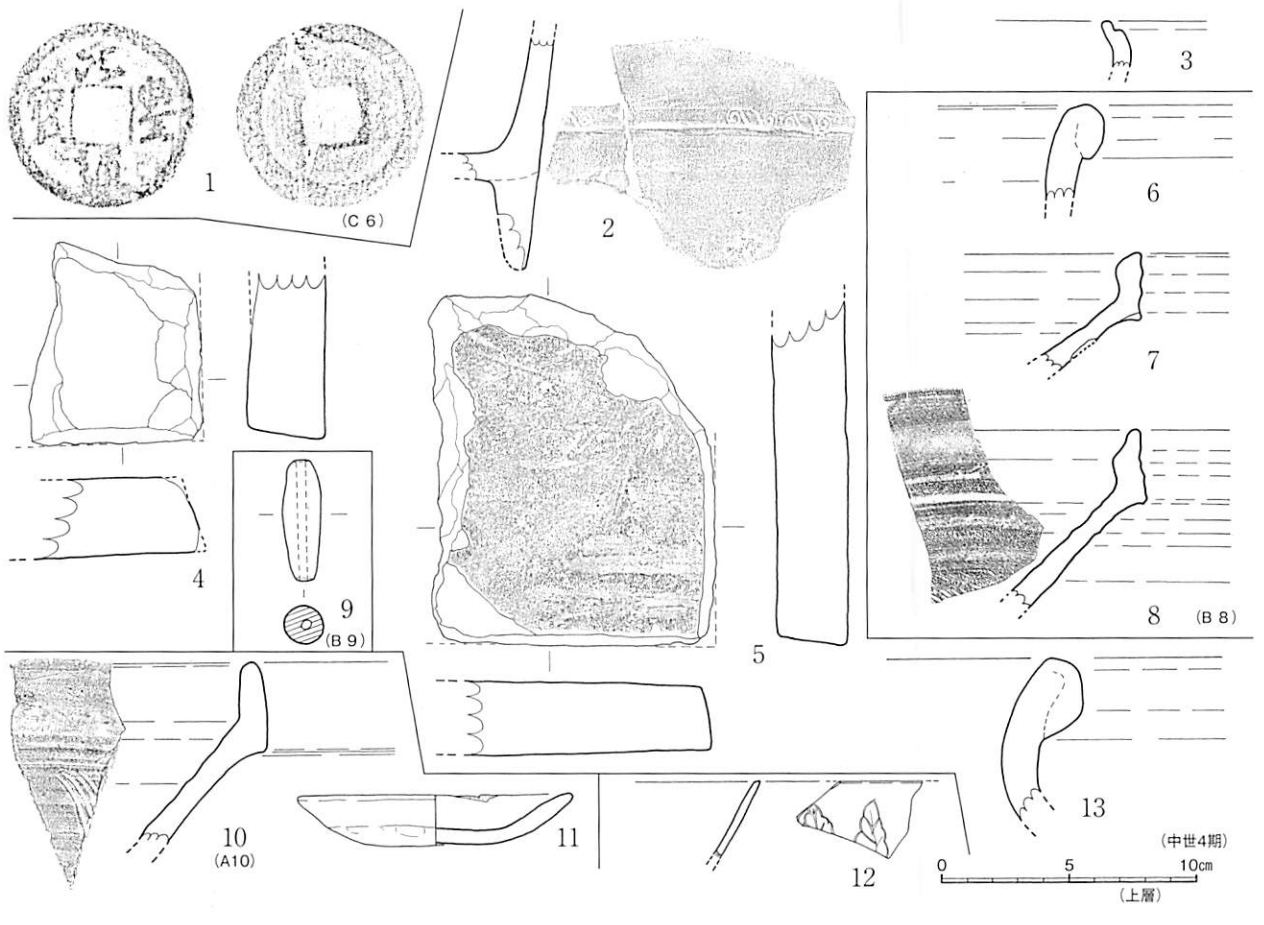


第4-10図 SF151 下層 (1/100)

中国漳州窯系青花、中国黒褐釉陶器、備前焼徳利、瓦質鉢、内面布目の丸瓦、平瓦、海部郡産の埴の破片が出土している。

道路2・3面

中層(第4—11図) 第2面ないし第3面構築土に含まれる遺物。SD250構築時の遺物と対応する。16世紀第4四半期前半。14はC6区出土の胎土に2～4mm大の石英粒子を多量に含み海部郡産と考えられる平瓦<sup>註2</sup>。15はC6区出土の中央に穴が貫通した完形の土製品。変形土錘あるいは紡



第4-11 図 SF151 出土遺物①上層・中層 (1 = 1/1, 2 ~ 22 = 1/3)

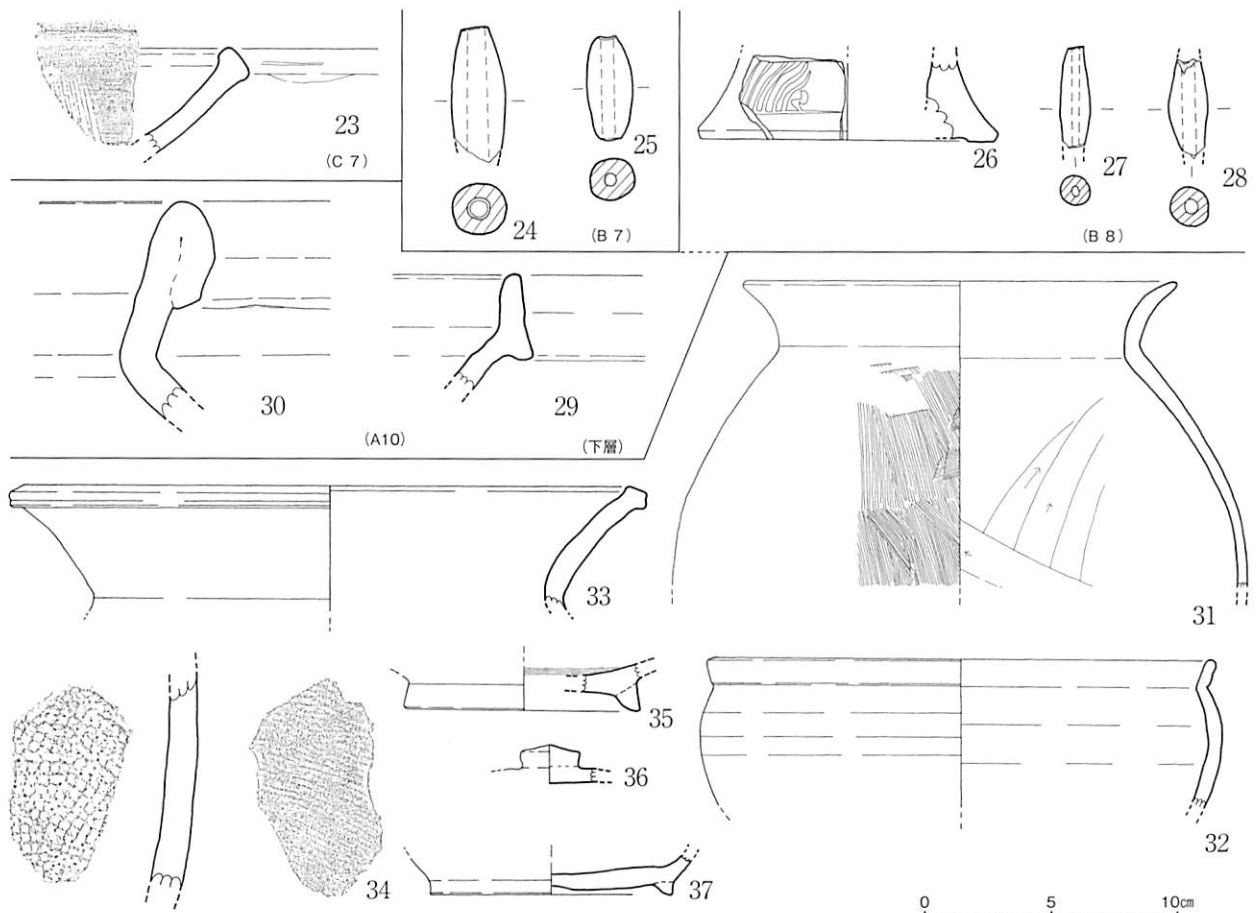
錘車とも考えられる。16はC7区出土の埴、端面はヘラで調整する。17は口縁に煤が付着し灯明皿として使用された底部糸切の土師器の小皿片。復元径7.2cmとかなり小さく、口縁が真っ直ぐに小さく立ち上がる特徴は14世紀の製品に近い。18はB8区出土の管状土錘B類の破損品。19はB8区出土の両端を欠いた管状土錘。20はB9区出土の丸瓦、内面に布目痕、外面は縄目タタキのあとナデ調整。21はA10区出土のロクロ目土師器の皿で、器高の低い河野分類のC-3類にあたる16世紀後半の製品。22はA11区出土の方形の瓦質角火鉢で、外面に菊花文の刻印がある。ほかに青磁碗、備前焼甕、外面格子タタキの瓦質鍋、京都系土師器、平瓦の破片が出土している。

道路4面以下

下層(第4—12図) SD165に対応する道路の埋土。ただし23~26は礫層中から出土したので第4硬化面の舗装の積み土中に含まれた遺物である。23はC7区出土の瓦質播鉢口縁。24は一部欠けたB7区出土の小型管状土錘A類。25はB7区出土の完形の小型管状土錘B類。26はB8区出土の朝鮮王朝産象嵌青磁の瓶底部。27はB8区出土の管状土錘A類。28はB8区出土の両端を欠いた管状土錘。29はA10区出土の15世紀後半中世5期の備前焼播鉢口縁。30はA10区出土の中世6期の備前焼甕口縁。ほかに備前焼壺、瓦質鍋、内面布目の丸瓦、平瓦、ウマ下顎臼歯の破片が出土している。

残留遺物

主に礫敷きの中に混ざりこんでいた遺物である。31は古墳時代中期の土師器甕。口縁部に1箇所打ち欠きがある。32は中世須恵器の鉢口縁部。33は古代の須恵器甕口縁。34は内面に格子目に宛て具痕、外面に並行タタキと特徴のある須恵器甕胴部。35は古代の黒色土器A類碗底部。36は古代土師器坏蓋のつまみ。37は口縁の全周を打ち欠いた古代土師器坏底部。ほかに古代土



第4-12図 SF151 出土遺物②下層 (1/3)

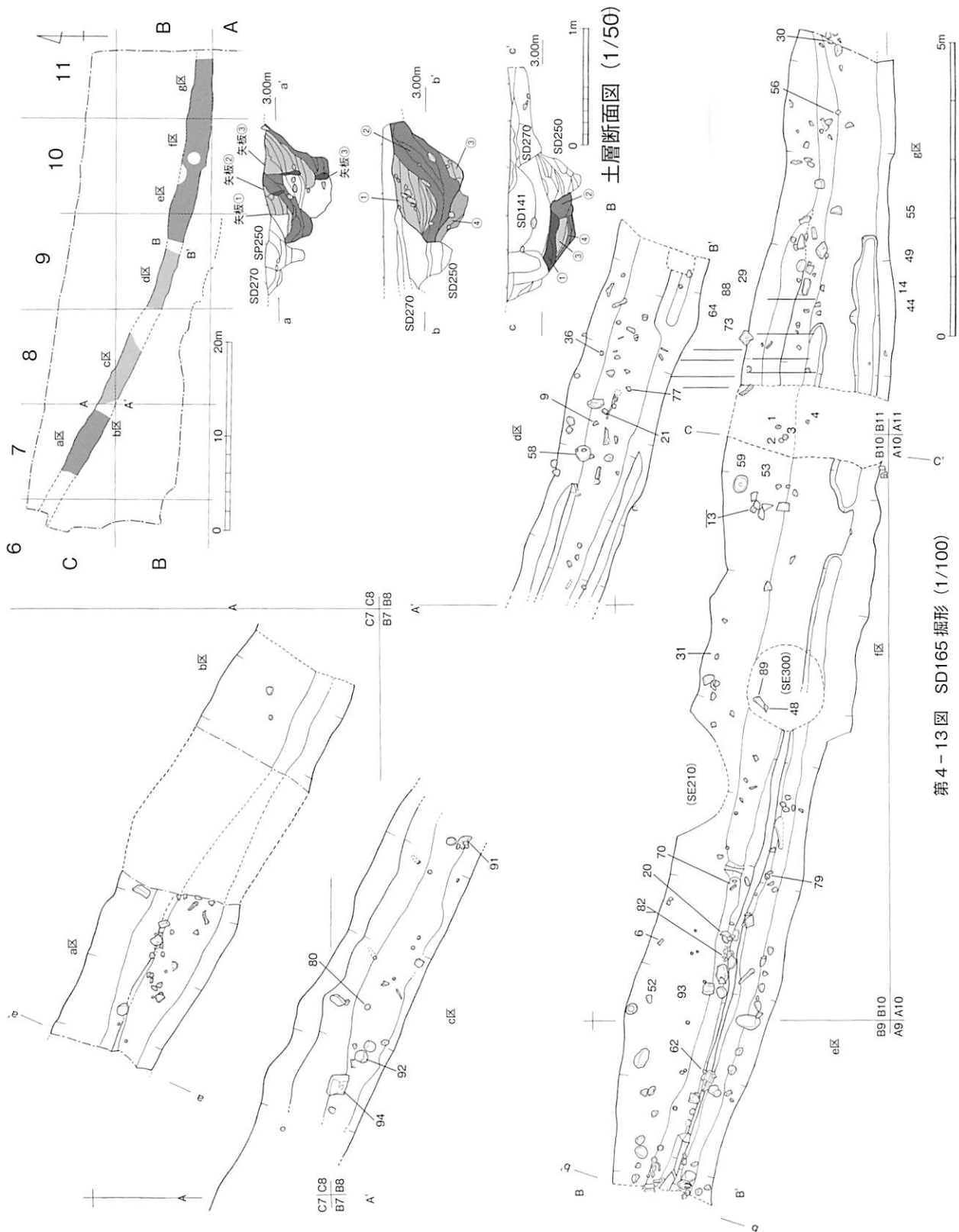
註2 近世から近代の瓦産地として知られる豊後国海部郡の坂ノ市から神崎の近世瓦の胎土および混和材と酷似するので、同じ胎土の中世瓦も海部郡産と推定される。以下の記述では煩瑣をさけて単に海部郡産と表記する。

師器企救型甕、高坏・甑の破片が出土している。

溝

SD165 (第4-13~15図・付図7断面)

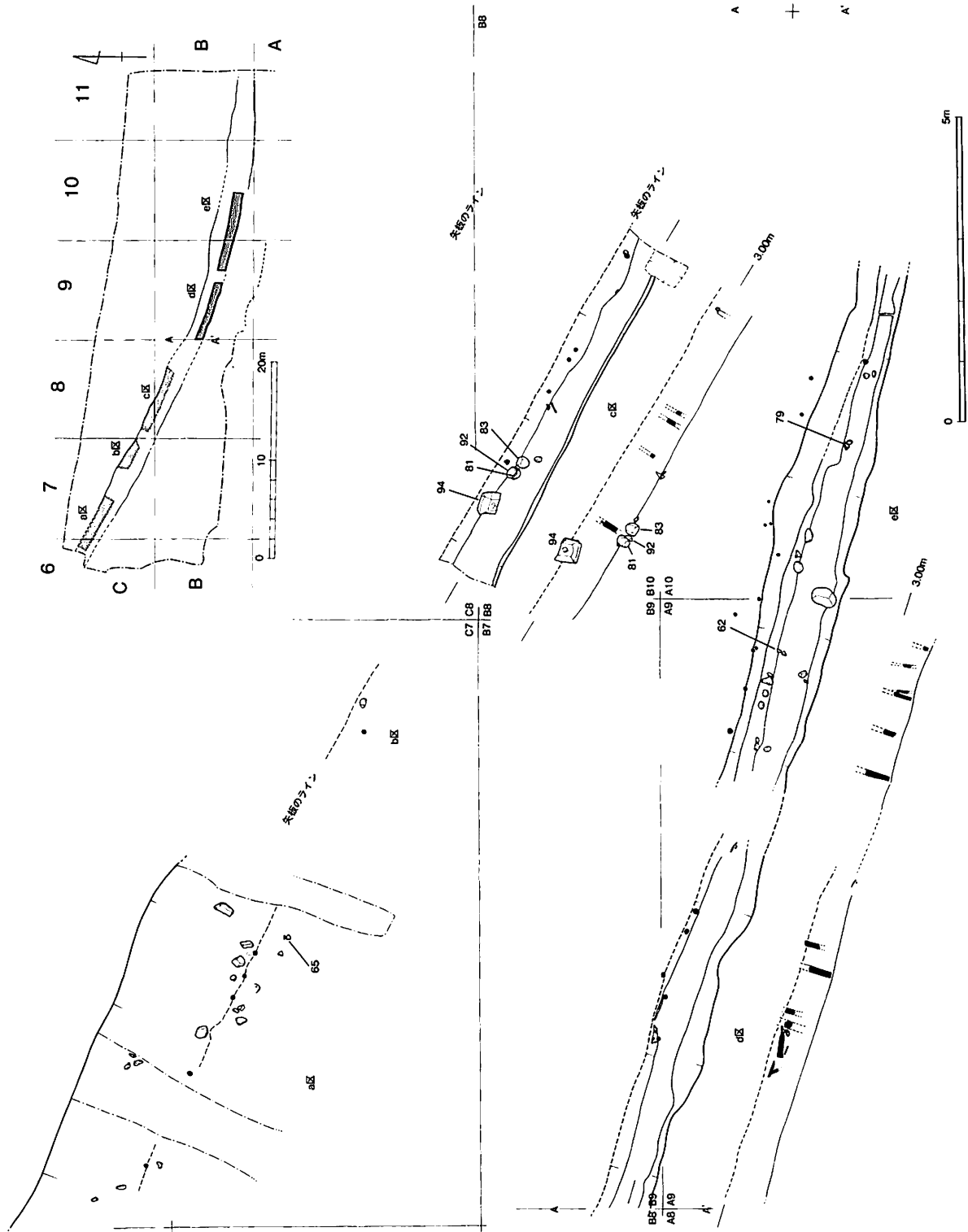
第Ⅱ層除去後に検出した調査区全体を横切っておおよそ東西方向に伸びる溝である。正確には北に5~25度ふり、西に向かうほど北に曲がっていく。全長52mにわたって検出した。溝の断面中央に木製の杭列および杭が腐朽した空洞の杭痕跡を検出し、一部に矢板の痕を発見した。溝北側か



第4-13図 SD165掘形 (1/100)

道路側溝

らの溝の崩壊を抑えるために矢板をあてその南側に杭を打ち込んで止めていたことが判明した（第4-15図B9区付近）。本来は南側の道路遺構SF151の北側側溝としての機能を果たすと同時に、北側の敷地との境界を兼ね、さらに東から西に排水を流す水路としての役割をもっていたことが、溝の掘形底面の絶対高がSD165の東端で2.45m、西端で2.0mの差があることからわかる。15世紀後半の土坑SK251と井戸SE300を切り、近世前期の石列SX139の下に位置し、16世紀第2四半期の土坑SK163に切られるほか、第4四半期の溝SD168、SD250、SD270とSD292に切られる。長大な遺構であるため、土層観察用土手を境界にして西からa～g区の7区画にわけて掘下げた。杭と



第4-14図 SD165第4矢板列 (1/100)

矢板はa区からd区まで検出されたがe区より東では、掘りなおしが浅いことや後の溝と重複しているため検出できなかった。

矢板の改修

溝は当初上端幅2.0m以上、深さ1.4m、底部幅1.0mほどの断面不整な逆台形に掘られ、その中央からやや北に偏った位置に木杭と矢板による土留めを構築している。したがってSD165の北半分は掘形であり、南半分は水路として機能していたことになる。事実水路部分には柔らかい粘土や水流の痕跡である砂混じりの埋土が堆積している。断面観察からみると、最初の杭列を第4とすると第1までの3回の作り直しがあり、そのたびに水路の底部が高くなっていく。西端に近いC7区断面をみると、当初の第4矢板列の水路底面は標高2.1mだが、第3列では2.5m、第2列では2.2m、第1列では2.3mとなっている。同時に矢板の位置をみると、第3列は当初の第4列と同じ位置に作られているが、第2列と第1列は次第に南側に移動している。

15世紀末の造成

構築と存続の時期であるが、第4矢板列を構築したB10～B11区の掘形内に一括埋置されたと考えられる1～4の底部糸切の土師器坏と小皿（第4-15図）から15世紀後半のある時点で構築され、第3矢板列を構築した最初の修築の時期はロクロ目土師器49や京都系土師器1期皿50、接合資料10の瓦灯の破片が入った16世紀第2四半期と考えられる。第2矢板列と第1矢板列の改修の時期は、SD165が16世紀第4四半期前半と考えられる溝SD250にさらされていること、下に掲げた埋土出土遺物の最新の遺物として京都系土師器2期の土師器が出土していることから、16世紀第3四半期にあたりと考えられる。穿った見方をすれば、溝を3回にわたって改修することで1世紀近く存続した溝SD165は16世紀第4四半期にいたって、新たに溝SD250に掘りなおされ、さらにSD270へと引き継がれたと考えられる。

矢板列が作られている方向から見て道路SF151の道路側溝として作られたことは明らかである。しかしSF151には道路面が7面存在した。その対応関係を示しておく、第4矢板列の構築は第7道路面に、第3矢板列は第6道路面に、第2矢板列は第5道路面に、第1矢板列は第4道路面に対応すると考えられる。

#### SD165 出土遺物（第4-16図①～⑧）

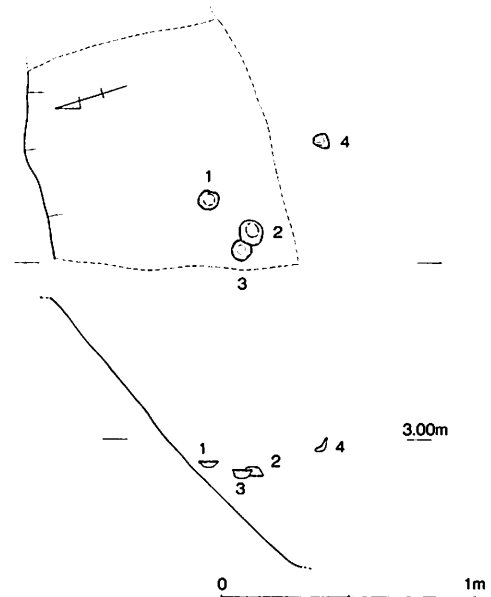
土師器埋置

埋納 B10区とB11区の境界の土手で発見された土師器の一群である（第4-15図）。最初につくられた第4矢板列の裏込めの中におかれたもので、水路構築にともなう儀礼行為に関わって埋置されたものと考えられる。以下に記述するように、坏については明確ではないが小皿はいずれも河野分類A類にあたり、15世紀後葉の製品である。

1は口縁全周が打ちかかれて正位で発見された底部糸切の土師器坏で被熱している。2は逆に伏せて発見された、灯明皿に使用された完形の底部糸切の土師器小皿。口縁が打ち欠かれ、被熱による剥離が激しい。3は口縁全体に煤が付着して灯明皿に使用された完形の底部糸切の土師器小皿、正位で検出された。4は口縁全周を打ち欠き、やや傾いた正位で出土した底部糸切の土師器小皿の完形品。

矢板③・④の掘形内

掘形内 第4矢板列と第3矢板列内の遺物を掘形出土として水路埋土と区別して取り上げることができた。しかし構築当初の第4矢板列北側の掘形出土遺物と、次に改修した第3矢板列の裏込土から出土した遺物を区別することができなかった。したがって以下にあげる掘形内出土遺物の大半



第4-15図 SD165 B10・11区の掘削時の埋置土師器（1/30）

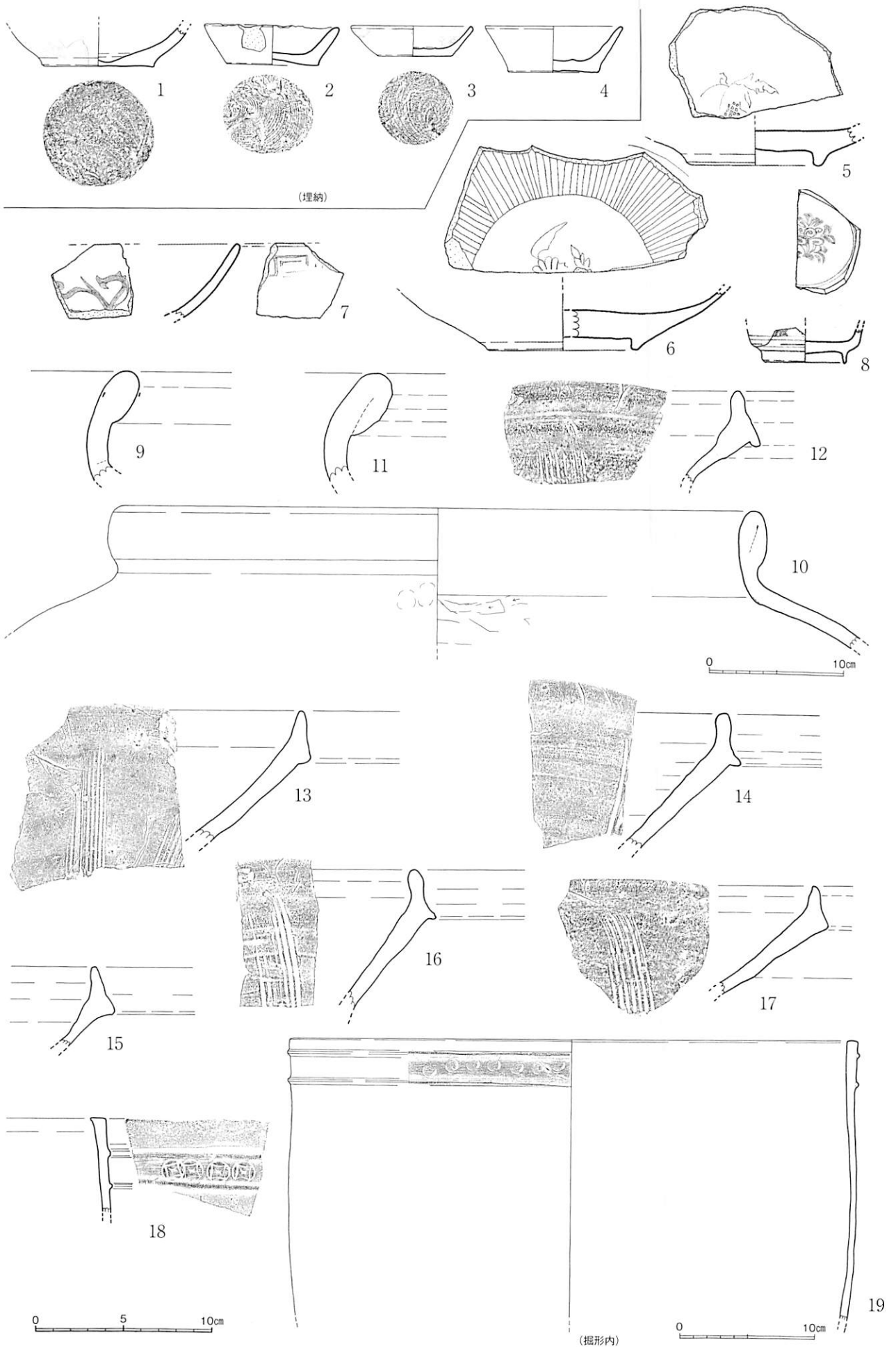
をしめる 15 世紀の遺物が当初の溝 S D 1 6 5 の構築時期を示し、少量含まれる 16 世紀代の遺物の時期が第 3 矢板列の時期を示していると考えられる。

青磁青花 5 は g 区出土の中国龍泉窯系青磁の皿底部片。6 は中国龍泉窯系青磁の皿底部片。7 は d 区出土の口縁外面に雷文帯を刻む 15 世紀の青磁碗 C - 2 b 類の口縁片。8 は d 区出土の中国景德鎮窯系青花の筒形碗の底部片。9 は 15 世紀後半中世 5 期の備前焼の甕口縁片。10 は中世 5 期の備前焼の甕口縁片。11 は c 区出土の 16 世紀中世 6 期の備前焼の甕口縁片。12 は a 区から出土した 15 世紀末中世 5 b 期の備前焼の播鉢口縁片。13 ~ 17 は 15 世紀後半中世 5 期の備前焼播鉢口縁片。そのうち 15 は d 区出土、17 は f 区出土。18 は口縁外面につけた二条の三角突帯の間に七宝文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。19 は渦文の刻印のある瓦質火鉢口縁。20 は横方向に穿孔のある獸脚をつけた瓦質火鉢の胴部下半の破片。21 は口縁を玉縁状に外反させる瓦質播鉢の口縁片。22 は掘形底部より出土した瓦質鉢の口縁片。23 は瓦質土器の碗底部。24 は口縁が外反する 15 世紀の底部糸切の土師器坏。25 は e 区出土の底部糸切の土師器坏口縁片。26 は口縁に 2 箇所打ち欠きが残る底部糸切の土師器坏。胎土に大型石英粒子を含む海部郡産。27 は口縁を 1 箇所大きく打ち欠いた底部糸切の土師器坏底部、河野分類 A 類。28 は河野分類 A 類の底部糸切の土師器坏だが、口縁端部の仕上げはロクロ目土師器皿の古い形態の影響を受けている。25 ~ 28 は指ナデと板状圧痕がなく、河野分類 A 類に属す。出土位置も埋置土師器 1 ~ 4 のすぐ近くで出土している。29 は河野分類 B 類の底部糸切の土師器坏であるが、口縁が外上方に伸びる特徴は A 類の影響が考えられる。30 は河野分類 B 類の底部糸切の土師器で、皿の影響を受けている。31 は河野分類 B 類の底部糸切の土師器坏片。32 は口縁部に煤が広く付着して灯明皿に使用された底部糸切土師器皿の中型品の破片。33 は 14 世紀の底部糸切の土師器小皿片。34 は口縁に煤が付着して灯明皿に使用された完形の底部糸切の土師器小皿。在来系の河野分類 B 類である。35 は口縁に 4 箇所打ち欠きのある底部糸切の土師器小皿の完形品、指ナデと板状圧痕を残す河野分類 B 類にあたる。36 は口縁に 1 箇所打ち欠きのある河野分類 A 類の完形の底部糸切土師器小皿。37 は河野分類 A 類の底部糸切の土師器小皿片。38 は口縁を大きく打ち欠いた河野分類 A 類の底部糸切土師器小皿の小型品。39 は口縁を大きく打ち欠いた河野分類 A 類の底部糸切の土師器小皿。胎土精良。40 は河野分類 A 類の底部糸切の土師器小皿、胎土精良。41 は f 区出土の河野分類 A 類の底部糸切の土師器小皿。42 は f 区出土の河野分類 A 類の底部糸切の土師器小皿だが、器高が低い。43 はロクロ目土師器に近い底部糸切の土師器皿。44 はロクロ目土師器の形態に近い底部糸切の土師器坏。45 は底部糸切の土師器皿であるが、ロクロ目土師器のロクロ目をナデ消した皿である。46 はロクロ目土師器皿片、河野分類 C - 1 類。47 は底部に板状圧痕を残すロクロ目土師器皿で、被熱による剥離激しく、外面に煤が付着している。48 は底部糸切の土師器底部、胎土精良。49 は完形のロクロ目土師器皿。50 は口縁部に 1 箇所煤が付着し、1 回のみ灯明皿として使用されたと推定される京都系土師器 1 期の小皿片。51 はがんぶり瓦の破片。52 は胎土は海部郡産で、内面に布目痕の残る丸瓦片。53 は海部郡産の平瓦。54 は海部郡産の埴。55 は厚手で胎土は在地産の埴。56 と 57 は埴。58 は上下両端を削って再加工された凝灰岩製の五輪塔の水輪。59 は凝灰岩製の五輪塔の水輪。60 は e 区出土の完形の中国銅銭、元豊通寶（北宋 1078 年初鑄、篆書体）。61 は c 区底部出土の円形木製品の破片。なお S K 2 6 5 出土片と接合した瓦燈（接合資料 10）の破片が出土している。ほかに石臼、鉄釘、焼けた壁土の破片が出土している。

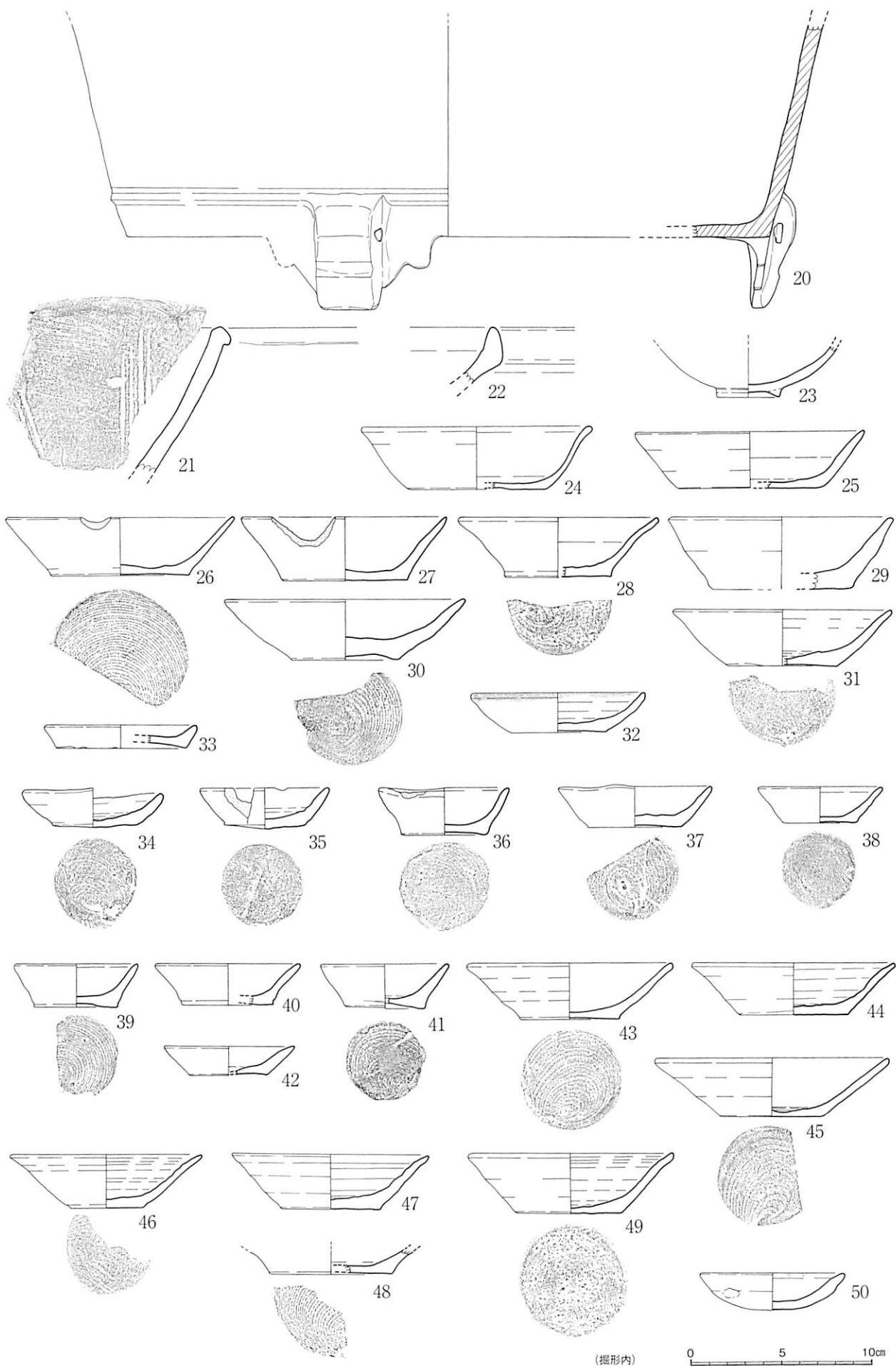
埋土内 埋土として取り上げた遺物は第 4 矢板列の水路埋土、第 3 矢板列の水路埋土、第 2 矢板列と第 1 矢板列の裏込めと埋土出土の遺物に当たる。このうち 81 と 83 の土師器および 92 の石塔はほぼ同時に廃棄されたものである。

備前焼 62 は中国景德鎮窯系青花皿 C 群の碁筍底の皿片。63 は中国製褐釉陶器の壺口縁片。64 は備前焼の壺口縁片。65 と 66 は 15 世紀後半中世 5 期の備前焼播鉢の口縁片。67 は B 10 区出土の 15





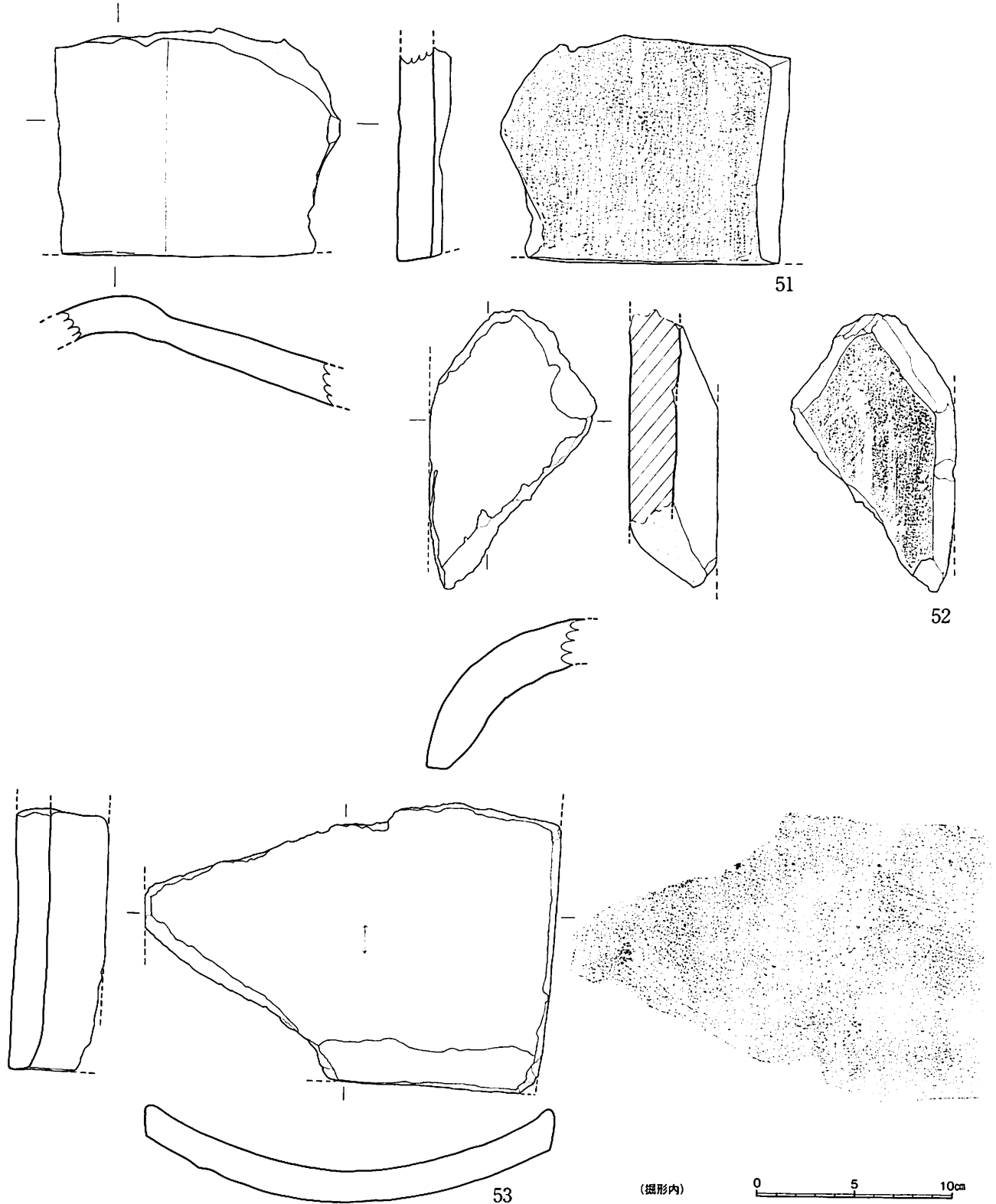
第4-16图① SD165出土遺物 (1/3, 10, 19 = 1/4)



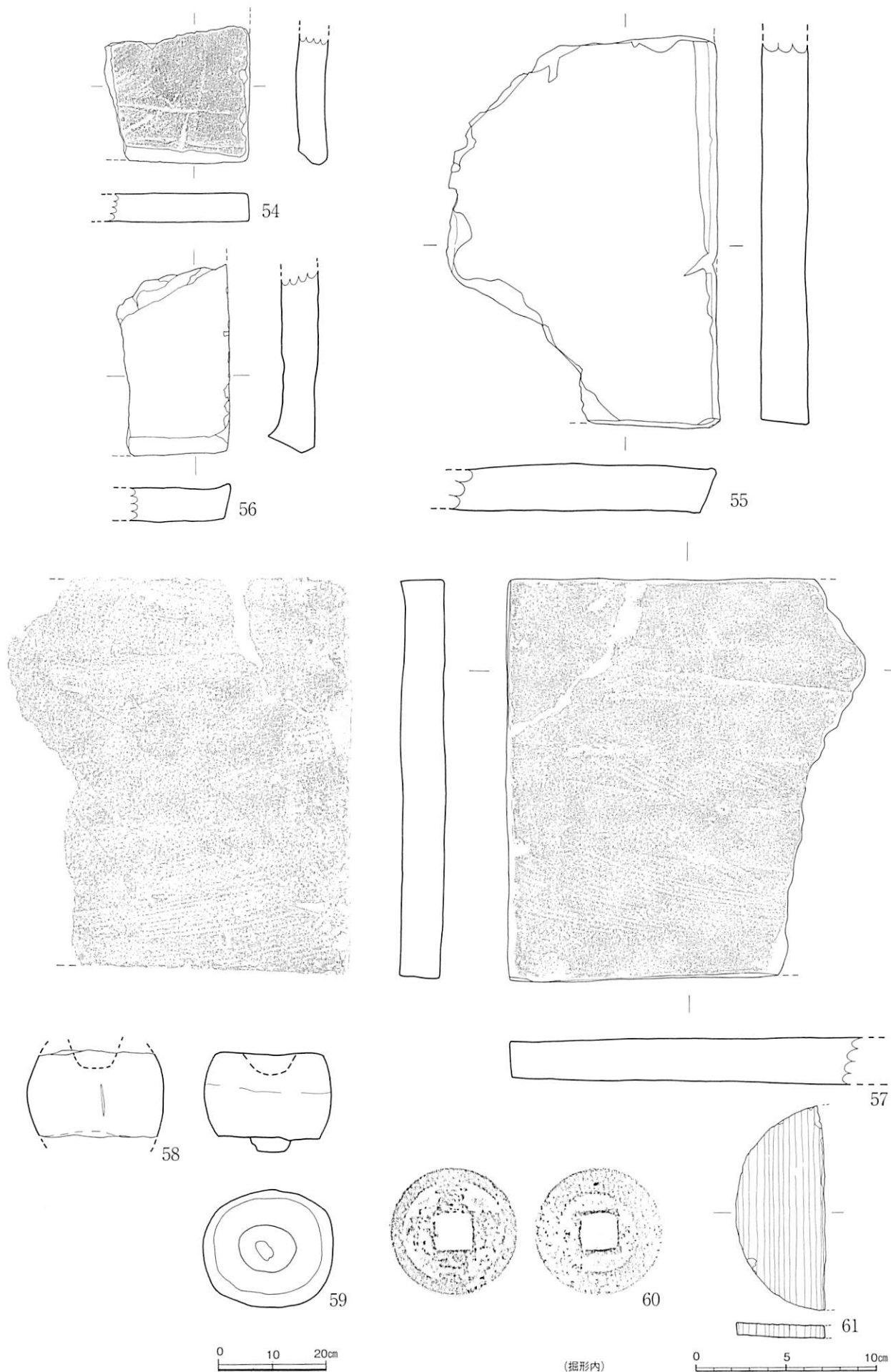
第4-16図② SD165出土遺物 (1/3)

瓦質土器  
土師器

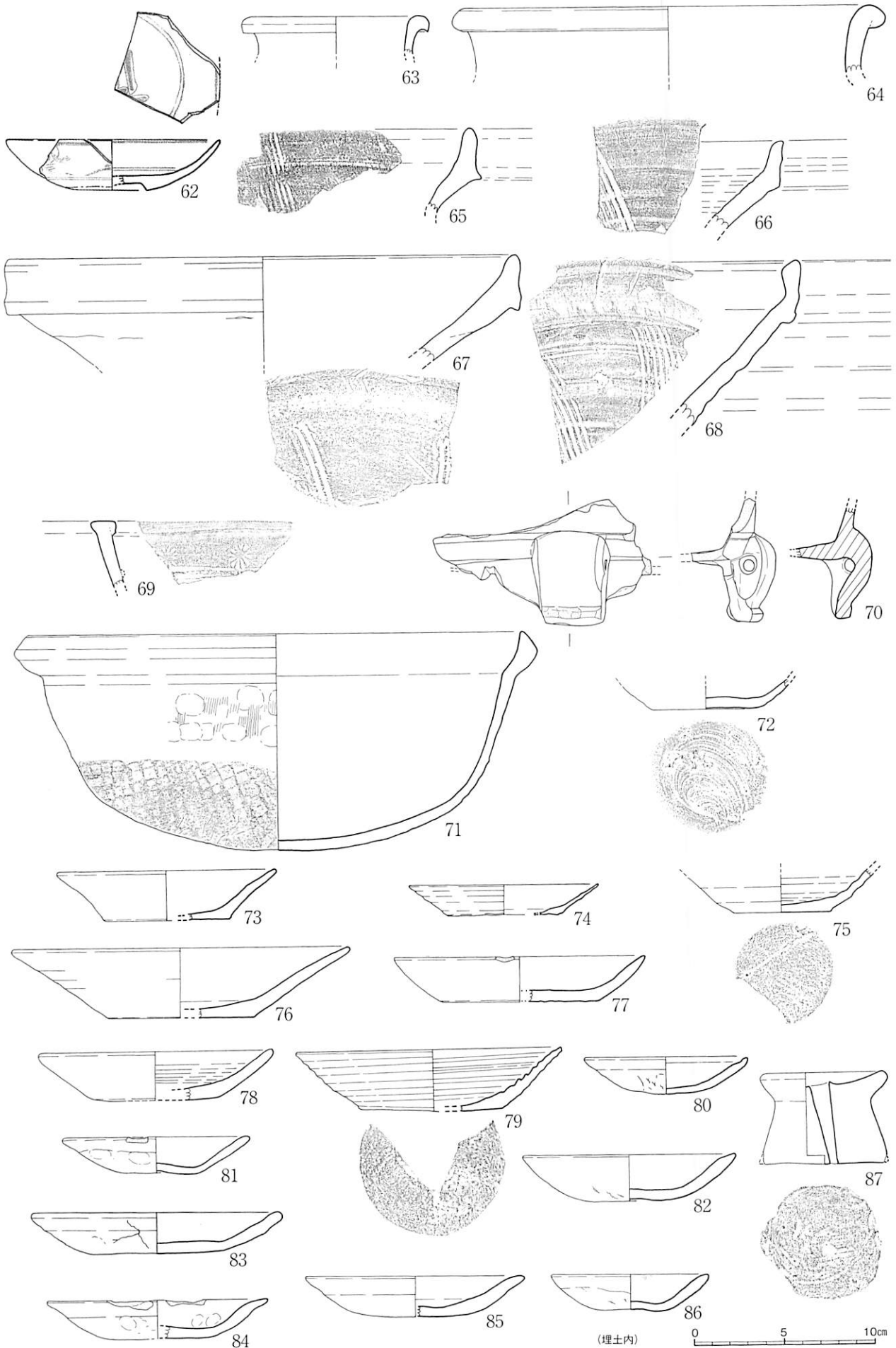
世紀前葉中世5a期の備前焼播鉢口縁片。68は中世6a期の16世紀前葉の備前焼播鉢。69は菊花文の刻印のある瓦質火鉢の口縁。70は横方向に穿孔のある瓦質火鉢の獣脚。71は底部外面に格子タタキを残す防長系の瓦質鍋（接合資料5）。72は口縁全周を打ち欠いた底部糸切の土師器坏の底部。73は河野分類A類の系譜を引く底部糸切の土師器皿。74は白っぽい胎土で薄手の大内系底



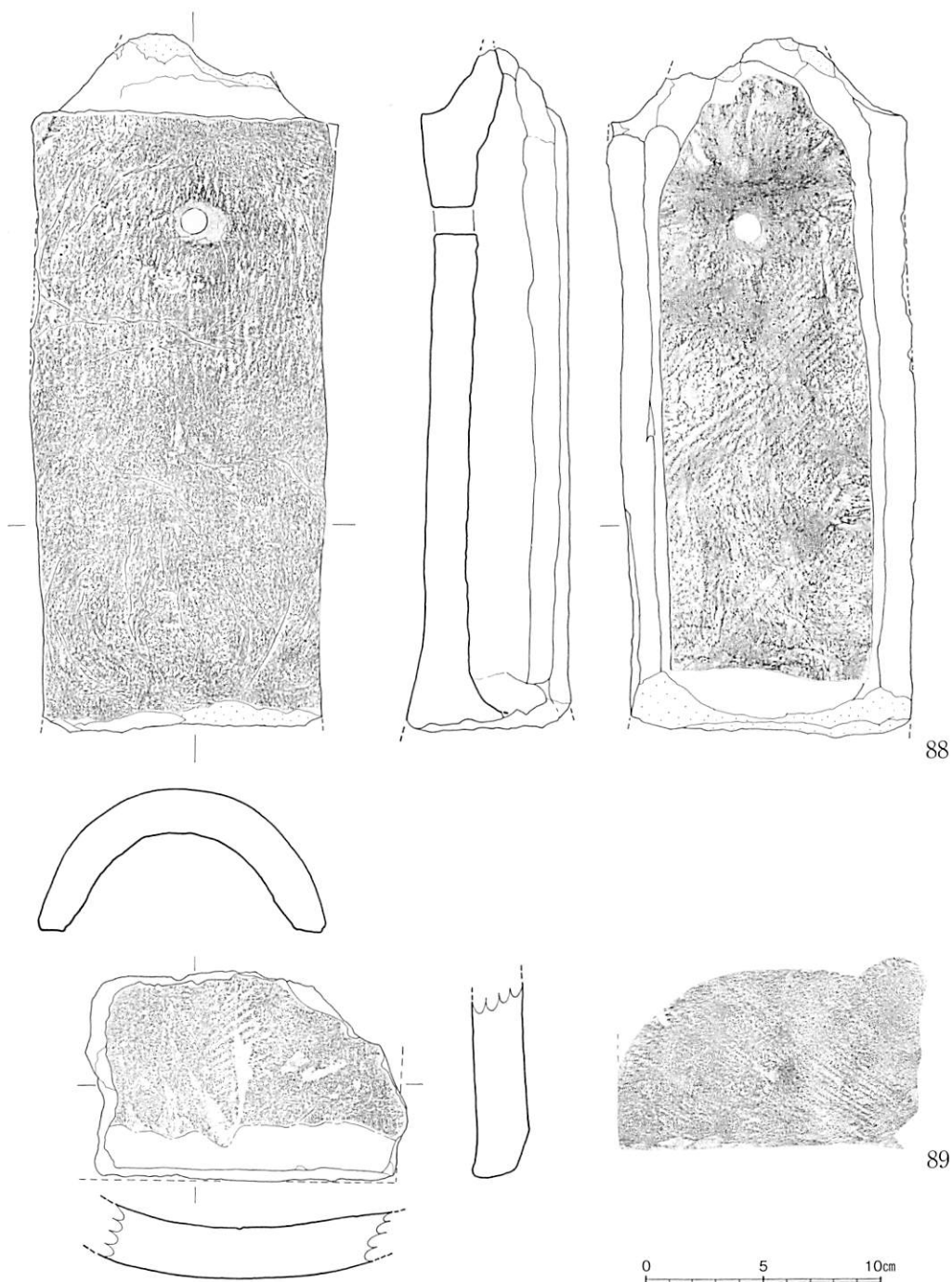
第4-16図③ SD165出土遺物 (1/3)



第4-16図④ SD165出土遺物 (1/3) (58・59=1/10、60=1/1)

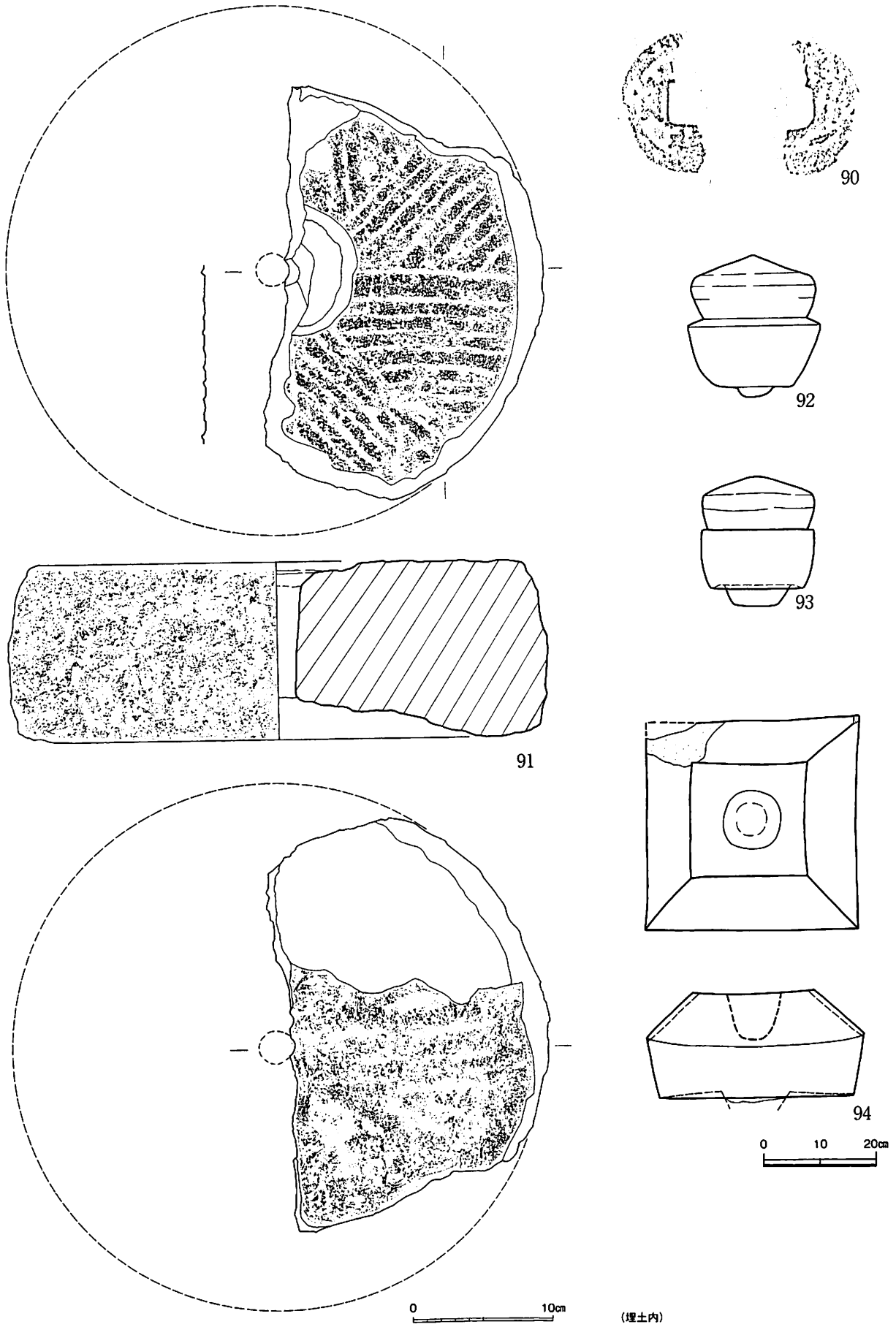


第4-16图⑤ SD165出土遺物 (1/3)

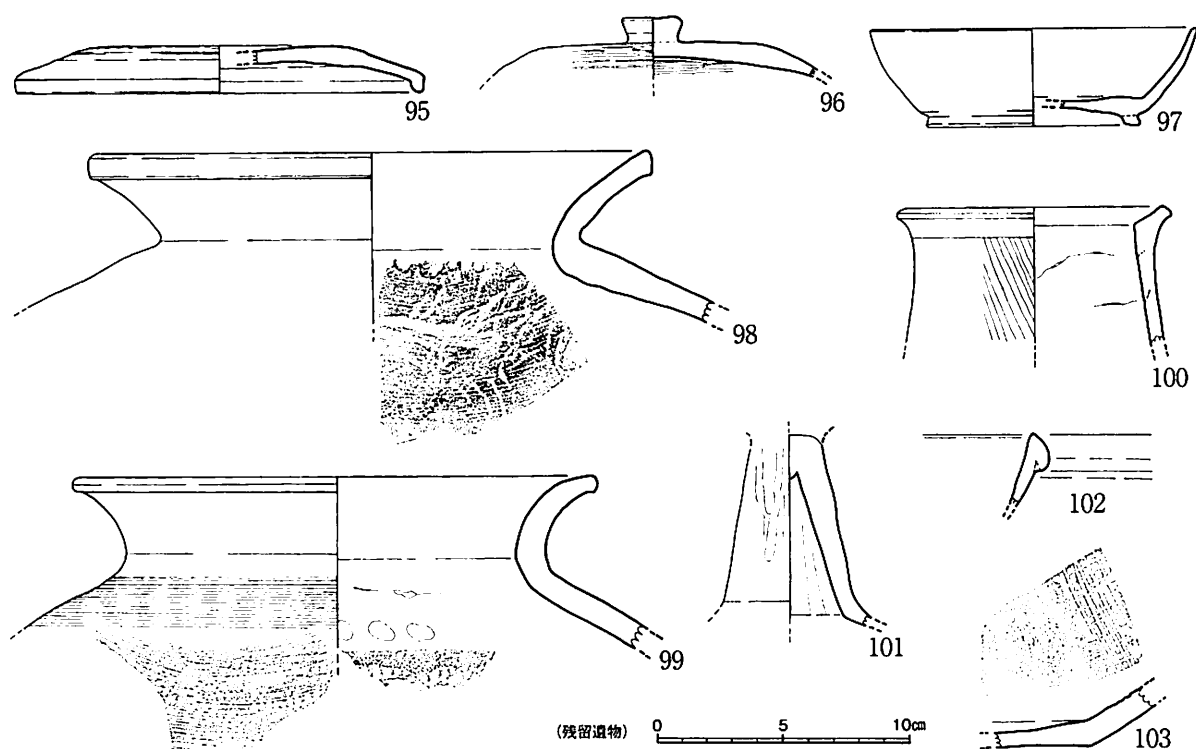


第4-16図⑥ SD165出土遺物 (1/3)

部糸切の土師器坏口縁片。75はロクロ目土師器の底部。76は河野分類A類の系譜を引く底部糸切の土師器の大皿口縁片。73と同一形式。77は口縁に1箇所打ち欠きがある16世紀後半の京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器皿口縁部片。78はロクロ目土師器皿。79はロクロ目土師器皿の大型品。80は口縁に2箇所煤の付着があり灯明皿として使用された完形の京都系土師器1期の小皿。81は口縁に1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期皿。82は外面が被熱して変色して剥離し、内面には一部に煤が付着した京都系土師器2期皿の破片。83は口縁が1箇所大きく打ちかかれた京都系土師器2期皿、破片が接合したので廃棄される直前にその場で割られたことを示している。84は口縁に1箇所打ち欠きのある京都系土師器2期皿の口縁片。85はd区出土の京都系土師器2ないし3期の皿口縁片。86はd区出土の口縁に1箇所の煤の付着して灯明皿に使われた京都系土師器2期小皿。87はd区出土の底部糸切で穿孔の貫通する土師器燭台A類。88は外面に縄目



第4-16图⑦ SD165出土遺物 (90=1/1、91=1/4、92・93・94=1/10)



第4-16図⑧ SD165出土遺物(1/3)

石製品

タタキ痕が残り、目釘穴がある軒丸瓦。89は海部郡産の平瓦片。90は半分に分れた中国銅銭、嘉祐通寶（北宗1056年初鑄・真書体）。91は安山岩製石臼の下臼の破片。下底に工具痕残る。92と93は凝灰岩製の五輪塔の空風輪。94は凝灰岩製の五輪塔の火輪。なおSK228、SK261、SK293出土片と接合した瓦質火鉢（接合資料15）の破片が出土している。ほかにB9区では中国漳州窯系青花、海部郡産の丸瓦、がんぶり瓦、動物骨の頭骨、木製の卒塔婆の破片などが出土している。

残留遺物 95は8世紀後半の須恵器坏蓋。96は8世紀の土師器坏蓋。97は8世紀後半の須恵器坏身。98は古代の須恵器甕口縁。99は肩部にカキ目を施す古代の須恵器壺口縁片。100は非常に粗いハケ目の古代の土師器小型企救型甕口縁。101は古墳時代前期の土師器高坏脚部片。102は12～13世紀の口縁玉縁の白磁碗。103はc区掘形内より出土した12～13世紀の瀬戸美濃産卸皿の底部片。

SD259・SD277・SD294・SD255（第4-17図）

小溝群

墓地以前

C7・C8区（北2区）において第2層除去後に発見された以下に述べる4つの溝は、16世紀後半に成立する墓地の各埋葬に近接あるいは重複して検出されたため、調査当初は墓地に関連する区画の溝とも考えたが、小溝がすべて墓地の遺構に切られることや、溝の埋土中から16世紀と判断できる遺物が出土せず、最も新しい溝SD255からは、底部糸切の土師器小皿破片が出土しているため15世紀の遺構と判断した。

SD259・SD294は本来1連あるいは相互に関係すると見られる東西方向の小溝である。延長すると長さ10m、幅0.8m、深さ0.2mほどの断面円形の浅い溝である。SD259は15世紀後半の土坑SK256を切り、16世紀第4四半期の墓ST260（10号墓）とSD255に切られる。SD277は16世紀第4四半期の墓ST150（4号墓）に切られ、SD294は同じくST150（4号墓）とSD255に切られる。並行するSD277とSD294はともに灰色の粘質土の単純層からなり、本来同じ時期に使われた一組の並行する遺構と考えられる。以上の小溝からは時期を判定できる遺物はないが、京都系土師器の破片が含まれないことを確認した。



SD259・SD294を切るSD255はほぼ同じ方向にやや南に掘られた溝で、同一の機能の溝が作り直されたものと推定される。西側で北に屈曲する。長さ東西11m以上南北3m以上、幅0.4～0.6m、深さ0.3m。断面はゆるい台形をなし、埋土は単層の明灰褐色土で、小礫や礫が砕けたような粗い硬い土を多く含む。遺物は数点の土師器の破片が出土しているのみである。16世紀後半の墓地群であるST149(8号墓)、ST152(9号墓)、SP254、ST257(11号墓)、ST274(12号墓)、ST296(15号墓)に切られる。出土土師器がロクロ目土師器、京都系土師器を含まず底部糸切の土師器のみである点と、15世紀前半の土坑SK256を切ることから15世紀後半の遺構と判断した。その性格はなんらかの区画の溝と推定される。

SD255 出土遺物 (第4-18図)

1は上面出土の底部糸切の土師器小皿。内面底部にらせん状のナデ痕があり、口縁に1箇所打ち欠きがある。2も底部糸切の土師器小皿片。1と2は同一形式である。ほかに瓦質土器の破片が出土している。

井戸

SE300 (第4-19図)

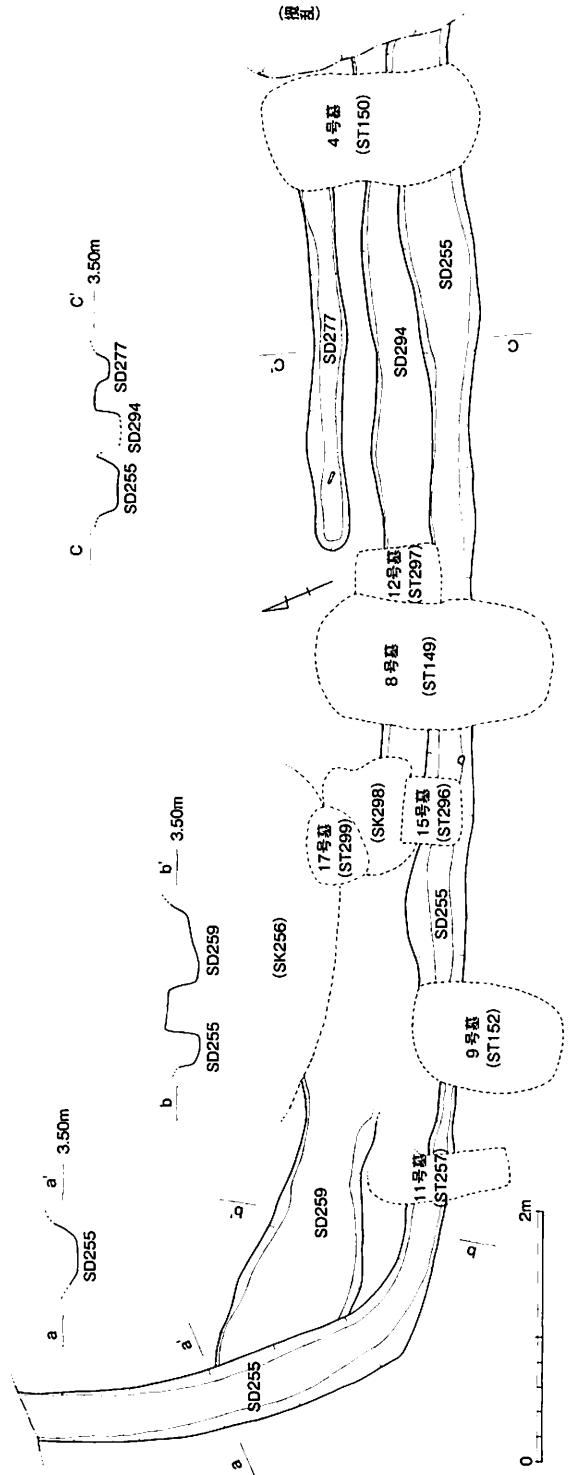
B10区(東区)の溝SD165の掘形底面で検出された井戸である。径1.4mの井戸の掘形内より、竹製の桶クガの箍のみが出土し、桶の板材そのものは出土していない。井筒と推定される範囲内から小型の曲げ物が出土している。このような状況からおそらくSD165が掘削された際に井戸桶を抜き取ったものと推定される。桶は径0.65～0.7mである。底面の標高は海拔1.6mで、2.0mまでが水の湧き出る砂層である。激しい湧水のため記録することが不可能であったが、その底面は礫敷きであった。溝SD165にきられていることと、出土土師器がロクロ目土師器、京都系土師器を含まず底部糸切の土師器のみである点から15世紀の遺構と判断した。底部糸切の土師器坏は在来系のもので集中するので15世紀中葉以前と考えられる。

区画Bの溝

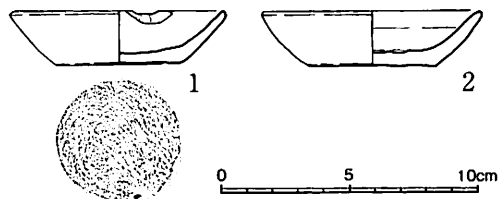
井筒は桶

抜き取り

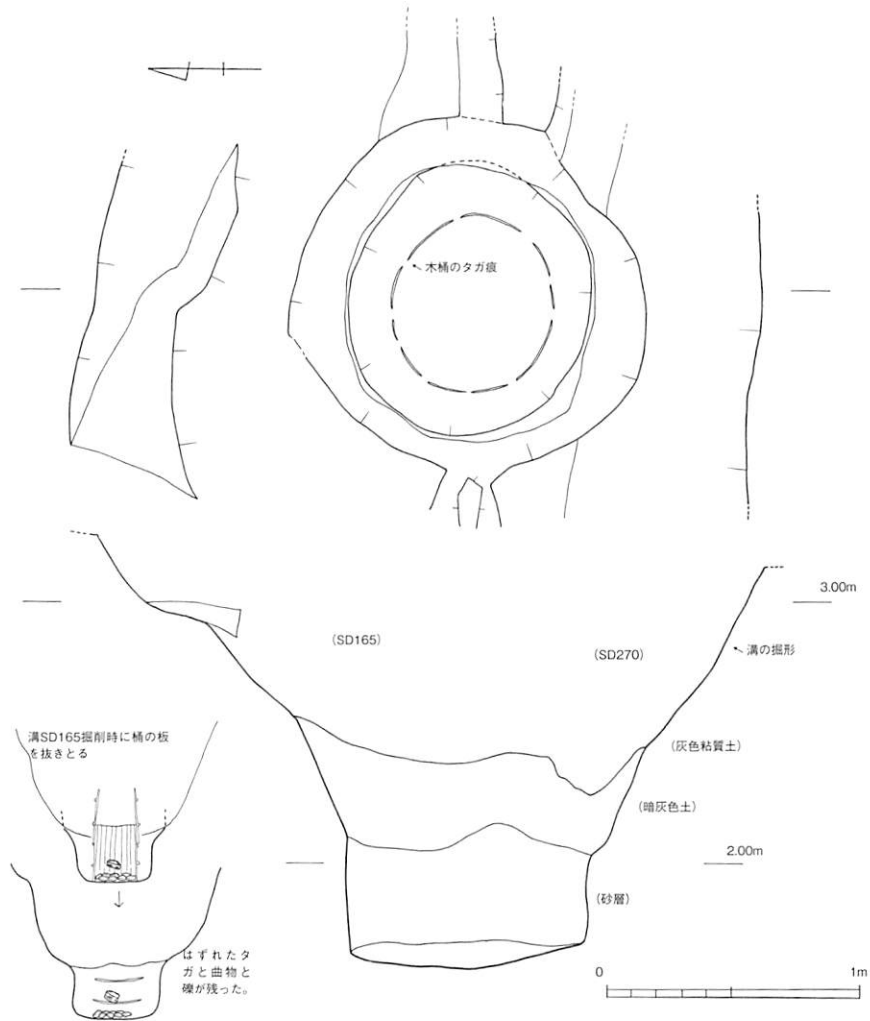
15世紀前半



第4-17図 SD259・SD277・SD294・SD255 (1/60)



第4-18図 SD255 出土遺物 (1/3)



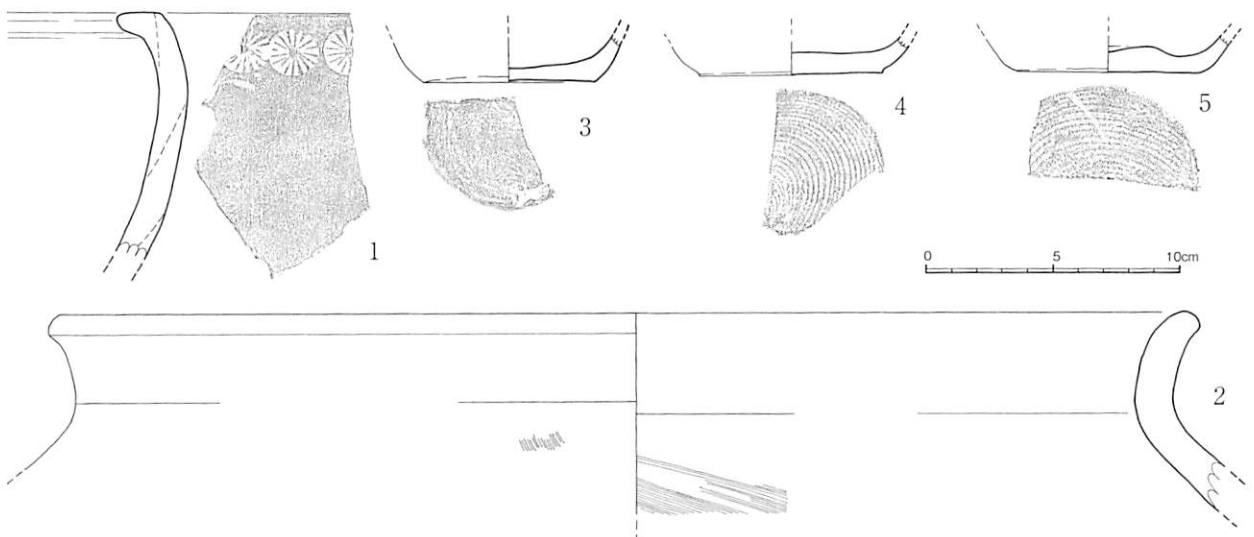
第4-19図 SE300 (1/30)

瓦質土器

SE300 出土遺物 (第4-20図)

土師器

すべて井筒内から出土したものである。1は口縁が内湾する瓦質火鉢の口縁部、外面に菊花文の刻印が連刻されている。2は口径40cmをこえる瓦質大甕の口縁。3と4は河野分類B類にあたる在来系の底部糸切の土師器坏底部片。5は底部糸切の土師器坏底部片。



第4-20図 SE300 出土遺物 (1/3)

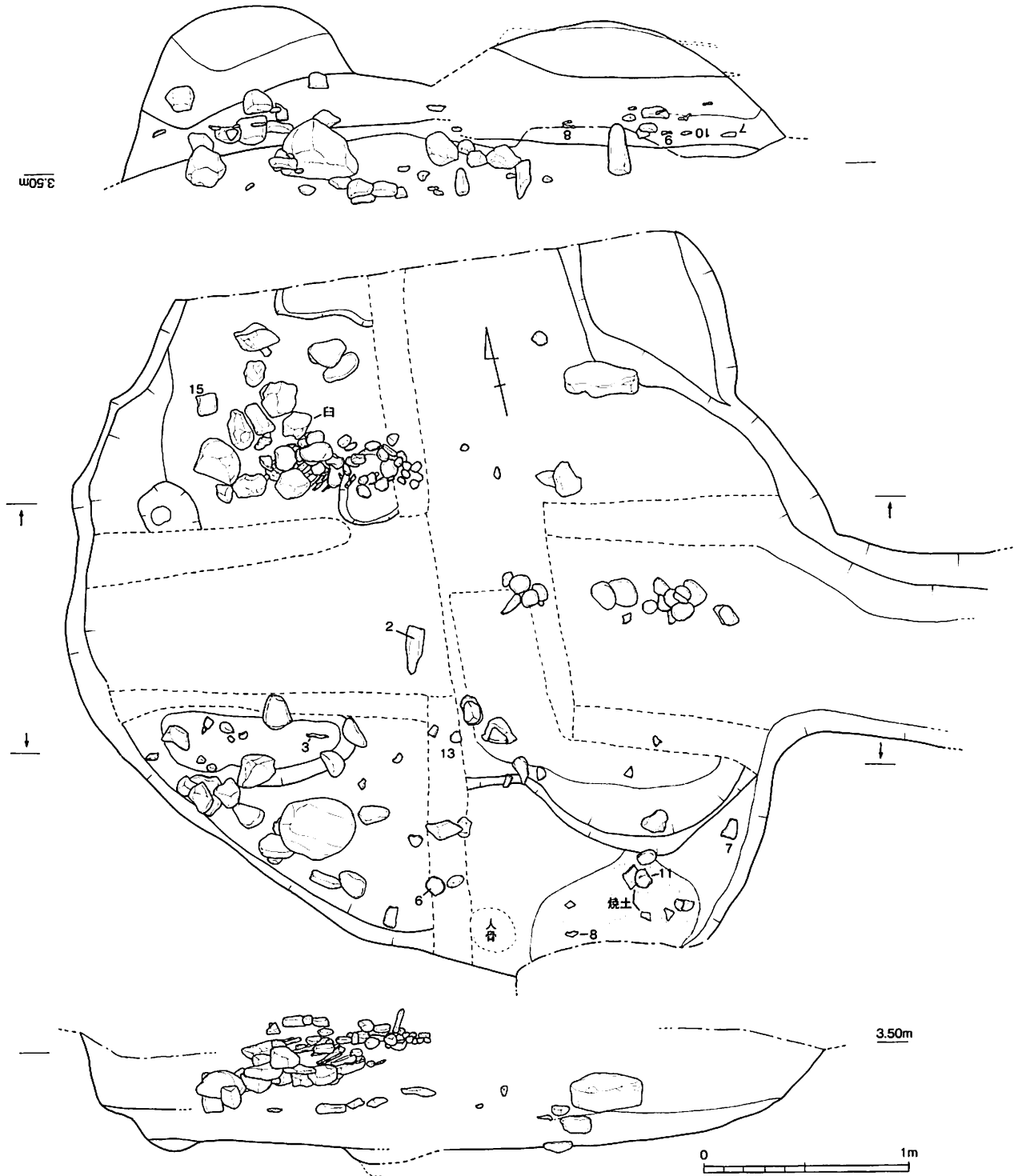
土坑

以下に記述する土坑のほかにSK266のA土坑(第4-39図)が15世紀にさかのぼる可能性が高い。詳しくは3項のSK266を参照。

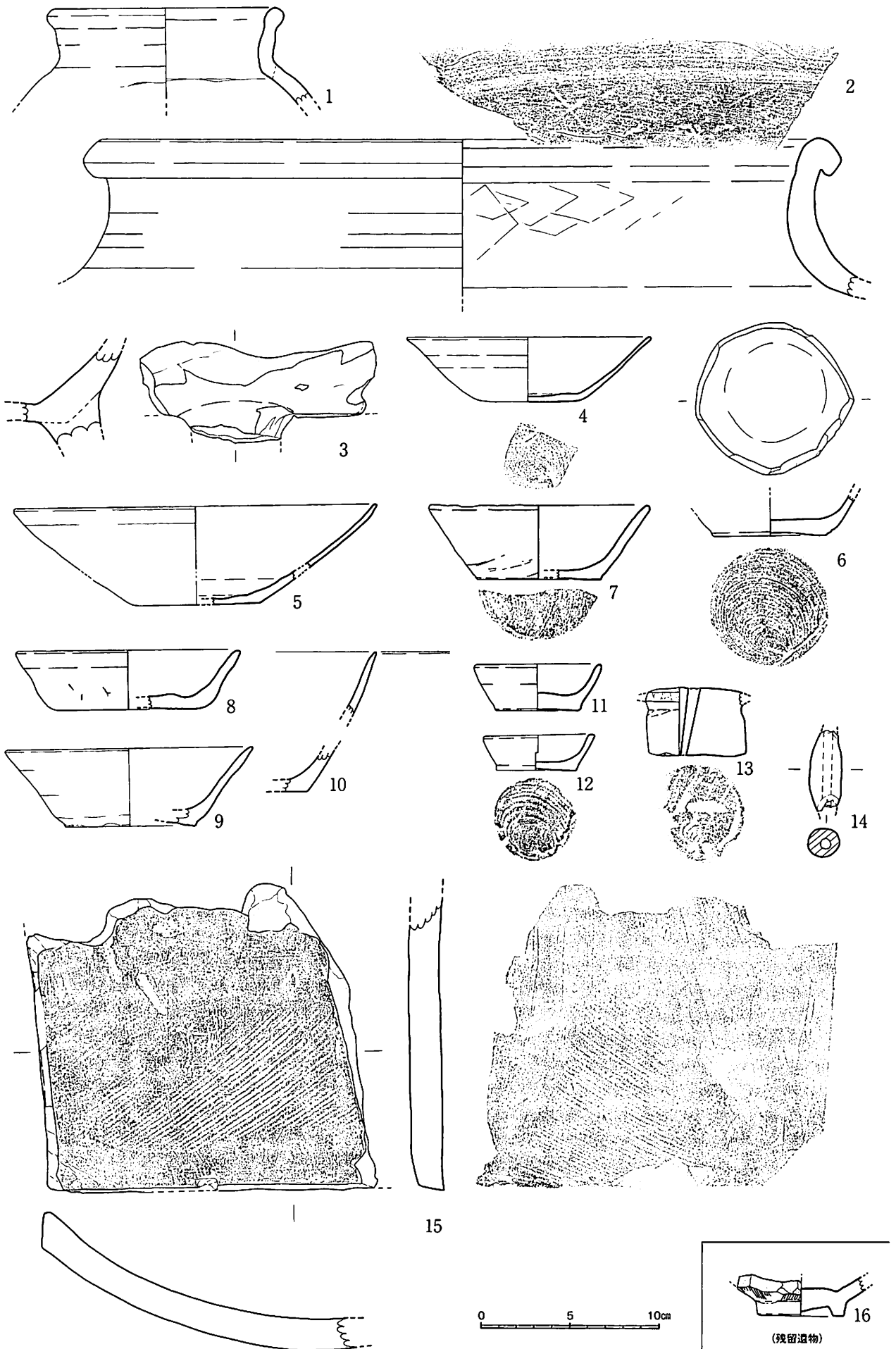
大型土坑

SK256 (第4-21図)

C8区(北2区)で検出された長さ3.7m、幅3.5m、深さ0.6mのほぼ平面円形の土坑で、SD131、SD259、16号墓(ST297)、17号墓(ST299)など多数の遺構に切られている。焼土や炭、動物骨



第4-21図 SK256 (1/30)



第4-22図 SK256出土遺物 (1/3)

廃棄土坑 や土師器の破片が散在する廃棄土坑である。とくに8～11の底部糸切の土師器坏は、廃棄された焼土のブロック中で検出されたもので、一括性が高い。ほかに動物の肋骨が廃棄されており、大型の廃棄土坑と考えられる。切合上最古の遺構であることと、出土遺物に16世紀に下るものがないことから15世紀の遺構と判断した。口縁が直線的に外上方にのび、器高の高い坏と小皿（河野分類A類）の出現する15世紀後半の遺構と考えられる。

15世紀後半

SK256 出土遺物（第4 - 22図）

大内系

1は15世紀中世4ないし5期の備前焼の壺口縁部片。2は須恵器のような色調の中世2b期の備前焼の甕口縁片。3は脚部の残る瓦質火鉢の底部片。4は胎土精良で白っぽい大内系土師器器坏の破片。5は同じく大内系土師器大型の坏、復元口径はおよそ22cm。6は口縁全周を破損した底部糸切の土師器坏の底部で、底部内面の指ナデや板状圧痕はない。故意に打ち欠いたものと考えられる。7は器高の高い底部糸切の土師器坏、河野分類のA類。8から11までの4個体の土師器は、焼土ブロック中から出土しており同時に廃棄されたもので、一括性の高い資料である。8は器高の低い河野分類B類の底部糸切の土師器坏。9は河野分類A類の底部糸切の土師器坏。10は河野分類A類の底部糸切の土師器坏。11と12は河野分類A類の底部糸切の土師器小皿。13は15世紀の小柳分類5類にあたる土師器燭台。14は胎土から海部郡産と推定される管状土錘B類。15はコビキ痕A類が明瞭な平瓦。

一括資料

残留遺物

残留した遺物として、16の12～13世紀の中国同安窯系青磁碗の底部が出土したほかに、鉄釘片や骨片、古代の布目のつく六連式焼塩用製塩土器が出土している。

SK298（第4 - 23図）

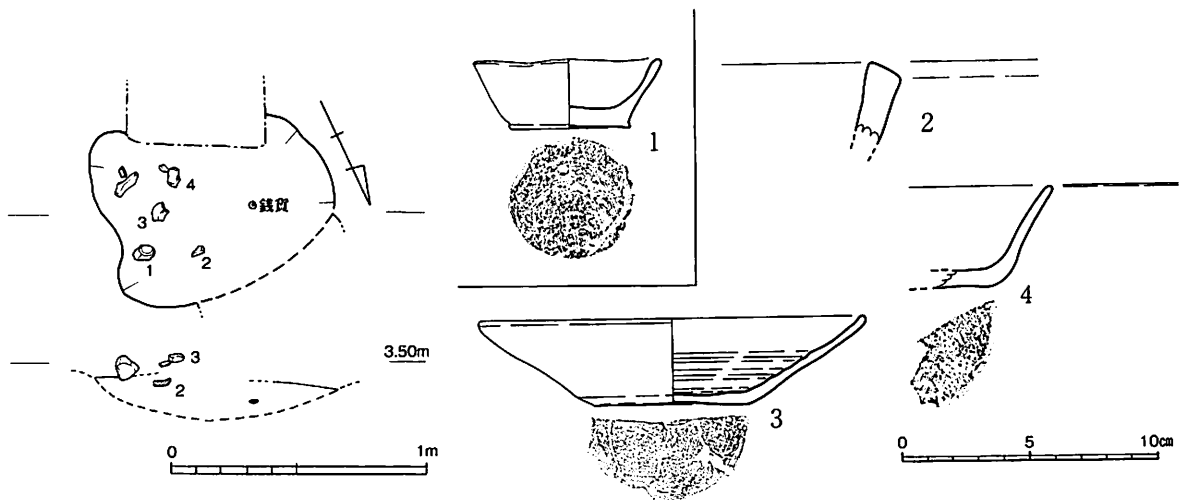
埋置

C8区（北2区）で検出された長さ0.8m、幅0.7m、深さ0.3mのほぼ平面円形の土坑で、SD255、SD294、SK256を切り、15号墓（ST296）と17号墓（ST299）に切られた墓地以前の遺構である。埋土には炭を多く含み、伏せられた状態で底部糸切の土師器小皿の完形品1個体を上部で発見した。故意に埋置されたものと推定される。出土遺物は小片を含めてすべて15世紀後葉のものであり、遺構の切合関係も矛盾しないことから15世紀の遺構とした。

SK298 出土遺物

1は埋置された遺物で、逆さで出土した。炭化物の付着した完形の底部糸切の土師器小皿で、口縁を比較的広く打ち欠いている。河野分類のA類にあたる。

以下は埋土中で出土したもの。2は中世3ないし4期の備前焼播鉢口縁。3は大内系土師器の皿で内面にロクロ痕が残る。4は14～15世紀代の在来系の底部糸切の土師器坏。



第4-23図 S298（遺構 1/30、遺物 1/3）

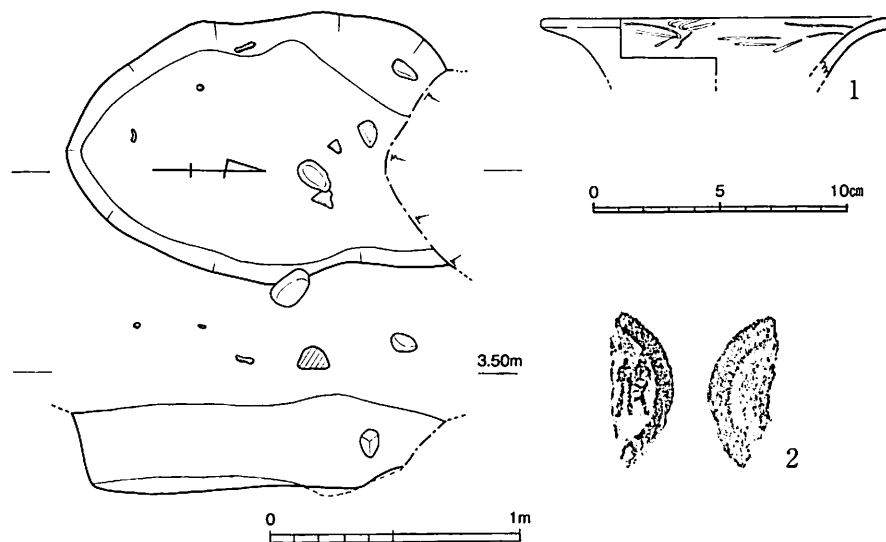
廃棄土坑

SK286 (第4—24図)

B10区(東区)で検出された長さ1.5m、幅1.05m、深さ0.3mの平面円形の土坑で、断面は半円形をなし、埋土は上下2層に分かれる。上層は暗茶褐色粘質土(黄色粘土ブロックを多く、小礫・炭焼土を含む)で、下層は暗茶褐色軟質土で1cm大の炭を多く含む。SK283の底面で検出し、そのSK283と16世紀第2四半期の土坑SK285に切られている。両層とも炭焼土を多く含む。出土遺物はいずれも碎片で、埋土中に散在しており、廃棄されたものと推定される。切合関係から15世紀の遺構と考えられる。

SK286 出土遺物

1は鎬のある中国製の青磁皿口縁部、SE234出土片と同一個体と推定される(接合資料37)。2は元符通寶(北宋初鑄1098年・篆書体)と考えられる中国銅銭の破片。ほかに青花の小片、備前焼の壺、瓦質火鉢、塼の破片と銭種不明の銅銭が出土している。



第4-24図 S286 (遺構 1/30 遺物 1=1/3 2=1/1)

小土坑

SK287

B10区(東区)において攪乱坑の底面で検出されたの平面長円形の小土坑で、16世紀第2四半期の土坑SK285に切られている。断面は半円形を成し、埋土はやや硬い小礫と暗黄褐色土の混層である。図示できる遺物はないが、土師器の破片が出土している。切合関係から15世紀の遺構と推定する。

SK206、SK207

C10・C11区(東区)で切りあって検出された2つの土坑である。いずれも基盤IV層上で検出され、SK206をSK207が切り、ともに井戸SE234に切られる。底面はともに凸凹で、いずれも残された部分がわずかなため形態は不明である。埋土は単層で、第2層と同じ土で埋没している。出土遺物はなく、切合関係から15世紀の遺構とした。

SK199 (第4—25図)

C11区(東区)で切りあった2つの土坑である。当初基盤Ⅳ層上で検出されたときは1つの土坑と考えたが、掘り進むと2つの土坑となった。まず長さ1.7m、幅1.4m、深さ0.1mの長円形のSK199A土坑が掘られ、それを切り込んで径0.8m深さ0.35mの円形の小土坑であるSK199B土坑が掘られている。その上からSP201とSP213に切られている。A土坑の底面には炭層(2層)が認められるが、土器は破片が散在する状態で、廃棄土坑と推定される。これに対しB土坑には底面に炭層が堆積し、その上に口縁が打ちかかれた多数の底部糸切の土師器の坏7個体と小皿1個体が置かれていた。中には破碎されたような土師器や完形のまま逆さで発見されたものもあった。中央に置かれた8の土師器坏が逆さにおかれ、その周囲の土師器はすべて正位で置かれていた状態であった。すべては破碎あるいは口縁を打ち欠かれてる。火を焚く行為をともなった何らかの祭祀行為の痕跡と推定される。

A土坑

廃棄土坑

B土坑

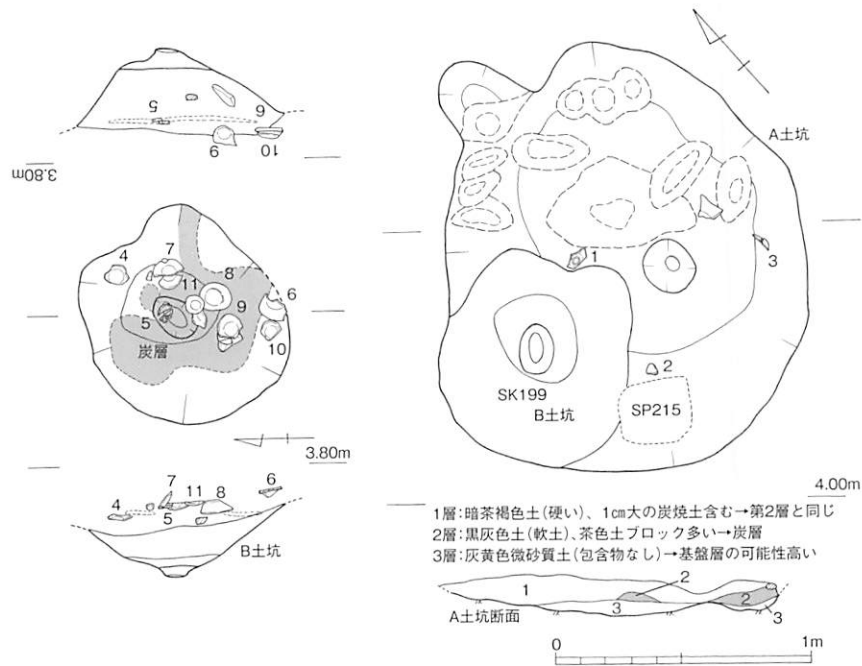
祭祀土坑

中央に坏

最後に小皿

以上のような祭祀土師器の配置からみると、まず中央に8の坏が逆さに置かれ、その周囲に5・7・9あるいは6までの坏が正位で置かれ、その外周に北端に4の坏、南端に10の坏が、いずれも口縁全周を大きく打ち欠いた底部のみの状態で置かれたものと考えられる。その後最後に逆さにおかれた8の坏に重なるように、土器群全体のほぼ中央に11の小皿が正位で置かれている。この小皿のみに煤が付着しており、祭祀の際の灯明につかわれた可能性も考慮する必要がある。

この出土土師器はすべて河野分類A類の底部糸切の土師器であるところから、B土坑は15世紀後葉の遺構と考えられる。



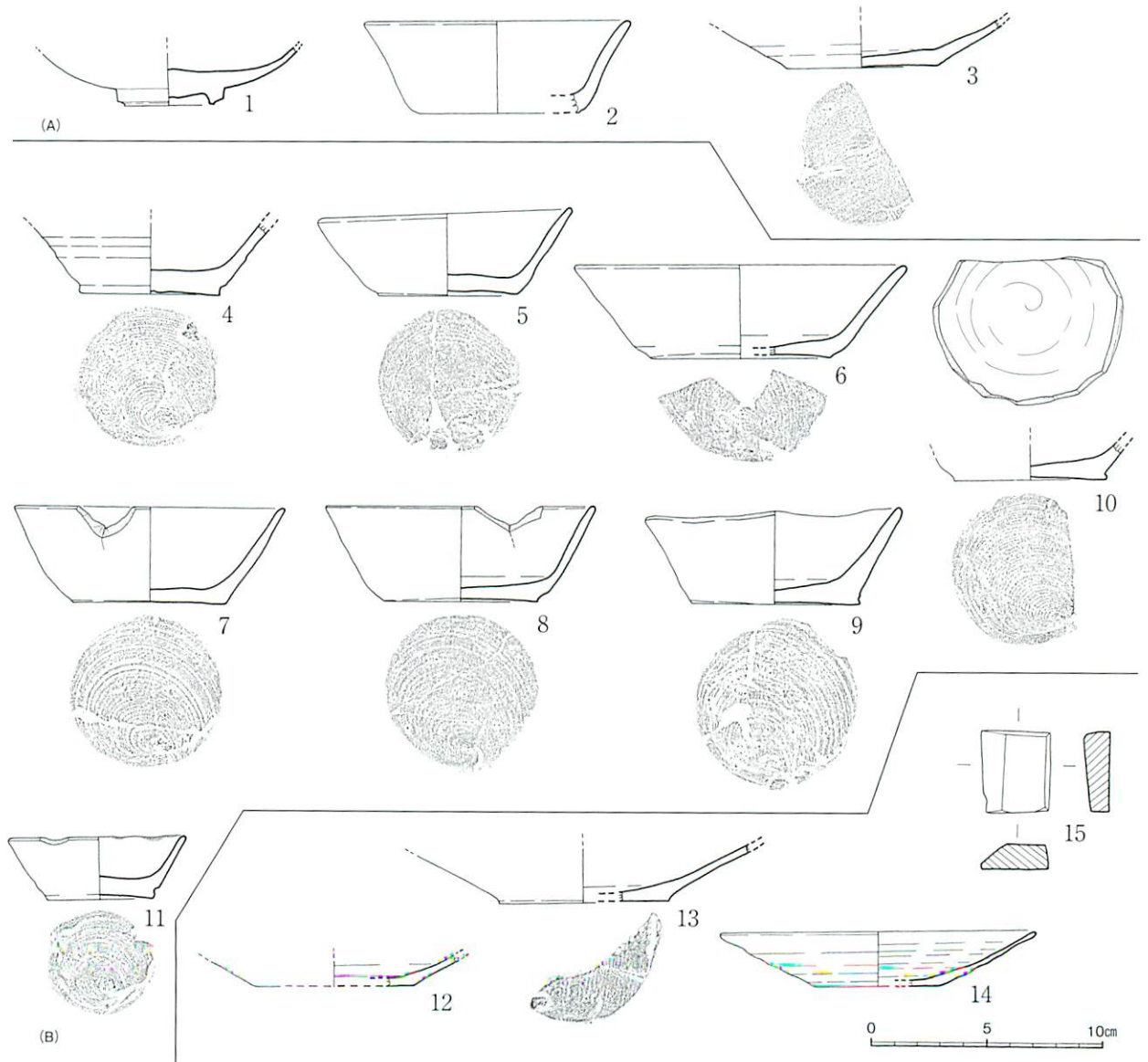
第4-25図 SK199 (1/30)

SK199 出土遺物 (第4—26図)

SK199A 1は白磁皿底部で、外面高台外まで露胎である。2は口縁が外反する河野分類A類にあたる底部糸切の土師器杯の口縁。3は白っぽい色調の大内系土師器皿の底部片。底部に板状圧痕あり。

SK199B 4～11は一括埋置の底部糸切の土師器群。4は口縁の全周を欠いた底部糸切の土師器杯。土師器群の北端に正位で置かれた状態である。5は完形に復元できたが、出土時はつぶれていた底部糸切の土師器杯。6はSP215によって半分がうしなわれた大型の底部糸切の土師器杯。7は口縁を2箇所大きく打ち欠いた上に、故意に割ったような状態で正位におかれた底部糸切の土師器杯。8は逆さにして中央におかれた底部糸切の土師器杯で、口縁に1箇所打ち欠き、そこから大きく割れている。9は口縁を1箇所打ち欠いて正位で出土した底部糸切の土師器杯。10は南のはしに正位で置かれた底部糸切の土師器杯底部、口縁は全周を打ち欠いている。11は口縁に煤が付着し1箇所の打ち欠きがある底部糸切の土師器小皿の完形品。以上の底部糸切の土師器は杯・小皿とも同一型式で、口縁部が外方にやや外反気味に長く伸びるタイプで、器高も高くなる。底部内面の指ナデとそれに対応する板状圧痕はまったくない。したがって河野分類のA類にあたり、15世紀後葉の一括遺物として貴重である。

以下の3つの遺物は出土位置を明確にすることはできなかったが、関係する破片がB土坑にはないのでA土坑の可能性が高い遺物である。12～14は白っぽい胎土の大内系土師器皿。15は前面に磨り面のある小型砥石。ほかに瓦質火鉢の底部片なども出土している。



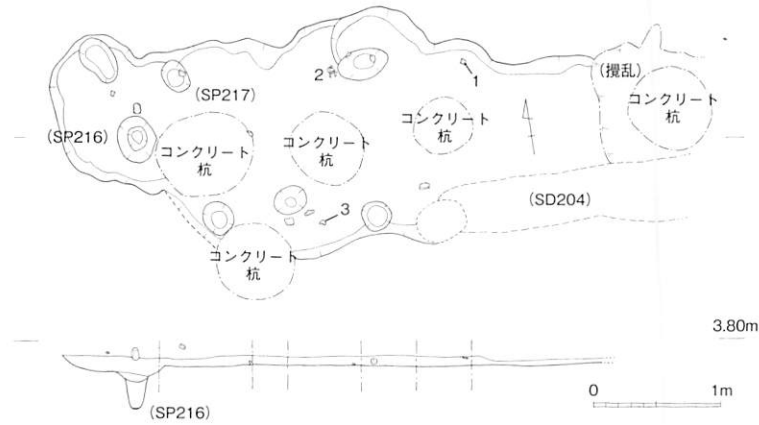
第4-26図 SK199 出土遺物 (1/3)



SK203 (第4 - 27 図)

浅い大型土坑

C11 区 (東区) において基盤 IV 層上で発見された東西に長い不整長円形の土坑で、長さ 4.5m、幅 1.8m、深さ 0.1m の浅い皿状をなす。SP178 と SD204 に切られ、SP216 と SP217 と重複している。東西溝 SD204 を屋敷の境界と看做せるならば、境界のそばに掘られた浅い土坑と考えられる。埋土は単一層で第 2 層の土が入っていた。遺物は碎片で散在した状態である。埋土中の土師器が底部糸切の土師器河野分類 A 類のみで、ロクロ目土師器や京都系土師器を含まないところから 15 世紀後葉とした。

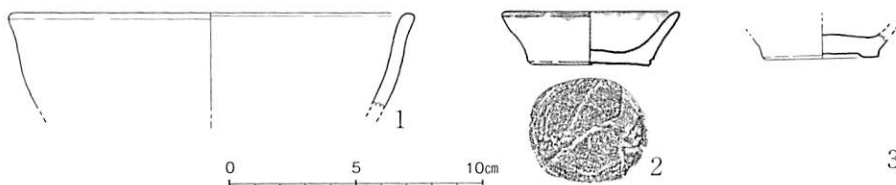


第4 - 27 図 SK203 (1/60)

SK203 出土遺物 (第4 - 28 図)

土師小皿

1 は中国製青磁碗口縁片。2 は口縁にひろく煤が付着して灯明皿として使用されたことがあきらかな底部糸切の土師器小皿。3 は底部糸切の土師器小皿。2 と 3 はともに内面の指ナデと底部の板状圧痕がつかず、口縁部が外上方に直線的に伸びる河野分類 A 類にあたる。ほかに丸瓦、平瓦や、古代から残留した須恵器甕の破片も出土している。



第4 - 28 図 SK203 出土遺物 (1/3)

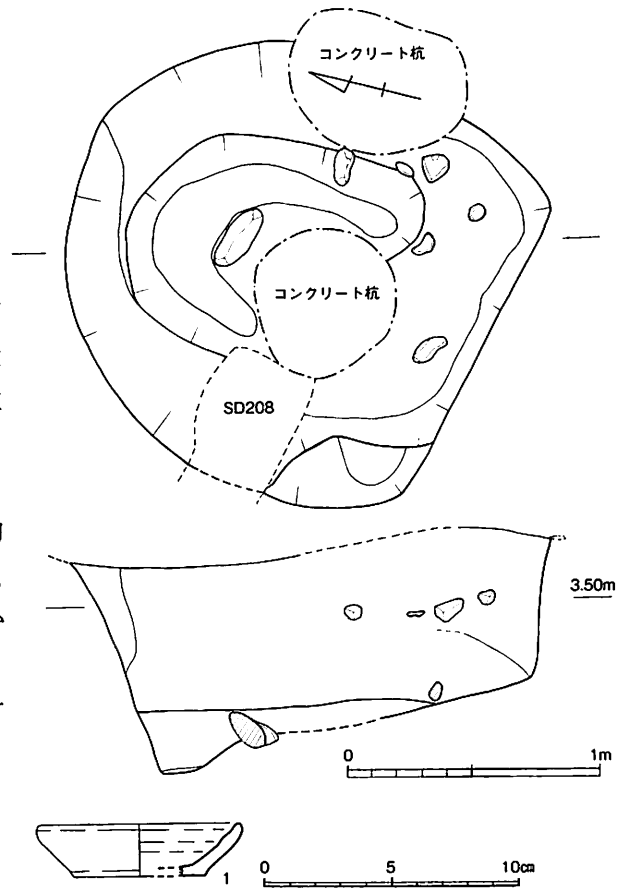
SK212 (第4 - 29 図)

C11 区 (東区) において基盤 IV 層上で発見された長さ 1.9m、幅 1.85m、深さ 0.7m の平面円形の土坑で、SD208 に切られている。埋土中には比較的礫が少なく、砂層と黄色土ブロックが互層をなしている。中からは 15 世紀代にあたる器高の高い底部糸切り土師器小皿の小片が出土している点と、切合関係上最古の遺構になるところから 15 世紀の遺構と推定した。

SK212 出土遺物

灯明皿

1 は河野分類 B 類の在来系の底部糸切の土師器小皿。外面に煤が付着しており、灯明皿として使われた痕跡がある。ほかに備前焼壺の底部や上部から混入したと考えられる京都系土師器 2 期の皿の破片が出土している。



第4-29 図 SK212 (遺構 1/30 遺物 1/3)

SK251 (=SK302) (第4 - 30 図)

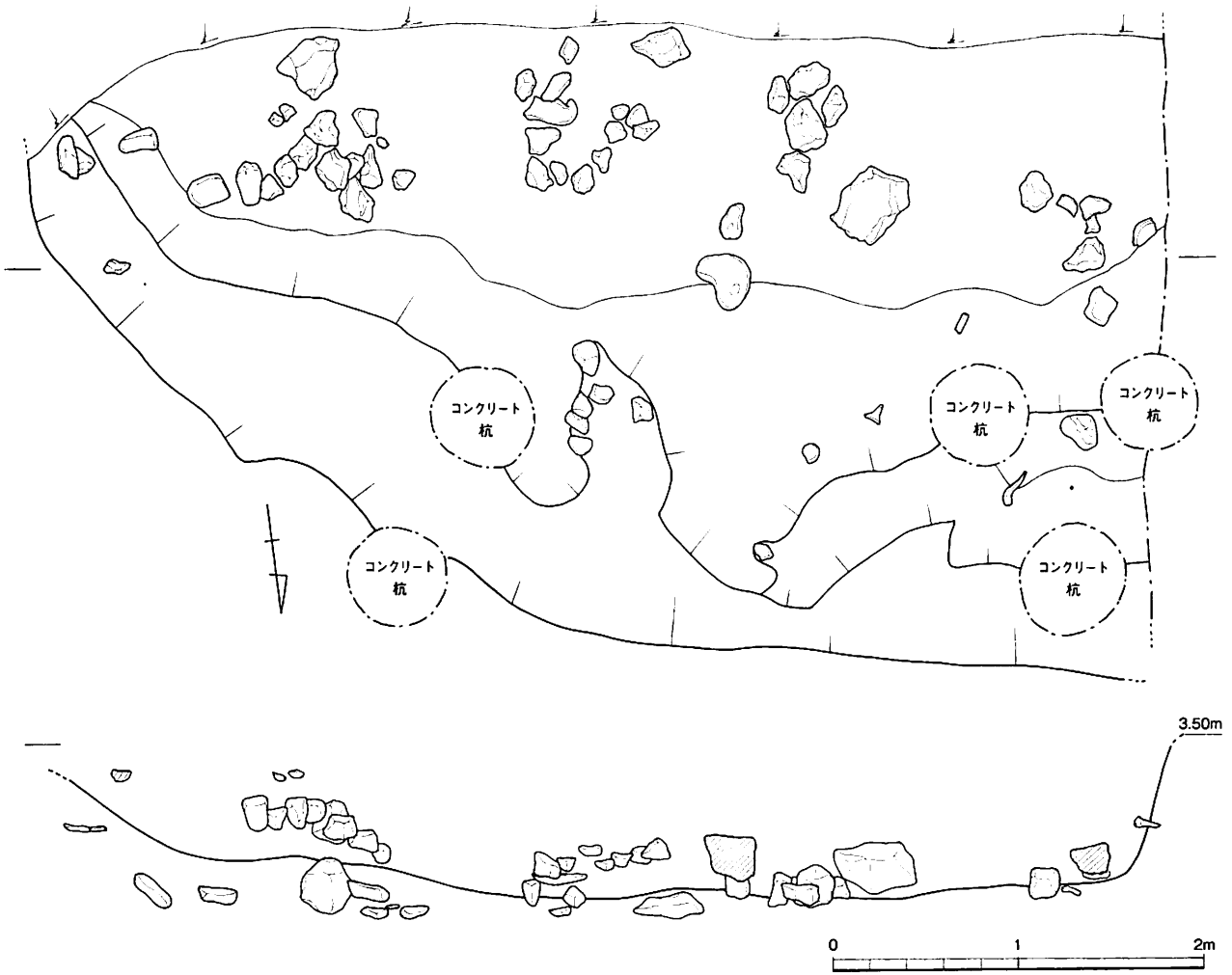
埋め戻し  
廃棄土坑

B11 区 (東区) において発見された長さ 6.0m 以上、幅 3.2m 以上、深さ 1.0m の不整形の大型土坑で、底面も整っていない。SD141 と SD165、S280、S281、S282 に切られる。内部には礫が散在する。埋土は砂礫と粘土が互層をなし、人為的な埋め戻しがおこなわれた廃棄土坑と推定される。SK302 として A11 区の道路状遺構 SF151 の下で検出した土坑も、その位置から SK251 の一部であると考えられる。廃棄された土器の中には完形のままの底部糸切の土師器などもあり、ロクロ目土師器、京都系土師器を含まない点と、SD165 や SF151 より古い遺構であることから、15 世紀の遺構と判断した。さらに 9 ~ 13 の在来系の土師器の型式からみて 15 世紀前半にさかのぼるものと推定される。

SK251 出土遺物 (第4 - 31 図)

廃棄遺物

1 は龍泉窯系青磁碗の端反りの口縁部片。2 は華南三彩の盤の底部片、同一個体と思われる破片が SP213 から出土している。上部からの混入品の可能性が高い。3 は口縁が内湾し外面に菊花文の刻印が連刻された瓦質火鉢、口径は 51cm になる。多くの破片は SD165 や SD141、さらに第 2 層まで残留していた。4 は瓦質鉢の口縁部と考えられる破片。5 は口径 21.6cm の比較的小型の瓦質播鉢。内面は磨耗が激しく、よく使い込まれている。6 は瓦質の徳利口縁片。7 は瓦質土器の甕口縁片か。8 の abc は同一個体の瓦質播鉢で、底面に板状圧痕があり、5 の播鉢と同一型式である。内面は磨耗が激しい。9 ~ 11 は、底部内面に指ナデを、対応する外面に板状圧痕を残す在来系の底部糸切の土師器坏、河野分類 B 類にあたる。9・10 と 11 とは形式が異なる。前者の坏は口縁がやや外反し、後者は内湾する。12 は 9・10 の形式に対応する底部糸切の土師器小皿、完形だが口縁の 3 箇所を打ち欠き、口縁全体に広く煤が付着する灯明皿。13 は 11 の坏に対応する底部糸切の土師器の完形の灯明皿。口縁が広く欠けている。14 は糸切 (コビキ A 技法) で切り出した埴



第4-30図 SK251 (1/40)

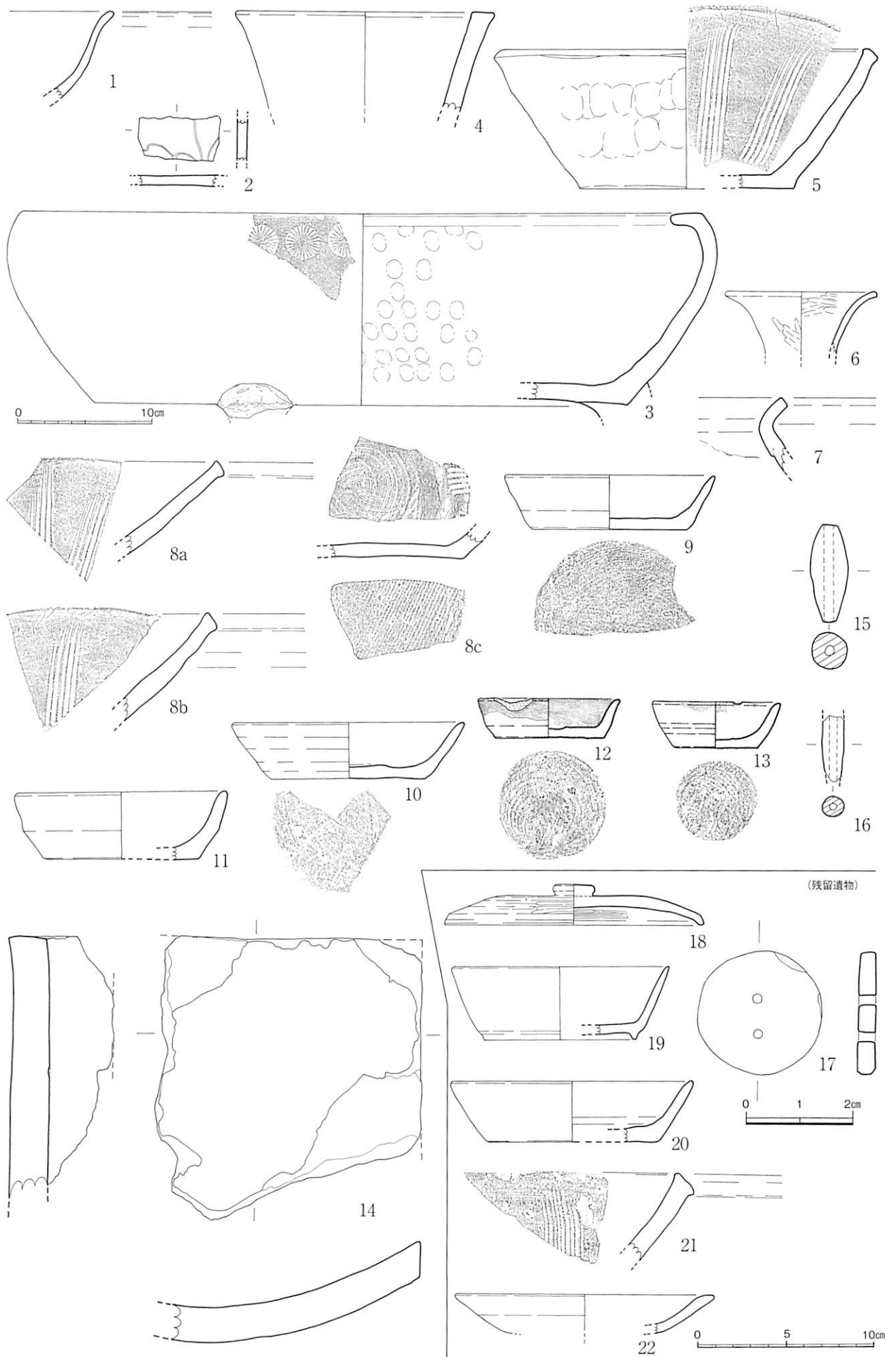
状の粘土板を凸型に載せて整形し、端部をヘラで切り落とすという製作工程がよくわかる平瓦片、胎土は大型石英粒を多量に含む海部郡産である。15は完形の管状土錘で端部をヘラ調整するA類。16は半分に折れた管状土錘のB類。ほかに青磁や瓦の破片が出土している。

## 残留遺物

残留遺物。17は2つの小穴を穿つボタン状の結晶片岩製の石製品。径2.3cm。古墳時代後期からの残留遺物の可能性がある。18は古代8世紀後半の土師器坏蓋。19は古代8世紀末の須恵器坏身。20は古代8世紀の箱形の土師器坏片。21は14世紀中世4期の備前焼播鉢の口縁片。22は被熱した京都系土師器2期皿、切り合い上SK251はこの土器の時期まで下ることはないので、検出できなかったピットなどに含まれた上部からの混入品と推定される。ほかに備前焼の破片や古代の須恵器の破片がかなり出土している。

## S275

C9区(北1区)において第2層除去後に発見された土坑状の遺構であるが、ほりあげると底面がでこぼこしているので、自然の窪みの可能性がある。SK236とSK232に切られる。埋土は単層で、黄色粘土ブロックの多い第2層と同じ土で埋没している。内部からは須恵器の破片が出土しているのみであるが、埋没土の内容から古代の遺構ではないと判断した。



第4-31図 SK251 出土遺物 (1/3、3=1/4、17=1/1)

## ピット

以下のピットは16世紀に下る遺物がないことや、切合関係上16世紀に下る可能性がないことなどから時期を推定したものである。

### SP183

C11区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された径0.4m深さ0.29mの長円形のピットであるが、2つのピットの重なりであることが判明した。埋土は第2層土の単一層で、ほかの遺構との切合関係はない。内部から15世紀代の底部糸切の土師器坏の口縁や底部の破片、さらに残留した古代の土師器坏底部の破片が出土している。

### SP221

C10区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された径0.25m、深さ0.2mの円形のピットである。ほかの遺構との切合関係はなく、内部から15世紀代の底部糸切の土師器坏口縁の破片が出土しているのみである。

### SP223

C10区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された径0.2～0.3m深さ0.2mの長円形のピットである。ほかの遺構との切合関係はなく、内部から白磁口縁と底部糸切の土師器の破片が出土している。16世紀第1四半期の溝SD245に切られるところからも15世紀代の遺構と考えられる。

### SP288

C9区(北1区)の基盤Ⅲ層直上で検出された長さ0.5m、幅0.3m以上、深さ0.5mの不整なピットで、SE148とSD284に切られている。埋土は基盤層土のブロックを多く含むC層土の単一層である。埋土から底部糸切の土師器付の底部の破片が出土している。

## 小結

道路以前  
A期  
B期

以上15世紀代とした遺構群は、その切合関係と平面的な位置からおおよそ2時期に分けることができる。すなわち道路状遺構SF151と水路SD165の建設の以前と以後である。いま仮に以前をA期、以後をB期とすると、A期に属すると考えられる遺構は、土坑SK256・井戸SE300・土坑SK251などである。B期に属すると考えられる遺構は溝群SD259・SD277・SD294・SD255、土坑SK298などである。ほかの遺構はどちらの時期に属するか明確にしごたいが、東西道路建設以前にあたる15世紀のA期には、この付近に井戸や大型廃棄土坑をとまなう居住遺構が、第4南北街路が想定される位置に面して分布している点が注目される。それを都市内の遺構と見るかどうかは別として、第4南北街路の南端に近いこの付近に15世紀代の居住空間が広がるようになっていたことがわかる。

道路建設

次の15世紀B期には東西道路が建設されている。その道路が井戸や大型土坑を切っているところからみて、道路SF151の建設は居住空間の移転を伴っていたと考えられる。その事態はそれまでとは異なる街路整理すなわち都市計画の施工によるものと推定される。同時に東区ではそのまま町屋が引き継がれるが、北2区付近では道路の北側の、第4南北街路からみれば町屋の裏側に当たる位置に、方形区画の溝と考えられる小溝群が掘られている。おそらく町屋の背後に別な施設が設けられているのであろう。

3 16世紀第1四半期の遺構と遺物

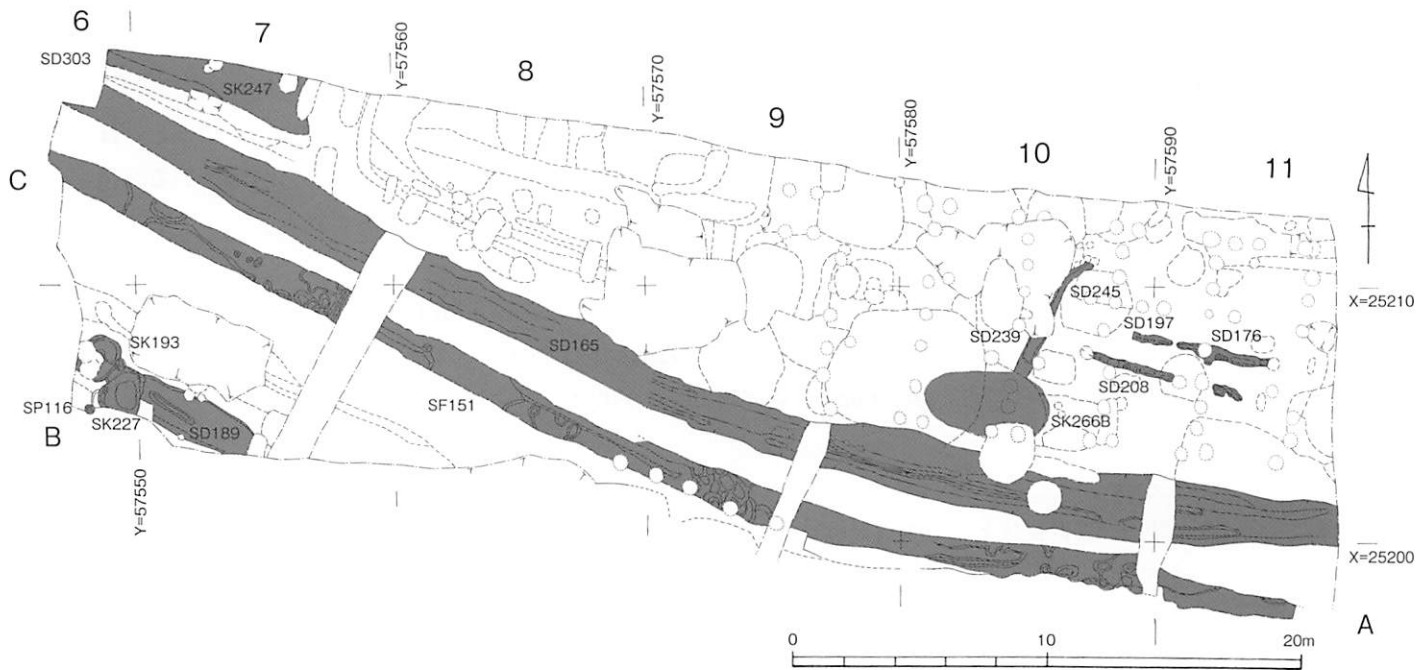
概要（第4 - 32図、付図5中）

いわゆる  
段々土師器

16世紀第1四半期に認定した遺構は、ロクロ目土師器を含むが京都系土師器をまったく含まず、さらに遺構の切合関係上矛盾のない遺構で、その多くは16世紀代の型式と認められるロクロ目土師器が出土した遺構である。

道路と水路

15世紀の後半（厳密に見れば末に近いと考えられる）の構築された道路状遺構SF151第7硬化面とその北側の道路側溝を兼ねた水路である溝SD165の第4矢板列が維持されている。それ以外の16世紀第1四半期代と考えられる遺構は、その東西道路の北側にあたるC7区付近の西区とBC10/11区の東区、さらに道路南のC6、C7区の南区の3箇所に分布が分かれる。C11～B11区付近は前代からひきつづき本来第4南北街路に面した場所にあたる。

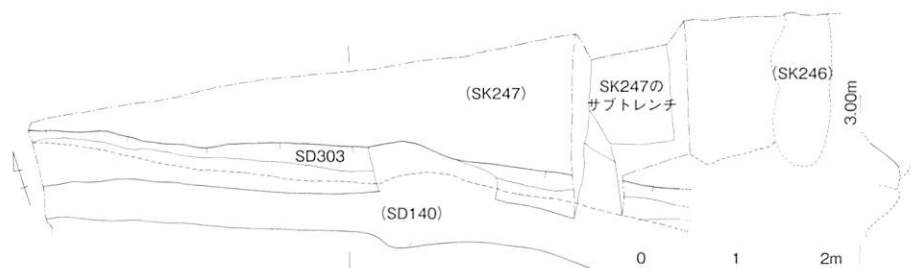


第4-32図 16世紀第1四半期の遺構 (1/300)

溝

SD303（第4 - 33図）

C6～C7区（西区）で検出された東西にのび、溝SD165に並行する溝で、長さ7.1m、幅0.5m以上、深さ0.3mで断面は半円形をなす。16世紀第1四半期の土坑SK247を切り、第2四半期の同種の溝SD140に切られる。断面で観察されるやわらかい淡褐色微砂層のラミナ状堆積は、埋土が水成堆積であることを示す。内部からは底部糸切の土師器の破片のみが出土している。切合関係と京都系土師器が出土しないことから16世紀第1四半期の遺構と判断した。



第4-33図 SD303 (1/80)

SD239=SD245 (第4-34図)

南北溝

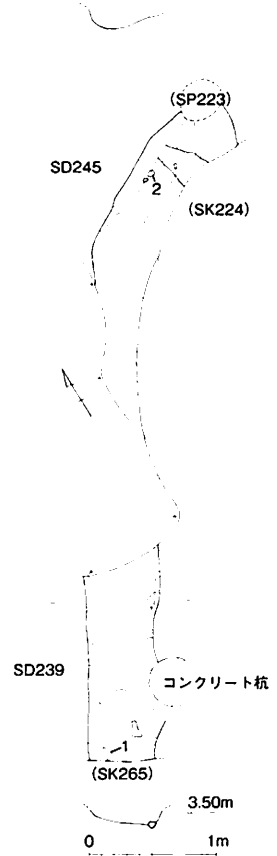
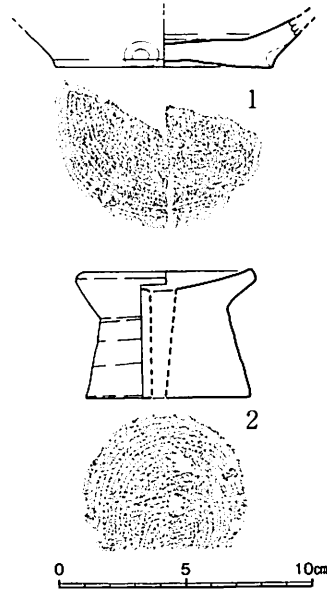
当初2つの遺構としたが調査が進むと中央部を攪乱で破壊された同一の溝であることが判明した。C10・B10区(東区)の第2層除去後に検出された南北方向に伸びる溝で、長さ5.2m、幅0.5m、深さ0.2m、断面は浅い皿状になる。SP221・SP223を切り、16世紀第2四半期の土坑であるSK224とSK265の両者に切られ、SK244と重複する。埋土は第2層土の単一層である。遺物はいずれも碎片で散在した状況である。切合関係と2の16世紀前半代に編年されるSD245土師器燭台から16世紀第1四半期の遺構と考えられる。

SD239=SD245 出土遺物

(第4-35図)

土師器燭台

1はSD239出土の口縁全周を故意に打ち欠いた底部糸切の土師器坏、おそらくロクロ目土師器となるだろう。2はSD245出土の中央の穿孔は貫通し、底部糸切離しの土師器燭台A1類。ほかに備前焼燧胴部や土師器の碎片、古代の土師器、土壁の一部なども出土している。

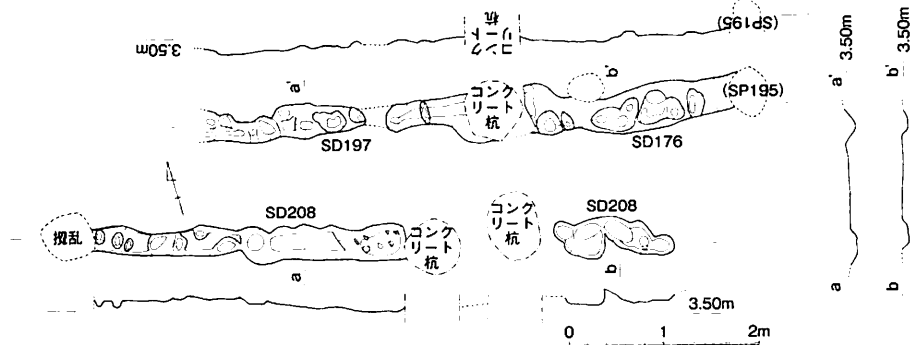


第4-35図 SD239=SD245 出土遺物 (1/3) SD239=SD245 (1/60)

SD176、SD197、SD208 (第4-36図)

建物基礎

B10・B11区(東区)の基盤IV層上で検出された平行あるいは連続する溝状の遺構である。北側に東西に伸びるSD176とSD197は本来同一の溝であったと考えられる。長さ5.5m以上、幅0.2~0.5m、深さは0.1~0.2m。その南に約1m隔てて平行にSD208が伸びている。長さ6.1m以上、幅と深さは同じである。SD176はSP195と重複し、SD197は16世紀第2四半期の井戸SE144に切られ、SD208はSK212を切る。埋土はいずれも第2層土の単一層で、出土遺物なし。当初は路地にあたる狭い道路の側溝とも考えたが、底面に浅い窪みが連なって存在することから、ぐり石を並べて置いた建物基礎つまり壁の下部構造の痕跡と考えられる。方向は東西だが、南に14ないし16度振り、第4南北街路や道路状遺構SF151の方向とは必ずしも一致しない。時期は切合関係から16世紀第1四半期以前で、15世紀代にさかのぼる可能性も残している。



第4-36図 SD176、SD197、SD208 (1/80)

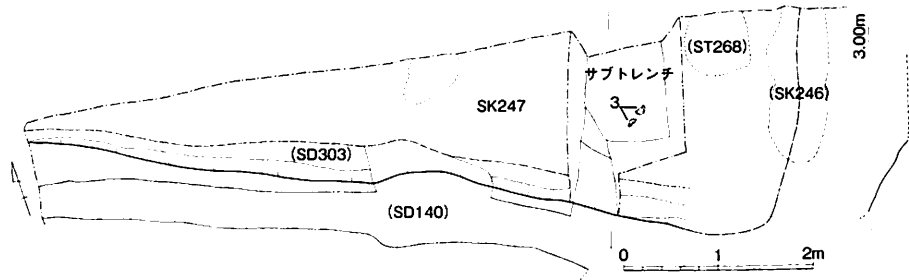
註1 田中裕介「土師器燭台」『豊後府内3』(大分県教育庁埋蔵文化財センター報告8)2006、P274~275

土坑

SK247 (第4 - 37 図)

大形土坑

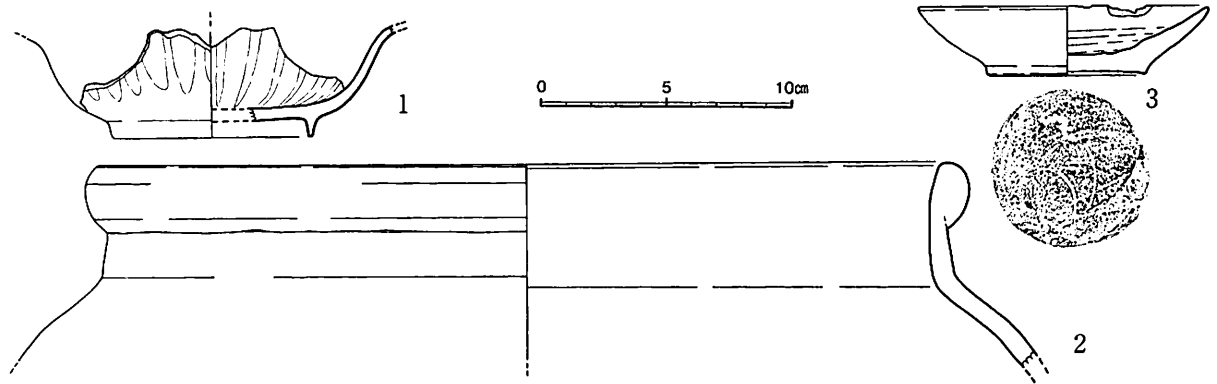
C7区(西区)の第2層除去後に検出した巨大な方形の土坑で、調査区の北に更に広がると推定される。長さ8m以上、幅2.4m以上、深さ0.8mで湧水のため底面まで達していない。16世紀第2四半期の溝SD140、SK246とSK268(3号墓)と第1四半期の溝SD303に切られる。内部からは完形のロクロ目土師器皿(3)が出土している。切合関係とロクロ目土師器の出土から16世紀第1四半期の遺構と考えられる。調査は一部にトレンチを入れたのみで、全掘はしていない。



第4 - 37 図 SK247 (1/80)

SK247 出土遺物 (第4 - 38 図)

1は中国製の端反りの白磁鉢片。2は15世紀中世5期の備前焼の甍口縁片。3は接合により完形に復元したしたロクロ目土師器皿で、被熱して口縁に2ないし3箇所の打ち欠きがある。ほかに京都系土師器2期の皿の破片が出土しているが、ピットの見落とし等による上部からの混入である。



第4 - 38 図 SK247 出土遺物 (1/3)

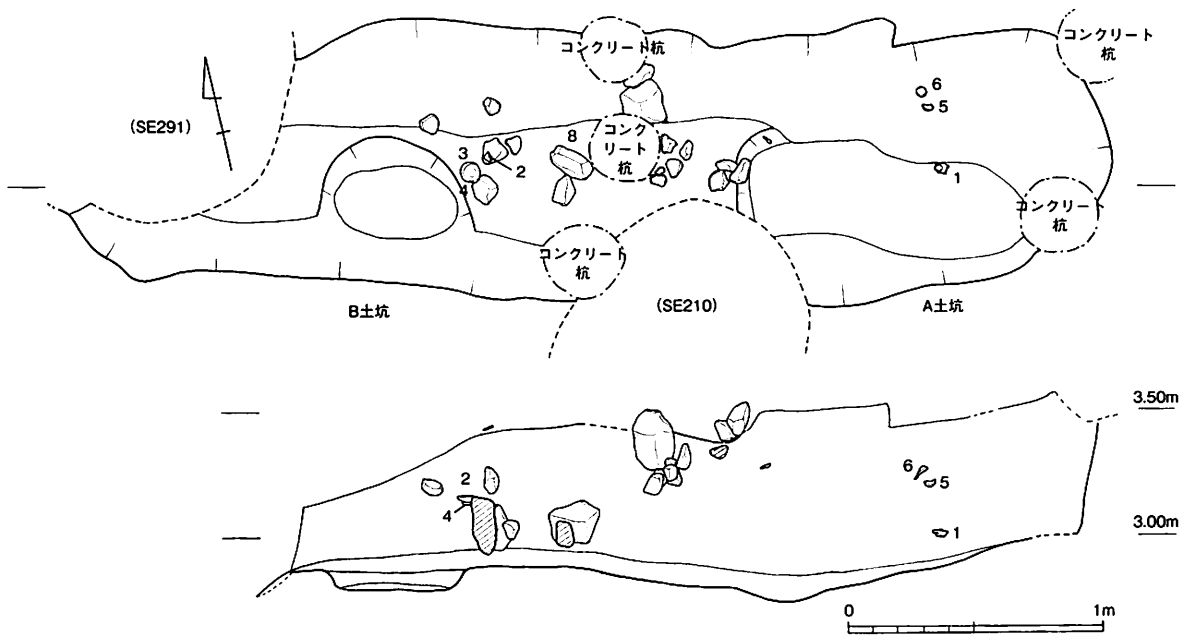


SK266 (第4 - 39 図)

B10 区 (東区) の第2層除去後に検出した長さ8.2m、幅2.2m、深さ0.65mの大型長円形の土坑である。16世紀第4四半期前半築造の井戸SE210、SK237、第2四半期の土坑SK265と同じくSK272に切られる。底面に炭焼土混じりの黒色土が堆積。その黒色土上面にロクロ目土師器皿(3と4)が正位で発見され、やや離れて土師器の小皿(5と6)が多く出土している。5と6はいずれも15世紀代の底部糸切土師器の特徴を持っているので、SK266は東西2つの土坑が切りあっている可能性がある。その目でみると西側のほうが底面が低くなり、小皿周辺の遺物である1の青磁碗も15世紀代のものである。東側をA土坑、西側をB土坑とするならば、A土坑は土師器小皿の型式から15世紀後半、それを切って16世紀第1四半期にB土坑が掘られたものと推定される。ともに何らかの祭祀行為の痕跡であろうか。上部から混入の遺物に12の京都系土師器皿のような新しいものがある。

A土坑

B土坑



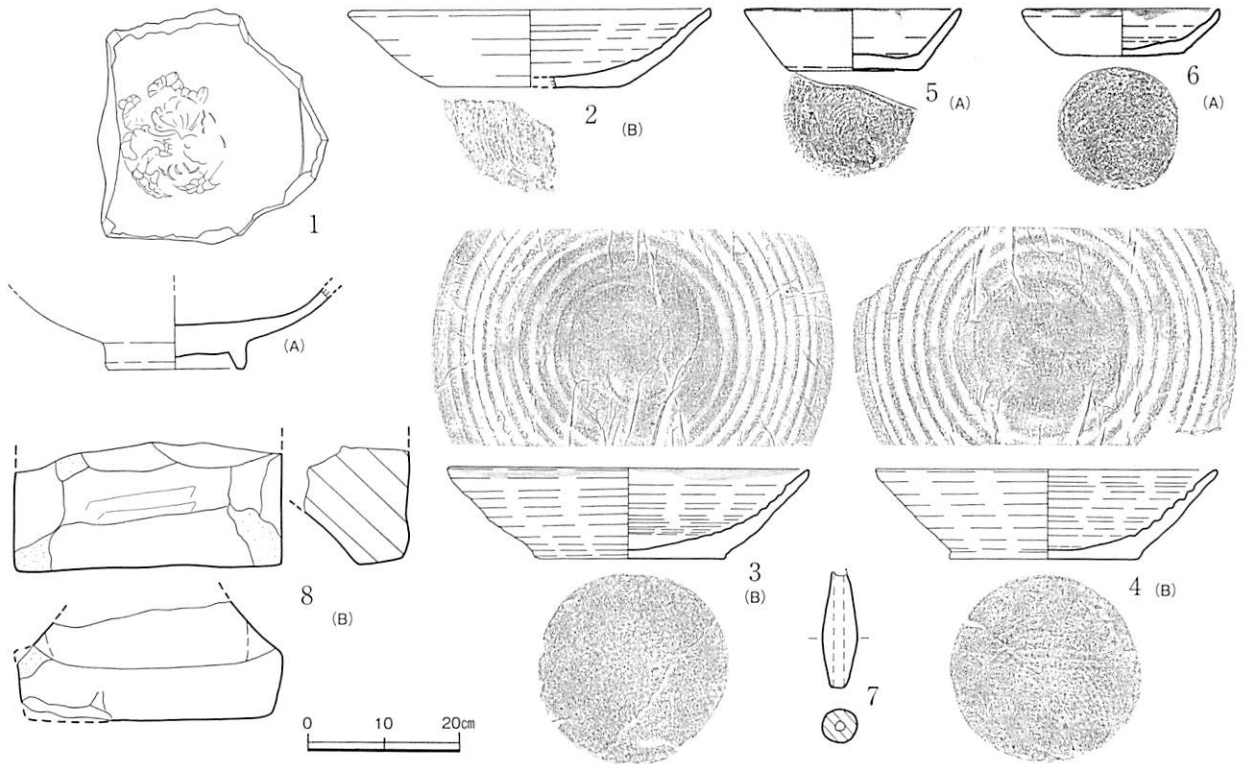
第4 - 39 図 SK266 (1/30)

SK266 出土遺物 (第4—40図)

土師器皿

以下の出土遺物のうち1・5・6はA土坑に、2～4・8はB土坑に帰属することが明確である。そのほかの遺物は不明である。1は見込みに輪花文のある中国龍泉窯系青磁碗の底部片。口縁全周が打ちかかれたようにも見える。2はロクロ目土師器の口縁片。3は接合してほぼ完形のロクロ目土師器皿。4はロクロ目土師器皿。3と4は同じ位置に重なるように出土した。5は灯明皿として使用された煤が付着した底部糸切の土師器小皿の完形品、河野分類A類で胎土に金雲母がはいる。口縁部が大きく破損している。6は口縁に広く煤が付着し灯明皿として使用された底部糸切の土師器の小皿。ほぼ完形。7は管状土錘B類。8は凝灰岩製の五輪塔の火輪を縦に半裁して石材として再利用したもの。ほかに鉄器片、五輪塔の火輪や塼の破片が出土している。

以下は残留遺物と混入遺物。9は8世紀末の須恵器杯蓋口縁片。10は8世紀の土師器杯、外面に回転ヘラ削りがある。11は近世1期の備前焼甕口縁片。12は京都系土師器2期の皿口縁片。11と12は切合上あり得ない時期の遺物なので、上部からの混入あるいは調査上のミスと考えられる。



第4—40図 SK266 出土遺物 (1/3、8=1/10)

SK227 (第4-41図)

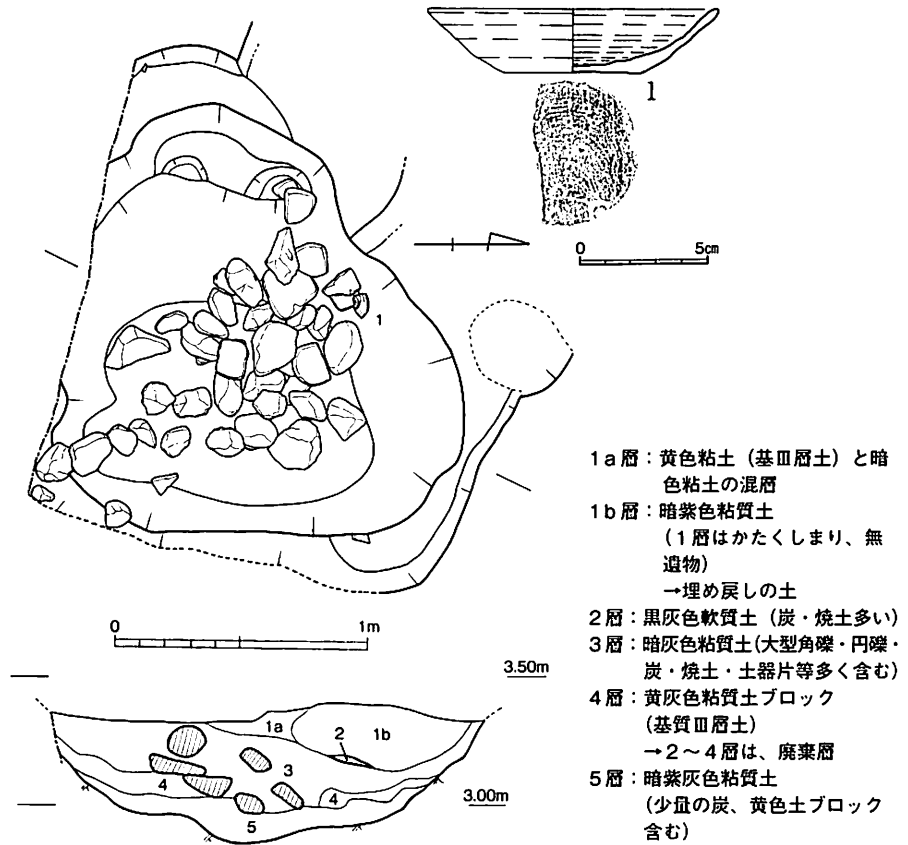
廃棄土坑

以下のSK227、SK189、SK183はB6・B7区(南2区)において同一時期に、切り合いながら連続して掘られた廃棄土坑群である。切合の古い順から記述する。まずSK227は基盤Ⅲ層上面で検出した長さ2.1m、幅1.5m、深さ0.55mの不整形形の土坑である。SK189とSK193とピットに切られる。断面は深い皿状で、埋土は上下2層に分かれ、上層(1層)は基盤Ⅲ層粘土で埋め戻して密閉している。下層(2~4層)には礫が集中する。礫の中には安山岩製の河原石とともに凝灰岩の角礫が含まれる。礫層と粘土層は斜めに堆積し、南の方向から廃棄されたものと推定され、最後は人為的に埋め戻している。総じてSK227は廃棄土坑として掘られ、廃棄後すぐに埋め戻されている。下層の礫層内からロクロ目土師器の破片が出土していることや、切合関係から16世紀第1四半期の遺構とした。

埋め戻し

SK227 出土遺物

1は下層出土のロクロ目土師器の皿片、中型の法量である。ほかに中国製青磁碗、備前焼甕などが出土したが、京都系土師器の破片はまったく含まなかった。



第4-41図 SK227 (遺構 1/30、遺物 1/3)

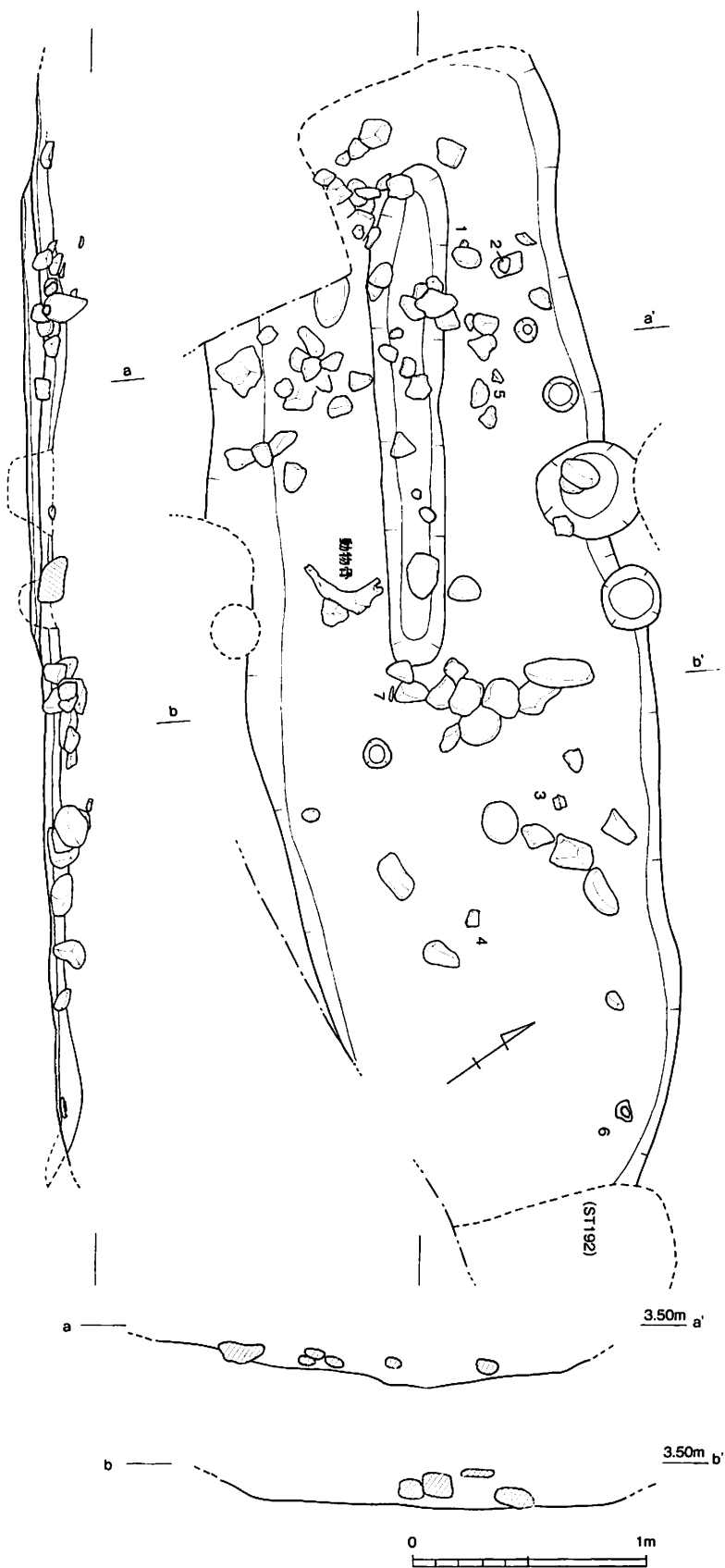
SK189 (第4—42図)

浅い溝状

道路と並行

廃棄土坑

B6・B7区(南2区)の基盤IV層上で検出した長さ5.0m、幅1.7m、深さ0.2mの東西に長く伸びる溝状の土坑で、断面は浅い皿状を示し、底面に土坑の方向と一致する東西の浅い溝が走る。道路状遺構SF151と並行しているの、本来は何らかの機能をもつ施設の一部として掘られたものと考えられる。SK227を切り、SK191と16世紀第2四半期の遺構ST192にきられる。埋土は第2層土の単一層で、人頭大の礫を含む。礫には河原石のほか凝灰岩礫が多く含まれ、被熱したものも多い。その内部には土器の碎片が散在し、動物骨も混じり、最後には廃棄土坑として埋没していると考えられる。土師器には京都系土師器を含まずロクロ目土師器が最新の遺物であることから16世紀第1四半期の遺構とした。

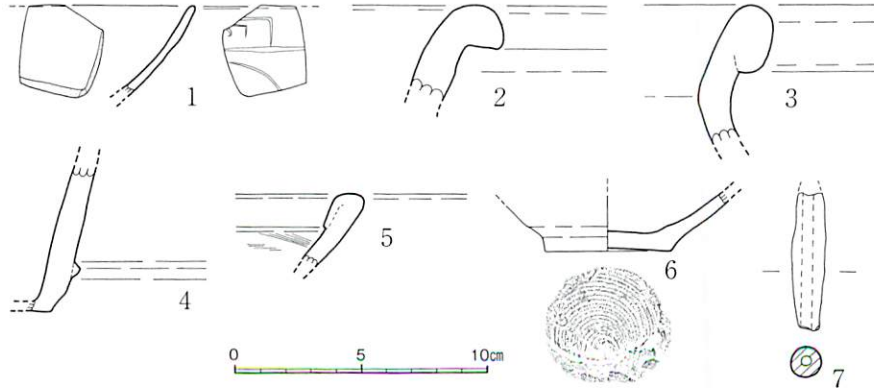


第4-42図 SK189 (1/30)

SK189 出土遺物 (第4—43図)

破片のみ

1は外面に雷文帯とラマ式連弁を描く15世紀の中国龍泉窯系青磁碗C-II類の口縁片。2は14世紀の中世3ないし4期にあたる備前焼の壺口縁片。3は15世紀前半の中世5期にあたる備前焼の甕口縁部片。4は瓦質火鉢の胴部片。5は口縁内面に粘土を巻き込む防長系の瓦質播鉢口縁部。6は内面をかなりナデ消したロクロ目土師器皿の底部片。7は端部をヘラ調整しないB類の管状土鉢。ほかに瓦質の鍋や鉢、鉄釘や動物の下顎骨などの破片が出土している。



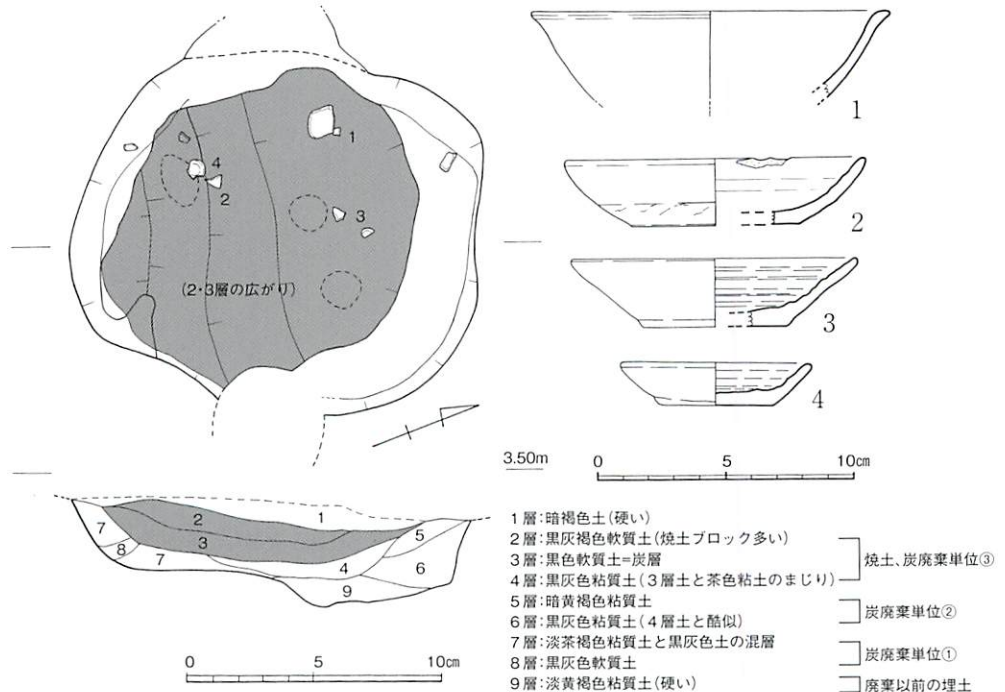
第4-43図 SK189 出土遺物 (1/3)

SK193 (第4—44図)

廃棄土坑

土師小皿埋置

B6区(南2区)の基盤Ⅲ層上面で検出した長さ1.6m、幅1.4m、深さ0.4mの不整円形の土坑で、断面は半円形をなす。古代の土坑SK226と16世紀第1四半期の土坑SK227を切り、第4四半期の溝SD194と柱穴に切られる。埋土には3回の廃棄があり、3回目には炭の堆積がある(廃棄単位1~3)。炭層の底には4の底部糸切の土師器小皿が完形のまま正位で置かれていた。口縁を打ち欠いており、何らかの祭祀行為の残りを廃棄したものと推測される。出土した土師器の破片は底部糸切の土師器とロクロ目土師器に限られ、京都系土師器を含まない。出土遺物から16世紀第1四半期の遺構と考えられる。



第4-44図 SK193 (遺構 1/30、遺物 1/3)

### SK193 出土遺物

1は2回目の廃棄にあたる5ないし6層出土の端反りの中国龍泉窯系青磁碗。2は3回目の廃棄単位に当たる3層出土の底部糸切の土師器皿の口縁部片、口縁に2箇所打ち欠きがある。河野分類のB類で在来系。3はロクロ目土師器皿の破片。4は3回目の廃棄単位に当たる2層出土のロクロ目土師器小皿、口縁をおおきく打ち欠かれた状態で、正位で検出されている。

### ピット

SP166 B6区(南2区)の第2層除去後に検出した径35cm深さ30cmの柱穴で、内部からロクロ目土師器皿の口縁の破片が出土している。

### 小結

16世紀第1四半期の状況をまとめると、次の4点に集約できる。

- ① 15世紀後半あるいは末に建設された道路SF151とその側溝SD165においては、道路建設当初の第7硬化面と水路の第4矢板列がこの時期まで同一の位置に維持される。SD165の南端と南2区の同時期の廃棄土坑SK189などに挟まれた空間が、その道路幅としてよければ、この時点での東西道路の最大幅は約8mである。
- ② 南2区で道路状遺構SF151と並行するように廃棄土坑が3基以上つぎつぎと掘られている。この時期に道路南側に廃棄土坑を連続して掘るような比較的広大な区画が成立したものと考えられる。
- ③ 西区に方形の巨大な土坑SK247が掘られ、その後も同じ位置に溝SD303が掘られている。道路側溝SD165と並行し、略方形の区画が道路にそって新たに設定されたことを示している。この区画は15世紀後半～末の東西道路建設と同時に建設された溝群SD259・SD277・SD294・SD255で区画された方形の敷地の、さらに奥に当たる位置が開発されたことを物語っている。
- ④ 東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、溝SD239=SD245で区画された方形の区画が成立し、その西南隅には祭祀行為が行われた可能性の高い土坑SK266が掘られ、内部にはSD176、SD197、SD208を建物の基礎の一部とする建物が造られていたと推定される。壁の方向から見て第4南北街路に面する宅地であったと推定される。

道路と側溝

南側の区画

北側の区画

「中町」の角地

## 4 16世紀第2四半期の遺構と遺物

### 概要(第4-45図、付図5下)

16世紀第2四半期と認定した遺構は、京都系土師器1期の皿を含み、2期以後の京都系土師器は含まない。さらに遺構の切合関係上矛盾のない遺構で、その多くは16世紀代の型式と認められるロクロ目土師器を出土した遺構である。

遺物と切合

道路状遺構SF151と道路側溝を兼ねた溝SD165とが、路面を更新し、さらに矢板の修繕を行いながら維持されている。それ以外の16世紀第2四半期代と考えられる遺構は、その東西道路の北側にあたるC7区付近の西区とBC10/11区の東区、さらに道路南のC6/7の南区の3箇所に、第1四半期と同様に分布する。C11～B11区付近はおなじく本来第4南北街路に面した場所で、その後「中町」とされる町並みのほぼ南端にあたる。



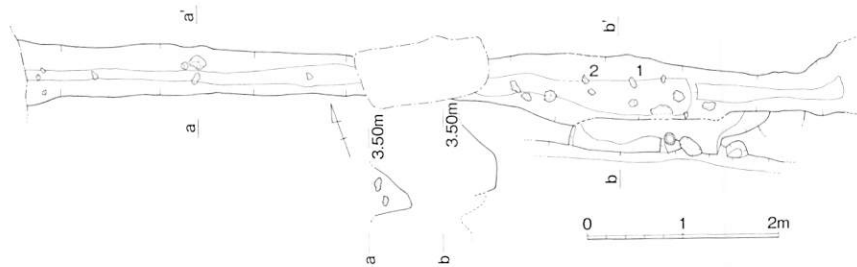
第4-45図 16世紀第2四半期の遺構 (1/300)

溝

SD140 (第4-46図)

区画の溝

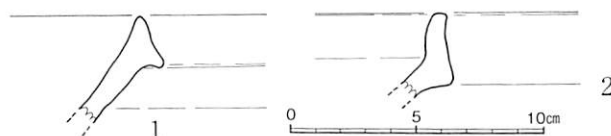
C6・C7区(西区)で検出された、溝SD165に並行する長さ8.5m以上、幅0.5~0.7m、深さ0.4mの東西方向にのびる溝である。方位角111度で、真東西から南に21度振る。16世紀第1四半期の大型土坑SK247、古代の土坑SK301と16世紀第1四半期の溝SD303を切る。内部からは少数の礫や土器片が散在する状態であった。16世紀第1四半期の遺構を切り、埋土中に京都系土師器1期の皿の破片が出土していることから16世紀第2四半期の遺構と推定した。



第4-46図 SD140 (S=1/80)

SD140 出土遺物 (第4-47図)

1と2はいずれも15世紀の中世4期と5期の備前焼播鉢の口縁片で、2は下部から出土している。ほかに備前焼甕、底部糸切の土師器、京都系土師器1期皿の破片が出土している。



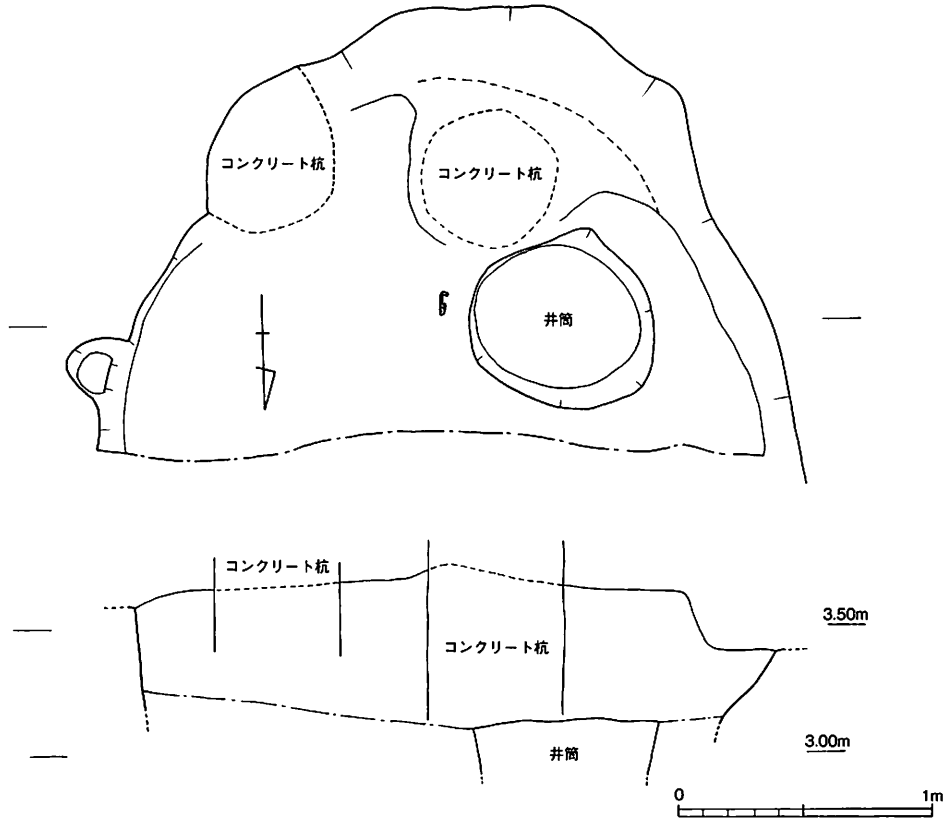
第4-47図 SD140 出土遺物 (1/3)

井戸

SE235 (第4—48図)

井筒

C10区(東区)において第2層除去後に検出した径2.75mの掘形をもつ井戸である。湧水がひどいために完掘はしていない。井筒は素掘りあるいは桶かと推定される。15世紀の土坑であるSK206とSK207を切り、16世紀第3四半期の井戸SE234に切られる。井筒の真上には土坑SK243があり、それは井戸の廃棄時にほられた土坑と考えられる。切合関係と最新の土師器が京都系土師器1期皿とロクロ目土師器である点から、16世紀第2四半期の遺構と考えられる。



第4-48図 SE235 (1/30)

SE235 出土遺物 (第4—49図)

掘形出土

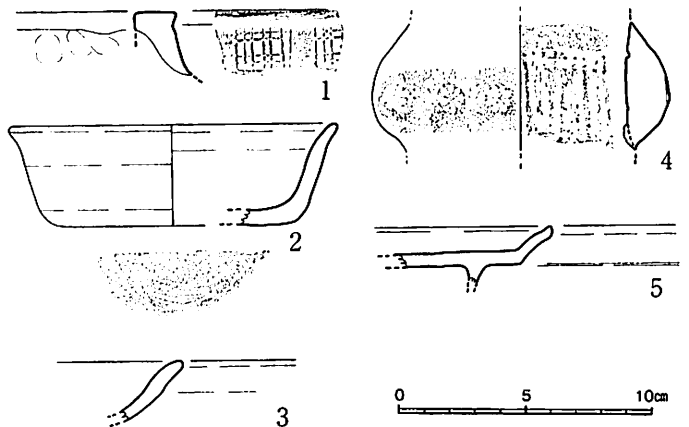
掘形内からは、底部糸切の土師器とロクロ目土師器の破片が多く、京都系土師器1期の皿の破片をわずかに含む。1は口縁外面に格子文の刻印をほどこす器種不明の瓦質土器。2は口縁が外反する14世紀から15世紀前半の底部糸切の土師器坏片。3は京都系土師器1期皿の口縁片。

井筒内

井筒内からは、4の外面に菊花文の刻印を施し、内面に接合のための貼り付け痕をのこす瓦質の華瓶あるいは水瓶の破片が出土している。

瓦質華瓶

ほかに残留した5の高台付の須恵器皿のほかに瀬戸美濃産天目碗や動物骨の破片が出土している。



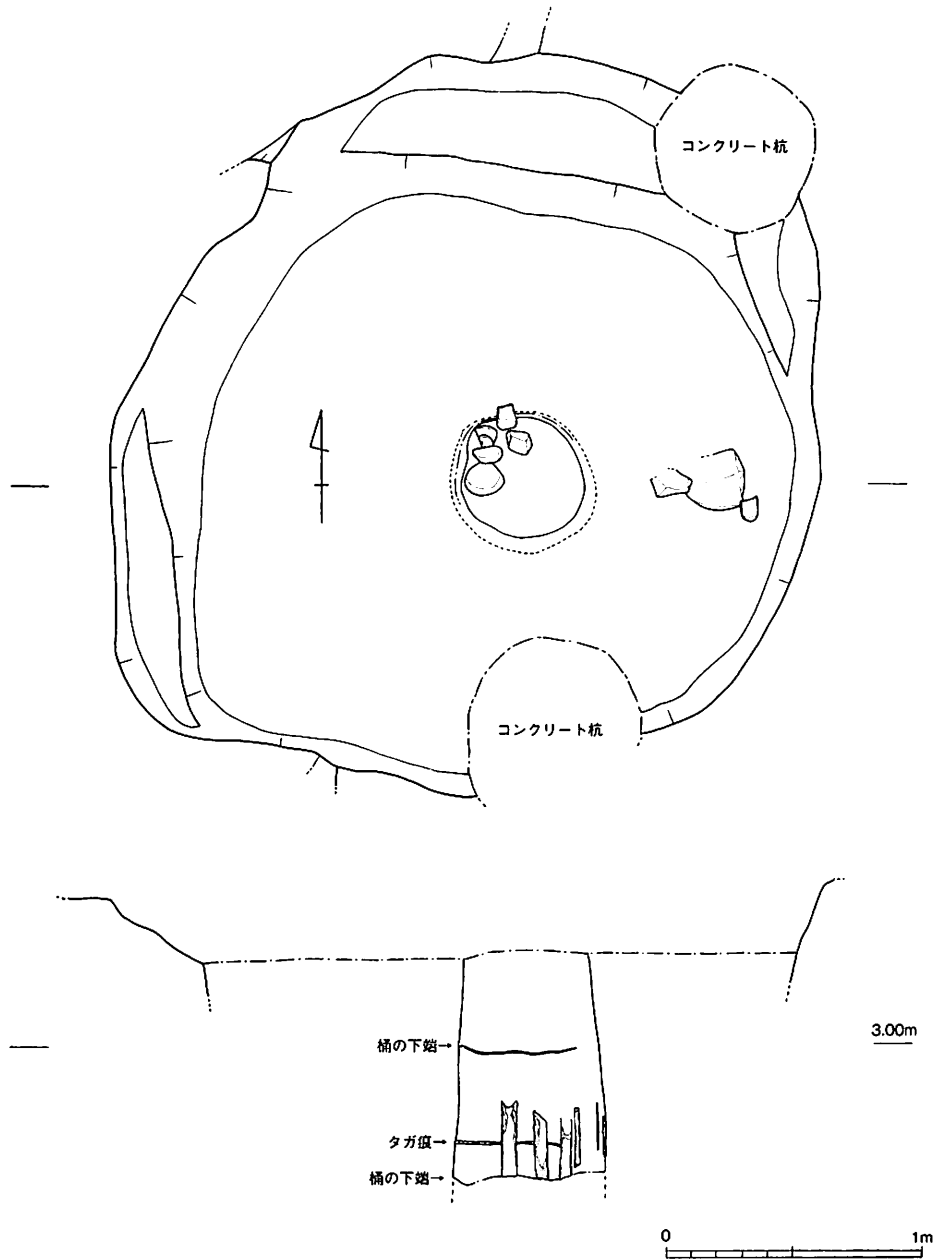
第4-49図 SE235 出土遺物 (1/3)



SE144 (第4—50図)

井筒は桶  
小型

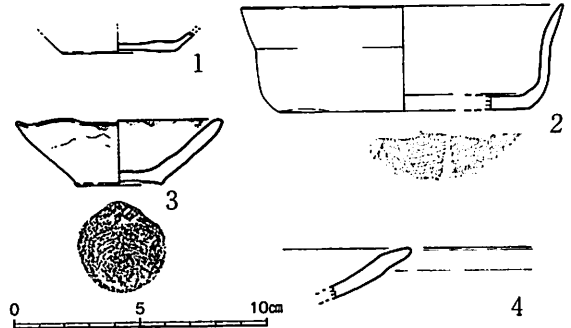
C10・B10区(東区)において第2層1回目除去後に検出された掘形不整形の井戸である。長さ2.7m、幅2.5m、深さ1.2m以上。井筒は径0.5～0.7mほど木製の桶である。上から2段の桶の重なりを検出したが、標高2.5m付近から湧水がひどく調査を断念した。16世紀第1四半期の溝SD197を切り、第2四半期の土坑SK224に切られる。井筒は小型で武家屋敷によく見られるタイプである。遺物は掘形内出土か井筒内出土か区別できなかったが、いずれも碎片である。京都系土師器1ないし2期の小皿が出土したが、切合関係から16世紀第2四半期の遺構と考えられる。



第4-50図 SE144 (1/30)

SE144 出土遺物 (第4-51図)

1は白っぽい色調の大内系土師器の皿底部片。2は口縁が外湾する15世紀の底部糸切の土師器の坏口縁片。3は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された底部糸切の土師器小皿、完形品。4は京都系土師器1ないし2期の皿口縁片。ほかに青磁皿、ロクロ目土師器、埴の破片が出土している。



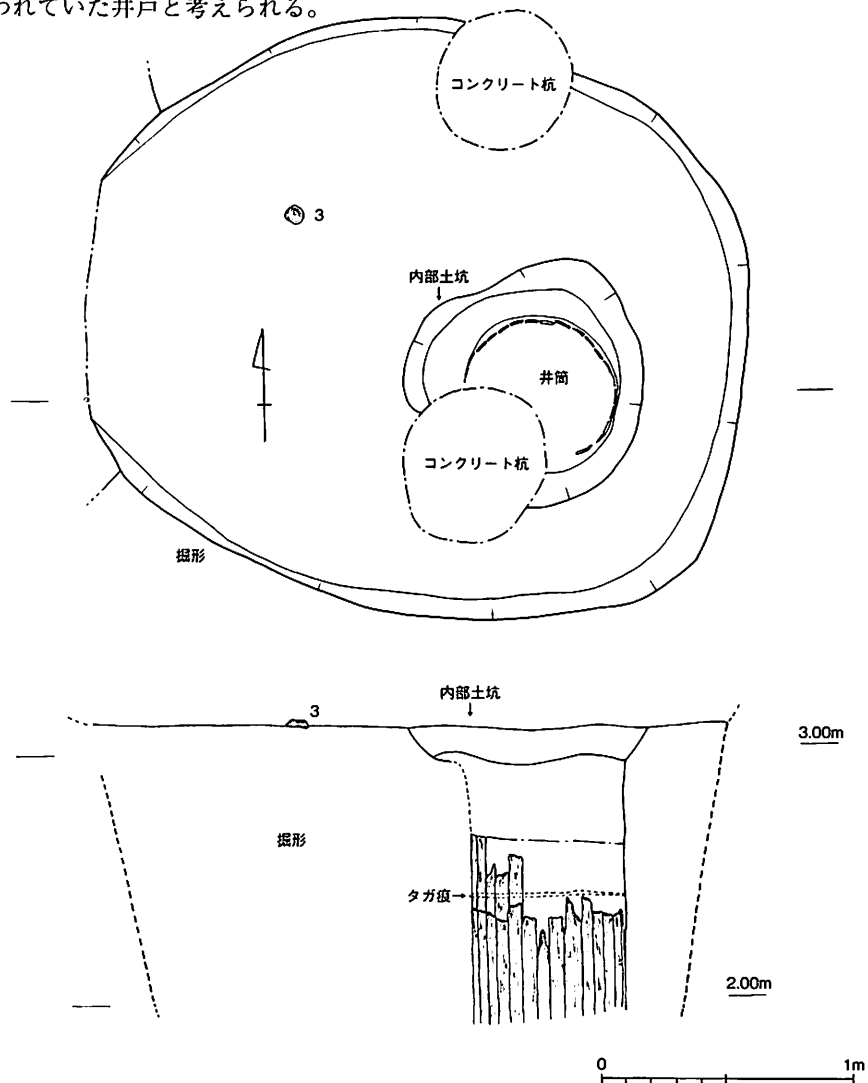
第4-51図 SE144 出土遺物 (1/3)

SE291 (第4-52図)

井筒は木桶

井戸封じ

B9・B10区(東区)においてSK262完掘後の底部より検出された掘形長円形の井戸である。井筒を標高1.9mまで掘下げたところで湧水がひどくなり、完掘はしていない。掘形の規模は長さ2.6m、幅2.4m、深さ1.3m以上。井筒は木製桶で径0.6mの桶を2段まで検出した。長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.2mの内部土坑(埋土は2~3mm大の炭焼土と拳大の礫を多く含む暗褐色土)が井筒埋没時に掘られている。16世紀第2四半期の土坑SK265を切り、16世紀第4四半期前半の土坑であるSK261とSK262に切られる。井筒内からは京都系土師器1期の皿が見つかり、廃絶時に掘られた内部土坑からは京都系土師器2期の皿が出土しているので、16世紀第2四半期に建設され第3四半期まで使われていた井戸と考えられる。



第4-52図 SE291 (1/30)

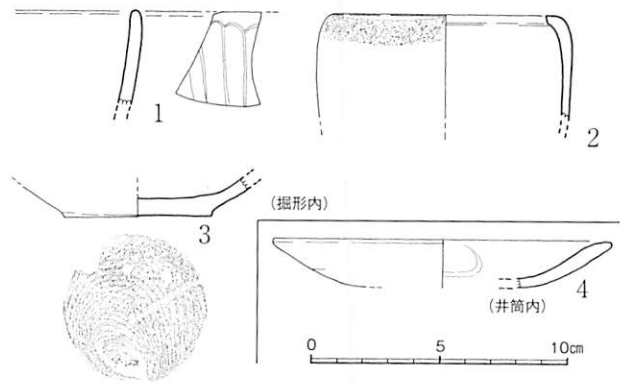
SE291 出土遺物 (第4-53図)

いずれも破片

掘形内。1は15世紀後半から16世紀前半の剣先蓮弁を有する中国龍泉窯系青磁碗B-IV類の口縁片。2は口縁外面に菊花文の刻印が連刻されている瓦質香炉の口縁片。3は口縁部全周を打ち欠いた底部糸切の土師器坏底部、口縁が失われているがロクロ目土師器と考えられる。

井筒内。4は京都系土師器1期の皿口縁片。

井筒上部の内部土坑からは底部糸切の土師器、ロクロ目土師器、京都系土師器2期の皿、塼の破片が出土している。



第4-53図 SE291 出土遺物 (1/3)

土坑

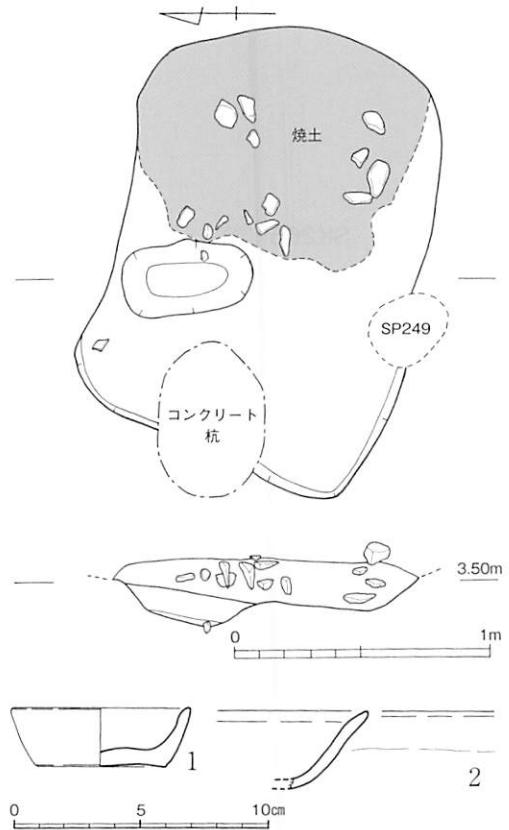
SK238 (第4-54図)

火焚をくりかえす

B10区(東区)において第2層除去後に検出した不整長円形の土坑である。長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.2m。断面は皿状をなし、内部には薄い炭層が何回も広がっている。拳大の礫と土器の破片が散在している。火を焚いたあとと考えられる。祭祀土坑SK224の南側にあり、何らかの関係がある可能性がある。SP249に切られる。京都系土師器1期皿が出土したことから16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

SK238 出土遺物

1は口縁に打ち欠きのある底部糸切の土師器の小皿の破片。2は京都系土師器1期の皿口縁片。ほかに中世陶器の甕、瓦質火鉢、丸瓦や塼の破片が出土している。



第4-54図 SK238 (遺構 1/30、遺物 1/3)

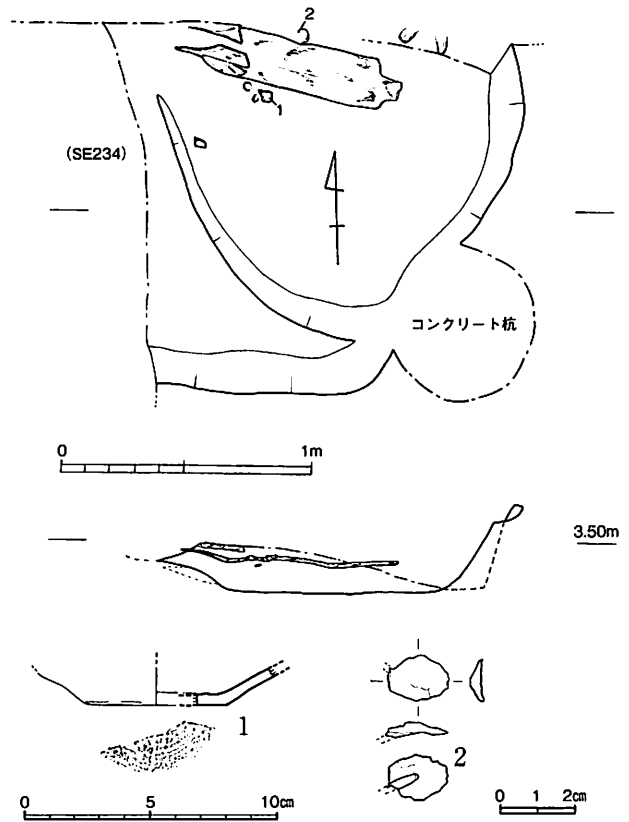
井戸封じの土坑

SK243 (第4—55図)

C10 (東区)において、第2層除去後に検出された不整形の土坑である。井戸 SE235 の廃棄時に掘られた内部土坑である。長さ1.4m、幅1.3m以上、深さ0.2m。内部から板材が出土し、その下から SE235 の井筒がみつかった。16世紀第3四半期の井戸 SE234 に切られている。切合関係から16世紀第2四半期の遺構とした。

SK243 出土遺物

1は白っぽい色調で薄手の大内系土師器の皿底部片。2は鋳状の銅製品。ほかに土師器の破片が出土している。



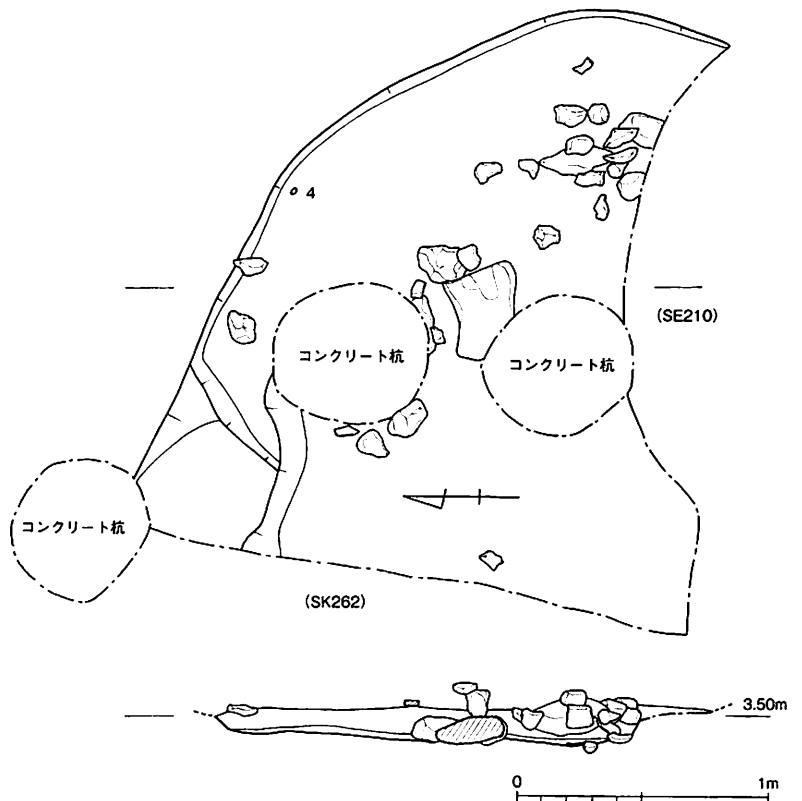
第4—55図 SK243 (遺構 1/30、遺物 1=1/3・2=1/2)

大型土坑

SK265 (第4—56図)

B10 (東区)において、第2層除去後に検出された長さ2.3m以上、幅2.2m以上、深さ0.3mの大型の土坑である。断面は皿状である。埋土は第2層土にあたる茶褐色土の単一層である。内部からは被熱した多くの拳大の礫に混じって土器の破片が出土した。なんらかの廃棄土坑である。16世紀第1四半期の溝 SD239 と土坑 SK266 を切り、第2四半期の井戸 SE291、第4四半期前半の土坑 SK262 と SD292、第4四半期後半の井戸 SE210、同じく SK231 に切られる。積極的に16世紀とする遺物は出土していないが、切合関係から16世紀第2四半期の遺構とした。

廃棄土坑

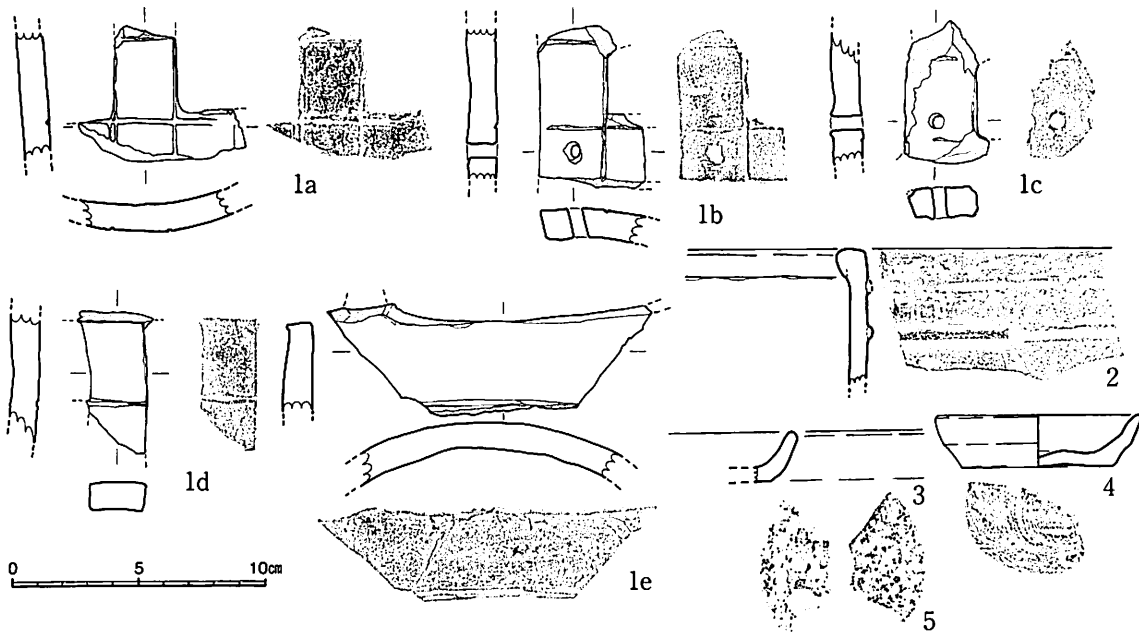


第4—56図 SK265 (1/30)

SK265 出土遺物 (第4-57図)

瓦燈

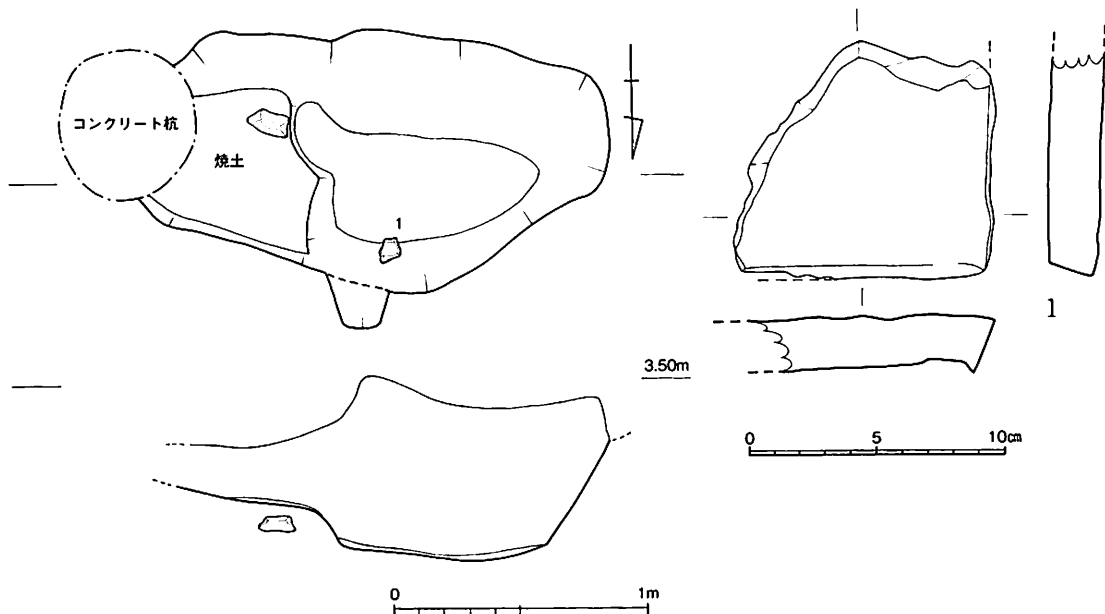
1は同一個体と推定される瓦燈の破片が5点出土している(接合資料10)。1aと1cはSD141、1bは第2層に、1eはSD250に残留したもので、1dはSD165d区掘形内出土の破片である。2は瓦質火鉢の口縁部で、小突帯を貼り付けるための沈線が残っている。3は口縁に煤が付着して灯明皿に使用された底部糸切の土師器小皿の口縁片、河野分類のB類にあたる。4は同じく河野分類B類の底部糸切の土師器小皿の口縁片。5は中国銅銭の破片で「寶」が読めるのみ。ほかに備前焼甕の破片が出土している。



第4-57図 SK265 出土遺物 (1/3、5=1/1)

SK272 (第4-58図)

B10(東区)において検出された長さ1.9m、幅1.05m、深さ0.6mの東西に長い長円形の土坑である。断面は半円形で、16世紀第1四半期の土坑SK266を切り、第4四半期後半の井戸SE210に切られる。埋土は上下2層にわかれ、第1層は暗褐色土(1cm大の炭、2~3cm大の焼土ブロック多い)。第



第4-58図 SK272 (遺構 1/30、遺物 1/3)

2層は暗茶褐色粘質土（礫多い）。内部からは焼土や埴、瓦や壁土など文字通り瓦礫で埋まっており、火災処理土坑と考えられる。切合関係から16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

SK272 出土遺物

1は胎土から海部郡産と推定される埴の破片。ほかに丸瓦や多量の壁土の残骸が出土している。

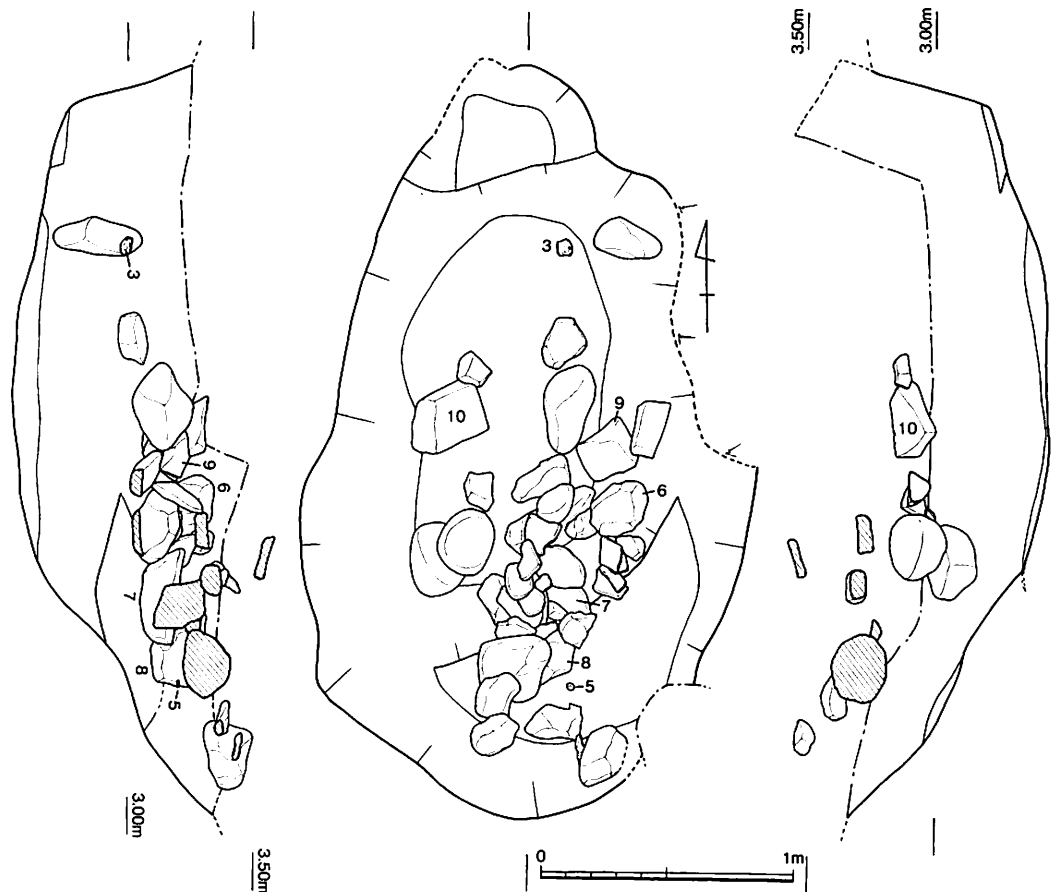
SK285（第4—59図）

焼却

廃棄土坑

祭祀行為

B10（東区）において検出された長さ2.6m、幅1.7m、深さ0.9mの長円形の土坑である。断面は半円形で、内部上層には礫が集中する。最下層には焼土と炭の堆積がある。15世紀の土坑SK286とSK287を切り、SK283に切られる。礫は安山岩質の河原石のほか結晶片岩と凝灰岩礫がおおく、凝灰岩の多くは五輪塔の再加工品や加工された石材である。礫には被熱したものも多く、下層に堆積した焼土と炭を考え合わせると、瓦礫と化した廃材を焼却して片付けた廃棄土坑と考えられる。ただし礫の廃棄層と同じ高さから3の口縁を打ち欠いた土師器燭台や5の銭貨が出土しているので、廃棄に際して何らかの祭祀行為が行われた可能性が指摘できる。埋土中の遺物で最新のものがロクロ目土師器と京都系土師器1期皿であることから16世紀第2四半期の遺構と考えられる。



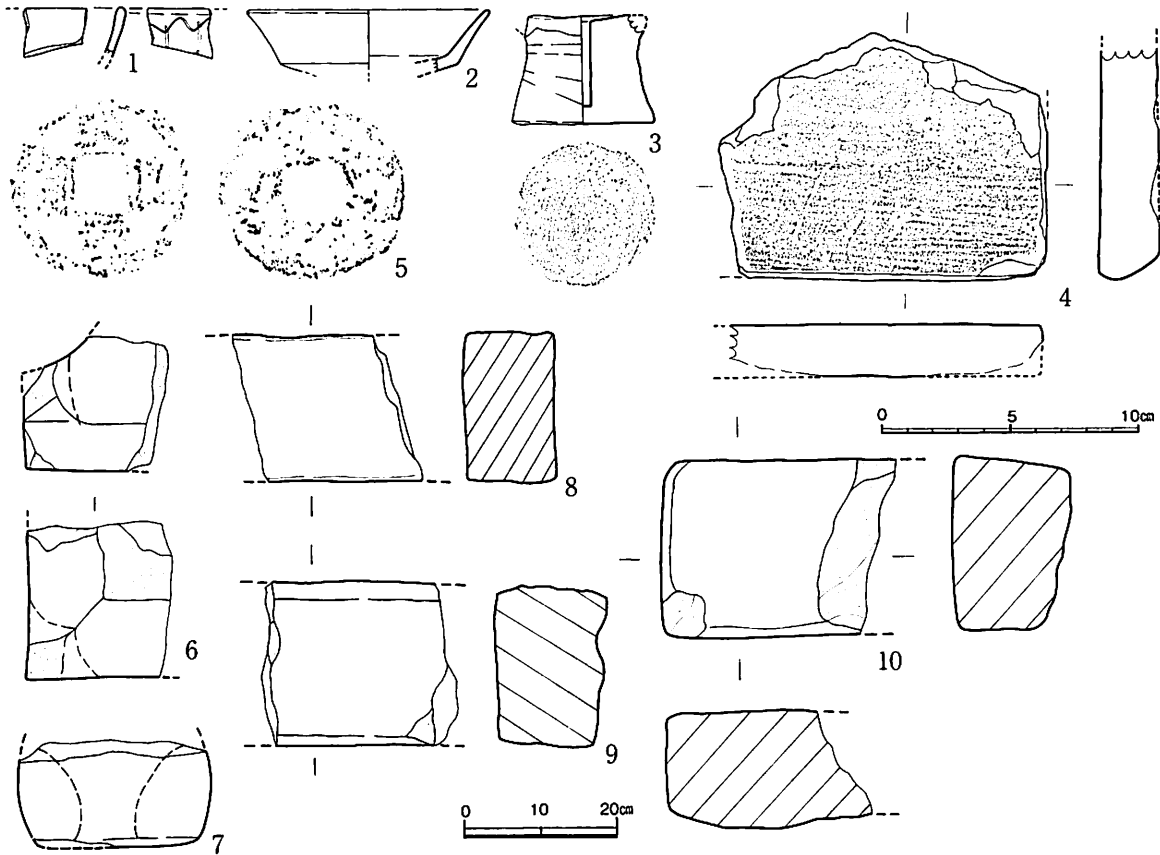
第4-59図 SK285 (1/30)

SK285 出土遺物（第4—60図）

転用石材

1は上田分類のB—IV類にあたる細線蓮弁文をほどこす中国龍泉窯系青磁碗の口縁片。2は15世紀の森田分類D類にあたる中国製白磁皿の口縁片で、小さな打ち欠きがある。3は底部部切の土師器燭台A1類、穿孔は貫通しない。口縁が欠損している。4は埴の破片。5は完形の中国銅銭の天聖元寶（北宋初鑄1023年・篆書体）。6は凝灰岩製の五輪塔の火輪を4分の1に分割して石材と

して利用したもの。7は凝灰岩製の五輪塔の水輪を加工した石材。8は凝灰岩製の石材、全体に被熱して割れている。9と10は凝灰岩製の角材に加工した石材。ほかに底部糸切の土師器、ロクロ目土師器、京都系土師器1期皿や凝灰岩の破片が出土している。なかには五輪塔の火輪の破片が含まれる。



第4-60図 SK285出土遺物 (1/3、5=1/1、6~10=1/10)

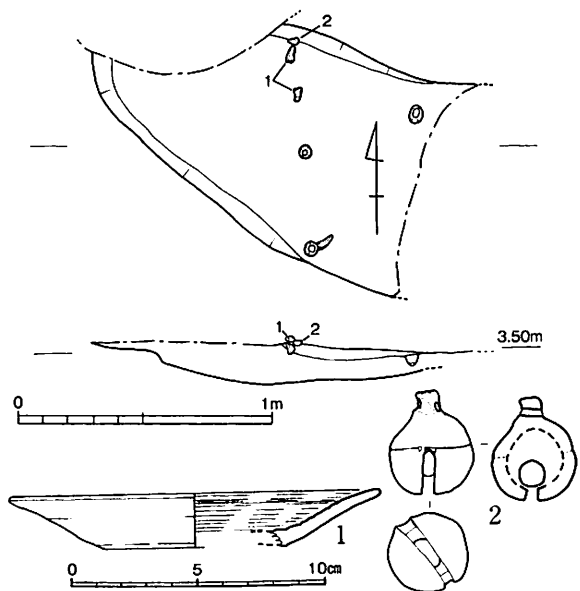
SK163 (第4-61図)

C8区(北2区)において第2層除去後に検出した長さ1.4m以上、幅0.8m、深さ0.1mの東西に長い長円形の土坑である。断面は半円形で、埋土は小礫を多く含む第2層土の単一層である。16世紀第4四半期前半の8号墓ST149と土坑SK156に切られる。溝SD165を切るようであるが、確認できなかった。内部からは土鈴の完形品が出土している。廃棄土坑である。出土した土師器の最新のがロクロ目土師器と京都系土師器皿である点から16世紀第2四半期の遺構とした。

廃棄土坑

SK163出土遺物

1は器高の低くなったロクロ目土師器の



第4-61図 SK163 (遺構 1/30、遺物 1/3)

土鈴

皿口縁片。2は硬質のかわいた音のする完形の土製の鈴。沈線が1条横位置に1周する。ほかに京都系土師器皿の破片が出土している。

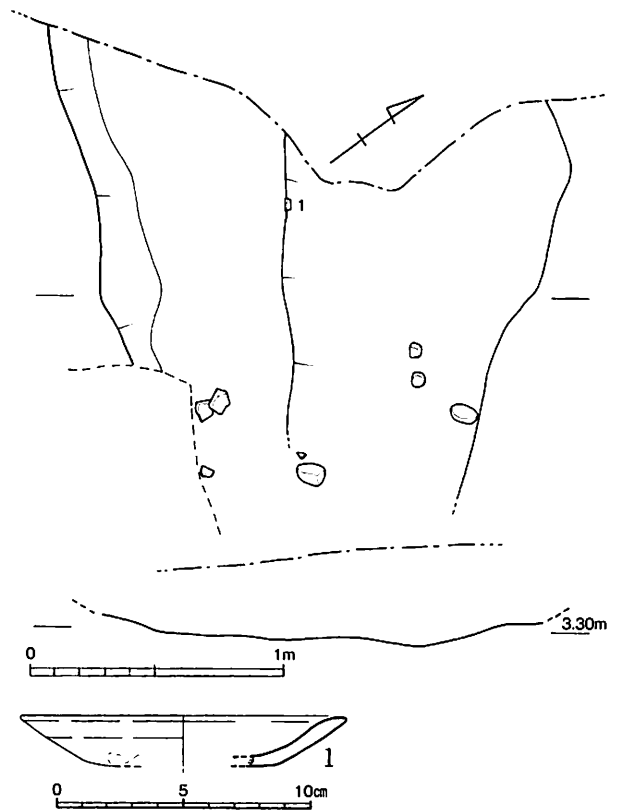
SK190 (第4—62図)

溝?

B7区(南2区)の基盤IV層上面で検出した土坑であるが、西側を攪乱坑によって大きく破壊されて溝になる可能性もある。埋土は灰茶褐色土である。16世紀第2四半期の土坑SK191と第4四半期後半の溝SD168とに切られる。SD116を切る可能性もあるが確認できなかった。切合関係から16世紀第2四半期の遺構とした。

SK190 出土遺物

1は京都系土師器1ないし2期の皿の口縁片。ほかに土師器、平瓦の破片が出土している。



第4-62図 SK190 (遺構 1/30、遺物 1/3)

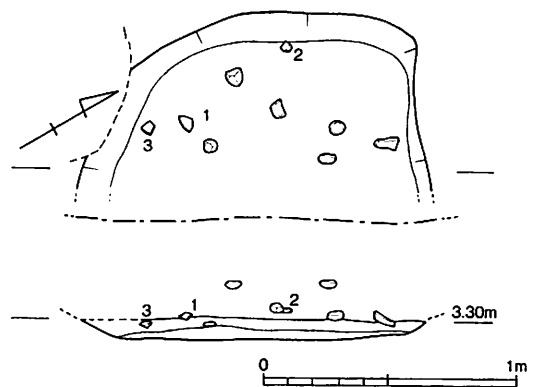
炭混土充滿

SK191 (第4—63図)

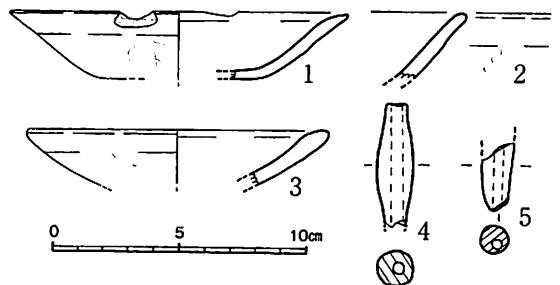
B6区(南2区)の第2層除去後に検出した長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.1mの長円形の土坑である。断面は皿状で、埋土は細分可能だが全体に真っ黒い炭混じり土が充滿している。16世紀第1四半期の溝SD189と第2四半期の土坑SK190を切り、第2四半期の墓らしいST192に切られる。内部からは銅製の袈裟金具や京都系土師器皿の破片が散在して出土している。切合関係から16世紀第2四半期の遺構と推定される。

SK191 出土遺物 (第4—64図)

1は1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期の皿口縁片。2も京都系土師器1期の皿口縁片。3は京都系土師器2期の皿口縁片。4は端部を調整しない管状土錘A類の完形品。5も管状土錘A類の破片。銅製の袈裟金具があったが調査中に行方不明になった。ほかに白磁皿、備前焼、瓦質火鉢、古代土師器碗の破片が出土している。



第4-63図 SK191 (1/30)



第4-64図 SK191 出土遺物 (1/3)



## SK276

小土坑

C9区(北1区)の第2層除去後において検出した円形の小土坑である。埋土は第2層土(黄色粘土ブロック多い)の単一層である。16世紀第3四半期の土坑SK232に切られる。図示できる遺物はないが、京都系土師器1期皿の底部の破片が出土している。京都系土師器1期皿が出土したことと、切合関係から16世紀第2四半期の遺構と考えられる。

## 墓?

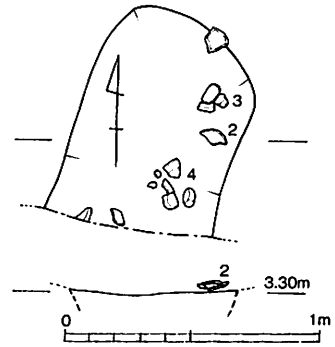
## ST192(第4-65図)

木棺墓?

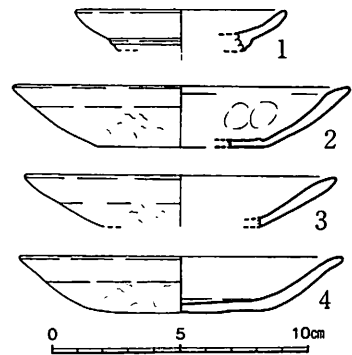
B7区(南2区)で検出された長さ0.9m以上、幅0.6m、深さ0.3mの隅丸方形の土坑である。内部から京都系土師器1期皿がまとまって出土し、鉄釘らしき鉄器が出土したので、木棺墓の可能性のある土坑である。16世紀第1四半期の溝SD189と第2四半期の土坑SK191を切る。切合関係と京都系土師器1期皿が出土していることから16世紀第2四半期の遺構と判断した。

## ST192出土遺物(第4-66図)

1は底部系切の土師器小皿の口縁片。2と3は京都系土師器1期の皿口縁片。4は口縁を大きく2箇所両側から打ち欠いた京都系土師器1期皿。ほかに釘らしき鉄器の破片が出土している。



第4-65図 ST192(1/30)



第4-66図 ST192出土遺物(1/3)

## 小結

16世紀第2四半期の状況をまとめると、次の4点に集約できる。

道路改築

① 道路状遺構SF151とその側溝SD165は、道路の硬化面を第6硬化面に更新し、水路は第3矢板列に打ち替えを行いつつ、この時期にも同一の位置に維持される。そのSD165の南端と南2区の廃棄土坑SK190に挟まれた空間が、その道路幅としてよければ、この時点での東西道路の最大幅は約6mである。そうすると第1四半期に比べて道路幅はやや狭くなった可能性が高い。

南側の区画

② 南2区で道路状遺構SF151と並行するように廃棄土坑群が掘られている。この時期に第1四半期以来の比較的広大な区画が継続していたものと考えられる。

北側の区画

③ 西区のかつて方形の巨大な土坑SK247が掘られた位置に、溝SD303を掘り直した溝SD140が掘られている。第1四半期以来の区画がやはり踏襲されているものと推測される。

「中町」の角地

④ 第1四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、宅地が継続し、井戸や廃棄土坑がかなり密に分布する。井戸や土坑は第4南北街路の位置から約10mほど西に控えた場所に分布することから見て、第4南北街路に面した空間には建物が立ち、その背後に井戸や土坑が分布する景観を想定できる。その意味で第1四半期に引き続き、この角地は町人屋敷として利用されたものと推定される。

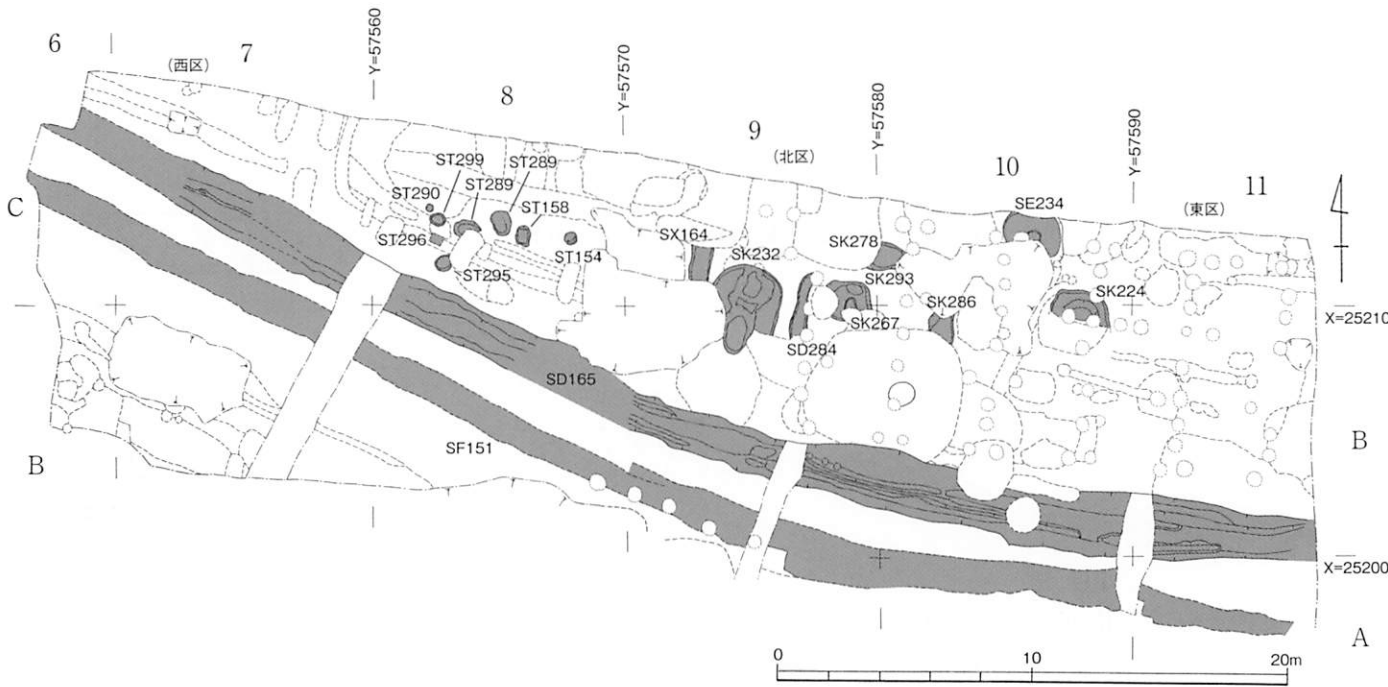
5 16世紀第3四半期の遺構と遺物

概要 (第4-67図付図6上)

遺物と切合  
16世紀第3四半期と認定した遺構は、京都系土師器2期の皿を含み、3期以後の新しい京都系土師器は含まない。中国景德鎮窯系青花ではE類の饅頭心碗が含まれるようになるが、備前焼では近世1期の製品はまだ含まない時期のものであり、遺構の切合関係上も矛盾のない遺構である。

道路と水路  
道路状遺構SF151と道路側溝を兼ねた溝SD165とが、引き続き路面を更新し、さらに矢板の修繕を行いながら維持されている。とくにSD165は矢板の位置が南に移動し溝も浅くなっている。それ以外の16世紀第3四半期代と考えられる遺構の分布はそれまでと大きく変わるようである。

墓地  
東西道路の北側にあたるC7区付近の西区とその道路をはさんだ対面する位置においては、それまで続いた道路南のC6、C7の南区の2箇所遺構がなくなる。変わってその隣、かつて方形の区画のあったあたりに、幼小児の墓が集中するようになる。C11～B11区付近はおなじく本来第4南北街路に面した東区も遺構がなくなり、北1区としたあたりに土坑や溝が集中する。墓地については節を改めて述べる。



第4-67図 16世紀第3四半期の遺構 (1/300)

溝

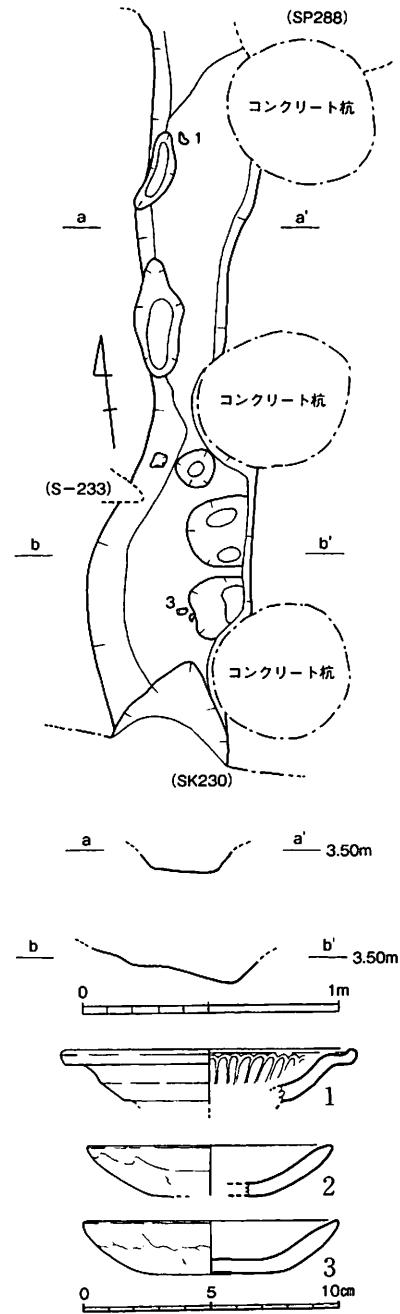
SD284 (第4 - 68 図)

南北溝

C9・B9区(北1区)で検出された、南北方向に伸びる(東に11度傾く)溝である。長さ2.8m、幅0.6m、深さ0.1mで、断面は半円形をなす。埋土は暗褐色土と黄色砂層との混層の単一層である。15世紀のピットSP288を切り、16世紀第4四半期の井戸SE148と溝SD230に切られる。埋土から出土した遺物は破片となって散在する状態である。京都系土師器2期の皿が出土したと切合関係から、16世紀第3四半期の遺構と考えられる。

SD284 出土遺物

1は瀬戸美濃大窯3期の皿でSK231出土片と接合した(接合資料24)。2と3は京都系土師器2期の小皿口縁片。

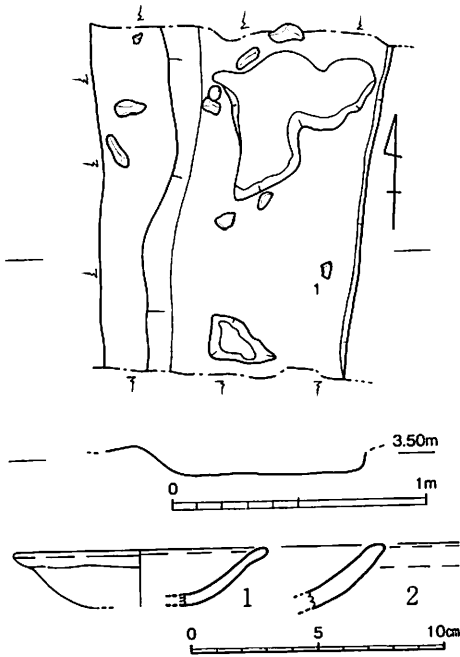


第4-68図 SD284 (遺構 1/30、遺物 1/3)

SX164 (第4 - 69 図)

遺構?

C9区(北1区)の第2層除去後に検出された当初溝と考えた南北方向に伸びる遺構である。三方を攪乱で失っているが、ほりあがると底面はでこぼこで、地形のくぼみの可能性もある。長さ1.3m以上、幅0.8m、深さ0.1m。埋土は小礫を多く含む第2層土の単一層である。碎片化した土器が散在して出土した。最新の遺物が京都系土師器2期皿であるから16世紀第3四半期とした。



第4-69図 SX164 (遺構 1/30、遺物 1/3)

SX164 出土遺物

1は内外に煤が付着するが、灯明皿とは異なる京都系土師器1期の皿口縁片。2は京都系土師器2期の皿口縁片。出土した中国焼締陶器小型四耳壺の口縁片(4-76図1)はSD141上部、SK278出土片と接合した(接合資料12)。ほかにロクロ目土師器皿や罎の破片が出土している。

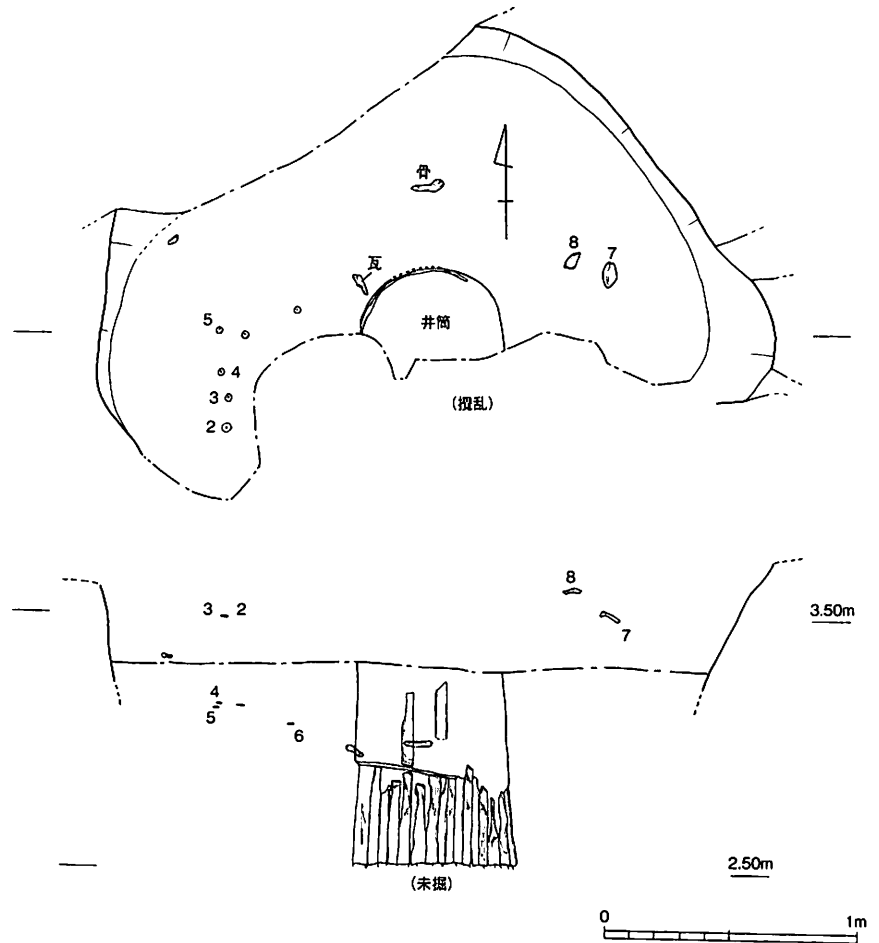
井戸

SE234 (第4-70図)

井筒は木桶  
井筒小型  
掘形内には銅銭や京都系土師器、動物骨などが廃棄されていた。特に銅銭は下位の4枚(4~6、一枚は破損激しく図化できない)がほぼ同じレベルでまかれたように発見された。

銭をまく祭祀

近くから動物骨も出土しており、井戸建設に伴う祭祀行為がおこなわれたものと推定される。残りの2枚(2と3)高さを違って同じ位置から出土しており、そのレベルでは7と8の京都系土師器の破片が出土している。祭祀行為は繰り返された可能性が高い。京都系土師器2期の皿が出土したことから、切合関係から16世紀第3四半期の遺構と考えられる。



SE234 出土遺物 (第4-71図)

第4-70図 SE234 (1/30)

6枚の銭貨

掘形内。1は出土位置不明の完形の中国銅銭で、「祥〇元寶」と読める。2は「元」一文字のみが読める完形の中国銅銭。3は中国銅銭の洪武通寶(明1368年初鑄)。4は完形の中国銅銭の洪武通寶(明1368年初鑄)。5は「寶」一字のみよめる銭種不明の完形の銅銭。6も銭種不明の完形の銅銭。7と8は京都系土師器2期の皿口縁片。なお15世紀の土坑SK286出土片と接合した青磁皿(接合資料37)の破片が出土しているが、これは残留してきたものである。ほかに動物骨の破片が出土している。

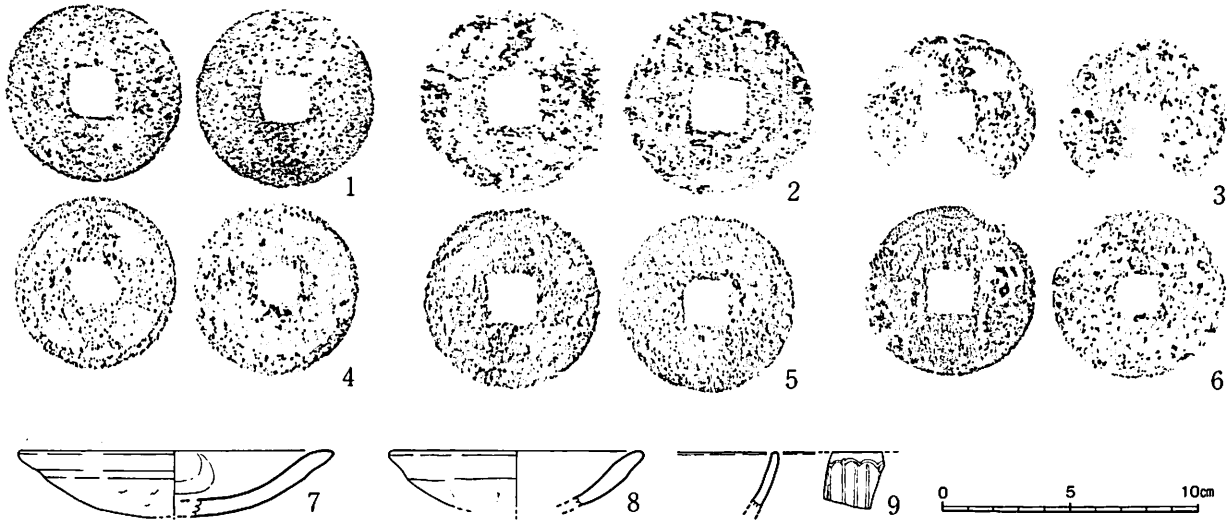
井筒内。9は中国龍泉窯系青磁碗B-IV'類の剣先蓮弁文碗の口縁片。ほかにロクロ目土師器、京都系土師器1期皿の破片が出土している。

土坑

SE291 内部土坑

井戸封じ

井戸SE291の廃絶時に掘られた土坑である。京都系土師器2期皿を含むことから16世紀第2四半期に建設された後、第3四半期に廃棄されたものと考えられる。



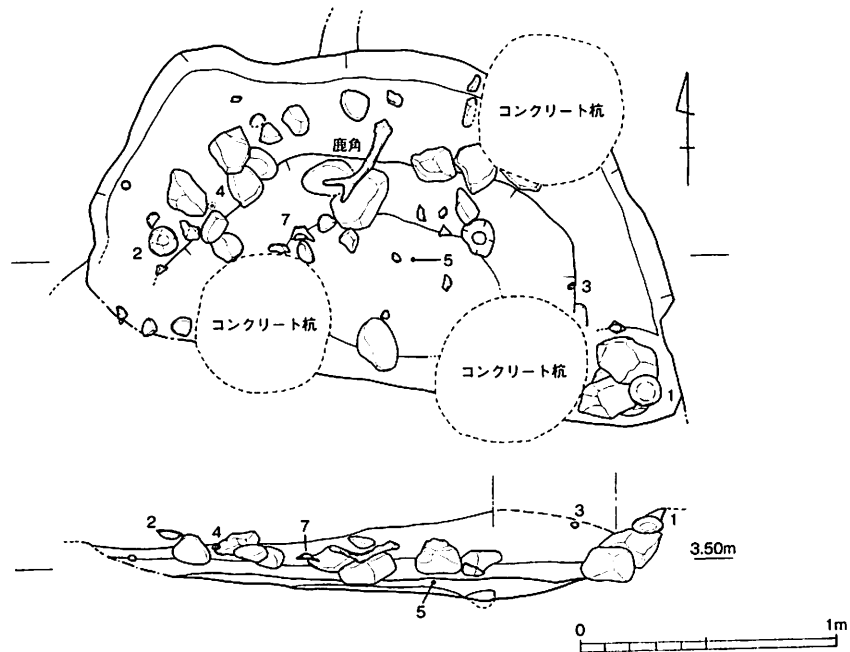
第4-71図 SE234 出土遺物 (1~6=1/1、7~9=1/3)

SK224 (第4-72図)

遺物埋置

祭祀行為

C10・B10 (東区) の基盤Ⅳ層上で検出した東西に長い長さ2.4m、幅1.3m、深さ0.3~0.4mのゆがんだ長円形の土坑である。底面は皿状で、16世紀第2四半期の井戸SE144と第2四半期の溝SD245を切る。中央に鹿角、その東そばにガラス小玉(5)。両側にそれぞれ1枚の銅銭(3と4)をおき、さらに土坑の両端に完形の京都系土師器皿を正位で置いている(1と2)。ガラス玉については底面にあるので、あるいは偶然かもしれない。拳大から人頭大の礫を含む埋土で、ある程度埋めた後に、以上の遺物を供えている。目的は不明だが祭祀行為を行った土坑であることは間違いない。京都系土師器2期の皿が埋置あるいは廃棄されることと切合関係から16世紀第3四半期とした。

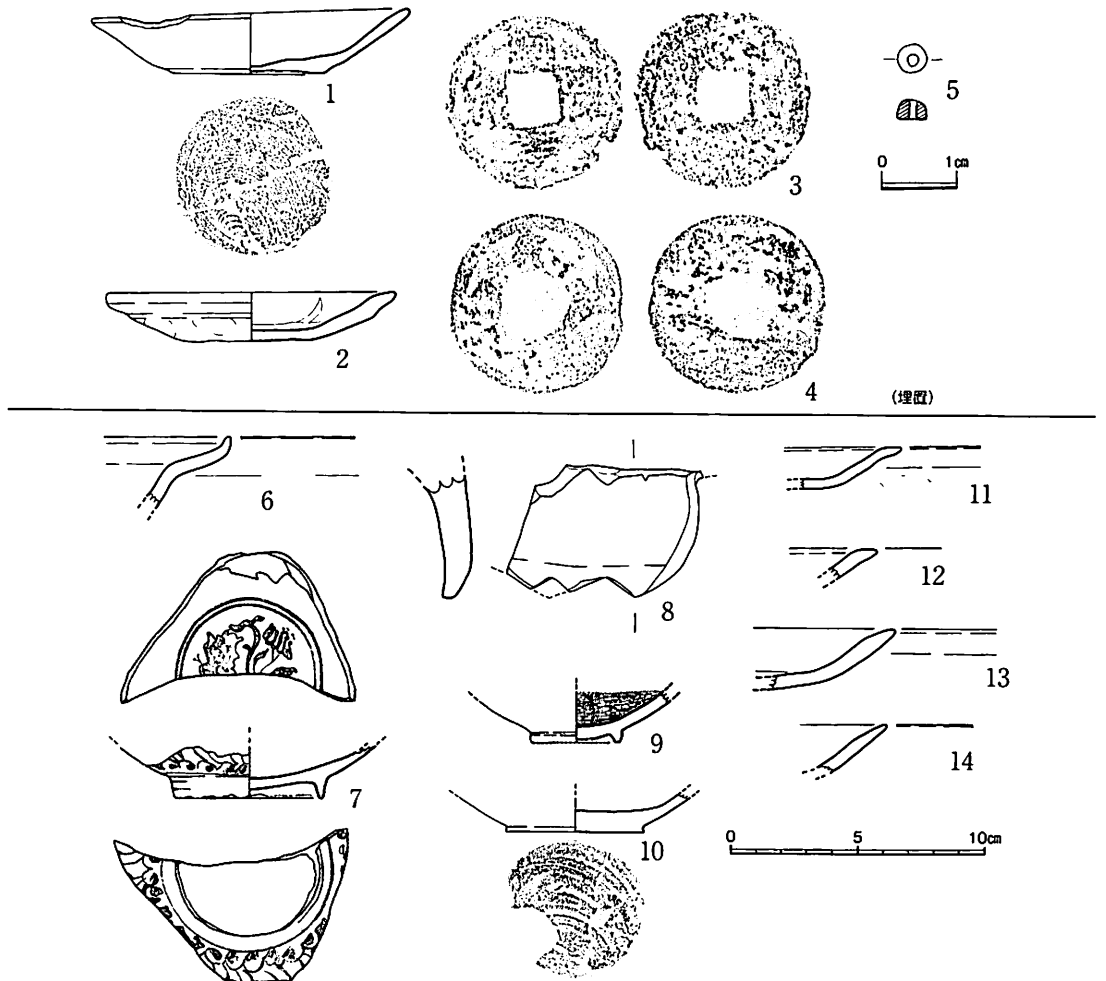


第4-72図 SK224 (1/30)

SK224 出土遺物 (第4 - 73 図)

故意におかれた遺物  
埋置遺物。1 は完形の底部糸切の土師器皿で、口縁に打ち欠きがある。東端上部に正位で出土したもの。2 も完形の京都系土師器 2 期の皿で、西端の上位で正位のまま出土したもの。3 は東側上位で出土した完形の中国銅銭、紹聖通寶 (北宋初鑄 1094 年)。4 は西側上位で出土した「元〇通寶」と読める銅銭の完形品で、元符通寶または元祐通寶 (北宋銭) になるだろう。5 は中央底面で検出した深緑色のガラス小玉。さらに中央北より上位に鹿角 1 本が、根元を北にして置かれている。以上が埋置された遺物である。

埋土中の破片  
以下は下部の礫を多く含む埋土中に混ざっていた破片である。6 は中国景德鎮窯系青磁皿の口縁片。7 は中国景德鎮窯系青花碗 C 群のいわゆる蓮子碗の底部片。この破片も鹿角近くの上位で出土したが、破片であるので祭祀遺物に含めなかった。8 は瓦質火鉢脚部片。9 は 16 世紀の瓦質土器の碗底部、内面は黒色を呈す。10 は底部糸切の土師器皿の底部片。11 は京都系土師器 1 期の皿口縁片。12 は京都系土師器 1 ないし 2 期の皿口縁片。13 は京都系土師器 2 期の皿口縁片。14 は京都系土師器皿口縁片。ほかに基石のような白い玉が 1 点と、小さな黒い石が 3 点出土している。あるいは祭祀行為と関係があるかもしれないが、出土位置を特定できなかったので図示はしない。



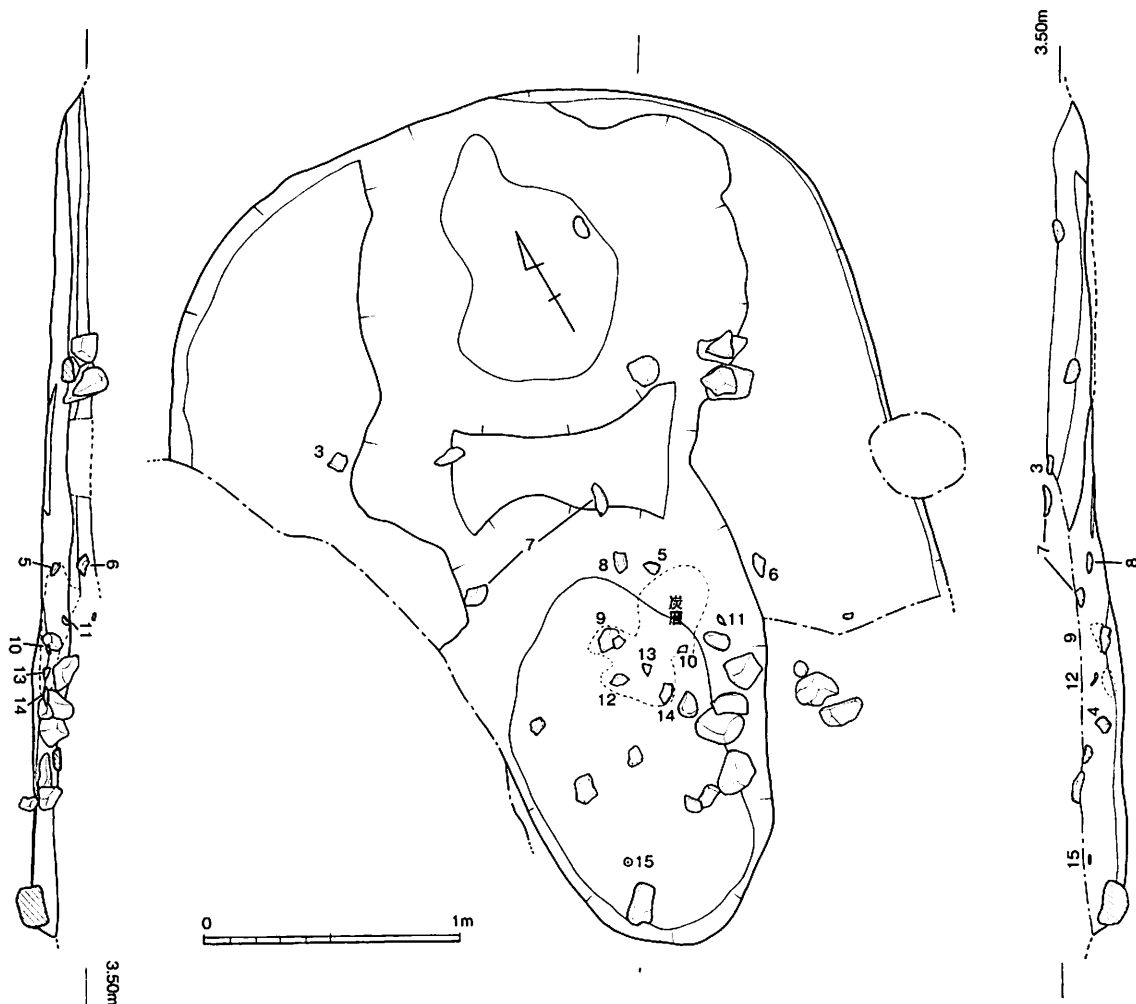
第4 - 73 図 SK224 出土遺物 (1/3, 3 ~ 5=1/1)

SK228=SK232 (第4 - 74 図)

土坑の重複  
C9・C10 区 (北 1 区) の第 2 層除去後に検出された大型隅丸方形の土坑で、長さ 3.4m、幅 2.8m、深さ 0.2m。円形や長円形のいくつかの土坑が重複しているのだが、調査によって区別することができなかった。SK275 と 16 世紀第 2 四半期以後の土坑 SK276 を切る。埋土は黄色土小ブロック混

廃棄土坑

じりの暗黄褐色土（小円礫、1cm 大の炭焼土）の単一層で、20cm 大の人頭大の礫を多く含む。遺物の出土状況から見て廃棄土坑と考えられる。最新の土師器が京都系土師器2期の皿であることと、切合関係から16世紀第3四半期の遺構とした。南側の長円形の部分の底部には炭化物の堆積があり、9と14の京都系土師器の皿はその堆積中に、10・12・13はその堆積の直上に廃棄されていたものである。4～15の遺物は炭化物廃棄に伴う一括性が高く、南側で出土した銅銭1枚もそれにとまなう可能性が高い。



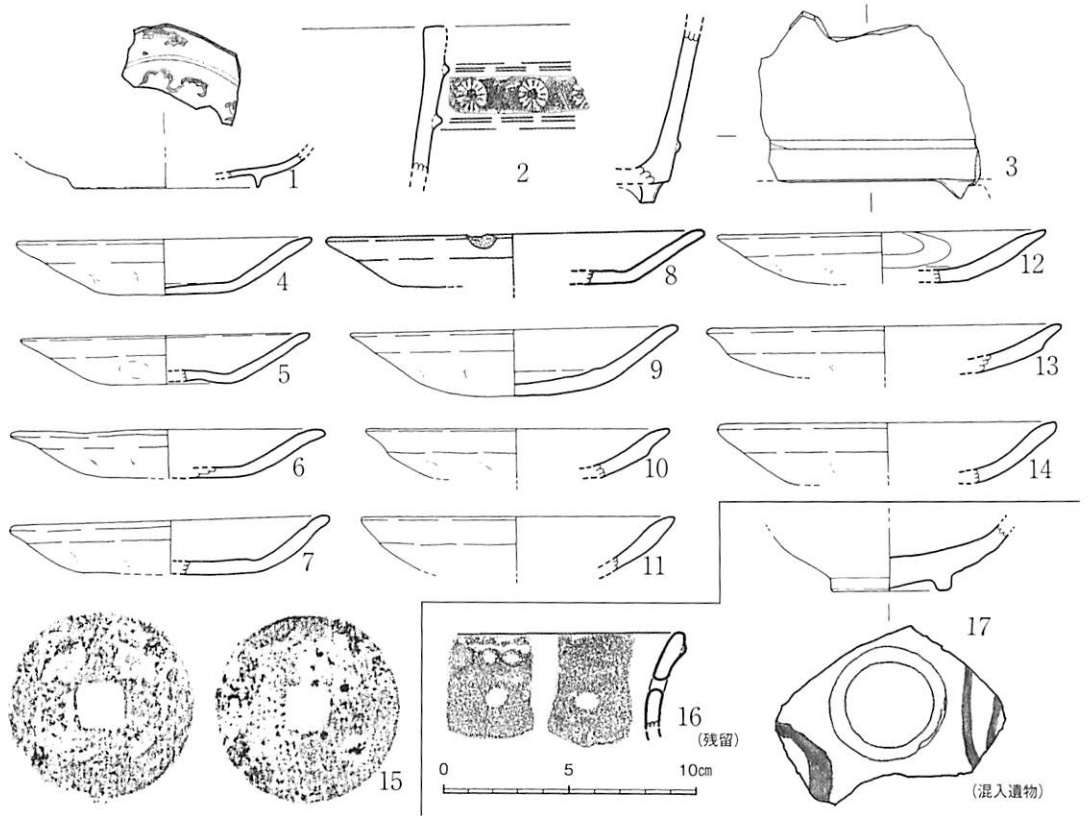
第4-74図 SK228=SK232 (1/30)

## SK228=SK232 出土遺物 (第4-75図)

京都系土師器

1は中国景德鎮窯系青花皿の底部で、たたみつきの釉を拭き取っている。2は菊花文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。3は瓦質火鉢底部片。4はきわめて薄手で白っぽい色調の京都系土師器0ないし1期の皿口縁片。5～7はいずれも京都系土師器1期の皿口縁片。8も京都系土師器1期の皿で1箇所打ち欠きのある口縁部片。9は炭層中出土の京都系土師器1ないし2期皿の口縁片。10は炭層中出土の京都系土師器2期の皿口縁片。11は京都系土師器2期の皿口縁片。12は炭層上出土の京都系土師器1ないし2期の皿口縁片。13と14は炭層上出土の京都系土師器2期の皿口縁片。15は中国銅銭の至道通寶（北宋初鑄995年・行書体）の完形品。別に出土した瓦質火鉢の破片はSD165、SK261、SK293出土片と接合している（接合資料15）。

残留遺物と混入遺物。16は縄文時代晩期の深鉢口縁部。17は1600～1630年製の福岡産陶器（上野高取焼）碗底部で、薬灰釉がかかる。17はかなり上部で出土したもので第2層に含まれたものの可能性がある。ほかに瀬戸美濃灰釉陶器皿、ロクロ目土師器、鉄器の破片が出土している。



第4-75図 SK232 出土遺物 (1/3、15=1/1)

SK278 (第4-76図)

C9・C10区(東区)で検出された長さ1.65m、幅1.1m、深さ0.3mの不整形の土坑である。16世紀第4四半期の井戸SE148に切られている。断面は箱形で、埋土は上下2層にわかれ、上層は暗紫褐色軟質土(マンガン含む)、下層は暗黒灰色粘質土(5cm大の礫含む)である。その間に炭を含む黒色層の堆積がある。京都系土師器2期皿の出土と切合関係から16世紀第3四半期の遺構とした。

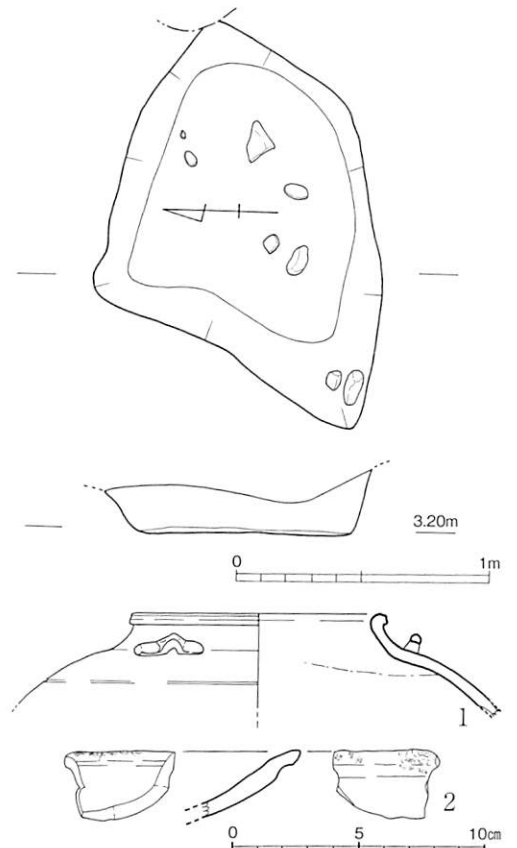
廃棄土坑

SK278 出土遺物

1は溝SD141上層、土坑SK164出土破片と接合した中国焼締陶器四耳壺の破片(接合資料12)。2は京都系土師器2期の皿を転用した埴塼片。口縁部に濃赤色の付着物がある。

中国製四耳壺

埴塼



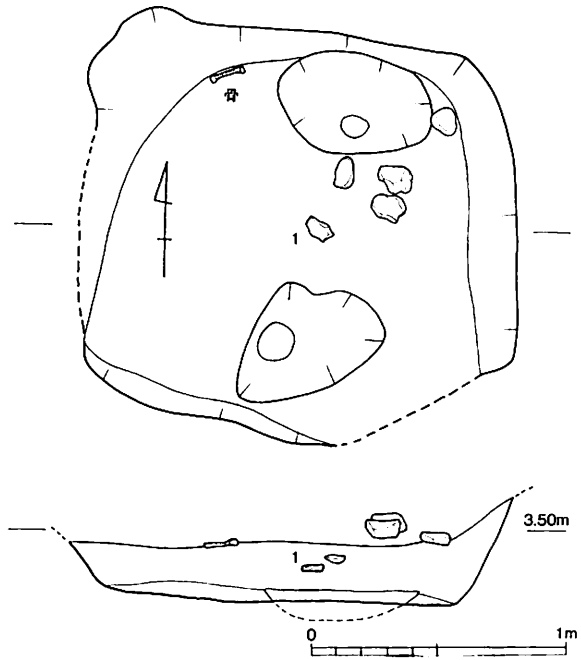
第4-76図 SK278 (遺構 1/30、遺物 1/3)



SK293 (第4 - 77 図)

C9区(北1区)で検出されて長さ1.7m、幅1.6m、深さ0.5mの隅丸方形の土坑である。埋土は暗褐色軟質土の単一層で、礫を含む。16世紀第3四半期の土坑SK267、16世紀第4四半期の土坑SK215とSK279に切られる。土器や動物骨の碎片をふくむ廃棄土坑である。京都系土師器2期皿の出土と切合関係から16世紀第3四半期と考えられる。

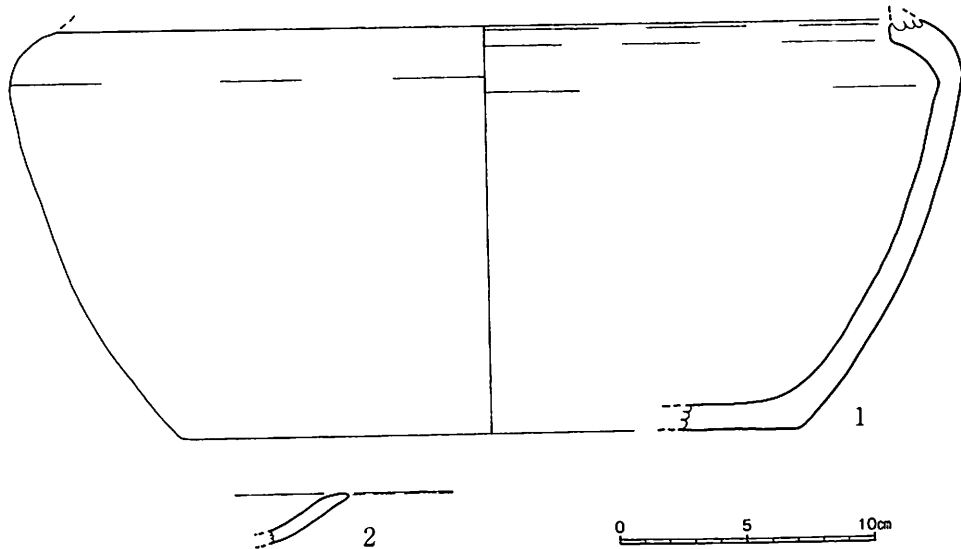
廃棄土坑



第4-77図 SK293 (1/30)

SK293 出土遺物 (第4 - 78 図)

1はSD165、SK228、SK261出土片と接合した瓦質火鉢口縁(接合資料15)。2は京都系土師器2期の皿口縁片。ほかに骨片が出土している。



第4-78図 SK293 出土遺物 (1/3)

SK267 (第4 - 79 図)

小土坑

C9・B9区(東区)の第2層除去後に検出した円形の小土坑である。長さ0.6m以上、幅0.5m、深さ0.05mで、断面は浅い皿状である。埋土は小砂利混じり層の単一層である。16世紀第3四半期の土坑SK293を切り、第4四半期の土坑SK215に切られる。内部からは銅銭1枚が出土したが、ほかに京都系土師器2期皿の破片を含むのみで、その性格は明確にしがたい。京都系土師器2期皿の出土と切合関係から16世紀第3四半期の遺構とした。

性格不明

SK267 出土遺物

1は京都系土師器2期の皿口縁片。2は完形の中国銅銭の皇宗通寶(北宋初鑄1038年・篆書体)。

小結

16世紀第3四半期の状況をまとめると、次の6点に集約できる。

道路改築

① 道路状遺構 SF151 とその側溝 SD165 は、道路の硬化面を2度更新（第5・4硬化面）し、水路は矢板の打ち替え（第2・第1矢板列）を行いつつ、この時期にも同一の場所に維持される。厳密には矢板がわずかに南側に移動している。この時期の道路幅は南側のラインをおさえることができないので、不明である。

南側  
区画 A

② 南2区では遺構がなくなる。  
③ 西区の第1四半期以来の区画はこの時期の遺構がない。

墓地

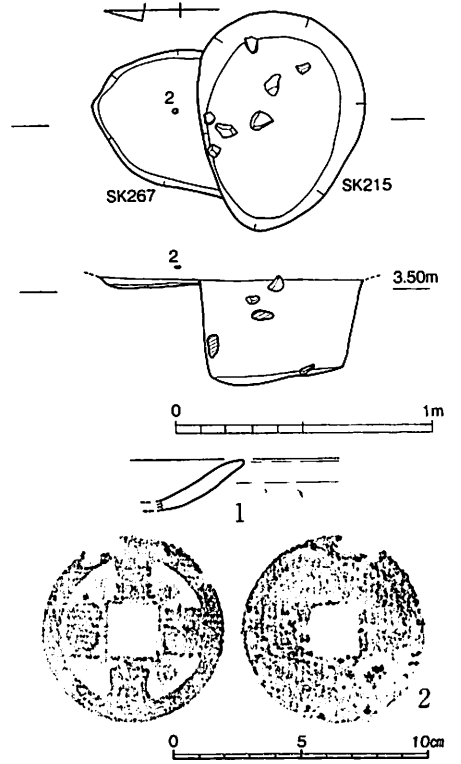
④北2区の16世紀前半期までは方形の区画が存在した場所には後述するように、幼小児の墓地が営まれるようになる。

「中町」の町屋

⑤ 第1・2四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、宅地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑の位置が西に移動し、溝 SD284 が宅地の背後を画する溝とみられる。この角地は引き続き町人屋敷として利用されたものと推定される。

墓地の出現

⑥ 全体として第3四半期になっても道路や宅地の区画に大きな変動はないが、北2区の区画に墓地が現れることが大きな変化である。



第4-79図 SK215・SK267  
(遺構 1/30、遺物 1=1/3、2=1/1)

## 6 16世紀第4四半期前半の遺構と遺物

概要 (第4-80図・付図6下)

遺物の組合せ

16世紀第4四半期と認定した遺構は、京都系土師器3期の皿を含み、1期ないし4期の京都系土師器は含まない(2期が伴うことは多い)。中国景德鎮窯系青花ではE類の饅頭心碗が含まれるが、それに加えて中国漳州窯系青花が伴うことが多い。備前焼では近世1期の播鉢と甕が出現する。加えて遺構の切合関係上も矛盾のない遺構である。さらに第4四半期は前半と後半に、遺構の切合関係と遺物の接合関係から分けることができる。後半の遺物の指標は中国景德鎮窯系青花皿F群、朝鮮王朝系の彫三島碗や肥前薬灰釉陶器、絵唐津皿などの出現である。

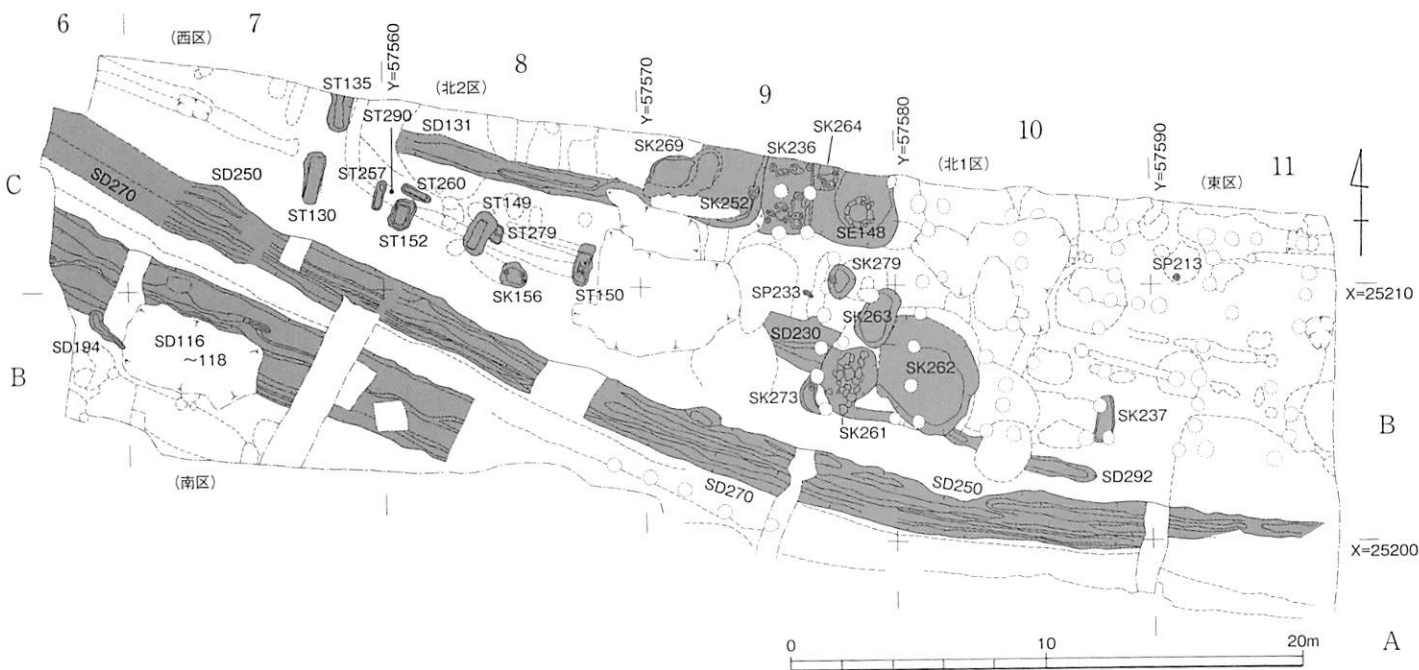
道路の改築

第4四半期前半の遺構をまとめると次のようになる。道路状遺構SF151は引き続き路面を3面・2面・1面と更新し維持されるが、道路の北側側溝として溝SD250とSD270がこの順番で掘りなおされる。ともに溝SD165と異なり、矢板がなくなっている。同時にそれまでSF151の道路面であったと推定される南側に、かなり大きな溝SD118、SD117、SD116が順次掘りなおされていく。

側溝の変化

それ以外の16世紀第4四半期前半代と考えられる遺構の分布はそれまでと大きく変わらないが、その内容は大きく変わるようである。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区には第3四半期に続き遺構がないが、その道路をはさんだ対面する位置にそれまで続いた道路南側のC6区、C7区にあたる南区も遺構が少ない。第3四半期幼児の墓が集中した北2区は、等間隔に成人墓を配する墓地に整備され、その北側には墓地とその北側の空間を画すと推定される溝SD131が掘られている。C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであり、北1区としたあたりに井戸や土坑や溝が集中する。墓地については節を改めて述べる。

墓地と溝



第4-80図 16世紀第4四半期前半の遺構 (1/300)

溝

SD118 (第4-81図.付図8)

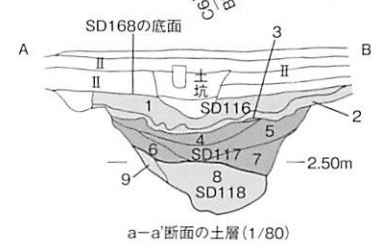
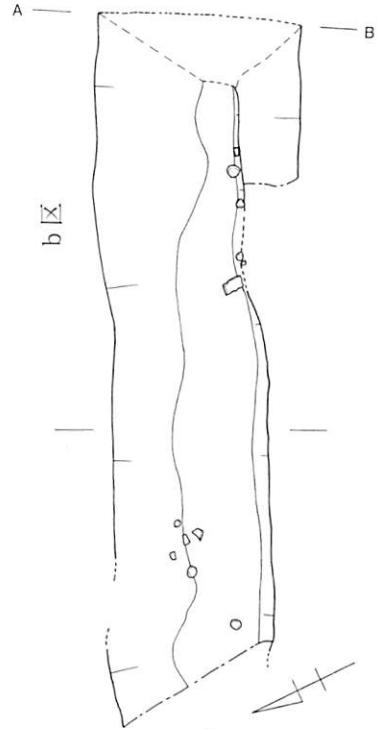
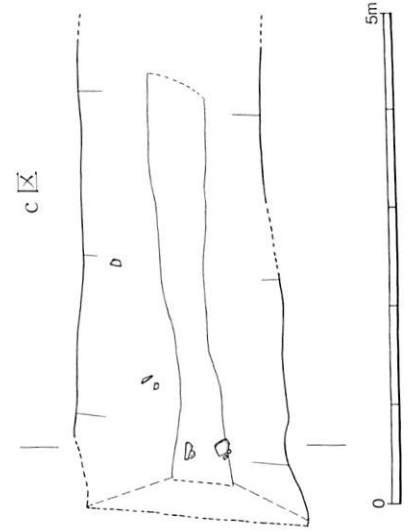
東西溝

南1区と南2区で検出した、東西にのびてSF151やSD165と並行する比較的規模の大きな溝である。II区南調査区に続く。長さ13m以上、幅2.1m、深さ1.3m。断面は場所によって違いがあるが基本的に逆台形となっている。15世紀の土坑SK302を切り、SD117に切られる。また直接の切合関係は確認できないが、道路状遺構SF151の路面を切っているものと推定される。

水路

内部には多量の礫が廃棄され、最下部はグライ化していた(8層)。底面標高はII区南調査区の東端で標高2.4m。西端で2.1mをはかり西のほうが低く、内部に水のたまった痕跡があるので、本来西の方向に排水する溝としてほられたものと推定される。道路状遺構SF151の第3道路面構築時に掘られた溝と推定される。b・c区にわけて掘下げた。遺物は水路として機能していた際に廃棄された遺物ばかりである。埋土はB7区東断面では50cm近い深さがあるにもかかわらず、黒紫色粘質土の単一層(8層)で、炭片円礫黄色土ブロックを含む水成層である。埋没した段階でSD117に掘りなおされている。斜めスリ目が入った近世1期の備前焼播鉢が出土していることと切合関係からみて16世紀第四半期前半の遺構と考えられる。

西に排水



- 1層: 暗灰茶褐色微砂質土(黄色粘土ブロック、炭焼土多い)
  - 2層: 明茶褐色粘土ブロック層(砂利多い)
  - 3層: 灰褐色微砂質土ブロック
  - 4層: 灰紫色粘質土(しまる、2~3cm大の円礫多い)
  - 5層: 暗紫色粘質土(灰色微砂ブロック、炭片多い)
  - 6層: 暗褐色粘質土(かたい)
  - 7層: 暗紫色粘質土(砂利多い)
  - 8層: 黒紫色粘質土(炭片、円礫、黄色土ブロック多い)
  - 9層: 7層と灰茶色微砂ブロックの混層
- SD116埋土 (人為的埋戻し)  
SD117埋土  
SD118埋土

第4-81図 SD118 (1/80)

SD118 出土遺物 (第4 - 82 図)

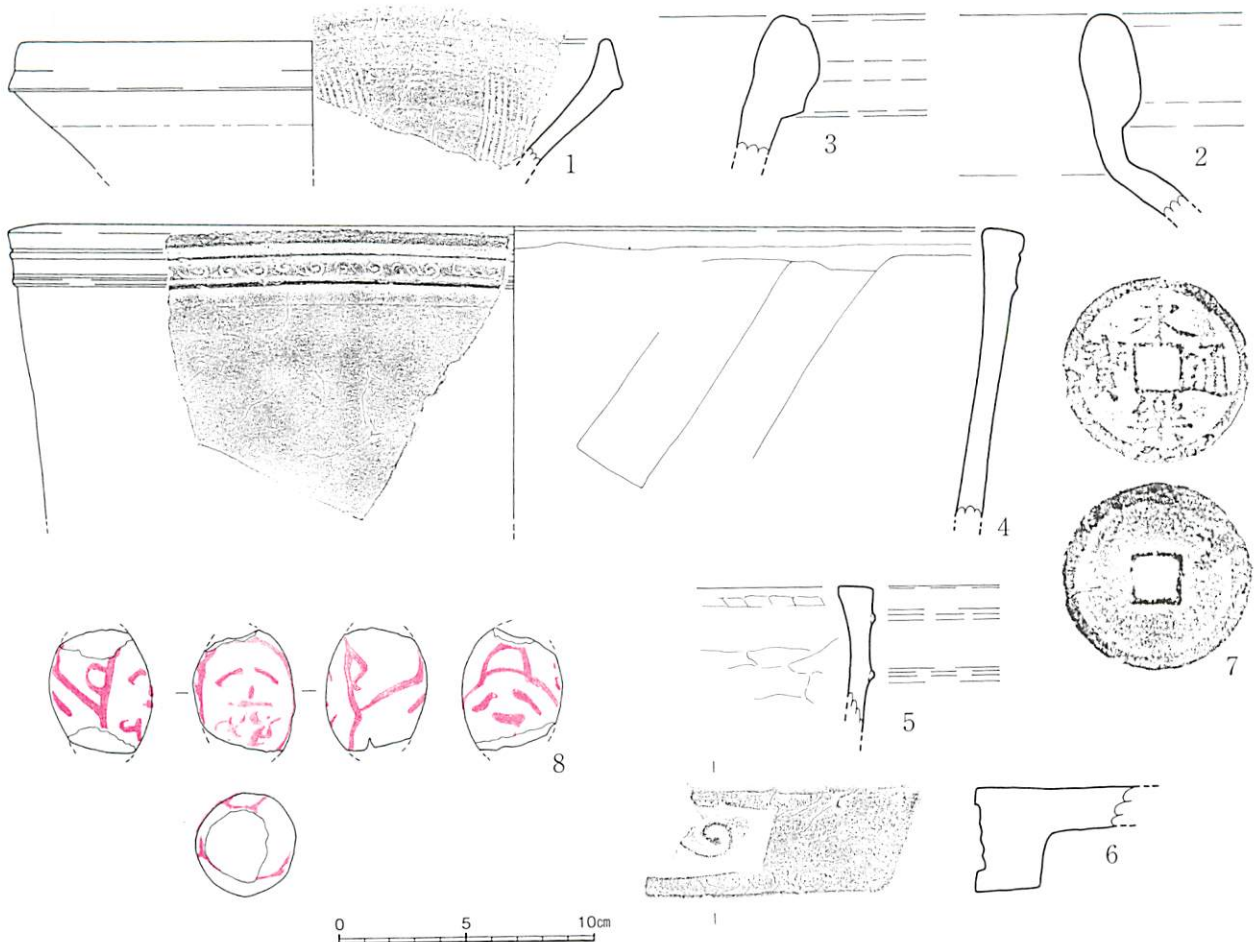
1 は中世 4 期 15 世紀後半の備前焼播鉢口縁片。2 は 15 世紀中世 4 または 5 期の備前焼甕口縁片。3 は 16 世紀中世 6 期の備前焼甕口縁。4 は双頭蕨手竜雲文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。5 も瓦質火鉢口縁片。6 は唐草文の軒平瓦の破片。7 は完形の中国銅銭の永樂通寶 (明初鑄 1408 年)。8 は C 区底部の泥層中出土の人物の頭部を朱で描画した円礫。

人面朱描礫

なお SK229、SD250 出土片と接合した瓦質火鉢 (接合資料 17) の破片が出土している。ほかに、SK261、SD292、SK262、SF151、SK262、SD250 出土破片と接合した中国製黒褐釉陶器の壺 (接合資料 19) の破片が出土している。さらに SF151、SD250、SK262 出土破片と接合した備前焼甕 (接合資料 35) の破片も出土している。

出土した動物骨には、松井章氏の鑑定によれば、牛の頭骨左側、牛の右中足骨が含まれる。

ほかに青花、斜めスリ目に入った近世 1 期の備前焼播鉢小片、京都系土師器 1 期の皿、瓦片、凝灰岩石片や、残留した須恵器甕の破片が出土している。



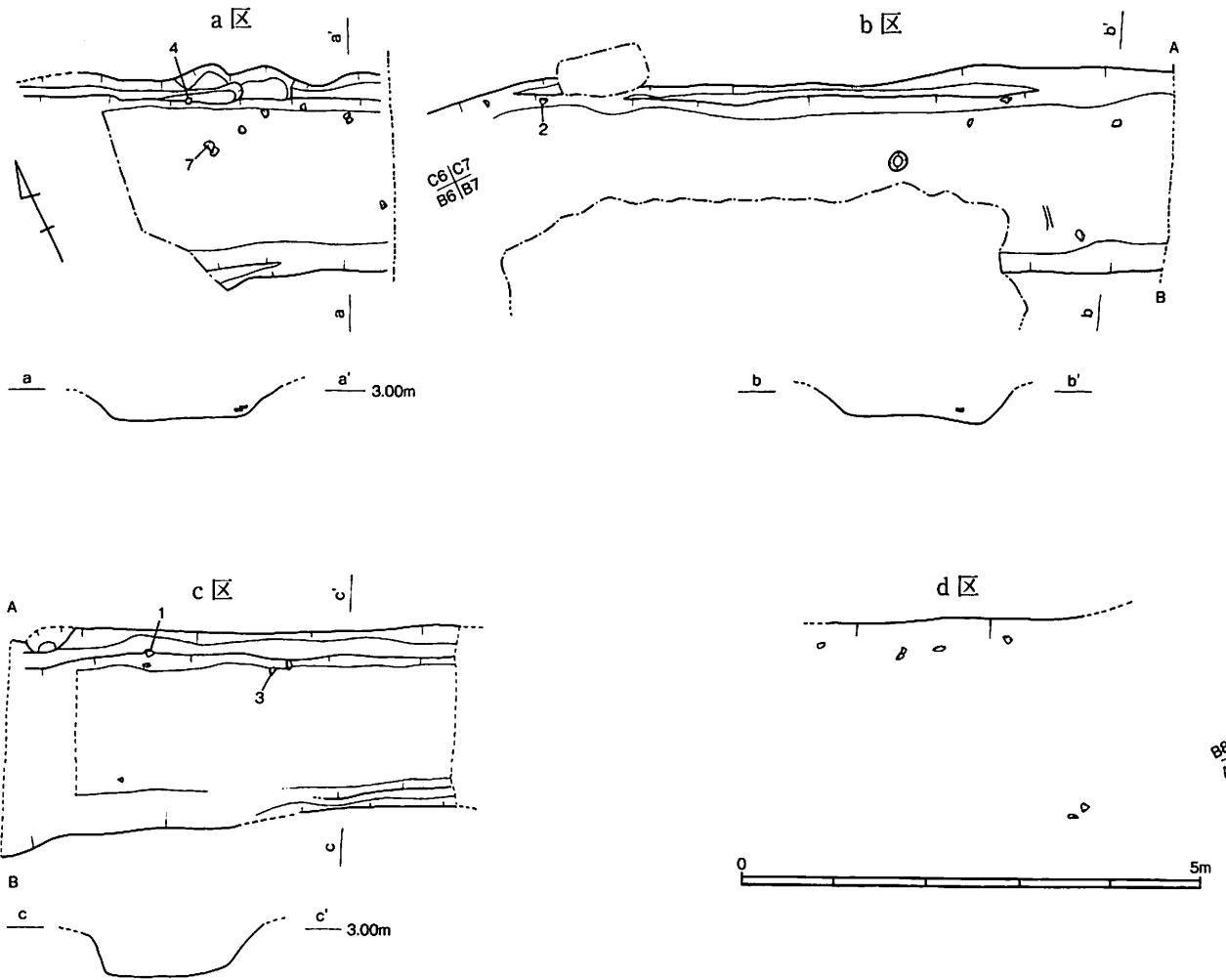
第4 - 82 図 SD118 出土遺物 (1/3、7=1/1)

SD117 (第4-83図.付図8)

東西溝

水路

溝SD118を掘り直した溝で、II区南調査区に続く。長さ32m以上、幅2.0m、深さ0.5m。底面の標高は調査区の東端で標高2.5m～2.7mである。断面は場所によって多少の違いがあるが逆台形となっている。16世紀第4四半期の溝SD118を切り、同じくSD116に切られる。これは当初SD118を掘った後、SD117、SD116に掘りなおされたことを示している。西からa～d区にわけて掘下げた。埋土中には凝灰岩礫が多く、完形品(6)をふくむ廃棄遺物が散在していた。埋土はおおよそ3層にわかれるが、急速に自然埋没していったような堆積状態である(第4-81図)。道路状遺構SF151の第2道路面構築時に掘られた16世紀第4四半期前半の遺構と推定される。

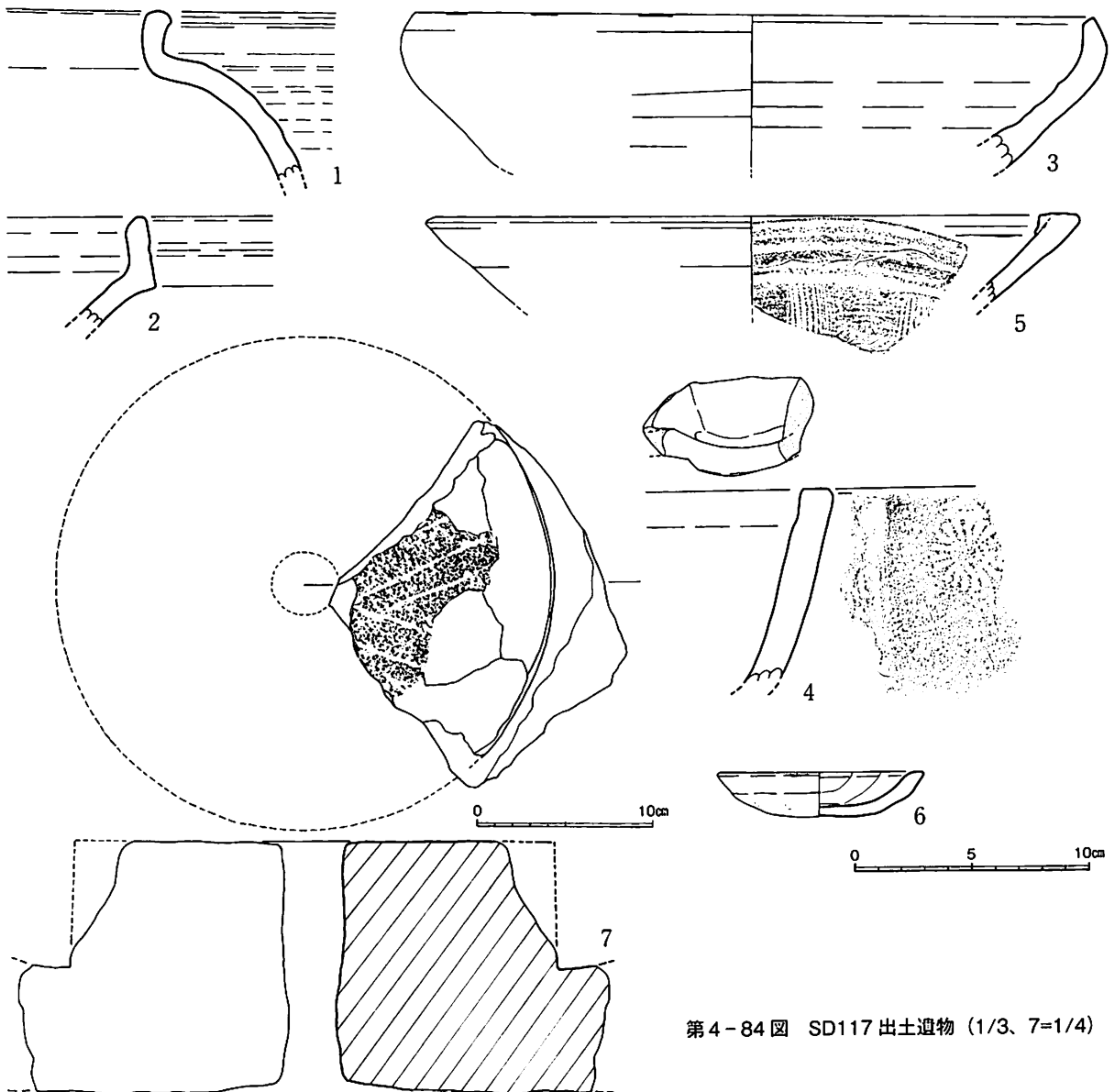


第4-83図 SD117 (1/80)

## SD117 出土遺物 (第4 - 84 図)

破片多い

1は16世紀中世6期の備前焼壺口縁片。2は16世紀前葉製作の中世6a期の備前焼播鉢の口縁片。3は備前焼の平鉢口縁片、茶陶である。4は菊花文の大型の刻印をほどこし、内側に向かって四方から押圧する瓦質火鉢の口縁片。5は口縁内面に端部を折り込む防長系の瓦質播鉢口縁片。6は口縁部に1箇所煤の付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の完形の小皿。横向きに出土した。7は安山岩製の茶臼の下臼片。磨り面の復元径は21.2cm、高さ10.8cm。ほかに備前焼甕、埴、軒丸瓦、平瓦などの破片が出土している。



第4-84図 SD117 出土遺物 (1/3、7=1/4)

東西溝

埋め戻し

御影石製茶臼

接合資料

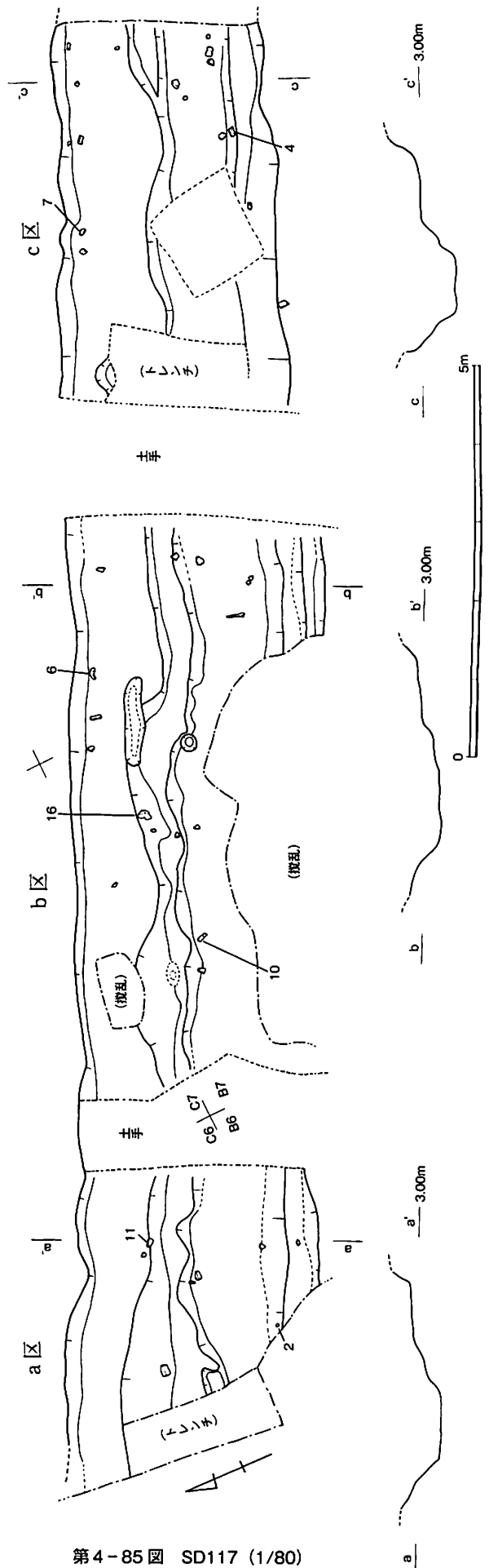
SD116 (第4 - 85 図 . 付図 8)

溝 SD117 を掘り直した溝である。II 区南調査区から続く長さ 18m 以上の溝を a ~ c 区に分けて調査した。幅 3.0 ~ 3.2m、深さ 0.6 ~ 0.8m。底面の標高は II 区南調査区の東端で標高 2.8m、西端で 2.7m をはかり、場所によって高低差がある。16 世紀第 4 四半期前半の溝 SD117 を切り、第 4 四半期後半の溝 SD168 に切られる。上層 (1 層) は黄色土ブロックで埋まり、人為的に埋め戻している。埋土中には凝灰岩礫が多く、廃棄遺物が散在していた。道路状遺構 SF151 の第 1 道路面構築時に掘られた 16 世紀第 4 四半期前半の遺構と推定される。

SD116 出土遺物 (第 4 - 86 図)

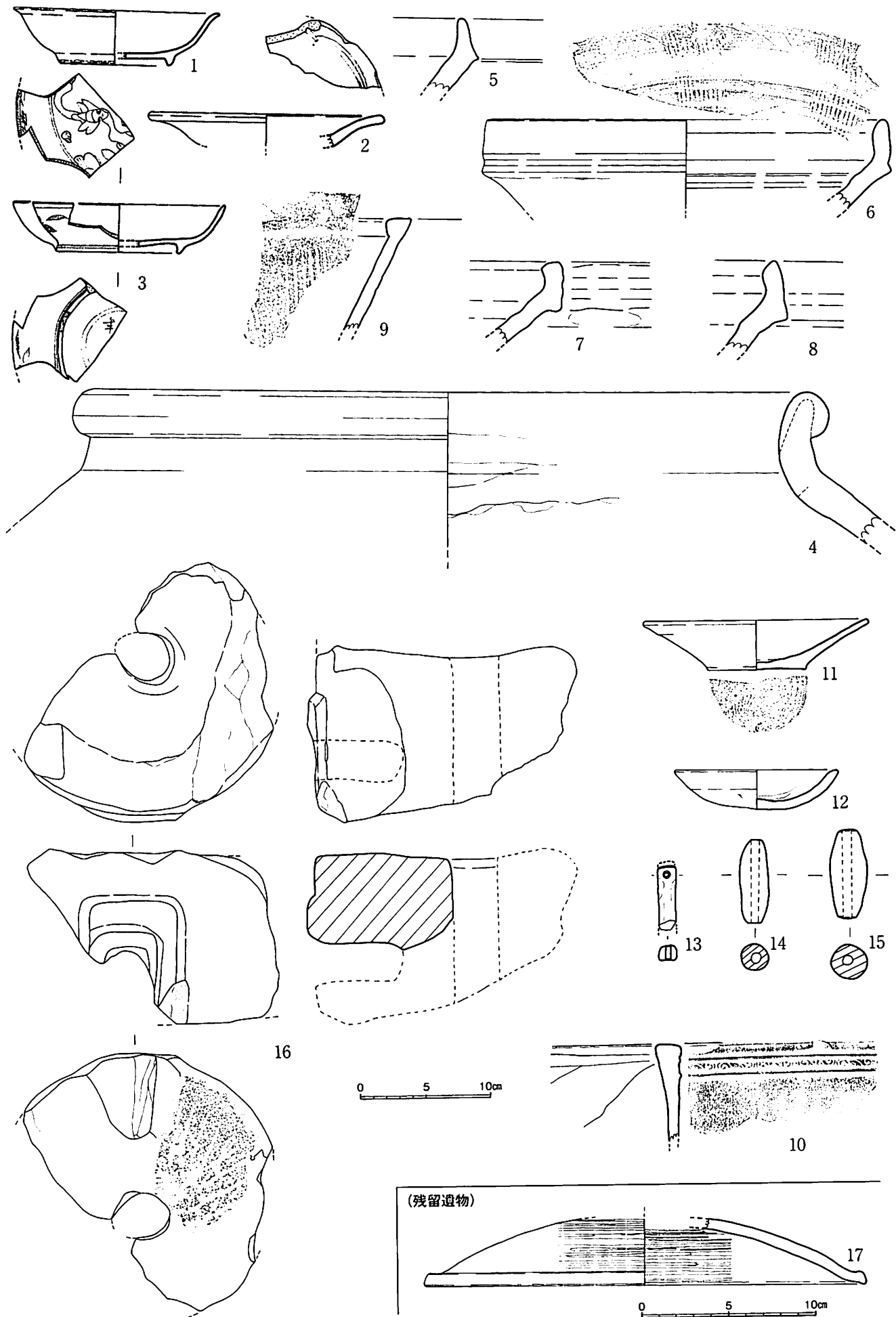
1 は 16 世紀の中国産白磁皿 E - 2 群。2 は中国龍泉窯系青磁皿で、15 世紀の稜花皿の口縁片。3 は 16 世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿 E 群。4 は中世 3 期 14 世紀の備前焼甕口縁。5 は中世 5 期 15 世紀後半の備前焼播鉢の口縁片。6 は 16 世紀前葉中世 6a 期の備前焼播鉢口縁片。7 と 8 は同じく中世 6a 期の備前焼播鉢口縁片。9 は内面を肥厚させる防長系の瓦質播鉢の口縁片。10 は双頭蕨手竜雲文の刻印をほどこす瓦質火鉢の口縁片。11 はロクロ目を丁寧にナデ消した底部糸切の土師器皿。12 は京都系土師器 2 期の小皿。13 は先端に穿孔のある棒状土錘の破片。14 と 15 は完形の管状土錘 A 類。16 は赤い粒子を含む御影産の花崗岩と推定される搬入の茶臼上臼片。さらに以下の接合資料が出土している。SD250 出土片と接合した備前焼甕底部片 (接合資料 33) と中世陶器甕胴部 (接合資料 30) の破片。SK264 出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢 (接合資料 18) の破片。SD131、SD250、SE148 出土片と接合した瓦質風炉 (接合資料 2) の破片。SD131、SD250、SE148 井筒内、SK262、SK263、SP214 出土片と接合した備前焼壺 (接合資料 4) の破片。SD131、SD250、SK231 出土片と接合した備前焼甕 (接合資料 14) の破片。

ほかに底部糸切の土師器、備前焼甕、瓦質鍋、瓦、動物骨の破片が出土している。残留遺物として 17 は 8 世紀の土師器坏蓋。ほかに古代土師器甌の破片が出土している。



第 4 - 85 図 SD117 (1/80)





第4-86図 SD116 出土遺物 (1/3、16=1/4)

## SD250 (第4 - 87図・付図8)

東西溝

水路ではない

SD165に重なる位置に掘られた東西に貫通する溝である。16世紀第4四半期後半の溝SD167の底面で検出した。第3四半期以前の溝SD165を切り、SD167とSD270に切られる。長さ50m以上、幅1.0～1.5m、深さ1mで、断面はV字溝、その底面は方形に突出している。底面の標高は東端で2.3m、西端で標高2.5mと、西のほうが高くなっている。それまで水路として機能していたSD165が自然地形にあわせて西に向って低くなるのとは逆である。ということは排水する機能を失った溝になっているわけである。したがってSD250は北側の区画と東西道路を区切る機能を重視したものともみられ、水路としての排水機能は道路南側の掘られたSD118に切り替えられたと考えられる。B10・B11区付近では溝の北の肩に五輪塔の部材を含む石材を並べて溝の北辺を補強している。そこは「中町」の町屋の側面に当たる。断面をみると一度掘り直された形跡があり、下層には水が溜まったような粘土層の堆積がある。道路状遺構SF151の道路面との対応関係をみると、SD250が埋没するまでに2面の硬化面があるので、SF151第3硬化面がSD270掘削時に舗装された道路面にあたり、第2硬化面はSD270が掘り直された際に舗装された道路面と考えられる。内部には礫が多く廃棄され、最上層に粘土ブロックが多いところから見ると、次のSD270に掘りなおされる際には上部を人為的に埋めたものと推定される。遺物の出土状態は、大量の瓦礫が廃棄されている。特に瓦や塼の破片が多く、この溝が機能していた第4四半期前半にかなり大規模な廃棄が繰り返されたと推定されるが、焼土や炭は少なく火災処理の廃棄は行われていない。切合関係から16世紀第4四半期前半と考えるられるが、中国景德鎮窯系青花皿F群も出現しており、第4四半期の後半に埋没したものと推定される。

瓦礫廃棄

埋め戻し

## SD250 出土遺物 (第4 - 88図①～⑨)

人形手青磁碗

青花

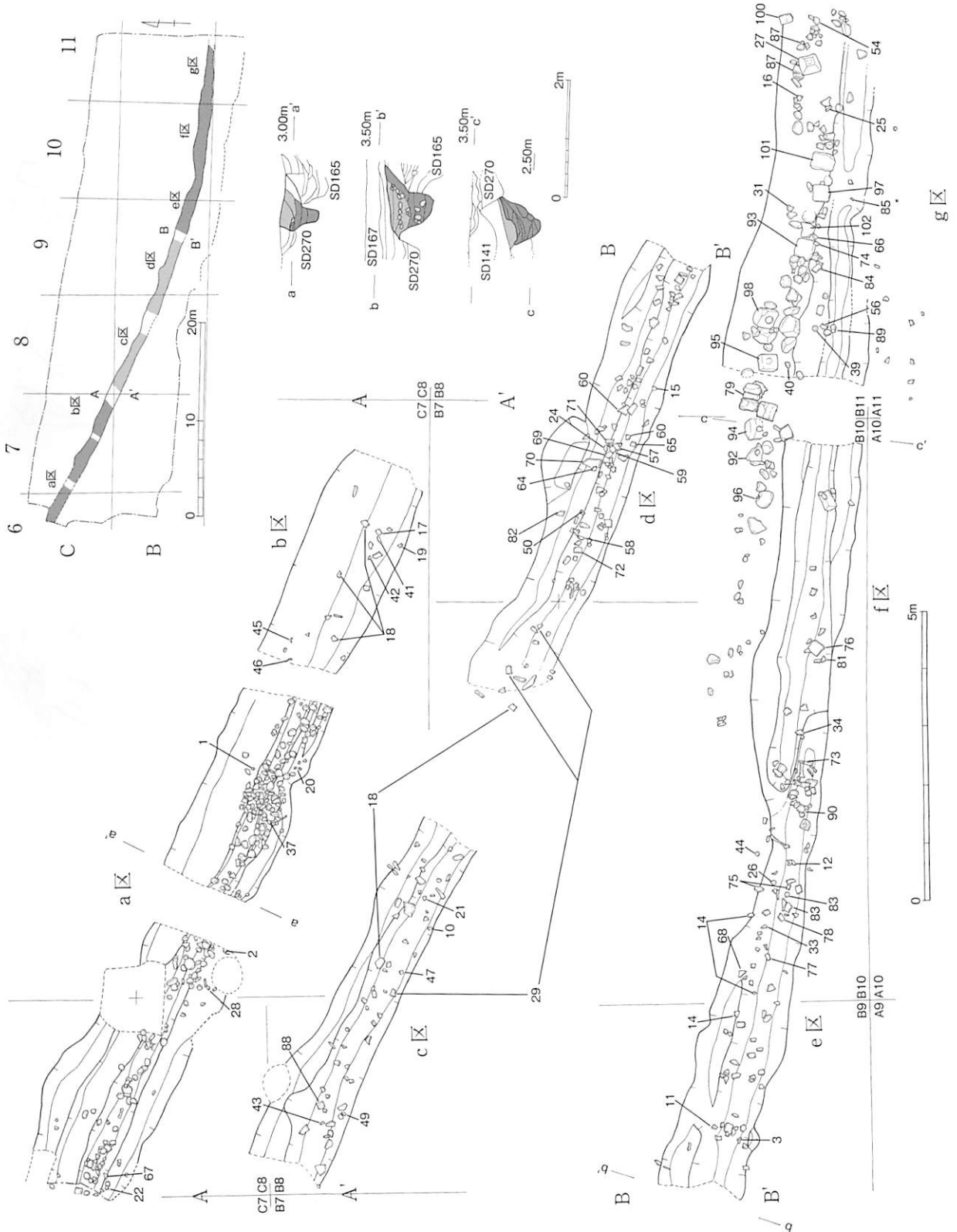
漳州窯

備前焼

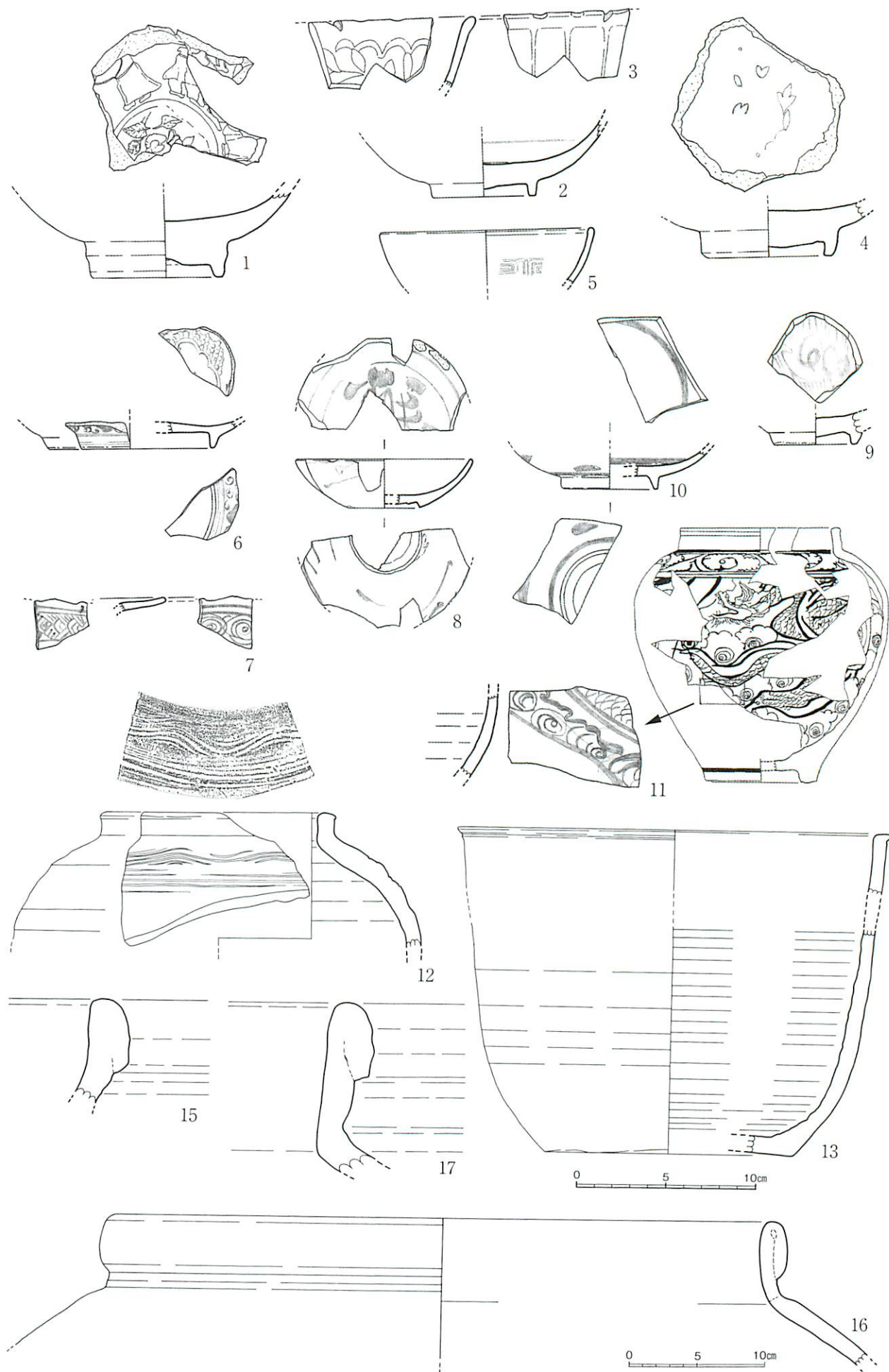
1世紀使用された甕

瓦質土器

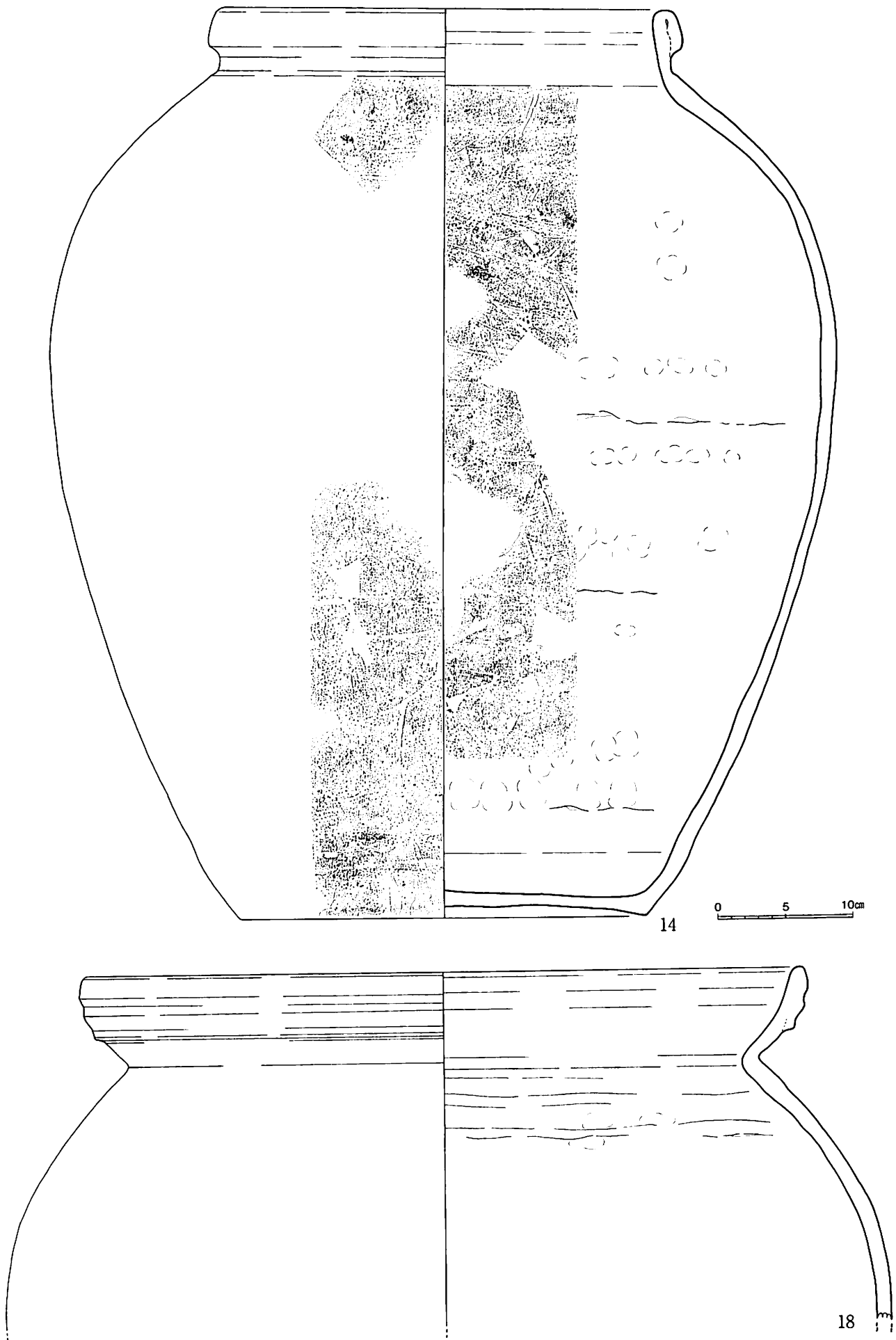
1はC7区出土の中国龍泉窯系人形手青磁碗の底部片。2は同じくC7区出土の15世紀の中国龍泉窯系青磁碗底部片。3はB9区出土の内面に文様を持ち、口縁に浅い刻みを入れる中国龍泉窯系青磁碗D類の口縁片。4はB11区出土の中国龍泉窯系青磁碗の底部片。5はe区出土の内面に雷文帯をもつ中国龍泉窯系青磁碗の口縁片。6はd区出土の外面に密な唐草を配する15世紀後半から16世紀前半の中国景德鎮窯系青花皿B1群の底部片。7はb区出土の16世紀末の中国景德鎮窯系青花皿F群の口縁片。8はg区出土の景德鎮青花皿C群を模倣した碁笥底の中国漳州窯系青花碗。9はB10区出土の中国漳州窯系青花碗の底部片。10はSK156出土片と接合した中国漳州窯系青花碗の底部片(接合資料36)。11はB9区出土の13～14世紀中国磁州窯系陶器の白地鉄絵褐釉龍鳳文壺胴部片。12はB10区出土の肩部に櫛描の波状文をめぐらす備前焼壺片。13はB10区で出土し、10次II区南のSD118やSK252、SK261出土片と接合した備前焼の鉢(接合資料16)。14はB10区出土の中世5期15世紀後半の備前焼甕。SD118、SF151、SK262ほかに10次II区南の遺構と接合した。(接合資料35)。16世紀第4四半期に廃棄されているので、約1世紀間使用されていたものと推定される。15はB9区出土の中世6a期16世紀前葉の備前焼甕口縁片。16はB11区出土の中世6期の備前焼甕口縁片。17はB7区出土の16世紀中葉中世6b期の備前焼甕口縁片。18はB7・8区出土の16世紀後葉近世1期の備前焼甕上半。19はC7区出土の16世紀後葉近世1期の備前焼甕口縁片。20はC7区出土の中世3ないし4期14世紀の備前焼播鉢の口縁片。21はB8区出土の中世4b～5a期15世紀前半の備前焼播鉢口縁片。22はC6区出土の中世5b期15世紀末製作の備前焼播鉢口縁片。23はC7区出土の中世6期の備前焼播鉢口縁片。24はB10区出土の斜めスリ目を施す近世1a期の備前焼播鉢。25はB11区出土の近世1a期の備前焼播鉢。26はB10区出土の中世須恵器の鉢口縁片。27はB11区出土の多条沈線を施す瓦質火鉢で、獸脚には縦に貫通する穿孔がある。28はC7区出土の多条沈線を施す瓦質火鉢の胴部片。29はB8区出土のSE148井筒内とSK262出土片と接合した浅いタイプの瓦質火鉢(接合資料6)。30はB7区出土の口縁が丸い瓦質火鉢口縁片。31はB11区出土の瓦質火鉢底部。32は瓦質鉢の口縁片。33は外面にケ



第4-87図 SD250 (1/100)



第4-88 図① SD250 出土遺物 (1/3、16=1/4)



第4-88 図② SD250 出土遺物 (1/4)

土師器

ズリのある瓦質鉢口縁。34はB10区出土で、10次調査II区南のSD116、S104、S124出土片と接合した瓦質鉢（接合資料1）。35は口縁が内側に屈折し、多重菱形文の刻印をもつ方形の瓦質火鉢口縁片。36はB8区出土の瓦質火鉢の立体的な表現の獣脚。37はC7区出土の土師質鍋の口縁部、胎土に石英粒子を多く含むので海部郡産と見られる。38はB11区出土の胎土に金雲母を含む完形の底部糸切の土師器坏、口縁に2箇所打ち欠きがあり。15世紀後半の河野分類A類にあたる。39はB11区出土の口縁に3箇所の打ち欠きがある完形の底部糸切の土師器小皿、河野分類A類にあたる。40はB11区出土のロクロ目土師器皿の底部片。41はB7区出土のロクロ目土師器皿の口縁片。42はB7区出土の灯明皿として使用された京都系土師器1期の小ぶりな浅い皿の口縁片。43はB8区出土の灯明皿として使用された京都系土師器1期の小皿口縁片、口縁に2箇所打ち欠きがある。44はB10区出土の灯明皿として使用された京都系土師器1期の小皿の完形品。45と46はB7区出土の京都系土師器2期の皿口縁片。47はB8区出土の京都系土師器2期の皿口縁片。48はB7区出土の京都系土師器2期の小皿口縁片。49はB8区出土の京都系土師器2期の小皿片。50はB9区出土の京都系土師器3期の坏口縁片。51はB10区出土の底部糸切で器高の低い15世紀の土師器燭台5類。52はB11区出土の土師器燭台A2類。53はB11区出土の軒丸瓦片。54はB11区出土の煤が付着した平瓦片。55はB9区出土の厚手の埴片。56・74はB11区出土の埴片。57～61・69・70・72はB9区出土の埴片。以上の埴はコビキ痕のあとナデ調整。62はB8区出土の埴片。63～66・84はB11区出土の胎土に石英を含む海部郡産の埴片。67はC6区出土の埴片。68・73・75・77～81はB10区出土の埴片。71・82はB9区出土の胎土に石英を含む海部郡産の埴片。76・83はB10区出土の胎土に石英を含む海部郡産の埴片。85はB11区出土の端部をヘラ調整する管状土錘A類の完形品。86はB7区出土の中国銅銭の破片で篆書体の「通」のみ読める。87はB11区出土の和泉砂岩製石臼の上臼片。88はB8区出土の安山岩製の石臼上臼片。89はB11区出土の安山岩質凝灰岩製の宝塔あるいは宝篋印塔の層輪。90はB10区出土の凝灰岩製の五輪塔空風輪。91はB11区出土の石材に再加工された凝灰岩製の五輪塔の火輪。92はB10区出土の石材に再加工された凝灰岩製の五輪塔の火輪。93はB11区出土の凝灰岩製の五輪塔火輪。94はB10区出土のやや硬質の安山岩質凝灰岩製の五輪塔火輪。95はB11区出土の硬質凝灰岩製の五輪塔火輪。96はB10区出土の硬質凝灰岩製の五輪塔水輪、上下を再加工している。97は凝灰岩製の五輪塔の地輪残欠。98はB11区出土の凝灰岩製の五輪塔地輪。99はB10区出土の空風輪を欠いた硬質凝灰岩製の一石五輪塔。100はB11区出土の凝灰岩製の石材。101はB10区出土の加工した凝灰岩石材。102は凝灰岩製の石材。

燭台

瓦類

土錘

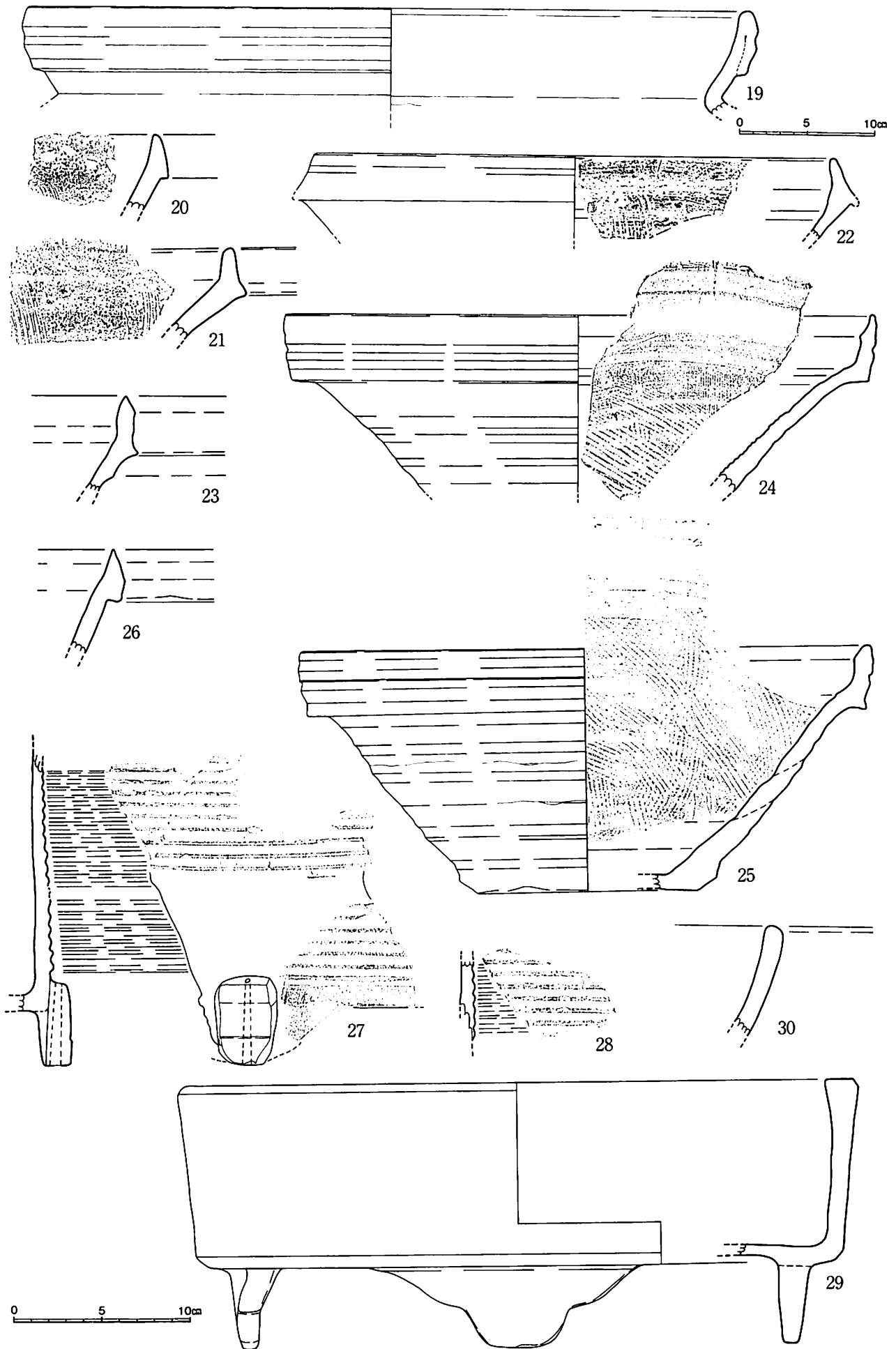
石臼

転用石材

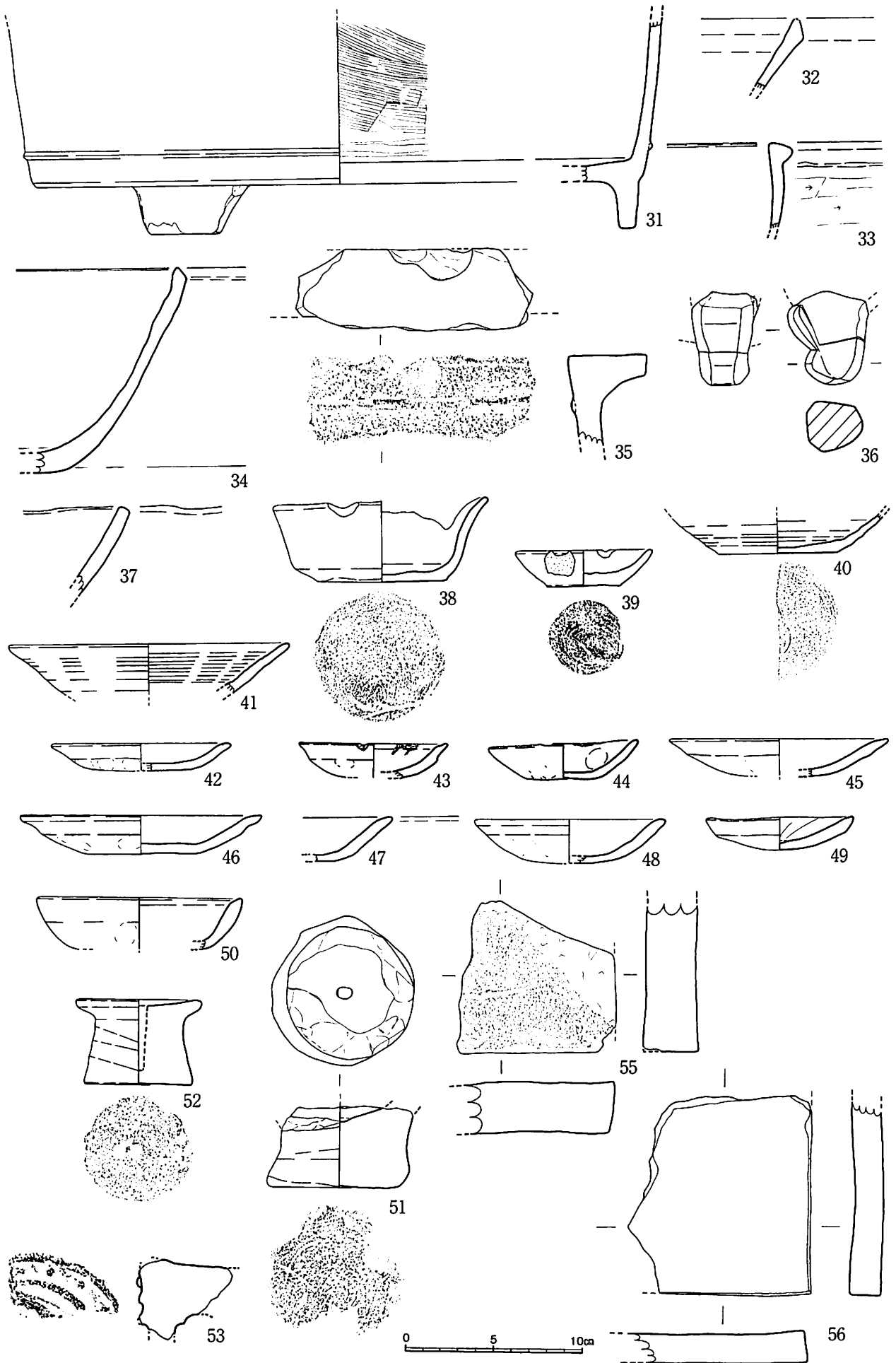
接合資料

動物骨

なお以下の接合資料破片が出土している。SD116、SD131、SE148出土片と接合した瓦質風炉（接合資料2）の破片。SK261出土片と接合した備前焼壺口縁（接合資料3）の破片。SD116、SD131、SE148井筒内、SK262、SK263、SP214出土片と接合した備前焼壺（接合資料4）の破片。SK261、SK262出土破片と接合した備前焼広口壺（接合資料7）の破片。SD292出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢C類（接合資料8）の破片。SD116、SD131、SK231出土片と接合した備前焼壺（接合資料14）の破片。SD118、SK229出土片と接合した瓦質火鉢（接合資料17）の破片。SD118、SD292、SF151、SK261、SK262の各遺構出土片と接合した中国産黒褐釉陶器壺（接合資料19）の破片。SD292、SE148井筒内、SK261出土片と接合した信楽焼陶器壺（接合資料22）の破片。SK261、SK262出土破片と接合した備前焼甕下部（接合資料26）の破片。SK231、SK236、SK269、2号墓（ST135）出土破片と接合した中国産黒褐釉陶器の壺（接合資料28）破片。SK262出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料32）の破片。SD116出土片と接合した備前焼甕底部（接合資料33）の破片。SK262出土片と接合した埴（接合資料38）の破片。動物骨として牛上顎臼歯。牛の臼歯。C区上層から馬の切歯などが出土している。ほかに中国黒褐釉陶器壺、土師器甕、丸瓦、棧瓦、加工痕のある凝灰岩の破片が出土している。

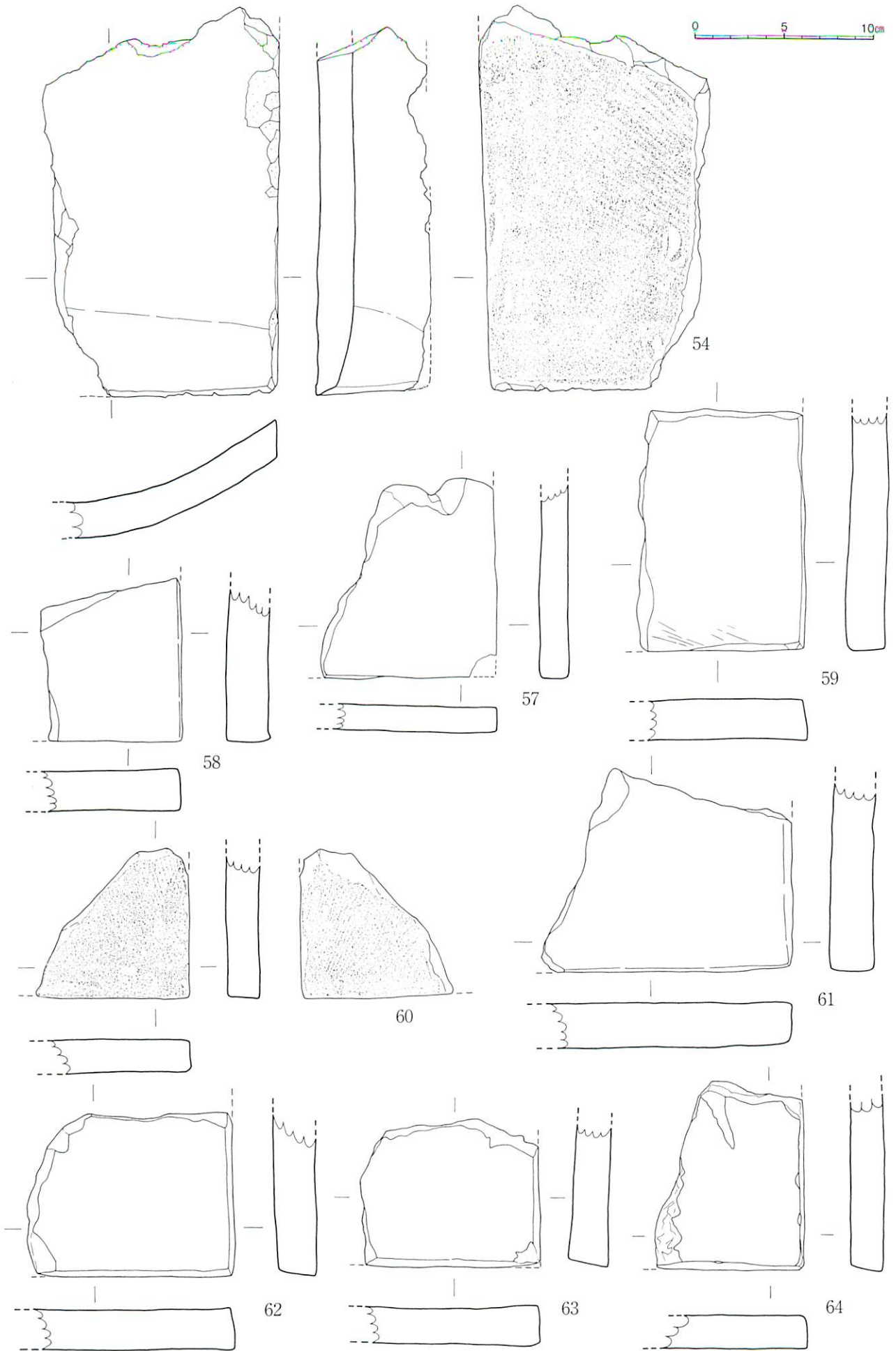


第4-88 図③ SD250 出土遺物 (1/3、19=1/4)

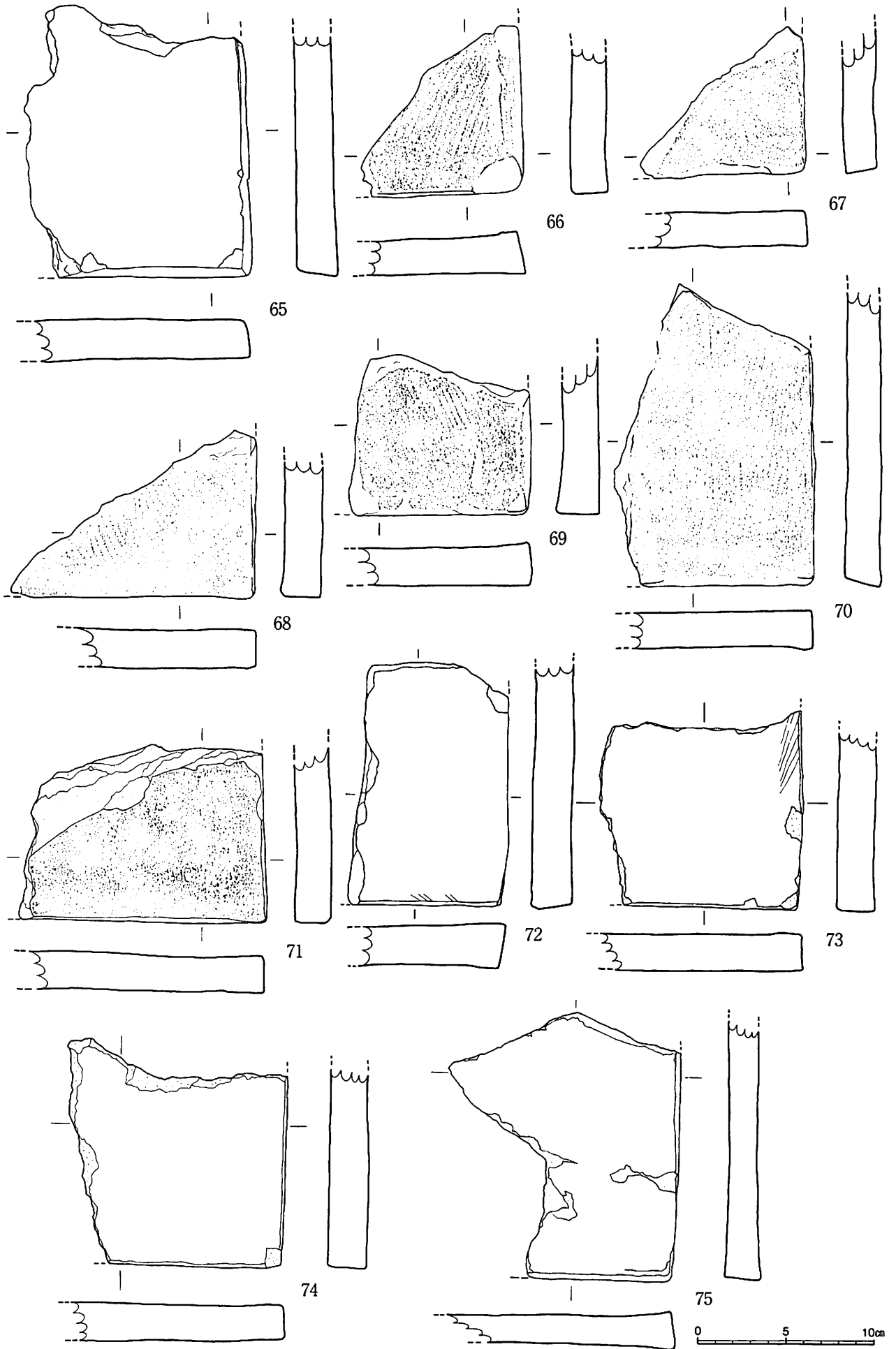


第4-88 図④ SD250 出土遺物 (1/3)

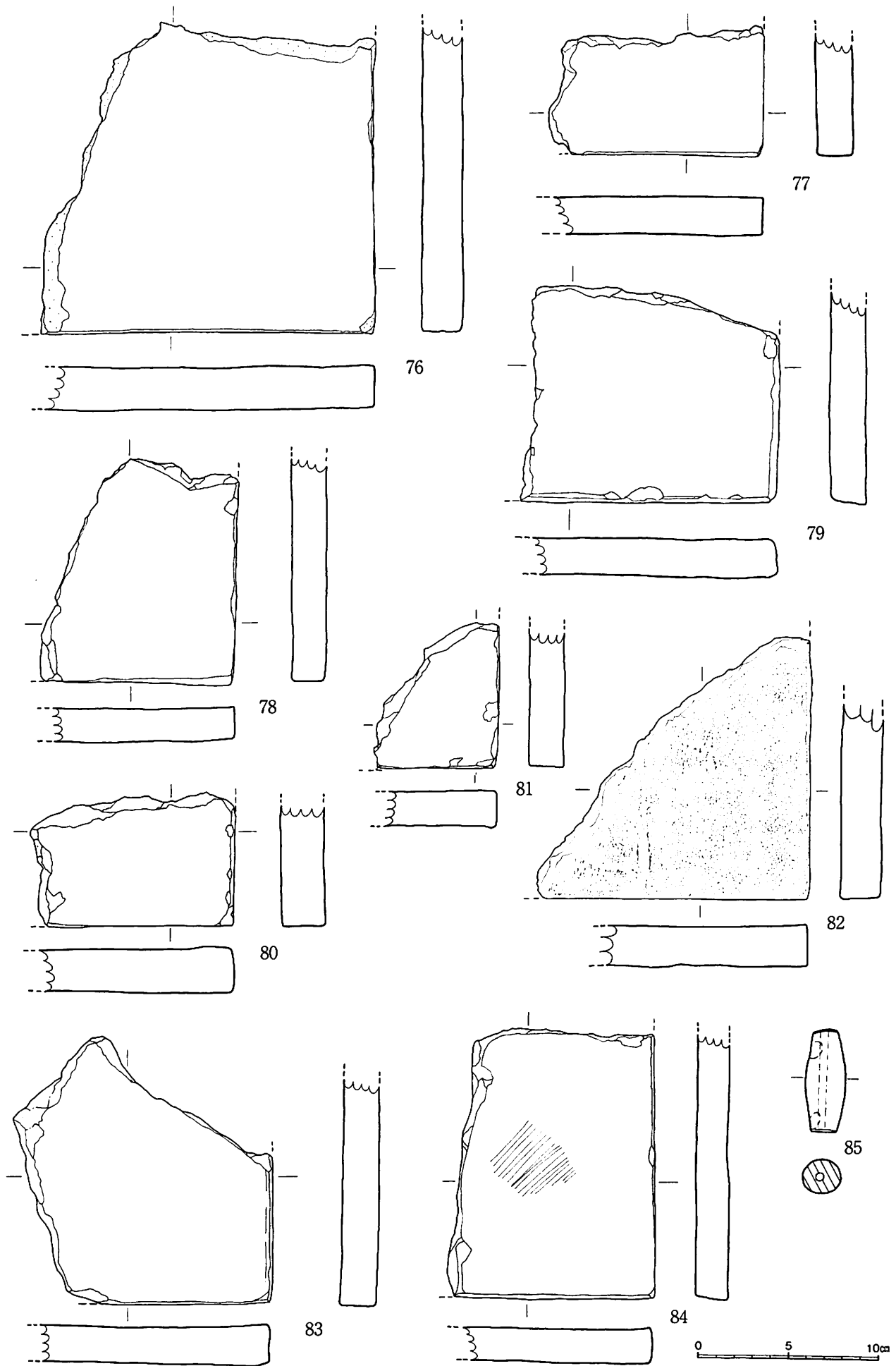




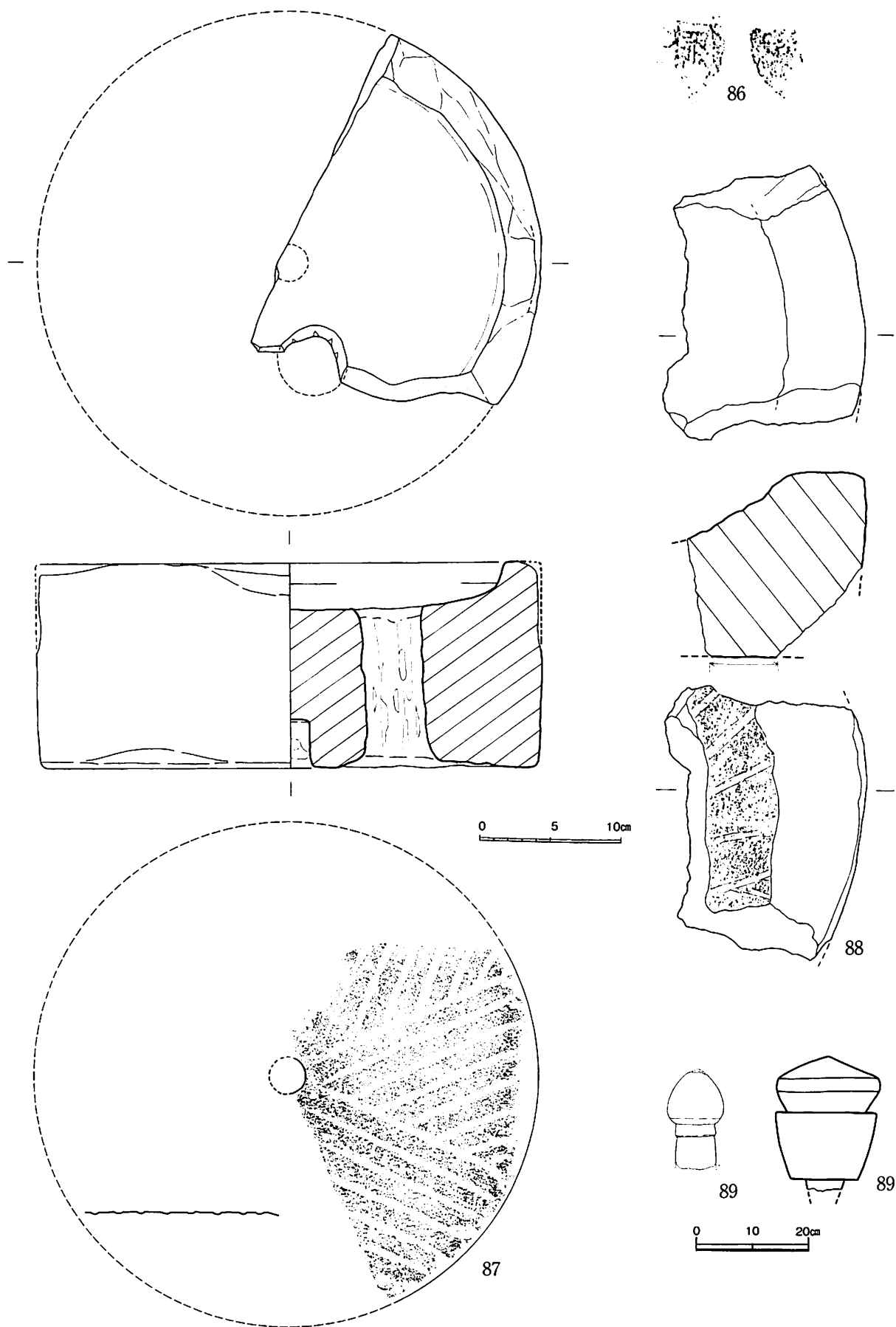
第4-88图⑤ SD250出土遺物 (1/3)



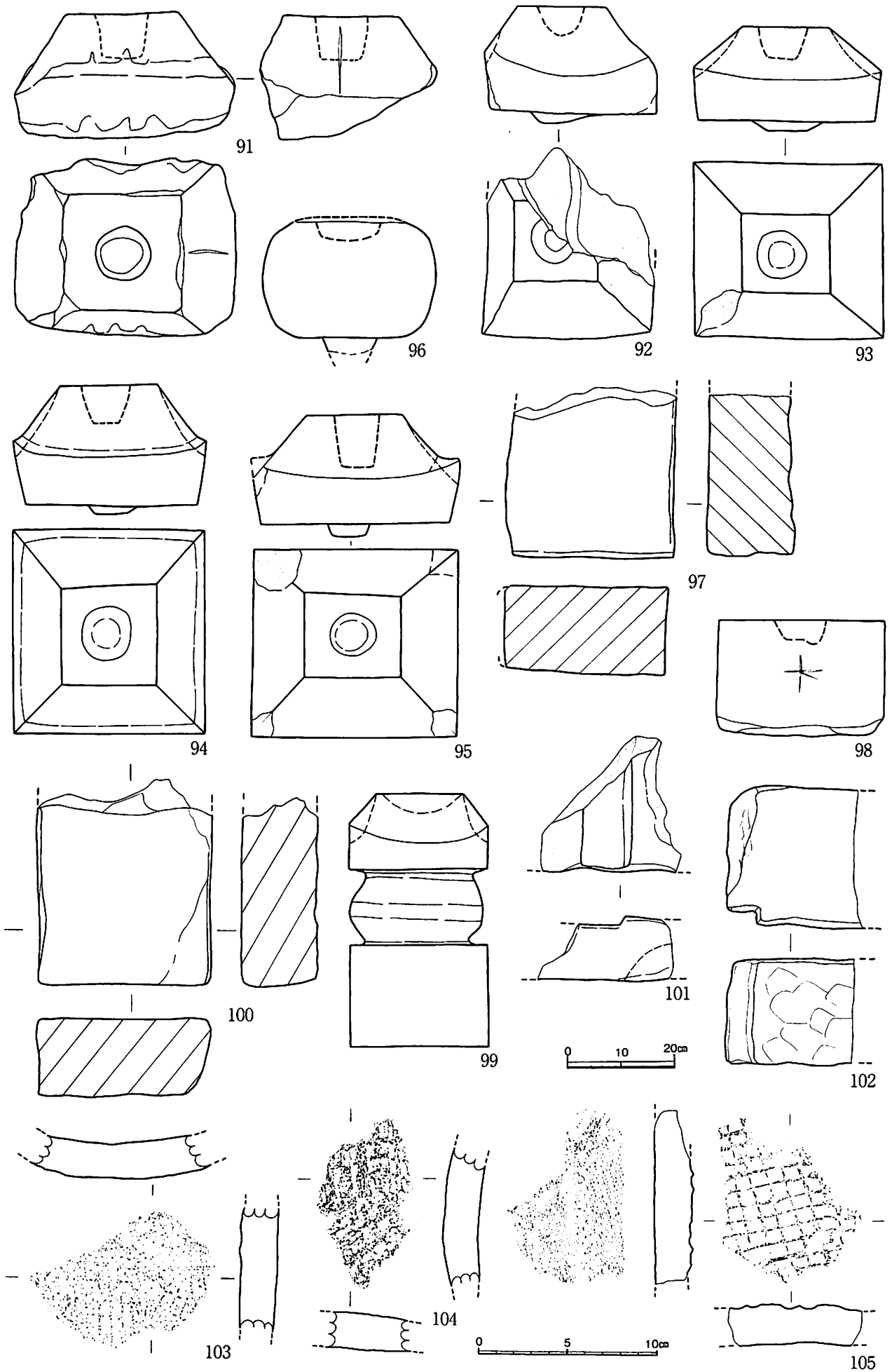
第4-88図⑥ SD250出土遺物 (1/3)



第4-88図⑦ SD250出土遺物(1/3)



第4-88 図㊸ SD250 出土遺物 (86=1/1、87・88=1/4、89・90=1/10)



第4-88图⑨ SD250 出土遺物 (91~102=1/10、103~105=1/3)

残留遺物。103と104はB9区とB8区出土の内面ナデ、外面格子タタキを施す古代の平瓦。105はC7区出土の内面布目、外面格子タタキの古代平瓦。ほかにSD116出土片と接合した須恵器甕胴部（接合資料30）の破片が出土している。

SD270（第4 - 89図、付図8）

東西溝 SD250に重なる位置に掘られた東西に貫通する溝である。SD250と同じくSD167の底面で検出した。16世紀第4四半期前半の溝SD250を切り、第4四半期後半の溝SD141とSD167に切られる。長さ44m以上、幅0.5～1m、深さ0.5mで、断面はV字溝、その底面は円形である。SD270とはほぼ同じ形態である。底面の標高は東端で3.0m、西端で標高2.9mだが、中央部で2.7mと低くなっている。SD250と同様な掘り方で、決まった方向に水を流すようには掘られていない。SD250を引き継いで北側の区画と東西道路を区切る機能を重視したものとみられる。下層には場所によっては水が溜まったような粘土層の堆積がある。道路状遺構SF151の道路面との対応関係をみると、SF151第1硬化面がSD250掘削時に舗装された道路面で、第1硬化面使用中に埋め戻されて、SD167に置き換わると推定される。内部には道路の積土から落下した小礫が多くふくまれ、最上層に粘土ブロックが多いところから見ると、次のSD167を構築する際に上部を人為的に埋めたものと推定される。遺物の出土状態は、小破片が散在する状態でSD250に比べると極めて少ない。焼土や炭は少なく火災処理の廃棄は行われていない。近世1期の備前焼や京都系土師器3期の皿が多いことと切合関係から、掘削されたのは16世紀第4四半期前半と考えられ、SD167構築で埋められるのは10の唐津碗から第4四半期後半に下るものと考えられる。

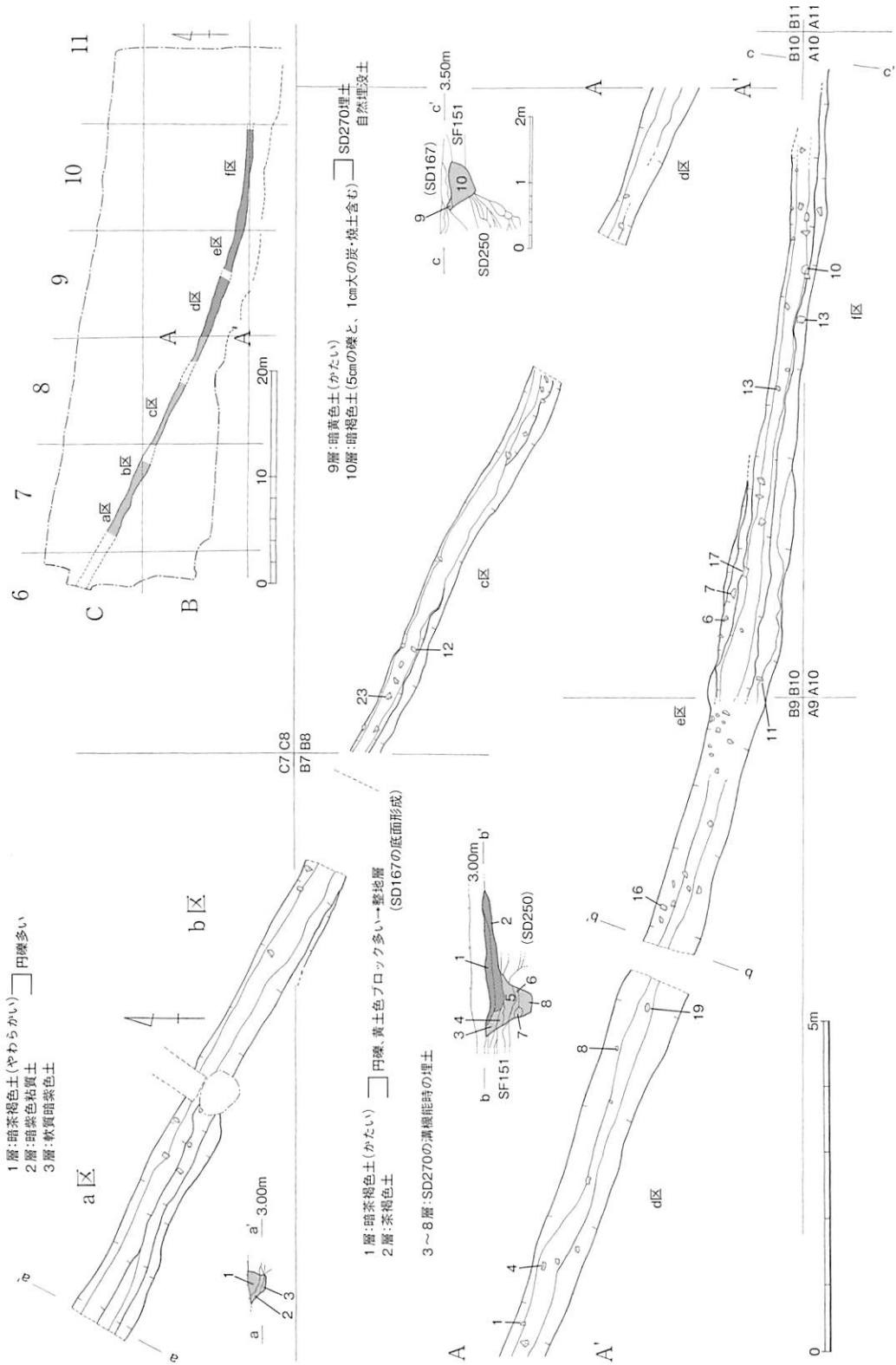
また内部から8世紀の須恵器円面硯の破片が出土していることも注目される。

SD270 出土遺物（第4 - 90図）

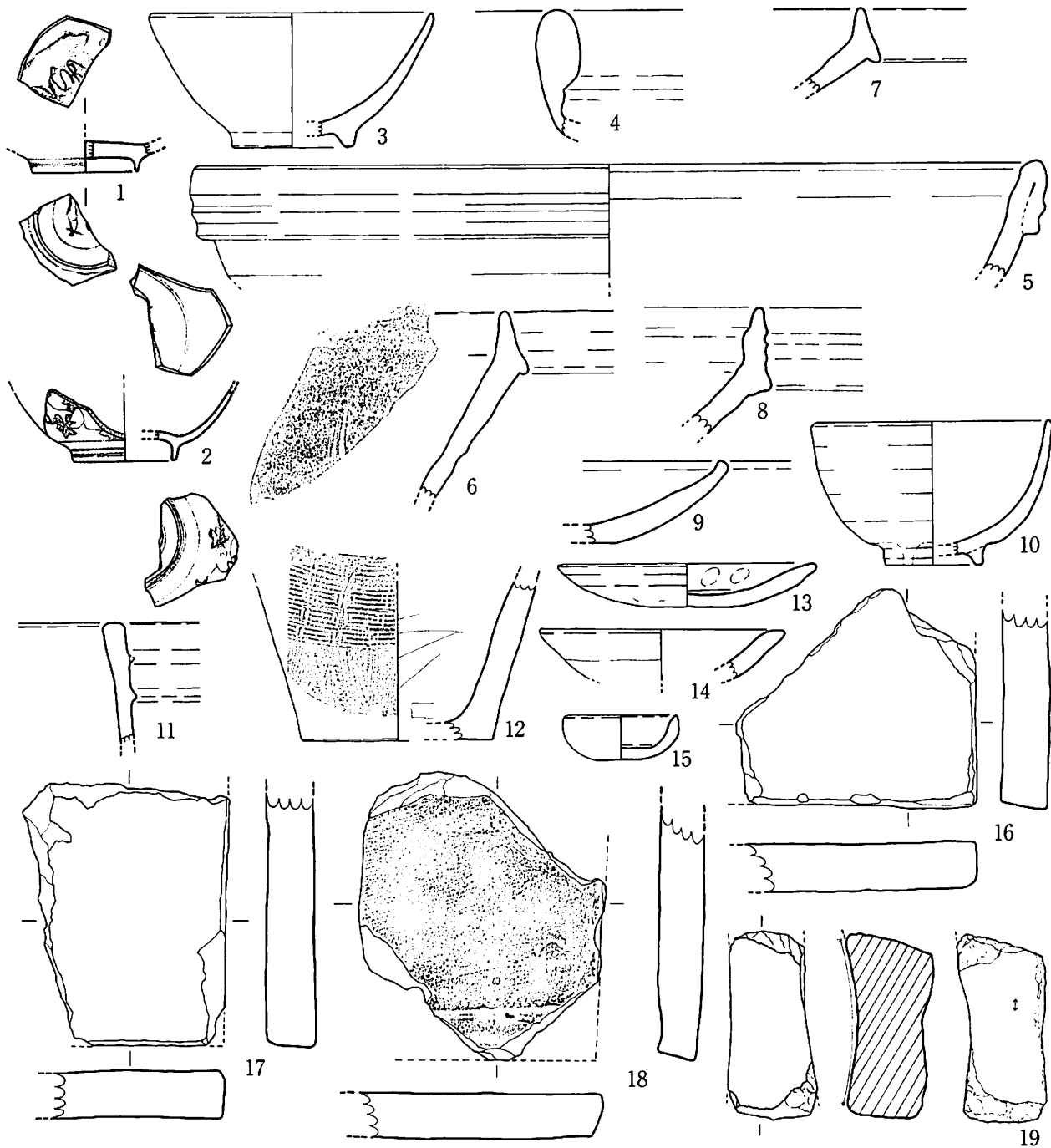
1と2は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群の饅頭心碗底部。3はSF151上層出土片と接合した朝鮮王朝産陶器碗。4は中世5期15世紀後半の備前焼甕口縁片。5は16世紀第4四半期にあたる近世1期の備前焼甕口縁片。6と7は中世4b期15世紀中ごろの備前焼播鉢口縁片。8は16世紀末近世1b期の備前焼播鉢口縁片。9は備前焼茶陶の浅鉢口縁片。10は1590～1610年製の唐津焼陶器碗。比較的上層から出土しているので、SD167構築時の直前に廃棄された遺物と推定される。11は瓦質火鉢の口縁片。12は胴部外面に雷文などの刻印で埋めた瓦質の壺か、刻印の中には双頭蕨手竜雲文があるので、在地の瓦質土器製作者の手になるものである。13と14は京都系土師器3期の皿口縁片。15は京都系土師器3期の最小の小皿。16は胎土に大型石英粒子を多量に含む海部郡産の埴の破片。17と18も埴で、18はカキ目を施す。19は完形の砥石。なお、SK262出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料31）の破片も出土している。動物骨。B7区から牛の上顎臼歯。B8区からウシ第3大臼歯。B8区からウマ上右臼歯。B9区からウマ臼歯2片が出土している。ほかに青磁、備前焼壺、海部郡産の平瓦、内面布目の丸瓦、鉄器の破片が出土している。

円面硯 残留遺物。20は7世紀前半のTK209型式の須恵器坏蓋片。21は8世紀の須恵器円面硯の破片である。22は古代の土師器である企救型甕の口縁片。23と24は内面布目外面格子タタキの古代の平瓦片。ほかに古代土師器碗底部・高坏の破片が出土している。

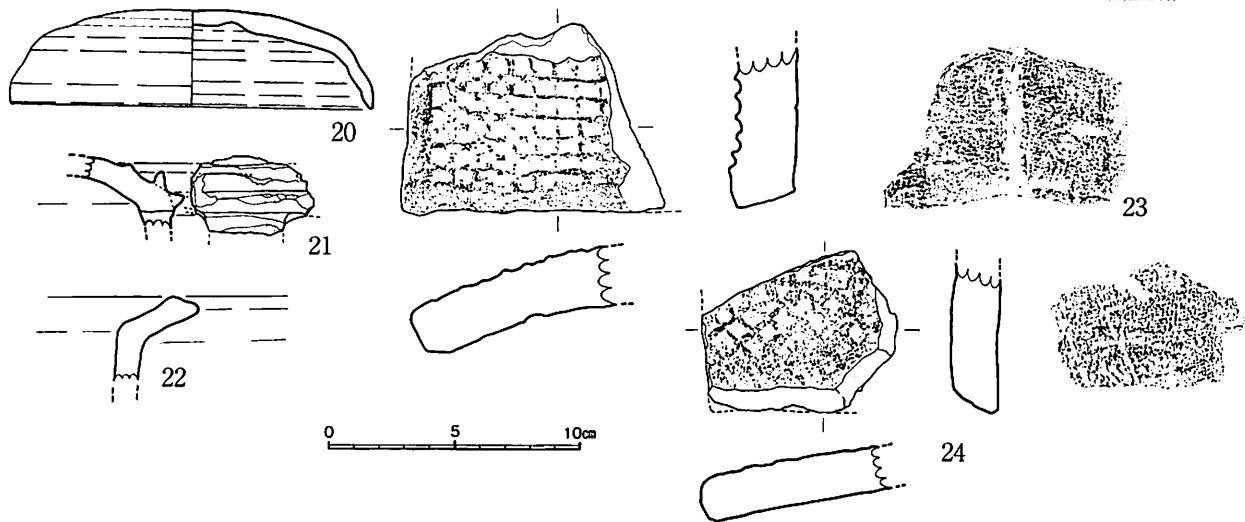
古代瓦



第4-89図 S-270 (1/100)



(残留遺物)



第4-90図 SK270 出土遺物 (1/3)



SD131 (第4 - 91 図)

屈折する溝

C8・C9区(北1区・北2区)で検出された溝で、東端で円弧を描いて北向きに屈折して終わる。長さ12.6m、幅1.0m、深さ0.2~0.5mで断面は半円形から逆台形で一定しない。東端の屈折部分は掘形を検出できず、埋没した礫の分布から推定した。底面の高さは3.2~3.3mで一定しており、片方に低く流れるという傾向はないので、本来水を流すことを目的に掘削した溝ではない。15世紀後葉の土坑SK256、16世紀第4四半期前半の土坑SK252とSK269を切る。埋土は暗茶褐色土から明褐色土(黄色土ブロックと炭含む)の単一層で、内部には凝灰岩礫が集中する。とくに溝の両端では礫の集中がはげしく、出土遺物も多くがその礫群の中に入っている。遺物はいずれも破片で散在しており、礫が多い部分は埋没時の瓦礫を廃棄したものと推定される。溝は水路等の排水施設ではなく、区画の溝として掘られたものである。南側に第4四半期前半の墓地第3期の埋葬が行われているので、墓地とその内部を区画する溝と考えられる。墓地との関係から16世紀第4四半期前半に掘削され、切合関係や出土遺物から第4四半期後半まで存続したと想定され、最後は瓦礫を廃棄して埋没している。

区画溝

墓地を区画

瓦礫廃棄

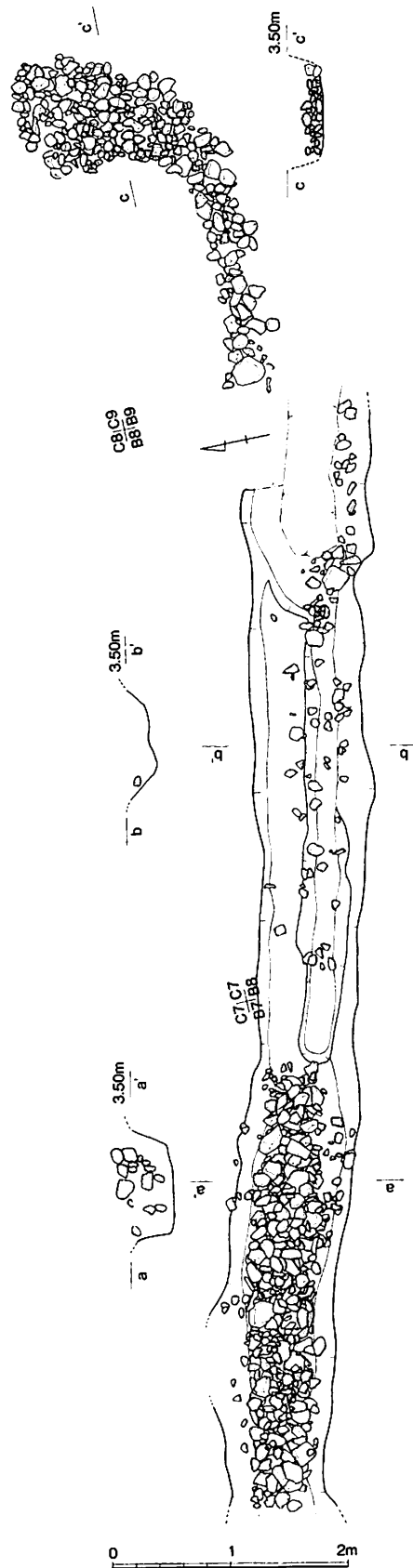
SD131 出土遺物 (第4 - 92 図①②)

中国陶器

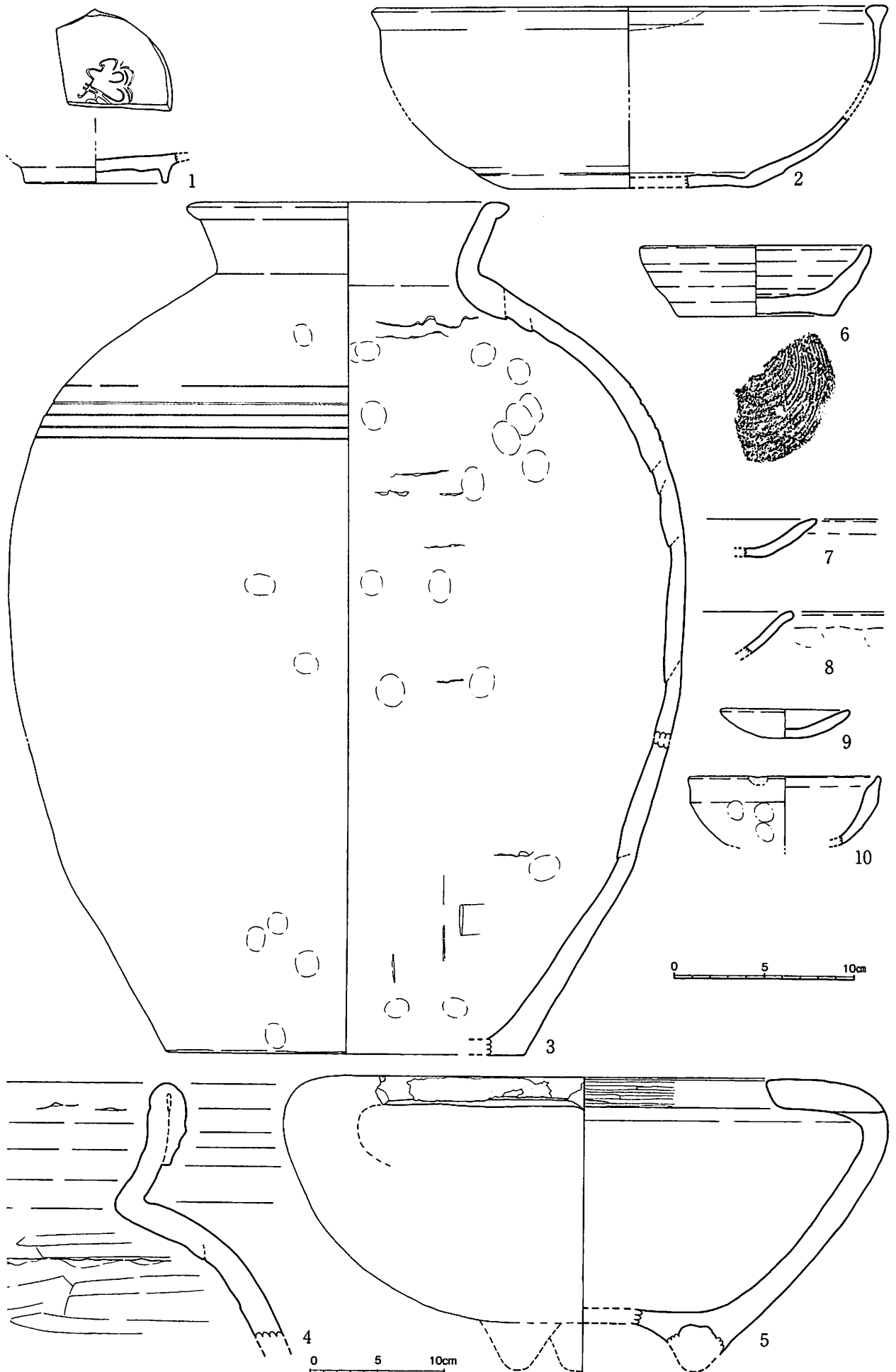
備前焼

土師器

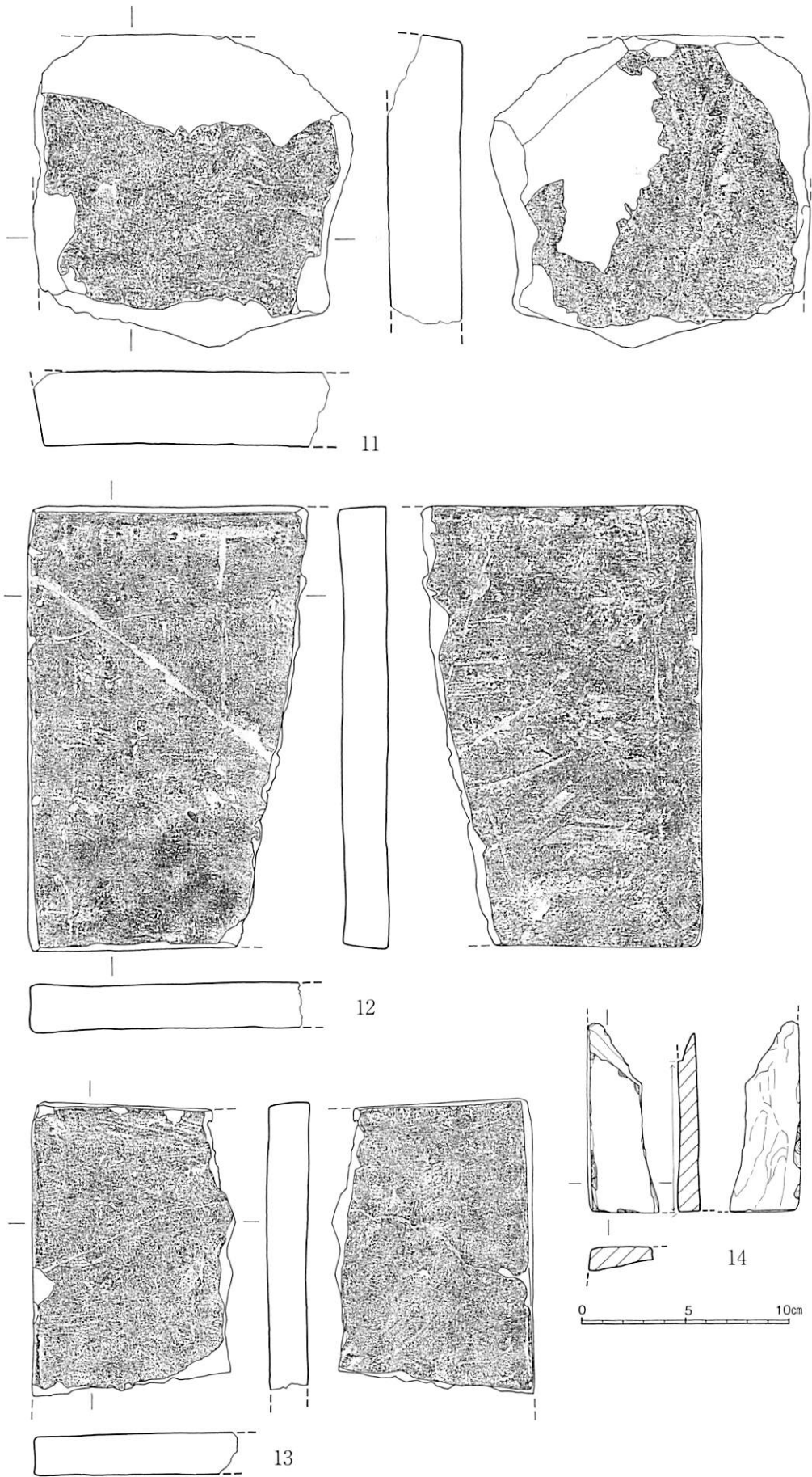
1は14~15世紀の中国龍泉窯系青磁碗C-IIb類の底部片。2はSE147、SK231、SK269出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢B類の口縁片(接合資料11)。3はSD116、SD250、SK231出土片と接合した、肩部に5条の沈線がめぐる備前焼の壺(接合資料14)。4は16世紀第4四半期近世1期の備前焼甕の口縁片。5はSD116、SD250、SE148、SK263出土片と接合した瓦質風炉(接合資料2)。6は15世紀河野分類B類に当たる底部糸切の土師器坏の口縁片。7と8は京都系土師器1期の皿口縁片。9は京都系土師器2期の小皿片。10はSE148井筒内出土片と接合した京都系土師器3期の坏で、口縁に1箇所打ち欠きがある(接合資料40)。11は厚手の埴の破片。12は埴。13は海部郡産の埴。14は粘板岩製の砥石片。なお以下の破片が出土している。SD116、SD250、SE148井筒内、SK262、SK263、SP214出土片と接合した備前焼壺(接合資料4)。



第4-91 図 SD131 (1/60)



第4-92図① SD131 出土遺物 (1/3, 4=1/4)



第4-92図② SD131 出土遺物 (1/3)

SD141、SE210 掘形内、SK231 出土片と接合した瓦質茶釜（接合資料 21）。ほかに白磁、中国景德鎮窯系青花碗 E 群、中国漳州窯系青花、瓦質火鉢底部、京都系土師器 2 期皿、京都系土師器 2 期皿を転用した埴塙、瓦、五輪塔空風輪、動物骨などの破片や、残留遺物として須恵器甕、古代土師器坏・坏蓋の破片が出土している。

SD230、SK261、SD292（第 4 - 93 図）

排水遺構

以上の溝と土坑は一連の排水遺構と考えられる遺構群である。B9・B10 区（北 1 区・東区）の第 2 層除去後に検出されたもので、溝 SD230 は 16 世紀第 3 四半期の土坑 SD284 を切り、第 4 四半期前半の土坑 SK229 と SK273 に切られる。同じく土坑 SK261 は第 2 四半期の井戸 SE291 を切り、第 4 四半期後半の土坑 SK231 に切られる。溝 SD292 は SD165 と第 2 四半期の土坑 SK265 を切り、第 4 四半期後半の井戸 SE210 と前半の土坑 SK262 に切られている。

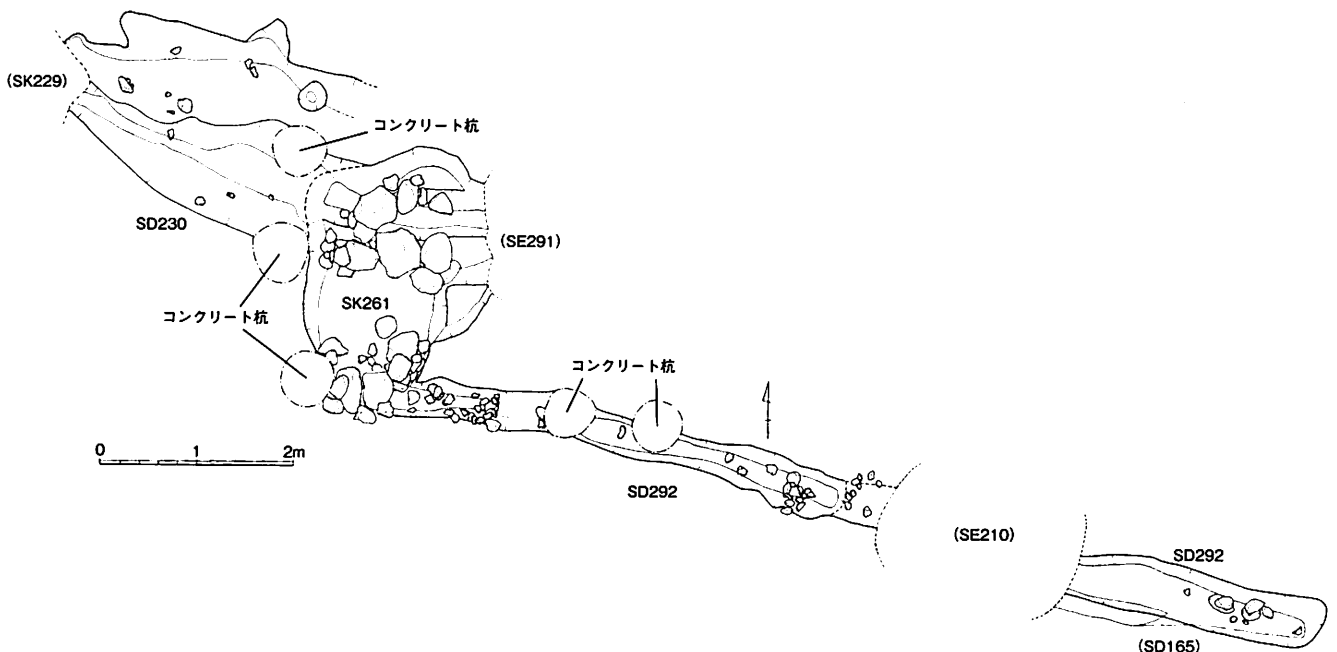
接合した壺

この 3 つの遺構が一連の構造物であることは接合資料 22 の信楽焼壺（4-97 図①-1）のように、埋没時に SK261 と SD292 の上層に破片が散布する土器の存在から証明される。また SK261 と SD292、SD230 が接続する部分には、特に大型の礫が塞ぐように積れている。まず底面全体に拳大から人頭大の礫を敷き、その上に大型礫を積み上げている。底面の高さを検討すると、SD292 は東から西に向って緩やかに低くなっており、水が流れる場合は SD292 から SK261 に流れ込むと想定される。同様のことは SD230 との間にもいえる。すなわち SD230 方向から SK261 に向う。SD261 は溝から集まる水をためる榊の役割を果たしているものと推定される。

榊

SD230 の埋土は暗黄褐色微砂質土（1cm 大の黄色土ブロック、炭焼土多く含む）で、SD261 は第 2 層と同じ土で埋没している。

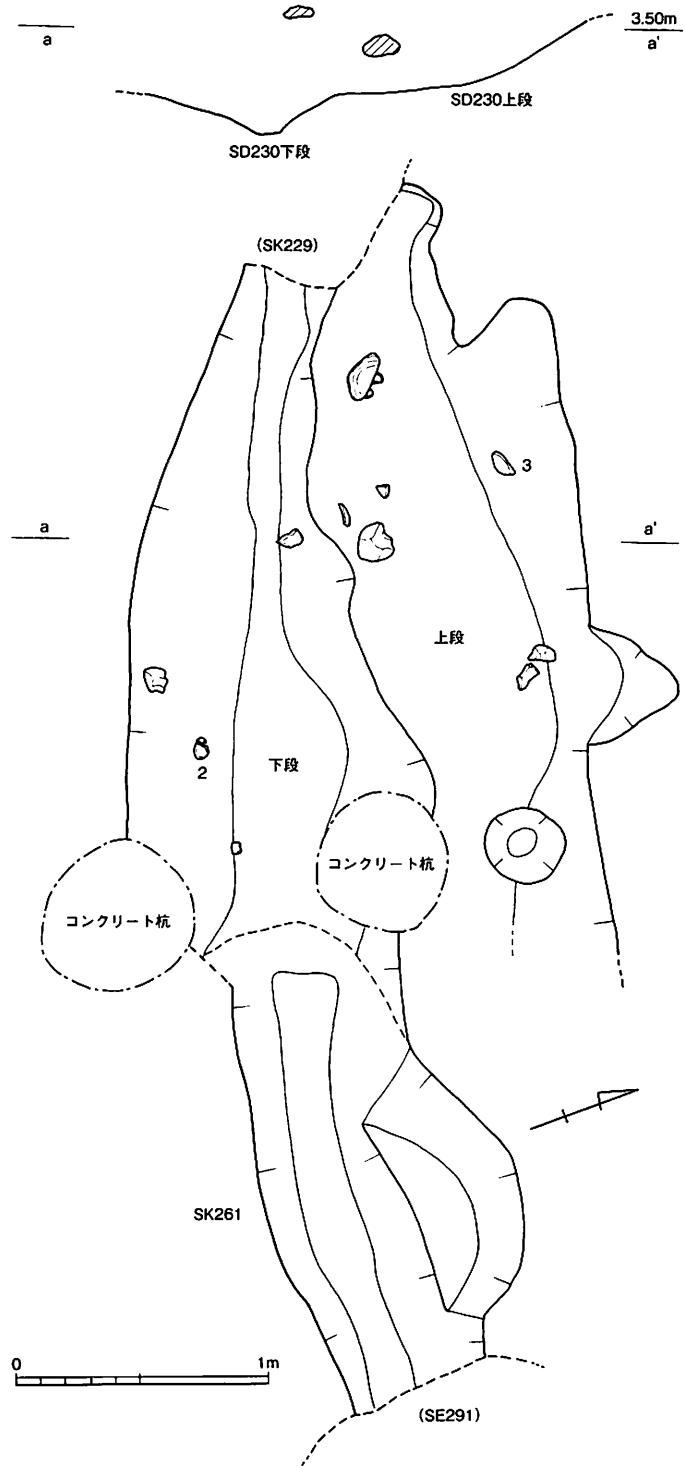
以上の切合関係から、一連の遺構 SD230、SK261、SD292 は 16 世紀第 4 四半期前半の遺構と推定される。



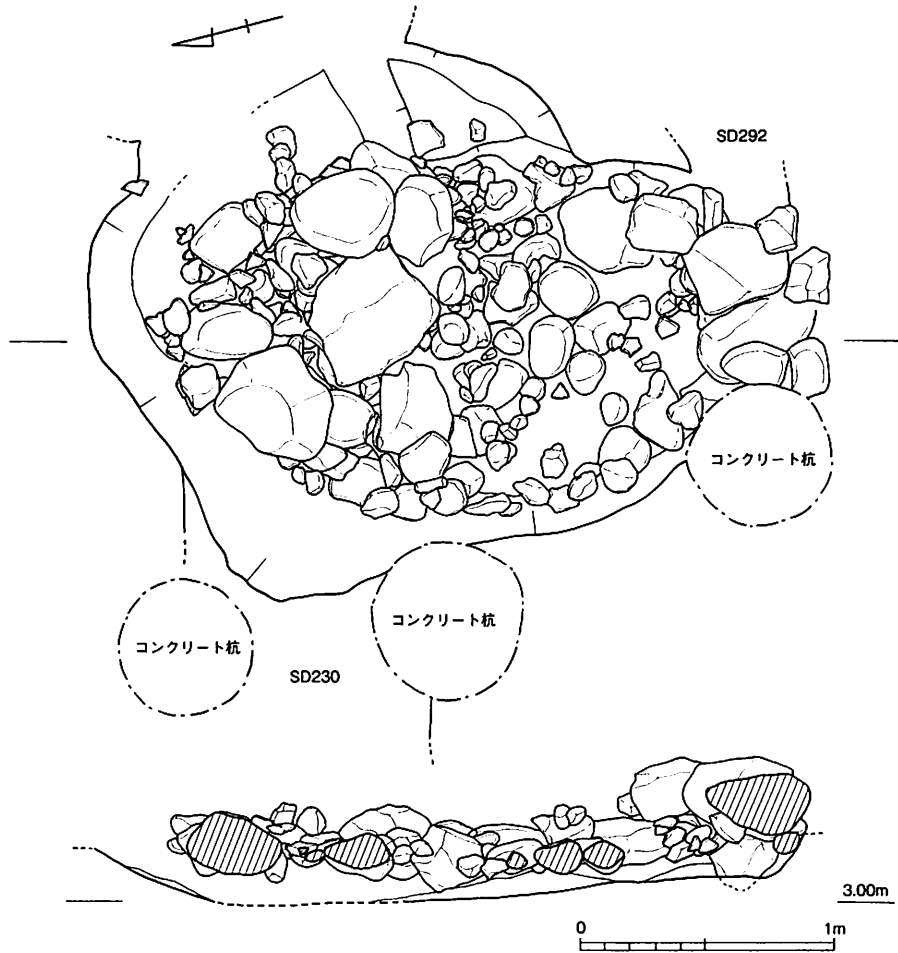
第 4 - 93 図 SD292、SK261、SK230 (1/80)

SD230 (第4-94図) は長さ4.8m以上、幅1.8m、深さ0.4mの溝状遺構で、皿状の断面がかさなる二段掘りになっており、上下二段、下段の溝はSK261の底面北側でも続きを確認でき、さらにSK261に礫が構築される時点では既にSD230下段の溝は埋没していることが、SK261-2の遺物の廃棄レベルから確かめられるので、SD230下段の溝は時期の異なる古い溝の可能性が高い。その時期はSD230-1と2の底部糸切の土師器小皿の形態から15世紀後半の可能性が高い。

SK261 (第4-95図) はSK231の底面で検出したもので長さ2.8m、幅1.9m、深さ0.5mの長円形土坑である。南側がすぼまるようになりその先端にSD292が接続する。底面の高さは北に向うほど低くなるので、SD292の方向から水が流れ込む場合、水は土坑北半に溜まることになる。内部は大型礫で石組みし、底部にも礫を敷き詰め充満させた石組み土坑である。石組み、礫は安山岩質の河原石がほとんどであるが、中には凝灰岩礫、結晶片岩礫、あるいは石臼の破片を利用している。その礫の敷く際に陶器の壺や瓦、などの破片がかなり混ざりこんでいる。2の備前焼の壺は石組の上下で破片が出土しており、石組み構築時の遺物である。同じく10・11の塼・13の平瓦・16・17の石臼片なども構築時のもので、1・3・5・9・14の破片はこの遺構が機能していた時あるいは廃棄時の遺物である。



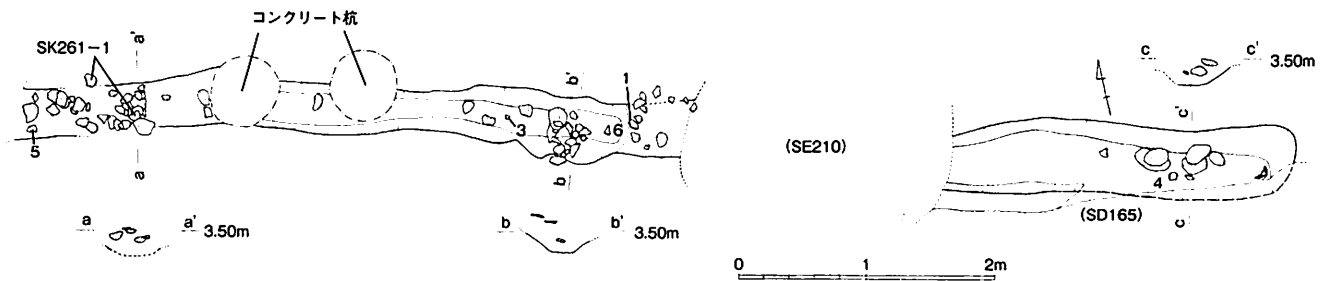
第4-94図 SD230 (1/30)



第4-95図 SK261 (1/30)

SD292 (第4-96図)はSK262の底面で検出した細長い溝で、長さ約10m、幅0.4～0.6m、深さ0.2m、断面は逆台形から半円形で安定していない。道路状遺構SF151および側溝SD165に並行して伸びている。内部には拳大の礫が集散しながら廃棄されている。遺物はその中に破片として散在する状況である。石組み遺構SK261に対して西側に溝SD230、東側に溝SD292を配した長さ10mに達する遺構である。溝の底面は東から西に向って緩やかに低くなっている。最新の土師器が京都系土師器3期皿と中国漳州窯系青花である点と、切合関係から16世紀第4四半期の前半と推定した。

細長い溝



第4-96図 SD292 (1/60)

## SD230 出土遺物 (第4 - 97 図)

土師器 1 は口縁部に煤が付着して灯明皿に利用された底部糸切の土師器の小皿。2 は口縁全周を打ち欠いた底部糸切の土師器の小皿。1 と 2 はともに 15 世紀後半の河野分類 A 類にあたる。3 は京都系土師器 3 期の皿口縁片。ほかに青磁、完形だが錆がひどく銭種不明の銅銭 1 枚、瓦質火鉢と埴、土師器の破片が出土している。

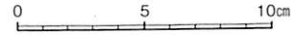
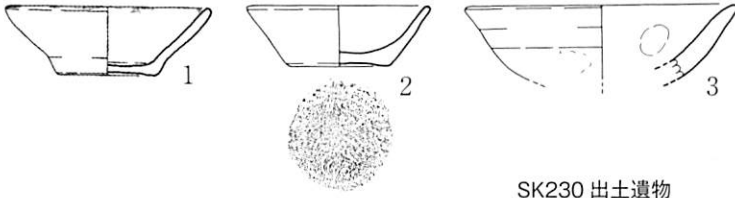
## SK261 出土遺物 (第4 - 97 図)

信楽焼壺 1 は SD250、SD292、SE148 井筒内出土片と接合した信楽焼の壺 (接合資料 22)。特有な胎土に内外面を大きな単位の外ハケ目で仕上げている。底面には板状の圧痕が残る。2 は SD250 出土片と接合した備前焼の壺、肩部に櫛描波状文を描く (接合資料 3)。SD230 との重複部の礫の下から上部にかけて破片が散在しており、SK261 構築時に廃棄された遺物である。3 は中世 6a 期 16 世紀前葉の備前焼の甕口縁片。4 は下部出土の京都系土師器 1 期の皿口縁片。5 は京都系土師器 1 期の皿口縁片。6 は京都系土師器 2 期の皿片。7 は口縁に打ち欠きのある京都系土師器 2 期の小皿。8 は下層から出土した京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器皿、接合してほぼ完形に復元した。9 ~ 12 は埴の破片。13 は平瓦の破片。14 は胎土からみて海部郡産の埴。15 は完形の中国銅銭である紹聖元寶 (北宋初鑄 1094 年・行書体)、周囲を削って小さくしている。重さも 1.9g とその分軽い。

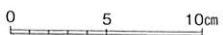
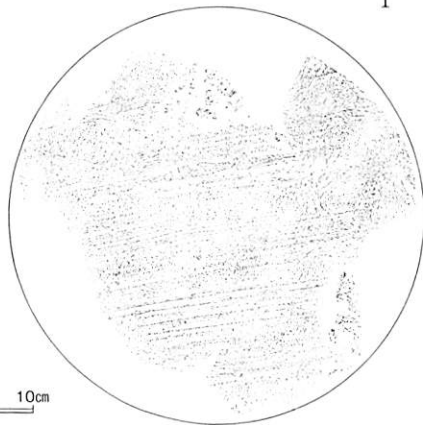
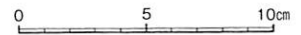
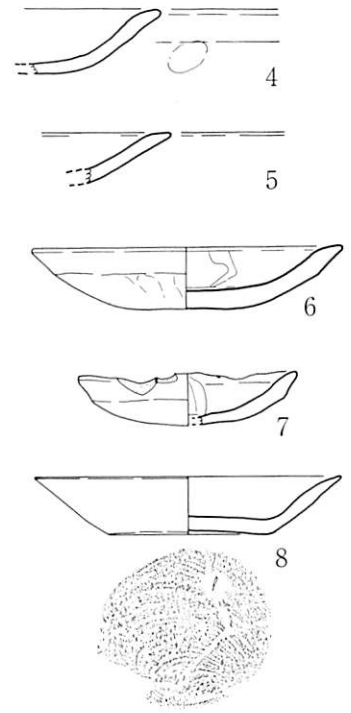
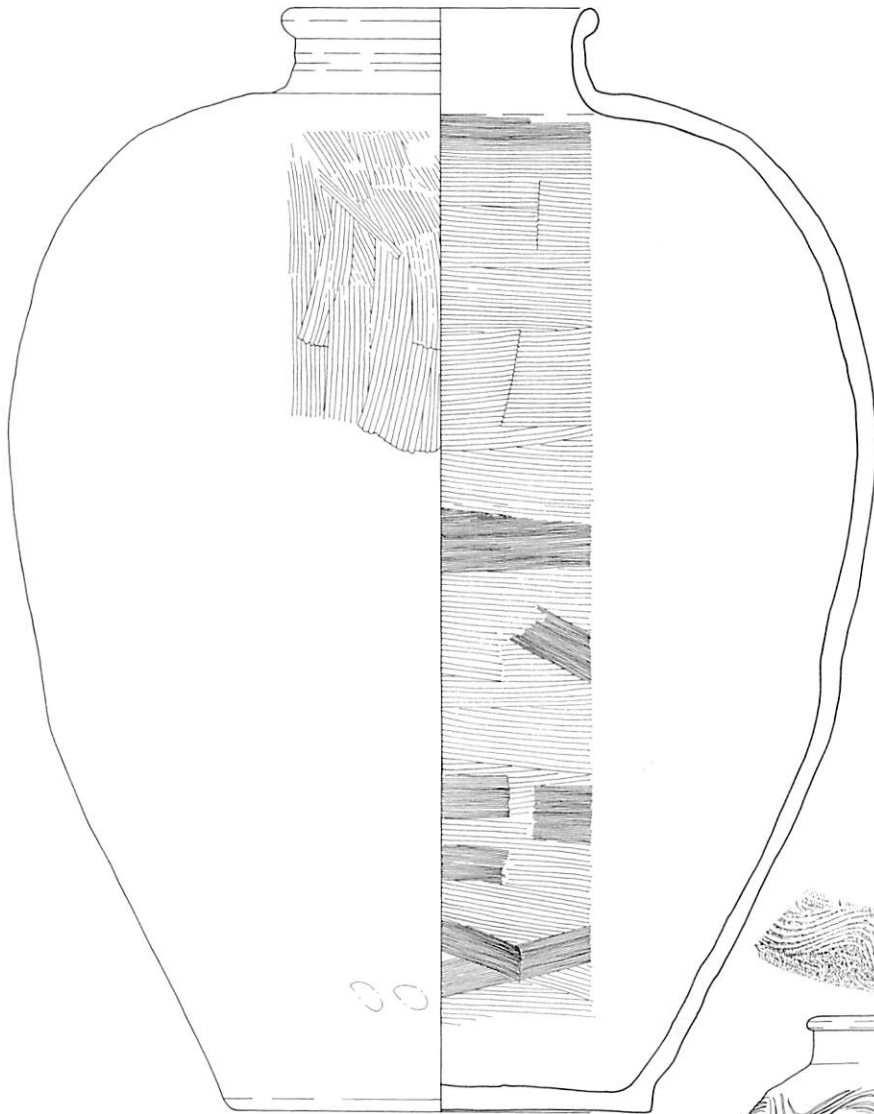
石臼 16 は安山岩製の石臼の上臼片。17 は安山岩製の石臼の下臼で、一単位 6 本の目が入る。SD292 との連結部に礫のかわりに置かれたもの。

接合資料 なお SD250、SK262 出土破片と接合した備前焼水差し (接合資料 7) の破片。SD165、SK228、SK293 出土片と接合した瓦質火鉢 (接合資料 15) の破片。SD118、SD250、SK252 出土片と接合した備前焼壺の底部 (接合資料 16) の破片。SD118、SD250、SD292、SK262 出土破片と接合した中国製黒褐釉陶器壺 (接合資料 19) の破片。SD250、SK262 出土破片と接合した備前焼甕下部 (接合資料 26) の破片。SK261 出土片と接合した備前焼甕胴部 (接合資料 34) の、以上の破片が出土している。

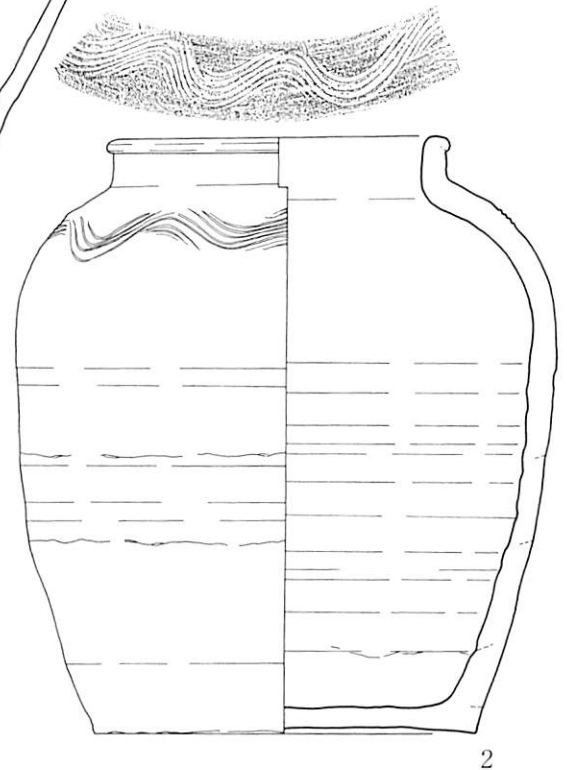
そのほか ほかに中国漳州窯系青花、平瓦の破片、残留遺物として、古代土師器の企救型甕の破片も出土している。



SK230 出土遺物



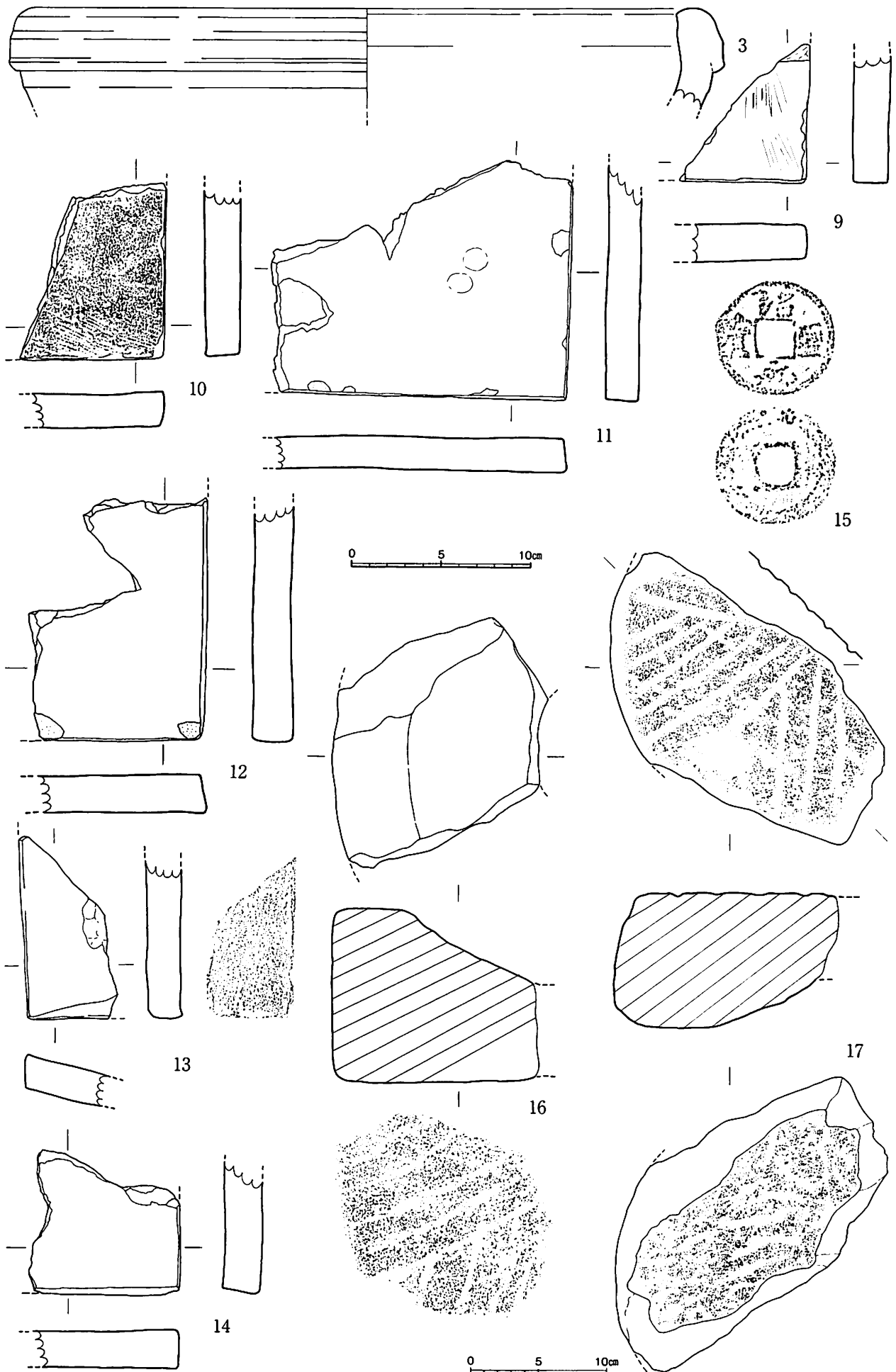
SD261 出土遺物



2

第4-97 図① SK230・SD261 出土遺物 (1/3、1=1/4)





第4-97 図② SD261 出土遺物 (1/3、15=1/1、16・17=1/4)

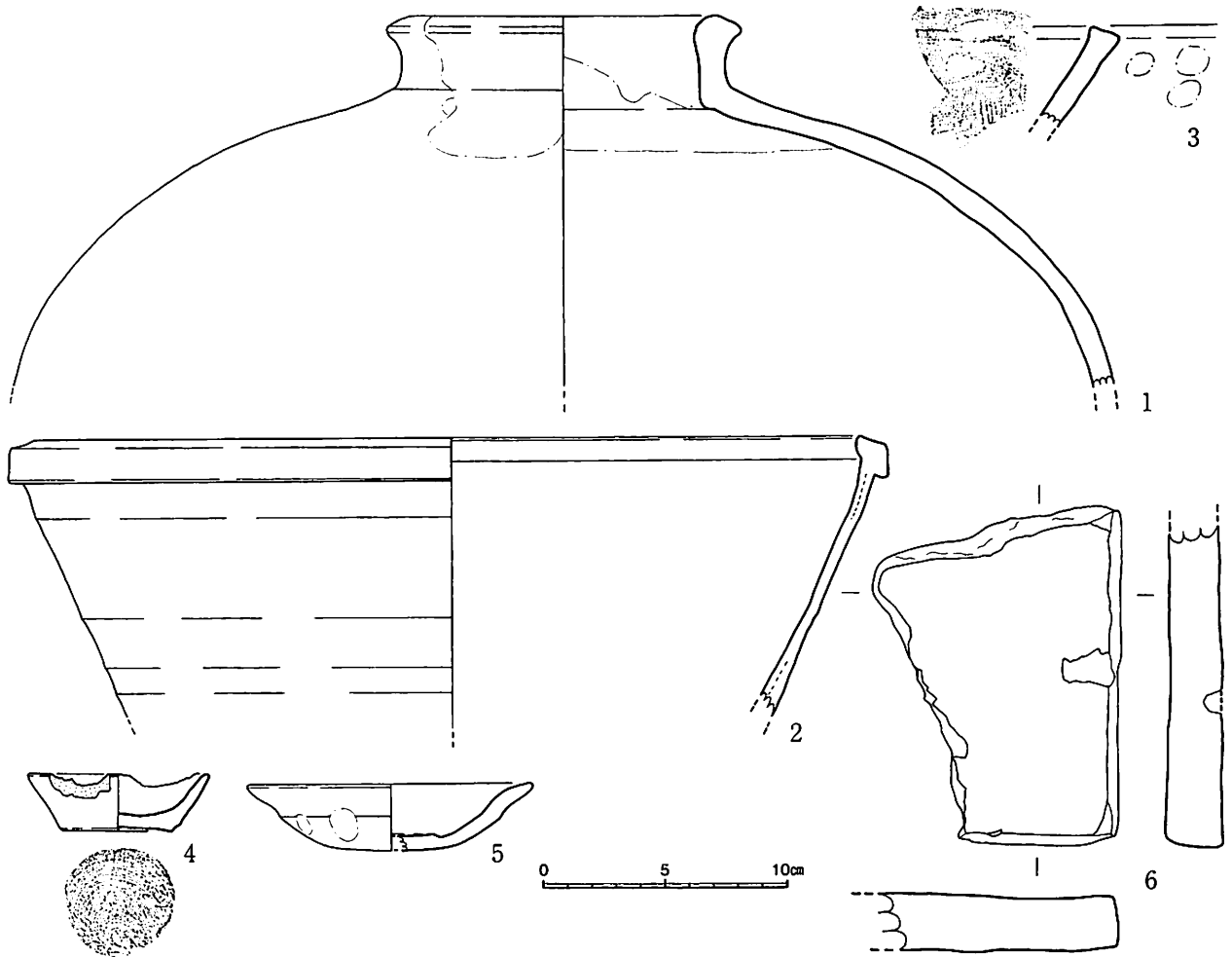
SD292 出土遺物 (第4 - 98 図)

黒褐釉陶器

1 は SD118、SD250、SF151、SK261、SK262 出土片と接合した中国黒褐釉陶器壺の上半部 (接合資料 19)。2 は SD250 出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢 C 類口縁 (接合資料 8)。3 は瓦質播鉢の口縁片。4 は口縁に 3 箇所故意と思われる打ち欠きのある完形の底部糸切の土師器小皿。形態的には 15 世紀の河野分類 A 類にあたる。5 は京都系土師器 2 期の皿口縁片。6 は埴の破片。なお SD250、SE148 井筒内、SK261 出土片と接合した信楽焼壺 (接合資料 22) の破片のほかに、備前焼甕、放射スリ目の備前焼播鉢、瓦質火鉢の破片が出土している。

古代の遺物

残留遺物として古代の須恵器甕、古代の土師器坏身、黒色土器 A 類碗、内面布目の製塩土器の破片も出土している。



第4-98図 SD292 出土遺物 (1/3)

井戸

SE148 (第4 - 99・100 図)

井筒木桶

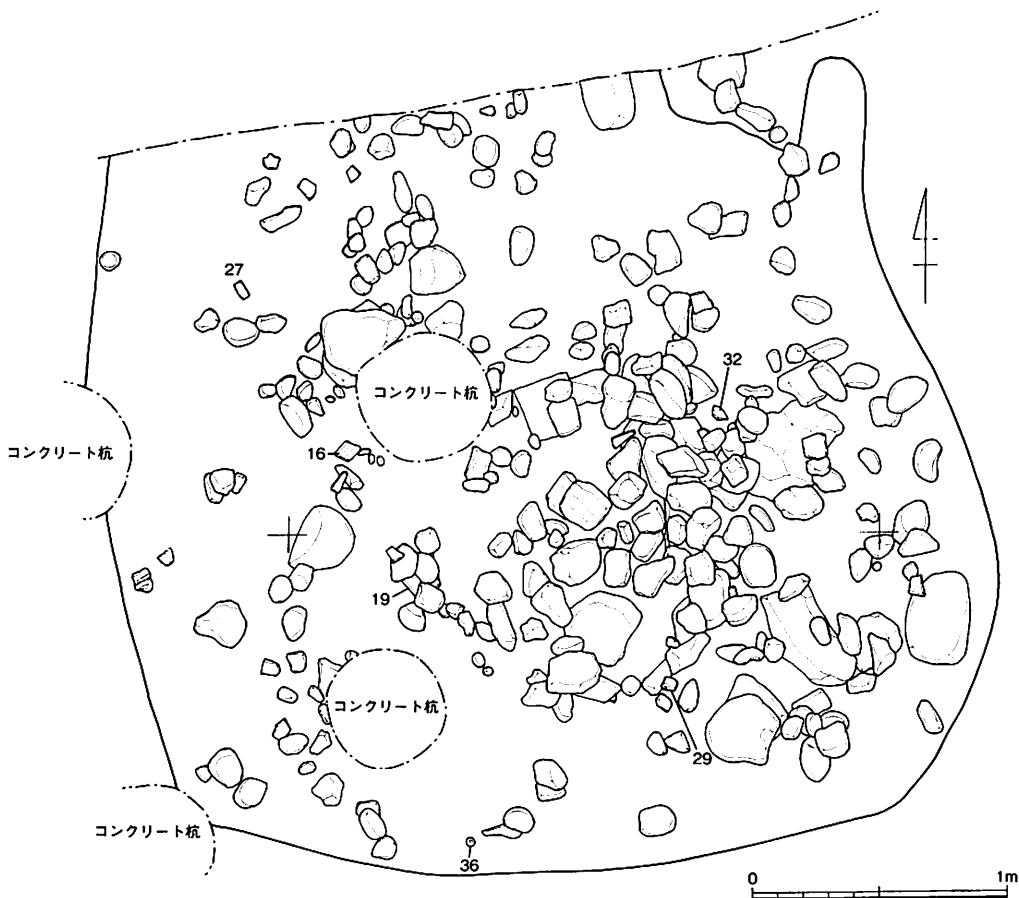
八角石組

C9 区 (北 1 区) の第 2 層 2 回目掘下げ後に検出した掘形不整円形の長さ 3.3m、幅 3.0m 以上、深さ 3.0m をこす井戸である。井筒は湧水点に木製桶を 1 基据えて、その上に石材をくみ上げて行くものである。その石組みは上中下の 3 段が残っている。上段と中段は平面八角形になるように石材の面を揃えている。裏込めには凝灰岩の礫や河原石が使われている。下段は上中段と構造が異なり、石材を平たく水平に置いて揃えている。8・9・12・15 では明らかに内側を丸く整形している。同時に上面の高さを一定にするために 7 と 14 のように、石を重ねたりしている。このように下段

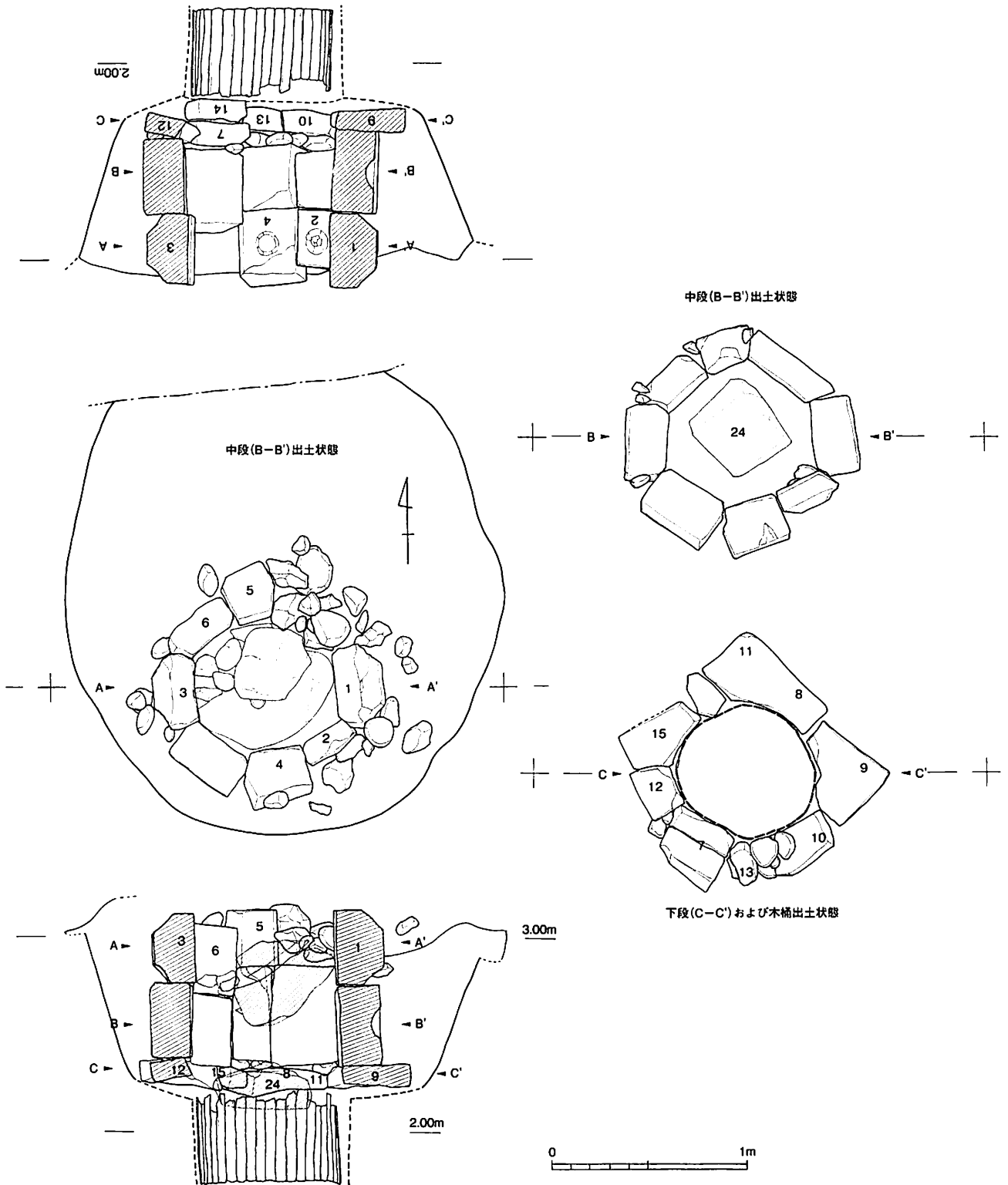
五輪塔の部材  
 の石組みは井筒の石を組み上げるための土台として作られている。使用された石材はすべて凝灰岩で五輪塔の部材が多く加工されて使われている。加工は井筒構築時に行われたようで、石材の隙間に凝灰岩の破片が詰められた状態である。水溜の部分には桶が設置されていたが、桶の上部は欠損している。下段の石組みを平面で見ると丸く内側を整形しているの、本来桶は下段の位置までであったのではないかと推定される。桶の中ほどから以下は湧水がひどく崩落したため完掘できなかった。したがって桶基底の標高を測ることはできなかったが、桶の大きさから推定して、標高 1.5m より低くなると推定される。

井戸廃棄  
 内部土坑  
 井筒の内部には凝灰岩礫が廃棄されている。いずれも本来は井筒の石材と考えてよい石なので、この井戸を廃棄する際に壊して廃棄したものと考えられる。さらに井戸の掘形の上部に当たる標高 3～3.5m 付近は第 4 - 99 図に示めたよう廃棄状態であった。内部には凝灰岩礫や被熱した礫が多く井筒の直上にあたるころには礫が集中的に廃棄されていた。これは井戸の廃絶時に井筒の上部をふくめて掘形上部を掘り返して内部を埋めた状態であった。このような廃棄状態の遺構を井戸の内部土坑と呼んできたが、これもまさにそのような状態である。

16 世紀第 3 四半期の土坑 SK278 と 15 世紀のピット SP288 を切り、第 4 四半期前半の土坑 SK264 と SK236 に掘形が切られ、掘形内から近世 1 期の備前焼甕が出土しているので、16 世紀第 4 四半期前半につくられた井戸である。廃絶時の内部土坑から彫三島碗が出土しており、16 世紀の最末期まで使用されている。



第 4 - 99 図 SE148 上部廃棄状態 (1/30)



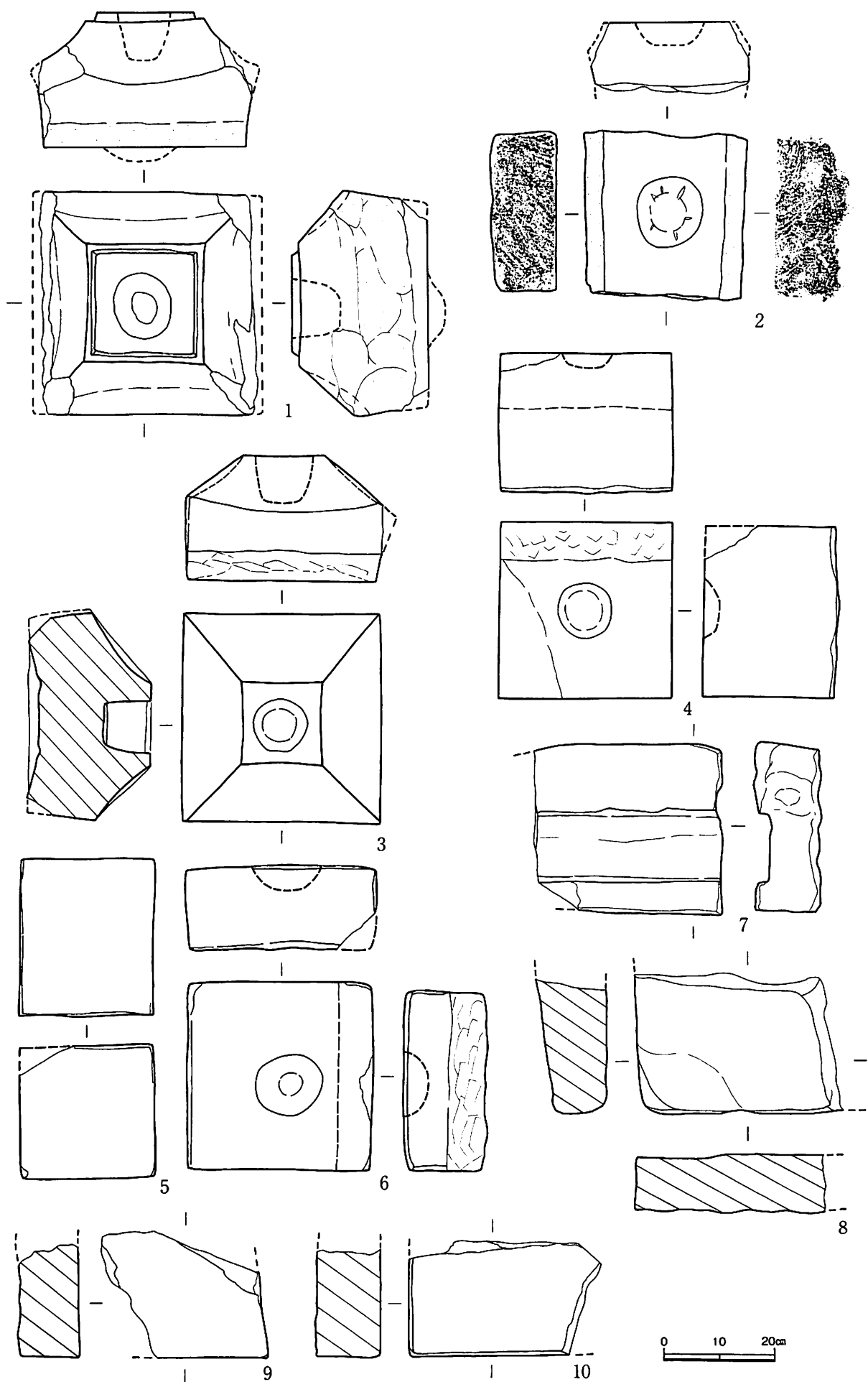
第4-100図 SE148 (1/30)

井筒石材 (第4-101図①②)

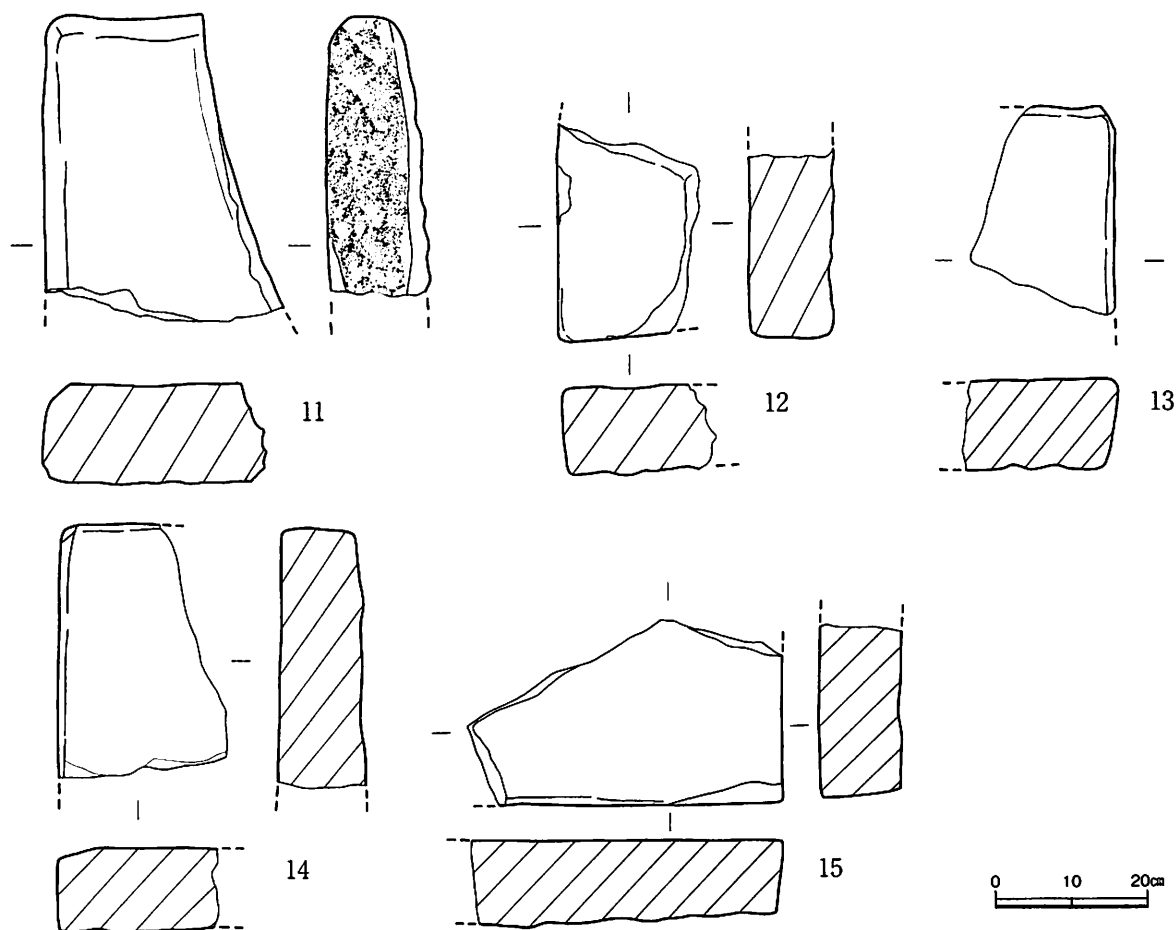
五輪塔の石材

以下の1～6は上段に使われた石材。1～3は再加工された凝灰岩製の五輪塔火輪。4～6は再加工された凝灰岩製の五輪塔地輪。以下の7～14は下段に使われた石材。7は溝を切った石製品を再加工した凝灰岩製の石材。8は凝灰岩製の石材。9は凝灰岩製の加工された石材で、被熱で割れている。10は凝灰岩製の加工された石材。11は加工された凝灰岩石材、手斧痕が明瞭である。なお8と11は本来ひとつの石材である。12は凝灰岩製の加工石材、底面は敲打痕を残し、ほかの

凝灰岩石材



第4-101 図① SE148 出土遺物 (1/10)



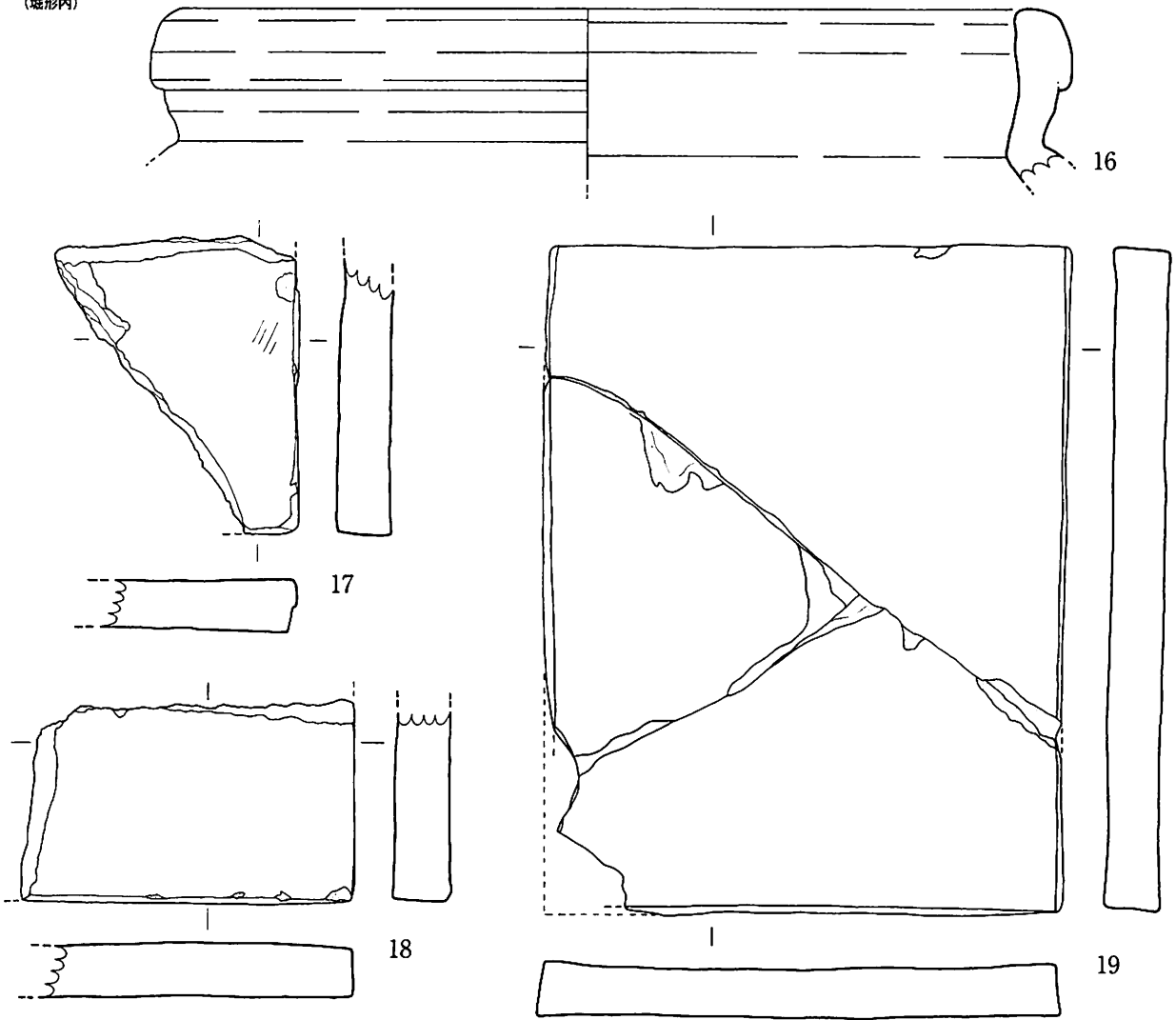
第4-101図② SE148出土遺物 (1/10)

面は研磨している。13は12とおなじ加工の凝灰岩石材。14はおなじく凝灰岩製の加工石材。15は12と同じ加工の凝灰岩石材。

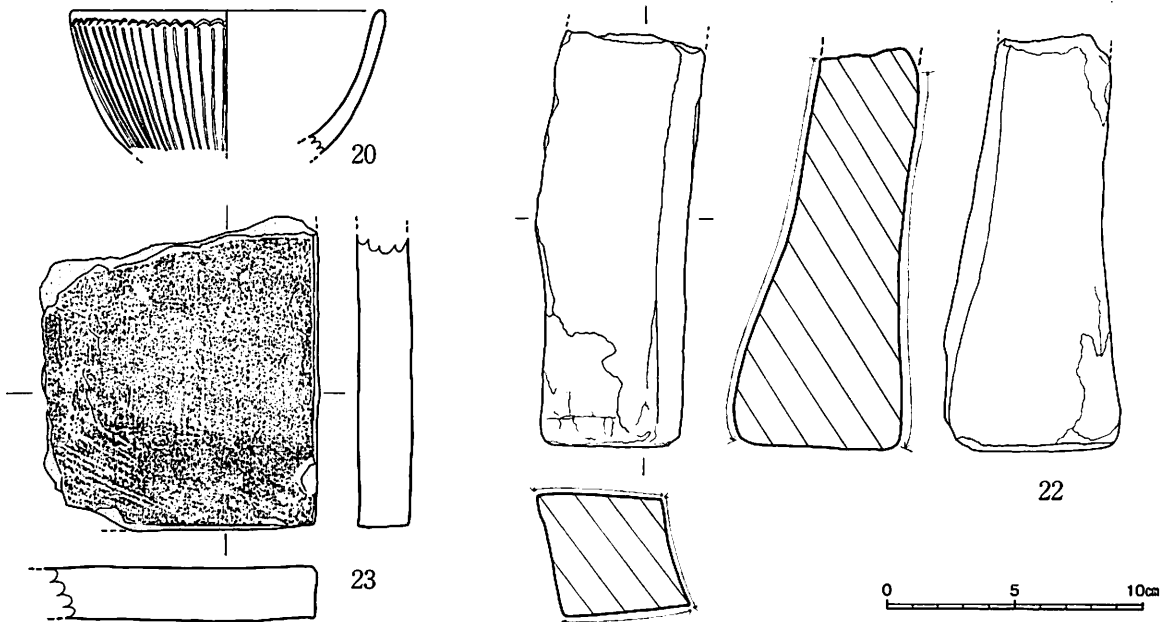
SE148 出土遺物 (第4-102図①②)

- 井戸構築時 掘形内 井戸構築時の遺物。16は中世6期の備前焼甕口縁。17～19は井筒の裏込めに使われていた埴の破片。
- 井戸使用時 井筒内底部 井戸使用時の遺物。20は細線蓮弁文をほどこす16世紀の中国龍泉窯系青磁碗Ⅳ類の口縁片。21は井戸使用中に埋没したと推定される、井筒内の底部で採集した胴部に一条の突帯のめぐる備前焼短頸壺の破片である。SD116、SD131、SD250、SK262、SK263、SP214出土片と接合している(接合資料4)。22は破損した砥石片。
- 備前焼壺 井筒内上部 井戸廃絶時の埋没にさいして廃棄されたと推定される遺物である。23は埴片。24は井筒内に廃棄されていた凝灰岩石材で、五輪塔の地輪を再加工した可能性高い。なおこのほかに以下の破片が出土している。SD116、SD131、SD250、SK263出土片と接合した瓦質風炉(接合資料2)の破片。SD250、SK262出土片と接合した瓦質火鉢(接合資料6)の破片。SD250、SD292、SK261出土破片と接合した信楽焼の壺(接合資料22)の破片。SK137、SK262出土片と接合した備前焼甕底部(接合資料27)の破片。SD131出土片と接合した京都系土師器3期皿(接合資料40)の破片。
- 井戸廃絶時 井戸封じ 内部土坑 以下は井筒検出前の土坑状態のときに発見されたもので、井戸廃絶時の内部土坑内に廃棄された遺物である。25は鎬蓮弁文を施す中国龍泉窯系青磁の鉢口縁片。26は中国景德鎮窯系青花碗E群の饅頭心碗の底部片。27はSD131・SK269上部出土破片と接合した中国漳州窯系青花皿(接合資料25)。28は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された底部糸切の土師器小皿の口縁片。29は内面指ナデ底面に板状圧痕のある河野分類B類の底部糸切の土師器小皿。30は京都

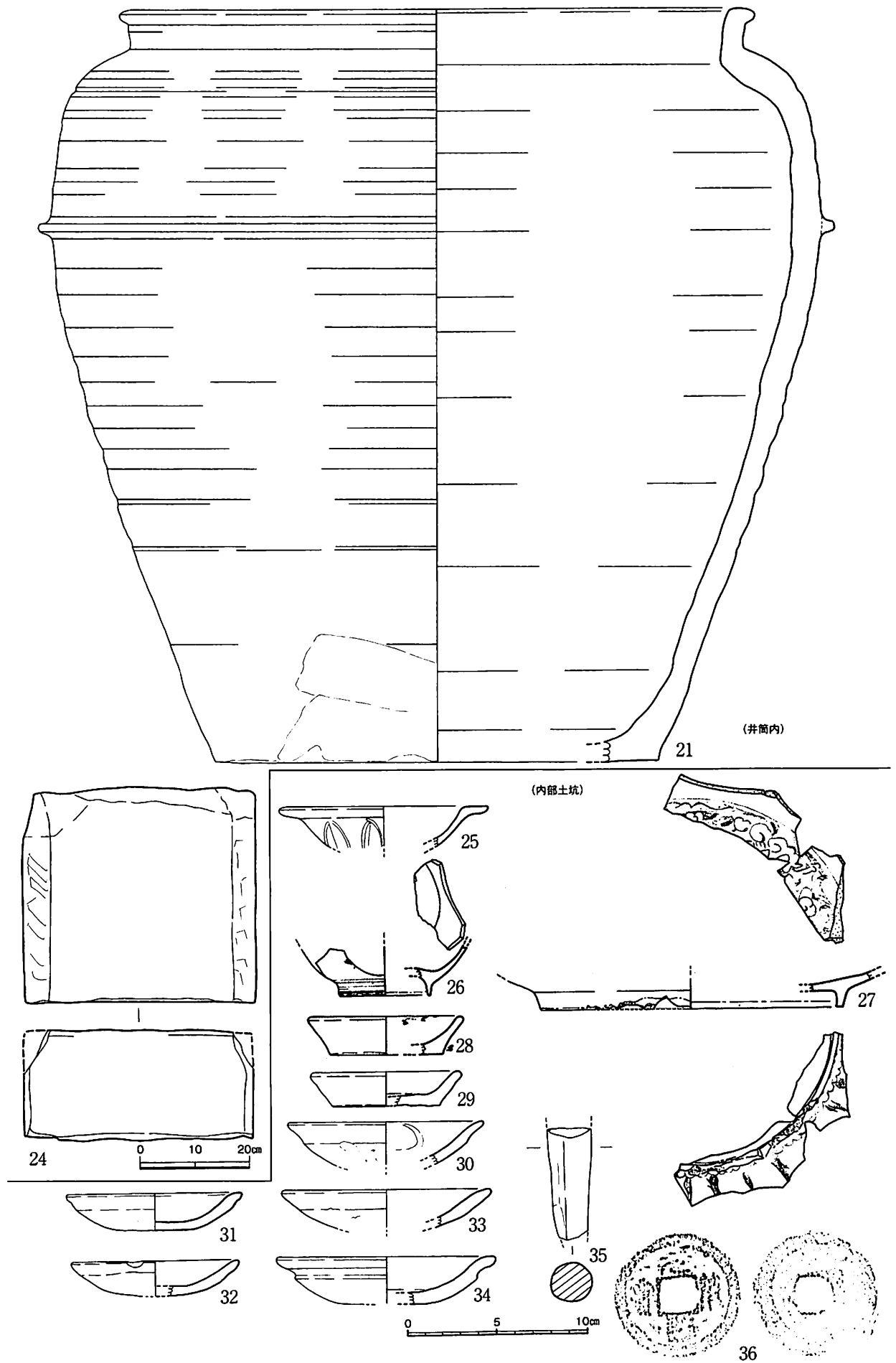
(堀形内)



(井筒内)



第4-102 図① SE148 出土遺物 (1/3)



第4-102図② SE148出土遺物 (1/3、24=1/10、36=1/1)



彫三島碗

系土師器1期の皿口縁片。31は京都系土師器1期の小皿。32は口縁に1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期の小皿口縁片。33は京都系土師器2期の皿口縁片。34は京都系土師器3期の皿口縁片。35は防長系の土師器足鍋の脚部片。36は完形の中国銅銭の元符通寶（北宋1098年初鑄・篆書体）。なおSD218、SK231出土片と接合した彫三島碗（接合資料9）の破片や、SD165、SE210、SK231出土破片と接合した白磁皿（接合資料23）の破片が出土している。ほかに中国景德鎮窯系青花碗、備前焼甕・播鉢、瓦質火鉢、平瓦、ロクロ目土師器の破片が出土している。

### 土坑

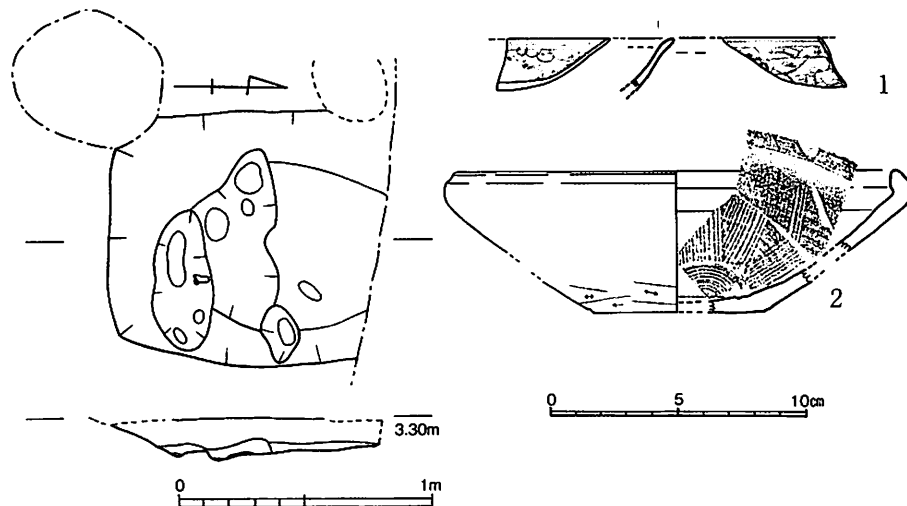
#### SK264（第4-103図）

方形土坑

C9区（北1区）においてSE148掘下げ中に検出した長さ1.05m、幅1.0m、深さ0.2mの方形の土坑である。断面は半円形で、埋土は第2層土の単一層である。小破片の遺物が散在する出土状態である。16世紀第4四半期の井戸SE148を切り、同じく第4四半期前半SK236に切られる。切合関係から16世紀第4四半期前半と考えられ、出土遺物とも矛盾しない。

#### SK264 出土遺物

1は15世紀後半から16世紀前半の中国景德鎮窯系青花碗B1群の口縁片。2はSD116出土片と接合した中国製焼締陶器播鉢と考えられる破片（接合資料18）。ほかに残留遺物として古代の土師器坏蓋の破片が出土している。



第4-103図 SK264（遺構1/30、遺物1/3）

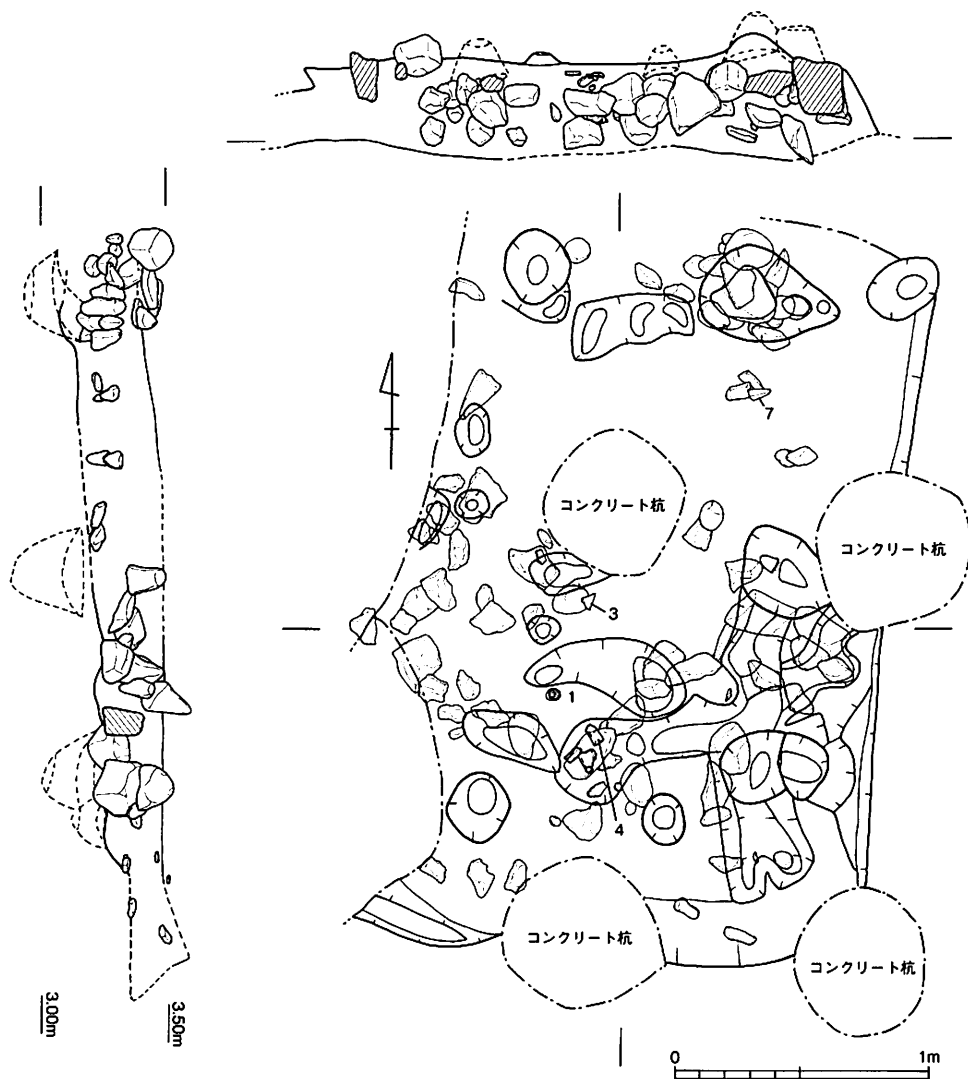
#### SK236（第4-104図）

堅穴遺構

逆さの土師器皿

灰と祭祀

C9区（北1区）の第2層除去後に検出した隅丸長方形の堅穴遺構である。長さ2.9m以上、幅2.2m以上、深さ0.3m、底面は平坦で、7本の柱穴を認めた。16世紀第4四半期の井戸SE148と土坑SK264、SK275を切り、同じく第4四半期前半の土坑SK252に切られる。中央南よりの床面近くに完形の土師器皿が逆さにおかれて、中に灰が詰まる。この土師器は口縁を打ち欠き被熱していることから、灰の存在とも考え合わせると、その場で焼かれた上に埋置する祭祀行為が行われたと考えられる。同時に埋土には凝灰岩礫や結晶片岩礫が多く廃棄され、被熱したものも多かった。京都系土師器3期皿の存在と、切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。



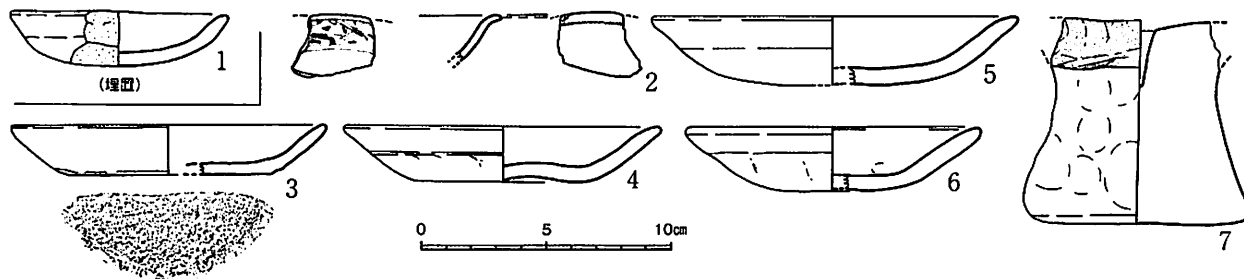
第4-104図 SK236 (1/30)

SK236 出土遺物 (第4-105図)

埋置土器

埋置遺物 逆さに灰の上に完形でおかれた状態で出土した。1は外面が被熱による剥離痕跡の残る京都系土師器1ないし2期の小皿完形品。口縁に1箇所打ち欠きがある。

埋土中 いずれも礫の間などに破片化して散在して出土したものである。2は中国景德鎮窯系青花碗B群の口縁片。3は底部の広い京都系土師器を模倣した底部系切の土師器の皿、内面指ナデと板状圧痕がある。4と5は京都系土師器2期の皿片。6は京都系土師器3期の皿片。7は京都系土師器の製作技法で作られた土師器燭台B類で、口縁部をひろく打ち欠かされている。なおSD250、SK231、SK269、2号墓(ST135)出土片と接合した中国黒褐釉陶器壺(接合資料28)の破片が出土している。ほかに青磁片と残留した六連式の製塩土器の破片が出土している。

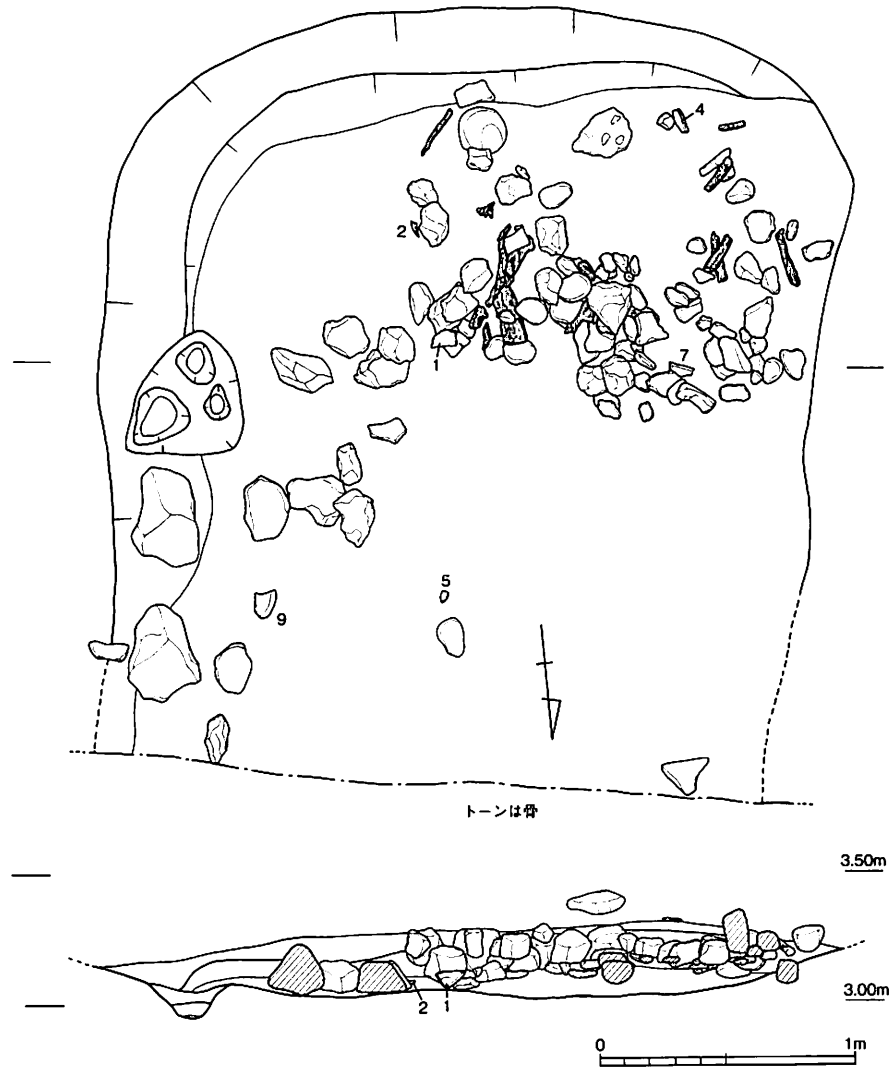


第4-105図 SK236 出土遺物 (1/3)

## SK252 (=S133) (第4 - 106 図)

長方形土坑  
動物骨廃棄

C9区(北1区)で検出した長さ3.0m、幅2.7m、深さ0.3mの隅丸長方形の土坑である。16世紀第4四半期前半の土坑SK236を切り、同じく第4四半期前半の溝SD131と土坑SK269に、第4四半期後半の土坑SK134に切られる。内部には礫や焼土の集中があり、動物骨が多く、中央に大型骨が置かれていることから何らかの祭祀行為が行われている可能性があるが、出土土器はいずれも破片で礫や骨の間に散在しており、特別な意味は見出せない。中国漳州窯系青花と京都系土師器3期皿の出土と、切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と推定される。



第4 - 106 図 SK252 (1/30)

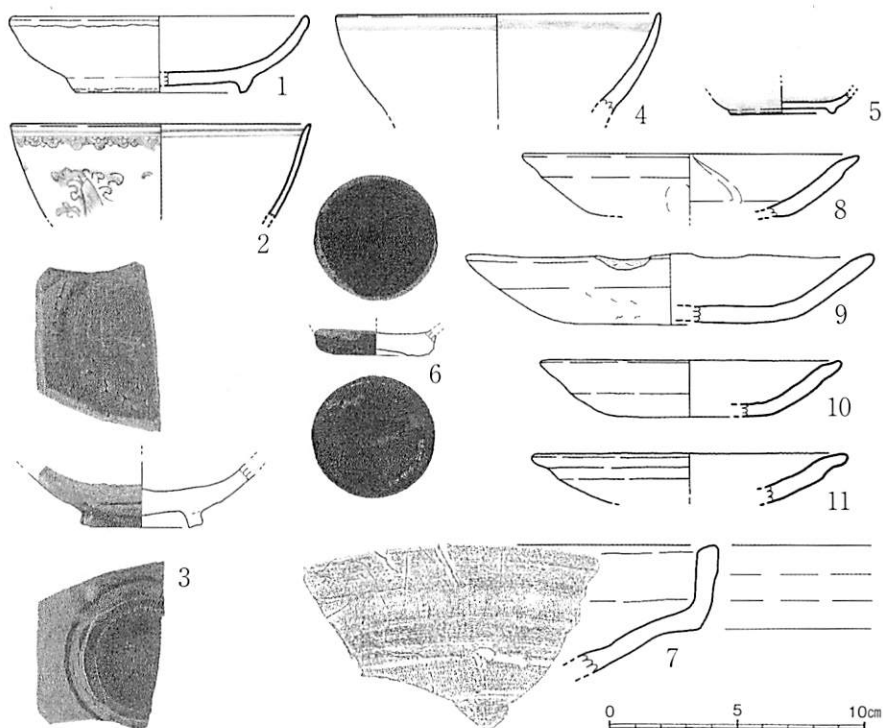
## SK252 出土遺物 (第4 - 107 図)

漳州窯

1は16世紀の白磁皿E-1群の破片。2は中国景德鎮窯系青花碗E群の饅頭心碗の口縁片、SK263の第4 - 109 図3と同一個体である(接合資料20)。3は中国漳州窯系青花碗の底部片。4は中国漳州窯系青花碗の口縁片。5は翡翠釉の青釉陶器小皿の底部片。6は口縁全体をきれいに打ち欠いた瀬戸美濃産天目碗の底部片。7は16世紀前葉中世6a期の備前焼播鉢の口縁片。8は京都系土師器2期の皿口縁片。9は口縁に打ち欠きのある京都系土師器2期皿の口縁片。10は京都系土師器2期の皿口縁片。11は京都系土師器3期の皿口縁片。なおSD118、SD250、SK261出土片と接合した備前焼の壺底部(接合資料16)の破片が出土している。

そのほか

ほかに白磁、中国製褐釉陶器、朝鮮王朝産陶器の舟徳利、備前焼甕、平瓦、多数の動物骨・歯の破片が出土し、残留遺物として、弥生土器、須恵器、古代の土師器坏の破片が出土している。

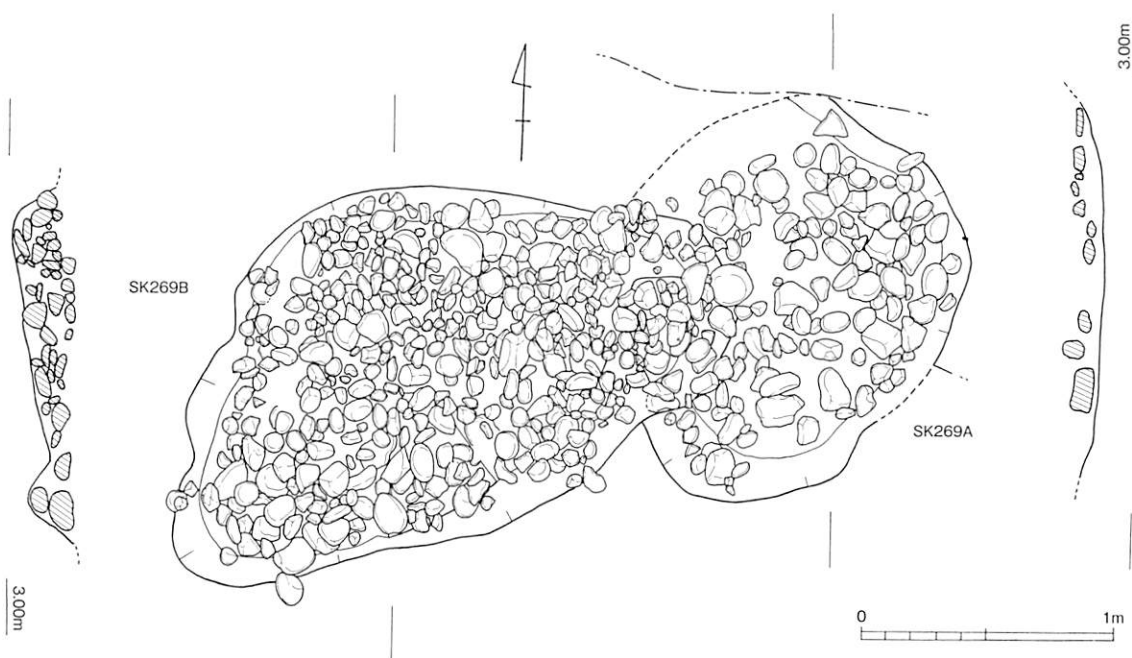


第4-107図 SK252 出土遺物 (1/3)

SK269 (=S137) (第4-108図)

集石土坑

C9区(北1区)で検出したが、当初S137とした集石と同一の遺構と判断した遺構である。掘り進めるうちに重複した2つの土坑からなることが判明した。まずはじめに東側の長さ1.6m、幅1.3m、

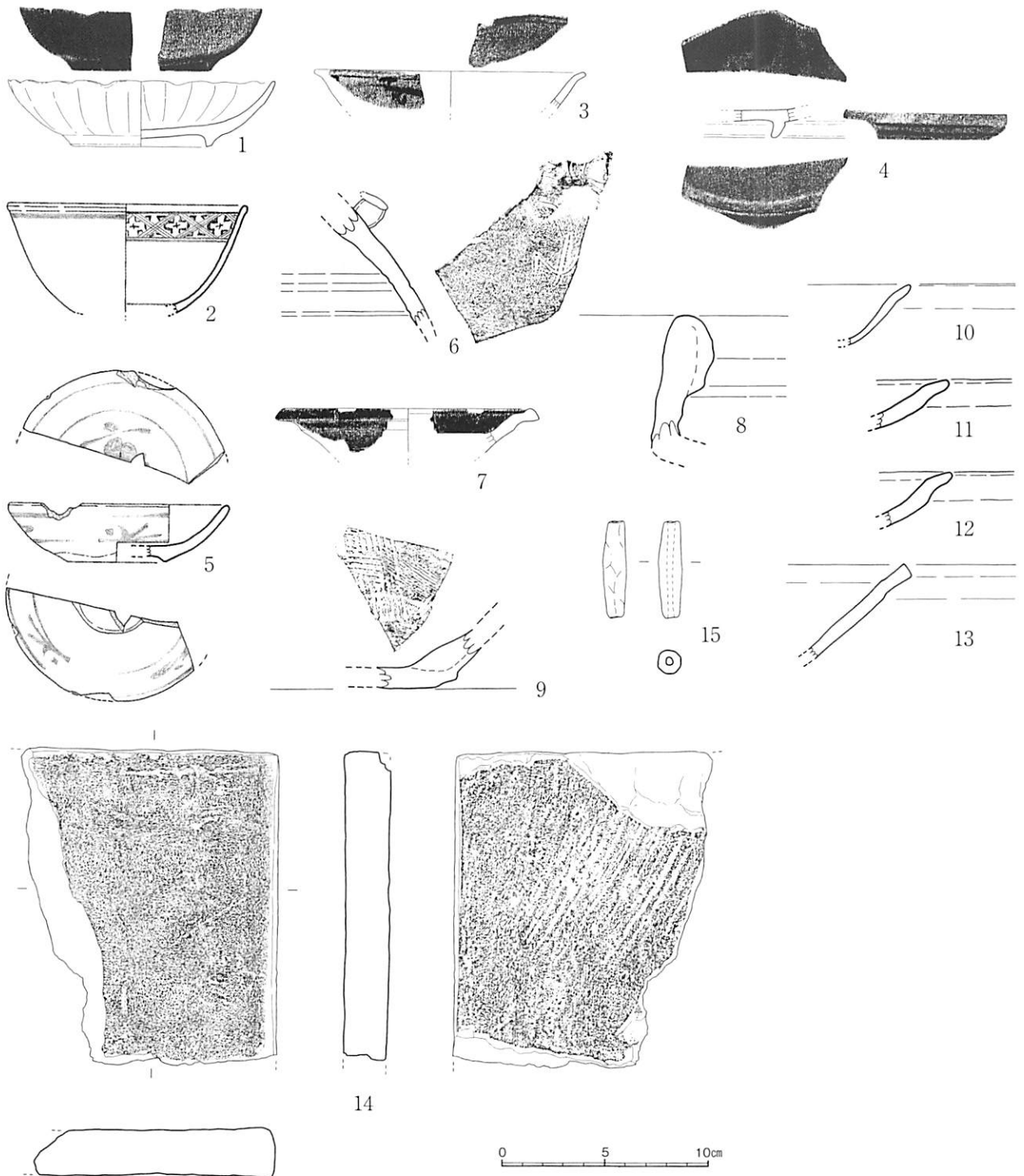


第4-108図 SK269 (=S137) (1/30)

2つの土坑

深さ0.1mの平面円形の土坑が掘られ（SK269A土坑）、大量の拳大の礫が廃棄されたのち、西側に長さ2.4m、幅1.4m、深さ0.3mの不整長円形の土坑が掘られている（SK269B土坑）。しかし上位で出土した遺物を2つの土坑に分離することはできなかった。ともに礫が充満し、その間にはほぼそした暗褐色土の単一層が詰まっていた。礫の中には安山岩の河原石に混じって凝灰岩角礫や結晶片岩礫など遠隔地から持ち込まれたものも混じっている。土器等の遺物も破片が礫の中に混じりこむ状態で、被熱礫も多く、どちらの土坑もなんらかの建築材をかたづけた廃棄土坑である。16世紀第4四半期前半の土坑SK252を切り、おなじく16世紀第4四半期前半の溝SD131に切られているので、16世紀第4四半期前半のある時期に、礫などの廃棄物を処理するためにつづけてほられた土坑と考えられる。

廃棄土坑



第4-109図 SK269出土遺物 (1/3)

SK269 出土遺物 (第4 - 109 図)

景德镇青花

A 土坑出土と確認できるのは残留した須恵器甕片のみで、ほかはすべて B 土坑の礫群の中に入り込んだものである。1 は 16 世紀の中国龍泉窯系青磁稜花皿。2 は口縁内面に四方禪文を描く中国景德镇窯系青花碗の 16 世紀後半のいわゆる饅頭心碗の口縁片。3 は 15 世紀後半から 16 世紀前半の中国景德镇窯系青花皿 B 群の口縁片。4 は中国景德镇窯系青花皿の底部片。5 は景德镇窯系青花皿 C 群を模倣した碁笥底の中国漳州窯系青花皿で、口縁に土師器と同じような打ち欠きがある。6 は中国製褐釉陶器四耳壺の肩部で、外面にヘラ記号がある。7 は大窯 3 期の瀬戸美濃産陶器の溝縁皿口縁片。8 は 16 世紀中葉中世 6b 期の備前焼の甕口縁片。9 は斜めスリ目を施す近世 1 期の備前焼播鉢の底部片。10 は京都系土師器 1 期の皿口縁片。11 と 12 は京都系土師器 3 期の皿口縁片。13 は 16 世紀後半の河野分類 B - II 類の土師器鍋口縁片。14 は埴片。15 は端部をヘラ調整する完形の管状土錘 A 類。

備前焼播鉢

接合資料

なお SD131、SE147、SK231 出土片と接合した中国焼締陶器鉢 B 類 (接合資料 11) の破片。SE148 井筒内、SK262 出土片と接合した備前焼甕底部 (接合資料 27) の破片。SD250、SK231、SK236、2 号墓 (ST135) 出土片と接合した中国製黒褐釉陶器壺 (接合資料 28) の破片。SD141 出土片と接合した中国製褐釉陶器 (接合資料 29) の破片など多くの接合資料が出土している。

そのほか

ほかに 16 世紀後半の白磁皿、中国製黒褐釉陶器、瓦質火鉢、海部郡産の埴、鉄釘の破片が出土し、残留遺物として古代の土師器坏片も出土している。

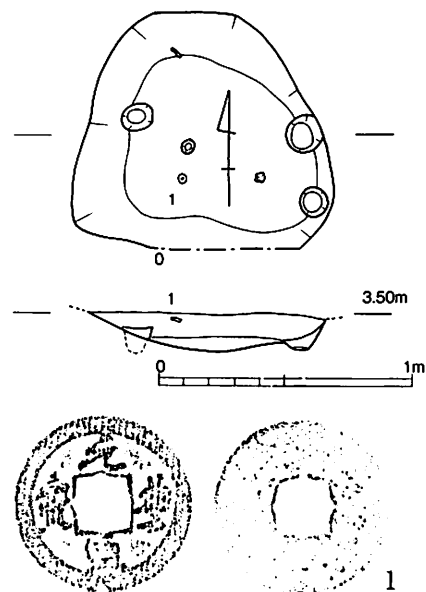
SK156 (第4 - 110 図)

墓地の中  
廃棄土坑

C8 区 (北 2 区) の第 2 層除去後に検出した長さ 1.0m、幅 1.0m、深さ 0.15m の不整円形の土坑である。断面は浅い皿状で、底面は凸凹している。16 世紀第 2 四半期の土坑 SK163 と SD165 を切る。埋土は第 2 層土の単一層で、そのなかに土器の破片が散在する状況である。墓地の中にほられた廃棄土坑である。中国漳州窯系青花を出土していることなどから 16 世紀第 4 四半期前半の遺構とした。

SK156 出土遺物

1 は完形の中国銅銭、星形孔の元豊通寶 (北宋初鑄 1078 年・行書体)。なお SD250 出土片と同一個体の中国漳州窯系青花碗の底部 (接合資料 36) と動物骨の破片が出土している。



第4 - 110 図 SK156 (遺構 1/30、遺物 1/1)

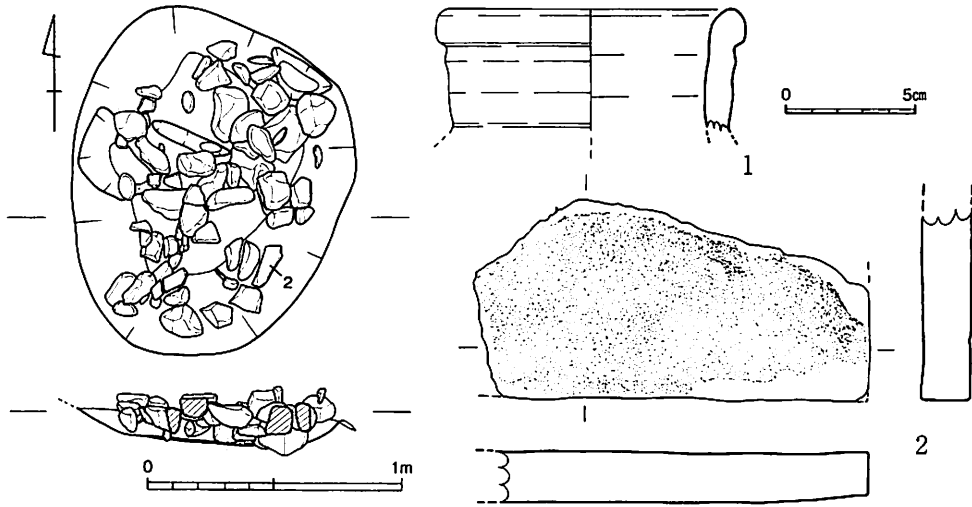
SK279 (第4 - 111 図)

廃棄土坑

B9 区 (北 1 区) で検出された長さ 1.3m、幅 1.1m、深さ 0.25m の長円形の土坑である。断面は半円形で、埋土は第 2 層土の中に礫と瓦や埴の破片が充満する状態である。16 世紀第 3 四半期の土坑 SK293 を切り、第 4 四半期後半の土坑 SK215 と第 4 四半期前半の土坑 SK263 に切られる。廃棄土坑である。切合関係から 16 世紀第 4 四半期前半と考えられる。

SK279 出土遺物

1は備前焼壺の口縁片。2は胎土に大形の石英粒子を多量に含む海部郡産の埴片。ほかに備前焼甕、多数の瓦や残留した古代の須恵器の破片が出土している。



第4-111図 SK279 (遺構 1/30、遺物 1/3)

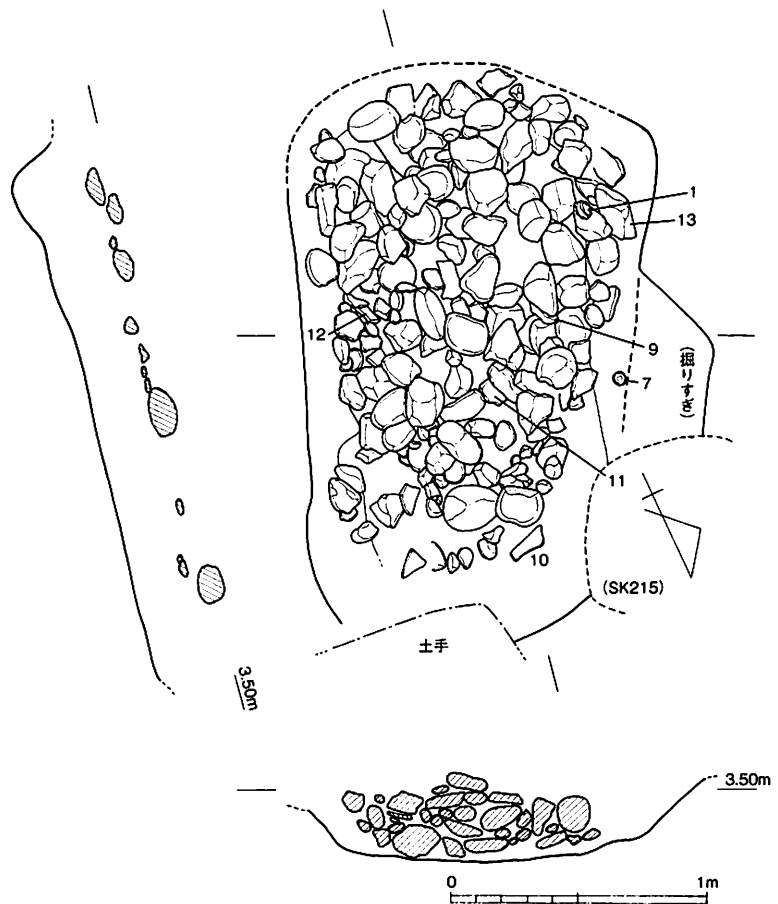
SK263 (第4-112図)

B9区(東区)のSK231の底面で検出した長さ2.3m、幅1.2~1.4m、深さ0.3mの長方形の集石

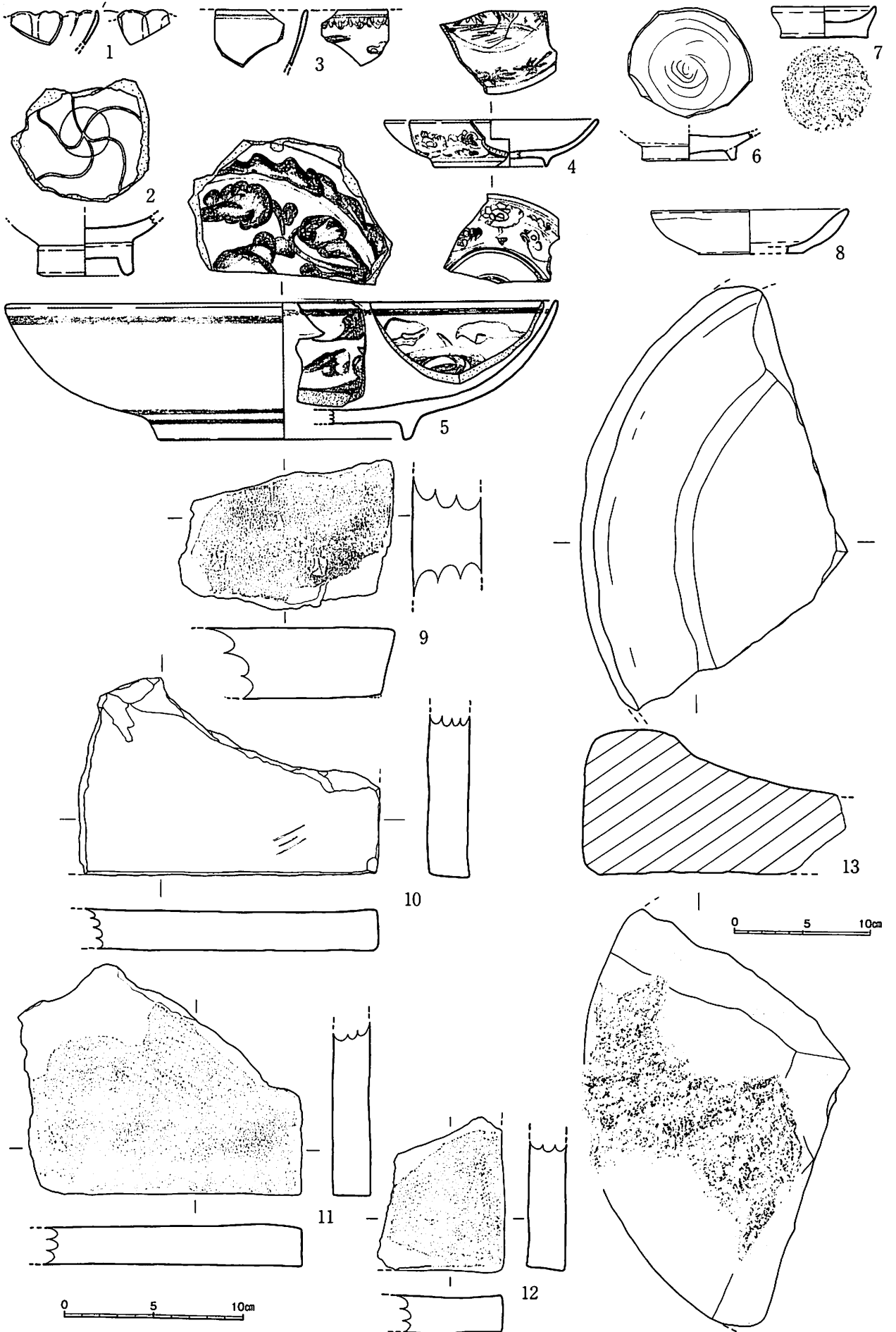
集石土坑

土坑である。断面は逆台形で、内部には人頭大の礫が充満し、礫の間に瓦・埴・石臼・陶磁器・破片が多数含まれている。礫には結晶片岩や凝灰岩など遺跡周辺で採集できない石材を多く含んでおり、同時に被熱したのも多いため、火災等で瓦礫となった建築材と生活材を廃棄した土坑と考えられる。16世紀第4四半期前半の土坑SK279を切り、第4四半期後半の土坑SK215とSK231に切られる。切合関係から16世紀第4四半期前半と考えられ、同じ時期の遺構から出土した破片と接合した接合資料も多く、時期の推定を補強している。

火災処理土坑



第4-112図 SK263 (1/30)



第4-113図 SK263 出土遺物 (1/3、13=1/4)



## SK263 出土遺物 (第4 - 113 図)

青花

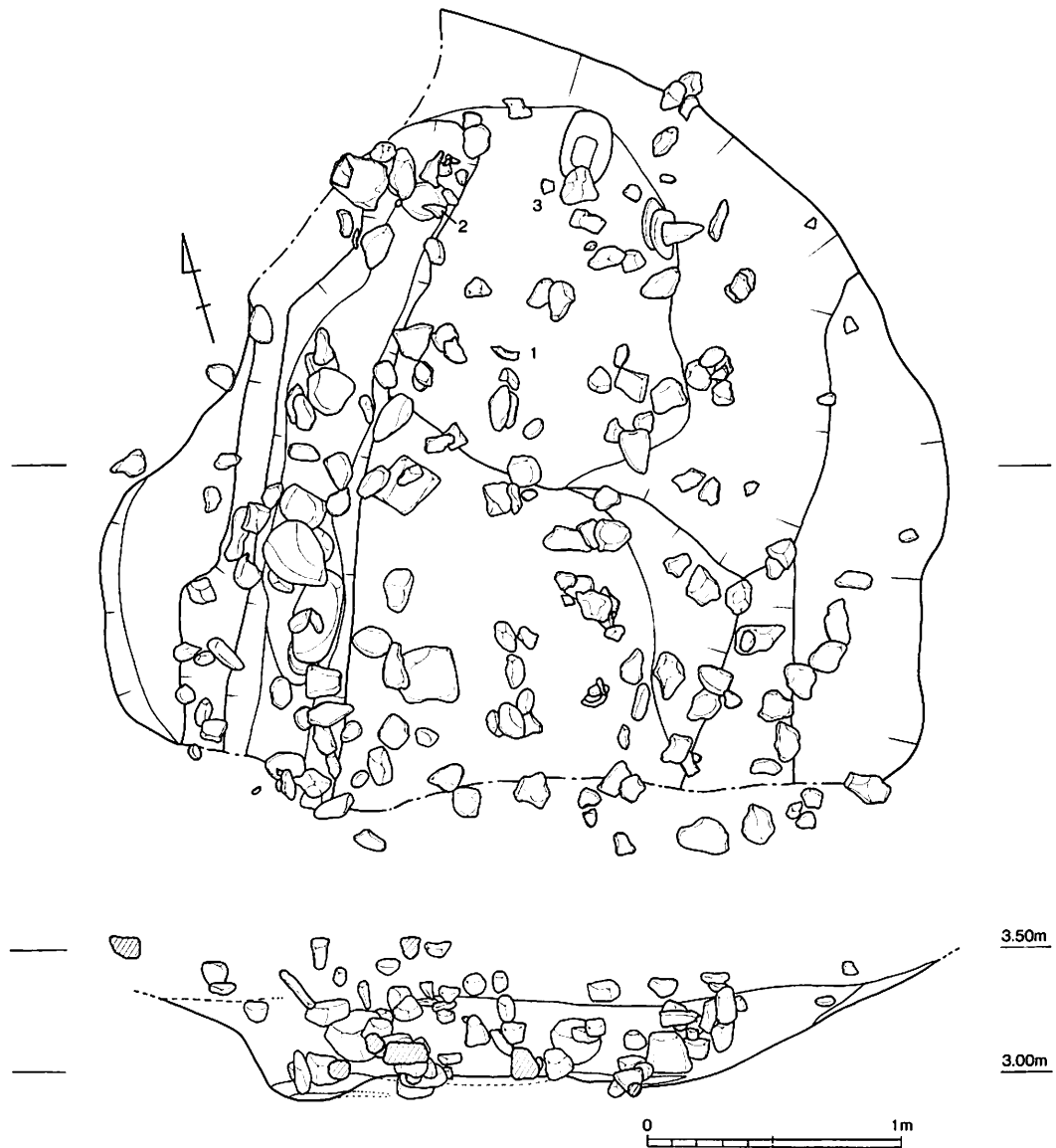
漳州窯

1は中国景德鎮窯系青磁の菊花皿の口縁片。2は16世紀の中国龍泉窯系青磁碗B - IV類の底部片、口縁全周を打ち欠いた可能性もある。3はSK252出土片と同一個体の中国景德鎮窯系青花碗口縁(接合資料20)。4は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿E群の破片。5は中国漳州窯系青花大皿の底部と口縁片3点は同一個体である。6は口縁全周を打ち欠いた中国漳州窯系青花碗底部。7は口縁をかなり欠いた完形の15世紀の底部糸切の土師器小皿。8は16世紀後半の京都系土師器を模倣した底部糸切の土師器皿片。9は2ヶ所に小さな刻印のある厚手の埴片。10～12は埴の破片。13は凝灰岩質安山岩製の石臼の上臼片。

なおSD116、SD131、SD250、SE148出土片と接合した瓦質の風炉(接合資料2)、SD116、SD131、SD250、SE148、SK262、SP214出土片と接合した備前焼の壺(接合資料4)、SK262出土片と接合した埴(接合資料39)の破片が出土している。ほかに備前焼甕胴部、内面布目の丸瓦の破片が出土している。

## SK229 (第4 - 114 図)

B9区(北1区)の第2層除去後に検出した長さ3.2m以上、幅3.3m、深さ0.6mの不整形形の土坑である。16世紀第4四半期前半の溝SD230を切る。SK228とSK232に切られる。調査中は1つ



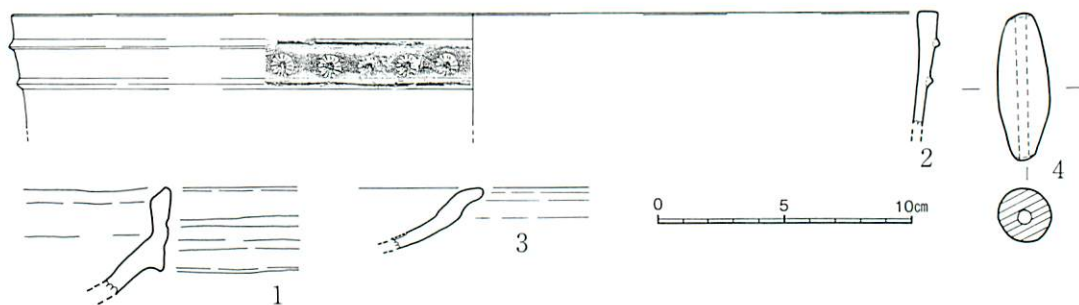
第4-114図 SK229 (1/30)

3つの土坑

の方形土坑と判断したが、完掘近くなって3つの土坑の重複と判明し、そのため切合関係は整理できなかった。埋土は第2層土の単一層で、内部には凝灰岩礫を含む大型礫が散在していた。出土遺物も礫の間に破片化して散在している。3つの土坑のうち1つは間違いなく16世紀第4四半期前半の遺構である。

SK229 出土遺物 (第4 - 115 図)

1は中世6期の備前焼播鉢の口縁片。2はSD118とSD250出土片と接合した菊花文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片(接合資料17)。3は京都系土師器2期の皿口縁片。4は端部を手づくねの管状土錘B類の完形品。ほかにロクロ目土師器、土師器鍋、平瓦、漆塗りの木製品、残留した古代須恵器甕胴部、製塩土器の破片が出土している。



第4-115図 SK229 出土遺物 (1/3)

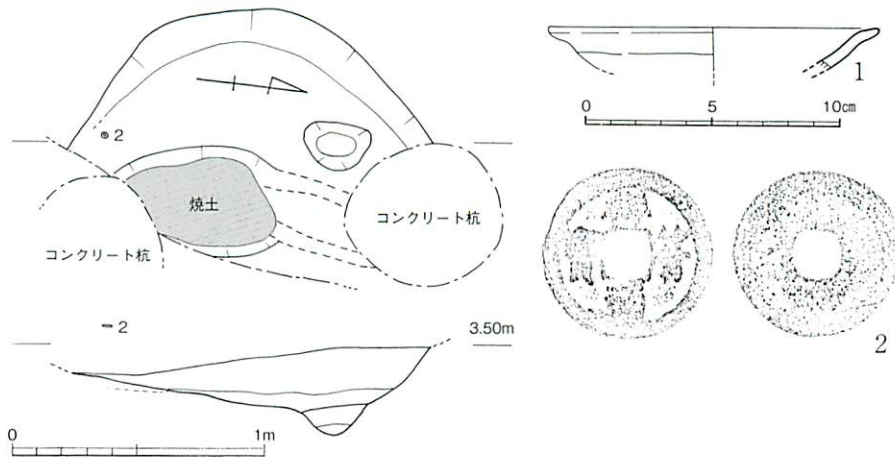
不整形円形

SK273 (第4 - 116 図)

B9区(東区)で検出された長さ1.5m以上、幅1.0m以上、深さ0.35mの不整形円形の土坑である。断面は皿形で、上部に焼土混じり層が堆積し、下層は暗褐色微砂質土(5mm大の炭焼土多い)である。16世紀第4四半期前半の溝SD230を切り、同じ時期の土坑SK261に切られる。切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。

SK273 出土遺物

1は京都系土師器1期の皿口縁片。2は完形の中国銅銭、祥符通寶(北宋初鑄1009年)。



第4-116図 SK273 (遺構 1/30、遺物 1/3、2=1/1)

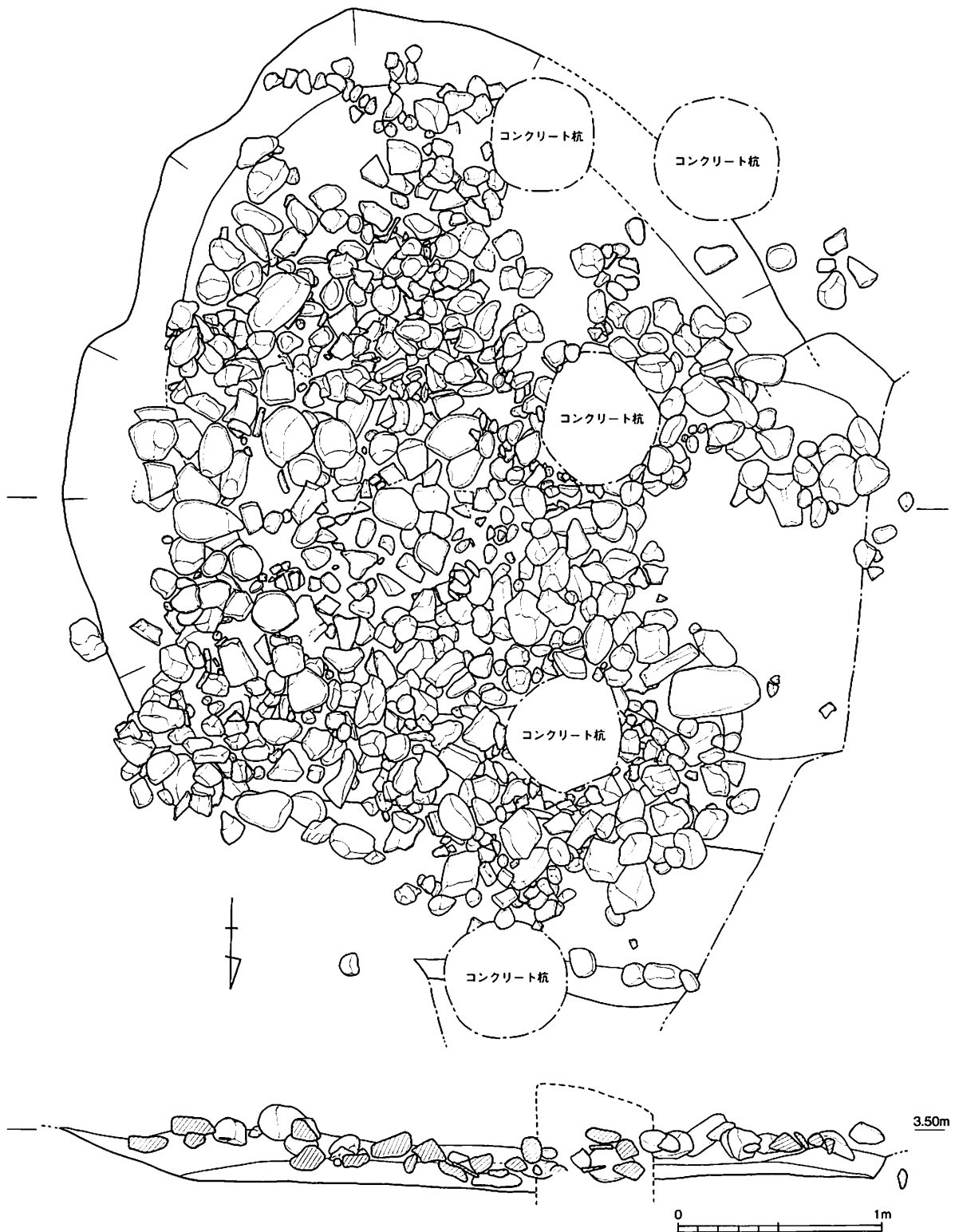
## SK262 (第4 - 117 図)

大型土坑

B10区(東区)のSK231の底面で検出された長円形の大型の土坑である。長さ4.8m、幅4.0m以上、深さ0.4m。内部に瓦礫が充満した廃棄土坑である。瓦や埴、さらに備前焼甕等の大型品の破片が多く、礫も人頭大から拳大まで多様で、凝灰岩礫や結晶片岩礫を多量に含む。炭や焼土をそれほど

廃棄土坑

含まないので火災処理土坑とはいえないが、何らかの理由で破壊された家屋の廃棄物を処理するためにほられ、一気に廃棄されたものである。16世紀第2四半期の井戸SE291と第4四半期前半の



第4-117図 SK262 (1/30)

溝SD292を切り、第4四半期後半の土坑SK231に切られる。近世1期の備前焼甕が出土したことから、切合関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられる。

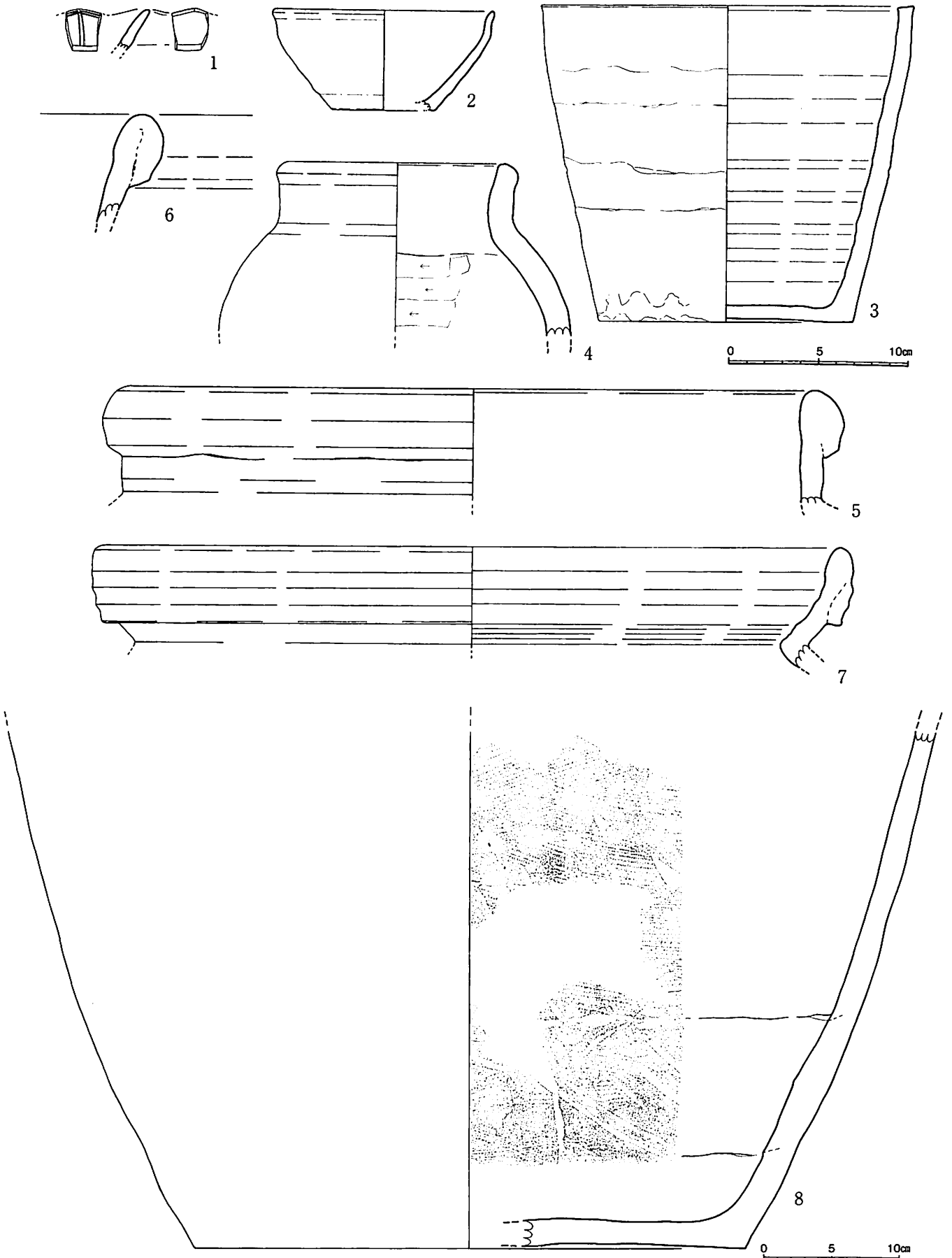
SK262 出土遺物（第4 - 118 図①～⑥）

備前焼水差し、  
5次と接合

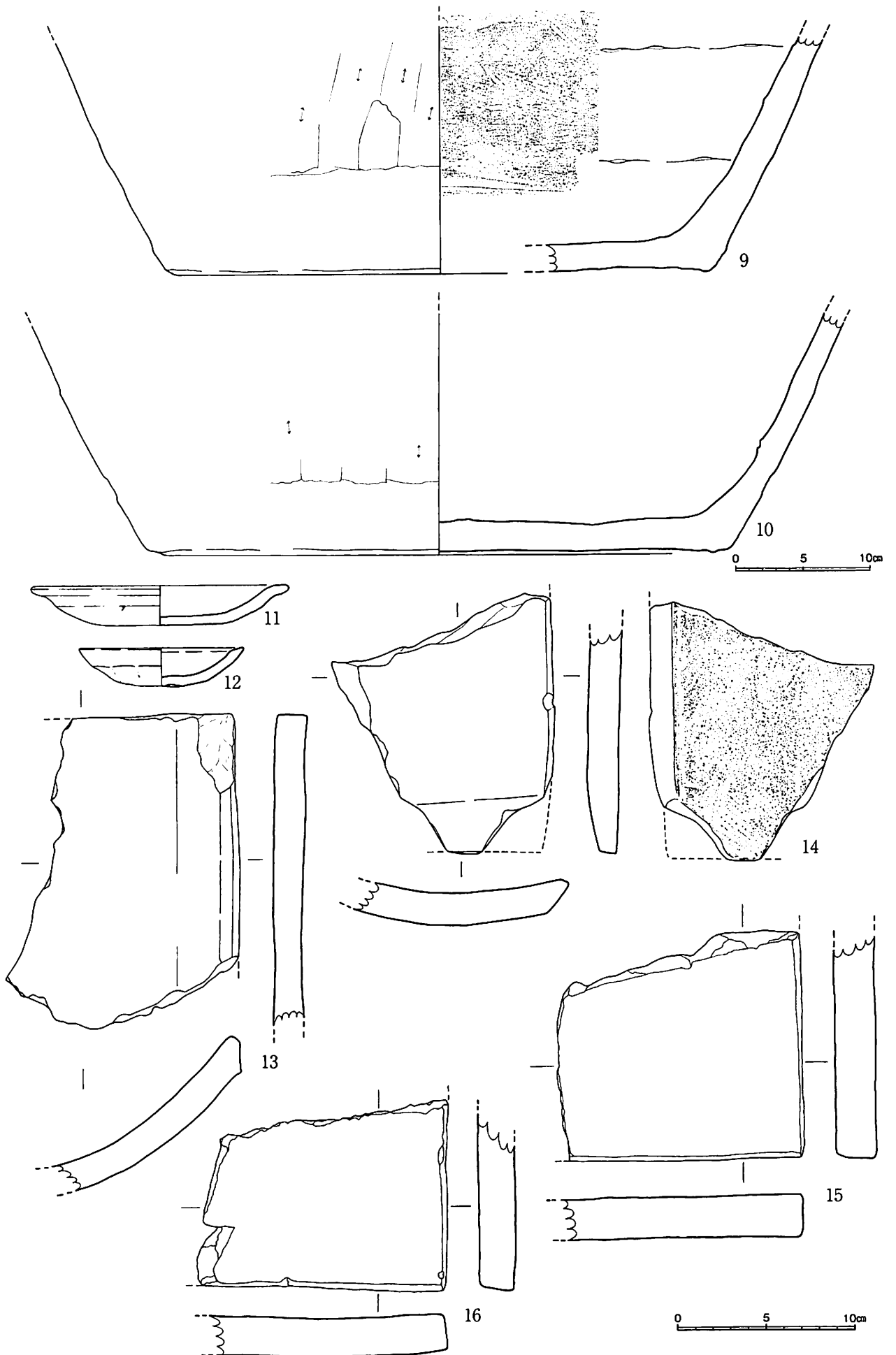
1は15世紀中国白磁D群の多角坏の口縁片。2はSD141（B11区）出土片と接合した瀬戸美濃産天目碗（接合資料13）。3はSD250、SK261出土片と接合した備前焼水差し（接合資料7）。大友5次A調査のSD436出土破片と接合している<sup>註1</sup>。茶器として焼かれた可能性が高い。4は備前焼小型壺の上半。5は16世紀前葉中世6a期の備前焼の甕口縁片。6は中世6期の備前焼の甕口縁片。7は16世紀後葉近世1期の備前焼の甕口縁片。8はSD250、SK261出土片と接合した備前焼の甕底部（接合資料26）。9はSE148井筒内とSK269出土片と接合した備前焼の甕底部（接合資料27）。10は備前焼の甕底部。11は京都系土師器2期の皿口縁片。12は京都系土師器2期の小皿口縁片。13と14・29・32・52は胎土に大型石英粒を含む海部郡産の平瓦。15～18・20・21・23・25・26・30・31・33・35～37・39～51・53～55は埴片。19・22・24・34・38・56は胎土に石英粒を多量に含む海部郡産の埴片。27はSD250出土片と接合した埴（接合資料38）。28はSK263出土片と接合した埴（接合資料39）。

なおSD116、SD131、SD250、SE148井筒内やSK263、SP214出土片と接合した備前焼壺（接合資料4）の破片、SD250とSE148井筒内出土片と接合した瓦質火鉢（接合資料6）の破片、SD118、SD250、SD292、SF151、SK261出土片と接合した中国製黒褐釉陶器の壺（接合資料19）の破片、SD270出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料31）の破片、SD250出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料32）の破片、SK261出土片と接合した備前焼甕胴部（接合資料34）の破片、SD118、SD250、SF151出土片と接合した備前焼甕（接合資料35）の破片等が出土している。ほかにロクロ目土師器と京都系土師器1期皿の破片が出土している。

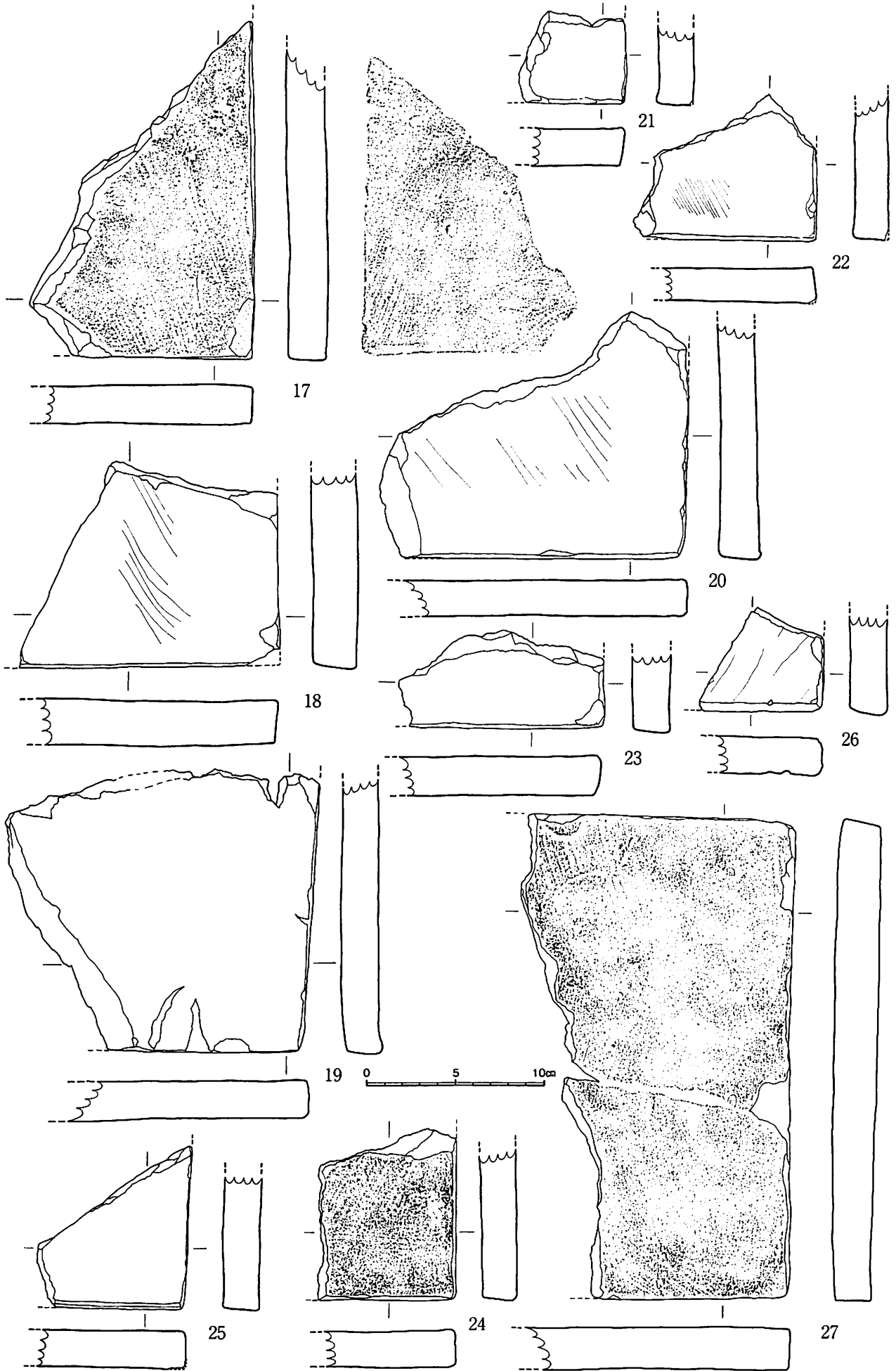
註1 「豊後府内1」（大分県教育庁埋蔵文化財センター報告1）2005、P60の第46図10



第4-118 図① SK262 出土遺物 (1/3, 8=1/4)



第4-118 図② SK262 出土遺物 (1/3、9・10=1/4)

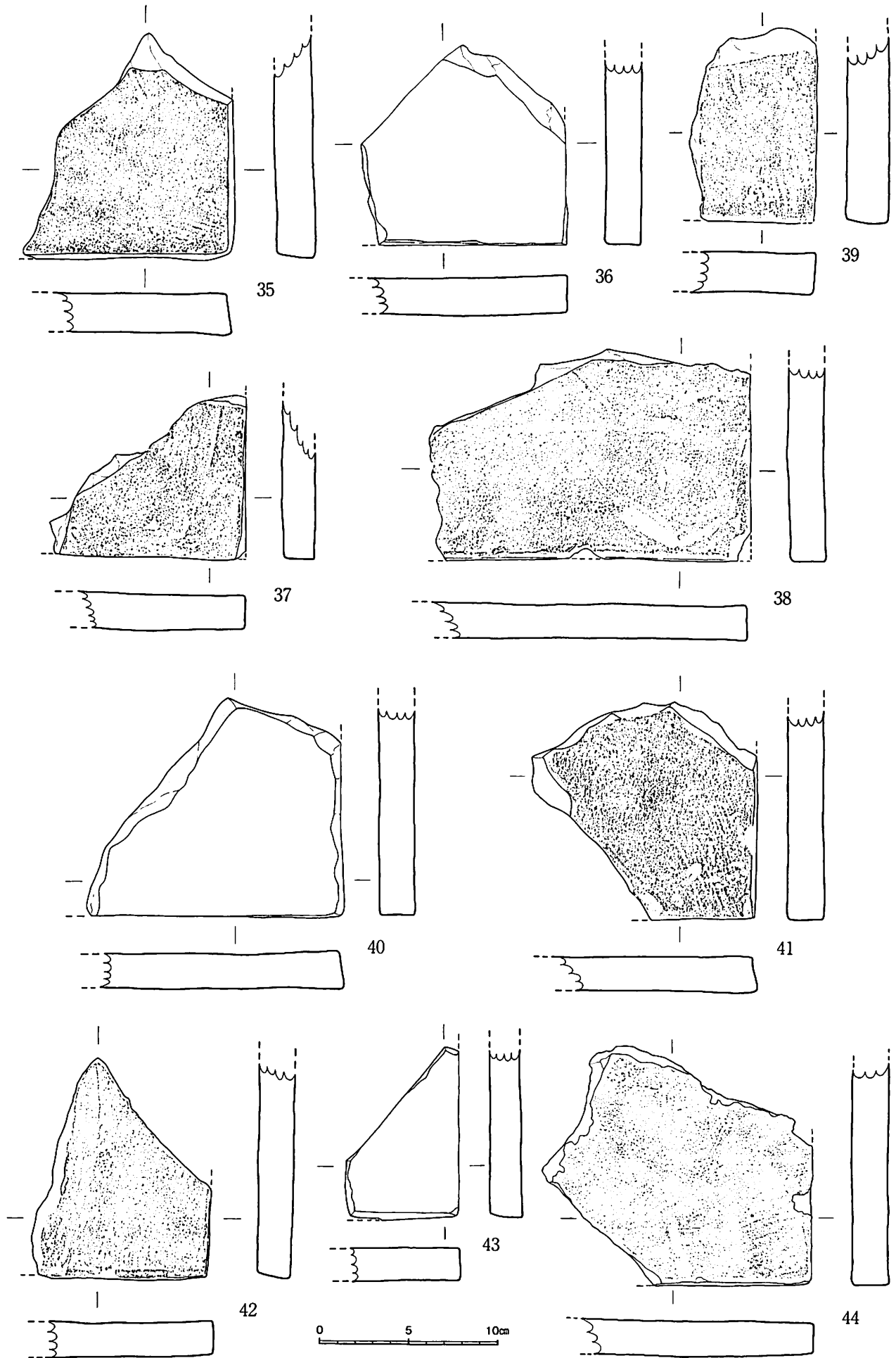


第4-118 図③ SK262 出土遺物 (1/3)

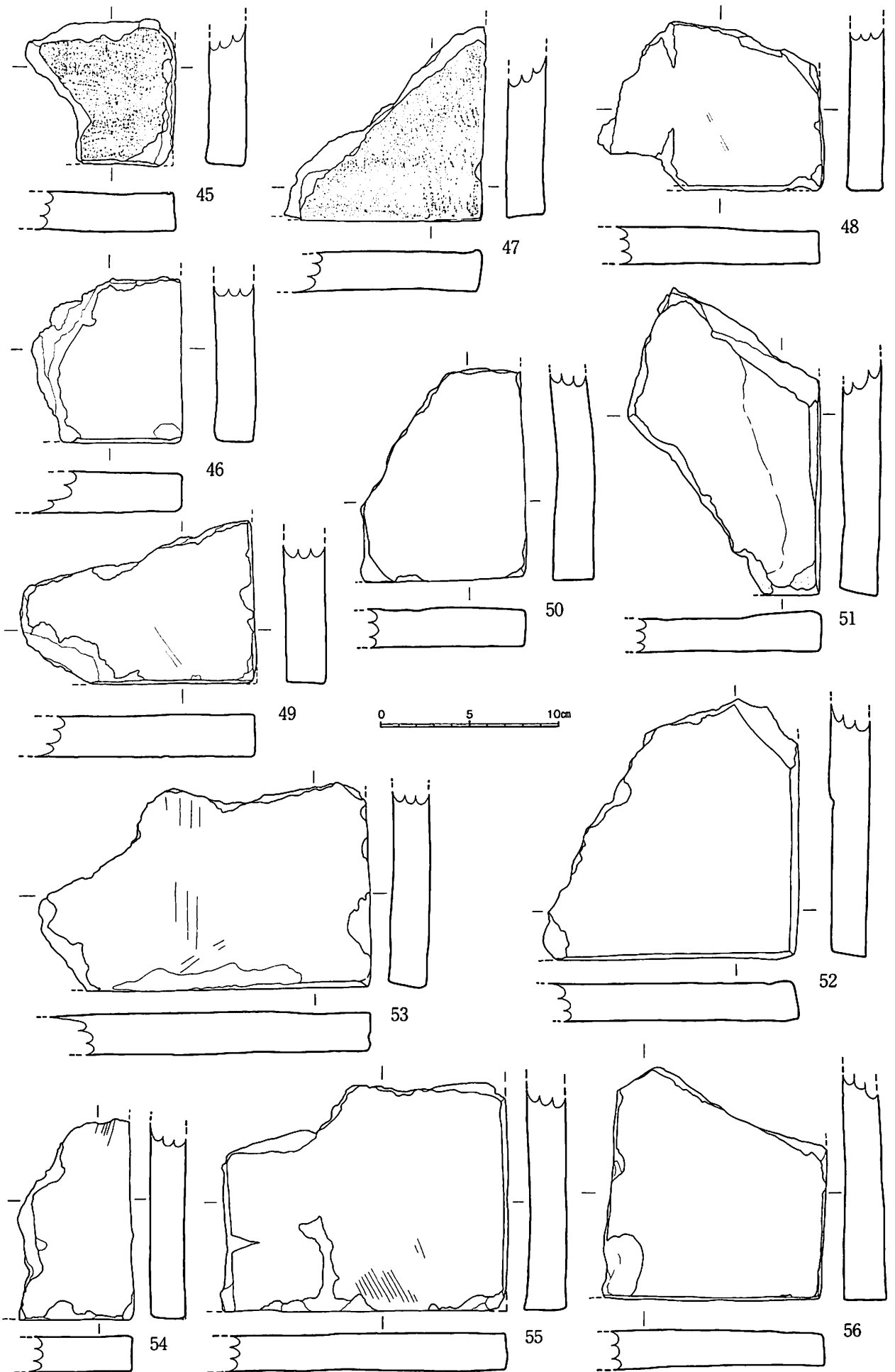


第4-118図④ SK262 出土遺物 (1/3)





第4-118 図⑤ SK262 出土遺物 (1/3)



第4-118 図⑥ SK262 出土遺物 (1/3)

## 小結

16世紀第4四半期前半の状況をまとめると、次の6点に集約できる。

- 道路 ① 道路状遺構 SF151 は引き続き路面を更新し維持されるが、道路の北側側溝は SD165 から SD250 さらに SD270 と掘りなおされつつ、次第に南に移動する。溝 SD165 と異なり、SD250 以後は矢板で護岸を強化しなくなる。同時にそれまで SF151 の道路面であった南側に、かなり大きな溝 SD118、SD117、SD116 が順次掘りなおされていく。つまり道路状遺構 SF151 には第3四半期までは南側に側溝がなかったのに、この時期に両側側溝となる。同時に水路としての機能は北から南に移るようで、道路幅も広くて2mほどに狭くなったと考えられる。
- 両側側溝
- 成人墓地 ② 第3四半期に幼児の墓が集中した北2区は、南北方向に棺を向け等間隔に成人墓を配する墓地に整備され、その北側には墓地とその北側の空間を画すと推定される溝 SD131 が掘られている。したがって墓地は北側に続く大きな敷地の南端にあたり、道路が接するあたりに、新たに整備されたもので、成人墓とその家族の墓が配されたものと推測される。墓地については節を改めて述べる。
- ③ 西区の第1四半期以来の区画はこの時期の遺構がない。
- ④ 第3四半期に引き続き、東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、宅地が継続する。
- 「中町」の角地 しかし井戸や廃棄土坑が数多く掘られるばかりでなく、道路に並行して SK230、SK261、SD292 と連なる排水遺構が敷地の南辺に造られている。
- 全体として第4四半期になっても道路の位置や宅地の区画に大きな変動はないが、各区画のなかではそれぞれ遺構の内容に変化があり、遺構の密度が最も高いのがこの時期である。

7 16世紀第4四半期後半の遺構と遺物

概要 (第4-119図、付図7上)

遺物の内容

16世紀第4四半期後半と認定した遺構は、京都系土師器3期の皿を含み、1期ないし4期の新しい京都系土師器は含まない。中国景德鎮窯系青花ではE類の饅頭心碗が含まれるが、加えて中国漳州窯系青花が伴うことが多く、備前焼では近世1期の擂鉢と甕があり、中国景德鎮窯系青花皿F群、朝鮮王朝系の彫三島碗や肥前薬灰釉陶器、絵唐津が含まれる。

遺跡の概要

第4四半期後半の遺構をまとめると次のようになる。道路状遺構SF151は引き続き維持されるが、SD270とSD116の両側側溝は埋没し、SF151の両側には浅く広い溝であるSD167とSD168が存在する。その底面自体が道路面として機能した可能性もある。

それ以外の16世紀第4四半期後半代と考えられる遺構の分布は減少する。北2区の墓地は埋葬がなくなり、東西道路の北側にあたるC7区付近の西区には第4四半期前半に続き遺構がないが、その道路をはさんで対面する位置のC6、C7区の南区も遺構が少ない。C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであるが、井戸や土坑や溝が存続する。墓地については節を改めて述べる。



第4-119図 16世紀第4四半期後半の遺構 (1/300)

溝

SD141 (第4-120図、付図8)

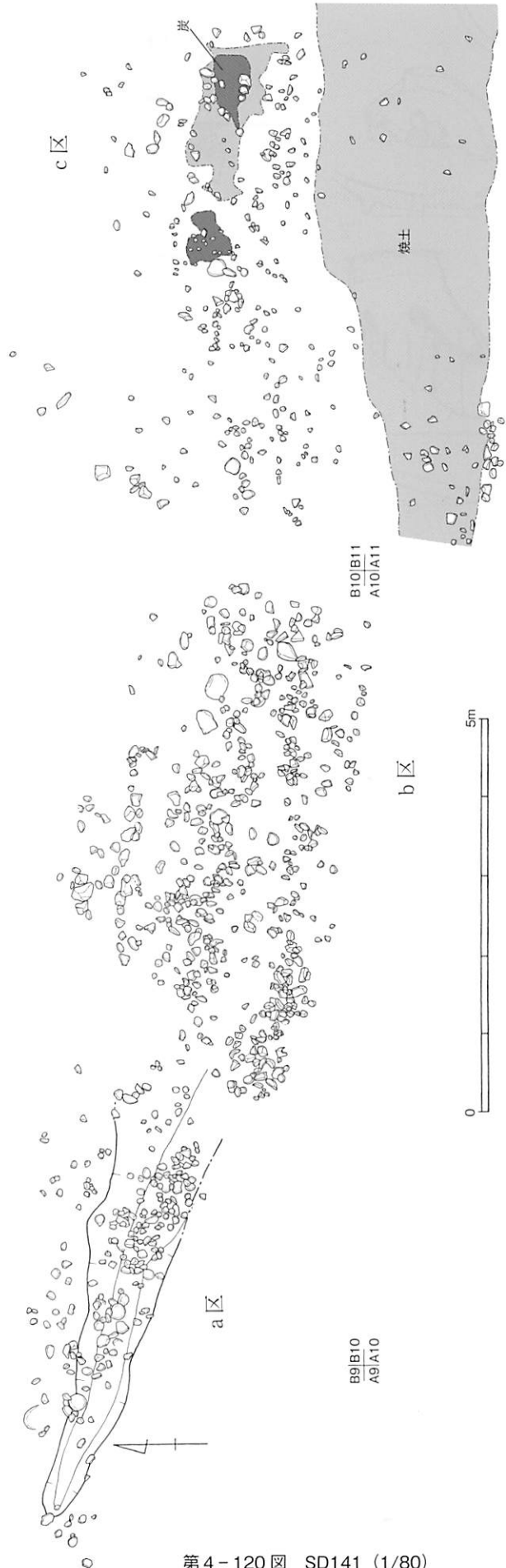
B10・11区(東区)の第2層直下で検出した長さ19m以上、最も広いところで幅4m、深さ0.3mの浅い溝である。a～c区にわけて掘下げた。SD165、SK251=SK302を切る。下に重なる溝SD165との分離がはっきりできなかった。断面は半円形で、内部には多量の凝灰岩を含む多数の礫や、五輪塔の部材が廃棄されている。また東半では焼土がかなり広く散布し、その上面には道路のように固い層があり、SD167から連続する硬化面の可能性がある。礫には凝灰岩、結晶片岩、あるいは被熱したものも多く、ある時期道路そばの溝が火災処理土坑として使われた可能性が高い。

SD141 出土遺物 (第4-121図)

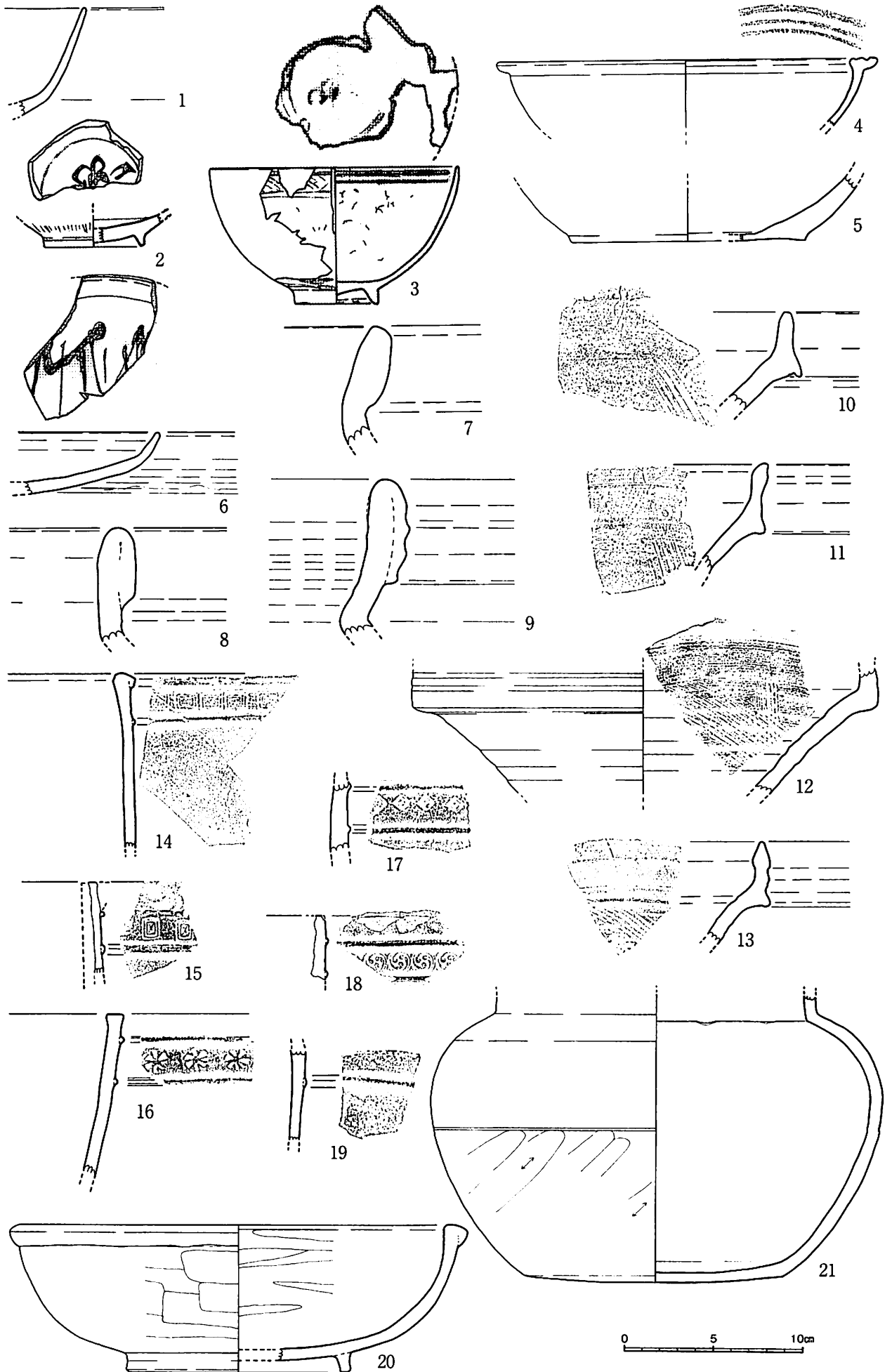
1は中国製白磁碗E-1群の口縁片。2は蓮子碗を模倣した中国漳州窯系青花碗底部。3は被熱して変質した中国漳州窯系青花碗。4は中国製焼締陶器鉢A類の口縁片。5はわずかに上げ底気味の中国製焼締陶器鉢の底部。6は1590～1610年製の絵唐津皿の口縁片。7と8はB11区焼土層出土の中世6期の備前焼甕口縁片。9は16世紀後葉近世1期の備前焼甕の口縁片。10は15世紀中葉中世5a期の備前焼播鉢の口縁片。11は16世紀前葉中世6a期の備前焼播鉢の口縁片。12と13は16世紀後葉の斜めすり目を施す近世1期の備前焼播鉢片。14は外面に雷文帯の刻印を施す瓦質火鉢の口縁片。15はB10区上層出土の刻印を施す瓦質火鉢口縁、被熱で剥離激しい。16は菊花文の刻印を施す瓦質火鉢口縁片、小突帯を貼り付けるために前もって沈線が施されている。17は多重菱形文の刻印を施す瓦質火鉢

火災処理

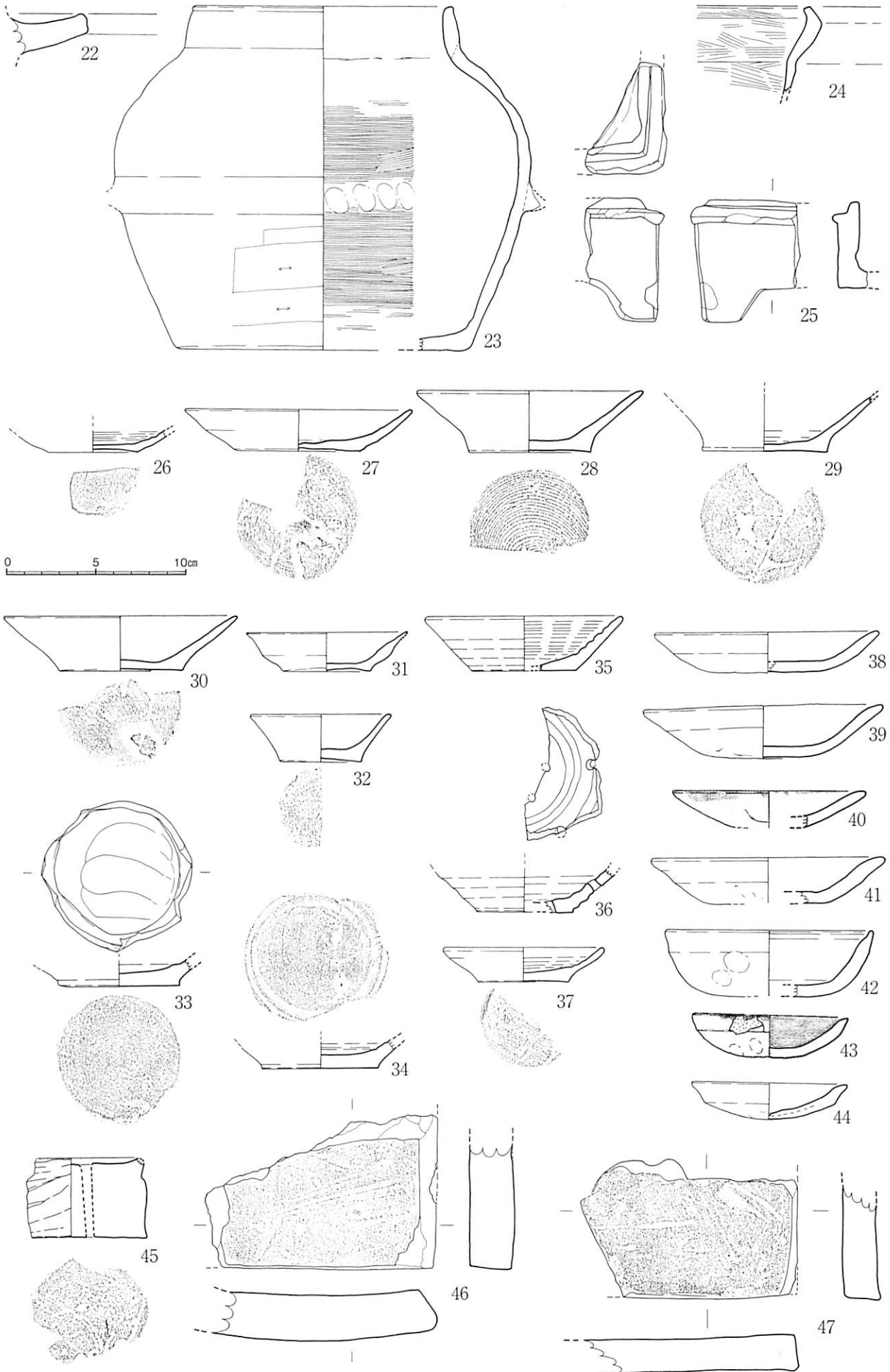
絵唐津



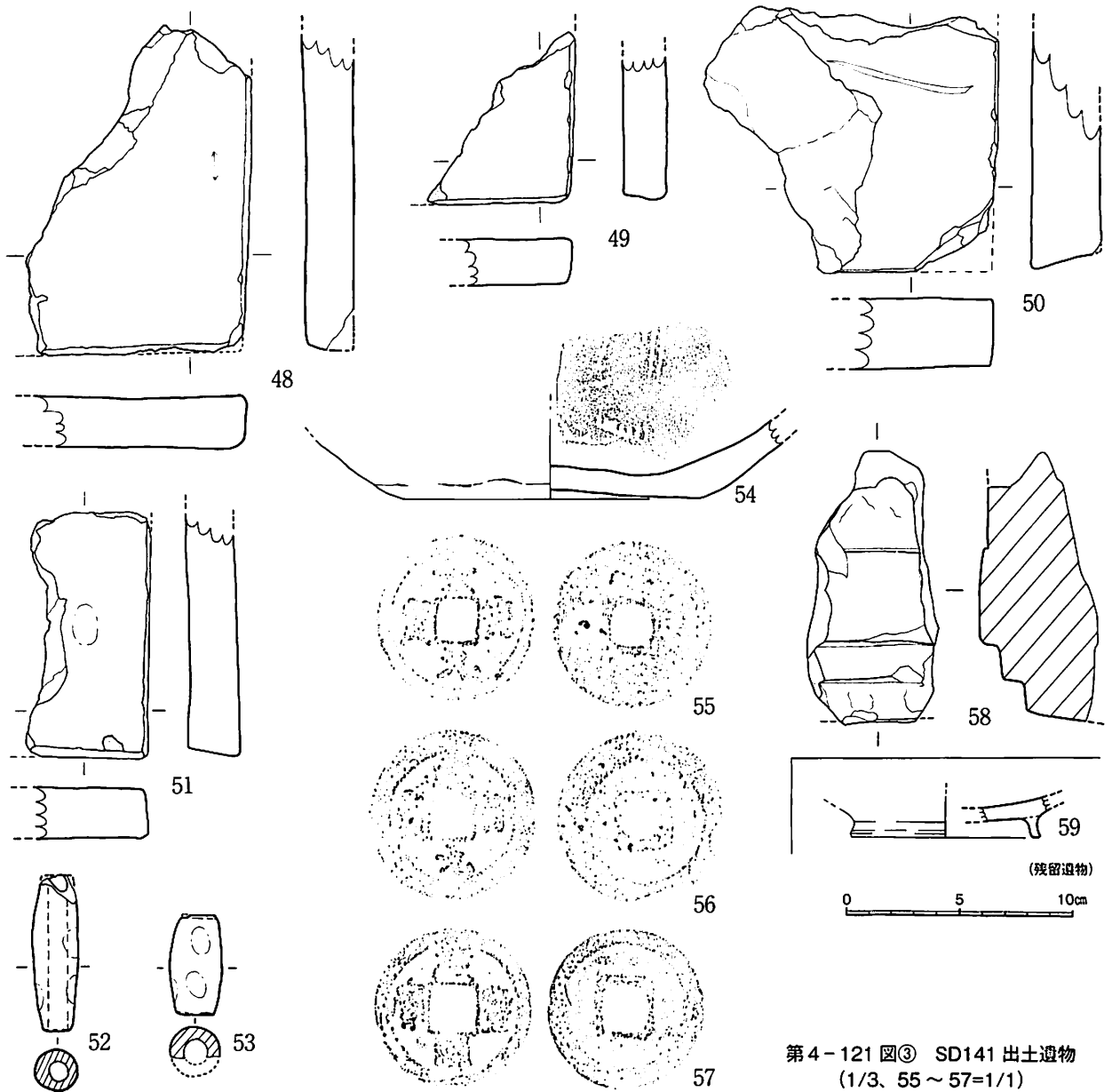
第4-120図 SD141 (1/80)



第4-121 図① SD141 出土遺物 (1/3)



第4-121 図② SD141 出土遺物 (1/3)



第4-121 図③ SD141 出土遺物  
(1/3、55～57=1/1)

土師器皿

胴部片。18は巴文の刻印を施す瓦質火鉢の口縁片。19は菊花文の刻印を施す瓦質火鉢胴部。20は玉縁状の口縁に高台を貼り付けた瓦質の浅鉢。21は外面下半をけずる瓦質の釜。底部に煤が付着している。22は瓦質釜の鐔か。23は鐔のつく瓦質釜。外面下半は削りで仕上げ、煤が付着して被熱による剥離激しい。24は口縁端部を内側に折り曲げる防長系の瓦質鍋口縁片。25はB10区下層出土の瓦質の小型箱形土器。26は薄手で白っぽい色調の大内系土師器皿の底部片。27は底部糸切の土師器坏。28と29、30は15世紀後半の河野分類A類にあたる底部糸切の土師器の坏。32は器高が低くなった河野分類A類にあたる底部糸切の土師器小皿。31は被熱のため全体がひどく剥離した底部糸切の土師器小皿。33と34は口縁全周を打ち欠いたロクロ目土師器皿の底部。35はやや厚手のロクロ目土師器皿の口縁片。36は焼成前の穿孔4箇所のあるロクロ目土師器皿の底部片。37はロクロ目土師器小皿。38は京都系土師器2期の皿口縁片。39は上部出土の京都系土師器2期の皿。40は口縁に煤が付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の小皿口縁片。41は京都系土師器2期の皿。42は京都系土師器2～3期の坏口縁片。43は全体にひろく煤が付着して灯明皿に利用された完形の京都系土師器2期の小皿。口縁に1箇所打ち欠きがある。44は被熱して剥離のある京都系土師器2期の小皿口縁片。45は穿孔が貫通する土師器燭台A2類。46



は平瓦片。47～49は埴片。50は厚手の埴片。51は胎土に石英が多く入る海部郡産の埴片。52は両端をヘラ調整する大型の管状土錘A類。53は両端をヘラ調整する管状土錘A類だが、ほかに短い寸胴の型式である。54は備前焼播鉢の底部破片を使ったメンコ、胴部の破片と接合した。55は完形の中国銅銭、景德元寶（北宋初鑄1004年）。56は完形の中国銅銭、祥符通寶（北宋初鑄1009年）。57は完形の中国銅銭、元豊通寶（北宋初鑄1078年・篆書体）。58は凝灰岩製の宝篋印塔の基礎あるいは笠部の破片。

なお以下の破片が出土している。SK262出土片と接合した瀬戸美濃産天目碗（接合資料13）。SD131、SE210掘形内、SK231出土片と接合した瓦質茶釜（接合資料21）。SK269出土破片と接合した中国製褐釉陶器（接合資料29）。ほかに碁筒底の中国漳州窯系青花皿、中国黒褐釉陶器壺、丸瓦、がんぶり瓦、鉄器の破片が出土している。動物骨としてウシ上顎臼歯右3、ウマ上顎臼歯などが廃棄されていた。その中の残留遺物としては、59の古代の黒色土器A類碗の底部片や、ほかに古代須恵器壺・甕、古代土師器甕・高坏の破片が出土している。

#### SD167（第4-122図、付図8）

溝または道路 西区・北1区・北2区に東西に貫通する長さ18m以上、幅約3m、深さ0.2～0.3mの溝状の遺構である。断面図からみると、溝というよりは窪みで、道路状遺構SF151の北側の道路面とみることも可能である。ただし硬化面は確認していない。SD250・SD270の位置の真上にあたる。第2層除去後に検出し、断面は浅い皿状となる。西端では当初SD165と区別できなかったため、幅広く表現されている。B10区より東では削平が激しくかつSD141が存在するので、明瞭に検出することができなかった。16世紀第3四半期以前の溝SD165と道路状遺構SF151と、さらに16世紀第4四半期前半の溝SD250とSD270を切る。内部にはところどころ礫の廃棄がみられるが、遺物はそれほど多くない。埋土は第2層土そのもので、廃棄遺物が少ないことから見ても、この付近が放棄されたまま17世紀前半に第2層土の整地層で埋め立てられたものである。中国景德鎮窯系青花皿F群が出土したことや、切合関係から16世紀第4四半期後半の遺構と考えられる。

#### SD167出土遺物（第4-123図①②）

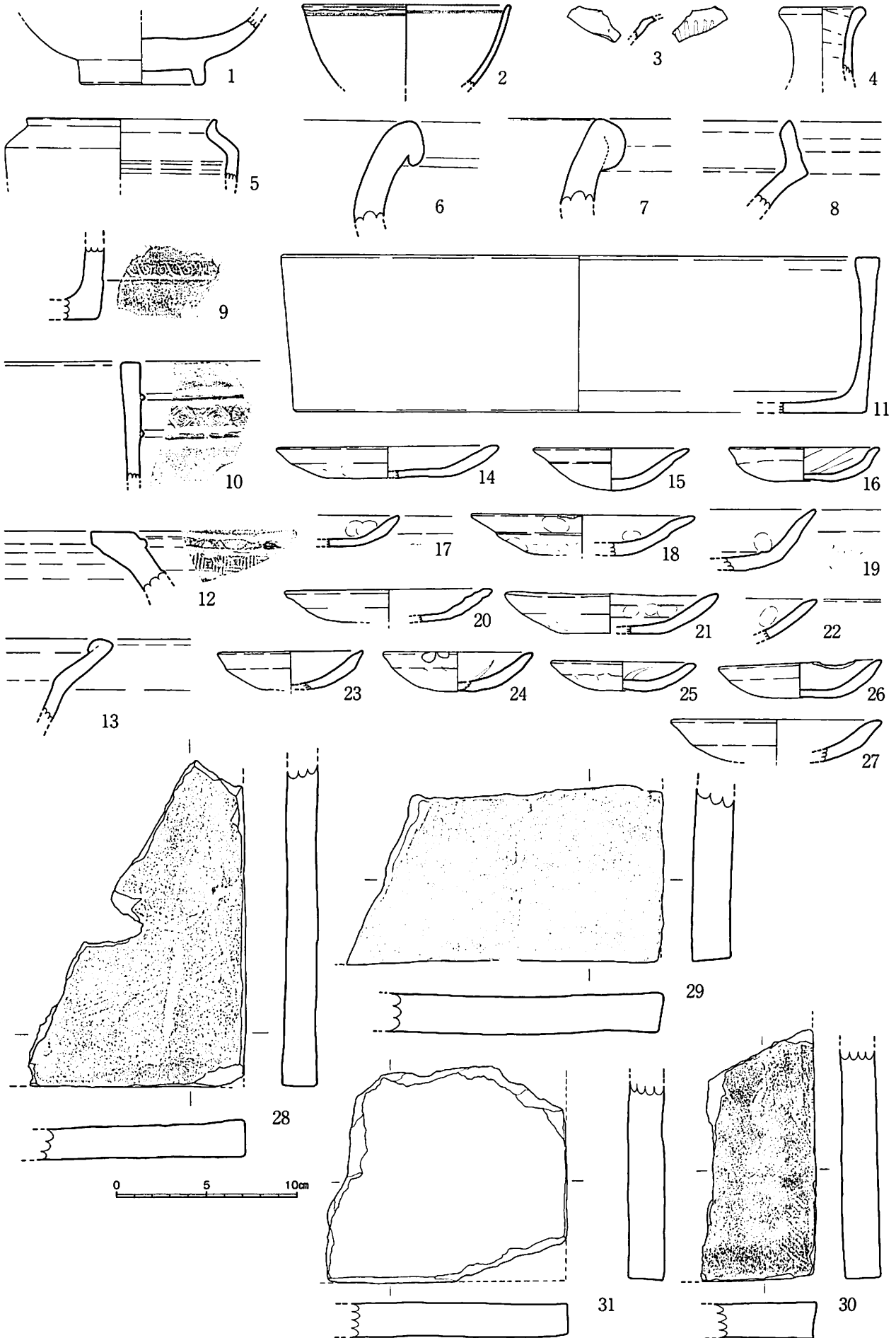
土師器 1は中国龍泉窯系青磁碗の底部片。2は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群の饅頭心碗口縁片。3は外面に鑄のある中国景德鎮窯系青花皿F群。4は備前焼舟徳利の口縁片。5は備前焼の小型短頸壺口縁片。6は14世紀中世2ないし3期の備前焼の甕口縁片。7は14世紀中世3ないし4期の備前焼の甕口縁片。8は16世紀前葉の備前焼播鉢中世6a期の口縁片。9は双頭蕨手竜雲文の刻印のある瓦質火鉢底部片。10は菱形文と菊花文からなる2種類の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。11は浅い無紋の瓦質火鉢の口縁片。12は口縁が内傾し方格文の刻印のある瓦質火鉢の口縁片。13は口縁を内側に折り曲げる防長系の瓦質鍋の口縁片。15～17は京都系土師器1期の小皿片。14・18～22は京都系土師器2期の皿口縁片。23～26は口縁に煤が付着して灯明皿として使われた京都系土師器2期の小皿口縁片。26には口縁に打ち欠きがある。27は京都系土師器3期の皿口縁片。28と31は胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の埴片。29と30は埴片。32は小型の管状土錘B類完形品。33と34は管状土錘B類。35は銅製のキセルの雁首。36は一部欠けた中国銅銭、天聖元寶（北宋初鑄1023年・篆書体）。37は半分に分れた中国銅銭で「○宋通○」と読める。皇宗通寶（北宋初鑄1038年・篆書体）と推定される。38は完形の中国銅銭、元豊通寶（北宋初鑄1078年・篆書体）。39は「○平元○」と読める完形の中国銅銭、咸平元寶（北宋初鑄998年）あるいは治平元寶（北宋初鑄1064年）と考えられる。40は銭種不明（元○○寶）の完形の中国銅銭。41は完形の中国銅銭の洪武通寶（明初鑄1368年）。42は結晶片岩製の砥石。

銭貨

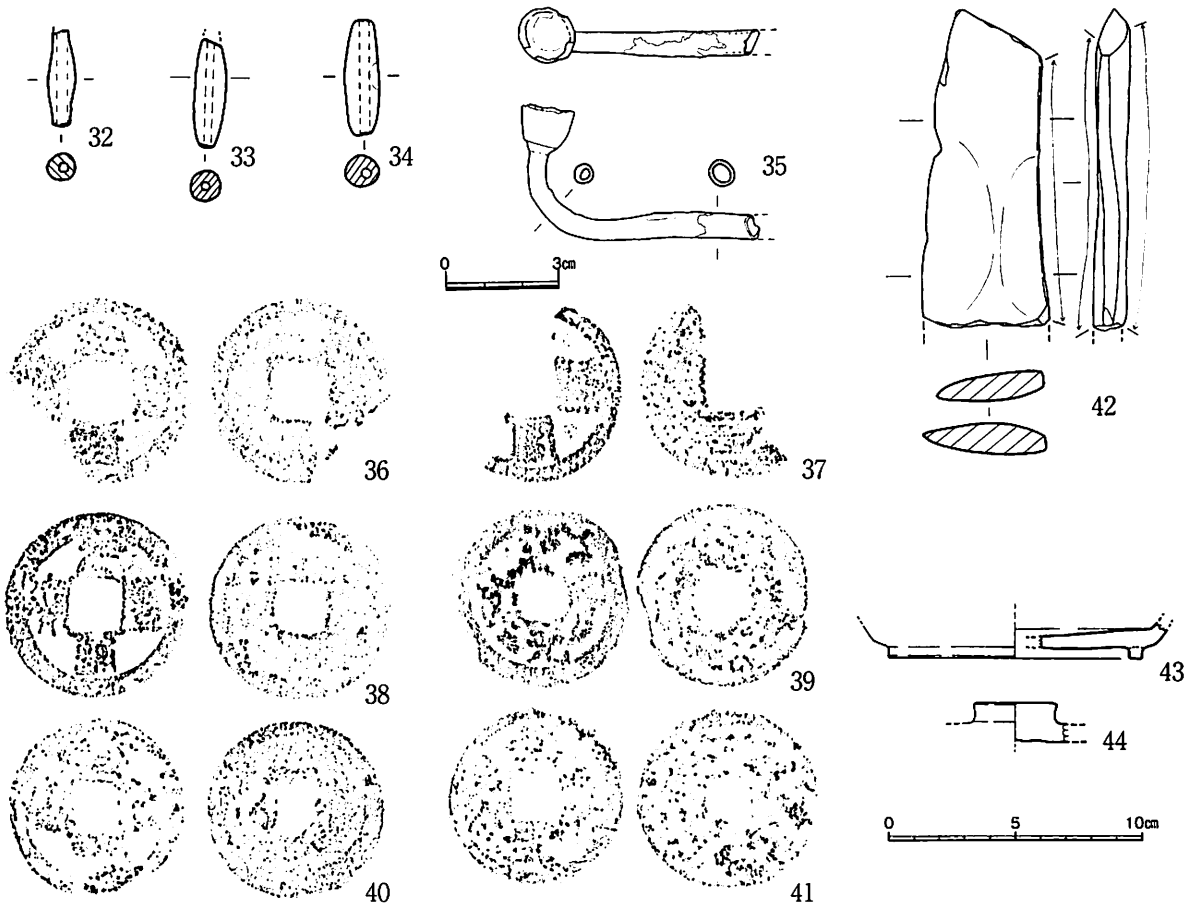
なおSD131、SD141（B10区）、SE210掘形内、SK231出土片と接合した瓦質茶釜（接合資料21）の破片と、SE148、SE210、SK231出土破片と接合した白磁皿（接合資料23）の破片が出土している。



第4-122図 SD167 (1/80)



第4-123図① SD167出土遺物(1/3)



第4-123図② SD167 出土遺物 (1/3、35=1/2、36～41=1/1)

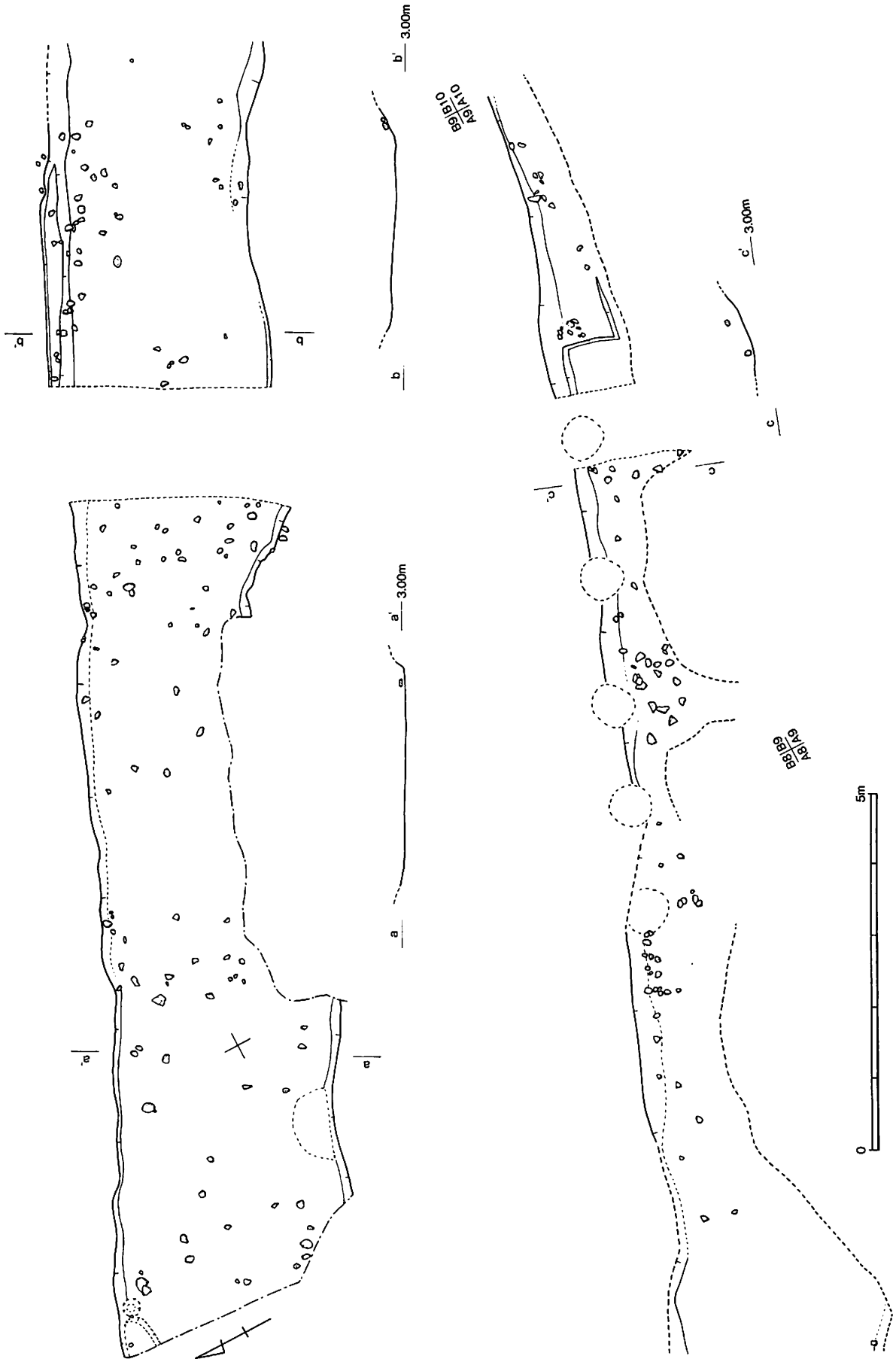
ほかにロクロ目土師器皿、土師器甕、丸瓦、海部郡産の平瓦の破片も出土している。動物骨としてはウシ臼歯が含まれる。残留遺物として、43の8世紀の須恵器坏身底部と44の古代の土師器坏蓋のほかに古代土師器高坏・碗の破片が出土している。

SD168 (第4-124図、付図8)

道路?

近世に整地

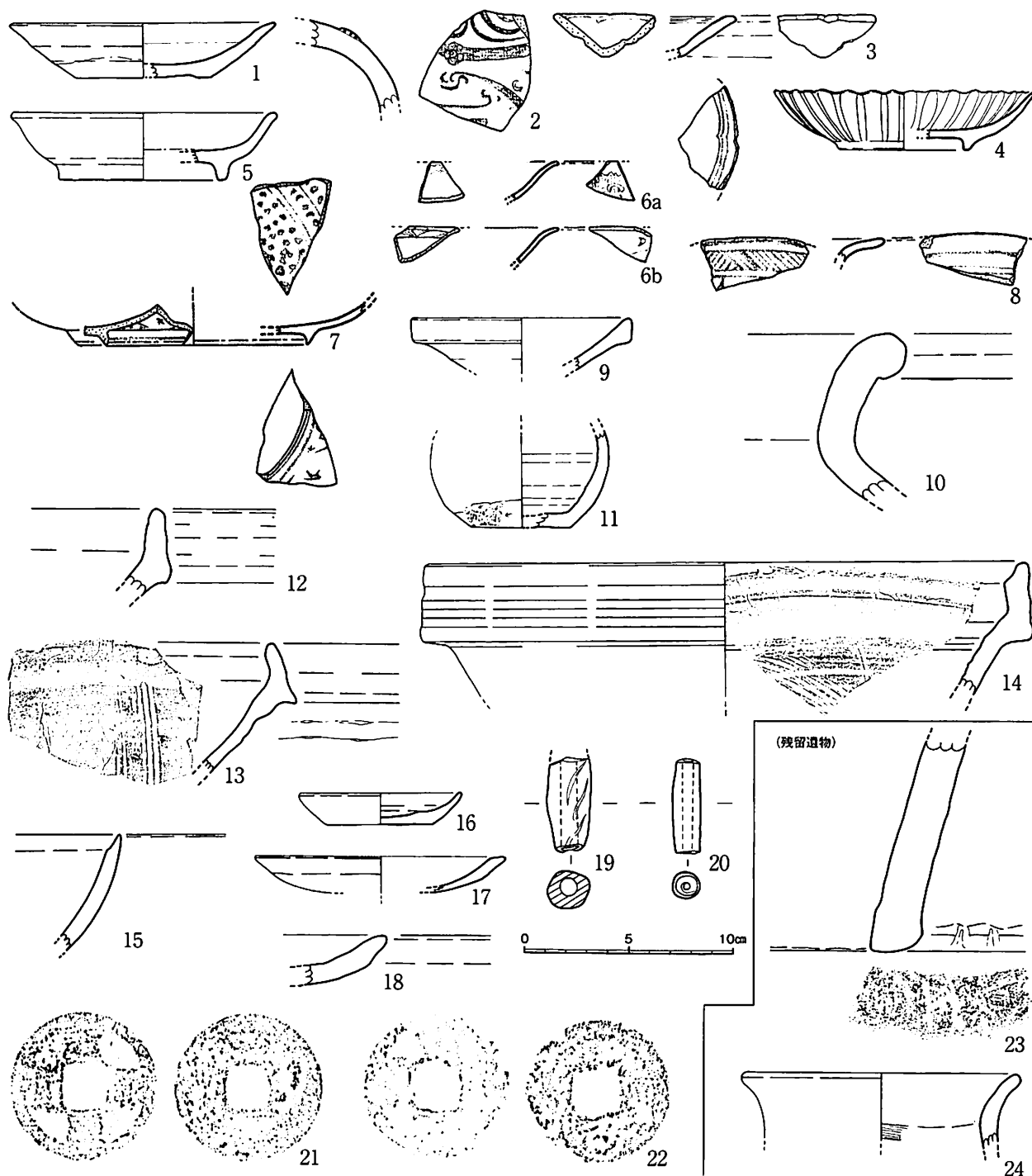
東西に貫通する長さ18m以上、幅約3m強、深さ0.2mほどの浅い溝で、SD118の位置の真上である。第2層除去後に検出し、断面は浅い皿状となる。断面図からみると、溝というよりは窪みで、道路状遺構 SF151 の北側の道路面とみることも可能である。ただし硬化面は確認していない。道路状遺構 SF151 を挟んでSD167と対応する。16世紀第4四半期前半の溝 SD116 の上、SF151 と S190 を切る。内部にはところどころ礫の廃棄がみられるが、遺物はそれほど多くなく碎片ばかりである。埋土は第2層土そのもので、廃棄遺物が少ないことから見ても、SD167 同様放棄されたまま17世紀前半に第2層土の整地層で埋め立てられたものである。中国景德鎮窯系青花皿 F 群が出土したことから、切合関係から16世紀第4四半期後半としたが、京都系土師器4期の皿が出土していることから見て、17世紀初頭の中世大友府内城下町が近世府内城下町に移転する1602(慶長7)年まで、SD168は存続していた可能性は高い。



第4-124図 SD168 (1/80)

SD168 出土遺物 (第4 - 125 図)

青磁  
 1 は内面に釉のかからない 16 世紀後半の白磁皿。2 は B8 区から出土した 14 ~ 15 世紀の中国龍泉窯系青磁瓶の肩部片。3 は B7 区から出土した 15 世紀代製作の中国龍泉窯系青磁稜花皿の口縁片。4 は中国景德鎮窯系青磁の菊花皿。5 は B8 区出土の 16 世紀後半の青磁皿。6 は中国景德鎮窯系五彩皿口縁片、a と b は同一個体。7 は B7 区から出土した 16 世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿 E 群の底部片。8 は 16 世紀末の中国景德鎮窯系青花皿 F 群の口縁片。9 は B8 区出土の中国製黒褐釉陶器の蓋か。10 は B8 区出土の 15 世紀中世 4 ~ 5 期の備前焼甕口縁片。11 は備前焼小型壺(舟德利)の底部。12 は B8 区から出土した 15 世紀後半中世 5 期の備前焼播鉢の口縁片。13 は B8 区出土の 15 世紀後葉中世 5b 期の備前焼播鉢。14 は B7 区出土の斜めスリ目をほどこす 16 世紀後葉近世



第4 - 125 図 SD168 出土遺物 (1/3, 21・22=1/1)

1a期の備前焼播鉢口縁。15はC6区出土の瀬戸美濃天目碗口縁片。16は内面指ナデ底面に板状圧痕が写る河野分類B類の底部糸切の土師器小皿。17はB7区出土の京都系土師器1期の皿口縁片。18は京都系土師器4期の皿口縁片。被熱して黒色に変色しているため、埴埴に転用されたものか。19はB7区出土の半分に折れた管状土錘A類。20はB7区出土の両端をへら調整する完形の管状土錘A類。21はB7区出土の完形の「通寶」のみ読める中国銅銭。22はC7区出土の銭種不明の中国銅銭。

円筒埴輪

ほかに中国褐釉陶器壺、瀬戸美濃天目碗、備前焼甕、瓦質火鉢・鍋、底部糸切の土師器坏、平瓦、埴、動物骨の破片が出土し、残留遺物としては23の古墳時代の円筒埴輪底部片や24の被熱した古代土師器の甕口縁。ほかに古代須恵器甕、古代土師器甕、甕・坏の破片などが出土している。

## 井戸

## SE147 (第4 - 126 図)

内部土坑

C10区(東区)の第2層2回目除去(10cm掘下げ)後の検出作業で輪郭を認めた遺構である。掘下げるとまず中央に礫群が円形に集中する部分(内部土坑)が認められ、その部分には凝灰岩礫や河原石や被熱した礫、さらに土器の破片が多く含まれていた。下部の井筒よりやや広い範囲に広がるので、おそらく井戸廃絶時に井筒の上部を破壊して瓦礫を廃棄したものと考えられる。掘形の一部はSP225に切られている。

井戸封じ

井筒の木桶

掘形はほぼ径3.4mの平面円形と推定される。井筒の桶は70×64cmの略円形で、下部のほうが広く、竹製の籠を一条検出している。絶対高2.45mの深さまで調査したが、それより下は湧水が激しく底部までは完掘していない。掘形内からは1～6が出土した。最新の遺物は図示できない碎片だが、朝鮮王朝産陶器の彫三島碗片、埴埴に転用した京都系土師器3期皿である。切合関係と出土遺物から16世紀第4四半期後半の遺構と推定される。

## SE147 出土遺物 (第4 - 127 図)

掘形内 1は16世紀の白磁皿底部片。2と3は16世紀中葉中世6b期の備前焼播鉢の口縁片。4は京都系土師器2期の小皿口縁片。5は半分におれた中国銅銭の「○國○寶」で、唐國通寶(南唐959年初鑄・篆書体)。6は安山岩製の石臼の上臼片で、方形の挽き手穴が残る。ほかに中国景德鎮窯系青花碗C群の蓮子碗、朝鮮王朝産陶器の彫三島碗片、埴埴に転用した京都系土師器3期皿、鉄釘、残留した古代土師器の破片が出土している。

井筒内 礫群より下位で出土して、廃絶以前に廃棄されたと推定される遺物は、7の中国景德鎮窯系青花皿B群の底部片があげられる。

内部土坑 井戸廃絶時の礫群中より出土した、8と9は京都系土師器2期の皿口縁片。10は埴片。ほかに備前焼甕、京都系土師器1期皿の破片が出土している。

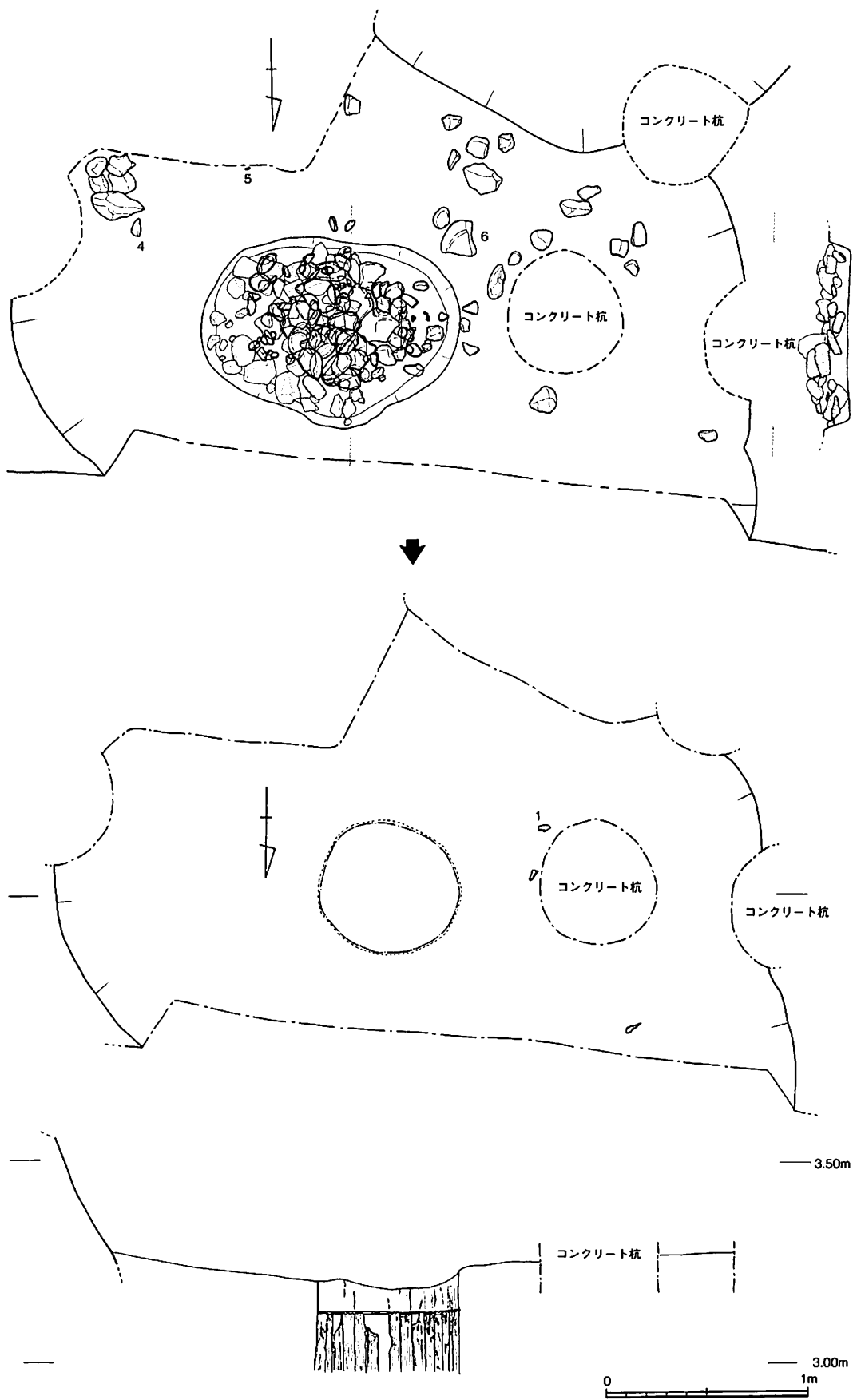
このほか出土位置不明ながら11の中国景德鎮窯系青花皿、外面に鎬のあるタイプのF群の鍔皿が出土している。さらにSD131、SK231、SK269出土片と接合した中国製焼締陶器の鉢B類(接合資料11)の破片も出土している。

## SE210 (第4 - 128 図)

井筒は木桶

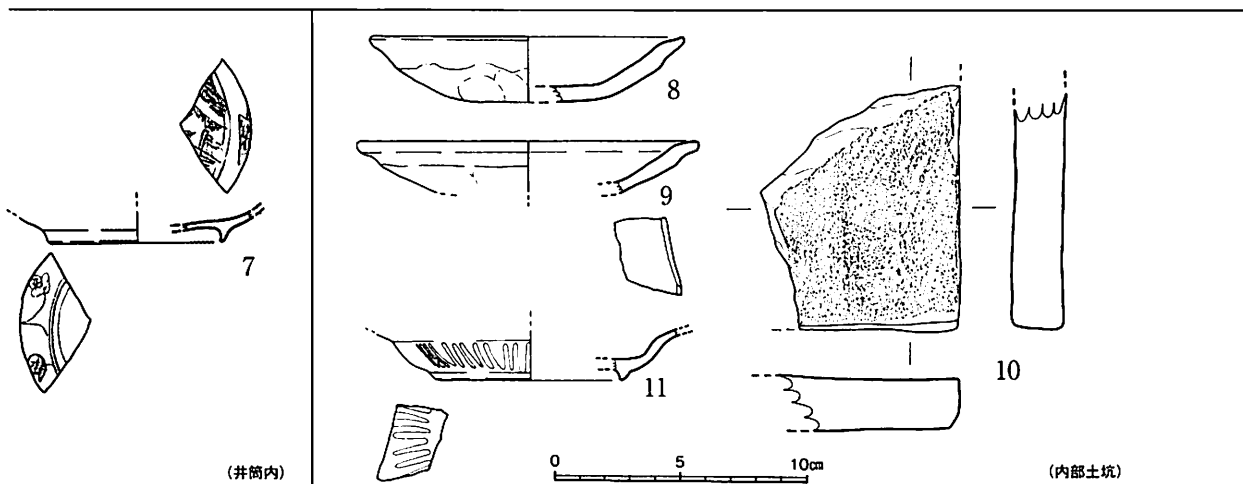
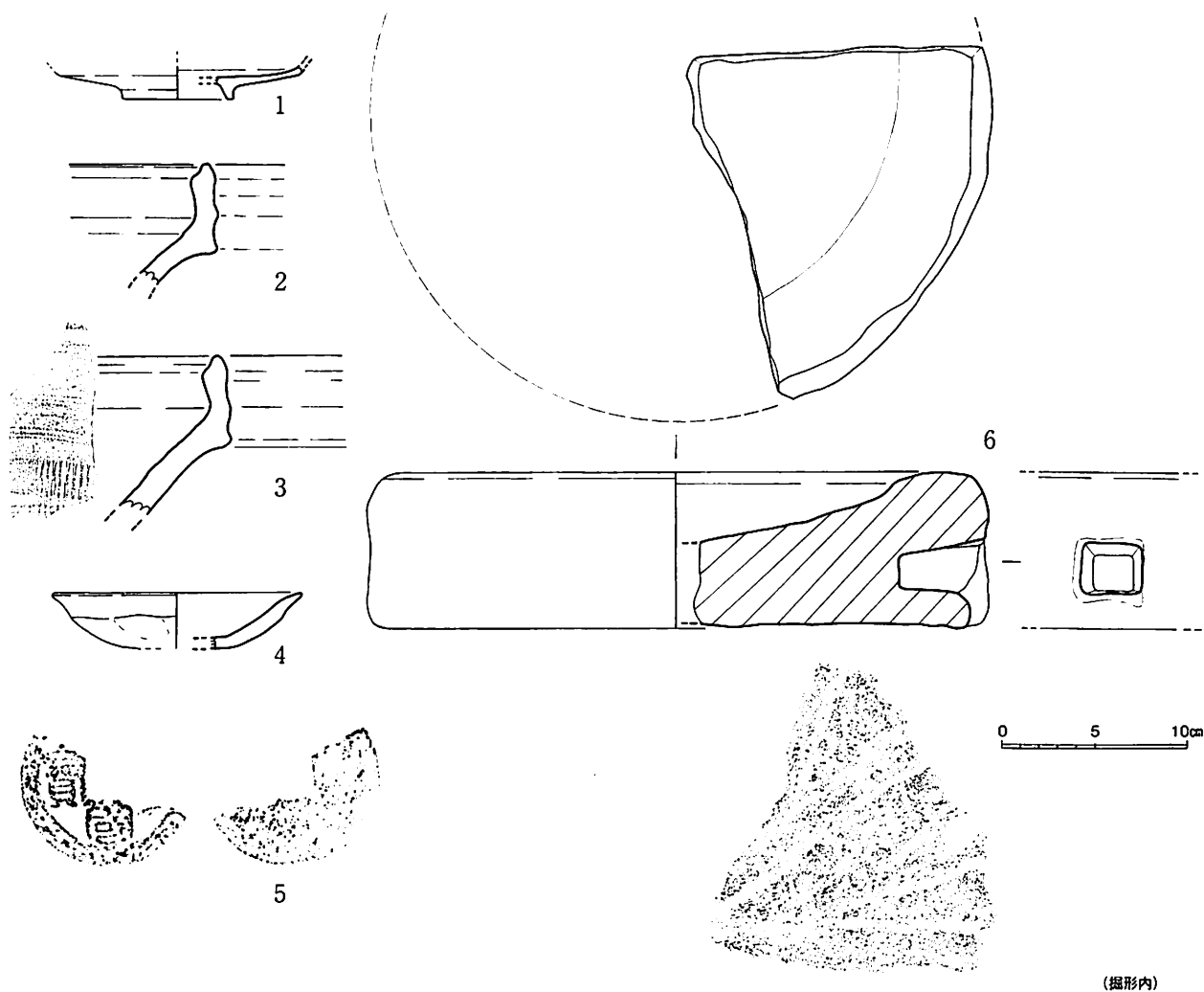
B10区(東区)の基盤IV層上で検出した井戸である。井筒は木製の桶で、底は小礫を敷いている。掘形内には礫や基盤層のブロックを多く含む。16世紀第4四半期の溝SD141、第3四半期まで使われた溝SD165、第2四半期の土坑SK265・SK272、第1四半期の土坑SK266、第4四半期前半の溝SD292を切る。掘形は長さ2.5m、幅2.0m、深さ2.4mで、底面の標高はほぼ1.1mで、そこが湧水点である。木製の桶は4段を確認している。最下段の桶は、長さ90cm、径54～60cmで、32枚の板材からなり、上下に二条の竹製の籠がはまる。丈3尺、径2尺の桶である。下から2段目の桶

桶四段



第4-126図 SE147 (1/30)





第4-127図 SE147 出土遺物 (1/3、5=1/1、6=1/4)

井戸専用  
井戸封じなし

は高さ73cm、径は上端で58cm、下端で60cm。3段目は高さ50cmの径は上端60cmの桶である。下段の桶は上端と下端の径がほぼ同じ寸法のものであり、既成の桶を転用したものではなく、井戸専用で作製されたものと推定される。それから上には丈の低い桶を重ねていくものと考えられる。遺物の大半は掘形内に混ざりこんだ破片である。井筒内からの出土遺物も少ない。注目すべきことは、ほかの井戸がすべて廃絶時に井筒の上部を破壊して埋めているのに対し、この井戸には破壊の痕跡はなかったことである。遺構が密集するこの付近で切合関係上最も新しい遺構であることから、

おそらく中世都市府内のこの付近が移転した際に放棄された井戸と考えられる。しかし17世紀初頭とする遺物はないので、16世紀第4四半期後半の遺構と考えておきたい。

SE210 出土遺物

(第4-129図)

掘形内

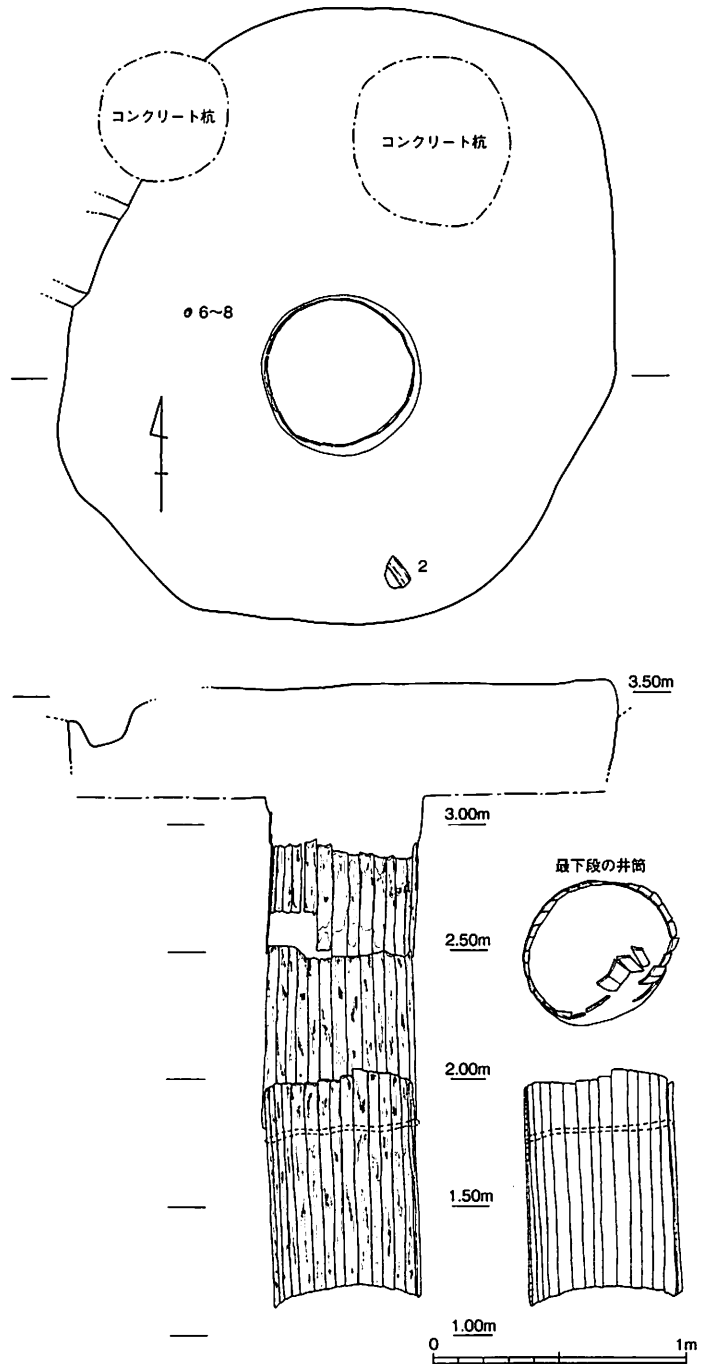
掘形内 1は15世紀後葉中世5期の備前焼甕の口縁片。2は16世紀後葉近世1期の備前焼甕口縁片。3はSD131、SD141、SD167、SK231出土片と接合した瓦質茶釜(接合資料21)。4は口縁部に1箇所打ち欠きのある京都系土師器1期の小皿片。5は口縁にひろく煤の付着し灯明皿に使われた京都系土師器2期の小皿口縁片。以下の6~8の3枚の銅銭は銹着していたもの。6は完形の中国銅銭、淳化元寶(北宋990年初鑄・草書体)。7は完形の中国銅銭、永樂通寶(明1408年初鑄)。8は銭種不明の完形の銅銭。なおSD167、SE148、SK231出土破片と接合した白磁皿(接合資料23)の破片や、ほかに中国漳州窯系青花、瓦質鍋、ロクロ目土師器、丸瓦、塼の破片が出土している。

銅銭

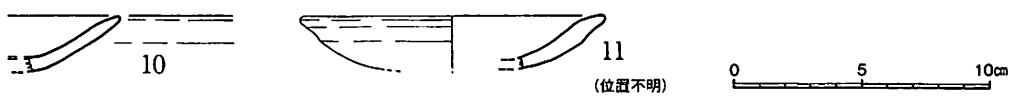
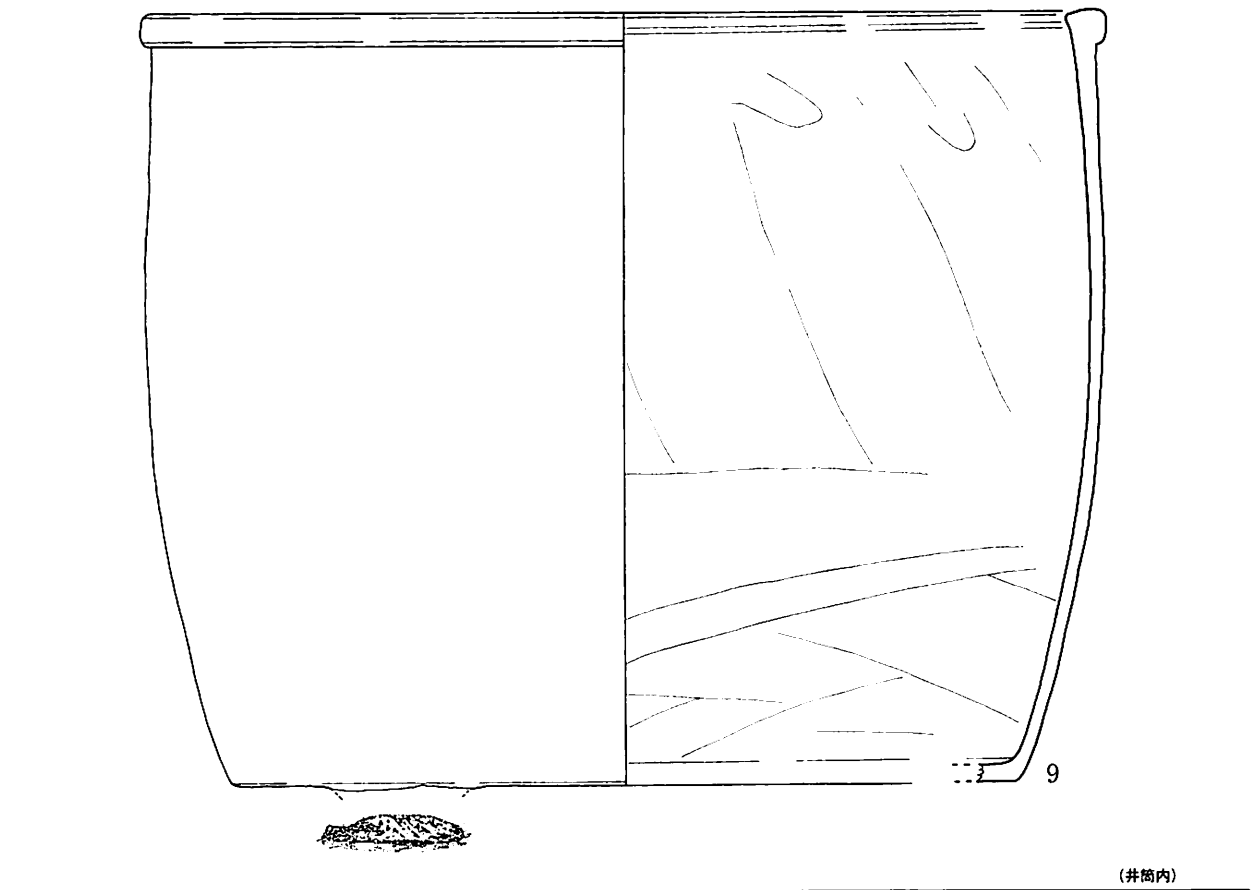
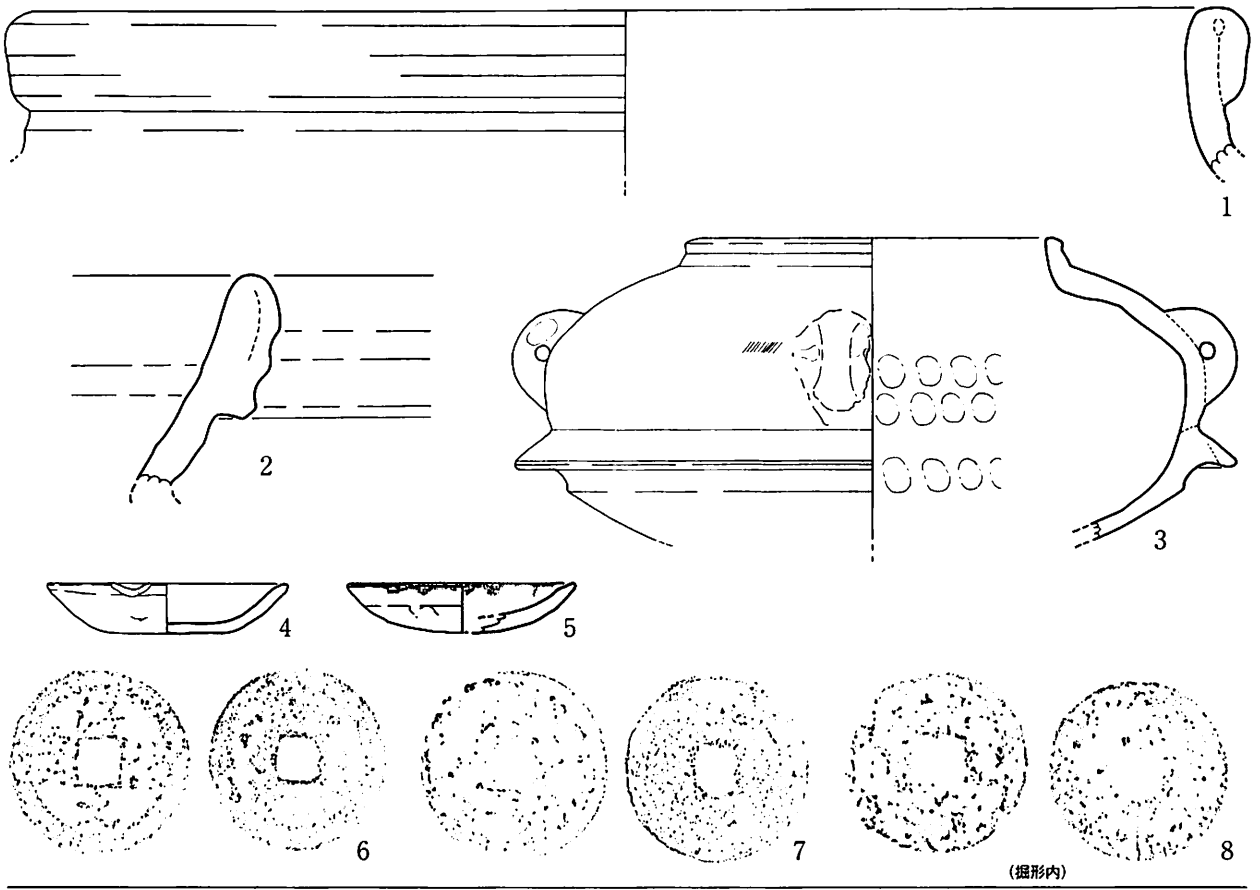
井筒内

井筒内 9は口縁端部が外側に肥厚する深いタイプの瓦質火鉢、底部の脚を接合するための刻みの痕跡がのこる。ほかに京都系土師器2期皿の破片が出土している。

位置不明 10は京都系土師器1期の皿口縁片。11は京都系土師器2期の皿口縁片。



第4-128図 SE210 (1/30)

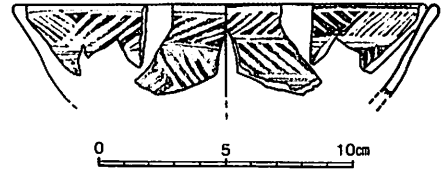


第4-129図 SE210 出土遺物 (1/3, 6~8=1/1)

土坑

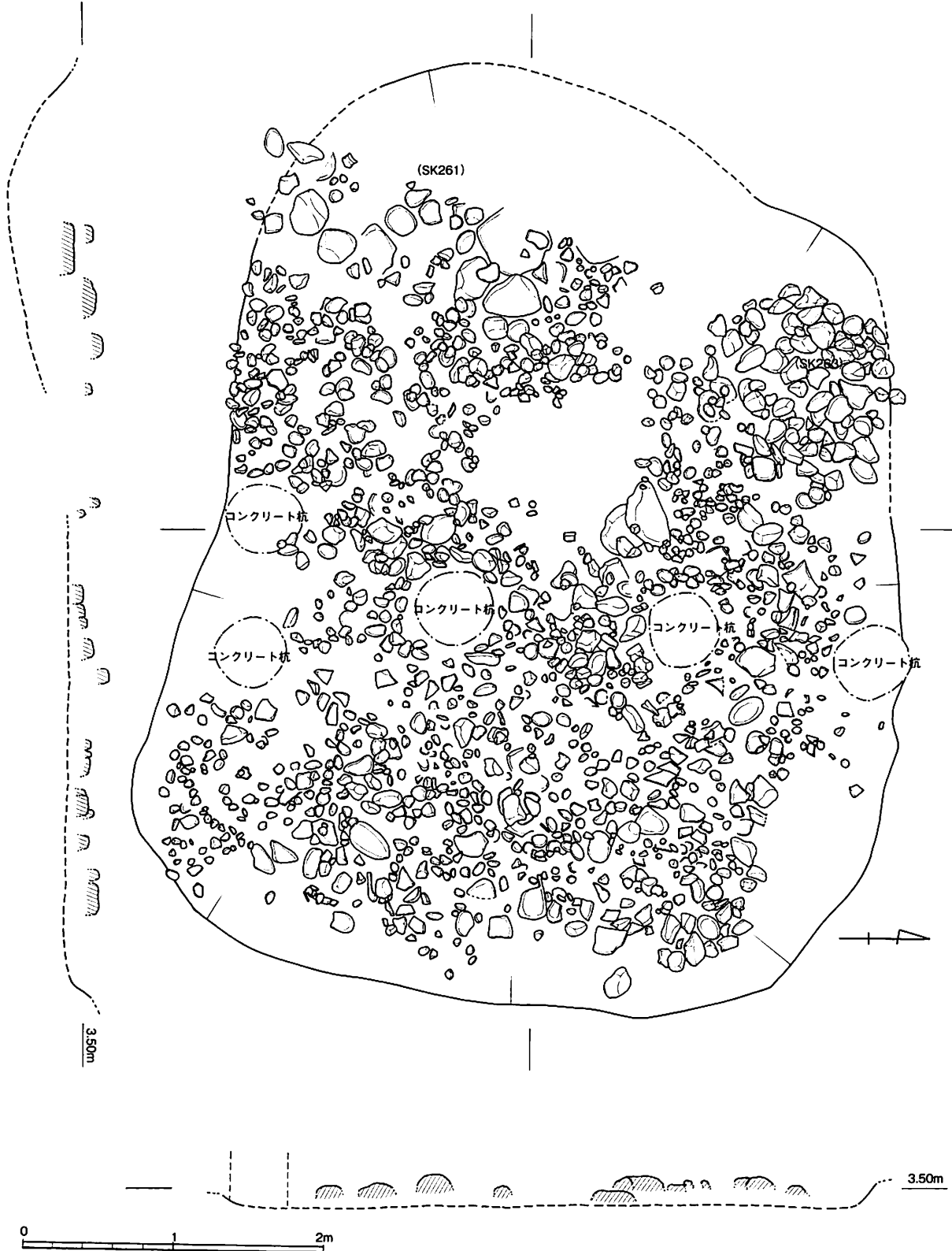
S218 (第4-130図)

B11 (東区) の基盤IV層上で検出した正体不明の遺構で、SK220を切る。内部から1のSE148とSK231出土片と接合した朝鮮王朝産陶器碗いわゆる彫三島碗 (接合資料9) の破片が出土している。



第4-130図 S218出土遺物 (1/3)

彫三島碗



第4-131図 SK231 (1/40)

## SK231 (第4 - 131 図)

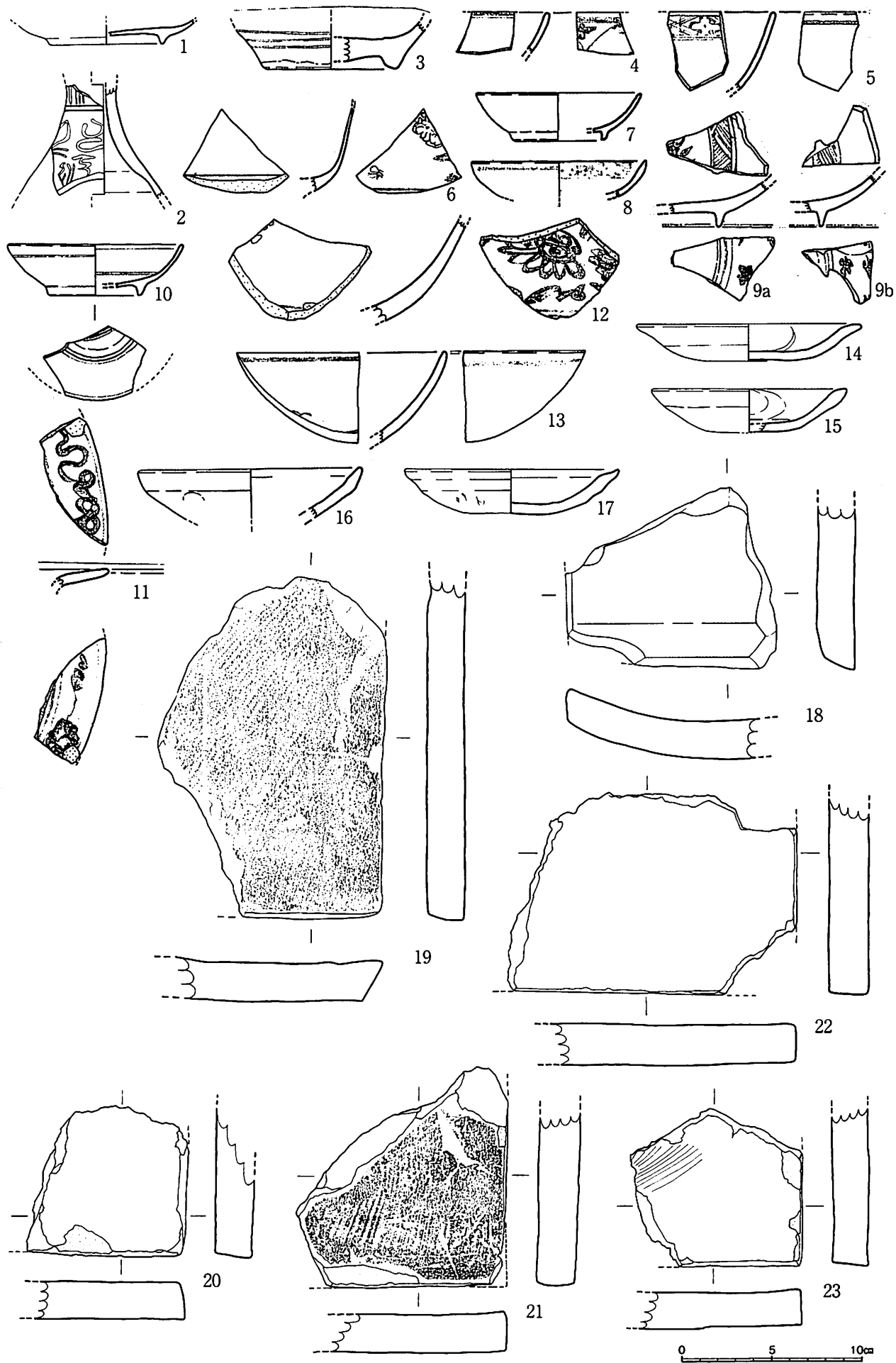
大型方形土坑 B9・10区(東区)の第2層除去後に検出した大型の方形土坑で、長さ6.1m、幅4.8m、深さ0.3m。断面は皿状で、埋土中には凝灰岩や結晶片岩の礫を含む多量の礫群が廃棄され、その多くは被熱していた。出土遺物はその礫の間に挟み込まれるように破片のまま出土した。大型の廃棄土坑である。16世紀第4四半期前半の土坑SK261とSK262およびSK263や第2四半期の井戸SE291を切り、第4四半期後半の溝SD141に切られる。埋土に中国景德鎮窯系青花皿F群が含まれることや、以上の切合関係から16世紀第4四半期後半の遺構と考えられる。

## SK231 出土遺物 (第4 - 132 図①②)

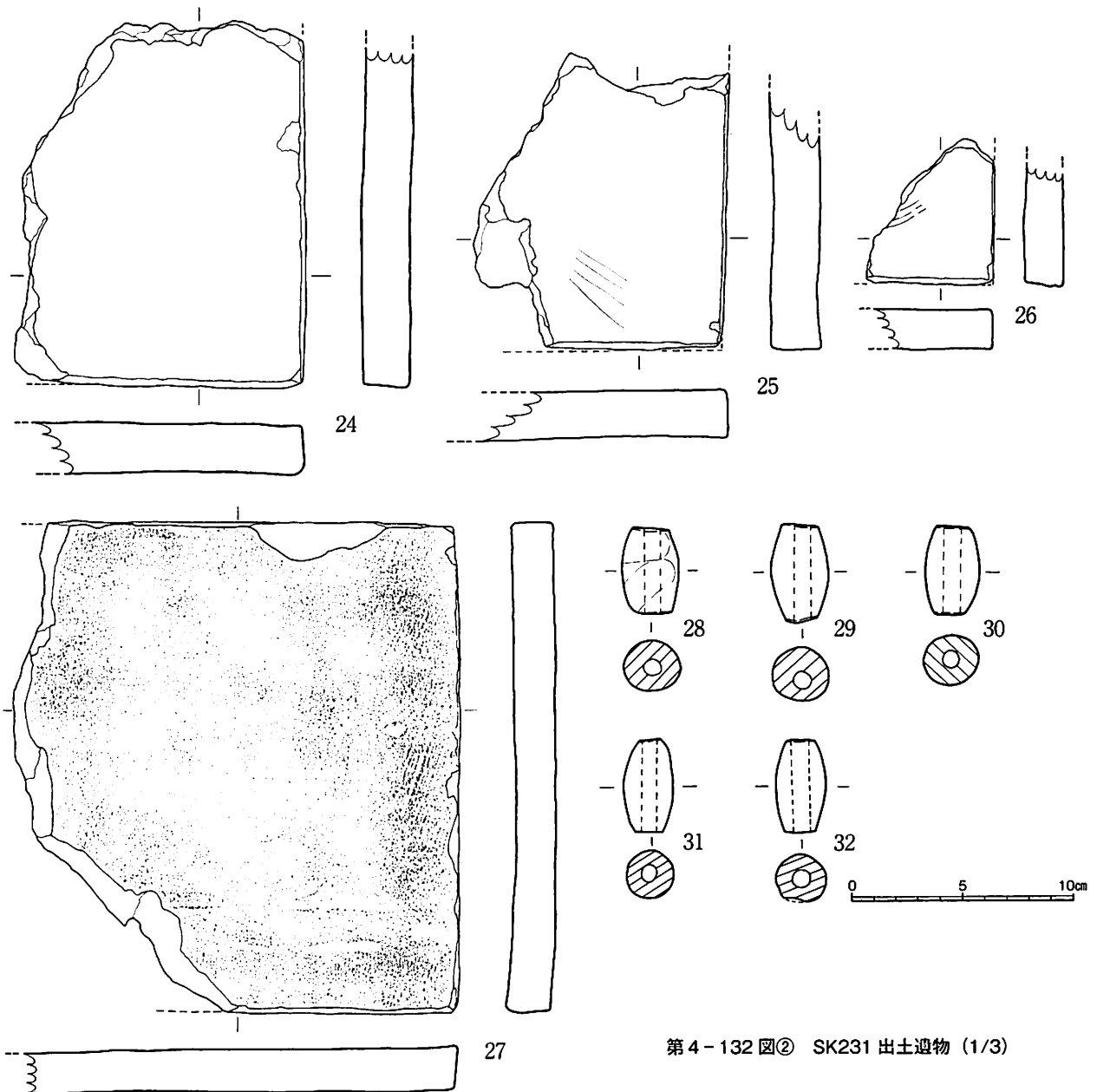
1はSD167、SE148、SE210出土片と接合した白磁皿底部片(接合資料23)。破片の多くは、第4四半期後半の遺構から出土する。2は中国龍泉窯系青磁瓶の破片。3は中国製青白磁瓶の底部片。4は外面に唐草文を描く中国景德鎮窯系青花碗C群の蓮子碗口縁片。5は内面四方禪文、外面に一条の界線を描く16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群、饅頭心碗の口縁片。6は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群の胴部片。7は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿E群。8は口縁内面に四方禪文を描く16世紀後半の中国景德鎮窯系青花皿E群。7と8は口径9cm代の小皿である。9aと9bは同一個体の中国景德鎮窯系青花皿の底部片。10は中国景德鎮窯系青花皿E群の小皿。11は16世紀末の中国景德鎮窯系青花皿F群の口縁片。12は中国景德鎮窯系青花鉢の胴部片。13は漳州窯系青花碗の口縁片。14は京都系土師器1期の皿口縁片。15と16は京都系土師器2期の皿口縁片。17は京都系土師器2期の皿。18は胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の平瓦片。19と20は胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の埴。21～23は埴片。24と25胎土に大型石英粒子を含む海部郡産の埴。26と27も胎土に石英粒を多量に含む海部郡産の埴。28～32は短くて太い寸胴の管状土錘A類の完形品。

接合資料 なおSE148、S218出土片と接合した彫三島碗(接合資料9)の破片。SD131、SE147出土片と接合した中国製焼締陶器鉢B類(接合資料11)の破片。SD116、SD131、SD250出土片と接合した備前焼壺(接合資料14)の破片。SD131、SD141、SD167、SE210掘形内出土片と接合した瓦質茶釜(接合資料21)の破片。SD284出土片と接合した瀬戸美濃産大窯3期の皿(接合資料24)の破片。SD250、SK236、SK269、ST135(2号墓)出土片と接合した中国黒褐釉陶器壺(接合資料28)の破片など、多くの接合資料が出土している。

ほかに青磁稜花皿、中国製黒褐釉陶器、備前焼壺、斜めスリ目のある近世1期の備前焼播鉢、内面布目の丸瓦の破片が出土している。残留遺物としては古代の須恵器壺の破片が出土している。



第4-132図① SK231 出土遺物 (1/3)



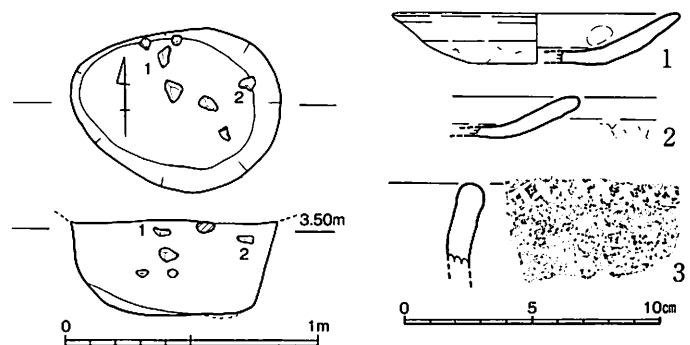
第4-132図② SK231 出土遺物 (1/3)

SK215 (第4-133図)

柱穴?土坑? B9区(東区)の第2層除去後に検出された長さ0.8m、幅0.65m、深さ0.4mの楕円形の小土坑である。断面は箱形で柱穴と断定できないので土坑とする。16世紀第4四半期前半の土坑SK263とSK279、第3四半期の土坑SK267とSK293を切る。埋土は単一層の黒灰色軟質土(小礫混じり)である。出土遺物は京都系土師器2期の皿が最新の遺物であるが、切合関係を重視して16世紀第4四半期後半の遺構とする。

SK215 出土遺物

1と2ともに京都系土師器2期の皿口縁片。3は口縁端部に櫛がけの刻み目を施す弥生土器の口縁片。残留遺物である。



第4-133図 SK215 (遺構 1/30・遺物 1/3)

弥生土器

S134 (第4 - 134 図)

集石遺構

C8区(北1・2区)で出土した集石遺構である。長さ3.5m、幅1.0m、深さ0.3mの広がりを持つ。16世紀第4四半期前半の土坑SK252を切る。出土品の大半は拳大の河原石で、土器等の破片はきわめて少なかった。図示できる遺物はないが、京都系土師器2期皿と埴の破片が出土している。切合関係から16世紀第4四半期後半の遺構と推定する。

小結

16世紀第4四半期後半の遺構をまとめると、その特徴は次の4点になる。

東西道路の両側では、遺構減少

① 16世紀第4四半期後半代と考えられる遺構は減少する。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区においても、第4四半期前半に続き遺構がないが、その道路をはさんだ南側のC6、C7の南区も遺構が少ない。

道路再建

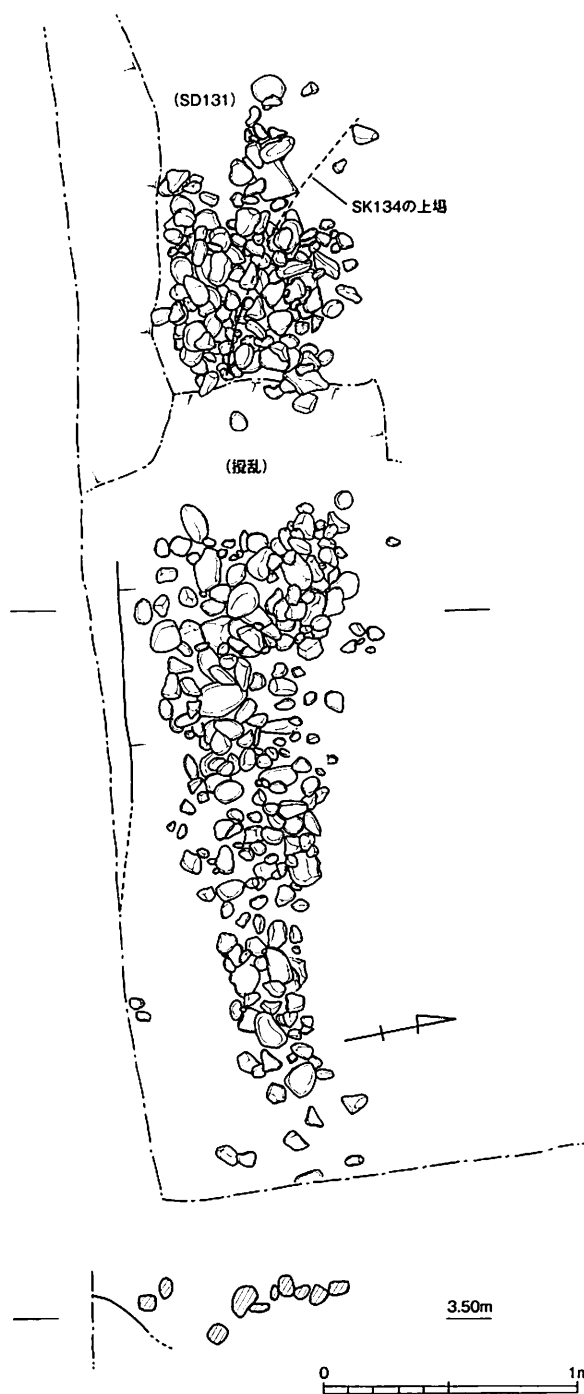
② 道路状遺構SF151は引き続き維持されるが、SD270とSD116の両側側溝は埋没し、SF251の両側は浅く広い溝であるSD167とSD168が存在する。その底面自体が道路面として機能した可能性もある。従来の道路幅は1m程度まで狭まっている。

「中町」の復興

③ C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであるが、井戸や土坑や溝が存続するので、おそらく島津勢侵攻後と考えられるこの時期に、中町でもある程度の復興が行われたことを示している。

墓地の廃絶

④ 北2区の墓地は埋葬がなくなり、イエズス会府内教会が廃絶する時期と合致している。墓地については節を改めて述べる。



第4-134図 S134 (1/30)



8 16世紀第4四半期の遺構と遺物

以下の遺構は切り合い関係や出土遺物から16世紀第4四半期に属することは判明したが、前半と後半とに分けることのできなかつた遺構である。

溝

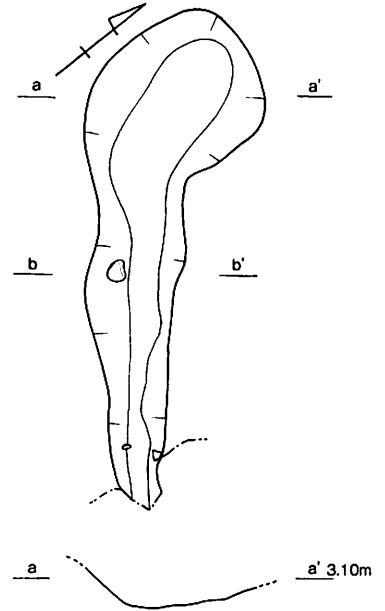
SD194 (第4-135図)

小溝

B6区(南2区)の基盤Ⅲ層上面で検出された長さ1.9m、幅0.2~0.7m、深さ0.1mの断面半円形の溝である。埋土は第2層土の単一層である。16世紀第1四半期の土坑SK193を切り、第4四半期後半の溝SD168に切られる。

図示できる遺物はないが、SD141出土の瓦質火鉢と同一個体の破片が出土している。SD141が16世紀第4四半期前半の遺構であるので、その時期以後であり、第4四半期後半の溝SD168にとりつく溝らしく、そこへの排水溝の可能性があるので、後半まで下る可能性も考えられる。

排水溝



第4-135図 SD194 (1/30)

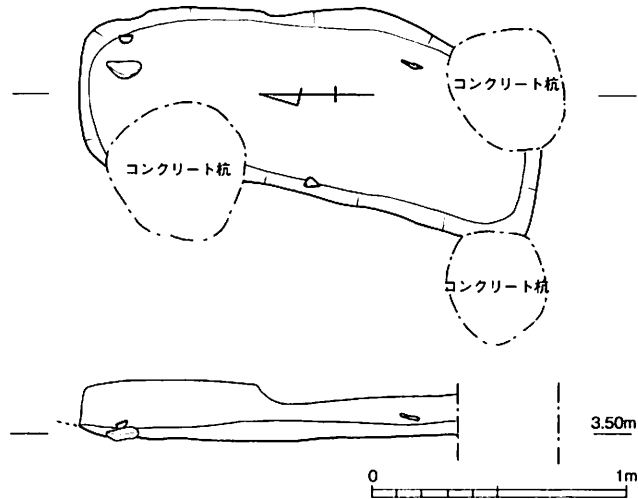
土坑

SK237 (第4-136図)

B10区(東区)の第2層除去後に検出された長さ1.6m、幅0.7m、深さ0.1mの長円形の土坑である。埋土は単一層の暗灰黄褐色砂質土(1cm大の炭焼土含む)である。16世紀第1四半期の土坑SK266を切り、SP162に切られる。

漳州青花

図示できる遺物はないが、鉄釘や中国漳州窯系青花碗、瓦質土器、底部糸切の土師器坏、ロクロ目土師器皿、京都系土師器皿の破片が散在して出土している。漳州窯系青花碗の出土から16世紀第4四半期の遺構と考えられる。



第4-136図 SK237 (1/30)

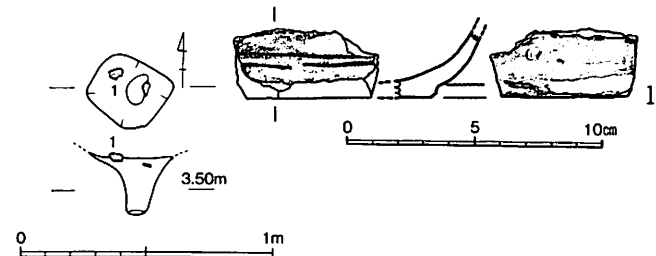
ピット

SP213 (第4-137図)

C11区(東区)で検出された径0.3m、深さ0.3mのピットで、15世紀後半の土坑SK199を切る。内部から1の華南三彩の破片が出土している。

華南三彩

その1は華南三彩の盤で、同一個体と思われる破片が15世紀後半の土坑SK251から出土している。ほかに底部糸切の土師器、鉄器の破片が出土している。華南三彩の出土から16世紀第4四半期のピットと推定した。



第4-137図 SP213 (遺構 1/30、遺物 1/3)

SP214

C11区（東区）で検出された径0.2m 深さ0.05mの浅い円形のピットである。内部からSD116、SD131、SD250、SE148 井筒内、SK262、SK263 出土片と接合した備前焼壺（接合資料4）の破片が出土している。この遺物は16世紀第4四半期前半の遺構で多く見ついているところから、16世紀第4四半期の遺構と考えられる。

SP233

不整形ピット B9区（北1区）の第2層除去後に検出された長さ0.5m、幅0.25m、深さ0.05mの不整形のピットである。

図示できる遺物はないが、京都系土師器3期皿の破片が出土している。埋土は第2層土の単一層である。SD284と重複する。京都系土師器3期皿の出土から16世紀第4四半期の遺構と考えられる。

9 16世紀代の遺構と遺物

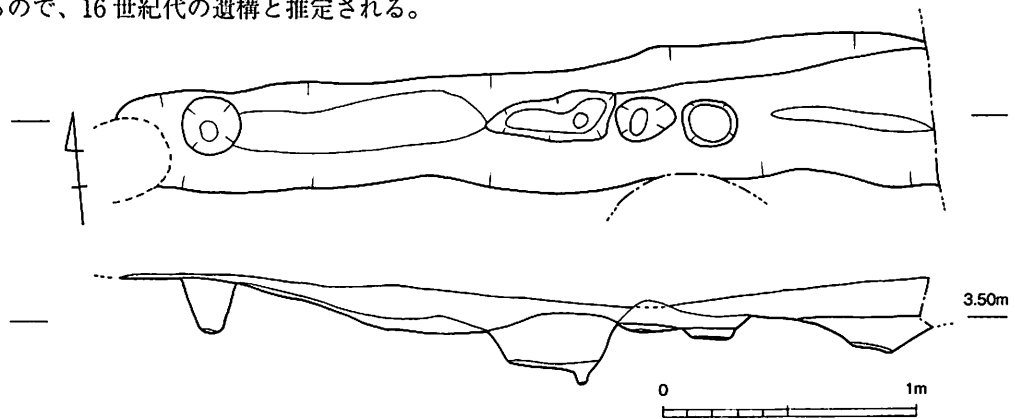
以下の遺構は時期を限定できる情報がすくないが、中世大友府内町跡において最も都市的状况をなす16世紀代の遺構と判明したものを記す。

溝

SD204（第4-138図）

東西溝 C11区（東区）の基盤IV層上で検出された長さ1.6m、幅0.4～0.5m、深さ0.3mの東西溝である。方向は5度南に振る。埋土は上下2層からなり、上層は黄色粘土層（基盤III層土）で埋まっている。15世紀の土坑SK203を切り、SP178と数箇所ピットに切られる。

図示できる遺物はないが、瓦質火鉢と土師器の破片が出土している。第4南北街路に直交する溝であるので、区画あるいは建物に関係がある遺構の可能性が高い。第4南北街路を前提とした溝であるので、16世紀代の遺構と推定される。



第4-138図 SD204 (1/30)

土坑

SK136（第4-139図）

方形土坑 C8・C9区（北2区）で検出した長さ2.5m以上、幅2.0m以上、深さ0.4m大型の方形土坑である。埋土にはかなり礫を含み、16世紀第4四半期の溝SD131と重複し、16世紀第4四半期前半の土坑SK137に切られる。礫が集中する部分はSK269の礫群の可能性が高い。

図示できる遺物はないが、備前焼と土錘の破片が出土している。第4四半期の遺構に切られるので、それ以前の遺構であることは確実だが、上限は出土遺物から16世紀代としか限定できない。



第4-139図 SK136 (1/30)

方形土坑 SK180 (第4-140図)  
 C11区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された方形の土坑で長さ0.9m以上、幅0.8m以上、深さ0.1mである。底面は凸凹し埋土は第2層土の単一層である。遺構の重複関係はなく、1の中国製褐釉陶器の蓋破片が出土している。ほかに土師器の破片も出土している。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。

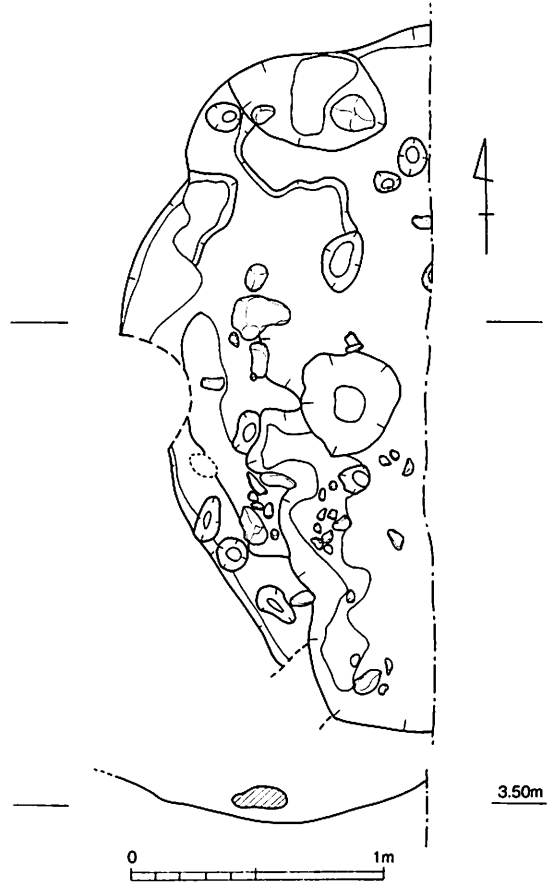


第4-140図 SK180出土遺物 (1/30)

SK220 (第4 - 141 図)

円形土坑

B11区(東区)の基盤IV層上で検出された円形の土坑で長さ3.5m、幅1.6m以上、深さ0.25mである。断面は浅い皿状だが、底面はきわめて凸凹している。埋土には焼土、円礫小礫を多く含む。S217と16世紀第4四半期後半の遺構S218に切られる。1の「元」一文字のみ読める中国銅銭が出土しているほかに、瓦質釜、平瓦、古代の土師器の破片が出土している。



SK246 (第4 - 142 図)

3ピットの重複

C7区(西区)の第2層除去後に検出された長さ1.6m以上、幅0.6m、深さ0.3mの長円形の土坑であるが、3つのピットが重複した可能性が高い。内部からは古代の須恵器や土師器の破片が散在して出土したが、16世紀第1四半期の土坑SK247を切るので、それ以後の土坑であることは確実である。

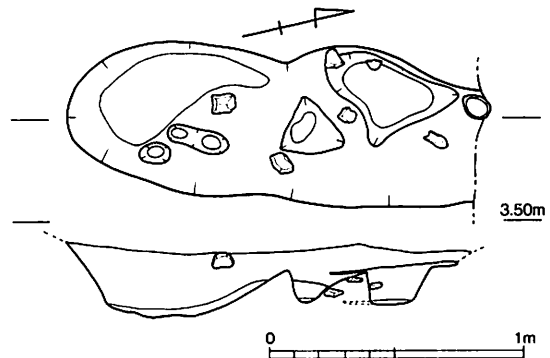
SK246 出土遺物 (第4 - 143 図)

古代甌

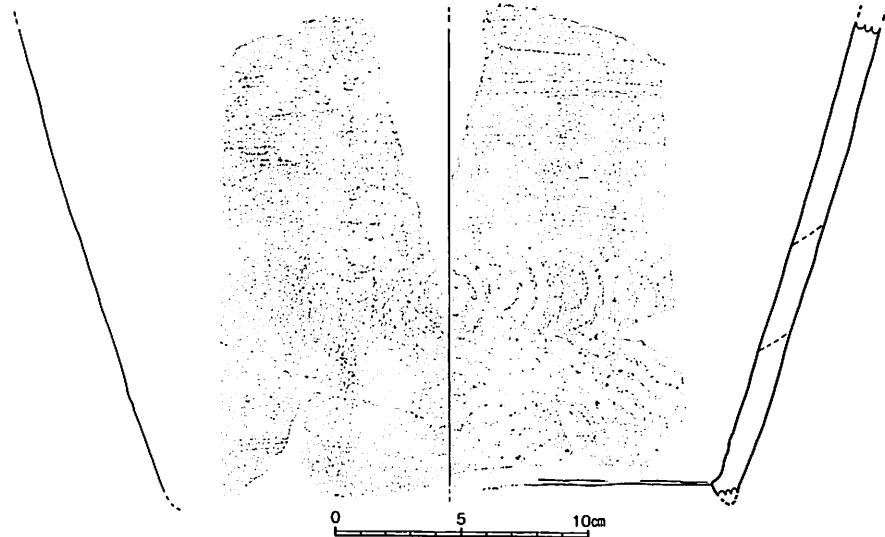
古代から残留した遺物。1は内面にタタキの当て具痕である同心円文がのこる土師器で、豊後大分型甌の底部片。ほかに須恵器甕の破片が出土している。



第4 - 141 図 SK220 (遺構 1/30・遺物 1/3)



第4 - 142 図 SK246 (1/30)



第4-143図 SK246 出土遺物 (1/3)

## ピット

## SP184

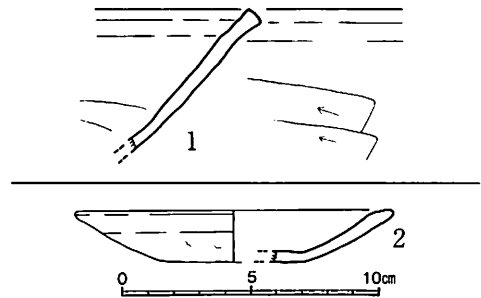
柱穴

C11区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された長さ0.35m、幅0.25m、深さ0.2mの柱穴である。埋土は第2層土の単一層である。図示できる遺物はないが、埋土中から京都系土師器1期皿の破片が出土している。このことから16世紀第2四半期以後の遺構と考えられる。

## SP195 (第4-144図)

柱穴

B11区(東区)の基盤Ⅳ層上で検出された長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.35mの掘形円形の柱穴である。16世紀第1四半期の溝SD176と重複している。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。1は外面にヘラケズリを施す瓦質鍋の口縁片、外面全体に煤が付着している。ほかに底部糸切の土師器の破片が出土している。



第4-144図 SP195・SP240 出土遺物 (1/3)

## SP240 (第4-144図)

柱穴

B10区(東区)の第2層除去後に検出された長さ0.35m、幅0.3m、深さ0.2mの柱穴である。16世紀第1四半期の土坑SK266を切る。2は京都系土師器1期の皿口縁片。ほかに埴の破片が出土している。この遺物から16世紀第2四半期以後の遺構と考えられる。

## SP249

B10区(東区)の第2層除去後に検出された長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.2mのピットである。16世紀第2四半期の土坑SK238を切る。出土遺物なし。切合関係から16世紀後半の遺構である。

以下はB11区(東区)の15世紀の土坑SK251切る3つのピットである。

SP280 図示できる遺物はないが、底部糸切の土師器の破片が出土している。

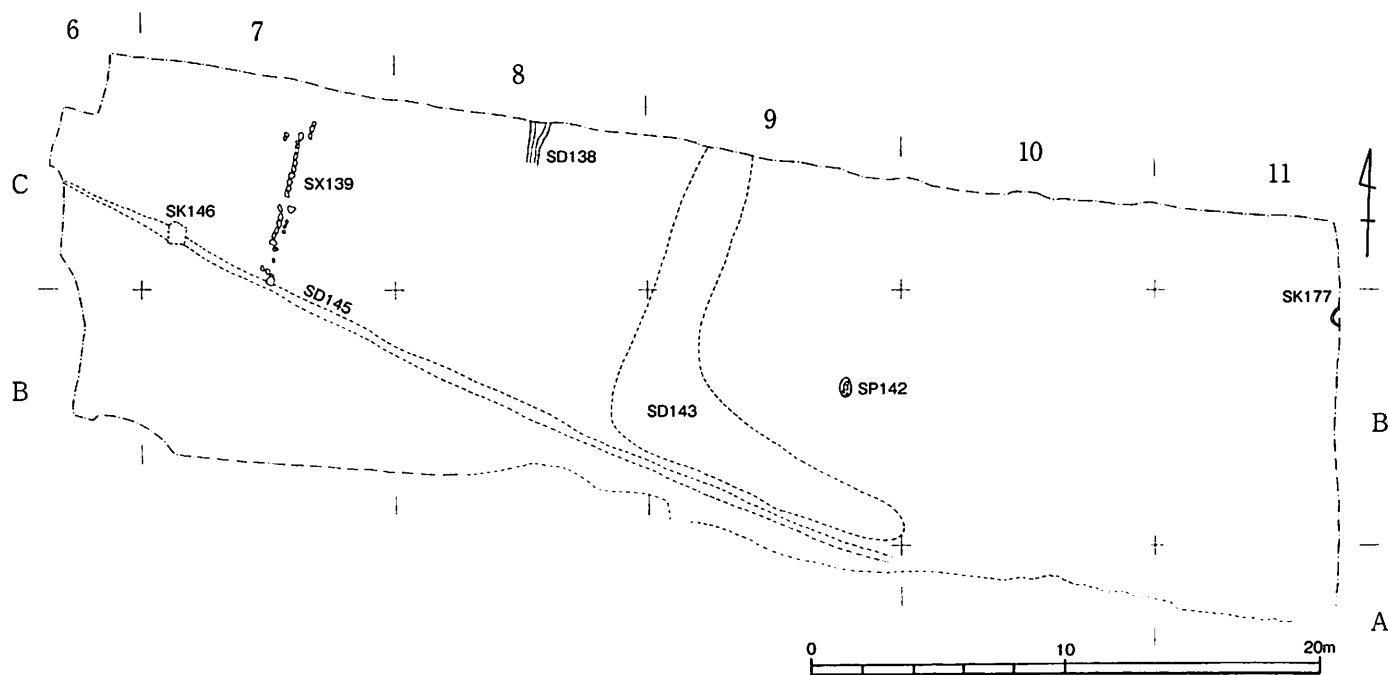
SP281 図示できる遺物はないが、土師器の破片が出土している。

SP282 図示できる遺物はないが、底部糸切の土師器の破片が出土している。

### 10 近世の遺構と遺物

概要 (第4 - 145 図、付図7下)

近世とした遺構は、16世紀末からつづく17世紀初頭の遺構と、18世紀の遺物が出土し第2層上から掘りこまれたことが確実な遺構である。



第4 - 145 図 近世の遺構 (1/300)

#### 近世初頭

##### 溝

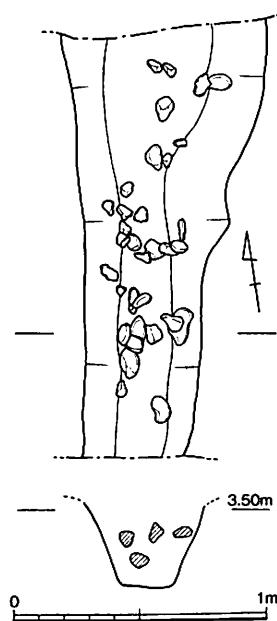
SD138 (第4 - 146 図)

C8区 (北2区) 検出の長さ1.7m、幅0.4~0.8m、深さ0.2~0.3mの溝状遺構で、北に行くほど深く広くなる。16世紀第4四半期の溝SD131と重複する。調査時の所見ではSD131に切られるとしたが、整理時に唐津陶器藁灰釉の碗の破片が出土したことが判明したため、SD131に接続する溝として掘りこまれた可能性の高いと考えられる。したがって第4四半期後半の可能性もあるが、近世初頭に下る可能性も高いのでここにのせる。内部には礫が多く、遺物も破片で散在する状態であった。

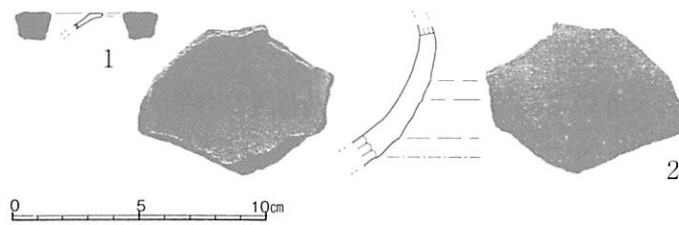
唐津陶器碗

SD138 出土遺物 (第4 - 147 図)

1は中国製青釉小皿の口縁片。2は1590年以後の唐津陶器藁灰釉の碗。ほかに備前焼甍、埴の破片が出土している。



第4 - 146 図 SD138 (1/30)



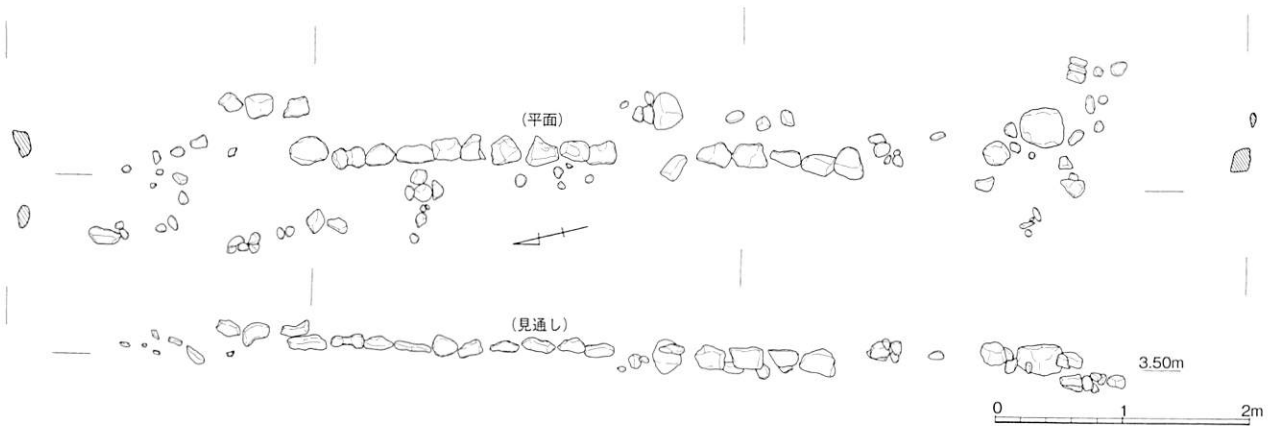
第4-147図 SD138 出土遺物 (1/3)

石列

SX139 (第4-148図)

西面

C7区の北2区と西区の境界で発見された石列で、長さ7.5mを検出した。高さは低く2段以上に重ねるところはない。石の面は西側を向いており構築当時は石列の東側が地形的に高かったことを示している。第2層の途中で作られているので近世中期の溝SD145の下、16世紀の道路SF151の上に作られていることになる。いずれにしても16世紀代の都市の遺構が完全に埋没してから後の遺構である。石列をつくる石材には河原石とともに、五輪塔の空風輪などの部材が転用されていた。おそらく水田化の初期の段階にもりあげて畑地とした場所で、その後更に整地されて完全に水田化し、石列の位置は近代の地籍境界に踏襲されたものと考えられる。



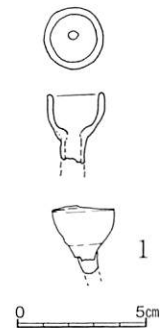
第4-148図 SX139 石列 (1/60)

土坑

SK177 (第4-149図)

キセル

B11区(東区)の基盤第IV層上で検出した長さ0.8m、幅0.2m以上、深さ0.2mの隅丸方形の土坑で、底面は凸凹である。SP179を切る。中から1の銅製キセルの火皿が出土したほかに、罇の破片が出土している。キセルの型式から近世初頭と推定される。



第4-149図 SK177 出土遺物 (1/3)

近世中期

溝

SD145

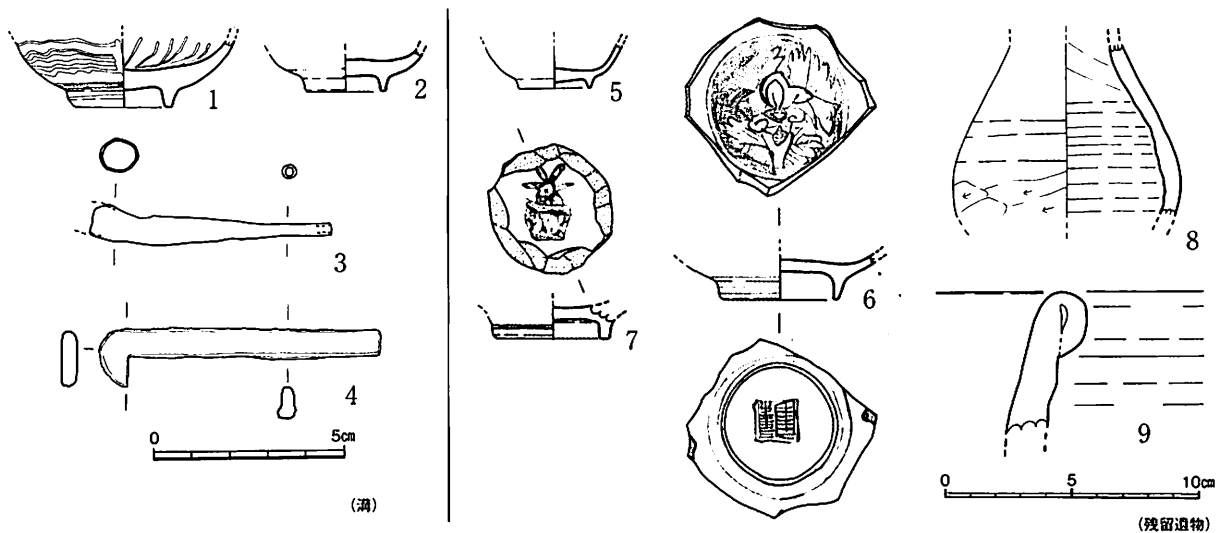
水田側溝

16世紀の道路遺構SF151と全く同じ位置に作られた溝で、長さ20m以上、幅1.0m、深さ0.05m。断面は浅い皿状である。標高3.7mの第1層下部で検出し、細い溝が3回以上重複している。SK146に切られている。この溝は近代の地籍境界になっている。江戸中期以後水田側溝として繰り返し掘りなおされて、戦後宅地化が進むまで使われていたと考えられる。

SD145 出土遺物 (第4 - 150 図)

1は18世紀前半の肥前陶器の刷毛目碗底部。2は18世紀後半の肥前染付小坏の底部。3は銅製キセルの吸い口。4は長さ約7.4cm、先端が鍵形におれる銅製の金具。

残留遺物。5は16世紀の中国製白磁小坏の底部。6は16世紀後半の中国景德鎮窯系青花碗E群の饅頭心碗底部。7は全周を打ち欠いた中国漳州窯系青花碗の底部。8は備前焼徳利胴部。9は中世4期15世紀の備前焼甕口縁。ほかに須恵器甕、青磁碗、備前焼播鉢、底部糸切の土師器、京都系土師器2期皿、軒丸瓦、平瓦などの破片が出土している。



第4 - 150 図 SD145 出土遺物 (1/3、3・4=1/2)

土坑

SK146

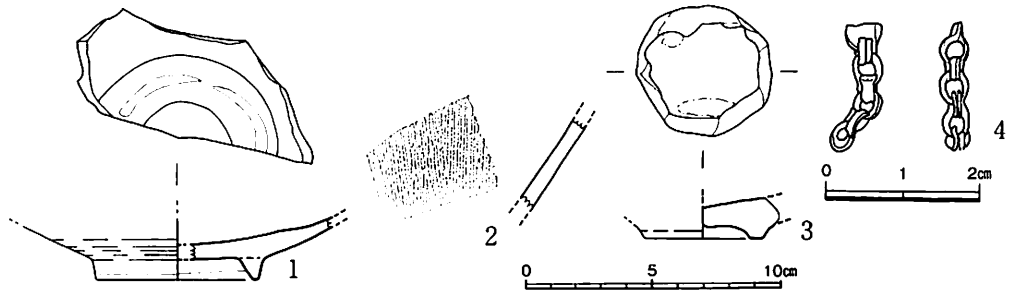
方形土坑

C7区の境界付近の第1層下部で検出した長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.1mの不整形の土坑で、断面は箱形である。埋土は灰色砂層の単一層である。近世中期の溝SD145を切る。内部からは碎片化した土器片が多数出土している。

SK146 出土遺物 (第4 - 151 図)

1は18世紀後半の肥前唐津焼の皿底部片。2は肥前唐津焼播鉢の胴部片。3は1600～1630年製の唐津系陶器の砂目碗、口縁全周を打ち欠いてメンコ状に加工されている。4は銅製品の鎖片。ほかに多数の近世陶器の破片や、残留した須恵器、中国景德鎮窯系青花碗、中国産焼締陶器の破片が出土している。



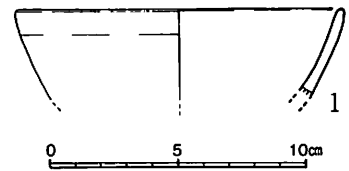


第4-151図 SK146出土遺物 (1/3、4=1/1)

ピット

SP142 (第4-152図)

B9区(北1区)の第2層上面で検出した重複したピット。埋土は暗黄褐色土(マンガン沈着あり)の単一層である。1の1590~1610年製の唐津焼薬灰釉陶器が出土したため当初は近世初頭の遺構と考えたが、第2層を切っているので、近世中期とした。ほかに青磁碗、備前焼甕、底部糸切の土師器、京都系土師器2期皿、瓦の破片が出土している。



第4-152図 SP142出土遺物 (1/3)

小結

溝SD138と土坑SK177は唐津焼陶器碗の出土から17世紀初頭としたが、16世紀末の遺構の最後に作られた遺構とみなすこともできる。そのあとに調査区全体は第2層の整地がなされている。この整地は出土遺物から17世紀の初頭、中世都市府内が廃絶した後に行われたものとかんがえられる。その後この付近は石列SX139で土地の段差が作られたように、一旦畑地化されたようであるが、その後水田側溝SD145が掘られて、18世紀には水田化されている。その境界はおそらく16世紀の都市の区画をそのまま踏襲し、今日の地籍の境界となっている。

近世の整地

水田化

11 近世整地層の遺物

第2層整地層については第1節の基本層序の説明を参照のこと。

第2層整地層出土遺物 (第4-153図①②)

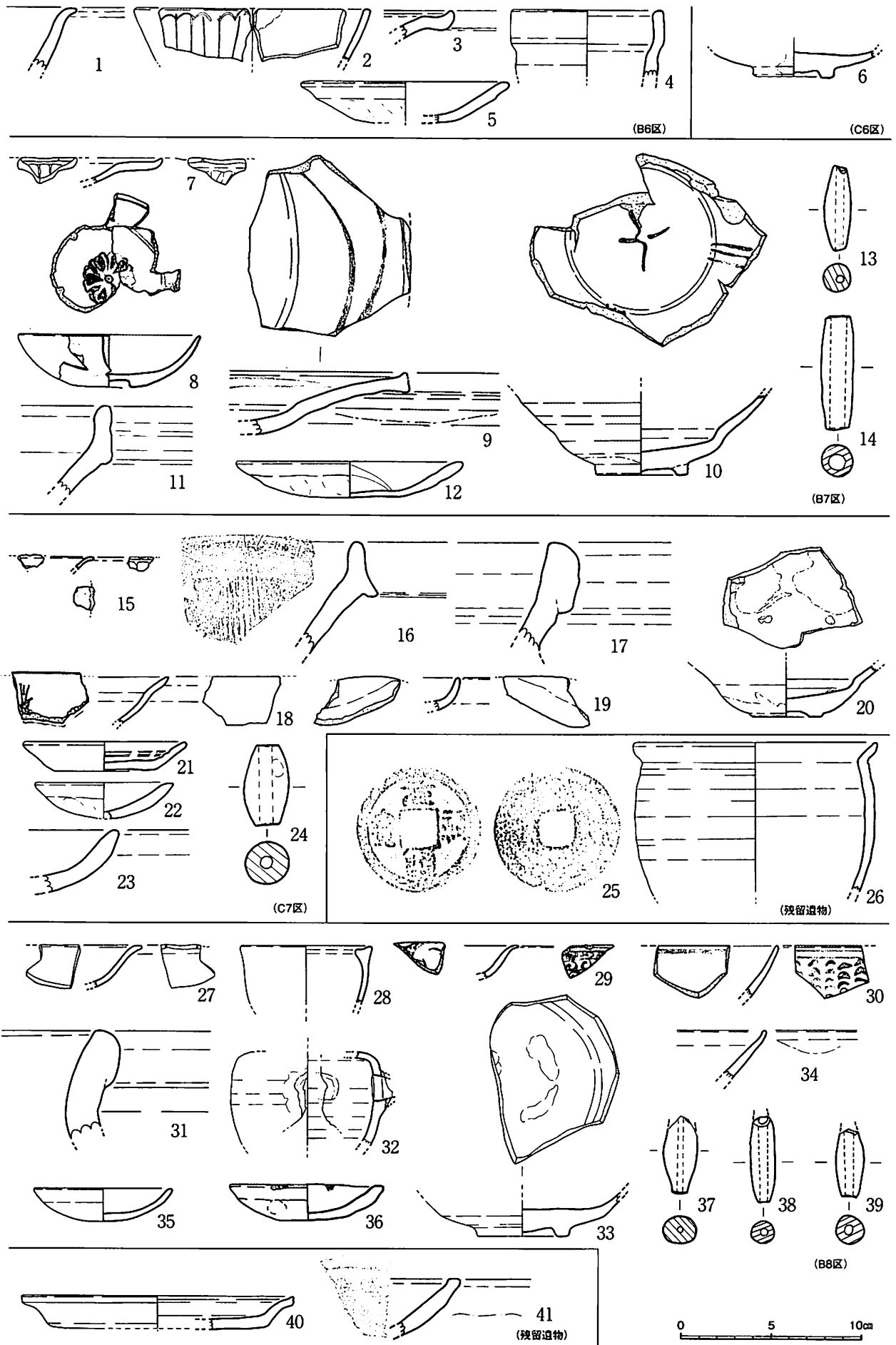
B6区 1は14~15世紀の中国龍泉窯系青磁碗D類の口縁片。2は16世紀前半の中国龍泉窯系青磁碗B-IV類の口縁片で、細線蓮弁文に貫入がはいる。3は中国龍泉窯系青磁皿の口縁片。4は1590~1610年製の唐津焼向こう付け口縁片。5は京都系土師器2期の皿口縁片。ほかに中世6期の備前焼播鉢、瓦質火鉢、底部糸切の土師器の破片が出土している。

唐津向付

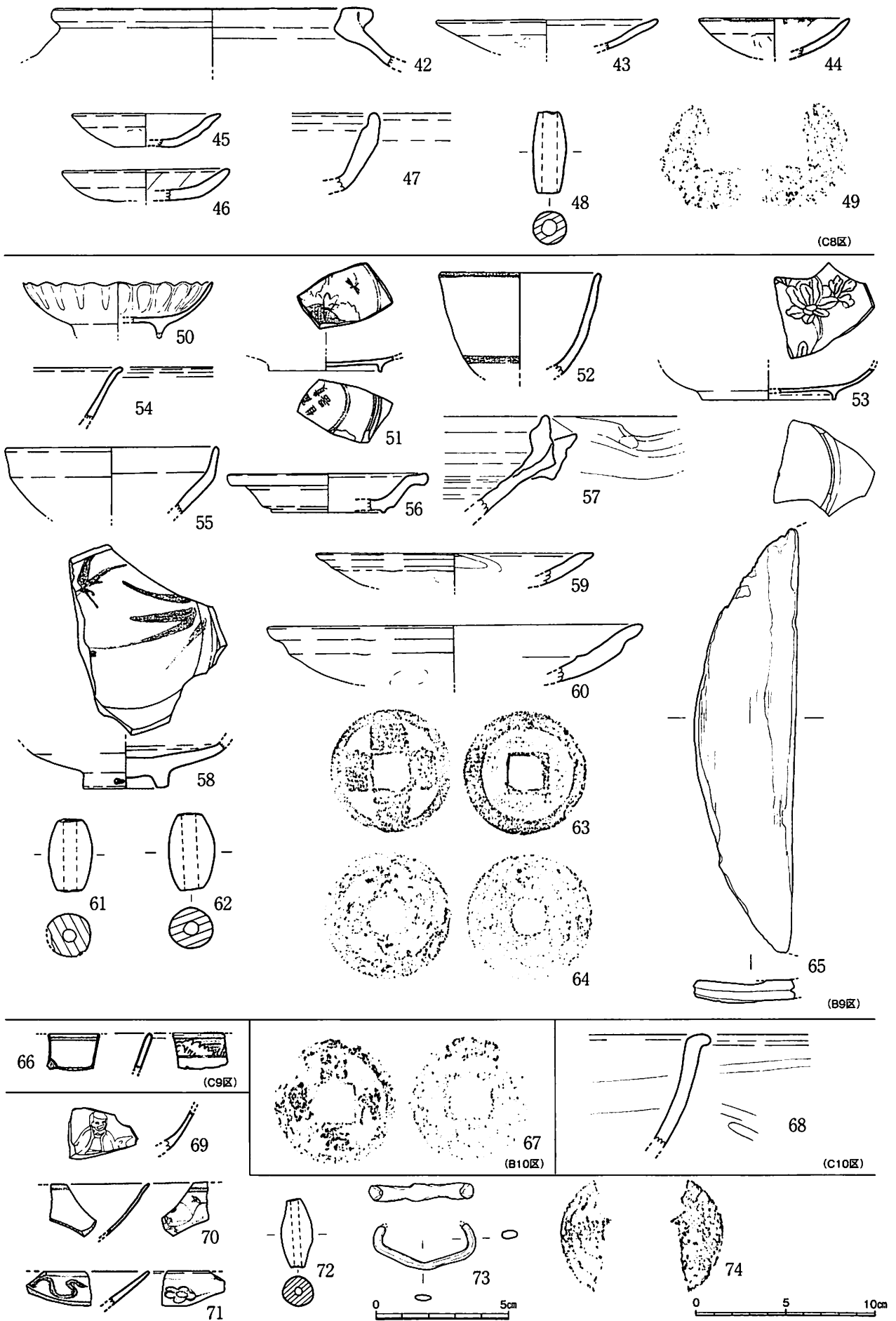
C6区 この付近の遺物はSD167の可能性もある。6は高台部分露胎の15~16世紀の中国製白磁皿の底部片で、貫入激しい。なおSK164,SK278など16世紀第3四半期の遺構出土片と接合した中国製焼締陶器の四耳壺(接合資料12)の破片が出土している。ほかに備前焼甕・播鉢、京都系土師器1期皿、残留した須恵器甕などの破片が出土している。

B7区 7はSD167出土の可能性もある鎬のある白磁皿の口縁片。8はSD189出土の可能性もある16世紀前半の碁笥底の中国景徳鎮窯系青花皿C群。9はSD167出土の可能性もある1590~1610年製絵唐津皿の口縁片。10はSD190出土の可能性もある絵唐津鉢底部。11はSD167出土の可能性もある中世6期の備前焼播鉢の口縁片。12はSD167出土の可能性もある京都系土師器1期

絵唐津



第4-153 図① 第2層整地層出土遺物 (1/3, 25=1/1)



第4-153图② 第2層整地層出土遺物 (1/3、49・63・64・67・74=1/1、73=1/2)

の皿口縁片。13はSD190出土の可能性もある両端をヘラ調整した管状土錘A類の完形品。14も完形の管状土錘A類。ほかに青磁碗、丸瓦、平瓦、近世陶器、鉄器の破片が出土している。

C7区 15はSD167あるいはSF151出土の可能性もある16世紀の翡翠釉の青釉陶器小皿口縁片。16はSD168出土の可能性もある15世紀後半中世5a期の備前焼播鉢の口縁片。17は中世6期の備前焼甕口縁片。18はSD167あるいはSF151出土の可能性もある1590～1610年製の絵唐津皿口縁片。19はSD168出土の可能性もある絵唐津変形碗口縁片。20はSD168出土の可能性もある1590～1610年製の胎土目の唐津碗底部片。21は内面に細かいロクロ目が残る底部糸切の土師器小皿で、指ナデと板状圧痕が残る。22はSD167あるいはSF151出土の可能性もある、口縁部に煤が付着して灯明皿として使用された京都系土師器2期の皿口縁片。23はSD168出土の可能性もある分厚い京都系土師器4期の皿口縁、17世紀前葉に下る。24はSD167あるいはSF151出土の可能性もある完形の管状土錘、両端をヘラ調整するA類だが胴部の太い寸胴型である。25は完形の中国銅銭の元祐通寶（北宋1086年初鑄・篆書体）。なおSD168出土の可能性もある彫三島碗の破片が出土している（接合資料9）。ほかに瓦質鉢、底部糸切の土師器、京都系土師器1期皿、平瓦、埴、近世陶器の破片が出土している。残留遺物として26の古代土師器小型甕。ほかに須恵器甕・坏蓋、古代土師器坏の破片が出土している。

彫三島碗

B8区 27は中国製白磁稜花皿の口縁片。28は青磁の香炉口縁片。29は15世紀後半～16世紀前半の中国景德鎮窯系青花碗B群の口縁片。30は中国漳州窯系青花碗の口縁片。31は15世紀の備前焼甕口縁片。32は注口のある備前焼水注。33は1610～1630年製の砂目の唐津焼灰釉陶器碗底部片。34も同じ時期の唐津焼陶器皿口縁片。35は薄手の京都系土師器1期の小皿。36は口縁に煤が付着し灯明皿として使用された京都系土師器2期の小皿で、故意に打ち割ったような欠け方をしている。37～39は一端を欠いた管状土錘A類。なお接合資料14の備前焼壺の破片が出土している。ほかに備前焼甕・播鉢、瓦質鉢、底部糸切の土師器坏、ロクロ目土師器皿、土師器鍋、丸瓦、埴の破片が出土している。残留遺物として40の8世紀の土師器皿。41の瀬戸美濃産卸皿の口縁片があり、ほかに須恵器壺、古代土師器坏底部の破片が出土している。

C8区 42は近世陶器の壺口縁片。43は京都系土師器1期の皿口縁。44は口縁に煤が付着して灯明皿に使用した京都系土師器1期の小皿。45は京都系土師器1期の小皿。46は口縁に煤が付着して灯明皿に使用した京都系土師器2期の小皿。47は京都系土師器4期の坏。48は完形の管状土錘A類。49は半分に折れた銭種不明の銅銭。ほかに備前焼播鉢、瓦質火鉢・鍋、平瓦、埴の破片が出土している。

絵唐津

B9区 50は中国製青磁稜花皿。51は16世紀の中国景德鎮窯系青花皿E群の底部片。52は唐津焼近世陶器碗。53は中国景德鎮窯系青花皿底部片。54は内外面に貫入がはいる窯元不明の磁器碗口縁。55は瀬戸美濃産天目碗の口縁片。56は大窯3期の瀬戸美濃産溝縁皿。57は1580～1600年ごろの近世1B期の備前焼播鉢口縁。58は1590～1610年製の絵唐津碗底部。59は京都系土師器2期の皿口縁片。60は京都系土師器3期の大型皿。61と62は寸胴型の管状土錘A類の完形品。63は完形の中国銅銭、熙寧元寶（北宋1068年初鑄・篆書体）。64は完形の中国銅銭、大康通寶（遼1075年初鑄）または大安通寶（遼1085年初鑄）。65は木製の蓋あるいは底部。なお（接合資料4）の備前焼壺、（接合資料9）の彫三島碗、（接合資料10）の瓦灯、（接合資料11）の中国製焼締陶器の鉢、（接合資料35）の備前焼甕の破片が出土している。ほかに白磁、彫三島、備前焼甕、瓦質釜、底部糸切の土師器坏、平瓦、埴、鉄器の破片が出土している。残留遺物としてほかに須恵器甕・高坏、古代土師器壺・坏底部・甕の破片が出土している。

C9区 66は中国景德鎮窯系青花碗C群のいわゆる蓮子碗口縁片。なお接合資料2の瓦質風炉の破片が出土している。ほかに端反り口縁の青磁碗、白磁皿、中国景德鎮窯系青花碗、中世6期の備前焼播鉢、唐津焼藁灰釉陶器、瓦質土器、ロクロ目土師器皿、京都系土師器1期皿、土師器甕、

鉄器の破片が出土している。

B10区 67は完形の中国銅銭である紹聖元寶(北宋1094年初鑄・篆書体)。ほかに土師器、動物骨、残留した須恵器甕の破片が出土している。

C10区 68は瓦質鍋の口縁。ほかに中国景德鎮窯系青花碗C群、埴、残留した古代土師器杯の破片が出土している。

青磁人形手

B11区 69は5回目掘下げ時に出土した中国龍泉窯系青磁人形手。70は2回目掘下げ時に出土した中国景德鎮窯系青花碗E群口縁片。71は上部出土の中国景德鎮窯系青花皿F群の口縁片。72は両端をヘラ調整した管状土錘A類。73は銅製の把手の金具。74は5ないし6回目掘下げ時に出土した「寶」1字のみのこる銭種不明の銅銭の破片。なお東区Ⅱ層2回目から接合資料9の彫三島碗の破片が出土している。ほかに備前焼甕の破片が出土している。

## 12 近現代の遺構と遺物

### 概要

水田側溝である溝SD145は宅地化直前まで水田側溝として機能していたが、それ以外に以下の溝SD143がこの時期の遺構である。

L字溝

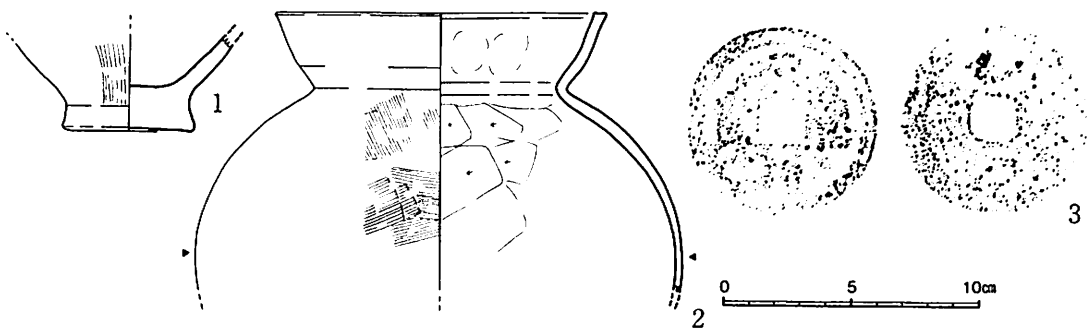
### 溝

SD143 第2層上面で北1区の区画にそって、L次形に検出した浅い溝で、出土遺物なし。マンガンの厚く沈着した埋土で、上層からのしみてきたものと考えられ、近世の水田および水路の位置を反映しているものと推定される。

## 13 そのほかの遺物 (第4-154図)

攪乱や基盤層から出土した遺物を報告する。

1は被熱して変色した弥生前期末の甕の底部。2は口縁が内湾し上面を面取りする球形銅の古墳時代前期末～中期初めの土師器甕(布留式)、基盤IV層中出土。3は攪乱土から出土した中国銅銭の天禧通寶(北宋1017年初鑄・真書体)。



第4-154図 その他の遺物 (1/3、3=1/1)

第6節 墓地の遺構と遺物

概要（第4-155図、第4-3表、第4-4表）

18基

以下に記述する18基の遺構は、西区から北1区にかけて集中的に分布する一群の墓である。墓の認定はまず人骨の出土を第一に、次に埋葬施設の確認をもっておこなった。1～17号墓は現地調査中の認定順に番号を付した。ただし2号墓はS268遺構として調査終了後、現地での検討中に事後認定した墓であり、18号墓はS290として現地調査中は小ピットと考えていたが、報告書作成時の整理中に人骨片が確認され墓と認定した。

時期

墓の時期については、副葬品が極めて少なかったため苦慮したが、覆土中に含まれる遺物と、切合関係、さらに墓の方向と配置等の分布状態から3時期に分かれると考えられた。すなわち3号墓は副葬された土師器皿のセットから16世紀前半にさかのぼると推定され、この墓のみが西区の区画Aに属し、成人が埋葬された木製桶の座葬である。この時期を墓地第1期とする。

第1期

それ以外の墓は、埋葬施設が明確でない幼児墓のみからなる一群と、南北方向に棺の方向をむけ東西に等間隔に配列された墓と、それに規制されて配置された一群である。前者の墓を後者が破壊して埋葬しているため、前後関係は明瞭であった。前者を墓地第2期、後者を墓地第3期とした。墓地廃絶後堆積した第2層の下部からは絵唐津碗や彫三島碗の破片が含まれているので、墓地は1590年代には存続していないことは確実であって、各墓の埋土中にも1590年代以後の遺物は含まれていない。この墓地が、後述するようにイエズス会府内教会の墓地であるとすれば、おそらく1587（天正15）年の島津軍府内占領と、その後につづく豊臣軍の府内進駐により、府内教会ではイエズス会員が退去を余儀なくされているので、その後豊臣秀吉による伴天連追放令によって教会の再開はおこなわれなかったため、墓地の終末はおそらく1587（天正15）年中にあたるであろう。この墓地第3期の墓の覆土中に混ざりこんだ土師器の大半は、京都系土師器第2期の皿片であるので、第3期の墓地の始まりは1570年代にさかのぼり、さらに1560年代までさかのぼる可能性がある。第2期の年代は第3期の墓より古いことと、第2期の始まりが正しい意味での墓地の始まりであること、この付近にはイエズス会府内教会以前に宗教施設がないことなどから、墓地の成立は府内教会の成立を前提としていたことがわかる。この点から第2期の上限は府内教会が開設された1553（天文22）年に求めることができる。したがって第2期の年代は1553（天文22）年以後の1550年代から60年代となる。

第2期

第3期

ほかの遺構の年代と対比すると、第1期は16世紀第2四半期、第2期は第3四半期、第3期は第4四半期前半にほぼ対応する。

なお以下の記述は、舟橋京子・田中良之氏ら九州大学関係者による人骨所見をまじえつつ、山崎文子による木棺と墓坑の調査所見を田中がまとめたものである。

第4-4表 第10次Ⅱ区北調査区墓地時期別一覧

時期区分	年代	墓
第1期	16世紀第2四半期	3号墓
第2期	16世紀第3四半期（1553～60年代）	5号墓、6号墓、7号墓、13号墓、14号墓、15号墓、16号墓、17号墓
第3期	16世紀第4四半期前半（1570年代～1587）	1号墓、2号墓、4号墓、8号墓、9号墓、10号墓、11号墓、12号墓、18号墓

\* 1、第1期は教会以前。第2・3期は教会存続時期にあたる。  
 \* 2、第2期は幼児のみの墓地、小児・成人は含まれない。  
 \* 3、第3期は、長方形木棺の使用と、成人墓が4基等間隔で配置され、頭位も北向き。

第4-3表 第10次Ⅱ区北調査区墓地一覧

墓番号	連構番号	棺種	年齢推定	性別	人骨	頭位	副葬品	墓坑の前後関係と配置	墓地時期	備考
1号墓	ST130	長方形木棺	成人熟年	?	伸展群・腕を胸の上で交差させる	北	なし	SD165埋没後 SD167に切られる。	3期	釘、底部黄状
2号墓	ST135	木棺?	成人?	?	伸展群?	?	なし	—	3期	釘・人骨出土。埋土に中国製黒釉陶器壺片。
3号墓	ST268	早桶?	成人熟年後半	男性	座葬	—	棺内に土師器小皿3枚	SK247(16世紀第1四半期)埋没後	1期	人骨出土。
4号墓	ST150	長方形木棺	成人熟年	男性	仰臥屈葬	北	なし	SD277,SD294埋没後	3期	釘・姿勢西向き、金具多数出土。転用棺か。埋土に京都系土師器2期と3期の皿、直上に結唐津片。
5号墓	ST154	早桶?	幼児1歳半~2歳	?	座葬	?	なし	—	2期	頭骨・歯出土。姿勢北向き。
6号墓	ST157	方形木棺	幼児4~5歳	?	右側臥屈葬	北	なし	—	2期	姿勢西向き
7号墓	ST158	方形木棺	幼児9ヶ月	?	座葬	北	なし	—	2期	頭骨・歯出土。
8号墓	ST149	長方形木棺	成人熟年	女性?	仰臥屈葬	北	なし	13・14号墓を切り、12号墓に切られる。	3期	転用棺らしき小型の木棺に成人を埋葬。埋土に京都系土師器2期皿片。
9号墓	ST152	方形木箱	成人熟年	?	左側臥屈葬	北	なし	SD255(15世紀)埋没後	3期	姿勢東向き、直上に京都系土師器2期皿片。
10号墓	ST260	長方形木棺	幼児3歳前後	?	伸展群	西	なし	9号墓に直交	3期	釘出土。
11号墓	ST257	?	幼児	?	伸展群?	南?	ガラス小玉1点	9号墓に並行	3期	人骨・乳歯出土。
12号墓	ST274	方形木箱	幼児1~2歳	?	左側臥屈葬	—	なし	8号墓を切る	3期	姿勢東向き、埋土に京都系土師器2期皿片。
13号墓	ST289	土坑墓	幼児1~2歳	?	横臥屈葬?	西?	なし	8号墓に切られる	2期	姿勢南向き
14号墓	ST295	土坑墓	幼児1~3歳	?	?	?	土師器小皿1枚	8号墓に切られる	2期	頭骨・歯牙出土。
15号墓	ST296	木棺?	小児7~8歳	?	?	?	なし	SD256とSK298後	2期	頭骨出土。
16号墓	ST297	土坑墓?	幼児1歳前後	?	座葬?	?	なし	SK256を切る	2期	頭骨出土。
17号墓	ST299	土坑墓?	未成人	?	?	?	なし	SK256とSK298を切る	2期	—
18号墓	ST290	?	幼児?	?	?	?	なし	SK256を切る	3期	骨片出土。

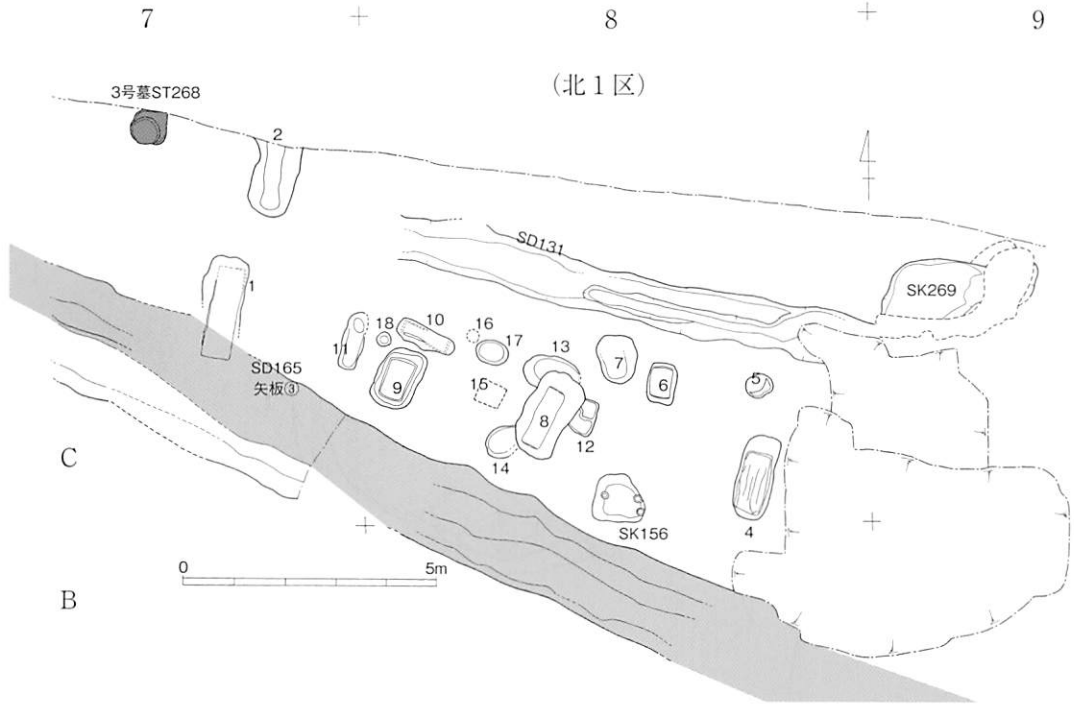




1 墓地第1期 (第4 - 156 図)

第1期に該当する墓は、3号墓の1基のみであるが、埋葬時期が16世紀第2四半期にさかのぼると考えられるのでイエズス会の教会設立以前の墓と考えられる。その所在する場所も厳密に言えば、西区の区画Aの範囲内にあたり、第2期以後の墓地とは区画をこととしているので、本来集団墓地に含まれるものではないと考えられる。おそらく16世紀前半に存在した東西道路に面した区画の中に葬られた単独墓と推定されるが、調査中は一群の遺構として扱ったのでここで記述する。

教会以前の  
単独墓



第4-156 図 墓地第1期 (1/150)

3号墓 ST268 (第4 - 157 図)

C7区(西区)のSK247掘下げ中に検出した。16世紀第1四半期の土坑SK247に掘り込んでいる。長さ70cm、幅65cm以上、深さ20cm以上の円形掘形に、成人を埋葬した径48~57cmの桶棺墓である。掘形の南に偏って平面円形の桶の痕跡を検出した。

木桶

座葬

成人骨の埋葬姿勢は木製桶を利用した座葬である。西側から肋骨、左上腕骨、頭蓋骨、左大腿骨、右上腕骨、右尺骨、右橈骨、右大腿骨、右脛骨、左前腕骨の順で出土している。頭蓋骨は顔面が下向きで頭頂部が東を向いている。右上腕骨は近位が北を向き、右尺骨は近位が南を向いている。男性の可能性の高い、熟年後半以上の成人骨である。

その人骨の下から径46cmほどの桶の底板を検出した。数枚の板を接合したもので、板目は北西から南西方向をむく。木質の表面しか残存していないので厚さは不明であるが、掘形底面と木質表面の間には3cmほどの差がある。底板の周囲に幅3~5cmにわたって帯状に土質の異なる部分があり、土質は灰褐色の粘質土で、小礫をわずかに含む土である。桶の木質が粘土に置き換わったものと推定される。深さ20cmほどが残存していた。

土師器副葬

棺内からは完形の糸切り土師器皿3枚が出土している。2の完形土師器は内向きの棺内埋葬で、人骨の上に乗る。1と3はともに人骨の下の桶底部隅で出土したが、1は割れた状態で完形のまま出土しており、いずれもこの埋葬に伴う副葬土師器と考えてよい。1はその出土状態から故意に割られたもので、脛骨上にのった状態で出土しているので、棺内に副葬された可能性と棺上におかれたものが落下した可能性がある。2は口縁に故意の打ち欠きがある。これに対して3には故意の破

損はない。

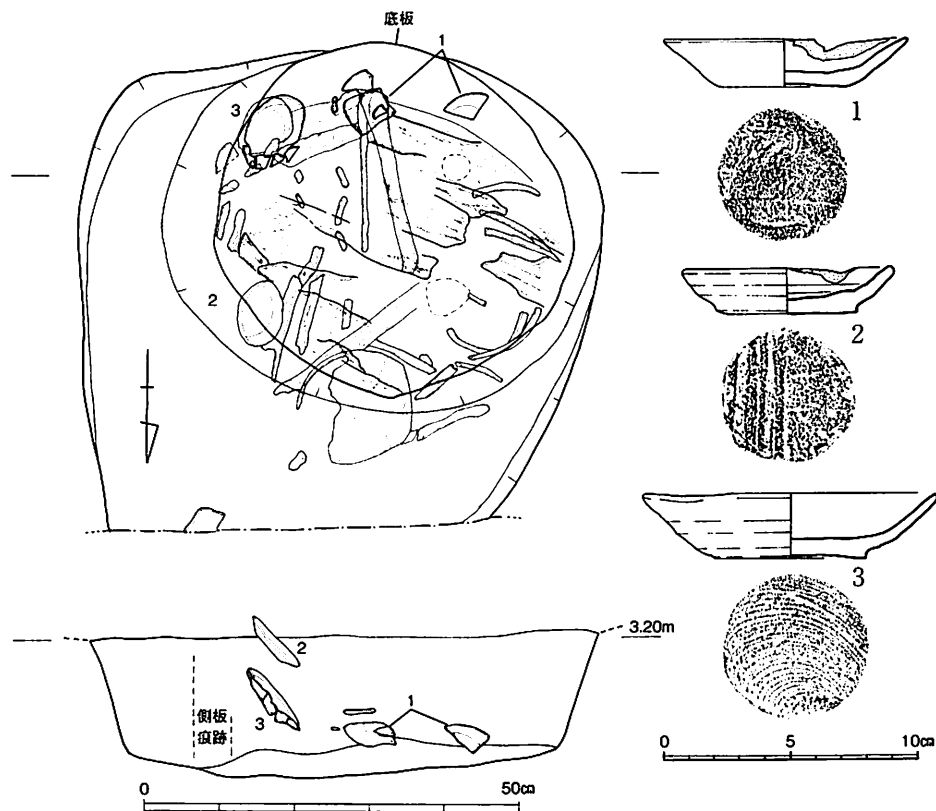
土師器の1と3は河野分類のE類にあたり16世紀前半から中ごろを中心にするが、覆土中の遺物を含めて京都系土師器の破片がなかった点から16世紀前半の遺物と考えられ、第1四半期の遺構SK247を切っているところから、墓そのものは16世紀第2四半期の墓と考えられる。

3号墓 ST268 出土遺物

土師器皿

副葬品 1は接合してほぼ完形になった底部糸切の土師器皿。口径9.6cmの中型の皿で、胎土に石英粒子の多い海部郡産の土師器である。指ナデと板状圧痕はなく河野分類のE類にあたる。2は完形の底部糸切の土師器小皿。口縁に一箇所打ち欠きがある。内面指ナデと外底面に板状圧痕がのこる。3は接合して完形になった底部糸切の土師器皿。指ナデと板状圧痕はなく河野分類のE類にあたる。

掘形内 ほかに残留した古代の須恵器の破片が掘形内から出土している。



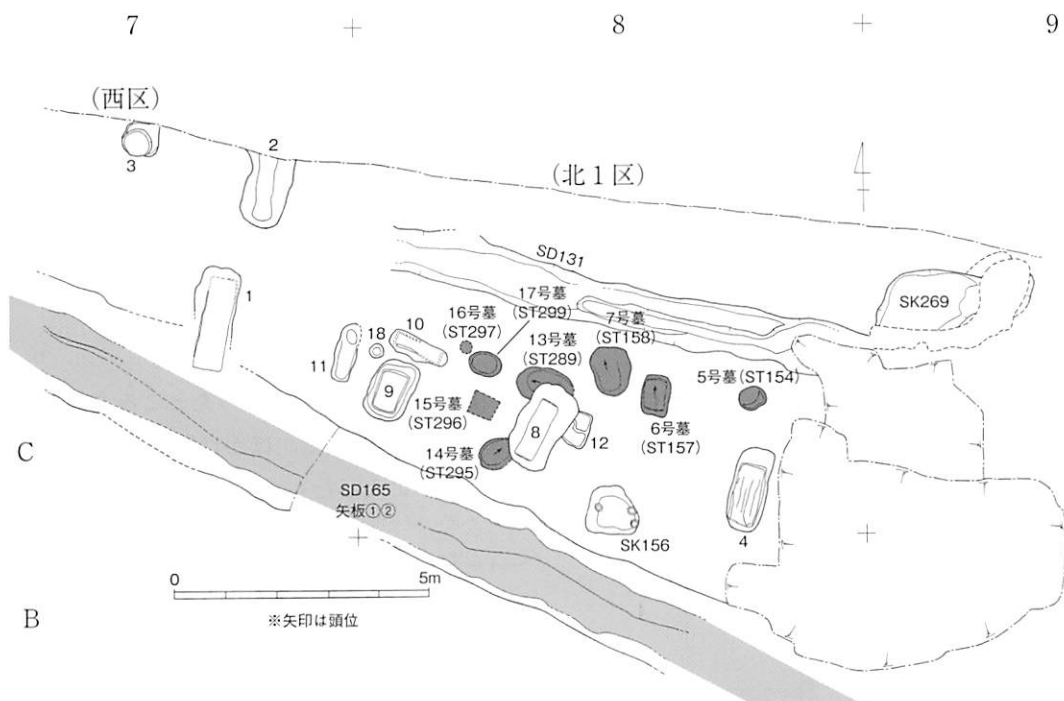
第4-157図 3号墓 ST268 (遺構 1/10・出土遺物 1/3)

2 墓地第2期 (第4-158図)

幼児墓群

後述する第3期の墓がほとんど長方形の木棺墓からなり、一定の法則性を持って配列されているのに対し、第2期の墓は第3期の8号墓の周辺に集中する一群である。すべてが幼児あるいは小児埋葬であり、木棺・桶等の埋葬施設を使用した埋葬は5号墓・6号墓・7号墓の東側に並ぶ3基のみである。西側に群集する13号墓・14号墓・16号墓・17号墓は、土坑に直葬されたものと推定され、15号墓のみが掘形の輪郭から木棺の利用の可能性がある。副葬品を伴うのは14号墓の土師器小皿1点のみである。埋葬姿勢は5号墓と16号墓が座葬、6号墓・7号墓・13号墓が横臥屈葬であり、伸展葬は確認できない。北頭位が多いが、西頭位もあり一定しない。

この時期に対応する16世紀第3四半期の段階では、第2期の墓地の北にはなにもない空地がひろがり、なんらの区画施設もない。南側には道路SF151の側溝SD165があり、第1および第2矢板列の水路が機能していた時期にあたる。墓地は道路によってさえぎられた区画の南端に設けられたものと推定される。



第4-158図 墓地第2期 (1/150)

5号墓 ST154 (第4-159図)

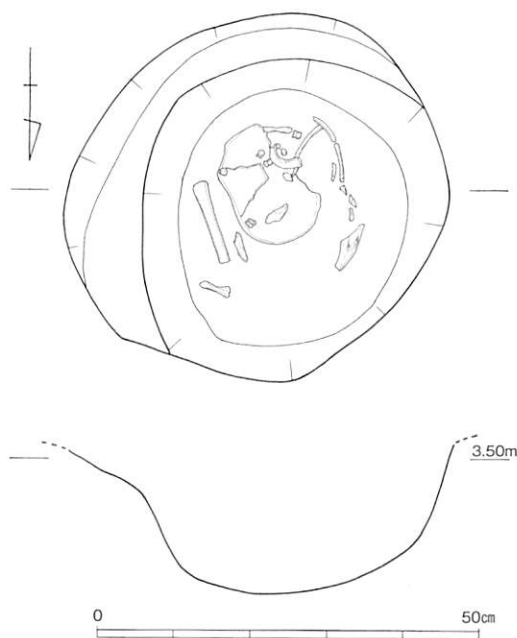
木桶幼児墓

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の土坑墓であるが、木製桶を使用した可能性がある。墓坑は径約45cmの円形である。埋土は灰褐色土で、空気を含みほさほさである。頭骨と歯の破片が出土し、幼児墓と推定される。釘などの鉄製品や副葬品等の出土遺物はない。遺構の切合関係はない。

座葬  
1才半~2才前後

人骨について。墓坑中央から頭蓋骨が出土し、顔面は南向きだが上下は不明。頭蓋骨の東西から大腿骨が出土し、頭蓋骨の西側、大腿骨の南側から肋骨が出土している。その配置から本人骨は正面北向きの座葬で、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋骨が左右大腿骨の間に転落したものと考えられる。性別不明の1才半~2才前後の幼児と推定されている。

木棺の痕跡や釘の出土がなかったため、棺の存在は証明できないが、幼児人骨が座葬であること、頭蓋骨が転落する空隙が存在したことを考えると、釘を使わない小型の木製桶が使用された可能性は否定できない。



第4-159図 5号墓 ST154 (1/10)

6号墓 ST157 (第4 - 160 図)

木棺墓

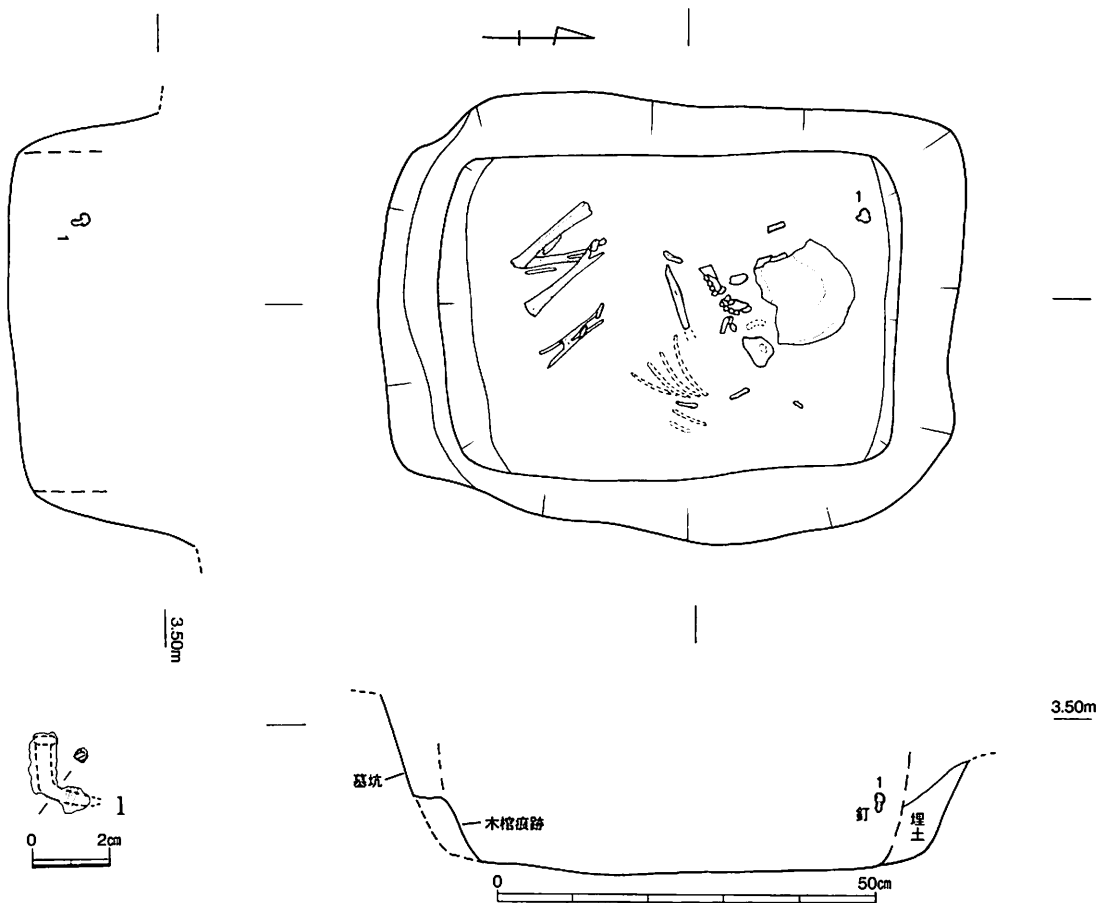
幼児墓  
4~5才

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の木棺墓である。墓坑は長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.2m。内部に長さ60cm、幅40cm、深さ20cm以上の方形木箱の痕跡が土質の違いから明瞭に検出できた。木棺の長軸はほぼ真南北に重なる。木棺埋土は灰褐色土で、空気を含んでほろほろしていた。棺材は残っていないが、人骨と北側小口付近から鉄釘が1点出土している。棺と人骨の大きさから幼児墓と考えられる。副葬品等の出土遺物はない。人骨はほぼ全身が残り、頭位は北向きで、肢体は右側臥屈葬である。人骨は、4~5才前後の幼児で、性別は不明。遺構の切合関係はない。

6号墓 ST157 出土遺物

鉄釘

1は残存長2.3cmの小型の鉄釘、先端を失っているが折れ曲がったところより先端に直交する木質が残っているので、木棺の蓋に使われた釘と推定される。ほかに埋土中から古代の土師器と底部糸切の土師器の碎片が出土しているが、覆土中に入ったもので、副葬品ではない。



第4-160図 6号墓 ST157 (遺構 1/10、遺物 1/3)

7号墓 ST158 (第4 - 161 図)

木棺墓

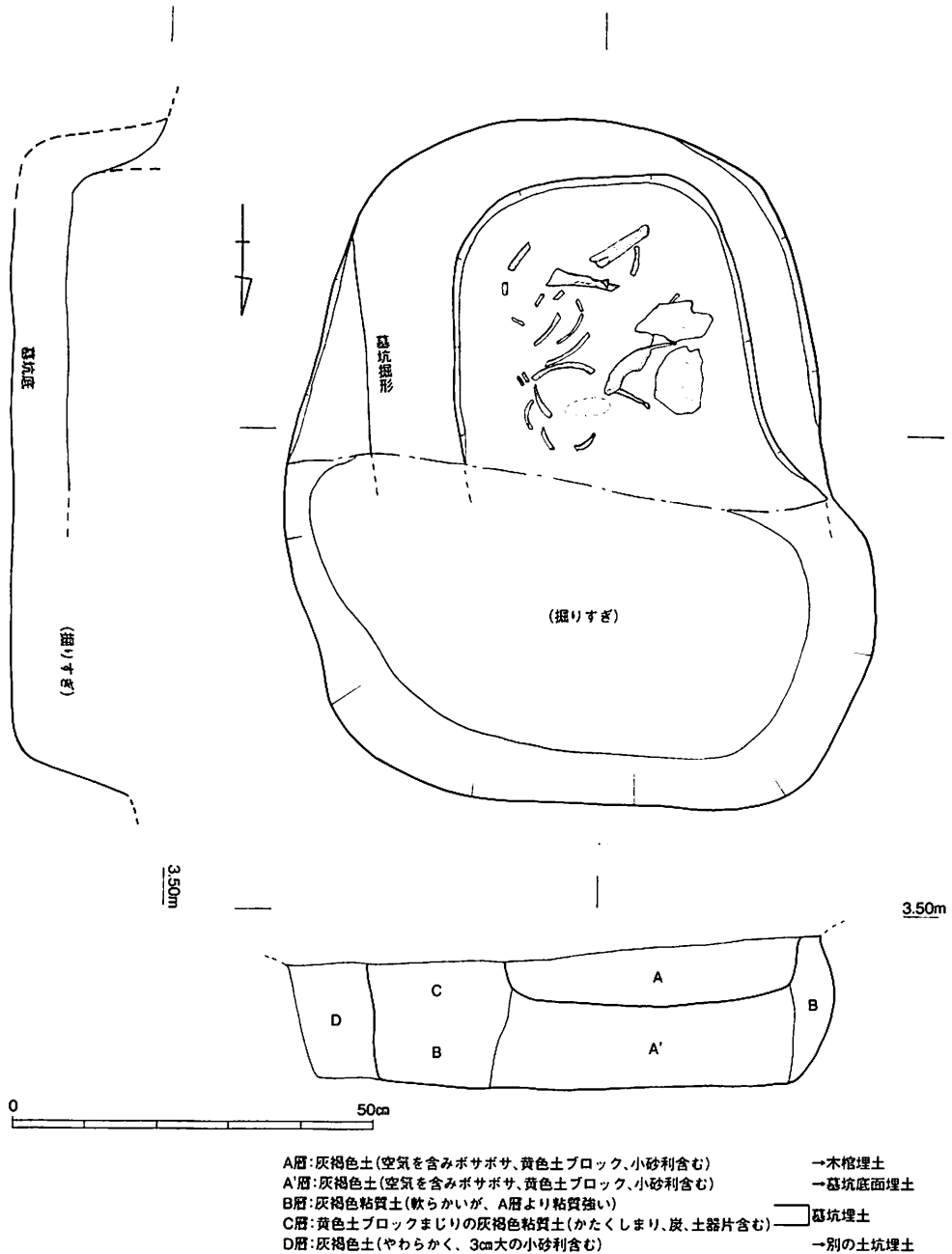
幼児墓

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の木棺墓である。墓坑は長さ0.6m以上、幅0.6m、深さ0.2m以上の隅丸長方形である。北半を掘りすぎているが、長さ45cm以上、幅35cm、深さ20cm以上の方形木箱の痕跡が残り、頭骨と歯の破片が出土しているので墓であると判明した。木棺と人骨の大きさから幼児墓と考えられる。副葬品等の出土遺物はない。木棺内部には、灰褐色土で空気を含んでほろほろした埋土(A層)があり、周囲は基盤層に由来する黄色土を斑状にふくむよくしまった掘形埋土(B・C層)である。棺材や釘等は残っていない。

座葬

墓坑内北西部から頭蓋骨が出土し、頭蓋骨東側から肋骨が一部散乱した状態で見つかった。南側からは大腿骨が軸を東西にした状態で、大腿骨の南側からは脛骨が、同じく軸を東西にして出土し、肋骨の下から乳歯の破片が出土している。性別不明の生後9ヶ月前後の乳児の座葬である。

9ヶ月乳児



第4-161図 7号墓ST158 (遺構 1/10)

13号墓ST289 (第4-162図)

土坑墓

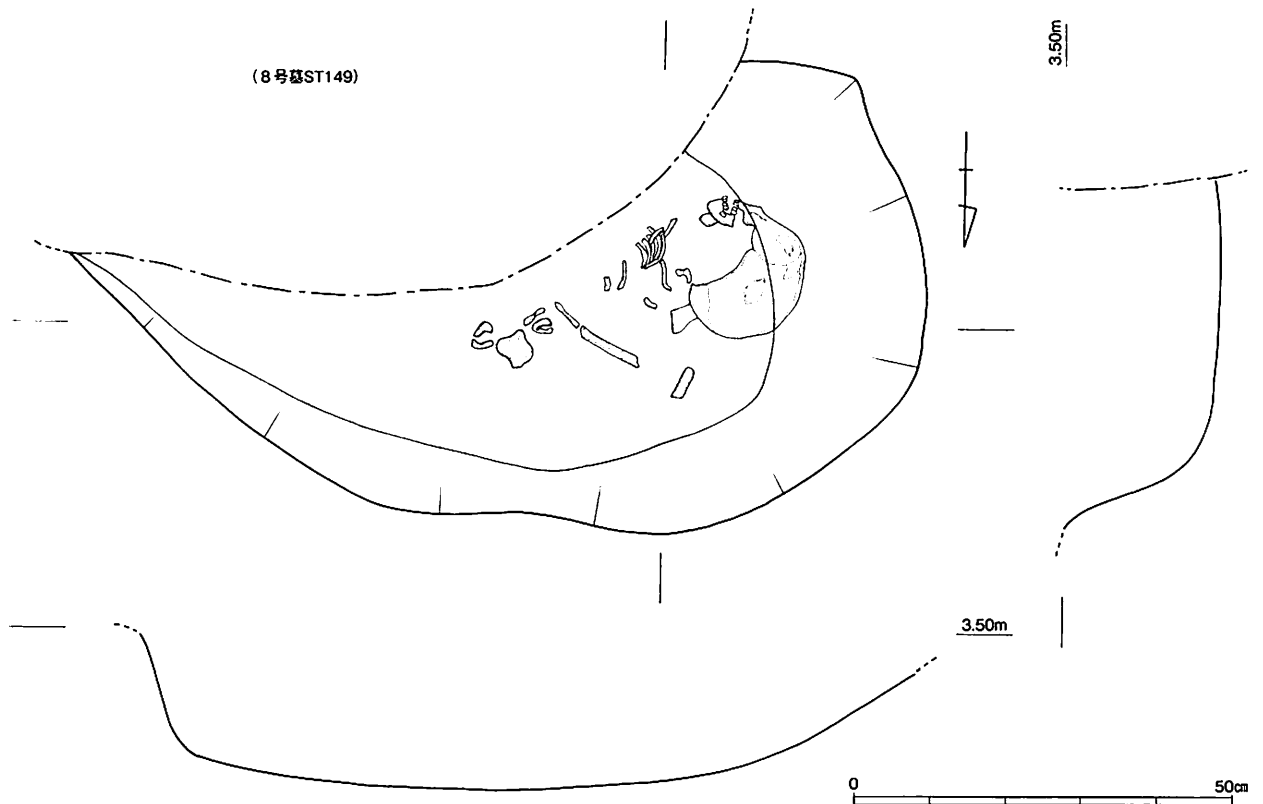
C8区(北2区)の基盤Ⅲ層直上で検出した幼児埋葬の土坑墓である。墓坑掘形は長さ1m以上、幅0.6m以上、深さ0.2mの長楕円形である。墓坑南側と人骨の下半は8号墓ST149に切られて残っていない。埋土全体が空気を含んでぼさぼさした灰褐色土で、木棺の痕跡が認められなかったので土坑墓であると推定される。横臥屈葬の頭位西向き幼児人骨が検出されたので幼児埋葬と考えられる。出土遺物なし。

屈葬

1~2才幼児

人骨の顔面は南向きで、顔の東から肋骨、その北から上肢骨、さらに東から骨盤が、出土している。

人骨は、性別不明の1～2才前後の幼児骨である。本人骨は8号墓の墓坑により切られており、その際の攪乱により頭蓋骨北側出土の長管骨片が本来の位置より高いレベルから出土している。



第4-162図 13号墓 ST289 (遺構 1/10)

14号墓 ST295 (第4-163図)

土坑墓

C8区(北2区)の第2層除去後に検出したもので、木棺の痕跡が認められなかったので土坑墓であると推定される。墓坑は長さ70cm以上、幅60cm、深さ15cmの楕円形で、長軸は東北―南西方向である。墓坑の東部は8号墓ST149に切られる。埋土は灰褐色土で、人骨の周辺は空気を含んだざくざくした土であった。北端に拳大の礫が一点置かれ、そのそばに割れた頭骨と数点の歯牙がおおよそ同じ高さで底面に張り付くように検出された。頭骨と歯牙のそばに完形の土師器小皿(1)が内面を下にした状態で、頭骨にもたれかかり被せるような位置から出土している。これは埋葬に伴う副葬品と考えてよい。ほかに覆土中から須恵器の破片が出土しているが、これは混ざりこんだものである。人骨は性別不明の1～3才前後の幼児骨と鑑定されているので、14号墓は幼児埋葬の土坑墓と考えられる。

幼児  
1～3才

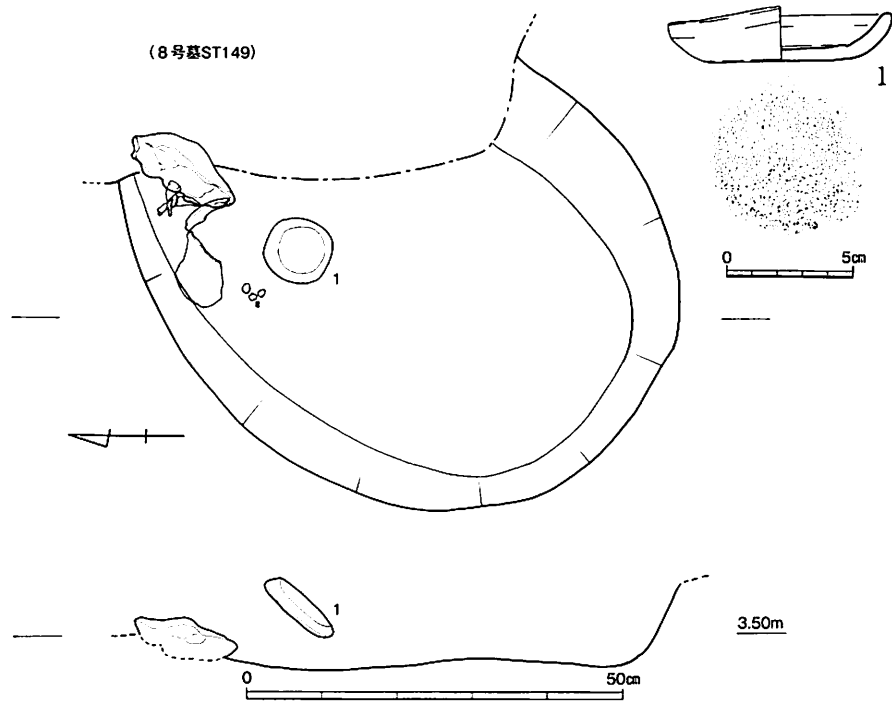
墓の時期は第4四半期の墓8号墓に切られているので、それ以前であることは確かであるが、上限は2案ある。1案は土師器小皿の形態から16世紀前半までさかのぼる可能性をみとめて16世紀前半の墓とする案。2案はその位置から第3四半期の幼児埋葬墓群に含まれるので、第3四半期の墓とする案。本報告では幼児埋葬という点を重視して2案とした。

14号墓 ST295 出土遺物

土師器

1は口縁に2箇所煤が付着して灯明皿として使用された、完形の底部糸切の土師器小皿。内面に指ナデがある河野分類のE類。16世紀第2四半期から第3四半期の土師器である。煤の付着は2

回のみで最小2回だけ灯明に使われた後、口縁を打ち欠くこともなく置かれた土器である。ほかに残留した須恵器の破片が出土している。



第4-163図 14号墓 ST295 (遺構 1/10、遺物 1/3)

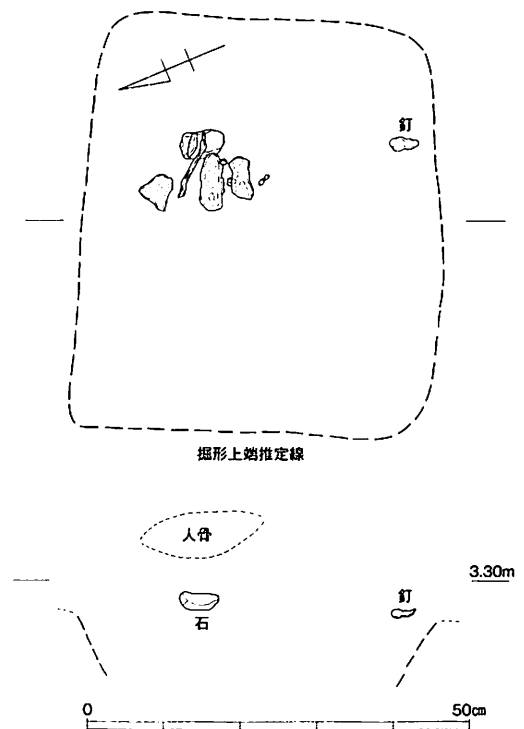
15号墓 ST296 (第4-164図)

木棺墓

C8区(北2区)で検出された幼児埋葬の木棺墓である。木棺の痕跡は認められなかったが鉄釘が1点覆土中から出土しているので木棺墓であると推定される。まず人骨が出土し、そのあとで墓坑らしき長さ55cm、幅45cm、深さ10cm以上の方形の輪郭を検出したが、掘り下げた結果底面を明確にできなかった。

小児  
7~8才

中央北よりから頭蓋骨と鎖骨片が出土している。下顎骨内に第1大臼歯が埋伏していた。性別不明の7~8才の小児と推定されている。15世紀代の溝SD255と土坑SK298を切る。副葬品等はまったくなかった。



第4-164図 15号墓 ST296 (1/10)

16号墓 ST297 (第4-165図)

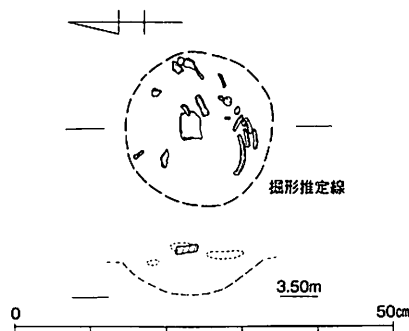
土坑墓  
木桶

C8区(北2区)で検出した幼児埋葬の土坑墓であるが、木製桶を使用した可能性がある。墓坑は径約20cmの円形と推定される。頭骨と歯等の破片が出土し、幼児墓と推定される。釘などの鉄製品や副葬品等の出土遺物はない。15世紀後半の土坑SK256を切る。

座葬  
1才乳児

埋葬姿勢は不明ながら頭蓋骨と歯牙が近接して西側から出土し、肋骨片がまとまって出土しているところから座葬の可能性が高いと推定されている。性別不明の1才前後の乳幼児である。

木棺の痕跡や釘の出土がなかったため、棺の存在は証明できないが、座葬であるならば、釘を使わない小型の木製桶が使用された可能性は否定できない。

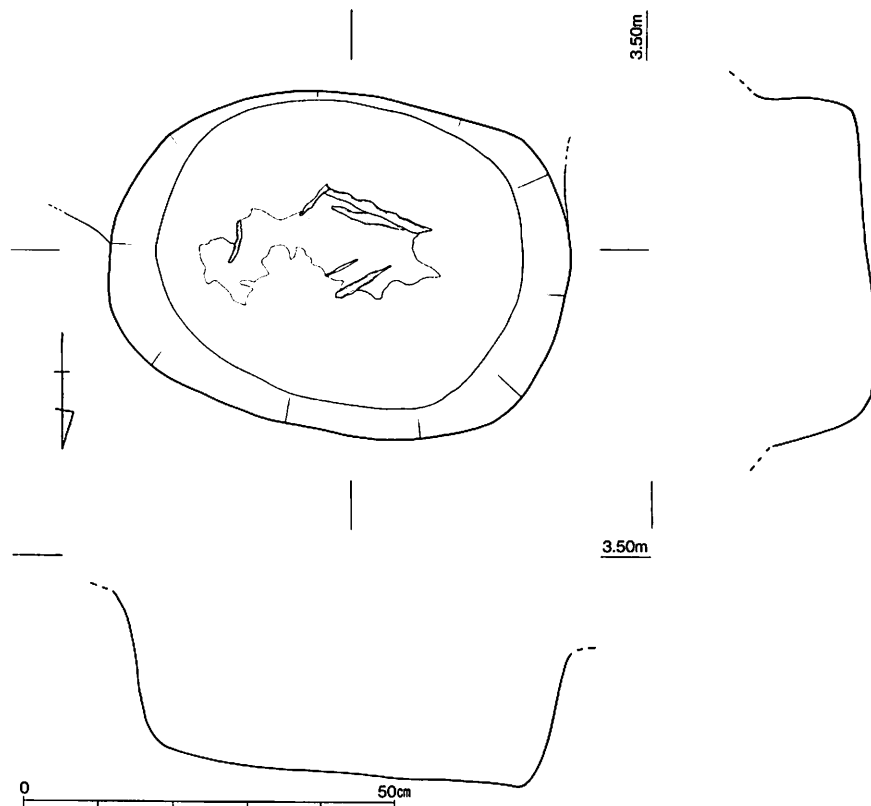


第4-165図 16号墓 ST297 (1/10)

17号墓 ST299 (第4-166図)

土坑墓

C8区(北2区)で検出したもので、木棺の痕跡が認められなかったので土坑墓であると推定される。掘形は楕円形で長さ60cm、幅40cm、深さ20cm以上。15世紀後半の土坑SK256と土坑SK298を切る。埋土は灰褐色土で空気を含んだざくざくした土であった。人骨の破片が墓坑中央からまとまって出土した。性別不明の未成人である。出土遺物はない。



第4-166図 17号墓 ST299 (1/10)



## 3 墓地第3期 (第4-167図)

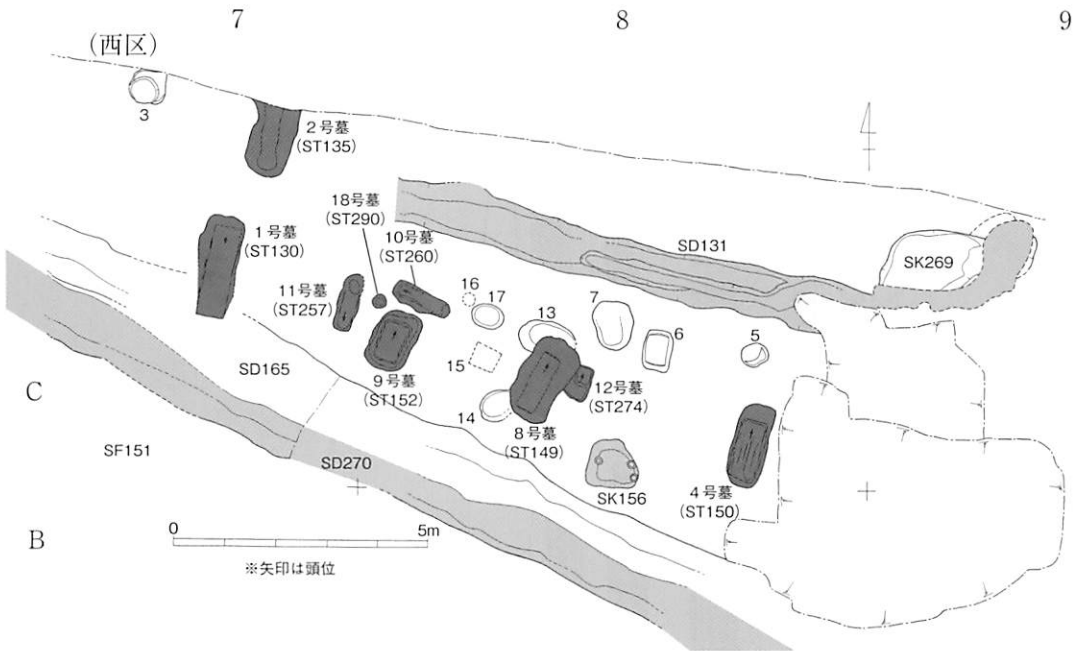
等間隔配列

成人埋葬

規則的に配列された成人墓と、その成人の周囲に配された幼児墓からなる。南北方向に木棺を配置し、北頭位で被葬者を安置する成人埋葬墓5基が、東西に西から1号墓、9号墓、8号墓・4号墓の順に2ないし3mの間隔をあけて葬られ、2号墓は1号墓の北に直列して配置されている。この5基はいずれも成人埋葬で、4号墓は唐櫃を棺に転用している。1号墓が伸展葬のほかは屈葬である。9号墓の周囲には幼児を伸展葬で葬った10号墓と11号墓、さらに18号墓が配されている。8号墓の横にも幼児が屈葬された12号墓が存在する。副葬品は11号墓の幼児埋葬に伴ったガラス小玉1点のみであった。

区画

なお第3期の墓地が存続していた間に南側には道路SF151があり、その側溝はSD250ないしSD270が対応する。それまでより道路側溝の位置が南に移動したため、1号墓をかつての道路側溝であるSD165の掘形に切り込むように埋葬することが可能となっている。SD270は水路機能を喪失して単なる区画の溝になる。いっぽう墓地の北を画すように溝SD131が掘られている。その溝と道路SF151に挟まれた空間に第3期の墓が並んでいたものと推定される。ほかに墓地に関係のある可能性のある遺構として土坑SK156がある。この土坑は8号墓そばの敷地南端ギリギリに掘られたもので、その形態と遺物出土状態から廃棄物処理土坑すなわち、墓地の中のごみ捨て穴と推定される。



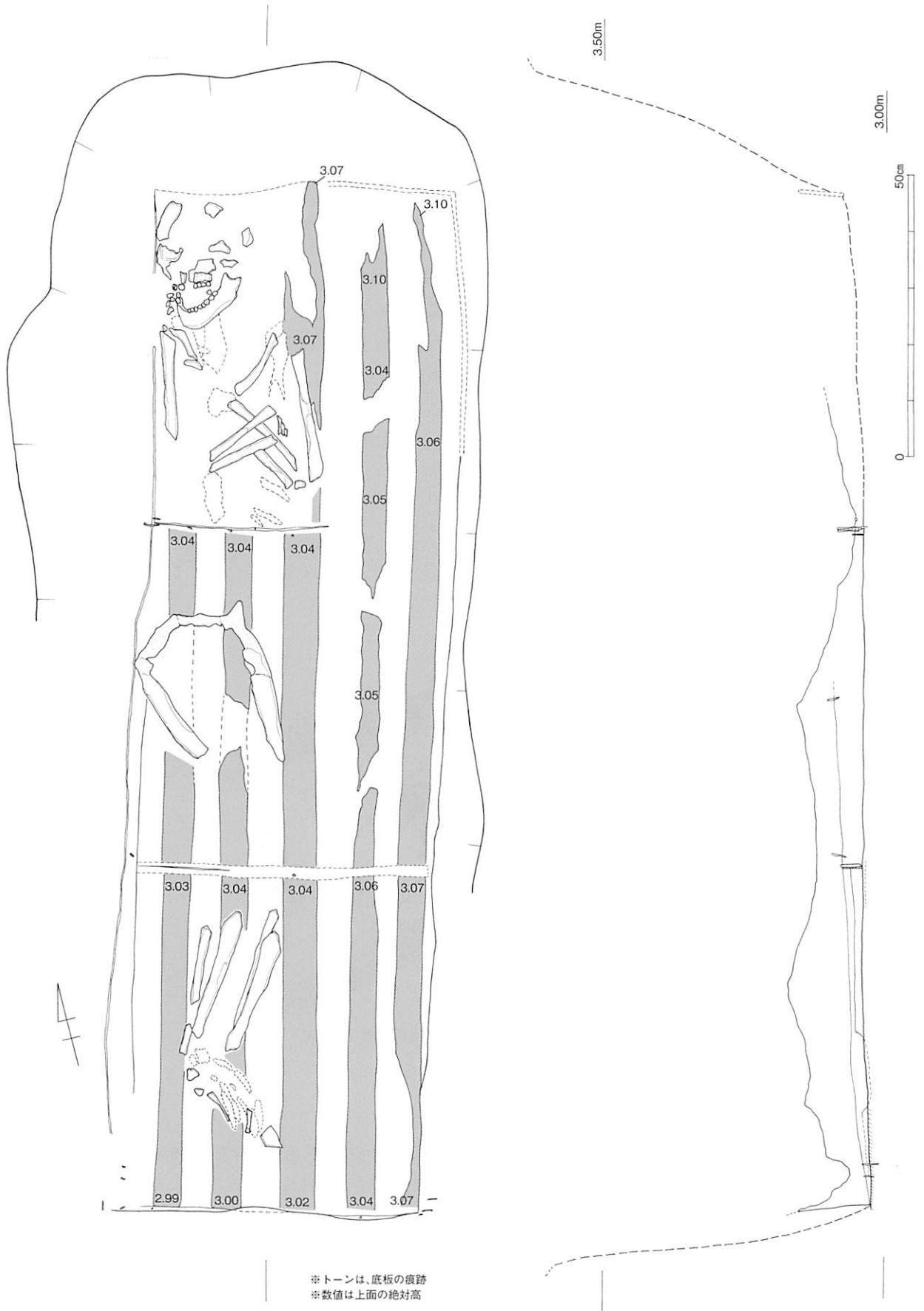
第4-167図 墓地第3期 (1/150)

## 1号墓 ST130 (第4-168図)

長方形木棺

C7区(北2区)で検出した長方形の木棺墓である。16世紀第2四半期に利用された溝SD165の第3矢板列の掘形を切り、第4四半期後半の溝SD167に上部を切られる。人骨と木棺は掘形とともに切り取りを行った。その際に底面が砂質で軟弱であったため底部が崩落した。底部はブロックとなり一部破損したが修復をおこない、現在、大分県立歴史博物館に保管してある。

掘形の北半は平面で識別可能であったが、南半は上部をSD167に切られ、下部はSD165の掘形に重なるため平面的に識別することができなかった。掘形の規模は木棺より一回り大きい程度である。内部の埋土を取り除くと1体の人骨と木棺の痕跡があらわれ、調査はその木棺を追及した。



第4-168図 1号墓 ST130 (1/10)

木棺の規模は内法で長さ185cm、幅52～55cm、底面から最高で15cmまで確認している。墓坑の検出面から木棺底面までの深さが平均約60cmなので、木棺の高さはそれ以下となり、北小口の上位で出土した鉄釘(5～7)の出土標高が3.51m付近なので、木棺の高さは50cm前後と推定される。

木棺の構造は特異なもので底面が竇状になっている。詳しくみると木棺の底部に東西横方向の棧が約60cmの等間隔で2枚認められ、底面に縦にあてがわれて板1枚に1本の鉄釘で接合されている。底板は隙間をもつ竇状に南北方向に5枚渡されている。1枚の板の幅は平均5～6cmで隙間の間隔も同じである。この底板を固定する棧板の幅が薄いので、この5枚の板はそれぞれ一枚板であったと考えてよい。側板は残存した部分を見る限り、少なくとも底板よりは幅が広い板を使用している。底部の棧板は側板から釘留めされている。小口の接合方法は観察できなかったが、蓋も含めていずれも釘による接合である。

木棺の設置方向は真南北から東に10度振っている。また木棺の安置に当たってわずか数センチの差ではあるが、頭を向けた北側が高く、人骨が片寄った西側が低くなっている。

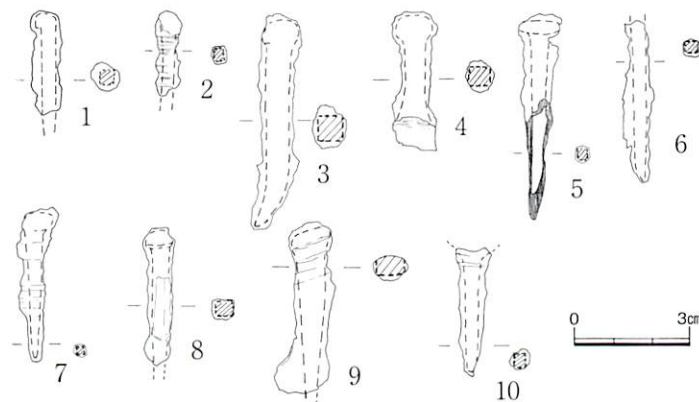
内部には伸展葬の成人熟年人骨1体が中央より西側に偏よって発見された。性別は不明である。頭位は北向きで下肢を軽屈した仰臥伸展葬である。顔面はやや西向き。上肢は左右とも肘関節を曲げ、本来胸骨があったあたりで左右の前腕を交差させている。右腕を上にする。

なお木棺に使われた鉄釘以外に、副葬品と認められる遺物は棺内にはない。

#### 1号墓 ST130 出土遺物 (第4 - 169 図)

1～10は木棺に使われた鉄釘である。いずれも軸の断面が方形の和釘である。3・5・7は完全なまま出土した。1寸から2寸の大きさである。ほとんどの釘に木質が残存しており、先端部では縦方向に、基部では横方向に木質が付着するところから見て、いずれも方形の木棺の接合に用いたものと推定される。以上の釘は、木棺上半から内部に落下したものである。下半や基底部に残る釘は切り取りを行ったため取り上げていない。

ほかに残留した古代の遺物が多く、須恵器甕、土師器壺などや中世の底部糸切土師器の破片が出土しているが、いずれも細片で埋土中に混入したものである。



第4-169図 1号墓 ST130 出土遺物 (1/2)

2号墓 ST135 (第4 - 170 図)

長方形土坑

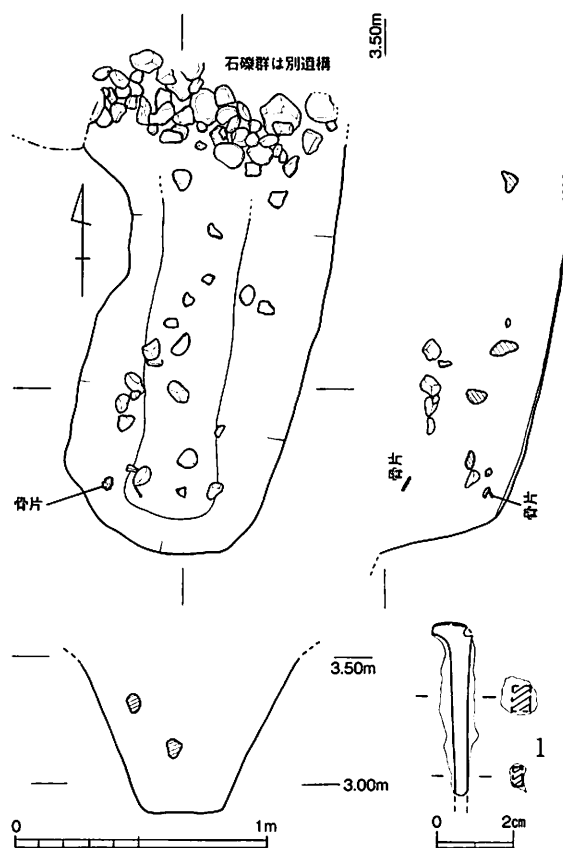
鉄釘と骨

C7区(北2区)で検出した長方形の土坑である。長さ1.7m以上、上辺幅0.8m底面幅0.3m、深さ0.5~0.7m。発掘中は墓と考えていなかったが、1号墓と同じ方向で並ぶように位置し、内部から鉄釘と骨片が出土したため木棺墓の可能性を考慮して墓とした。墓とすれば南北方向(東6度振る)の長方形の墓坑あったと推定される。覆土中から多量の遺物が出土したが、別の遺構と重複していた可能性が高い。北端が調査区外に続いたためギリギリまで調査したが、磔を多量に廃棄した別の遺構に切られていた。下記に述べる接合資料28の年代から第4四半期前半の遺構と考えられる。

2号墓 ST135 出土遺物

1は先端を失った鉄釘。なおSD250、SK231、SK236、SK269出土破片と接合した中国製黒褐釉陶器壺(接合資料28)の破片が出土している。この接合資料28の破片はほとんど第4四半期前半の遺構から出土している。

ほかに15世紀前半の備前焼播鉢、瓦質土器の碗、大内系土師器、底部糸切の土師器坏、ロクロ目土師器、京都系土師器1期皿、平瓦の破片が出土している。



第4-170図 2号墓 ST135 (遺構 1/30、遺物 1/2)

4号墓 ST150 (第4 - 171・172 図)

木棺墓

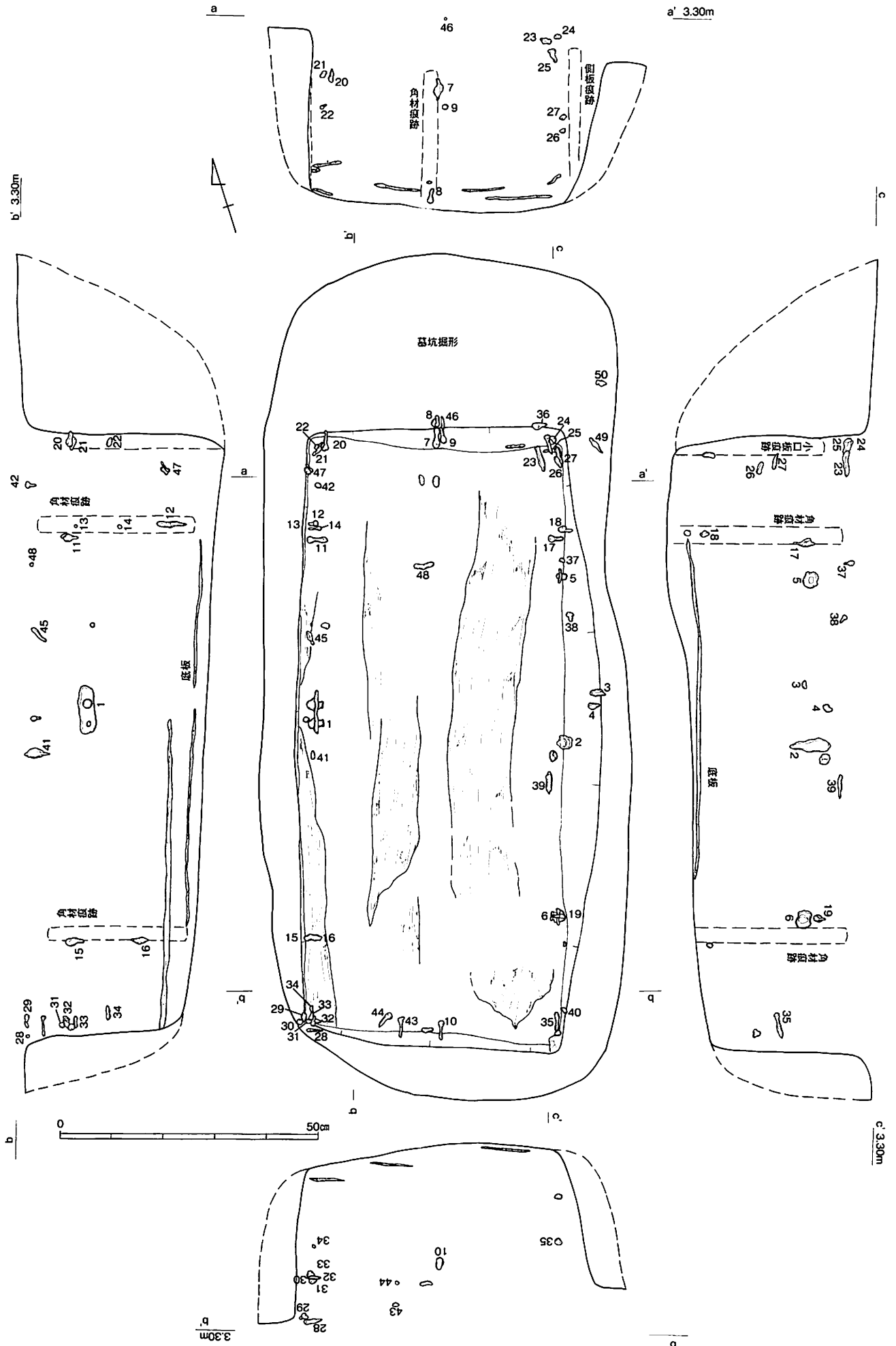
唐櫃転用

C8区(北2区)の第2層1回目除去後に検出した長方形箱形の木棺墓である。しかし木棺は長さ約117cm、幅約46cm、深さ35cm以上の唐櫃の足を切断して転用したものと考えられ、蓋は釘で留めている。墓坑は長さ175cm、幅80cm、深さ45cmの不整楕円形である。15世紀の溝SD277とSD294を切って、掘り込んでいる。木棺の方位は長軸を南北に向け東に17度振る。

T字形鉄

掘形全体を下げていくと、やや南によって長方形の木棺痕跡が土質の違いで明瞭に認められ、同時に木棺痕跡と掘形の境界に釘や金具が次々と出土し、逆に最上部に多かった土器片の出土は少なくなった。木棺痕跡の内部を掘下げていくと、側壁面に各々2ヶ所、小口面に1ヶ所角材の痕跡と考えられる方柱状の空隙が見つかった。さらに四壁に釘とは異なる鉄製品が現れた。特に先端が二股に分かれたT字形の鋸らしき金具や、蝶番らしき金具、蓋を固定する錠前を通すための金具などが出土し、この棺は埋葬用の木棺ではなく、唐櫃あるいは長持のような家具を転用したものであると考えられた。この転用棺の詳細は遺物の項と第7節2で触れる。

掘形埋土以外の覆土は2層に分かれる。上層の1層は検出面から10cmほどまでの層で、マンガが沈着して赤みがかって、絵唐津片が含まれる。木棺内の覆土の大半を含む2層は炭片や2cm



第4-171图 4号墓ST150 (1/10)

仰臥屈葬  
成人男性

大の小礫を多く含む空気を含んだぼさぼさの灰褐色土層である。東よりに硬い地山ブロックが多い。

内部には北頭位の仰臥屈葬の成人熟年男性が、一体埋葬されていた。大坐骨の切痕狭く、大腿骨の柱状性が発達している。頭蓋骨と下顎骨は土圧で変形している。頸骨と胸骨は不連続である。

埋葬年代

出土遺物は棺に転用された唐櫃の金具と接合用の鉄釘、それに蓋を留めたと推定される釘が大半で、棺が腐朽した後に上から落ちこんだ土（2層）や掘形埋土の中から出土した京都系土師器2期の皿片、さらに最上層の1層から絵唐津の皿片などが出土しているが、副葬品と考えられる遺物はない。

陥没後に絵唐津片が存在するところから1590年代に近い年代を想定できる。

木棺金具および釘（第4 - 173・174図）

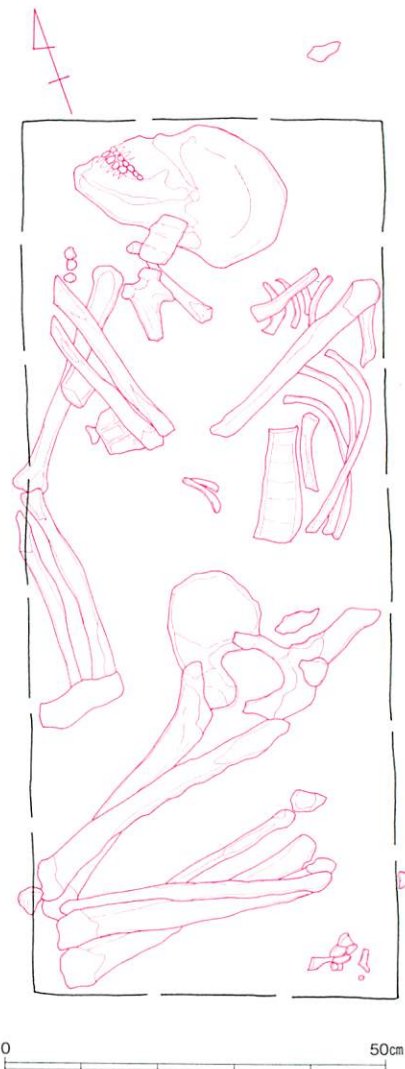
唐櫃に本来付属していたと考えられる金具および釘。1～6は本来の唐櫃の蓋との開閉の金具と考えられるもの。1は西壁正面中央で検出した2つの円環をつけた金具。長さ8.5cm、幅3.0cm、厚さ3mmの鉄板に2箇所穿孔し、そこに幅1.3cmの幅広の断面円形の鉄筒を固定するために先端を二股に広げてT字状になる金具を2個差し込む。その2箇所を板を貫き、背後つまり箱の内側には、ワッシャーに当たる銅製の円盤を取り付けていた。錠前をとおすための金具である。2は東壁正面中央のちょうど1の金具の反対正面で見出した金具である。上下に長く上部は2つにわかれそこに棒を通して。蝶番の役割をする金具と推定される。3と4は2の金具のそばで発見され関係すると推定される金具。なお3と4については棺外の位置に当たるためその関係は可能性にとどまる。5と6は2の金具の両側で発見された円環をつくる二股金具。方形の鉄板の中央に穿孔し円筒を作り出した二股になる金具を差し込むもので本来蝶番の金具である。

錠前金具

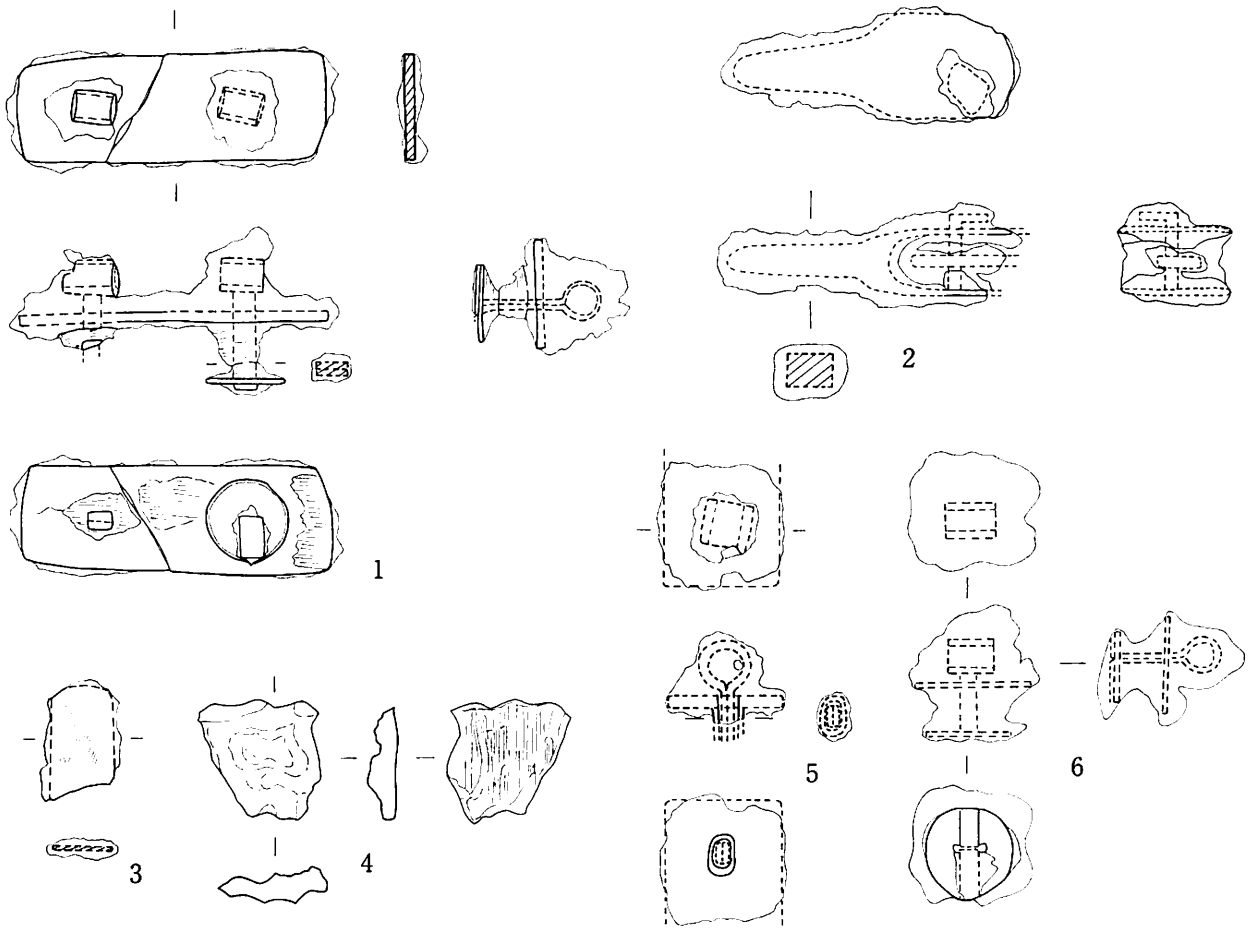
蝶番？

唐櫃の脚部を固定するための金具および釘。7は北小口の上位で発見した、先端をT字状に折り広げた二股金具の先端。8は北小口の下位で発見された釘。9は北小口の金具（7）のすぐ下で、先端を外に向けて検出された鉄釘。内側からとめた釘と推定される。この釘の下位の金具（8）の背後でも先端を外に向けた鉄釘を検出したが、劣化がひどく実測していない。10は南小口の上位で検出した二股金具。下位には対応する金具は発見されなかった。11は西壁北側の上位で検出した先端を折り広げた二股金具の先端。12は西壁北側の下位で検出した先端をT字状に折り広げた二股金具の先端、木質が残る。13は西壁北側の上位で検出した先端を東に向けて横向きに発見された釘。14は西壁北側の下位で発見された先端を東に向けて横向きに発見された鉄釘の頭部片。さらにもう1本最下位に先端を外に向けた釘が出土している。15は西壁南側の上位で検出した、先端をT字状に折り広げた二股金具の先端と頭部。16は西壁南側の下位で検出したT字状に折り広げた二股金具の先端。17は東壁北側の上位で検出したほぼ完全な先端をT字状に折り広げた二股金具で、この形から一種の鉸であることがわかる。18は東壁北側の下位で検出した釘の頭部。

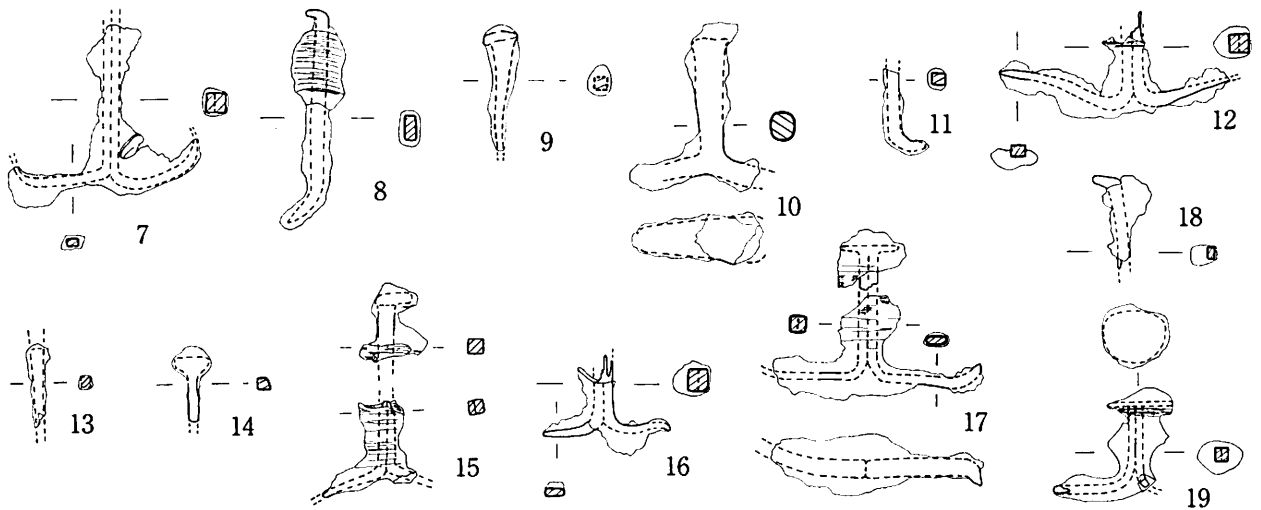
T字形鉸



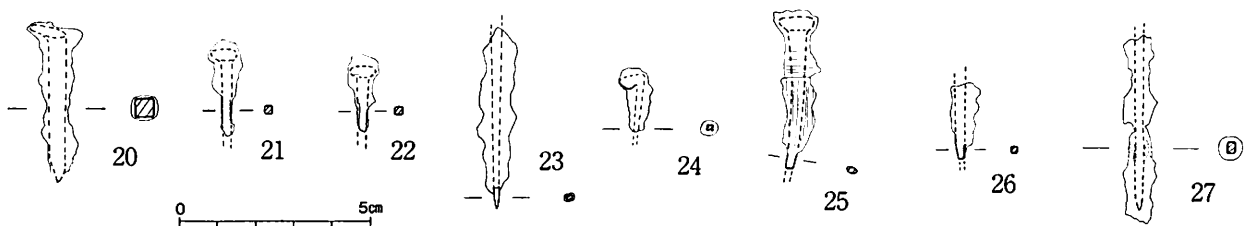
第4 - 172 図  
4号墓 ST150 埋葬人骨出土状態 (1/10)



唐櫃に使われた金具



唐櫃の脚部を固定する金具と釘



第4-173図 木棺金具および釘 (1/2)

北小口板と側板の結合に使われた釘

19は東壁南側の上位で検出した二股金具、東壁南側の下位でも鉄片を検出したが、16と同様の二股金具ではなさそうである。

鉄釘

北小口西北隅の側板と小口板の結合部に使用された鉄釘。20は最上位に南北方向の横向きで検出した長さ4.1cmの釘で、二寸釘か。21は上位に先端を東に向けて横向きで検出した長さ2.3cm以上の釘で、一寸釘か。22は中位で先端を東に向けて横向きで検出した長さ1.3cm以上の釘で、一寸釘か。

北小口東北隅の側板と小口板の結合部に使用された鉄釘。23は木棺の上位において、先端を南に向けて横向きに検出した長さ4.8cm以上の釘で、二寸釘か。24は上位において、先端を南に向けて横向きに検出された鉄釘。25は上位に先端を南に向けて横向きに検出された長さ4.0cm以上の釘で、二寸釘か。26は中位において、先端を南に向けて横向きに検出された鉄釘の先端。27は中位において、先端を南に向けて横向きに検出された長さ4.3cm以上の釘で、二寸釘か。もう一点最下位に先端を西に向けて横向きに検出した釘を取り上げたが、保存状態が悪く実測していない。

頭部環頭

南小口南西隅の側板と小口板の結合部に使用された鉄釘。28は木棺最上位に、先端を東に向けて横向きで検出した長さ3.1cm以上の鉄釘。29は上位において、先端を北に向けて横向きに検出した鉄釘の先端。27のすぐ下で同じ向きの釘が検出されている。30は中位において、先端を東に向けて横向きで検出した長さ2.5cm超の鉄釘で、一寸釘か。31は中位において、先端を北に向けて横向きで検出した鉄釘。32は中位において、先端を東に向けて横向きで検出した長さ2.9cm以上の金具で、頭部を円環に作っている。33は下位において、先端を北に向けて横向きに検出された釘。34は下位に先端を北に向けて横向きに検出した釘。35は南小口南東隅の側板と小口板の結合部に使用した鉄釘で、中位において、先端を北に向けて横向きで検出した長さ4.1cm以上の釘で、二寸釘か。

木製の蓋を閉じるための釘。木棺痕跡の最上位に、先端を下にして垂直に検出した鉄釘を、以下に北小口から時計回りに述べる。36は東北隅の結合部において先端を下にして検出した長さ5.4cm以上の釘で、二寸釘か。37は東側板上に先端を下にして検出した釘。38は東側板上に先端を下にして検出した鉄釘頭部。39は東側板上に先端を南に横向きにして検出した長さ4.1cm以上の釘で、二寸釘か。40は東側板上の南端近くで、先端を下にして検出した鉄釘頭部。41は西側板上に先端を下にして検出した長さ1.4cmの鉾あるいは釘で、木質が大きく付着する。釘ならば一寸釘か。42は西側板上に先端を下にして検出した鉄釘の先端。

内部に落下あるいは棺外で検出した釘。43は南小口の上位で、先端を南に向けて横向きに検出した長さ4.3cm以上の釘で、二寸釘か。44は同じく南小口の上位において、先端を南に向けて横向きに検出した長さ4cm以上の釘で、二寸釘か。45は蓋の腐朽に伴って内部に落下したと推定される棺内中央の中位で検出した釘片。46は棺の蓋よりかなり上位で検出した鉄釘の先端。47は内部底面で検出した長さ2.9cmの釘で、一寸釘か。48は棺の蓋よりかなり上で検出した長さ3.1cm以上の釘で、二寸釘か。49は明らかに棺外だが蓋と同じ高さで先端を西に横向きで検出した長さ4.6cm以上の釘で、二寸釘か。50も、明らかに棺外だが、蓋と同じ高さで先端を東に横向きで検出した鉄釘片。釘のついた板などを埋めたものだろうか。ほかに内部に落下した鉄釘が5点出土している。

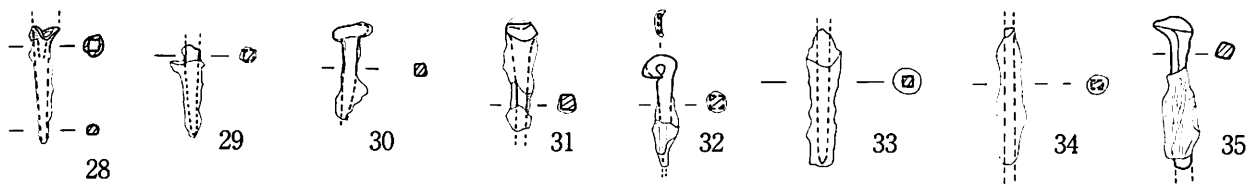
#### 4号墓 ST150 出土遺物 (第4 - 174 図)

埋土混入

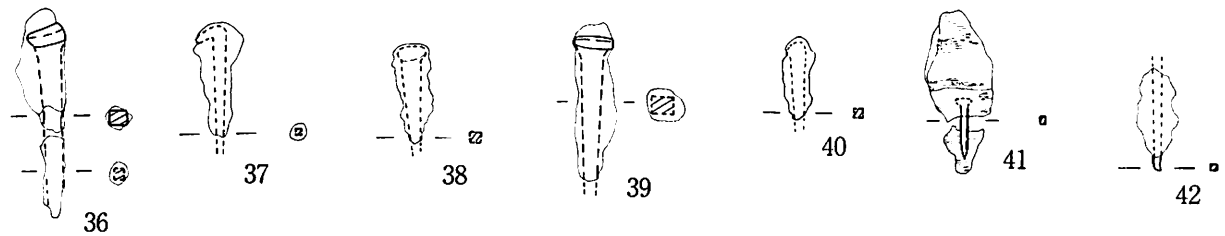
木棺内 いずれも木棺蓋の腐朽陥没後に内部に落ち込んだ土器片で、すべて京都系土師器2期の小皿の破片であるにもかかわらず、同一個体ではない。51と52は京都系土師器2期の小皿口縁片、ともに煤が付着し灯明皿として使われている。53は京都系土師器2期の皿口縁片。54は京都系土師器2期のやや大振りの小皿口縁片。

棺外 棺外の埋土から、55の京都系土師器2期の小皿片が出土している。ほかに瓦質播鉢の碎

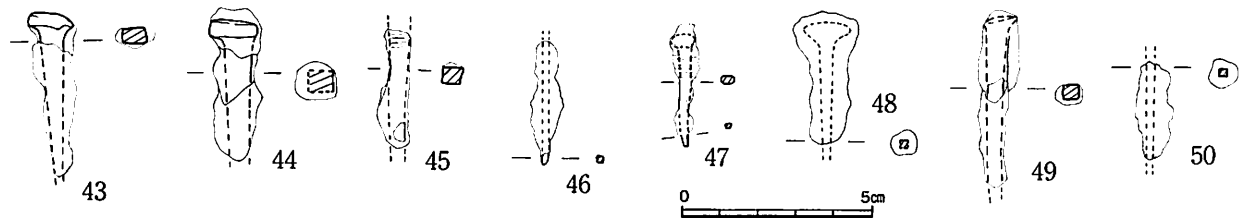




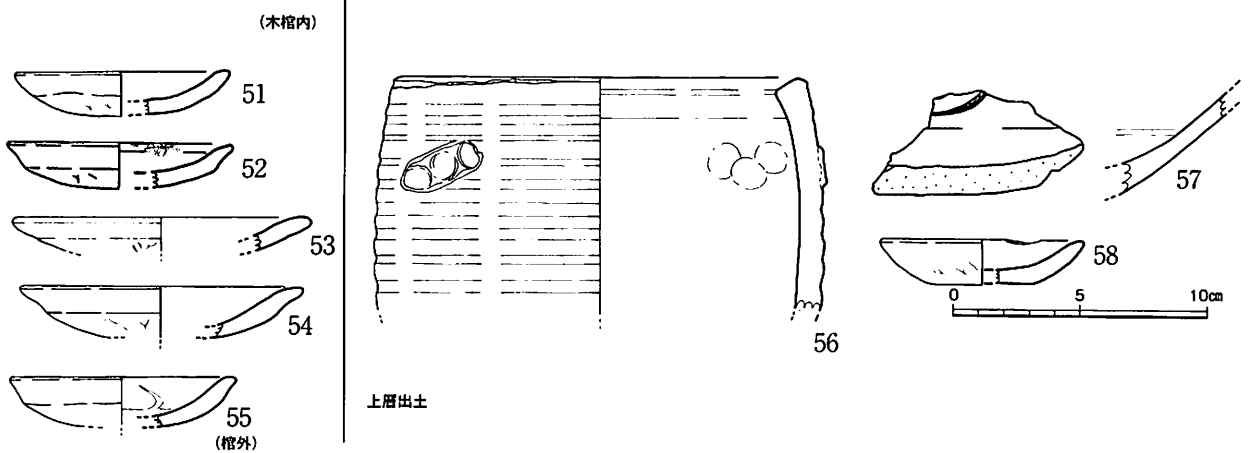
南小口南西隅の假板と小口板の結合に使用された釘



埋葬施設に転用されて木製の蓋を閉じるための釘



内部に落下あるいは外側で発見された釘



第4-174 図② 木棺金具および釘 (1/2) 木棺内上層出土遺物 (1/3)

片と京都系土師器3期皿の破片が出土している。

陥没土中

上層出土 掘形検出後の木棺痕跡を検出するまでの上層で出土した遺物で、本来木棺の陥没したのちの窪みあるいは上層に含まれていたもので、この埋葬とは直接関係ないものと推定される。56は備前焼鉢口縁で、外面に把手を貼り付けている。57は絵唐津大皿の破片。58は京都系土師器2期の小皿口縁片、内面に指ナデ外底面に板状圧痕が付く珍しい京都系土師器で、口縁に1箇所打ち欠きがある。上層からはほかに底部外面に格子タタキを施す土師器鍋、底部糸切の土師器坏、埴の破片が出土している。

木棺の復元（第4 - 175 図）

ここでは、木棺痕跡と金具・釘の出土位置から復元される木棺についてまとめる。

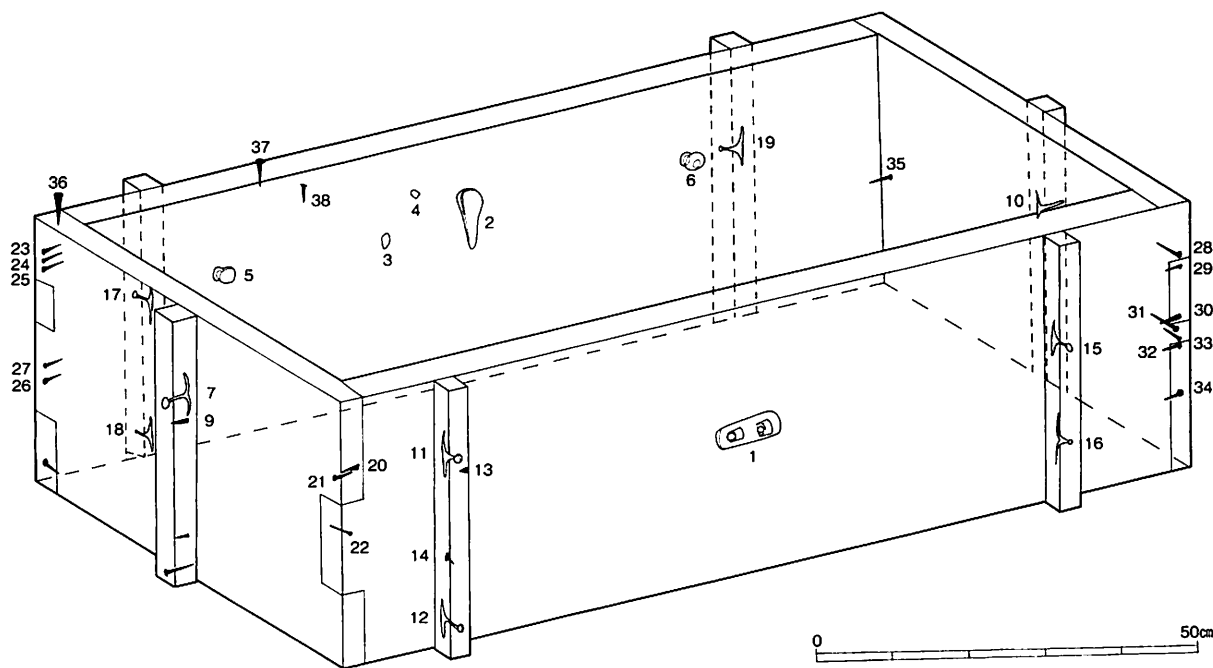
側板と小口に角材

木質痕跡の観察からは、底板と側板・小口板とも一枚板である可能性が高いが、板の厚さは木質がわずかしか残っていなかったので不明である。側壁に残された角材の痕跡からみて、左右の側板の外側に2本ずつ角材をあて、各角材は外側から上下に2箇所、二股になるT字形鋸状の金具を通して先端をT字型に曲げて固定する。北小口外側でも小口中央の縦に一本の角材痕跡と金具が出土し、南小口では角材の痕跡が明瞭ではなかったものの金具10が出土していることから北小口と同様に、角材があてがわれていた可能性が高い。角材の下部は底面より下に痕跡を残していないので、本来あった脚にあたる部分は切り取られたものと推定される。左右の側板から金具が出土し、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。西側には錠前をさすための金具1が横向きにとりつけられ、東側には蝶番になると推定される金具5と6が出土している。全体の長さは約117cm、幅約46cm、高さ35cmをはかり、また側板と小口の接合は相互に切り込みを入れて組み合わせる強固な接合方法を用いている可能性が高く、おそらく当時の家具であった唐櫃であると考えられる。錠前金具や蝶番金具のうち、蓋に取り付ける片割れの金具が出土していないので、蓋は取り外して別の板材を蓋として、釘留めにしたものと推定される。復元の根拠は第7節3で触れる。

脚を切除

唐櫃

蓋は別材



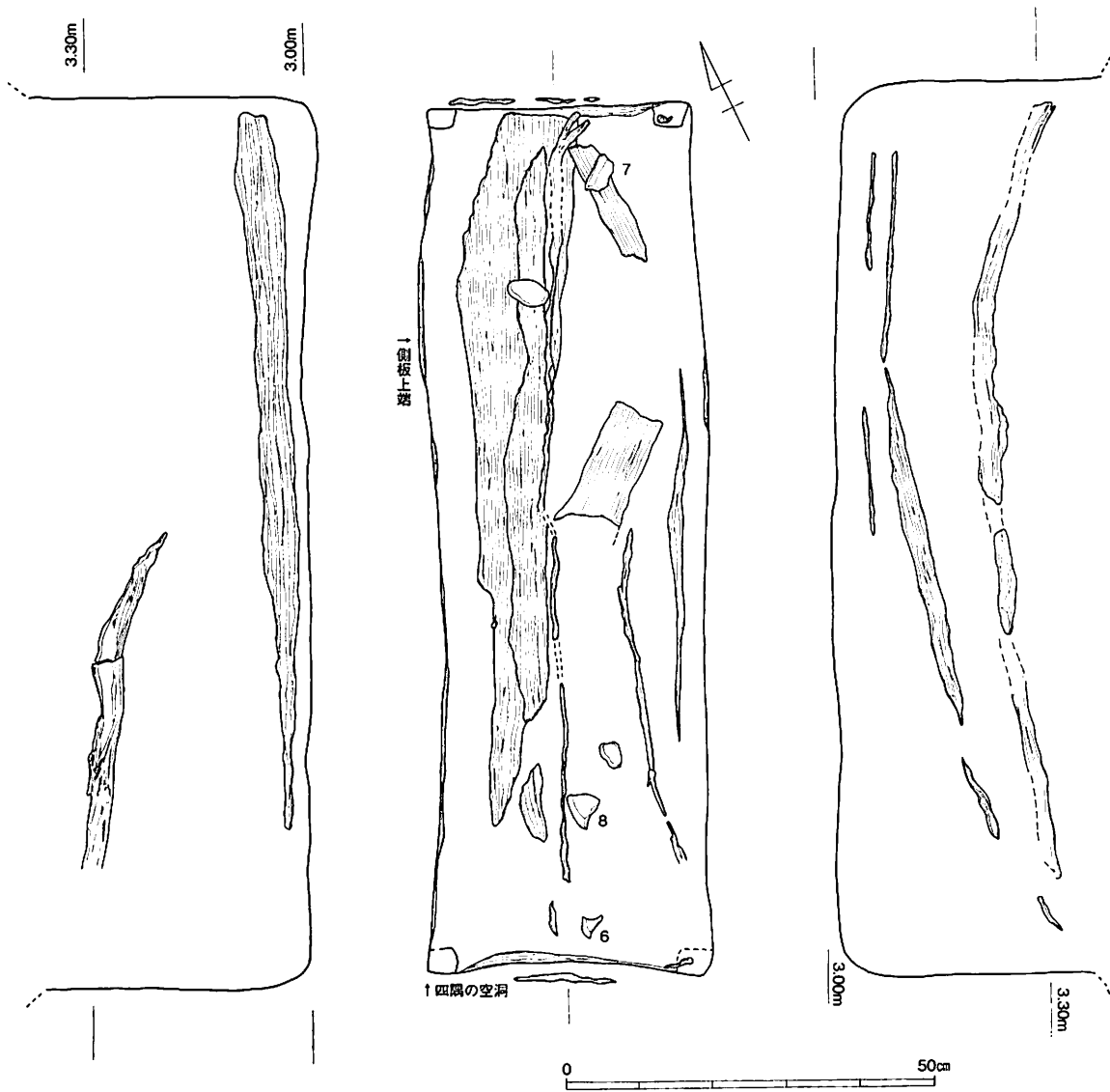
第4 - 175 図 4号墓 ST150 の木棺の復元図 (1/10)

8号墓 ST149（第4 - 176 図①～③）

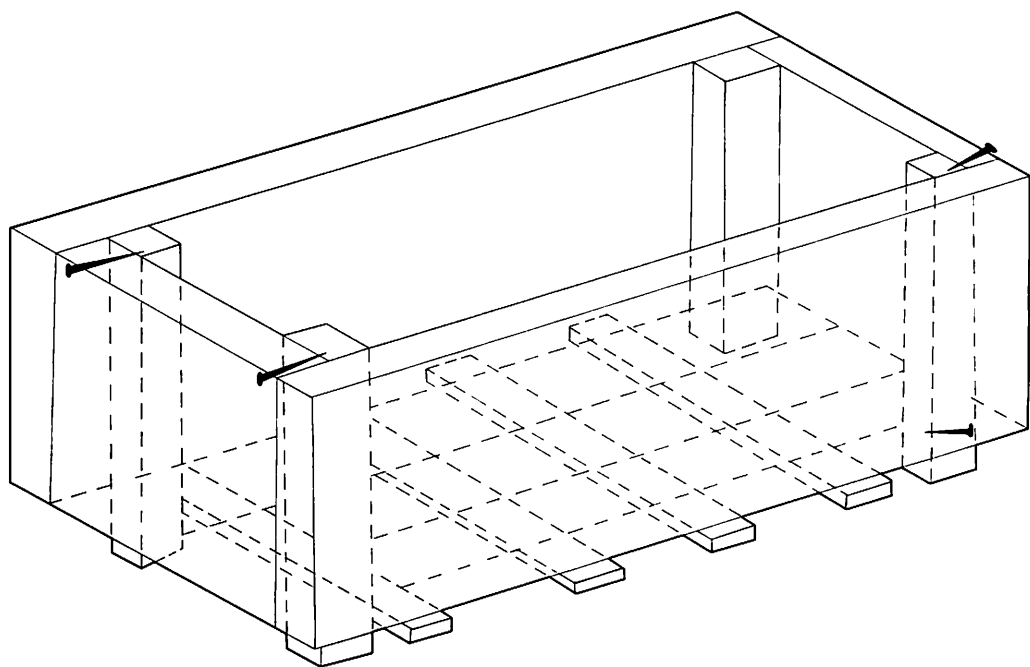
長方形木棺

C8区（北2区）の第2層除去後に検出した木棺墓である。墓坑は長さ170cm、幅90～100cm、深さ42cm以上の不整楕円形であるが、墓坑は完掘していない。木棺は長さ120cm、幅40cm、高さ35cmの長方形箱形である。その方位は長軸を南北に向け、東に26度振る。ピットと16世紀第2四半期の土坑SK163、第3四半期の13号墓ST289と14号墓ST295を切り、第4四半期前半の12号墓ST274に切られている。

墓坑全体を一段掘下げると、長方形の木棺の輪郭があらわれた。掘形埋土との境界付近には、ところによって1～2cmほどの厚みの灰色粘土が帯状に広がり、その内側では木質が残存する部分



第4-176図① 8号墓 ST149 棺蓋出土状態 (1/10)



8号墓 ST149 木棺想定復元図

木棺痕跡

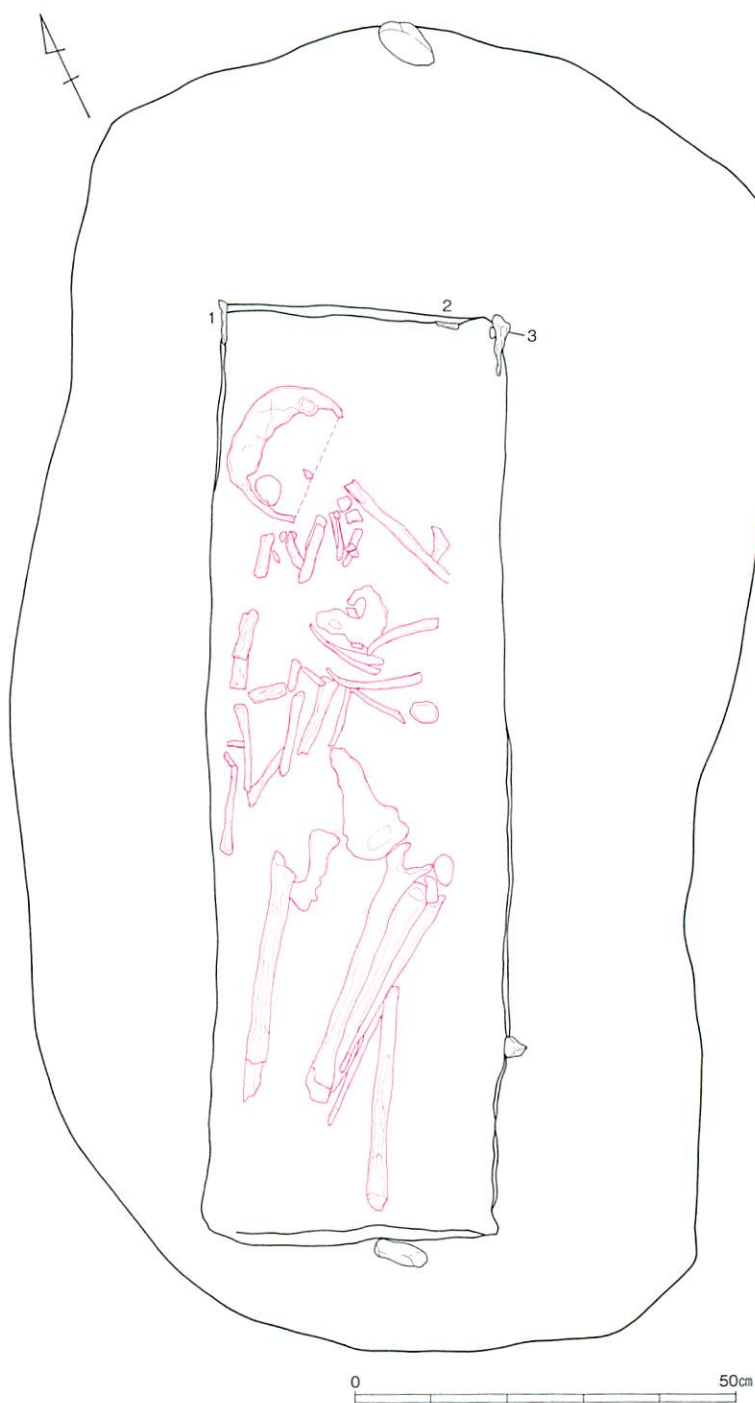
鉄釘

角材痕跡

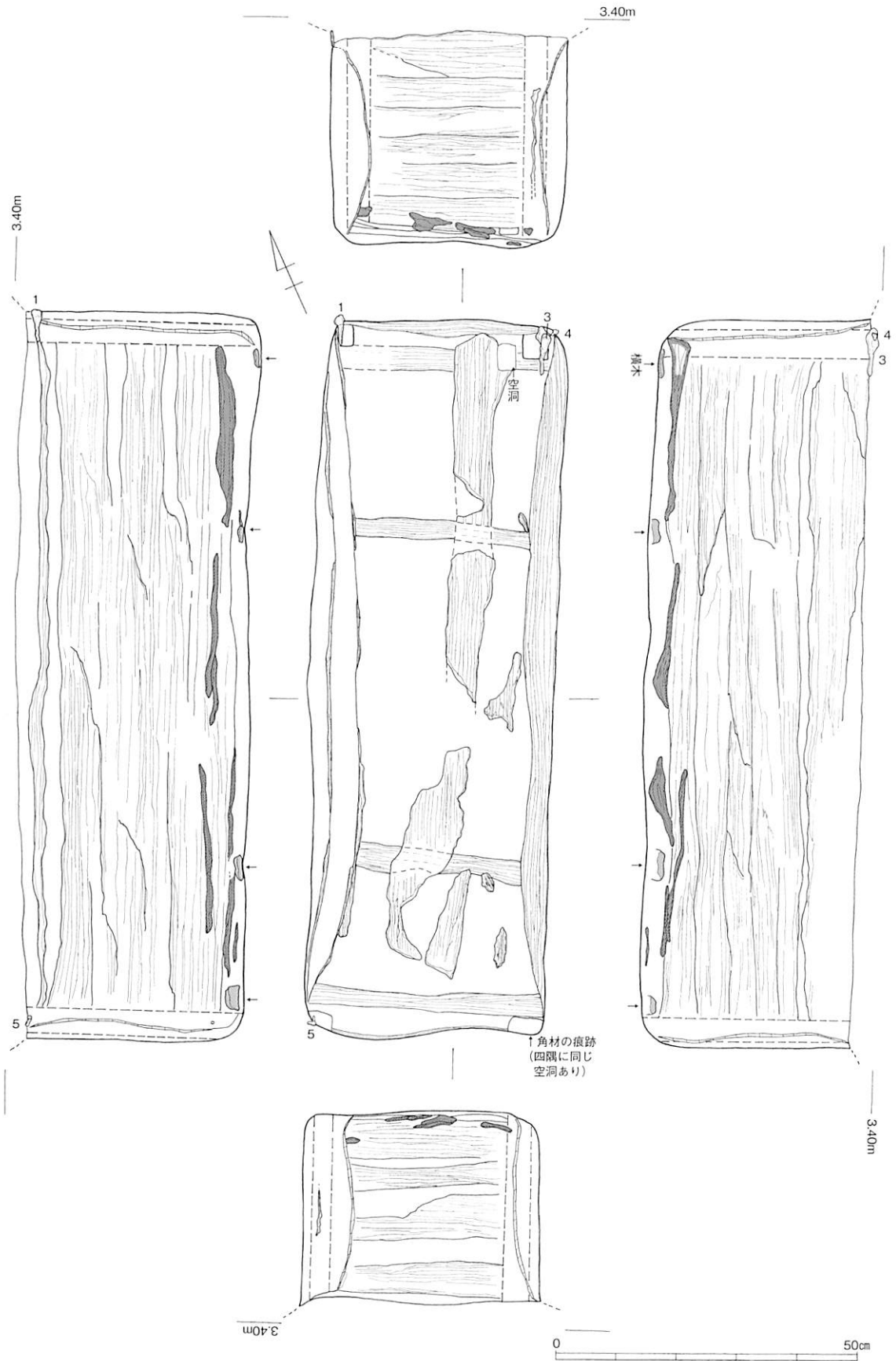
木棺底面

があった。灰色粘土は木質が朽ちた後粘土に置き換わったもので、混じりがなく灰色粘土のみが均一に広がる部分と、空気を含みほさほさの土に置き換わった部分がある。また北小口の両隅に当たる位置から、頭部を北に向けた鉄釘が発見され、長方形の木棺であることがわかった。しかし南小口の内側両隅では径3ないし6cmの方形の空洞が見つかり、その部分に角材か何か当てられていたと考えられ、当初は4号墓同様転用棺かと考えられた。しかしその後底部の構造が判明して、専用の木棺であると判明した。木棺内部には空気を含んでほさほさした灰褐色土が充満していた。掘形埋土は灰褐色粘質土で、ところどころに基盤層に由来する黄色土のブロックが含まれている。

木棺は4号墓と同様に墓坑の南側につめて置かれている。木棺の構造は、小口板、側板ともに一枚板と考えられるが、側板は土圧により内側に大きく歪んでいる。底板は1枚板あるいは複数の板材を差し渡し、その下に4枚の幅3～4cmの横木をあてて固定しているが、間隔は等間隔ではなく中央を大きく開けている。横木と底板の接合に鉄釘をもちいた痕跡はない。棺内4隅には4×3cmほどの角材をあて、小口と側面の両方向から釘により固定している。その角材は底板よりも下に飛び出している。木棺上面検出以降3回にわたって蓋板の崩落状況が認められたので、蓋



第4-176図② 8号墓 ST149 埋葬人骨出土状態 (1/10)



第4-176図③ 8号墓 ST149 木棺 (1/10)

板は一枚板とは考えにくく、複数の板を並べたものと推定される。北小口近く東側にも底板を貫き横木には及ばない方形の空洞があったが、何であるかは不明であった。

仰臥屈葬  
成人女性？

内部には北頭位の仰臥屈葬の成人女性の可能性の高い人骨が一体埋葬されていた。棺内の底面近くまで落下した蓋板の下から人骨の右半身が出土した、ちょうど蓋板に押しつぶされた形である。人骨は調査結果によると仰臥屈葬の成人骨で、頭蓋骨は正面を西にし、頭蓋底を上にした状態で出土した。右上肢を伸ばし、棺の北西側の側壁に沿って出土。下肢は両足とも強く曲げていて、股関節を伸ばして膝関節を強屈した仰臥屈葬と考えられる。蓋板の崩落にともない棺内北西側の人骨は頭部が破損しているものの原位置を保ち、南東側の人骨は南東壁際に移動したものと推定される。女性の可能性のある成年～熟年成人骨である。

副葬品なし

副葬品は皆無であったが、蓋板よりも上の覆土内に京都系土師器片や白磁片が落ち込んでいた。いずれも破片であり、土師器も別個体の破片であるので、葬儀・供養等に使われたものではない。そこに含まれる土師器の大半は、京都系土師器2期の皿の破片である。切合関係とも考え合わせると16世紀第4四半期前半の古い時期にあたと考えられる。

#### 8号墓 ST149 出土遺物 (第4 - 177 図)

鉄釘

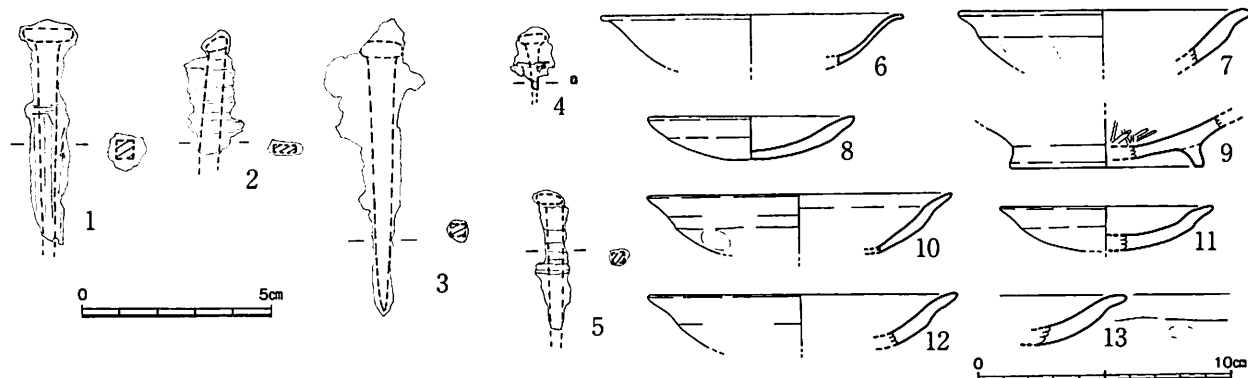
木棺 鉄釘のうち1～3は北側小口に打ち込まれていたもの。残存する木質の方向から、いずれの釘も木棺隅の接合に用いられたものである。木質の痕跡からみて、板の厚さは2cm前後である。1は2寸釘に当たる鉄釘。2は長さ2寸の鉄釘。3は長さ3寸にあたる北小口の鉄釘。4と5は鉄釘。ほかに数点の鉄釘片が出土している。

墓坑埋土からは備前焼甕、土師器の小破片が出土している。埋土に混入していたものである。

陥没後におちこむ

木棺上の覆土内から木棺の腐朽陥没後に内部に落ち込んだと推定される土器が出土している。6は端反りの白磁皿口縁片。7は京都系土師器2期の皿口縁片。8は京都系土師器2期の小皿片。ほかに底部糸切の土師器坏の破片も含まれている。

この8号墓の上層に当たる第2層中からは以下の土器の破片が出土している。本来第2層中に含まれるもので、この墓に伴うものではないが、覆土中に土器が含まれる理由のひとつである。9は古代の黒色土器A類碗底部片。10は京都系土師器1期の皿口縁片。11は京都系土師器1期の小皿片。12と13は京都系土師器2期の皿口縁片。

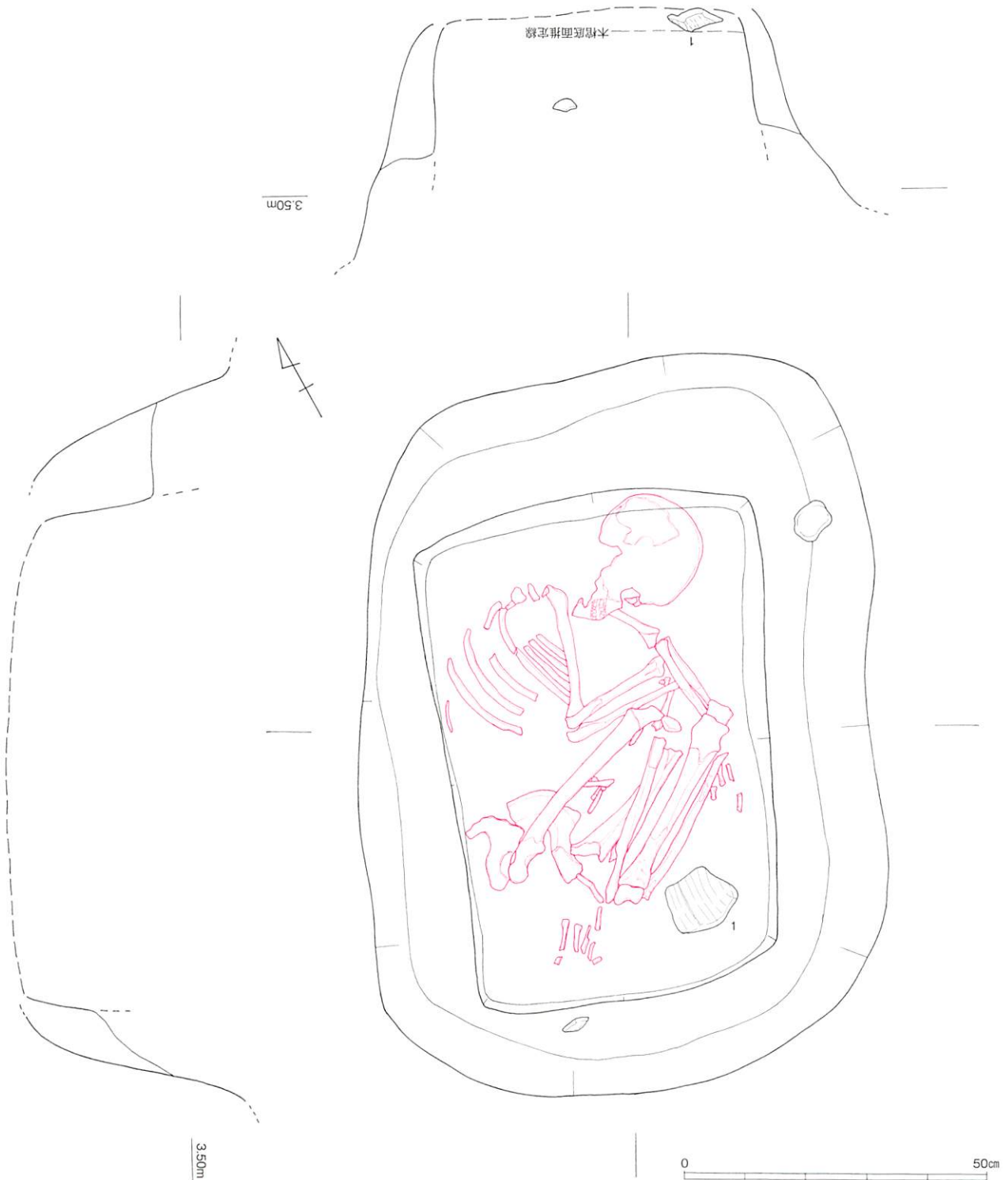


第4 - 177 図 8号墓 ST149 出土遺物 (1～5=1/2、6～13=1/3)

## 9号墓 ST152 (第4 - 178 図)

方形木棺

C8区(北2区)の第2層除去後の基盤IV層上面で検出した木棺墓である。S153と15世紀の溝SD255を切る。墓坑は長さ約120cm、幅85cmの不整楕円形で、深さは35cm以上である。東に23度ふった南北方向に置かれた木棺は、長さ85cm、幅55cm、高さ20cm以上の方形に近い長方形木棺である。板材や鉄釘等はまったく遺存していないため木棺の構造は不明である。木棺の東南隅で備前焼播鉢の破片(1)が底面に張り付くように出土したが、棺内に副葬されたとは考えがたく、木棺を安定させるため下に挟んだものと推定される。墓坑埋土は灰褐色粘質土で、ところどころに



第4-178図 9号墓 ST152 (1/10)

屈葬  
成人埋葬

基盤層に由来する黄色土のブロックと小礫が含まれている。4号墓の埋土と変わらない。

内部からは北頭位の左側臥屈葬の成人熟年人骨が東向きの姿勢で一体埋葬されていた。性別は不明である。顔面は南向きで、右上肢はひじを曲げ、下肢は股関節・膝関節を強屈している。覆土内に混じりこんでいた京都系土師器の破片が出土しているが、積極的に副葬品と言える遺物はなかった。

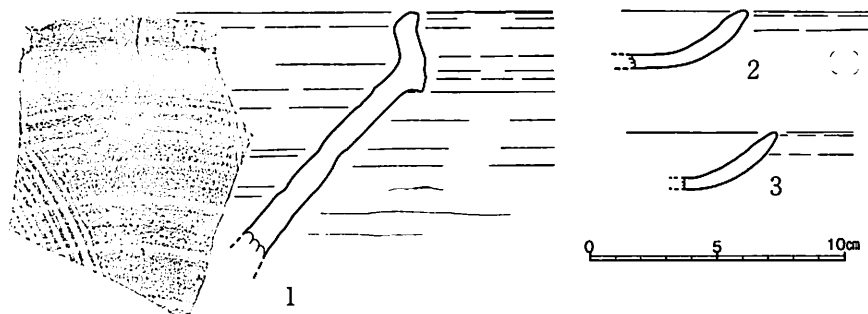
副葬品なし

並列する成人墓のひとつという位置関係から16世紀第4四半期前半の遺構と考えられ、出土した備前焼・京都系土師器の年代も矛盾しない。

9号墓 ST152 出土遺物 (第4 - 179 図)

1は墓坑底部出土の備前焼播鉢の口縁部破片。中世6a期16世紀前葉の製品で、スリ目は放射状である。ほかに墓坑埋土からは、備前焼甕の底部片が1点出土している。

木棺腐朽後に流れ込んだ覆土中に、次の京都系土師器の破片が含まれていた。2は京都系土師器2期の皿口縁片。3は京都系土師器2期の小皿口縁片。



第4-179図 9号墓 ST152 出土遺物 (1/3)

10号墓 ST260 (第4 - 180 図)

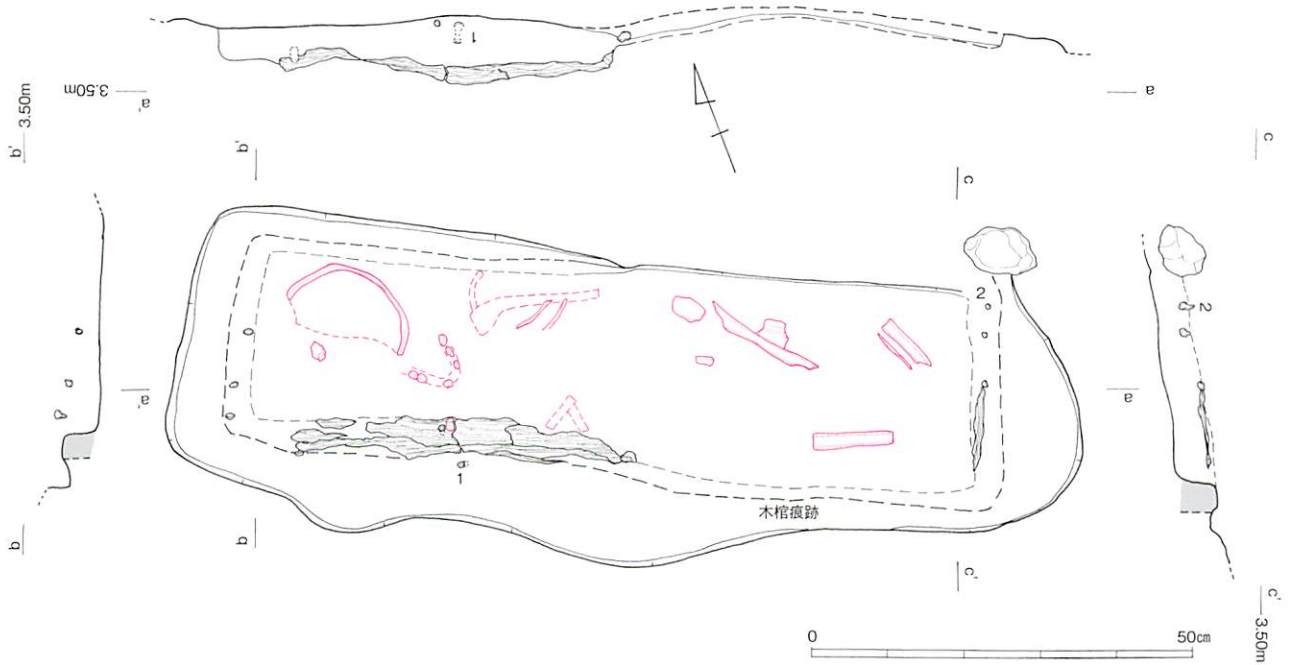
C8区(北2区)の基盤層上面で検出した小型の木棺墓である。墓坑は最底面に近く、明瞭な形は判明しなかった。15世紀の溝SD259を切る。調査は最初に人骨頭蓋骨が見つかり、周囲を掘下げると木棺痕跡が発見された。深さ10cmほどしか残っていなかった。9号墓の北側に直交して配小型長方形木棺置され、長軸を21度振り東西方向に置かれた木棺は長さ90cm、幅28cm、高さ10cm以上の長方形木棺である。

南側側板と東側小口に木質が残る。南北両小口にそれぞれ4箇所、先端を上に向けた鉄釘が出土し、南側板にも底部から上に向けて釘留めした跡が残るので、小口板と側板両方を上に載せる底板を本来持っていたものと推定される。

伸展葬

伸展葬の人骨1体が出土し、下顎がはずれあるいは頭蓋骨が北側に移動している。木棺の形態と規模から見て幼児の伸展葬と推定される。頭骨の位置から頭位は西である。木棺に使われた鉄釘が3才前後の幼児3才前後の幼児が発見されたが、副葬品等の遺物は出土しなかった。人骨からは、性別不明の3才前後の幼児と推定されている。9号墓の存在を前提にして木棺の埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、9号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。



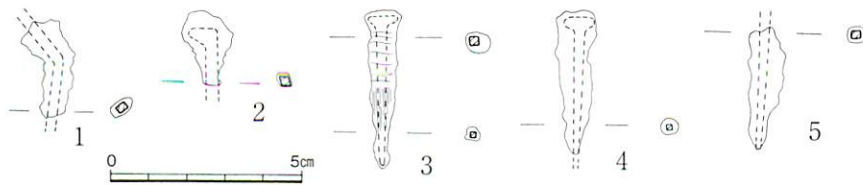


第4-180図 10号墓 ST260 (1/10)

木棺に関わる出土遺物 (第4-181図)

鉄釘

1と2は鉄釘。3～5は長さ4cmほどの鉄釘で、出土位置は不明。ほかに出土遺物なし。



第4-181図 10号墓 ST260 出土遺物 (1/2)

11号墓 ST257 (第4-182図)

土坑墓?

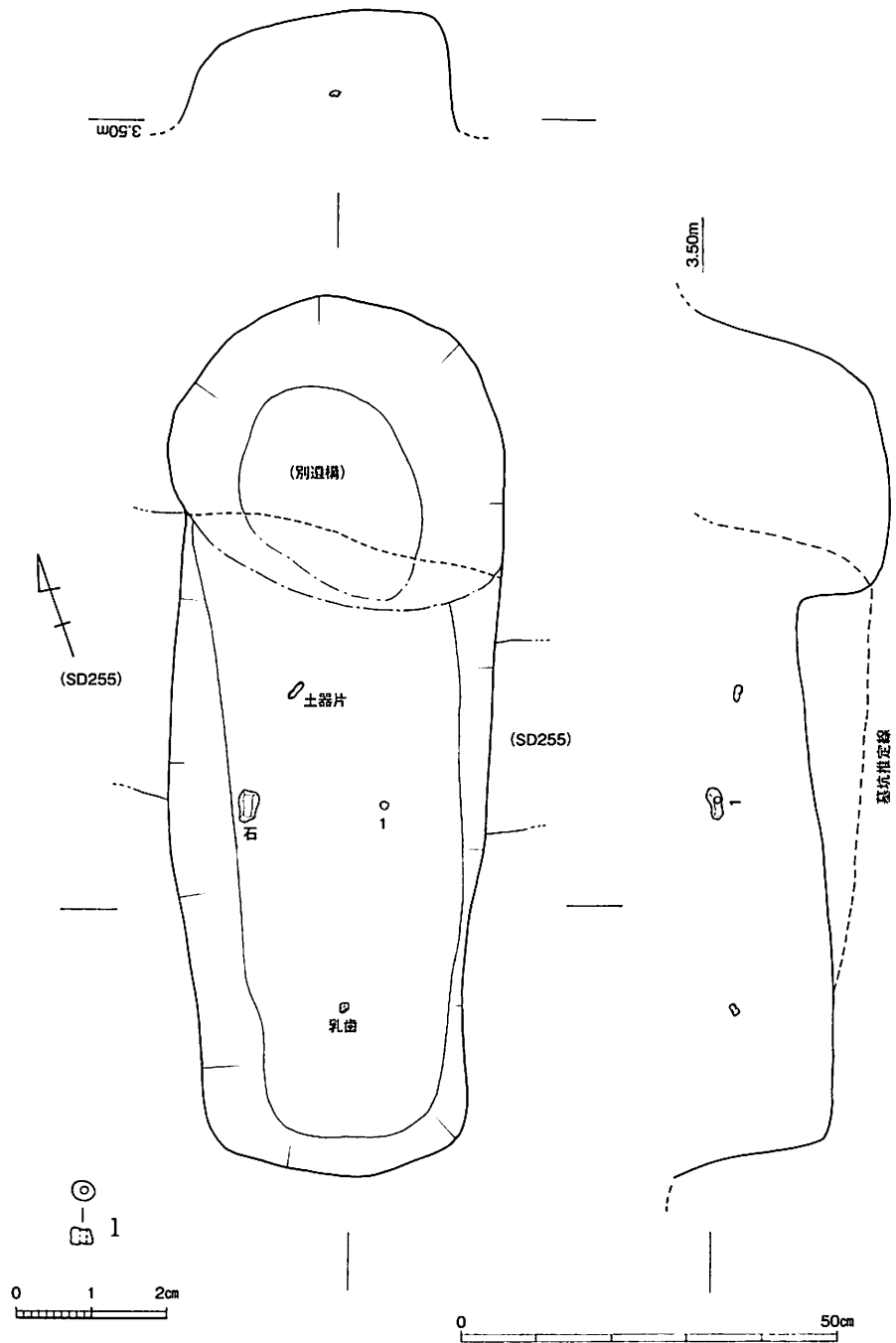
ガラス玉

幼児埋葬

C7区(北2区)の基盤層上面で検出した小型の墓で、木棺痕跡は検出できなかった。15世紀の溝SD255を切り、S153に切られる。9号墓の西側に並行して南北方向に掘られた墓坑は、長さ85cm、幅35cm、深さ20cm以上で、長軸方向は真南北から東に18度振る。木質・釘等は遺存していない。人骨も残っておらず乳歯が1本出土したのみである。中央からガラス小玉1点が出土した。これは副葬品と考えられる。乳歯が南側から出土したので頭位を南にした幼児埋葬と推定される。10号墓と同じく9号墓の存在を前提にして埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、9号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。

11号墓 ST257 出土遺物

副葬品 1は径3mm、幅2mmの淡いブルーのガラス小玉。ほかに埋土中より底部糸切の土師器の破片が出土している。



第4-182図 11号墓 ST257 (遺構 1/10・遺物 1/1)

12号墓 ST274 (第4-183図)

方形木棺

C8区(北2区)の第2層除去後に検出した幼児埋葬の方形木棺墓である。南半は溝SD294と重複していたため掘りすぎ、そのため墓坑の掘形は不明瞭である。南北方向に置かれた木棺は長さ65cm、幅35cm、深さ20cm以上の長方形木棺である。16世紀第4四半期前半の8号墓ST149と15世紀の溝SD255を切る。埋土は灰褐色粘質土のぼさぼさした土。木質等は遺存していない。足元に京都系土師器の破片(2)が出土しているが、レベルが高いため、この墓に伴うとしても副葬品とは言いがたく、埋土に混入したものである。

屈葬

内部には北頭位の左側臥屈葬の幼児が東向きの姿勢で1体埋葬されていた。性別不明の1~2才

1~2才の幼児

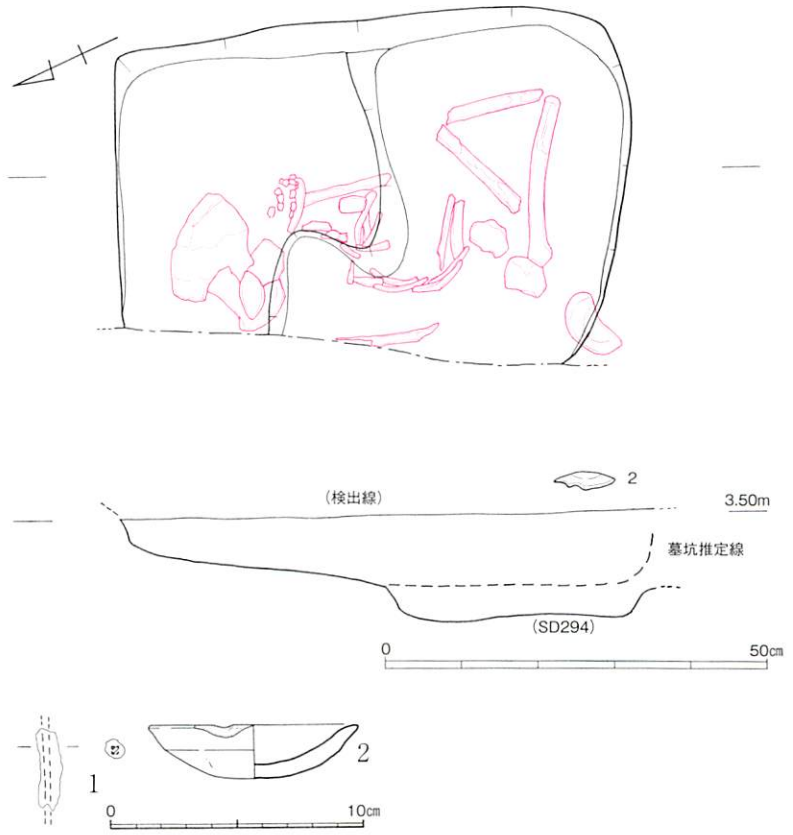
前後の幼児骨である。東に顔面を向けた左側臥屈葬である。下肢は股関節を強屈している。

ほかに埋土中から1点の鉄釘片(1)が出土しているが、木棺に伴うかどうか不明である。8号墓の存在を前提にして埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、8号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。

12号墓 ST274

出土遺物

1は鉄釘片。2は京都系土師器2期小皿の2分の1片。口縁に1箇所打ち欠きがある。ほかに古代土師器坏の破片が出土している。

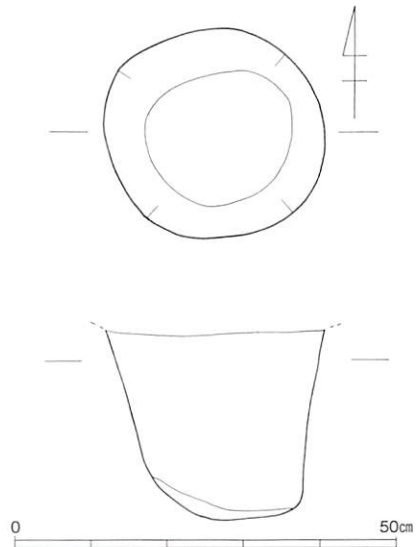


第4-183図 12号墓 ST274 (遺構 1/10・遺物 1/3)

18号墓 ST290 (第4-184図)

土坑墓?

C8区(北2区)で検出した径28cm、深さ25cmの平面円形の小土坑である。調査時は墓としなかったが、内部から人骨の破片が出土している点から墓の可能性が高いと判断した。出土遺物はない。9号墓の側で10号墓・11号墓の幼児墓のなかに掘られているので9号墓以後のその関係者の墓と考えられる。9号墓の存在を前提にして埋葬位置と方向が決定されていると考えられるので、9号墓より新しい16世紀第4四半期前半の墓と考えられる。



第4-184図 18号墓 ST290 (1/10)

#### 4 墓地のまとめ

2001(平成13)年度に木棺墓が1基が発見され、その発見地点は地籍図による復元研究からイエズス会府内教会の敷地内と推定された場所であった。木棺の中からは①伸展葬・②腕を交差させた成人骨が発見され、③木棺の作りが高槻城キリシタン墓の構造(底面が簀状)がよく似るといって以上3点の特徴から、キリシタン墓の可能性があると指摘された。しかしなおその時点では単独の出土であり、宅地区画内の単独墓である可能性も残されていた。2002(平成14)年度の調査では、周囲にさらに17基あわせて18基の墓が発見され、④墓の配列は南北方向・北頭位の埋葬を東西に列状に並べる点でも、高槻城キリシタン墓地と類似することが判明した。成人埋葬<sup>註1</sup>はいずれも木棺墓<sup>註2</sup>である。ただし埋葬姿勢においては半数に屈葬が認められる点、6歳以下の幼児埋葬が多い点で異なっている。特に埋葬姿勢からみて、被葬者がキリシタンであったとは必ずしもいえないことが明らかとなった。

3 時期

以上の知見は調査時点の総括であるが、報告を終えてあらためて以下にまとめると、墓地全体は3期に区分できる。

墓地第1期(第4—156図)の墓は、3号墓ST268の1基のみである。出土した副葬土師器から埋葬の時期は16世紀第2四半期にさかのぼる。桶を利用し熟年男性の可能性高い成人が座葬され、土師器皿3枚が副葬されている。その所在する場所も厳密に言えば、西区の区画Aにあたり、第2期以後の墓地とは区画をこにしている。おそらく16世紀前半に存在した東西道路に面した区画の中に葬られた単独墓と推定される。したがって1553(天文22)年のイエズス会府内教会設立以前の墓であると考えられる。

16 世紀第 2 四  
期半期

教会以前

墓地第2期(第4—158図)の墓は、第3期の8号墓の周辺に集中する8基からなる一群である。横にしたL字状に並ぶようにも見えるが、それ以上の規則性はない。すべてが8歳以下の幼小児埋葬であり、木棺・桶等の埋葬施設を使用した例は、東半に並ぶ5号墓・6号墓・7号墓の3基のみである。西側に群集する13号墓・14号墓・16号墓・17号墓は土坑に直葬されたものと推定され、

幼児・小児墓  
木棺と土坑

註1 高橋公一編「高槻城キリシタン墓地」(高槻市文化財調査報告書22) 2001 高槻市教育委員会

高橋公一氏(高槻市教育委員会文化財課、高槻市立埋蔵文化財センター技師)に2002(平成14)年7月1・2日(月・火)、現地にて7月1日現在の調査状況を説明して、墓地を中心に所見をうかがったところ、次の指摘をえた。

- ① 1号墓ST130の長方形木棺墓は、高槻城キリシタン墓に非常によく似ている。特に棺底が簀状になっている点は、類似の例が高槻城キリシタン墓にも多い。
- ② 1号墓ST130の木棺規模は大型だが、高槻城キリシタン墓群のなかの最も大きいグループと同じぐらいであるので、必ずしも飛び抜けて大きいわけではない。
- ③ 副葬品が少ない点は、高槻城キリシタン墓でも同じである。30数基のうち木製ロザリオが出土したものは1基のみで、それも副葬品というよりは身に着けていたものである。それよりも、六道銭や土師器副葬がほとんどない点を注目すべきだろう。
- ④ 東京都千代田区八重洲北口遺跡で、最近17世紀はじめごろのキリシタン墓群が発見されており、その埋葬施設も長方形木棺の伸展葬であり、身につけていたメダイとロザリオが出土したのみで副葬品はない。江戸と高槻のキリシタン墓が、長方形木棺を採用し伸展葬をとる点からみると、中世大友府内町跡10次の1号墓ST130例もキリシタン墓の特徴といえる可能性がある。(今野春樹編「東京駅八重洲北口遺跡」2003、森トラスト株式会社・千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会)
- ⑤ 成人墓が4基頭位を北にそろえて並んでいる点は、高槻城キリシタン墓と酷似する。
- ⑥ 墓の中に伝統的な短い方形棺や屈葬が多いが、当時のイエズス会は現地順応方式の布教を行っており、埋葬姿勢までキリスト教風でなくてもよいのではないか。

註2 田中良之氏(九州大学大学院教授)等による埋葬人骨の2002(平成14)年6月30日～7月3日(日～水)現地調査時点での所見は①全体的な墓地の印象として家族墓というより集団墓地のように見える。②成人墓と幼児墓(6歳以下)ばかりで、小児墓(7～15歳)がほとんどない。というものであった。

座葬と屈葬 15号墓のみが掘形の輪郭から木棺利用の可能性がある。埋葬姿勢は5号墓・7号墓と16号墓が座葬、6号墓・13号墓が側臥屈葬であり、伸展葬は確認できない。北頭位が多いが西頭位もあり、必ずしも一定しない。副葬品を伴うのは14号墓の土師器小皿1点のみであって、灯明皿がそのまま副葬されている。第3期の墓が長方形の木棺墓を一定の法則性を持って配列するのに対し、第2期の墓は東西数m程度の狭い範囲に次々と8歳以下の幼児と小児を葬ったもので、特に2才以下の乳幼児が多い。ただし墓坑同志の切合関係がないところからみて、埋葬場所にある程度の余裕があり、土饅頭や木製標識等の地上施設が存在したものと推定される。埋葬がおこなわれた期間も、当初の墓の位置が記憶されている程度の短期間であった可能性が高い。後述するように第3期の墓の年代が、一部16世紀第3四半期にさかのぼる時期から第4四半期前半と考えられるので、第2期の墓は第3四半期の1560年代を中心とする時期と推定される。上限はイエズス会府内教会設立の1553(天文22)年以後である。

1560年代

墓地第2期に対応する16世紀第3四半期の周辺の遺構は、北側にはなにもない空地がひろがるようで、なんらの区画施設もない。南側には道路SF151の側溝SD165があり、第1および第2矢板列の水路が機能していた時期にあたる。したがって第2期の幼小児墓地群は道路によってさえぎられた区画の南端に設けられたものと推定される。

成人墓

墓地第3期(第4—167図)は規則的に配列された5基の成人墓と、その成人の周囲に配された4基の幼児墓からなる。18号墓を除くすべての墓が長方形の木棺を埋葬施設としている。1号墓・4号墓・8号墓・9号墓の4基は、やや東に振る南北方向に木棺を配置し、北頭位で被葬者を安置する成人埋葬である。東西に西から1号墓・9号墓・8号墓・4号墓の順に、2ないし3mの間隔をあけて葬られ、2号墓は1号墓の北に直列して配置されている。この五基はいずれも長方形の木棺を使った成人埋葬と考えられるが、4号墓は唐櫃を棺に転用している。1号墓が伸展葬で2号墓もその可能性があるが、4号墓・8号墓は仰臥屈葬・9号墓は左側臥屈葬である。木棺も屈葬を意識した長さの短いものを利用している。さらに9号墓の周囲には幼児を伸展葬で葬った10号墓と11号墓、さらにそのあいだに18号墓が配されている。10号墓は3才前後の幼児を長方形木棺を用いた伸展葬で、頭位は西向きである。11号墓は土坑墓ながら伸展葬で葬った可能性が高く、頭位は南向きと考えられる。18号墓は小さな円形のピットに埋葬されており、おそらく幼児でもさらに小さな乳児を埋葬したものと推定される。8号墓の横にも1～2才前後の幼児が屈葬された12号墓が葬られていた。熟年成人埋葬の9号墓を中心とした周辺3基の幼児埋葬の一群と、成人女性埋葬の8号墓と幼児埋葬の12号墓からなる一群は、いずれも、なんらかの血縁関係者を葬ったものと推定される。副葬品は11号墓の幼児埋葬に伴ったガラス小玉1点のみであった。

等間隔列状配置

9号墓周辺

8号墓周辺

1570～  
1580年代

木棺腐朽後の陥没土やその上位から出土する遺物は、基本的に京都系土師器2期の皿で、最新の4号墓で京都系土師器3期皿の破片が出土する。さらに墓地終焉後その上を覆った第2層からは絵唐津皿、彫三島碗など1590年代の遺物が出土している。第3期墓地の始まりは京都系土師器3期皿が出現する16世紀第4四半期以前の第3四半期にさかのぼり、墓地終焉後の1590年代には埋葬が行われていないと考えられる。したがって第3期は1560年代まで遡る含みを残した1570年代から80年代の墓地と推定される。

道路と墓地

北を区画

なお第3期の墓地が存続していた時期の南側には道路状遺構SF151があり、その側溝はSD250ないしSD270に対応する。それまでより道路側溝の位置が南に移動したため、1号墓がかつての側溝であるSD165の掘形に切り込むように埋葬されている。SD250は水路機能を喪失して単なる区画の溝になり、いっぽう墓地の北を画すように溝SD131が掘られている。その溝と道路SF151に挟まれた空間に第3期の墓が並んでいたものと推定される。ほかに墓地に関係のある可能性のある遺構として土坑SK156がある。この土坑は8号墓そばの敷地南端ギリギリに掘られたもので、その形態と遺物出土状態から廃棄物処理土坑すなわち、墓地に関わるごみ捨て穴と推定される。

- 地上標識 ところで中心となる成人墓同志の切合関係がないところからみて、埋葬位置があらかじめ決定され、土饅頭や木製標識等の地上施設が存在していたものと推定される。墓標として石製品の存在も考慮されるので、周辺の遺構や整地層内から出土する石材を点検したが、キリシタン墓碑になるものは見出せなかった。かわりに五輪塔の石材が廃棄されたり再利用されている例が多数存在したが、これはこの調査区特有の現象ではなく、16世紀全般の中世大友府内町跡全体で普通に見られる現象なので、この墓地の墓標に使われたものとはいえない。
- 第3期の画期 墓地の構成。さて第2期と第3期の間には墓地の構成において大きな違いがある。幼児群集墓から成人配列墓群への変化である。それを機会に墓地の北には区画の溝としてSD131が掘られ、一方南側の道路との境界も、それまでの水路が付け変わっているので、墓地を内にふくむ施設全体の整備の一環として墓地の構成が変わったものとみとめられる。大きな画期である。
- 伝統的墓制 墓地の性格。埋葬姿勢に屈葬が多く、木棺もそれに合わせた丈の短い長方形木棺を用いる例が多いという日本の伝統的な中世墓の特徴を備えているが、副葬品に六道銭が一例もなく、土師器の副葬も例外的である。一方16世紀当時、中国人墓をのぞけば列島において実例がきわめて少ない伸展葬が成人と幼児ともに存在している。このように発掘資料そのものから墓地の性格を判定することは限界がある。しかし重要なことは、①第2期と第3期の墓地は16世紀後半の年代に収まることである。遺構の構築順序からみて、墓地の上限は16世紀第3四半期、下限は1590年代以前であり、府内教会の存続時期である1553(天文22)年から1587(天正15)年とほぼ一致する。②大半が木棺墓<sup>註3</sup>であって、道路北側に同一種類の埋葬をくりかえす墓地が広がることが判明した点にある。中世大友府内町跡のこれまでの調査では、墓はすべて単独墓であり、墓地は未発見であった。それは都市という性格上、墓地は本来仏教寺院などの宗教施設の境内あるいは都市域外の郊外に設けられたためと考えられる。この第10次調査区の墓地は「中町」の背後にあり、中世府内の都市域内に存在することから、なんらかの宗教施設の境内に設けられたもの、あるいは宗教施設が管理する集団墓地であると考えざるを得ない。そして府内古図を信用する限り、この場所に墓地を設けうる
- 宗教施設内 宗教施設は、「顕徳寺・ダイウス堂」と記された施設すなわち、イエズス会府内教会である可能性がきわめて高い。最も近い仏教寺院である南側の祐向寺とは道路と大溝に隔てられており、さらに10次南調査区の道路南側には遺構の少ない空地がひろがって、その南には屋敷地が存在する可能性が高く、少なくとも祐向寺が道路に接して存在していた可能性は少ない。
- 「顕徳寺・ダイウス堂」
- 府内教会 以上のような墓地の存続時期と墓地の位置と状況からみて、今回中世大友府内町跡第10次北調査区で発見された第2期と第3期の墓地は、直接的証拠(キリシタン遺物など)には欠けるものの、戦国時代の豊後府内にあったイエズス会府内教会(顕徳寺あるいはダイウス堂と表記)の敷地南端に設けられた墓地である可能性が極めて高い。

註3 中世大友府内町跡第7次調査E地区とF地区の単独墓が報告されている。

田中裕介編『豊後府内3』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告8)2006

## 第7節 小結

## 1 15世紀以後の第10次北調査区の遺構の変遷

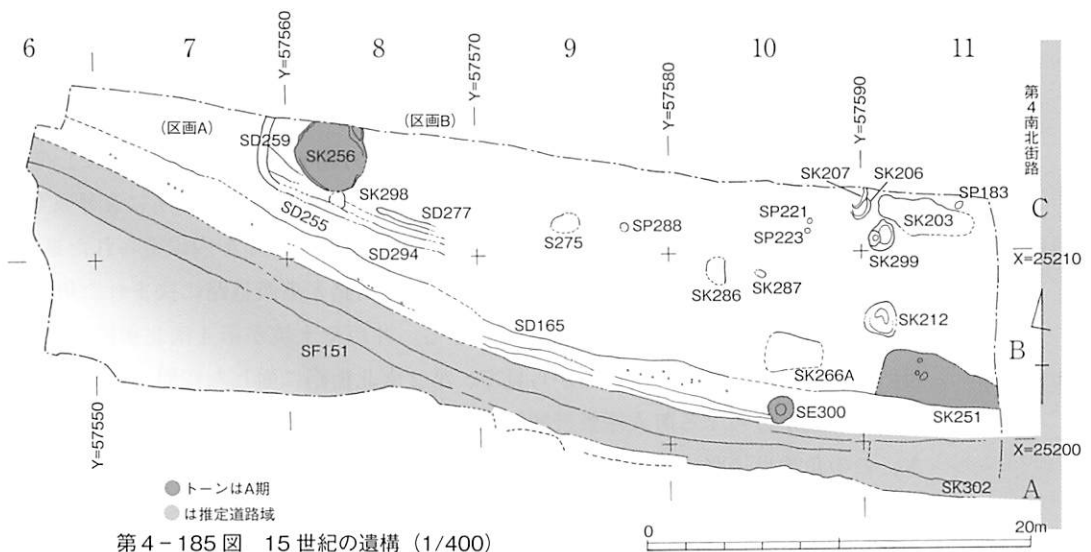
中世から近世の調査区の変遷をまとめ、末尾でその画期を考察する。

A期  
B期  
東西道路

15世紀（第4 - 185図）道路状遺構SF151と水路SD165の建設の以前と以後で2時期に分けることができる。以前をA期、以後をB期とすると、東西道路SF151建設以前にあたる15世紀A期には、井戸SE300や大型廃棄土坑SK251やSK256をともなう居住空間が分布している点が注目される。A期には第4南北街路の南端に近いこの付近に15世紀代の居住空間が広がるようになり、次の15世紀B期には第4南北街路とそれに接続する東西道路（第7硬化面）が建設され、それに伴い道路の北に接して水路である溝SD165が掘削され第4矢板列が設置される。それらB期の遺構が井戸SE300や大型土坑SK251を切っているところからみて、道路SF151の建設は、居住空間の移転・区画の変更を伴っていたと考えられる。それまでとは異なる街路整理すなわち都市計画の施工が、B期になされたと推定される。

区画B

同時に東区ではB期にもそのまま町屋が引き継がれるが、道路の北側の第4南北街路からみれば屋敷地の裏側に当たる位置に、方形区画の溝（区画B）と考えられる小溝群（SD259・SD227・SD294）が掘られている。おそらく東西道路SF151の建設に伴って、道路に面した区画Bが設定されたものと推定される。A期は土師器の型式から15世紀前半から後葉、B期はロクロ目土師器以前の15世紀後葉から末と推定される。この時期の画期はB期の東西道路の建設とそれに規制された屋敷地が造られたことである。

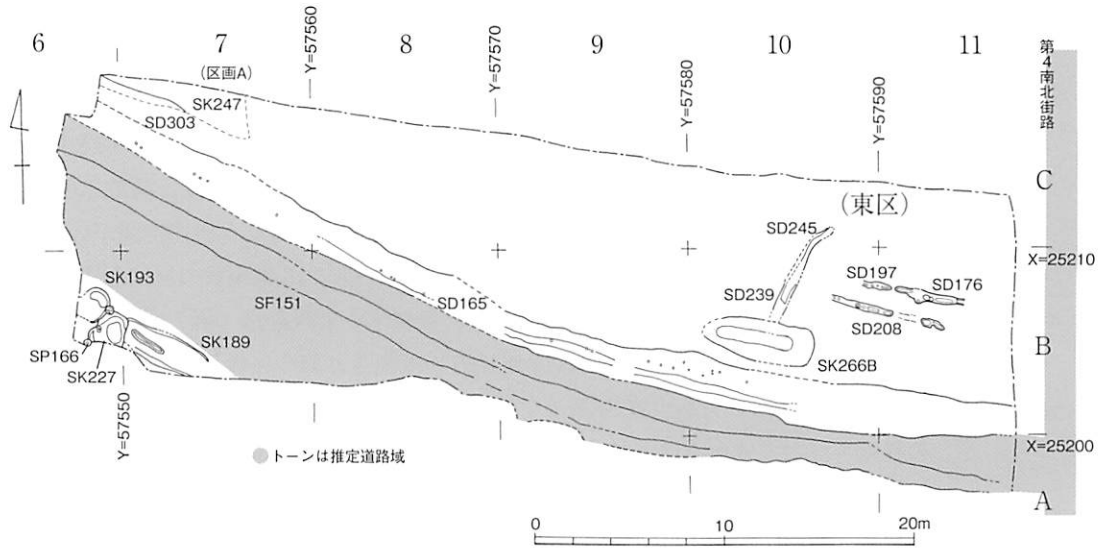


道路と側溝  
南側の区画  
北側の区画  
区画A

16世紀第1四半期（第4 - 186図）道路SF151とその側溝SD165は、第7硬化面と第4矢板列をともなう水路がこの時期まで同一の位置に維持される。東西道路の最大幅は約8mである。道路状遺構SF151の南側では、並行するように廃棄土坑が3基以上つぎつぎと掘られている。道路南側では廃棄土坑を連続して掘るような比較的広大な宅地が成立したものと考えられる。区画Aは踏襲され、そこに方形の巨大な土坑SK247が掘られ、その後も同じ位置に溝SD303が掘られている。道路側溝SD165と並行し、略方形の区画が道路にそって新たに設定されたことを示している。この区画Aは15世紀後半～末の東西道路建設時に同時に建設された溝群SD259・SD277・SD294・SD255で区画された方形の敷地(区画B)のさらに奥に当たる位置が開発されたことを物語っている。

東区の「宅地」

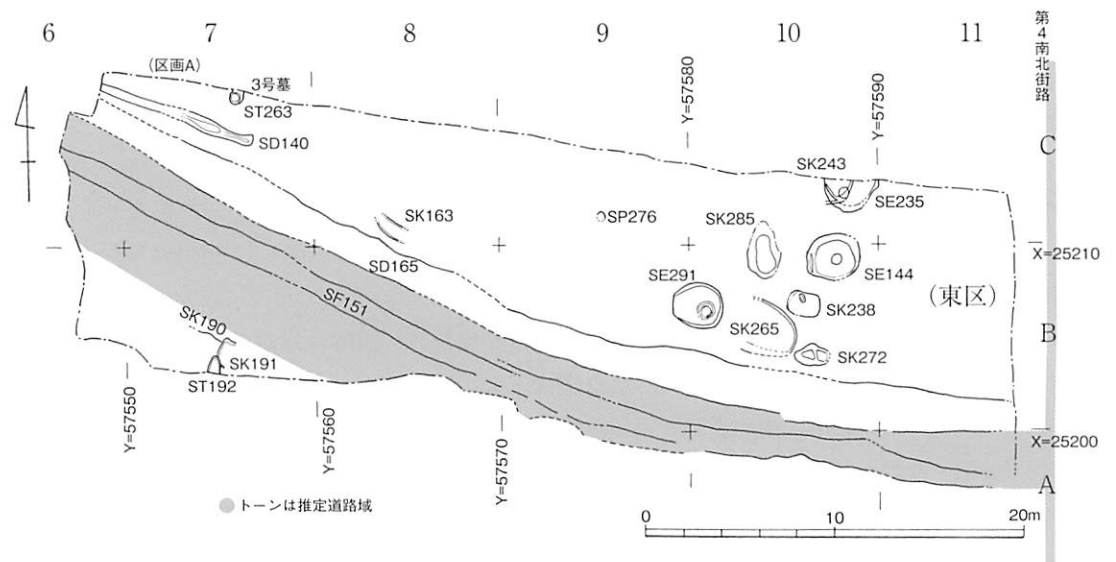
東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、南北方向の溝SD239=SD245で区画されたゆがんだ方形の地片が成立し、その西南隅には祭祀行為が行われた可能性の高い土坑SK266Bが掘られ、内部にはSD176、SD197、SD208を基礎の一部とする建物が作られていたと推定される。壁の方向から見て第4南北街路に面する屋敷地であったと推定される。



第4-186図 16世紀第1四半期の遺構 (1/400)

16世紀第2四半期(第4-187図) 道路状遺構SF151とその側溝SD165は、道路の硬化面に第6硬化面に更新し、水路は第3矢板列に打ち替えを行いつつ、ほぼ同一の位置に維持される。そのSD165の南端と道路南側の同時期の廃棄土坑SK190に挟まれた空間が道路幅と考えられ、この時点での東西道路の最大幅は約6mである。したがって第1四半期に比べて道路幅はやや狭くなっている。南側では道路状遺構SF151と並行するように廃棄土坑が掘られている。この時期にも第1四半期以来の屋敷地が継続していたものと考えられる。西区にかつて方形の巨大な土坑SK247が掘られていた位置に、溝SD303を掘り直した溝SD140が掘られている。第1四半期以来の区画Aが踏襲されているものと考えられる。その区画Aの内部にあたる場所に3号墓ST263が作られる。桶に埋葬された成人埋葬である。周囲に埋葬がないので、区画A内に造られた単独墓と推定される。

いっぽう第1四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、屋敷地が継続し、井戸や廃棄土坑がかなり密に分布する。井戸や土坑が第4南北街路の位置から約10mほど西に控えた場所に分布することから見て、第2南北街路に面した空間には建物が立ち、その背後に井戸や土坑が分布する町人屋敷景観特有の遺構配置が想定できる。その意味で第1四半期に引き続き、この角地は道路に面した屋敷地として利用されたものと推定される。



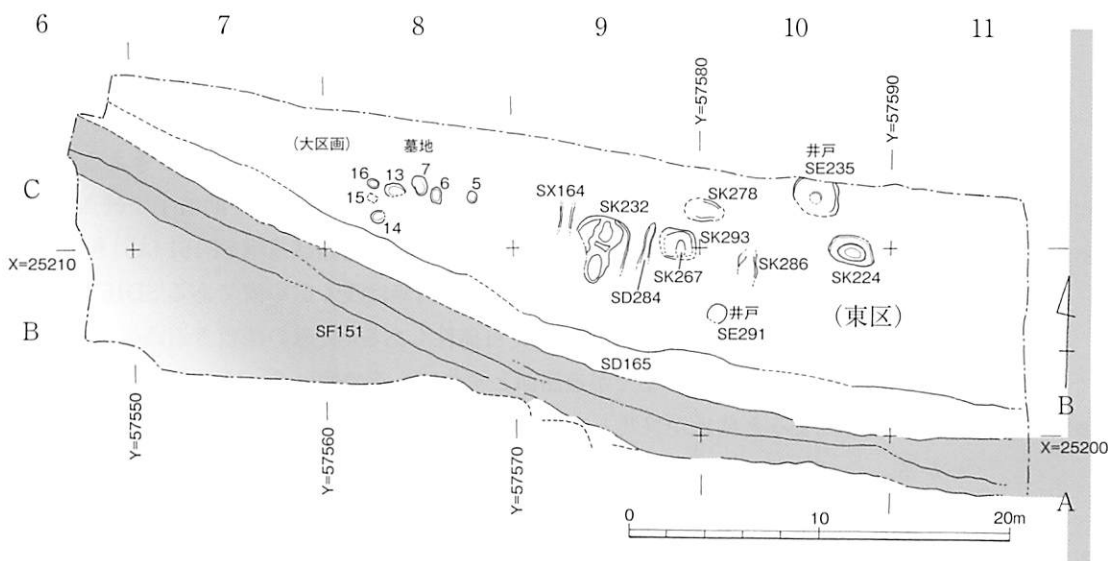
第4-187図 16世紀第2四半期の遺構 (1/400)



道路と水路  
 16世紀第3四半期（第4 - 188図）道路状遺構SF151とその側溝SD165は、道路の硬化面を2度更新（第5・4硬化面）し、水路は矢板の打ち替え（第2・1矢板列）を行いつつ、この時期にも同じ位置に維持されるが、厳密にみれば矢板列はさらに南側に移動している。いっぽう南側では遺構がなくなる。

墓地  
 大区画  
 西区の第1四半期以来の区画Aにはこの時期の遺構がなく、北2区の区画Bにあたる場所では、幼児の墓が営まれるようになる。おそらく区画A、区画Bと言う区別がなくなり、ひとつの大きな区画の東南隅に幼児墓が営まれるようになったものと考えられる。

「中町」の町屋  
 第1・2四半期に引き続き、東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、奥行き30mほどの屋敷地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑の位置が以前より西に移動し、溝SD284が屋敷地の背後を画する溝とみられる。この角地は引き続き町人屋敷として利用されたものと推定される。全体として第3四半期になっても道路や屋敷地の区画に大きな変動はないが、道路北側の区画に墓が現れることが大きな第2の画期である。



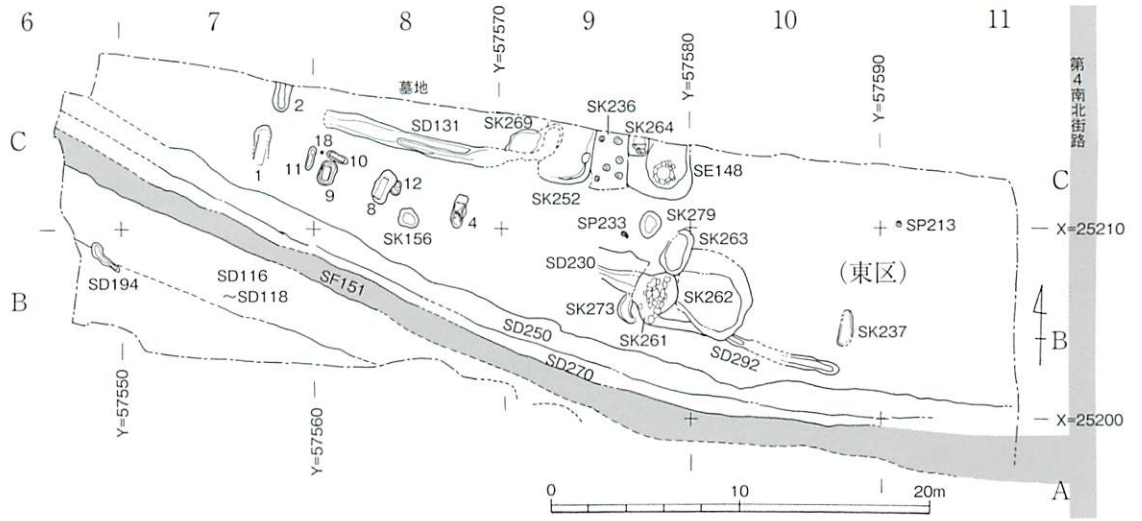
第4 - 188図 16世紀第3四半期の遺構 (1/400)

道路の南に水路  
 16世紀第4四半期前半（第4 - 189図）道路状遺構SF151は引き続き路面を更新し維持されるが、道路の北側側溝はSD165から溝SD250さらにSD270と掘りなおされている。掘り直すたびに側溝は南側に移動する。ところが溝SD165の時代とは異なり、SD250以後は矢板で護岸を強化しなくなる。いっぽう同時にそれまでSF151の道路面であった南側に、かなり大きな溝SD118、SD117、SD116が順次掘りなおされていく。つまり道路状遺構SF151には第3四半期までは南側に側溝がなかったのに、この時期から両側側溝となるのである。水路としての機能は北から南に移るようで、道路幅も広くて2mほどに狭くなったと考えられる。

両側側溝幅2m  
 成人墓  
 第3四半期に幼児の墓が集中した北2区は、南北方向に棺を向け等間隔に成人墓を配する墓地に整備され、その北側には墓地とその北側を画す溝SD131が掘られている。したがって道路の北側に、成人墓とその家族の墓地が配されたものと推測される。

第3四半期に引き続き東区の第4南北街路と東西道路に挟まれた角地には、屋敷地が継続する。しかし井戸や廃棄土坑が数多く掘られるばかりでなく、道路に並行してSK230、SK261、SD292と連なる排水遺構が敷地の南辺に作られている。

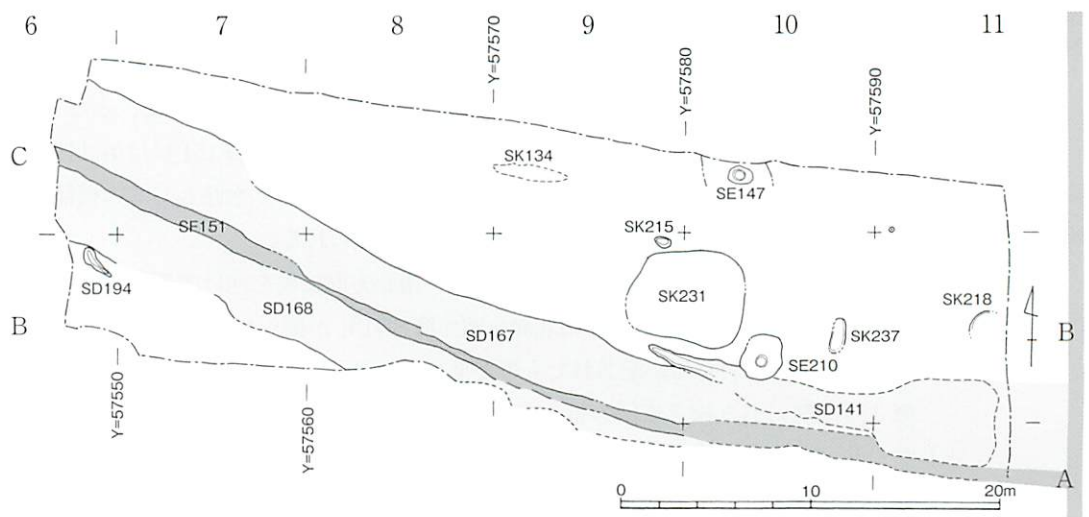
全体として第4四半期になっても道路の位置や区画に大きな変動はないが、各区画のなかではそれぞれ遺構の内容に変化があり、遺構の密度が最も高いのがこの時期である。



第4-189図 16世紀第4四半期前半の遺構 (1/400)

16世紀第4四半期後半 (第4-190図) 16世紀第4四半期後半代と考えられる遺構は減少する。東西道路の北側にあたるC7区付近の西区においても第4四半期前半に続き遺構がないが、その道路をはさんだ南側のC6,7の南区も遺構が少ない。道路状遺構SF151は引き続き維持されるが、SD270とSD116の両側側溝は埋没し、SF151の両側は浅く広い溝であるSD167とSD168が存在する。その底面自体が道路面として機能した可能性もある。従来の礫敷き道路幅は1m程度まで狭まっているが、SD167とSD168までが道路面とすれば、その幅は6mほどとなる。

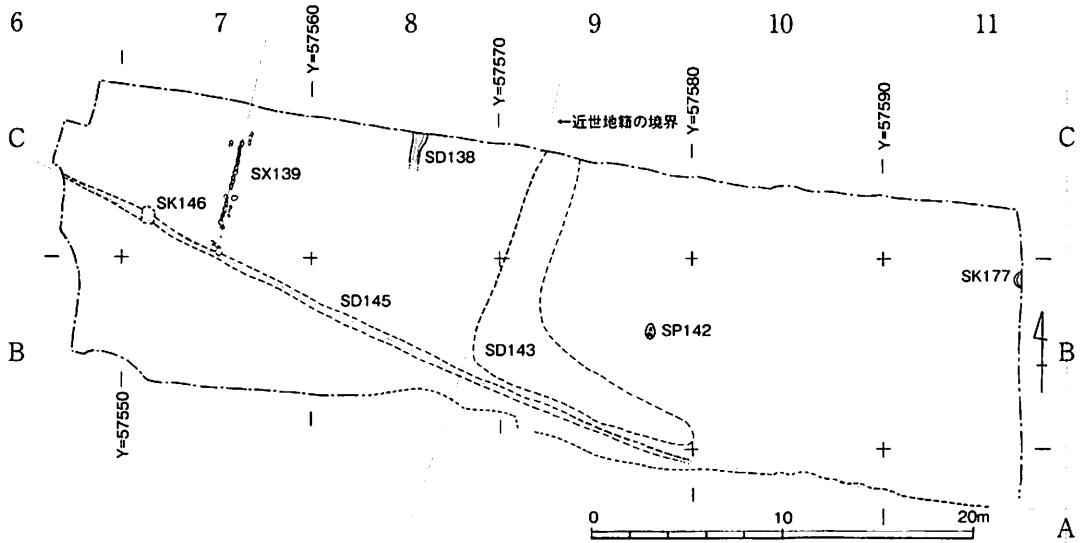
この時期になると墓地が終焉していることが、1号墓ST130がSD167にきられていることからわかる。かつて墓地の敷地であったところの一部が、溝あるいは道路敷きになっているのである。C11～B11区付近の本来第4南北街路に面した東区も遺構が少ないままであるが、井戸や土坑や溝が存続するので、おそらく島津侵攻後と考えられるこの時期に、中町においてもある程度の町屋の復興が行われたことを示している。北2区の墓地は埋葬がなくなり、イエズス会府内教会が廃絶する時期とほぼ合致している。



第4-190図 16世紀第4四半期後半の遺構 (1/400)

17世紀初めの整地  
水田化

近世（第4-191図）溝SD138と土坑SK177は唐津焼陶器碗の出土から17世紀初頭としたが、16世紀末の最後に作られた遺構とみなすこともできる。その前後に調査区全体は第2層の整地がなされている。この整地層の最下部からは絵唐津皿や彫三島碗などが出土するから17世紀の初頭、あるいは1590年代にさかのぼって中世都市府内が廃絶した直後に行われたものと考えられる。そしてこの整地は都市を再建するものではなく、これをもってこの場所は住居遺構の終焉を迎えている。その後この付近は石列SX139で土地の段差が作られたように一旦畑地化されたようであるが、その後水田側溝SD145が掘られて18世紀には水田化されている。その境界はおそらく16世紀の都市の区画をそのまま踏襲し、地籍の境界となっている。



第4-191図 近世の遺構 (1/400)

## 2 遺構の画期

15世紀A期

第1の画期 次のように6つの画期が存在する。9世紀以来途絶えていた遺構が、15世紀の前半に再び出現するのが第1の画期である。15世紀A期とした遺構群である。この付近に集落あるいは中世都市府内の広がりに含まれるようになる時期である。遺構は井戸や廃棄土坑であるので宅地が展開したものと推定される。この時点で第4南北街路か存在していた証拠は存在しない。

15世紀B期  
道路建設  
都市整備  
「中町」

第2の画期は東西方向の道路SF151と道路側溝のSD165とが、東西に自然地形に沿って作られた15世紀B期である。この道路は第4南北街路と同時に建設されたものと推定される。大分市教育委員会による第4南北街路の調査においてもその建設時期は15世紀後葉と考えられており、その調査成果と一致する。また昨年報告された第7次・16次調査の成果によれば、第1南北街路における戦国時代道路面の最初の時期は15世紀末から16世紀初めと報告されている<sup>註1</sup>。実年代観において微妙な違いがあるが、第1南北街路と第4南北街路の建設は15世紀後葉あるいは末にさかのぼり、ほぼ同じ時期にあたると思われるので、この第2の画期は、中世都市府内全体の画期の一環であったと考えられる。そして第4南北街路に面した遺構配置をとる屋敷地が存在したものと考えられるので、この道路建設によってその後「中町」とされる街路と屋敷地が第4南北街路に面して設けられたものといえる。

註1 中世大友府内町跡第26次、27次、32次、39次調査の成果による。

佐藤道文・五十川雄也・松尾聡・服部真和「大友府内Ⅷ」（大分市埋蔵文化財発掘調査報告65）2006、大分市教育委員会

註2 田中裕介編『豊後府内Ⅲ』2006、大分県教育庁埋蔵文化財センター

16世紀中ごろ 第3の画期は16世紀第3四半期の墓地の始まりと、それにさきだつ区画の変更である。16世紀前半までは東西道路の北側には区画Aと区画Bという細かい区画が存在したが、第3四半期にはこの区別がなくなり、中町の町屋の背後には東西道路に面した比較的広い区画が出現し、その区画の東南隅に幼児墓地が営まれることになるのである。墓地が都市の領域内に作られるには宗教施設の存在が前提になる。府内古図との対比から見ると第1章第6節で述べたように、この場所において宗教施設にあたるものは顕徳寺＝ダイウス堂以外にはないのである。したがってこの敷地の変更と墓地の出現は、1553（天文22）年のイエズス会府内教会の建設、1555（天文24）年のアルメイダによる育児院の設立、さらに1556（弘治元）年の教会敷地の拡大、1557（弘治2）年の病院の建造と1559（永禄2）年の病院の拡充といった、1550年代の府内教会の整備にともなう教会施設の変遷と関連してくるものと想定される。

1570年代 水路のつけかえ 第4の画期は道路が狭くなり南側に水路（SD118）が移る16世紀第4四半期前半である。実年代については1570年代あるいは、ややそれを遡る可能性もある。水路が南側に付け変わるのは第3四半期以来の北側側溝（SD165第2矢板列⇒第1矢板列⇒SD270⇒SD250）が改修されるたびに南側に移動した結果である。最も南に北側側溝が移動した時期には道路幅は2m程度で、しかもSD250は水路機能もたない単なる道路と北側の区画との境界溝になっている。このような北側側溝の推移は、北側の敷地が南側に張り出したことを意味し、かつ水路を南側に移さなければ排水できないほど北側敷地の高さが増したことによると考えられる。このような敷地の拡大とわずかだが高燥化する動きは16世紀第3四半期のSD165第2矢板列への改修時点から始まっており、この第4の画期の時点で頂点に達している。以上の変化は道路SF151北側の墓地を含む教会施設の整備に伴う現象であり、この時点で墓地が成人墓地にかわることもその一環であろう。府内教会が最大の規模に達した1580～87年のコレジオ併設期に先立って、すでに教会施設が整備されていると推定される。

墓地の終焉 1587年 第5の画期は墓地の終焉と道路の復興が行われた16世紀第4四半期後半である。1号墓ST130の掘形南端を切って道路あるいは側溝のSD167が掘られているので、墓地が終焉し、その後に再び道路が整備されていることは明確である。これは1587（天正15）年の島津侵攻による府内占領と教会の退去によるものと見られる。1587（天正15）年の豊臣秀吉による九州攻めの際には、府内教会の施設が島津氏との交渉使節木食上人の宿舎になっているので、戦争による消失をまぬかれていることがわかる。そのため第10次調査区では火災層を見出すことはできないが、墓地の終焉と道路の再整備という遺構の推移とそれらの遺構の上を直後に覆う第2層のなかに1590年代以後の遺物が含まれることから、1587（天正15）年の戦災とその後の復興という経過と遺構の変遷とが一致するものと考えられる。

17世紀初頭 第6の画期は、都市遺構が終焉する17世紀初頭である。復興後にも中町の屋敷地は存続しているが、その後生活遺構がなくなり、近世になると畑地と水田に変化することは第2層以上の遺構から明らかである。これは1602（慶長7）年以後の近世府内城下町への移転という記録と一致する。中世都市府内の終焉である。

註3 五野井隆史「豊後府内の教会領域について－絵画・文献史料と考古学資料に基づく府内教会の諸施設とその変遷－」『東京大学史料編纂所研究紀要』14、2004 東京大学史料編纂所

### 3 木棺に転用された唐櫃について（第4 - 192 図）

唐櫃

墓地のなかで最新の埋葬である4号墓 ST150 では、埋葬施設の木棺が当時の家具である唐櫃を転用したものであると報告したが、その復元の根拠となった車長持の参考資料を示す。2002年8月27日に墓地の調査を担当した調査員の山崎文子が、当時所蔵されていた旧愛媛県立歴史民俗資料館（松山市堀之内）で、撮影したものである。

車長持

第4 - 192 図は4号墓 ST150 の木棺復元図と、愛媛県松山市室町に伝わった近世前期の車長持を上下に対比させている。この長持は近世初頭まで使われていた唐櫃から近世後期の長持への変化の中間形態をしめすものである。本来唐櫃は長方形の蓋付きの箱を本体にして、その側面と小口に通常6本の脚を外側に取り付けるものである。一方通常の長持はその脚が省略されて大型化し、担い棒を通して移動させるつくりである。この松山市室町に伝わった車長持は外面に唐櫃の脚にあたる角材が取り付けられているが、下部の先端は地面に達せず考古学でいうところの痕跡器官になっている。一方かなり大型化している点では近世後期の長持に近くなり、把手で持ち上げるのは困難なので、移動のために下部に筒状の車輪が前後に取り付けられている。まだ担い棒を通す構造になっていない点で近世後期の長持が完成する以前の段階をしめしている。

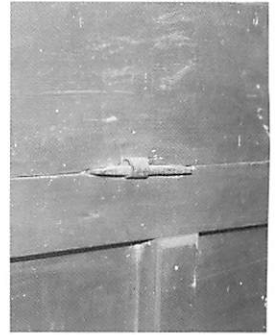
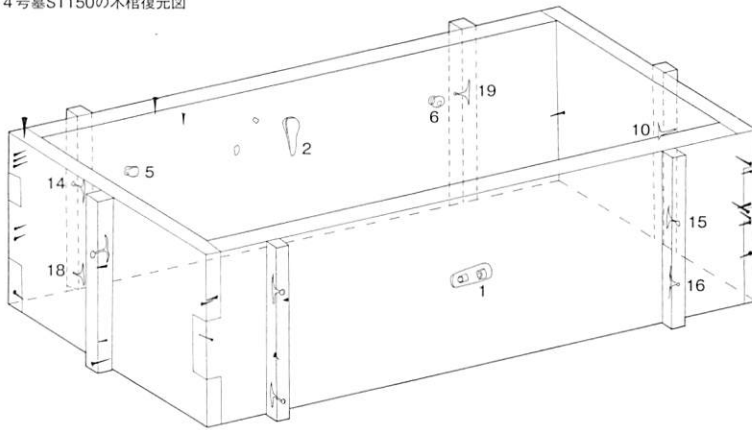
金具の比較

この車長持と4号墓 ST150 の木棺復元図を比較すると、棺の外側に脚に当たる角材が取り付けられている点で、形態が共通し、金具をみると出土品1は車長持本体と蓋と閉じたときの錠前を通す組み合わせ金具の本体取り付け部分に当たる。出土品5と6は本体と蓋を接合する蝶番金具の本体に取り付けた金具にあたる。また4号墓 ST150 の木棺の脚に当たる角材の接合に使われた先端が二股にわかれT字形にひらいて出土した多くの金具（7、10、11、12、14～16、18、19）は車長持の把手金具や円環取付金具の先端部と同じ形態である。出土品2の金具のみが対応するものがなく用途不明である。釘の向きと位置から復元される小口板と側板の接合方法も一致する。

転用状況

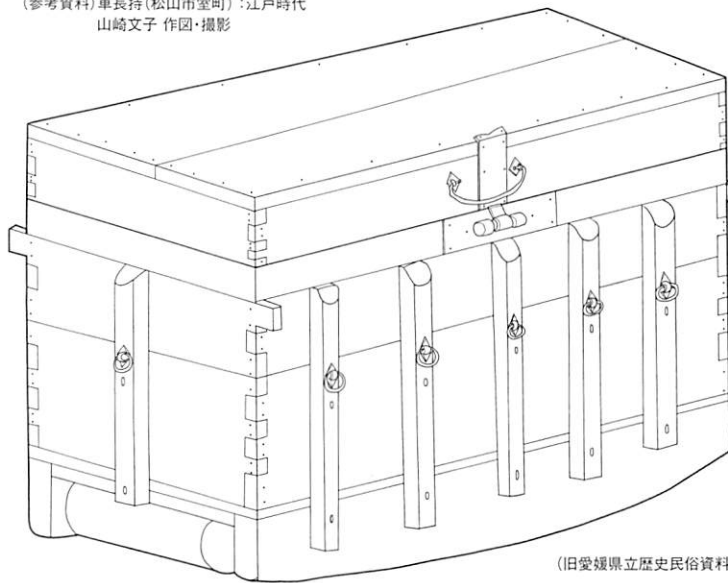
以上の形態と金具の一致から想定される唐櫃の棺への転用状況は次のようなものである。おそらく蓋を取り外した唐櫃の本体を棺身とし、脚の本体より下に延びる部分は切り取って棺身として使用したものと想定される。うちつけた釘の存在から見て、蓋は別の板材を利用していると推定される。

4号墓ST150の木棺復元図



螺番の金具(5・6に対応)

(参考資料)車長持(松山市室町):江戸時代  
山崎文子 作図・撮影



T字形鉄の内側(7など)

(旧愛媛県立歴史民俗資料館所蔵)



把手の金具



全 景



錠前・金具(1に対応)

第4-192図 江戸時代の車長持

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 中世大友府内町跡第10次調査区出土人骨について

舟橋京子\*・田中良之\*\*

\* 九州大学大学院人文科学研究院

\*\* 九州大学大学院比較社会文化研究院

#### 1. はじめに

大分県大分市中世大友府内町跡第10次調査区において中世墓地から人骨が出土した。そこで、同県教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、舟橋および岡崎健治・板倉有が大が現地における発掘・観察・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学に搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を記載・報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類学資料室に保管されている。

#### 2. 人骨出土状態

##### 【1号墓ST130】(第4-168図)

方形の木棺内中央より西側から人骨が出土している。本人骨は頭位を北にし上肢を軽屈した伸展葬である。上肢は左右ともに肘関節を屈曲し回内した状態で出土しており、胸の前で前腕部を交差させている。下肢骨は、大腿部・下腿部ともに長軸が木棺の長軸にやや斜行していることから、若干膝関節を曲げた状態で埋葬されていたと考えられる。

##### 【3号墓ST268】(第4-157図)

早稲内から人骨が出土している。本人骨は正面を北にした座葬である。西側から、肋骨・左上腕骨・頭蓋骨・左大腿骨・右上腕骨・右尺骨・右橈骨・右大腿骨・脛骨・左前腕の順で出土している。頭蓋骨は顔面が下向きで頭頂部が東を向いている。右上腕骨は近位を北にし、右尺骨は近位を南にした状態で出土している。

土師器皿も3点出土している。うち2枚は左大腿骨の南東側と左上腕骨北側の底板直上から出土しており、棺内に副葬されていたと考えられる(第4-157図1・3)。もう1枚は脛骨上に載った状態で棺内東側から出土しており、棺内に副葬されていた可能性と棺上に置かれていたものが棺蓋の腐朽に伴い棺内に崩落した可能性も考えられる(第4-157図2)。

##### 【4号墓ST150】(第4-172図)

長方形の墓坑内南側4分の3の範囲から人骨が出土している。本人骨は股関節を軽屈・膝関節を強屈し、頭位を北にした仰臥屈葬である。

頭蓋骨は墓坑内の北、60cmの位置から顔面を北にした状態で出土しており、頭蓋骨の大後頭孔付近南側から頸椎の痕跡が南北方向に連なった状態で出土している。左右鎖骨内側の位置から推定される胸椎の位置から10cm程度離れており、軟部組織の腐朽にともない頭蓋が右斜め後方に転倒した可能性が考えられる。右上肢は肘関節を伸ばした状態で出土しており、左上肢は肘関節を屈曲・回内し手の骨を右肩付近に置いた状態で出土している。下肢骨は膝関節を強屈し膝が西方向に倒れた状態で出土している。

##### 【5号墓ST154】(第4-159図)

円形の墓坑内の中央付近から人骨が出土している。本人骨は正面を北にした座葬である。墓坑中央から頭蓋骨が顔面を南にした状態で出土している。頭蓋骨の西側からは肋骨が出土しており、肋骨の北側からは大腿骨が出土している。また、頭蓋骨の東側からも大腿骨が出土している。本人骨は軟部組織の腐朽に伴い左右大腿骨間に頭蓋骨が崩落したものと考えられる。

##### 【6号墓ST157】(第4-160図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北にした右側臥屈葬である。墓坑内北側から頭蓋骨

が顔面を西にした状態で出土している。頭蓋骨の南側からは上肢・肋骨片が出土しており、その南側からは下肢骨が長軸を南北に揃えた状態で出土している。

【7号墓ST158】(第4-161図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は座葬である。墓坑内北西側から頭蓋骨が出土しており、その東側から肋骨が一部散乱した状態で出土している。その南側からは大腿骨・脛骨が長軸を東西にした状態で出土している。

【8号墓ST149】(第4-176図②)

方形の木棺墓内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北西に股関節を伸ばし膝関節を強屈した仰臥屈葬である。棺内北側からは頭蓋骨が正面を西に頭蓋底を上にした状態で出土している。右上肢は肘関節を伸展した状態で出土している。下肢骨は左右大腿骨が長軸を北東-南西にした状態で出土しており、左大腿骨直下及び南側からは下腿部が長軸を大腿骨と揃えた状態で出土している。

【9号墓ST152】(第4-178図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北西にした左側臥屈葬である。墓坑内西側から頭蓋骨が顔面を南にした状態で出土している。頭蓋の南側からは左上肢が長軸を南北にした状態で出土している。頭蓋の西側からは右上肢が、肘関節を屈曲させ、回内した状態で出土している。その西側からは右肋骨が出土している。墓坑内南側からは下肢が長軸を東西に揃え、股関節・膝関節を強屈した状態で出土している。

下肢骨の南側からは備前焼播鉢片が出土している(第4-179図1)。

【10号墓ST260】(第4-180図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を西にした伸展葬である。墓坑内西側から頭蓋骨・下顎骨が出土している。下顎はオトガイを東にしている。その東側からは上肢および肋骨片が出土しており、さらに東側からは大腿骨・脛骨の順に長軸を東西に揃えた状態で出土している。

【12号墓ST274】(第4-183図)

方形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位を北にした左側臥屈葬である。墓坑内北側からは頭蓋骨が顔面を東にした状態で出土している。その南側からは右上肢骨が長軸を南北にした状態で出土している。この上腕骨の東側からは肋骨が出土しており、さらに東側からは、左上腕骨が長軸を南北にした状態で出土している。その南側からは下肢骨が膝関節を強屈した状態で出土している。

墓坑内南西隅の腰部南側付近からは土師器皿が出土している(第4-183図2)。

【13号墓ST289】(第4-162図)

円形の墓坑内から人骨が出土している。本人骨は頭位西向きの屈葬の可能性が高い。墓坑内西側から頭蓋骨が顔面を南にした状態で出土している。その東側からは肋骨が出土しており、肋骨の北側からは上肢骨が長軸を東西にした状態で出土している。その東側からは骨盤片が出土している。また、本人骨は南東側半分を8号墓埋葬により切られており、その際に攪乱を受けたと考えられる骨片が頭蓋骨北側の他の骨より12cm程度高い位置から出土している。

【14号墓ST295】(第4-163図)

円形の墓坑内から人骨が出土している。埋葬姿勢・頭位は不明である。墓坑中央部から頭蓋片・歯牙がまとまった状態で出土している。人骨の南東側から土師器皿が出土している(第4-163図1)。

【15号墓ST296】(第4-164図)

埋葬姿勢・頭位は不明である。20cm四方の範囲から人骨がまとまった状態で出土している。

【16号墓ST297】(第4-165図)

本人骨の埋葬姿勢・頭位は不明であるが、頭蓋骨片・歯牙と近接して西側から肋骨片がまとまって出土していることから座葬の可能性が高いと考えられる。

【17号墓ST299】(第4-166図)

隅丸方形の墓坑内の中央付近から人骨がまとまった状態で出土している。本人骨の埋葬姿勢・頭位は不明で



ある。

### 3. 人骨所見

#### 1号墓人骨

##### 【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、左右上顎骨歯槽付近片・左右側頭骨の外耳付近・下顎体の歯槽付近が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M <sup>3</sup>	M <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	M <sup>3</sup>
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ ●遊離歯 ( )未萌出 c齶歯

歯牙の咬耗度は柘原（柘原 1957）の2° a～2° bである。

上肢骨は、右上腕骨骨体部・左右尺骨骨体部・左右橈骨骨体部が遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨骨体部・左右脛骨骨体部が遺存している。

##### 【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から熟年と推定される。性別は、判定可能な部位が遺存していないことから不明である。

##### 【形質的特徴】

本人骨は保存状態がそれほど良くなく、計測に基づく形質的特徴の抽出は困難である。但し肉眼観察の結果、本人骨の歯槽部には吉母浜遺跡出土人骨（中橋・永井 1985）等に見られる中世人に特徴的な歯槽性突顎は認められない。

#### 3号墓人骨

##### 【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、左側頭骨・左頭頂骨の頭頂側頭縫合付近および後頭骨片・左臼歯部付近の下顎体が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(M <sup>3</sup> )	/	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	/	I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	/	/	/
M <sub>3</sub>	△	△	P <sub>2</sub>	/	C	/	I <sub>1</sub>	/	/	/	P <sub>1</sub>	/	/	/	/
●		●	●	●	●	●					●				

歯牙の咬耗度は柘原（柘原 1957）の2° b～3° である。

躯幹骨は左右の肋骨片が複数遺存している。

上肢骨は、左右上腕骨骨体部片・左橈骨骨体部片・右尺骨骨体部片が遺存している。この他にも部位同定困難な前腕片や左右不明な指骨が数点出土している。

下肢骨は、左大腿骨骨頭部・左右大腿骨骨体部片・左脛骨骨体部が遺存している。左右不明脛骨骨体部片および部位同定不可能な長管骨片が遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。

##### 【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から熟年後半以上と推定される。性別は、大腿骨の粗線がやや発達していることから男性の可能性が高いと推定される。

##### 【特記事項】（図1～4）

大腿骨骨体部近位側に骨変成が認められる。レ線像を見ると緻密質に骨融解の症状などは認められず、外骨性の骨増生が見られる。

#### 4号墓人骨

##### 【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、前頭骨右眼窩付近・左右側頭骨の外耳付近・左頭頂骨のラムダ縫合付近・後頭骨のラムダ縫合付近および大後頭孔付近の破片が遺存している。また、上顎骨および下顎骨の歯槽付近も遺存している。この他にも部位同定困難な頭蓋骨片が遺存している。眼窩上隆起は発達しており、ラムダ縫合は内・外板ともに開いている。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$M_3$	$M^2$	$M^1$	$P^2$	$P^1$	$C$	$I^2$	$I^1$	$I^1$	$I^2$	$C$	$P^1$	$P^2$	$M^1$	$M^2$	$M^3$
$M_3$	$M_2$	$M_1$	$P_2$	$P_1$	$C$	$I_2$	$I_1$	$I_1$	$I_2$	$C$	$P_1$	$P_2$	$M_1$	$M_2$	$M_3$

歯牙の咬耗度は柘原(柘原1957)の2° a~2° bである。

躯幹骨は第2頸椎および肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨片・左右肩甲骨片・左右上腕骨骨体部片・左右橈骨骨体部片・左右尺骨骨体部片・右有頭骨・左右不明中手骨片4点・左右不明第1基節骨片が遺存している。

下肢骨は、右腸骨付近片・左坐骨結節および恥骨付近・左大腿骨骨体部片・右大腿骨骨頭・右大腿骨頸部付近および左右不明膝蓋骨片・左右脛骨片・左右腓骨片が遺存している。他にも左右不明舟状骨片・中間楔状骨片・外側楔状骨片・第1中足骨・第5中足骨・基節骨3点が遺存している。

##### 【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度およびラムダ縫合の癒合状態から熟年と推定される。性別は、眼窩上隆起が発達していることから男性と判定される。

#### 5号墓人骨

##### 【保存状態】

本人骨は保存状態が悪く、歯牙と部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

				●											
				(I <sup>1</sup> )											
	●	●		●	●	●	●	●					●		
/	$m^2$	$m^1$	/	$i^2$	$i^1$	$i^1$	/	/	/	/	/	/	/	/	(M <sup>1</sup> )
/	/	$m_1$	/	(I <sub>2</sub> )	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>2</sub> )	c	$m_1$	$m_2$	(M <sub>1</sub> )				
		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

##### 【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態(Ubelaker1989)から1才半~2才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

6号墓人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態が良くなく、歯牙と部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●										
(M <sup>1</sup> )										
	●	●	●	●	/	●	●	●	●	●
	m <sup>2</sup>	m <sup>1</sup>	c	i <sup>2</sup>	/	i <sup>1</sup>	i <sup>2</sup>	c	m <sup>1</sup>	m <sup>2</sup>
	●	●	●	/	i <sub>1</sub>	/	c	m <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	●
(M <sub>2</sub> )	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
			(C)	(I <sub>2</sub> )	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>2</sub> )	(C)		
	●		●	●	●	●	●	●		●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から4～5才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

7号墓人骨

【保存状態】

本人骨は保存状態が良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯牙および肋骨片と部位同定困難な長管骨片が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●	●							●	●	/	●	●
(m <sup>2</sup> )	(m <sup>1</sup> )	/	/	/	/	/	/	i <sup>1</sup>	i <sup>2</sup>	/	(m <sup>1</sup> )	(m <sup>2</sup> )
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	c	/	(m <sub>2</sub> )
										●		●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から9ヶ月前後の乳児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

8号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、右側頭骨乳様突起付近および左頬骨眼窩付近片および部位同定困難な破片が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	●	/	/	/	/	/	/	/	/	●	/	/	/	/	●	/
/	/	M <sup>1</sup>	/	/	/	/	/	/	/	/	C	/	/	/	/	M <sup>2</sup>	/
/	/	/	/	/	/	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	/	/	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	/	/	/	/
						●	●	●			●	●	●				

歯牙の咬耗度は柘原（柘原 1957）の1° c<sup>2</sup> bである。

上肢骨は、右尺骨骨体部片が遺存している。骨体周は小さく、緻密質の厚みも薄い。

下肢骨は、左右大腿骨骨体部片・左右不明腓骨骨体部片が遺存している。左右不明脛骨骨体部片および部位同定不可能な長管骨片が遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。

上記の他にも部位同定困難な長管骨片が遺存している。

【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から成年～熟年と推定される。性別は、尺骨の特徴から女性の可能性が考えられる。

### 9号墓人骨

#### 【保存状態】

本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、左上顎骨歯槽付近片・左右側頭骨の外耳付近・下顎体の歯槽付近が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	×	/
/	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	△	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	×	M <sub>2</sub>	/

歯牙の咬耗度は柘原（柘原1957）の2° a～2° bである。

上肢骨は、右上腕骨骨頭・右上腕骨遠位端・左右尺骨骨体部・左右橈骨骨体部・左右不明肘頭片が遺存している。他にも右有鈎骨・左右不明中手骨片2点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨弓付近片・左大腿骨骨頭・右大腿骨頸部付近・右大腿骨頸部・右大腿骨遠位端付近・左右不明脛骨骨体部片が遺存している。

上記の他にも部位同定困難な長管骨片が遺存している。

#### 【年齢・性別】

年齢は、歯牙の咬耗度から熟年と推定される。性別は、判定可能な部位が遺存していないことから不明である。

### 10号墓人骨

#### 【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片及び歯牙と肋骨片・部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●

(M<sup>1</sup>)

●	●										
m <sup>2</sup>	/	c	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	m <sub>2</sub>	m <sub>1</sub>	/	/	/	/	/	/	/	/	m <sub>2</sub>
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	(P <sub>1</sub> )	(C)	(I <sub>2</sub> )	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>1</sub> )	(I <sub>2</sub> )	(C)	(P <sub>1</sub> )			(M <sub>1</sub> )
	●	●	●	●	●	●	●	●			●

#### 【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から3才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

### M11号人骨

#### 【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、歯種同定困難な歯牙片が遺存しているのみである。

#### 【年齢・性別】

年齢は、乳歯の破片が遺存していることから乳児～小児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

12号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯牙および肋骨・部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●					●	●				
(M <sup>1</sup> )					(I <sup>1</sup> )	(I <sup>1</sup> )				
	●	●	/	●	/	●	/	●	●	/
	m <sup>2</sup>	m <sup>1</sup>	/	i <sup>2</sup>	/	i <sup>1</sup>	/	c	m <sup>1</sup>	/
	●	●	/	/	/	/	/	c	m <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>
	●	●	●					●	●	●
(M <sub>1</sub> )										
	●									

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から1～2才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

13号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、頭蓋冠と歯牙および肋骨・部位同定困難な長管骨片が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	m <sup>2</sup>	m <sup>1</sup>	c	i <sup>2</sup>	i <sup>1</sup>	i <sup>1</sup>	i <sup>2</sup>	c	m <sup>1</sup>	/
(M <sup>1</sup> )	m <sub>2</sub>	m <sub>1</sub>	c	i <sub>2</sub>	i <sub>1</sub>	i <sub>1</sub>	i <sub>2</sub>	c	m <sub>1</sub>	m <sub>2</sub> (M <sub>1</sub> )
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から1～2才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

14号墓人骨

【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯牙が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

●					●				
(M <sup>1</sup> )					(I <sup>1</sup> )				
	●	/	/	●	/	/	/	/	/
	m <sup>2</sup>	/	/	i <sup>2</sup>	/	/	/	/	/
	●	●	/	/	/	/	/	/	/
	●	●							

【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から1～3才前後の幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

### 15号墓人骨

#### 【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯槽部片および歯牙が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

										●											
										(I <sup>1</sup> )											
●											●	●			●	●					
/	m <sup>2</sup>	/	/	/	/	/	/	/	/	/	i <sup>1</sup>	/	c	/	m <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>					
/	m <sub>2</sub>	m <sub>1</sub>	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	m <sub>1</sub>	m <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>					
●															●	●	●				

#### 【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から7～8才前後の小児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

### 16号墓人骨

#### 【保存状態】

本人骨は保存状態は良くなく、部位同定困難な頭蓋骨片と歯槽部片および歯牙が遺存しているのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

										●											
										(I <sup>1</sup> )											
●											●	●									
/	m <sup>2</sup>	m <sup>1</sup>	/	/	/	/	/	/	/	/	i <sup>2</sup>	c	/	/							
(M <sub>1</sub> )	m <sub>2</sub>	m <sub>1</sub>	c	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/						
●	●	●													c	/	/				

#### 【年齢・性別】

年齢は、歯根の形成状態（Ubelaker1989）から1才前後の乳幼児と推定される。性別は、判定可能な年齢に達していないことから不明である。

### 17号墓人骨

#### 【保存状態】

本人骨の保存状態は良くなく、部位同定困難な薄い小片が遺存しているのみである。

#### 【年齢・性別】

年齢は、残存している人骨片が薄いことから未成人と考えられる。性別は、判定可能部位が残存していないことから不明である。

## 4. まとめ

以上出土人骨についての記載・報告を行ってきた。本遺跡からは成人5体、小児1体、乳幼児9体、不明1体の計16体の人骨が出土した。出土人骨は保存状態が不良なものがほとんどで計測に耐えうる人骨はなく、形質的比較を行える個体は得られなかった。埋葬姿勢に関しては、成人は時期の早い3号墓（早桶）と伸展葬の1号墓を除いて中世に特徴的な仰臥もしくは側臥の屈肢葬であった。一方で、1号墓に関しては、埋葬姿勢だけでなく、出土人骨の形質的特徴にも中世人骨に特徴的な歯槽性突顎が認められないという特異性がみられた。

最後に本報告にあたり、大分県教育委員会の田中裕介氏を始め各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけ

した。深謝したい。また、九州大学比較社会文化学府基層構造講座の諸氏、とりわけ板倉有大・邱鴻霖・能登原孝道・山根謙二・石田智子・鈴木克・岩下美沙・渡部芳久氏には人骨整理から報告の過程で多くのご助力を頂いた。あわせて感謝したい。

#### 参考文献

桁原博,1957:日本人歯牙の咬耗に関する研究.熊本医学会雑誌、31.補冊4

Ubelaker,D.H.,1989:Himan skeletal remains:Excavation,Analysis,Interpretation (2nd Edition). Washington,D.C. :Taraxacum.

中橋孝博・永井昌文,1985:人骨.吉母浜遺跡,下関市教育委員会.

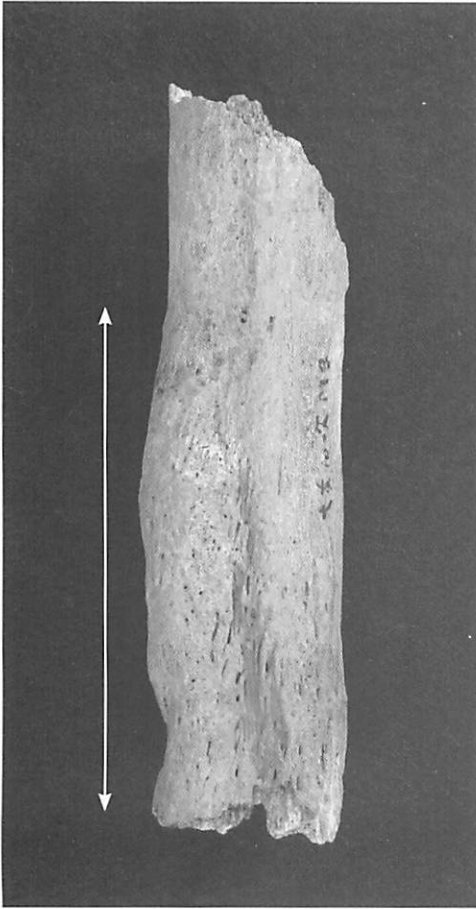


図1 3号墓人骨大腿骨病変部（後面）

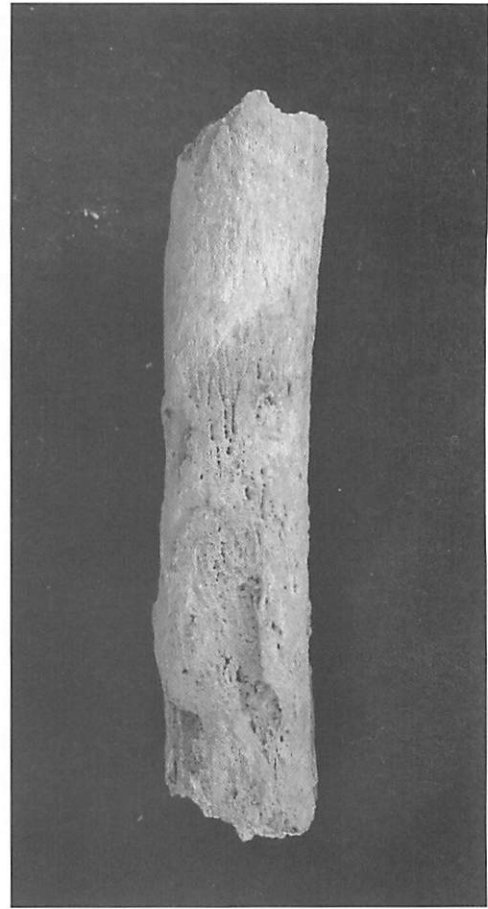


図2 3号墓人骨大腿骨病変部（側面）

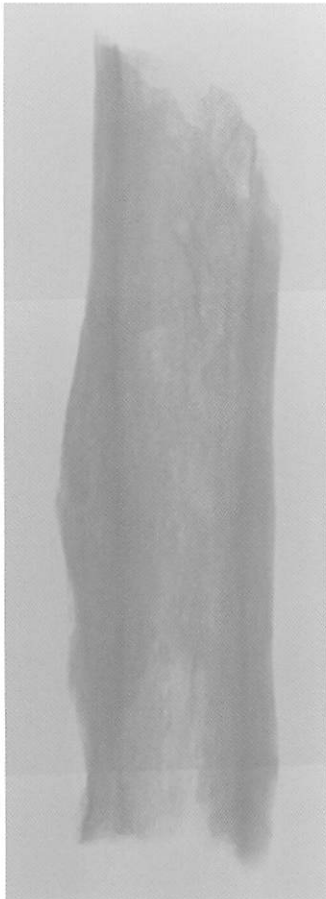


図3 3号墓人骨大腿骨病変部レ線像（後面）

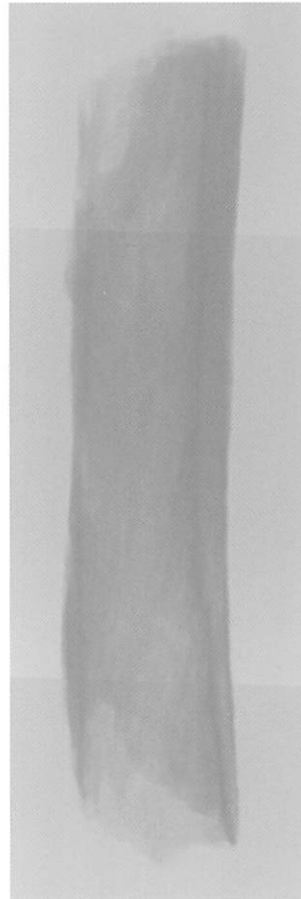


図4 3号墓人骨大腿骨病変部レ線像（側面）



## 第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

ノジヒョン  
魯視玆・平尾良光

(別府大学大学院 文学研究科)

## 1. はじめに

大分県に位置する中世大友府内町跡は大分県教育庁埋蔵文化センターが調査した中世大友氏の城下町跡である。遺跡がある大分市には九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていたところであり、朝鮮半島や中国、東南アジアなどからもたらされた数多くの遺物が出土した。大友義鎮は貿易から得られる利益をよく理解していたため、スペイン人の宣教師であるザビエルを招き、大友氏の城下町府内でのキリスト教の布教を許可した。

大友義鎮はキリシタン大名であり、南方貿易に力を入れたことで有名であり、中世大友府内町跡では多くのキリスト教関連の遺物が出土した。その中にはメダイやロザリオの一部と考えられるガラスなども含まれており、2005年にはこれらに関する自然科学的な調査が行われた。その結果、メダイと推定される金属製品とガラスは中国、朝鮮半島産の材料または未知の地域の材料が使用されたことがわかった。特に注目される特徴は日本の材料が使われておらず、東アジアではない未知の材料が新しく使われたことは当時の貿易ルートを示唆しているとも言える。

ただし、これまでに測定された中世大友府内町跡出土の金属製品は少ないため、その結果がキリスト教との関連がある製品のみみにみられることなのかどうかを理解するためには、より深い研究が必要である。そこで府内遺跡から出土した他の金属製品に関して自然科学的な調査を大分県教育庁埋蔵文化センターの依頼を受け、化学組成および鉛同位体比分析を用いた産地推定の研究を行った。

## 2. 資料

今回測定した資料は中世大友府内町跡から出土した金属製品5点である。2点は分銅であり、2点が鍵、1点がクサリである。分銅は完形をしており、鍵は先端欠、クサリは残存した一部である。これらの資料から鏝を微量採取し、測定用試料とした。資料の記載は表1で示した。

表1 中世大友府内町跡から出土した金属製品の記載

番号	資料名	残存長(cm)	残存状況	出土地	出土区	測定番号
1	分銅	0.9	完形	大友5次	包含層 2A5 回目	BP1185
2	鍵	9.6	先端欠	大友7次	C 地区 P229	BP1186
3	鍵	16.4	先端欠	大友7次	C 地区 P256	BP1187
4	分銅	5.4	完形	大友10次	II 区南 11 - A	BP1188
5	クサリ	1.7	一部	大友10次	II 区北 SK146	BP1189

3. 鉛同位体比の原理<sup>2)</sup>

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、それは地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には<sup>204</sup>Pb、<sup>206</sup>Pb、<sup>207</sup>Pb、<sup>208</sup>Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた<sup>238</sup>Uは<sup>206</sup>Pbに、<sup>235</sup>Uは<sup>207</sup>Pbに、<sup>232</sup>Thは<sup>208</sup>Pbに変化する。よって、U(ウラン)とTh(トリウム)が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。

各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量比および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない<sup>204</sup>Pb量と、変化した<sup>206</sup>Pb,<sup>207</sup>Pb,<sup>208</sup>Pb量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

#### 4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ピーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.3 μgの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上にのせた。準備したフィラメントを質量分析計（本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200℃で測定した。同一条件で標準鉛試料NBS - SRM981を測定し、規格化した。

#### 5. 測定値の表し方<sup>3)</sup>

鉛同位体比測定の結果を理解するため、材料の同位体比を次のように示した。鉛には<sup>204</sup>Pb,<sup>206</sup>Pb,<sup>207</sup>Pb,<sup>208</sup>Pbの独立した4つの同位体があり、同位体比は $\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{204}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{204}\text{Pb}}{^{207}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{206}\text{Pb}}{^{207}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{208}\text{Pb}}{^{207}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{204}\text{Pb}}{^{208}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{206}\text{Pb}}{^{208}\text{Pb}}$ ,  $\frac{^{207}\text{Pb}}{^{208}\text{Pb}}$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む $\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}} - \frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$ と $\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}} - \frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$ という2つの図（図1と図2）を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島産材料の領域を設定する場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

#### 6. 化学組成

今回の測定試料である金属製品5点に関して化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定は本学に設置されているHORIBA MESA-500Sで行った。測定された蛍光X線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を表2でまとめた。

化学組成の結果、分銅は銅、スズ、鉛の三元合金であり、鍵とクサリは銅と鉛の合金であることがわかった。銅にスズあるいは鉛を混ぜると熔融温度が低くなり、流動性がよくなるため、鑄造しやすくなる。鉛成分の比率が比較的に高いことは鉛が銅より手に入りやすかったためであると考えられる。

表2 中世大友府内町跡から出土した金属製品の化学組成

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Fe	測定番号
1	分銅	24.3	27.3	46.0	0.1	0.9	BP1185
2	鍵	54.5	2.2	30.9	0.1	12.3	BP1186
3	鍵	63.3	1.4	23.0	0.1	12.1	BP1187
4	分銅	39.5	32.1	17.4	2.3	8.8	BP1188
5	クサリ	80.0	0.1	4.7	0.2	15.0	BP1189

## 7. 結果

測定の結果として得られた鉛同位体比を表3に示し、図1～図4に図化した。図から判断すると1番の分銅は朝鮮半島の領域に位置し、2番の鍵と4番の分銅は中国の華南の領域に位置した。しかし、3番の鍵と5番のクサリは華南の領域から少し外れたところに重なって位置した。

この測定結果を理解するため、2005年に測定された府内町跡から出土した金属製品の測定結果と比較し、図5～図8に示した。図5からみると3番と5番の資料は設定された領域ではないところいくつかの金属製品と重なって位置した。しかし、図7では華南領域の境界線の上に位置しており、どこの材料を利用したか判断しにくい。そのため、この2つの資料に関してはより深い研究が必要である。

## 8. 考察

大分市に位置する中世大友府内町跡では中世の磁器、ガラス玉、鉄砲玉、金属製品、土製品などが出土しており、その中には朝鮮半島、中国、タイ、ヨーロッパとの貿易でもたらされた製品もたくさん含まれていた。この事実を示すように、2005年に測定された結果では金属製品に朝鮮半島、中国、未知の地域の材料が利用されたことがわかった。この未知の材料はどこからもたらされたかはわからないが、スペインの鉛鉱石が近い値を示していることが注目された。

今回測定した金属製品は5点であり、測定結果1点の分銅が朝鮮半島産材料で作られ、また2点の資料(2番と4番)が中国の華南産材料を利用したことがわかった。しかし、2点の資料(3番の鍵と5番のクサリ)は設定された領域から外れたところに重なって分布した。これはこの資料の材料が中国、朝鮮半島、日本産の材料を利用しなかったことと、同一な材料を利用した可能性や同じ資料の一部の可能性を意味する。

今回の3番、5番資料をこれまでに測定された府内町跡出土の金属製品と比較してみると、図6で示されるようにスペインの鉛鉱山および3種の前回資料とよく似た範囲の値であった。しかしながら、図8では前回の資料と今回の資料とではかなり大きく離れており、両者が同一材料であるとは思えない。鉛同位体比の判断では、図6と図8の両図で一致しなければ同一材料と判断できない故、今回の2点は前回の資料とはまた異なった未知の材料であると判断される。今回の2つの未知の材料がどこの産地であるかは今のところ判らないが、今後の発掘資料の積み重ねにより、また世界の鉛鉱山の値と比較することで明らかになってゆくであろう。

表3 中世大友府内町跡から出土した金属製品に関する鉛同位体比值

番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	分銅	20.772	16.032	41.399	0.7718	1.9931	BP1185
2	鍵	18.518	15.754	39.049	0.8507	2.1088	BP1186
3	鍵	18.297	15.741	38.784	0.8603	2.1197	BP1187
4	分銅	18.293	15.672	38.765	0.8567	2.1191	BP1188
5	クサリ	18.301	15.740	38.804	0.8601	2.1203	BP1189
誤差		± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

## 参考文献

- 1) 大分市教育委員会、2006「中世大友再発見フォーラムⅡ：府内のまち宗麟の栄華」大分市教育委員会文化財課
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と铸造」鶴山堂（東京）、p31～p33
- 3) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と铸造」鶴山堂（東京）、p35～p39
- 4) 大分県教育庁埋蔵文化財センター、2006「豊後府内4」埋蔵文化財調査報告書 第9集

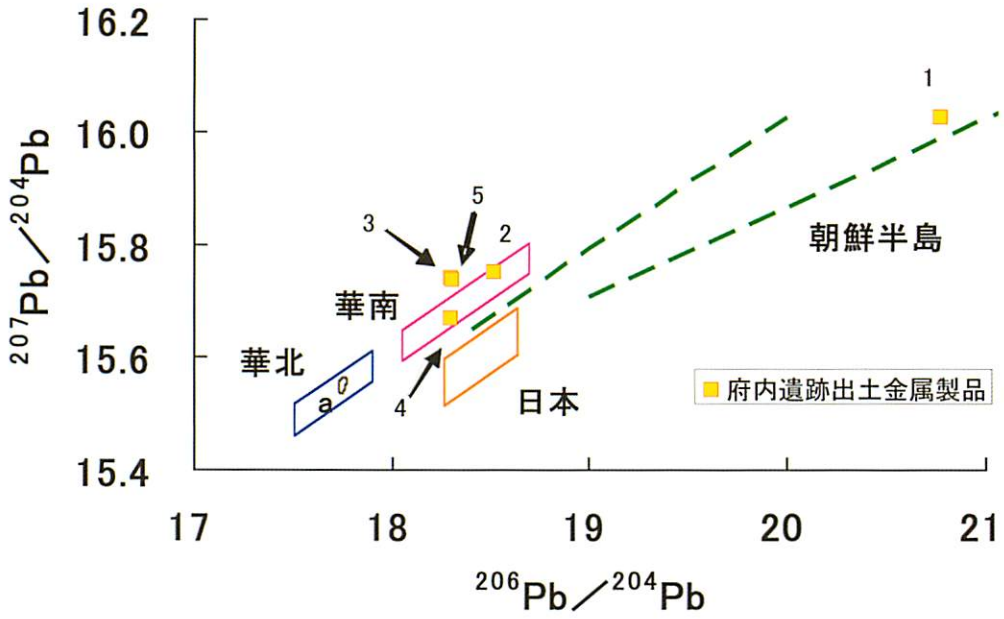


図1 中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比  
( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$  -  $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )

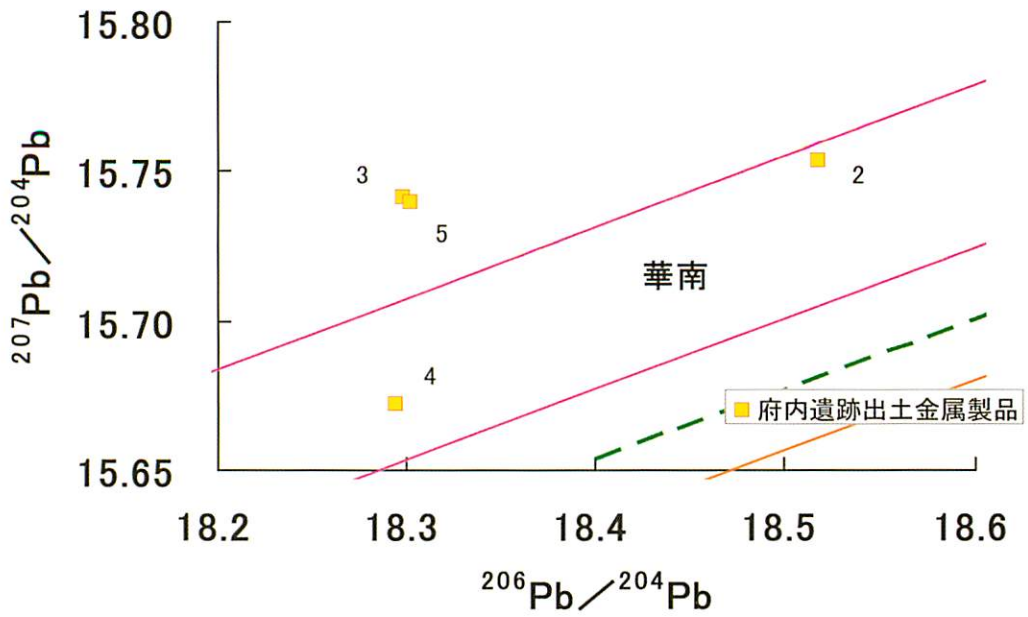


図2 図1の拡大図  
( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$  -  $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )

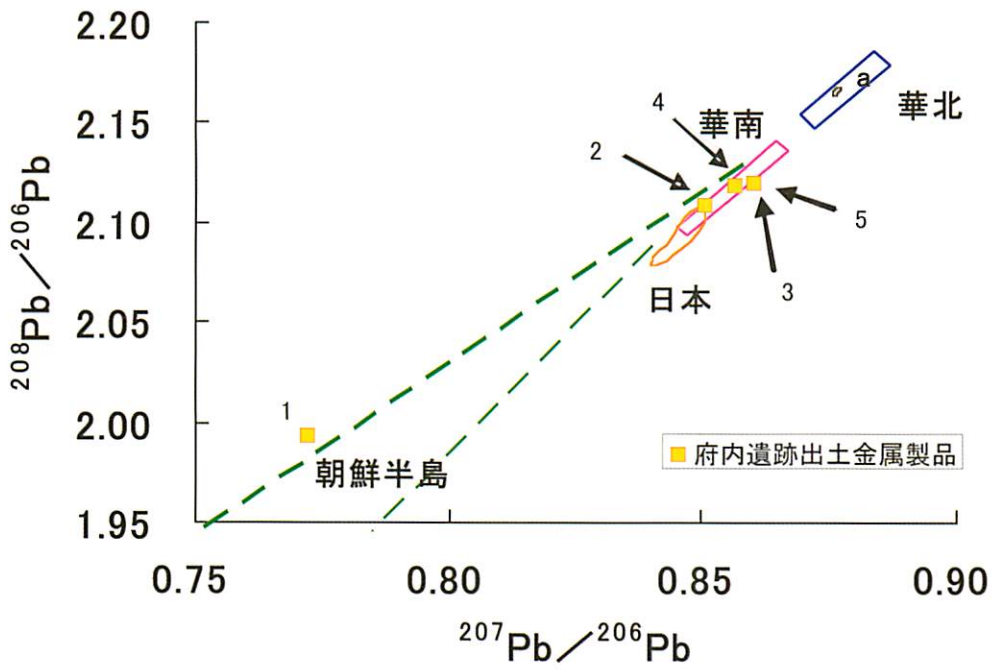


図3 中世大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比  
( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

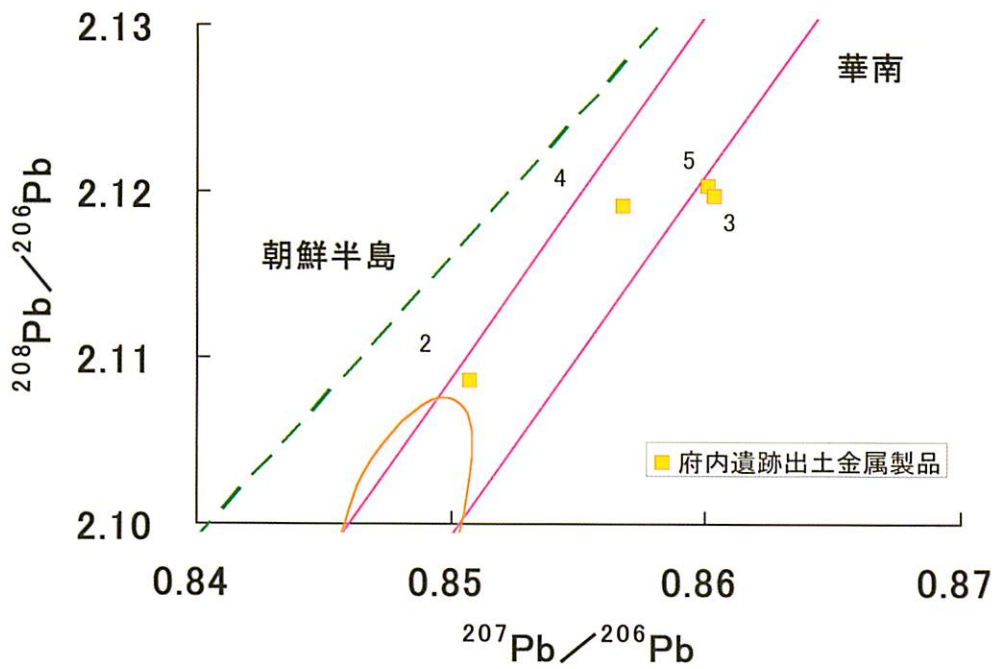


図4 図3の拡大図  
( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

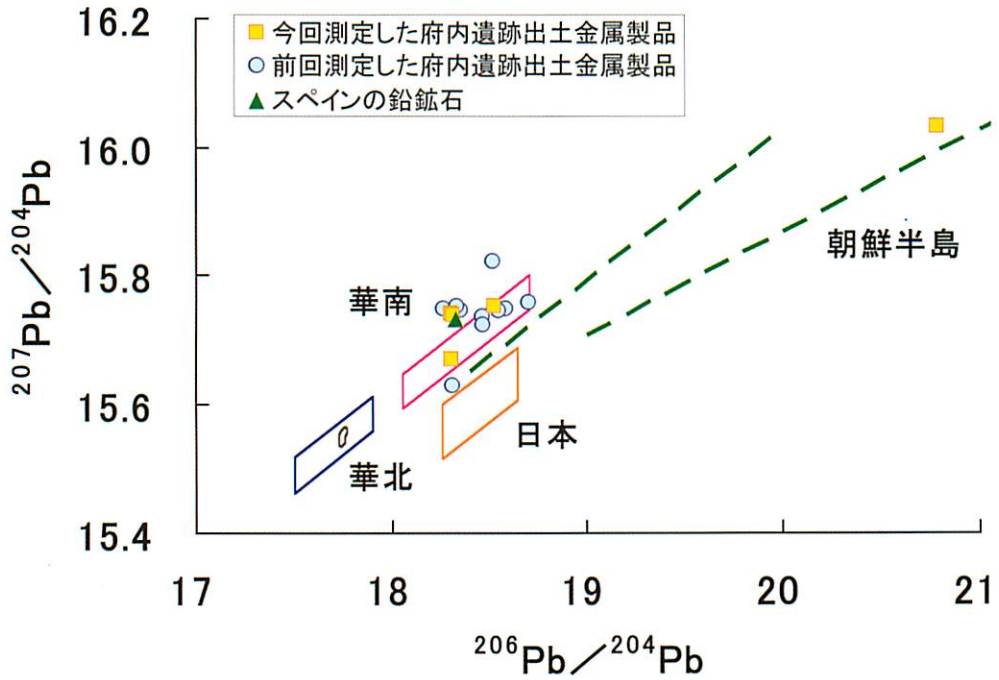


図5 今回の金属製品とこれまで測定された府内跡出土の金属製品の鉛同位体比  
( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$  -  $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )

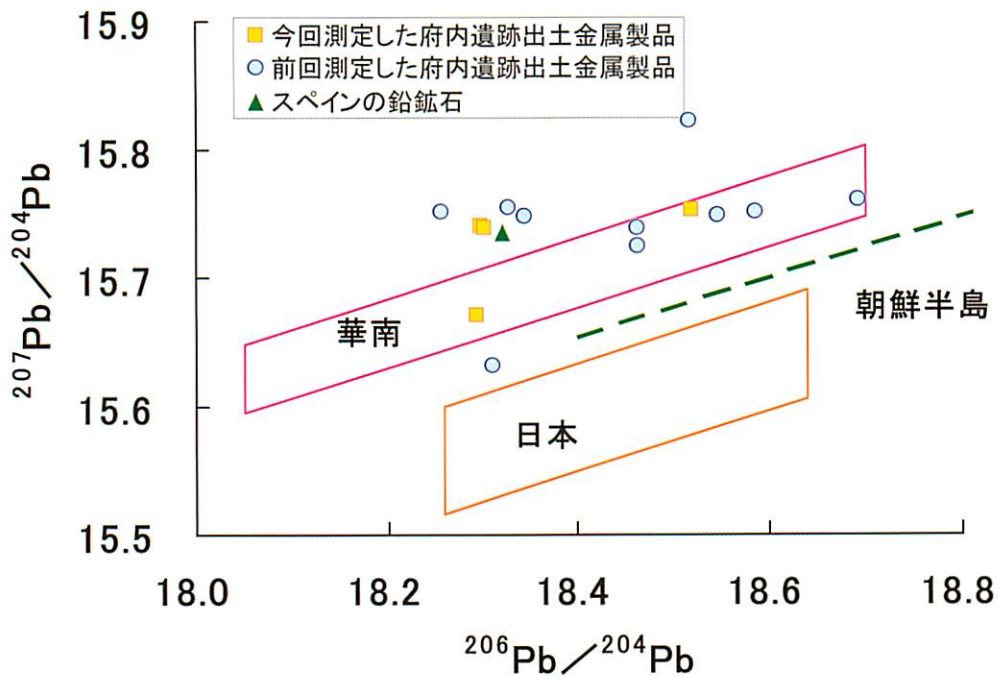


図6 図5の拡大図  
( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$  -  $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )

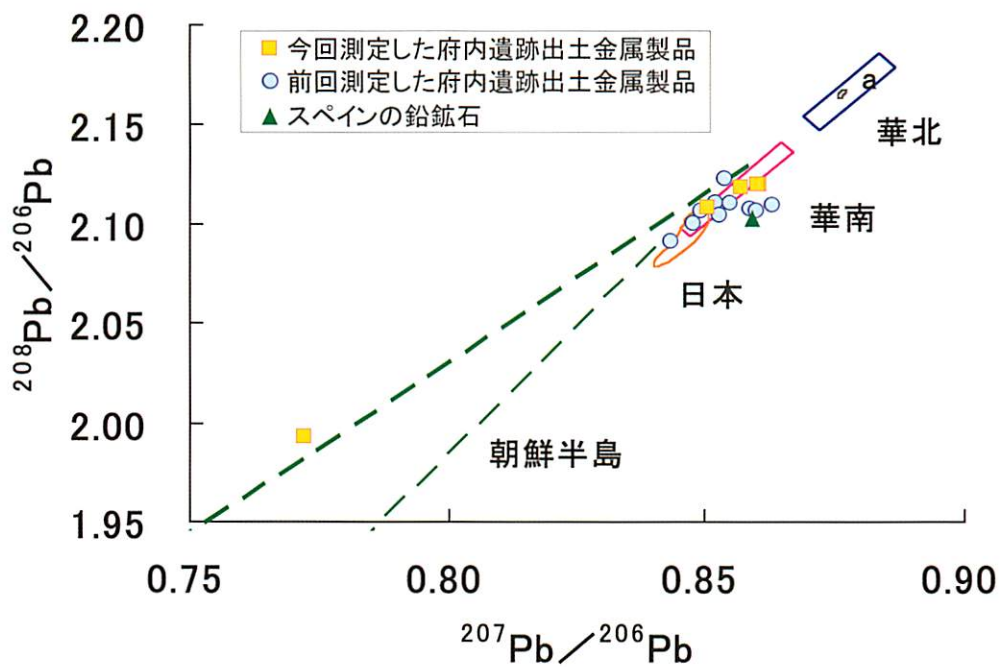


図7 今回の金属製品とこれまで測定された府内跡出土の金属製品の鉛同位体比  
( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

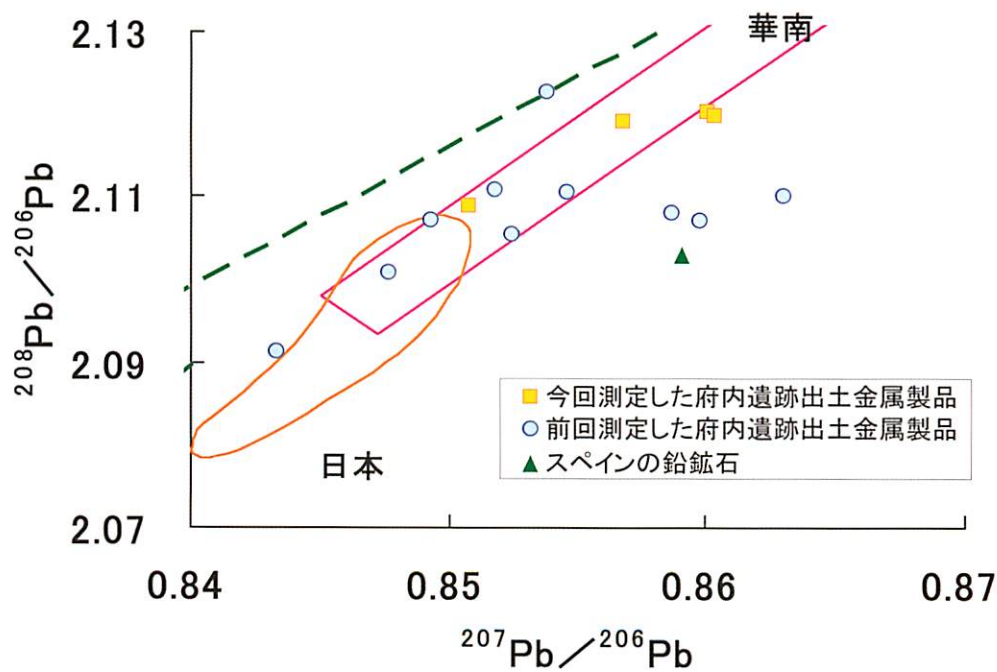


図8 図7の拡大図  
( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$  -  $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

付録 蛍光X線スペクトル

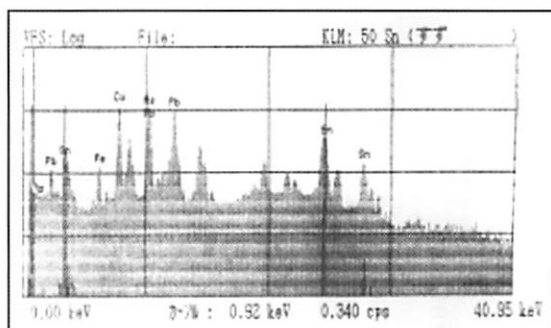
資料番号1 (大友5次 包含層2A5回目)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:02:39
電圧: 50kV
電流: 10 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 22%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	0.9	0.1	1.926
Cu 銅	24.3	0.1	67.716
As ヒ素	0.1	0.1	0.23
Sn スズ	27.3	0.2	31.385
Pb 鉛	46	0.2	74.644



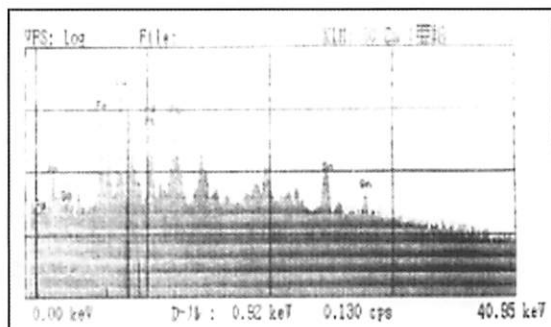
資料番号2 (大友7次 C地区 P229)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:34:41
電圧: 50kV
電流: 14 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	12.3	0.1	28.456
Cu 銅	54.5	0.1	112.09
As ヒ素	0.1	0.1	0.277
Sn スズ	2.2	0.1	2.373
Pb 鉛	30.9	0.1	31.845



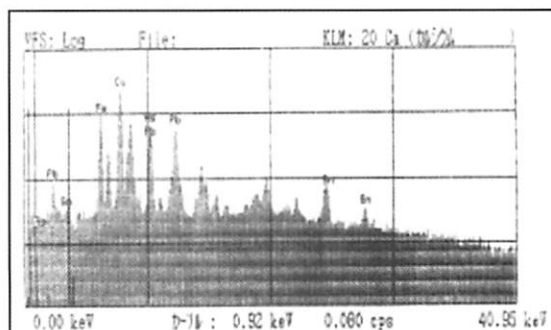
資料番号3 (大友7次 C地区 P256)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:16:13
電圧: 50kV
電流: 9 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 21%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	12.1	0.1	47.709
Cu 銅	54.5	0.1	200.989
As ヒ素	0.1	0.1	0.495
Sn スズ	1.4	0.1	2.549
Pb 鉛	23	0.1	35.103



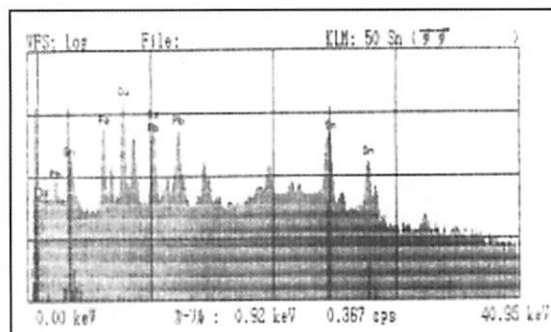
資料番号4 (大友10次 II区南 11-A)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 19:47:41
電圧: 50kV
電流: 10 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 22%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	8.8	0.1	21.946
Cu 銅	39.5	0.2	107.07
As ヒ素	2.3	0.1	9.91
Sn スズ	32.1	0.2	45.159
Pb 鉛	17.4	0.1	28.308



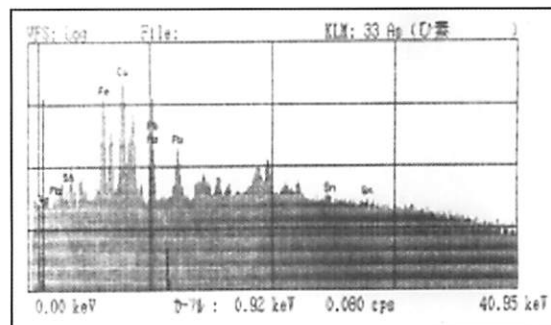
資料番号5 (大友10次 II区北 SK146)

測定条件

日付: 06.10.01
時刻: 20:03:00
電圧: 50kV
電流: 24 $\mu$ A
時間: 300秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500 定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ $\mu$ A)
Fe 鉄	15	0.1	27.055
Cu 銅	80	0.1	85.123
As ヒ素	0.2	0.1	0.21
Sn スズ	0.1	0.1	0.089
Pb 鉛	4.7	0.1	2.204





## 第6章 総括

### 第1節 調査の成果（第6-1図）

10次調査区 JR日豊・豊肥線の高架化事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査は、1999（平成11）年度に開始され2002（平成14）年度に現場での作業をほぼ終了した。発掘調査区は、東の大分川の河畔から大友氏館の南側を通り、西は遺跡の西端にあたる低湿地部までの約700mにわたり、中世都市「府内」を東西に横断する調査となった。本書はその6冊目の調査報告書である。10次調査区の位置を『府内古図』上でたどると、西はその西端から、東は南北に府内を貫く街路（第4南北街路）までにあたる。この発掘調査範囲内はいずれの『府内古図』でも「上町」と「中町」の西側にあたり、さらに「ダイウス堂」すなわちイエズス会府内教会の一部が検出されることが事前に想定された。

調査の結果、15世紀から16世紀末にいたるまで継続的に都市遺構が認められた。特筆される点を列挙すると以下ようになる。

東西道路 ①10次II区調査区（第3・4章）では第4南北街路から西に向って派生する東西道路が発見され、『府内古図』に描かれた「ダイウス堂」と「祐向寺」との間に描かれた西に抜ける道路を考古学的に確認し、『府内古図』の信憑性を高めた。この道路は15世紀後葉から末のころに建設され、1587（天正15）年の豊薩戦争後の復興時にいたるまで都合7回にわたって道路面を更新しながら存続したことが判明した。くわえて10次II区南調査区（第3章）では、16世紀第4四半期段階の溝SD118～116が機能していた段階において、東西道路の南側にも幅5m程度の空閑地が存在し、そこが道路であった可能性が指摘されている。その指摘のとおりであればII区北調査区で検討したように、道路SF151の道路幅がもっとも狭くなって時期は、溝SD118～116が機能した時期と一致し、道路の本体が南側に移ったことになるので興味深い。<sup>註1</sup>

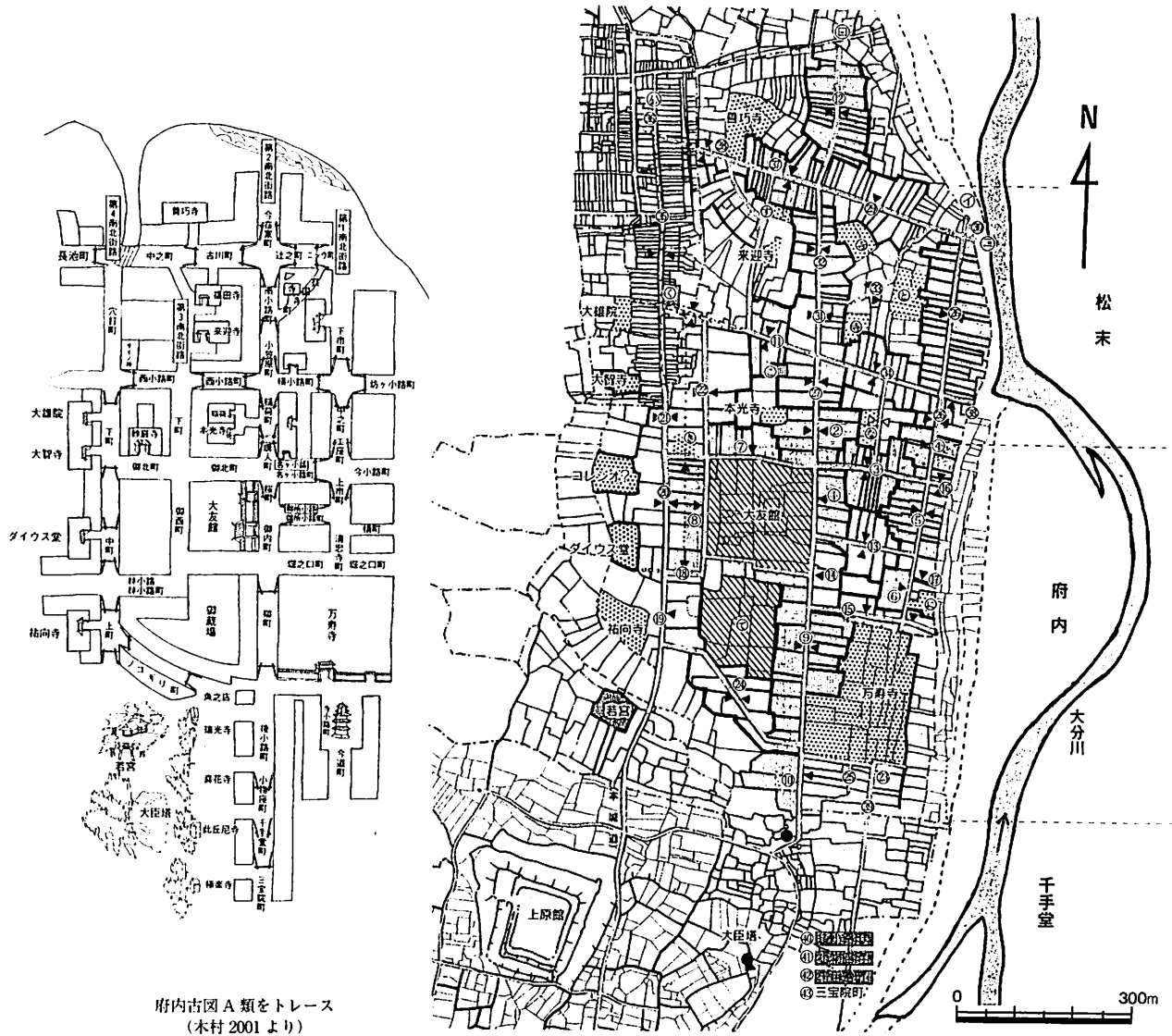
「中町」の遺構 ②「中町」に相当する10次II区北調査区東区において、15世紀後葉から末の道路SF151建設以来17世紀初頭の近世城下町への移転にいたるまで1世紀以上にわたって存続した宅地群の遺構が判明した。その宅地の景観を復元すると、第4南北街路に面して建物が建ち、その背後に井戸が掘られ、さらに敷地の奥に廃棄土坑が掘られるというものである。これは道路に入り口を設ける町人屋敷特有のものであることから、この付近は町人町であったと推定される。

東西道路に面する区画 ③東西道路SF151の北側奥では、道路建設当初から16世紀第2四半期までは道路に面した小区画が設定されたものと推測される（区画Aと区画B）。16世紀後半になると大区画に合併され、その中に墓地が作られる。一方道路南側には溝SD001やSD111で区画されているものの、10次I区調査区（第2章）では東西道路に北面した町屋の宅地群が16世紀後半には存在しているので、『府内古図』の描く「祐向寺」北側の屋敷地の描写が正確であることを裏付けている（第2-50図）。

墓地と「ダイウス堂」 ④墓地が作られた16世紀後半の大区画の位置を『府内古図』にあてると、A～C類<sup>註2</sup>いずれの古図をみても、東西道路北側に屋敷地が描かれている。ところがその区画の発掘調査結果（第4章）からみると、そこに屋敷地が存在した形跡はない。ことに16世紀後半においては墓地を含むひとつの大区画となっている。墓地を含むので、その大区画が武家屋敷である可能性は低く、そのような敷地内に墓地を持つ区画としては、北隣に描かれた「顕徳寺」あるいは「ダイウス堂」と注記された寺院以外に対応する施設がない。したがってその大区画はその寺院敷地内に作られた墓地であると推定するのが最も素直である。ところでその「顕徳寺」ないし「ダイウス堂」とは1553（天

註1 第3章ではSD118～116の時期を、16世紀後葉と控えめに表現しているが、近世1期の備前焼播鉢の出土や道路SF151の硬化面との対応関係からみて、第4章では16世紀第4四半期前半と積極的に限定したい。

註2 木村幾多郎「府内古図再考」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』IX、2001、大分市歴史資料館  
木村幾多郎「府内と府内古図」『南蛮都市・豊後府内』2001、大分市教育委員会・中世都市研究会



第6-1図 府内古図と地籍図による比定

文22)年に開設され、幾度かの改修・拡張をへて、1580(天正8)年に日本最初のコレジオを併設したイエズス会府内教会にほかならない<sup>註3)</sup>。発掘調査からみて、墓地は16世紀第4四半期の後半には終焉しており、1587(天正15)年の豊薩戦争とその後の伴天連追放令による教会退去によるものと考えられる。

⑤豊薩戦争後、道路と「中町」の屋敷地は再建されているが、墓地は作られなくなる。1602(慶長7)年の近世城下町への移転によって最終的に都市遺構はなくなり、耕地と化して近世を迎えている。このように第4南北街路に面した「中町」においても、1587(天正15)年の豊薩戦争後の一定の屋敷地の復興が推定できることは重要である。この「中町」付近は木村幾多郎氏の研究<sup>註4)</sup>によれば1587(天正15)年の豊薩戦争後、無住の地になったまま復興されなかったと推定された町のひとつである。その推定がかならずしも妥当ではないことを示している。

以上の5項目が第10次調査の成果の要約であるが、以下にイエズス会府内教会と墓地について、

島津侵攻後の復興

註3 五野井隆史「豊後府内の教会領域について」『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、東京大学史料編纂所

註4 木村幾多郎「豊後府内の都市建設」『大分・大友土器研究』21、1997、大分・大友土器研究会

木村幾多郎「豊後府内城下町移転と旧府内町」『大分・大友土器研究会論集』2001、大分・大友土器研究会

## 第2節 第10次調査区発見の墓地とイエズス会府内教会

以下は今回報告した10次II区北調査区（第4章）発見の墓地の性格を、調査の経緯をからめて検討したものである。

### 1. 第10次調査区の位置（第6-1図、第2-50図、第1-6図）

府内古図の  
表現

**調査区周辺の府内古図の表現** 第2-50図は『府内古図』のなかでも最も新しいC類を使用して、ダイウス堂と周辺の道路を示したものである。表現は木戸の有無を除いて最古の古図A類、B類も同じである。描かれた道路は府内町から西の郊外に抜けている。道路の南北には屋敷地の表現があり、北の「ダイウス堂」と南の「祐向寺」は直接道路に接していないように描かれているので、東西道路の両側にも屋敷地が存在した可能性がある。しかし道路の南北両側に描かれた屋敷地に町名が付いていないことに注目すると、その道路の両側はひとつの独立した町内を構成するほどの数の宅地が並んでいなかったことを示している。第1-6図は『府内古図』を明治時代の地籍図に対比して復元した戦国期の府内（『大分市史』案<sup>註5</sup>をもとにしたもの）である。調査区のなかに地籍の境界がどのように入るかがわかる。この場所は明治時代には水田となっており、その境界は水路あるいはあぜで区切られている。『大分市史』案では東西の境界線を道路、道路に接して北にダイウス堂を推定している<sup>註5</sup>。

調査前の仮説

**調査前の想定** 以上の歴史地理学的な研究成果から発掘調査前の段階では、第10次II区北調査区においては、次のような遺構が発見されると予想されていた。①II区調査区の東部では、第4南北街路に面する「上町」あるいは「中町」の遺構が、②その西に「上町」と「中町」の間を西にむかって郊外に抜ける東西方向の道路と、その両側に連なる屋敷地遺構の広がり、③さらにその屋敷地の北側からは『府内古図』に描かれていた「ダイウス堂」すなわちイエズス会府内教会の遺構が調査範囲内にかかる可能性があるとして指摘されていた。

しかし『府内古図』の細部表現が正しいとすると、「ダイウス堂」はこの東西道路に接していないことになり、その場合屋敷地が町人屋敷であれば調査範囲内からは町屋の遺構群、すなわち井戸・ごみ捨て穴・掘立柱建物等が発見されるはずであり、木村氏がかつて指摘したように<sup>註4</sup>武家屋敷地であれば溝等の区画施設や掘立柱建物など比較的散漫な遺構配置が検出されるはずであった。いっぽう『ダイウス堂』の敷地が東西道路に接するとした大分市史の復元案<sup>註5</sup>が正しいとすると、II区北調査区において「ダイウス堂」の南端の一部にあたることになるのであった。

道路の位置

**調査の経過** したがって以上の仮説を念頭におきながら、発掘調査ではどの位置にどのような遺構が広がるかを丁寧にみきわめることが課題となった。まず調査の初期段階で、17世紀後半以後の水田水路跡を検出し、地籍図との正確な対比が可能となった。その結果、戦国時代の東西に伸びる道路遺構が近世の水田化以後は水路となっていたことが判明し、その道路の位置については『府内古図』・『大分市史』の復元案ともに正確であることが立証された。ただし『府内古図』ではその道路は第4南北街路に直交して、直線的に西方に伸びるように表現されているが、実際の道路遺構は西に行くほど北に向きを変えて曲がる道路であった。そこから『府内古図』には、中世の絵図としては当然のことであるが、当時の地理観に基づく一定のデフォルメが存在することが明らかになった。

道路南側の  
屋敷地

つぎに10次調査I区およびII区南調査区において、東西道路に面した南側に廃棄土坑や井戸・掘立柱建物が分布し、屋敷地が一定の規模で存在することが明らかとなった。これは『府内古図』の表現の正しさを立証するものであった。

ところがII区北調査区において、東西道路の北側で墓地が出現したのは意外なことであった。

註5 『大分市史』中、付図「地籍図に残る戦国時代の府内」1987、大分市

道路南側の墓地 2001（平成13）年度の調査では1号墓ST130のみが発見されたため、なお宅地内に単独で存在する墓の可能性が考慮されていた。いっぽう1号墓からは木棺と人骨が出土してその埋葬姿勢が伸展葬であることと、内部に落ち込んだ京都系土師器の存在から16世紀後半の墓であることが指摘され、「ダイウス堂」推定地に近接することもあり、この埋葬はキリシタン墓ではないかという可能性が取り沙汰されていた。2002（平成14）年度の調査は以上のような指摘を受けて行われた。

キリシタン墓？

墓地の発見

10次II区北調査区の全面調査が始まると、すぐに1号墓ST130の周辺から大小さまざまな埋葬主体が発見され、最終的には1号墓をふくめて18基の墓が狭い範囲に群集して発見された。しかも一部の墓はかなり規則的に配置されていることがわかり、比較的短期間に埋葬された集団墓地であることが判明した。そのため宅地内に単独で存在する墓の可能性は排除された。

ではこの集団墓地はいかなる性格の墓地なのだろうか。

## 2. 墓地の実態

墓地について次のような事実が判明した（第4章第6節）。

第1期単独墓

変遷と年代 墓地は3時期に変遷する。第1期にあたる3号墓は墓地の西端にあり、早桶を利用した成人座葬墓であり、3枚の土師器皿の副葬が行われている。その土師器の年代から16世紀前半（第2四半期と推定）にさかのぼる。埋葬形態（成人唯一の早桶使用）と副葬形態（土師器副葬）、さらに埋葬位置も西にはなれ、その時点では区画Aの内部にあたる。したがって3号墓は単独の墓の可能性が高い。第2期はほとんど幼児埋葬に限られる8基の墓が、あまり規則性をもたずに1箇所に集まっている。いずれも人骨調査の結果7～8歳以下の小児・幼児・乳児が埋葬されていた。埋葬施設としては方形の木棺が利用されるものと、直葬された土坑墓があった。埋葬年代は副葬品が皆無なこともあり積極的に確定することは困難であるが、第3期の墓に切られていることと、掘形や内部の覆土内に混じった土師器から1560年代を中心にする時期の埋葬と推定される。第3期は頭位を北にする成人木棺墓4基が等間隔に規則的にならび、その北を溝SD131が区画する。さらに成人墓のまわりには幼児墓が追葬されていることが判明した。その時期は第2期の墓の埋葬が終わった後に墓地が新たに整備されたものと推定され、その継続年代は1570年代の1点から1587年以前と想定された。

第2期  
幼小児墓群

第3期  
成人墓群

伝統的葬制

宗教性 特定の宗教を想定させる遺物ないし資料は皆無である。木棺材の保存状態がよくないので、棺材に書かれた墨書などの文字は確認できない。死者が身に付けたメダイ、ロザリオ等のキリスト教遺物<sup>註6</sup>は副葬されていない。いっぽう六道銭などの仏教的要素も皆無である。伝統的な中世日本の民俗的習俗の強い土師器副葬も第1期に属する3号墓と第2期に幼児が埋葬された14号墓（1枚副葬）にのみ認められ、ほかの墓、特に成人墓ではまったく認められない。しかし伝統的に中世後期に普遍的になる横臥あるいは仰臥屈葬という埋葬姿勢は、第2期から第3期の幼児墓と成人墓において数多く認められる。当初注目された伸展葬は1号墓の成人埋葬と、幼児骨を伸展葬で木棺に葬った10号墓、墓坑形態から推定される2号墓と11号墓の4例にとどまった。

墓石なし

地上標識の有無 埋葬墓坑の掘形内埋土や棺内をうめる覆土、さらに周囲の同時期の遺構の中に墓の地上標識の残骸がないかと疑ったが、五輪塔・宝篋印塔などの石塔類や、キリシタン墓碑・石製十字架などの破片は存在せず、井戸等で使用された五輪塔の部材の再利用品や廃棄品の中で、この墓地に存在したものと疑える資料はなかった。特に木棺墓の多くは蓋が落下陥没しており、石材の一部が落ち込んで残っているのではないかと考えたが、そのような出土品は皆無であった。墓地の上部が近世に整地されているため断定的なことはいえないが、以上の状況から個々の墓上には石

註6 キリシタン遺物の定義は次の文献による。

今野春樹「キリシタン遺物の諸相」『キリシタン文化研究会会報』128、2006、キリシタン文化研究会

造の地上標識はなく、何らかの標識がかつてあったとしても、それは木製品であった可能性が高いと考えられる。

**墓地の位置** 墓地は1号墓から東にまとまって分布することが判明した。その結果地籍図と厳密に対応させると、第1期の3号墓のみが大分市史の復元した「ダイウス堂」の想定範囲内に入り、それ以外の墓はすぐ側だが隣りの地片に入ることが判明した。

### 3. 墓地の性格

以上の基本的な事実を基に、この墓地の性格を以下の論点から改めて考える。

単独墓

**都市内の集団墓地** 中世都市の内部に墓地を作れるのはいかなる人たちだろうか。どういう人が葬られるのか。中世大友府内町跡からこれまでに15～16世紀代の墓は数箇所発見されているが、そのほとんどが単独で発見される埋葬である。第7次調査ST748は16世紀第1四半期の横臥屈葬の成人木棺埋葬で、土師器副葬が行われていた。第7次調査ST135は16世紀第3四半期の早桶座葬の女性成人埋葬であった<sup>註7</sup>。いずれも単独墓あるいは異常死埋葬と考えられている。このほかに第10次I区調査区の15世後半の幼児埋葬墓ST009も、屋敷地のはずれに単独で存在している(第2章)。このように中世府内の都市内での墓のありかたをみると、単独で存在する墓はあくまでも「屋敷墓」や突発的な埋葬に限られ、そのため町人屋敷内や武家屋敷内に単独で存在すると思われる。屋敷地以外の都市内の空閑地には原則として墓地を設けないとみられる。

「新御成敗状」

このことは時期がずいぶん異なるが、府中の内部に墓を作ることを禁じた1242(仁治3)年の『新御成敗状』の記述を髣髴とさせる。この文書は一般に豊後府内に対して、ときの守護大友頼泰が發布した都市法として知られているが、豊後府内に發布されたものではないとする有力な意見もだされている<sup>註8</sup>。その一条に「一府中墓所事 右、一切不可有、若有違乱之所者、且改葬之由被仰主、且可召其屋地矣」とあり、府中に墓地を作ることを強く禁じている。山村亜紀氏はこの法令を豊後府内のみを対象としたものではなく、九州を中心とした中世国府を対象とした、より一般的な法制としている。『新御成敗状』が山村氏の説くとおりの豊後府内を直接対象にした法ではないにしても、京や鎌倉の都市法と共通するその内容から見て、中世都市法の典型を示すものと見て差し支えあるまい。このような府中に墓を禁じる条項の存在からみて、屋敷地内の単独墓や仏教寺院などの特定の囲い込まれた空間を例外として、道路敷きや都市内の空閑地に埋葬が行われることが少ないのは、戦国時代の都市に依然として、この禁止法令の法理が生きていたためと考えられる。

埋葬禁止

寺の墓地

たほう都市のなかの仏教寺院内には墓が設けられている。16世紀になるとそのなかに墓地が存在することは、中世以来の多くの都市に残る中世寺院の石塔群をみれば明らかである。豊後府内においても、石塔こそ失われているが、大友氏当主の菩提寺である大雄院や大智寺が第4南北街路に面して作られており、これらの寺院には当主とその関係者、および僧侶の埋葬が行われていたことが考えられる。同様に16世紀の豊後府内の各所に所在した寺院内には、集団墓地が設けられていたことは想像に難くないし、そういう宗教施設は先述の中世都市法の及ばないアジュールとして、都市内各所に存在していたと考えられる。したがって都市内の遺跡の中に集団墓地が発見される場合、宗教施設の内部に作られたものとするのが妥当である。

屋敷内から  
宗教施設に

このように中世都市内の墓は、一般的に言えば、集団墓地は宗教施設内に、単独墓は屋敷地内にもうけられたと考えられる。10次II区北調査区の墓地の場合、時期差を考慮すると第1期の3号墓は16世紀第2四半期に単独で存在した墓と考えられるのに対し、第2期の幼小児墓群と第3期の成人墓群は、当然宗教施設内に設けられたものと推定される。それではどのような宗教施設がこ

註7 田中裕介「中世大友府内町跡第7次調査区」『豊後府内』5(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告8)、2006

註8 山村亜紀「中世前期都市の空間構造と都市像」『人文地理』54-6 2002、人文地理学会

教会墓地 の第2～3期の集団墓地をその敷地内に設けたのであろうか。1560年代前後から1587年ごろが第2～3期墓地の推定継続年代である。くりかえしになるが先に述べたように1560年代から1580年代にこの場所に存在した宗教施設は『府内古図』の記載から見て「ダイウス堂」あるいは「顕徳寺」と記されたイエズス会府内教会以外に考えられないので、10次Ⅱ区北調査区の墓地のうち、第1期の3号墓をのぞく、第2期の幼児墓群と第3期の成人墓群は当時豊後府内のなかにつくられたキリスト教会の敷地内に設けられた墓地と考えられる。

高槻例 キリタン墓地調査例との類似と相違 次に10次Ⅱ区北調査区発見の墓地の各要素を、すでに判明しているキリタン墓地と比較し、その類似と相違を明確にしておきたい。比較の対象はキリタン墓である事が明確な次の2遺跡である。ひとつは大阪府高槻市高槻城キリタン墓地<sup>註9</sup>といまひとつは東京駅八重洲北口遺跡である<sup>註10</sup>。(第6-2図)

教会と墓地 高槻城キリタン墓地は、1998(平成10)年に調査されたキリタン墓地である。摂津高槻は1570(元亀元)年から85(天正13)年までキリタン大名高山右近の居城であり、85年に右近が播磨明石に転封された後は、豊臣秀吉の祐筆安威了佐が代官となった。彼もまた安威シモンとしてしられるキリタンであり、彼によって高槻のキリタン教界は保護されている<sup>註11</sup>。墓地は右近が高槻を領した1570(元亀元)年から、1587(天正15)年に発令された豊臣秀吉の伴天連追放令による宣教師の畿内退去とあい前後する教会閉鎖まで存続したものと考えられている。その墓地は右近時代の高槻城内にあり、隣接地には1574(天正2)年建立の教会があったと推定されている。したがってこの墓地は本来イエズス会高槻教会に併設された墓地であったといえる。

木棺墓群 木棺墓27基が発見された墓地の特徴は、①墓域を区画する溝および柵列が存在し、墓域を区画している。②各墓を東西に等間隔に列状に配置する。③墓坑の長軸を南北に揃えた木棺内に、北頭位優位に葬る。④成人墓と幼児・小児墓が混在する。⑤埋葬姿勢は伸展葬で、腕を曲げたり、うつぶせの例が多い。⑥成人埋葬木棺の蓋板に「二支十字」の墨書が1例ある。⑦27埋葬中2埋葬から木製のロザリオが出土した。

八重洲北口例 東京駅八重洲北口遺跡は2001(平成13)年に調査されたキリタン墓地である。八重洲北口遺跡は江戸城東部外堀の内側に位置し、10基の埋葬が発見された。江戸におけるキリタン教布教は教会側史料によると1599(慶長4)年に八丁堀または日本橋石町に、イエズス会に先駆けてフランシスコ会が教会を建て、その後1612(慶長17)年に同会の教会と修道院は、徳川家康による禁教令によって破却されている。八重洲北口遺跡のキリタン墓地の年代は1590～1605年の間と推定されており、場所・年代とも教会史料の記載とは一致しない。

木棺墓と土坑墓 10基の埋葬が発見された墓地の特徴は、①墓域を区画するL字形の溝2000号がある。②墓群は群集する土坑墓が古く、散在する木棺墓群が新しく成立した可能性が高いこと。③土坑墓群は列状に配置された1399,1349,1351号墓とその周辺埋葬からなる。④埋葬は東西方向に長軸をとり、頭位は一定しない。⑤成人墓と幼児・小児墓が混在する。⑥埋葬姿勢は伸展葬で、腕を曲げたものも多いが、曲げ方は一定しない。⑦成人埋葬の1380号木棺の側板に「ローマ十字」の墨書が1例ある。⑧10埋葬中1埋葬(小児墓1404号)から青銅製楕円形のメダイ1点と木製のロザリオ玉2点とガラス製ロザリオ玉49点が出土した。ほかに1966号墓からガラス製ロザリオ玉1点が出土している。

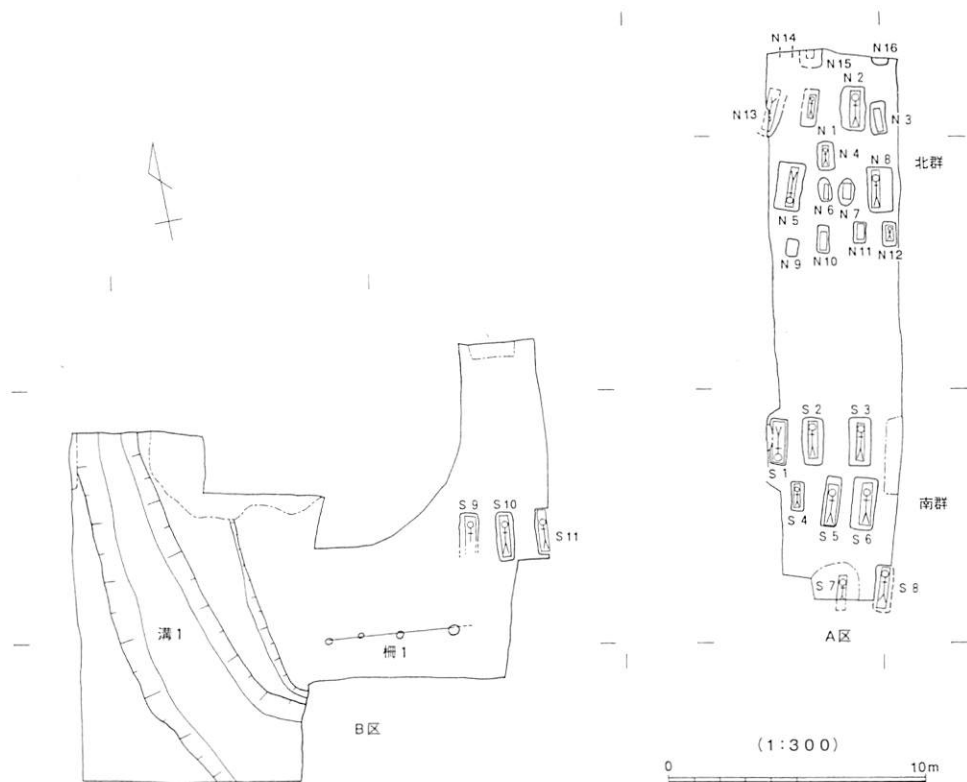
以上の2遺跡のキリタン墓地については今野春樹氏による適切な考察<sup>註12</sup>があり、それを参照しながら、中世大友府内町跡10次調査区の墓地と比較しておきたい(第6-3図)。

註9 高橋公一編『高槻城キリタン墓地』(高槻市文化財調査報告22)2001、高槻市教育委員会

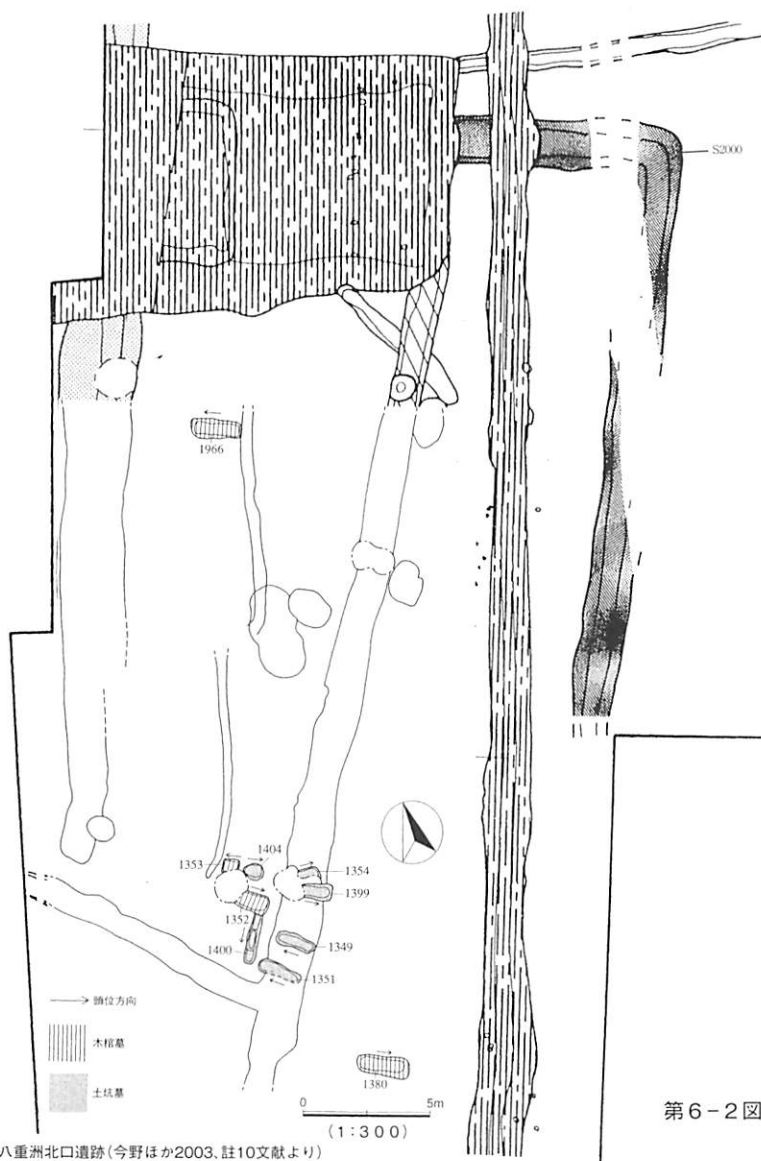
註10 今野春樹ほか『東京駅八重洲北口遺跡』2003、(株)森トラスト・千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会

註11 五野井隆史『日本キリタン教史』P142,1990、吉川弘文館

註12 今野春樹「キリタンの葬制」『キリタン文化研究会会報』123、2004、キリタン文化研究会



高槻城キリシタン墓地  
 (『高槻城キリシタン墓地』2001より)



第6-2図 キリシタン墓地

東京駅八重洲北口遺跡(今野ほか2003, 註10文献より)

墓域の区画

まず第1の類似点としては墓域の区画があげられる。高槻城キリシタン墓地では柵1と溝1が同時代の区画施設と推定され、それは教会と墓地を区画する位置にある。東京駅八重洲北口遺跡では墓地の北にし字状の溝S2000が存在し、その溝を延長するとキリシタン墓がすべてをその内部に収めることになる。このようにキリシタン墓地は墓域を画す溝ないし柵列によって墓地と外界を区別している。

溝ないし柵列

府内町跡10次の第2～3期の墓地は、道路SF151の北側の溝SD165・SD270・SD250によって道路と隔てられた大区画内に位置し、第3期の墓群が整備された16世第4四半期前半には、大区画の内部の墓域が溝SD131によってさらに区画されている。

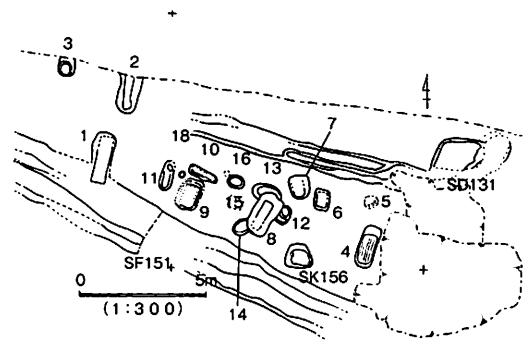
等間隔列状

第2の類似点は墓の配置である。高槻城キリシタン墓地では長軸を南北に合わせた木棺が、ほぼ等間隔に数列にわたって並んでいた。東京駅八重洲北口遺跡でも東西に長軸を持って列状に配置された1399,1349,1351号墓が存在し、その周辺に幼児埋葬と小児埋葬がおこなわれている。一部とはいえ高槻例と似た配置がおこなわれていると考えられる。府内町跡10次では第3期の墓群がこのような等間隔列状の配置をとる。すなわち1号墓、9号墓、8号墓、4号墓の4基がやや東に傾く南北長軸をとって、等間隔に並んでいる。その列の北には1号墓の延長上に2号墓が作られている。さらに9号墓と8号墓の周囲には幼児墓が追葬されている。このようにみると頭位方向には共通性がないが、成人墓については同一方向に揃えて等間隔に配列するのが、キリシタン墓地の特徴であるといえる。しかし幼小児墓の配置については必ずしも共通ではない。成人墓の周囲に並行あるいは直交して追葬し、特定の成人墓との関係が明確な府内町跡10次例に対して、高槻城キリシタン墓地では幼児墓を等間隔に成人墓と同じように配置しているのも、特定の成人墓との関係は不明確である。八重洲北口遺跡は列状に配置された1399,1349,1351号墓の西側に小児埋葬の1404号墓や、1351あるいは1349号墓に直交する成人男性墓が存在する。これらの墓と列状配置をとる3基の墓との関係はそれほど明確ではないので、八重洲北口例は府内町跡10次例と高槻例の中間的様相と考えられる。

木棺墓  
伸展葬

第3の類似点は墓坑および木棺の有無である。高槻と八重洲北口の2遺跡では木棺が長方形であるため墓坑の平面形も隅丸の長方形となるものが多数を占めるという共通性がある。土坑墓も同じで、これは埋葬が伸展葬で行われることに起因する。埋葬の方法には木棺墓のみの高槻例と、木棺墓と土坑墓の両者がある八重洲北口例がある。成人と幼児あるいは小児用との間で木棺には大きさに区別がある点は共通する。埋葬姿勢が基本的に伸展葬である点はキリシタン墓地の重要な特徴である。府内町跡10次例との共通性は木棺の使用と土坑墓の存在である。第2期の5・6・7号墓と15号墓は方形の木棺が使用された可能性が高いが、13・16・17号墓は土坑に直葬された可能性が高い。第3期になると成人墓幼児墓を問わず、すべて木棺にに入れて埋葬されている。成人墓と幼児墓に使用された木棺には大きさに区別がある点も共通性と言ってよい。

次に相違点の第1は埋葬姿勢と木棺の形態である。この点については上記2遺跡との重大な相違点が存在する。伸展葬とその姿勢に対応した長方形木棺の使用がキリシタン墓の最も著しい特徴といえるが、府内町跡10次例では、伸展葬・長方形木棺の使用は1号墓の成人埋葬と、幼児骨を伸展葬で長方形木棺に葬った10号墓、墓坑形態から推定される2号墓、幼児伸展葬の土坑墓と推定される11号墓の4基のみが、キリシタン墓の特徴と共通するのみである。のこる14基の埋



第6-3図 中世大友府内町跡10次の墓地



屈葬と座葬 葬姿勢は、成人墓においては仰臥屈葬に限られ、幼児墓は横臥屈葬と座葬である。さらに複雑な様相を呈するのは9号墓の状況である。仰臥屈葬の成人女性埋葬が行われた9号墓の北と西に密接な位置関係をもって、伸展葬の幼児埋葬である10号墓と11号墓が追葬されているのである。さらに

方形木棺 使用された木棺もかなり様相をことにする。成人埋葬の8号墓と9号墓は屈葬を前提とした長さの短い方形木棺であり、4号墓では伸展葬が不可能な唐櫃を木棺に使用している。幼児墓でも6・7・12号墓は短い方形木棺であった。

第2の相違点は、キリスト教を示す表徴やキリスト教遺物の有無である。高槻例と八重洲北口例ではともに、木棺に墨書による十字架表現があり、埋葬内に被葬者の持ち物であるロザリオやメダイが副葬されていた。この点はおのおのの墓地をキリシタン墓地と断定する決定的な証拠となっていた。これに対して府内町跡10次例においては、墨書の有無は木棺の保存状態の悪さから検討できないので別にして、副葬品においてキリスト教遺物と断定できるものは皆無であった。わずかに

ガラス小玉 幼児埋葬と推定されている11号墓から、小型のガラス小玉が1点出土している。ガラス小玉は仏教の数珠にも使われるのでキリシタン遺物とはいえないが、八重洲北口遺跡1966号墓からよく似たガラス小玉が1点出土している点に、わずかに共通性を見出すことができる。とはいえ上記2例のキリシタン墓地と同じように六道銭などは存在せず、屈葬という宗教性の希薄な埋葬習俗の有無が大きな違いである。

以上の比較を通していえることは、中世大友府内町跡10次II区北調査区発見の墓地のうち、第2期と第3期の墓地は、その区画と位置から教会の敷地内に作られた墓地であり、特に第3期の墓地はキリシタン墓地特有の配置をとり、教会付属墓地としての外観を明確にもっていたものと推定される。そういう意味でこの墓地はイエズス会府内教会の内部に設けられた付属墓地であると考えられる。しかし第2期の幼児墓群や第3期の屈葬墓に葬られた人々が、キリシタンであったとは必ずしもいえないことも明白である。つまり教会墓地に葬られた人々は必ずしもキリスト教徒ではないのである。

中国人墓、朝鮮人墓、琉球人墓の可能性 つぎに宗教的な観点ではなく、民族的な埋葬習俗との比較を行っておきたい。というのも整理の過程で、伸展葬・長方形木棺墓がキリシタン墓の特徴ではないかと考えていたとき、明代の中国人墓や李氏朝鮮時代の朝鮮人墓および日本のごく一部では伸展葬・長方形木棺墓を使用しているため、中世大友府内町跡10次調査区発見の墓地もその観点から検討するべきではないかという意見<sup>註13</sup>に接した。さらに最近琉球の中世墓の中に唐櫃を埋葬容器とする習慣が存在することが知られるようになり<sup>註14</sup>、府内町跡10次の4号墓の埋葬施設に唐櫃が用いられるのも単なる転用ではないのではないかという疑いがあるからである。

明代の中国人墓については、16世紀に遡る例は墓石もふくめて日本国内における調査例はない。しかし16世紀中葉以後、明の海禁政策の間隙をぬって密貿易に従事する華南出身の中国人が、日本国内に多数来住し、かなりの数の中国人が日本国内各地に定着した。16世紀後半には各都市に唐人町を作って集住したことはよく知られている。戦国時代の豊後府内にも「唐人町」があり、数代にわたって住み着いた中国人も知られている。その多くが福建省出身者で、かの地の墓はいわゆる亀甲墓であって墓碑を前面に立てる型式である。この墓制は中近世琉球の墓制に影響を与えたことが知られているが、日本国内においてはその影響はあまり知られていない。しかし長崎市周辺の近世中国人墓群<sup>註15</sup>や、より古い17世紀初頭の例が九州においていくつか知られている。熊本県玉

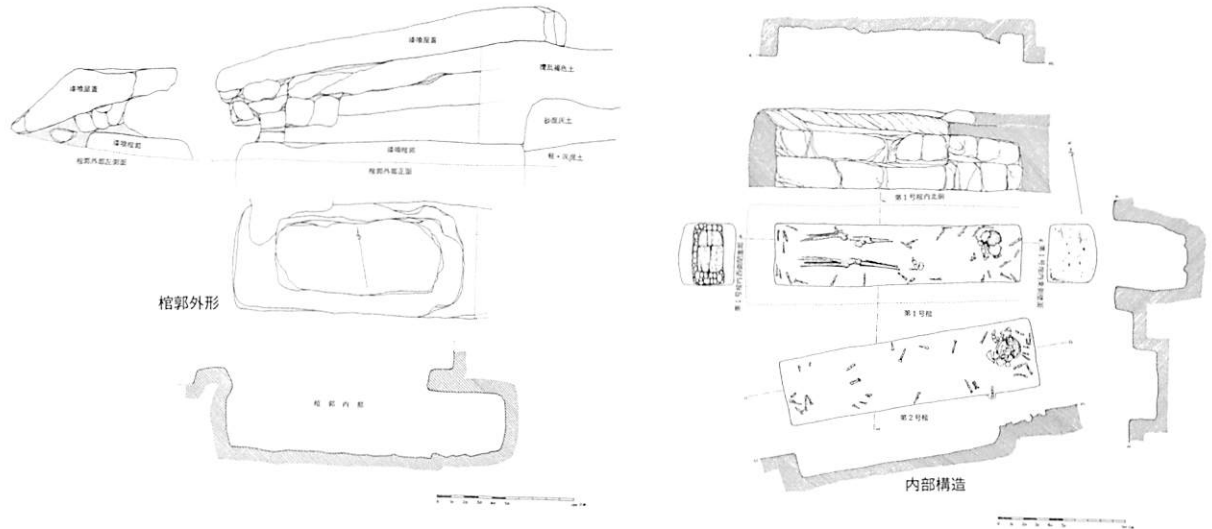
註13 原田昭一氏の意見である。日本国内では、16世紀代の長方形伸展葬が、北関東を中心に分布するが西日本ではきわめて少ない。

註14 安里進『琉球の王権とグスク』（山川日本史リブレット42）2006、山川出版社

註15 坂井隆『長崎悟真寺の唐人墓地』『九州考古学』76.2001、九州考古学会

竹内光美・城田征義『長崎墓所一覽 悟真寺国際墓地篇』1990、長崎文献社

名市に江戸時代初期の中国人墓3例が残っている。1619（元和5）年銘の考濱沂郭公墓と1621（元和7）銘の林均吾墓は全面に墓碑と石積みの前庭部をもうけ、背後に小墳丘をもつと推定される。振倉謝公墳 両墓の被葬者はいずれも福建省漳州周辺の出身で、その地の亀甲墓の系譜を引くものである。今ひ



第6-4図 振倉謝公墳（田添夏喜「本堂山遺跡」1985より）

とつ振倉謝公墳は埋葬年代を記していないが「大明 振倉謝公墳」という墓碑銘と後述する墳墓の内容から先の2基の中国人墓と相前後する時期のものと考えられている<sup>註16</sup>。この墳墓は1976（昭和51）年に調査された（第6-4図）。すでに墳丘以外の施設は消失し、前面に建てられていた墓碑もすでに移動していたが、伸展葬の男性一体を埋葬した長方形木棺（長さ190cm、幅40cm、深さ25cm）を漆喰で覆い、さらにその上に切妻形の屋根形に造形した巨大な漆喰の塊を蓋としてのせた1号墓と、そのすぐそばに同じく伸展葬の成人を長方形木棺（長さ200cm、幅38cm、深さ20cm）に入れて葬った2号墓からなり、この2棺はひとつの墳丘に葬られた夫婦ではないかと考えられている。木棺はともに釘を使用したもので、1号墓では木棺の一部に鉄板が装着されていた。1号墓は盗掘を受けているのではっきりしないが、副葬品とみられる指輪形の銅環1点と鳥骨4点が出土し、2号墓の副葬品は皆無であった。

今のところ戦国時代の中国人墓に最も近い墓として、キリシタン墓地と比較すると、伸展葬・長方形木棺の使用という点では共通しているが、夫婦を1単位に併葬するという配置はキリシタン墓地には認められない。また漆喰・漆喰蓋で覆うという点は大きく相違する。この配置のちがいを重視すると、府内町跡10次の墓地に中国人墓が存在するならば、等間隔列状配置にはならないと考えられる。もちろん単身者の場合には、キリシタン墓地のなかには区別が付かなくなるので、中国人が葬られていないともいいがたい。しかしキリシタンになった中国人単身者の存在も十分考えられるので、かりにこの墓地に中国人が葬られていたとしても、そのこととキリスト教会墓地であることとは矛盾しないと考えられる。

つぎに李氏朝鮮時代の墓について。それが伸展葬墓であることはわかっているが、16世紀の朝鮮王朝は明にならって海禁政策をとっており、中国人に比べると来住した朝鮮人は非常に少なく、1590年代の豊臣政権による朝鮮侵略によって日本に連行されてからはじめて増加する。彼らの中にはキリシタンになったものも多いが、韓民族としてのアイデンティティを失った形で日本で生活したため、朝鮮人墓としての民族墓制を伝える墓は今のところみつからない。府内町跡10次

註16 田添夏喜「本堂山遺跡」『滑石小路箱式石棺 本堂山遺跡』（玉名市文化財調査報告6）1985、玉名市教育委員会

の墓地は1590年代以前であることが確実なので、伸展葬・長方形木棺墓の中に朝鮮半島の墓制の影響を考えることは今のところないといえる。

琉球人墓

琉球中世墓について。14～16世紀の琉球王国時代の沖縄島では、王墓ないし首長墓に唐櫃形の厨子が埋葬に使われている<sup>註17</sup>。琉球王尚氏の初期王墓である浦添ようどれ<sup>註18</sup>から、1273年に造営されたと推定されている英祖王代の漆塗板厨子の金具が発見され、その板厨子は屋根蓋付唐櫃形と推定されている。また今帰仁村の百按司墓には1500年の銘のある屋根蓋付十脚唐櫃形板厨子が存在する。唐櫃は本来日本で発達した家具で、側面に脚がつき平蓋付の6脚を基本とする箱である。その唐櫃が13世紀の琉球に伝わり、漆塗板厨子として合葬用の棺として利用され、14～15世紀には百按司墓のような屋根蓋付十脚唐櫃形板厨子という琉球独自の形態を生み出している。さらに王族の墓では板厨子は15世紀前半に石製厨子にかわって一棺単体埋葬になる。

唐櫃形板厨子

このように唐櫃を埋葬に使う習慣が沖縄で発達するが、①屋根蓋付十脚唐櫃形という琉球独自の形態を生み出すこと。②16世紀にはその形態を維持しながら石厨子に置き換わること、③なによりこの墓形式は琉球王家や有力な豪族に用いられており、庶民墓は17世紀には厨子甕が用いられる。④そしてもっとも大きな違いは沖縄の厨子は洗骨した骨を収めるもので、地下に埋める木棺として用いることはないことである。したがって唐櫃が埋葬施設として使用された府内町跡10次調査の4号墓が琉球人墓である可能性は低いと考えられ、別の何らかの理由で木棺に利用されたと考えるべきであろう。

#### 4. まとめ

以上の報告と検討の内容をまとめておく。

教会付属墓地

①中世大友府内町跡10次II区北調査区で発見された墓地のうち第2期と第3期に編年された17基からなる墓地は、1553(天文22)年から1587(天正15)年に存在したイエズス会府内教会の敷地内に設けられた墓地と考えられる。

等間隔列状配置

②墓地は7～8歳以下の幼児と小児ばかりが葬られた8基の墓からなる第2期から、等間隔列状に配列された成人墓を中心に幼児墓を追葬した第3期の墓地に推移し、後者の配置はキリシタン墓地の特徴を有している。第2期の墓は16世紀第3四半期に属し1560年代を中心にする時期に埋葬された。第3期は第4四半期前半、1570年代のある時点から1587(天正15)年までにつくられたものと推定される。

伸展葬と屈葬

③伸展葬・長方形木棺というキリシタン墓に共通する埋葬様式を持つ墓は多くても4基に過ぎず、ほかの墓は屈葬あるいは座葬で丈の短い方形木棺に葬られるという中世日本の伝統的埋葬様式をもつ。そのなかの1基の4号墓は唐櫃を木棺に使用する。

④16世紀の中国人あるいは朝鮮人・琉球人の民族的墓制の可能性は少なく、後述するように1570年代以後豊後府内に教会関係者以外の西欧人が居住した可能性も少ないので、墓地のほとんどは基本的に日本人が埋葬されたものと推定される。

⑤、キリスト教会の墓地であっても、キリシタンのみが葬られたわけではない。伸展葬・長方形木棺に埋葬された被葬者はキリシタンであった可能性は高いが、屈葬・方形木棺といった伝統的埋

註17 瀬戸哲也・知念隆博・新垣力「沖縄県」(狭川真一編)『中世墓資料集成—九州沖縄編(2)』2004、中世墓資料集成研究会

註18 註14安里文献

葬式に葬られた人々がキリスト教徒であったとはいえない。たとえば教会に身をよせて扶養されながらも、まだ洗礼を受けていない人々や、教会関係者によって埋葬された身寄りのない人々などが考えられる<sup>註19</sup>。

### 第3節 イエズス会府内教会の歴史から

この節では、イエズス会府内教会の歴史をひもときながら、中世大友府内町跡10次Ⅱ区北調査区発見の墓地の変遷を、教会史料から再構成される府内教会の歴史と比較検討しておきたい<sup>註20</sup>。

#### 1. ポルトガル人の来住とキリスト教の伝来

1545年  
府内来航

豊後府内にはじめてポルトガル人が来たのは、1545（天文14）年頃、ジョルジュ・デ・ファリアら数名が中国船で来日した<sup>註21</sup>のを嚆矢として、1547（天文16）年にはポルトガルのナウ船が府内に来航し、ディエゴ・デ・アラゴン等はそのまふ府内に5年滞在している<sup>註22</sup>。その後1551（天文20）年9月にポルトガル船が府内に来航し、その府内到着を聞いて当時日本布教中であったフランシスコ・ザビエルが豊後府内を訪れている。1552（天文21）年には再びガゴ船長のナウ船が来航し、バルタザール・ガゴ神父をはじめとするイエズス会の第2次伝道団が来日し、彼らは当時布教長のトルレスがいた山口にすぐに合流した。

1551年  
ザビエル

#### 2. 府内教会の始まりと育児院

1553年

翌1553（天文22）年2月10日、ガゴ司祭がイルマンのフェルナンデスとアルカソバをともなって山口から府内に帰還した。翌日大友義鎮（のちの宗麟）を訪問したガゴ司祭は、義鎮から自領内での宣教師保護と布教許可状を与えられた。それに伴い土地寄進状が与えられ、教会・宿舎・菜園および望むものすべてを作る事のできる地所があたえられた<sup>註23</sup>。「地所」は原語でCANPOすなわち野原の意味で、人がすんでいない土地をあらわす。これは第4南北街路に面した「中町」の背後西側にひろがる広大な空き地がイエズス会に与えられたことをしめしている。そこに教会と修院カーサが造られると、同年7月21日に大きな十字架1基が立てられた。その間に地所内にはキリスト教徒たちを埋葬する墓地が定められ、たいへん美しい墓石1基がたてられたとある。この墓石というのは、個々の墓に立てられた標識ではなく、墓地全体のシンボルとして作られたものと考えられる。

「カンボ」

教会で十字架

1555年

その後1555（弘治元）年秋ルイス・アルメイダが育児院を作り、キリスト教徒の乳母数名と牝牛2頭が準備され、当時豊後府内の孤児の収容と養育にあたる一軒の家が用意された。この家と牛を飼養する施設は教会の近接地に設けられたと考えられている。

アルメイダ  
育児院

註19 府内教会が存続した時代の豊後府内の信徒には病人や下層階級が多く、独自の屋敷を持つような有力者は自身の家の墓地に埋葬されるのが通常で、教会内の墓地に埋葬される人々は基本的に、既存の地縁血縁関係からはなれた人々であったと推定される。五野井「豊後府内の教会領域について」（註20文献）

註20 その際、この墓地を教会の墓地として解釈した五野井隆史氏の研究を中心に検討することを明記しておきたい。

五野井隆史「日本キリシタン史の研究」2002、吉川弘文館

五野井隆史「豊後府内の教会領域について」『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、東京大学史料編纂所

註21 中島楽章「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」『史淵』142、2005、九州大学大学院人文科学研究院

註22 岡本良知「十六世紀日欧交通史の研究」1936

註23 1554年5月付け、ゴア発ヌーネス・バレットのロヨラ宛書簡、『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 訳文編之二（上）』、P45～46、1998、東京大学史料編纂所

## 3. 教会の拡張

1556年 1556（弘治2）年戦乱の山口を退去した布教長トルレスらが府内に避難し、以来1562（永禄5）年6月にトルレスが肥前横瀬浦に移るまで、豊後府内はイエズス会の日本布教の本拠地となる。同年7～11月にはイエズス会の第3次伝道団を率いて来日したイエズス会インド管区副管区長ヌーネス・バレットが府内に滞在し、その間に1553（天文22）年に寄進された地所の隣接地を義鎮の承諾をえて購入し、土地をならし義鎮から贈与された家数軒を解体して、その資材で200人を収容できる教会を新築した。同1556（弘治2）年11月1日にはその教会の落成式が行われた。いご1553年（天文22）に入手した地所を「下の地所」、新たに購入した地所を「上の地所」と称し、後者は樹木や竹に取り囲まれていたとつたえる。これはその場所が都市の外縁にあったことを意味するから、「下の地所」が中町西側の屋敷地背後の土地にあるとすると、「上の地所」はそのさらに西隣の都市のはずれの樹木や竹が生える低地近くまで続いていたと考えられる。この1556（弘治2）年の教会敷地の拡大によって、イエズス会府内教会の敷地の基本が完成したと考えられる。

教会新築  
「上の地所」  
「下の地所」

## 4. 病院と墓地

1557年 1557（弘治3）年には「下の地所」に病院が作られる。その際「下の地所」は病院と墓地に区切られ、病院はハンセン病患者用とほかの諸々の病気に用い分けられた。さらに同じ敷地内に「貧者の家」を作っている。さらに1559（永禄2）年には「下の地所」で大掛かりな改造が続き、病院は新築されて7月1日に完工し、職員の住宅が建築され、貧者の家を慈悲院に改装している。この年7月には慈悲の組ミゼルコルジアがトルレスの指導のもと設立され、その会員12名の家族は病院の周囲に居住して、貧者や病院の世話をしている。この1559（永禄2）年においてほぼ教会施設の造築は完了した。

1557年  
病院と墓地

1559年

墓地については注目すべき書簡が五野井氏によって紹介されている。それは1561（永禄4）年10月8日付け、ジョアン・フェルナンデスの書簡である<sup>註24</sup>。「キリスト教徒達の葬儀は、（中略）慣例となっている（教会での）諸儀式を終えた後、最前に掲げた十字架をもって出発し、次に遺体がつぎきます。（中略）キリスト教徒全員が、市外の特定の場所にある墓穴に赴いて、そこに埋葬します。ここ豊後の府内には平戸及び山口のキリスト教徒が所有しているような墓地を私達はもっていないからです。」とある。当時「下の地所」には一般のキリシタンを葬る墓地はなく、彼らは府内郊外の埋葬地に運ばれていたのである。五野井氏は、そこから「下の地所」にあった墓地に埋葬されたのは、育児院で養育されていた幼児や小児、あるいは病院で死去した患者、慈悲院に仮住まいしていた者達や教会関係者であったと推定している。

1561年の  
手紙

教会墓地の  
性格

1560年代 1560年代にはイエズス会宣教師の医療活動は禁止され、病院を担ったアルメイダ修道士は府内からはなれて、九州各地の布教の最前線に立つことになる。それにとまって府内教会の病院及び育児院・慈悲院は慈悲の組ミゼルコルジアの会員によって維持運営されていることが、その後の史料によっても確認される<sup>註25</sup>。府内教会は1562（永禄5）年にイエズス会の布教本部が肥前に移動したため、宣教師が減少し、教会の敷地が拡大することはなくなる。またイエズス会本部移転後、府内のキリスト教徒は宗麟の居所である臼杵に多く移り<sup>註26</sup>、新設された臼杵教会に重点が移ったこともあり、府内の教会は宣教師が不在のことが多くなる。

註24 村上直次郎訳『イエズス会日本通信』上、P248、1968、雄松堂書店

註25 1566年10月24日付け、口之津発トルレス書簡、村上直次郎訳『イエズス会日本通信』下、P119、1969、雄松堂書店

註26 1565年10月25日付肥前福田発ルイス・アルメイダ書簡『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第3期2巻、同朋社出版

## 5. 府内教会の最盛期とコレジオ

1578年の教勢 1577(天正5)年以後宣教師の来日数が急増する<sup>註27</sup>。1578(天正6)年の日本イエズ会の教勢は、イエズ会員51名、内訳は司祭21名、修道士30名である。日本各地の配置は次のように報告されている。

京都 司祭2名、修道士3名。  
 筑前博多 司祭2名、修道士1名。  
 肥後天草 司祭3名、修道士1名。  
 肥前口之津 司祭1名、修道士1名。  
 肥前大村長崎 司祭3名、修道士3名。  
 肥前平戸 司祭2名。  
 豊後府内 司祭4名、修道士13名。  
 豊後臼杵 司祭2名、修道士6名。(布教長カブラル、フロイス)

府内教会の変化 残る修道士2名(ジョアン、アルメイダ)は、大友宗麟の日向攻めに同行していた。この時点で、府内教会は新たに来日した宣教師の教育機関として活動しており、のちに府内にコレジオが置かれる基礎がすでにできつつあった<sup>註28</sup>。1578(天正6)年10月の時点では、豊後にイエズ会宣教師のほぼ半数が居住し、そのなかでも府内教会はイエズ会員がもっとも多い教会となっている。

ヴァリニャーノ 次に大きな変化が起こるのは1579(天正7)年のイエズ会巡察師ヴァリニャーノの来日である。

1580年 翌1580(天正8)年にはイエズ会の日本布教組織を変更し、長崎に布教本部が置かれ、そこに日本布教長が常駐し、日本全土を下、豊後、都の3地区に分割した。豊後地区長は1580(天正8)年に設置された府内のコレジオ院長が就任することになった<sup>註29</sup>。コレジオの位置は「府内古岡」の

コレジオ 現地比定の結果、府内教会の北側に広大な空閑地が広がることから、教会推定地の北側隣接地に建設されたものと考えられている<sup>註30</sup>。1581(天正9)年には当時豊後府内最大の仏教寺院であった臨濟宗万寿寺が焼失している。これによって、イエズ会府内教会は豊後府内における最大の規模を擁する宗教施設となっている。これ以後1586(天正14)年末の島津氏の侵攻までの数年間が、豊後におけるキリスト教の最盛期で、豊後国内各地に教会、司祭館が作られるとともに、地方における集団改宗、都市における布教の進展がみられた。

## 6. 府内教会の終焉

1587年 府内戦災 1587(天正15)年の島津勢の府内占領によって都市の大半が火災にあったが、宣教師が退避したあとの教会施設には秀吉の使者木食上人がはいってその宿舎になっていたため、島津勢は火をかけた<sup>註31</sup>。島津勢撤退の後府内に入ったキリシタン大名黒田如水のとりなしにより、教会施設はイエズ会に返還され、そこにレベロ司祭が戻っているが、占領した豊臣勢による略奪が絶えなかったと言う。つづいて羽柴秀長の軍勢が到着すると、教会施設の大半を彼の宿舎として明渡した。そのため修道院と倉庫は残ったが教会は破壊され、秀長は居住した修院の建物の周りに堀のついた非常に厚い竹垣を作らせたという。さらにその直後の1587(天正15)年6月、教会の最大の

註27 来日宣教師の人数と名簿については、註20、五野井2002文献に詳しい。

註28 1578年10月16日付け、豊後臼杵発ルイス・フロイス書簡。1579年12月10日付け肥前口之津発フランシスコ・カリオン1579年度日本年報『十六・七世紀イエズ会日本報告集』第3期5巻、1992、同朋社出版

後者でこの2、3年間に新たに来日した司祭・修道士のために日本国内に神学校が1か所設けられ、現在15ないし16名の生徒がいて日本語を学んでいると報告されている。前者のフロイス書簡の宣教師数からみて、この神学校が置かれたのは、豊後府内教会であったと考えられる。

註29 高橋裕史『イエズ会の世界戦略』P96、2006、講談社選書メチエ372

伴天連追放令 被護者であった大友宗麟が死去し、翌7月には豊臣秀吉が筑前博多にて伴天連追放令を發布した。それに伴い豊後に残った宣教師3名が退去した。これをもって府内教会は放棄され、その後再建されることはなかったのである。

## 7. イエズス会府内教会の変遷と墓地

以上のように教会史料から復元される教会敷地の利用の変遷を、墓地を中心に次のようにまとめることができる。

①教会は1553(天文22)年に「中町」の西背後の空閑地を貸与されて建設され、その敷地はのちに「下の地所」とよばれる。そのなかに墓地が設けられる。

②、1556(弘治2)年に「下の地所」の西に隣接する敷地を購入し、新教会を建設する。新たな地所は「上の地所」とよばれ、その敷地の西端は都市豊後府内西端の低地までを範囲とする広大なものとなる。

③1557(弘治3)年に「下の地所」の敷地を病院と墓地に二分する。

④墓地はこのように一貫して「下の地所」に設けられたが、一般の信徒は郊外の墓地に葬られている。教会内の墓地は、当時の府内教会が貧者と病者の教会といわれるとおり、教会外に身寄りのない信者や、信者以外の病死者、育児院でなくなった幼児・小児の墓であった可能性が高い。

⑤府内教会は1577(天正5)年に新たに来日した宣教師の教育機関としてその性格を変え、1580(天正8)年10月に発展してコレジオとなる。それまでの教会とコレジオが別の敷地を持つのか、同一の敷地内に作られたのか史料ではわからない。

⑥1587(天正15)年に豊薩戦争による戦乱と豊臣秀吉による伴天連追放令によって府内教会は放棄される。

以上の教会の変遷と中世大友府内町跡10次調査区の調査成果を重ねると、第1に、10次Ⅱ区北調査区の第2期と第3期の墓地は「下の地所」の南端にあたる可能性が高くなる。教会史料に頻出する「上の地所」「下の地所」の位置を推量する有力な手がかりを得たことになる。

「下の地所」  
と墓地

第2に、第2期の幼児墓群が作られた時期は1560年代を中心とする時期である。アルメイダが作った育児院の年代は1555～6年ごろに限られるので、年代的に一致しない。幼児墓群を府内教会の育児院にかかわる埋葬とする五野井氏の見解<sup>註32</sup>をただちに支持することはできないが、そうだとすると逆に育児院が60年代あるいは70年代まで存続した可能性を示すものであろう。

育児院と  
幼小児墓

第3に、第3期の等間隔列状墓群はキリスト教会墓地特有のものであるが、そのように整備されるのは、府内教会の歴史をみるかぎり、1562(永禄5)年に大半の宣教師が肥前に移動したあとから、1570年代の後半に再び教育機関をもつ教会として再生されるまでの期間においては、教会の施設が整備された可能性は少なく、1577(天正5)年から始まる宣教師の急増と1580(天正8)年のコレジオ設置にともなう、府内教会の性格の変化に合わせて、墓地が整備された可能性が高い。

教会の変化  
と成人墓

そして第4に、墓地の被葬者に必ずしもキリシタンとはいえない死者がともに埋葬されているのは、五野井氏が指摘したよう<sup>註33</sup>に、基本的にこの時代の府内教会の墓地が、教会外に身寄りのない死者のみを埋葬するという特殊な性格を持っていたからであろう。そうであればキリシタンの教会関係者以外の幼児・小児、病院で死んだ患者、慈悲院に扶養されていた貧者が埋葬された可能性が高いのである。

非キリシタンを  
葬る教会墓地

註30 註5文献、「大分市史」中、付図「地籍図に残る戦国時代の府内」1987、大分市

註31 ルイス・フロイス(松田毅一・川崎桃太訳)『日本史』8、豊後編Ⅲ、P220.1978、中央公論社

註32 五野井隆史「豊後府内の教会領域について」P48『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、東京大学史料編纂所

註33 註32、五野井隆史「豊後府内の教会領域について」P48

最後に五野井氏はもっともキリシタン墓らしい特徴を持つ1号墓の被葬者について、府内で死没した可能性のあるポルトガル人として、山口出身のキリシタンの娘と結婚し、慈悲の組の会員として教会の敷地内に居住したエステヴァン・マルティンスの可能性を示唆されている<sup>註34</sup>が、考古調査と人骨調査の結果は、これを肯定も否定もする材料はともになかったことを付け加えておきたい。

調査から報告書作製の過程において、五野井隆史氏、高橋公一氏、今野春樹氏、竹田宏司氏、木村幾多郎氏、坂本嘉弘氏、原田昭一氏、後藤晃一氏、三重野誠氏、山崎文子氏より、貴重なご意見や文献および資料の提供を賜った。記して感謝します。

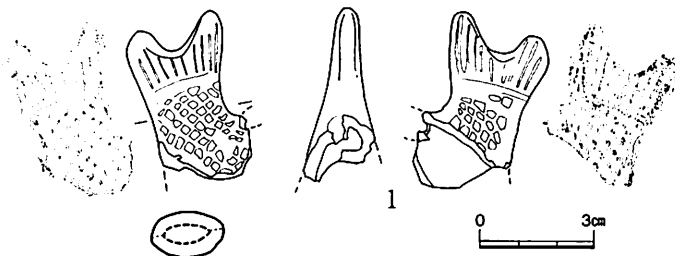
#### 附節 遺物の補遺（第6-5図）

御所小路町

中世大友府内町跡第7次調査の報告は『豊後府内』3<sup>註35</sup>と題して昨年報告した。その中で報告を逸した遺物の中に、大変貴重な遺物が存在することが今年度判明したので、この場を借りて報告する。

華南三彩

1は7次調査の16世紀第4四半期後半のG地区SK734土坑の一括廃棄層中から出土した中国製華南三彩の魚形水注の尾の破片である。先方に向かって注ぎ口の一部がある。長さ4.2cmほどが残っていた。成形は型作りで、うろこの重なりとヒレを表現した左右対称の2枚の粘土板を内部が中空になるように張り合わせている。尾の先端は鉄の黄釉、胴は緑釉で彩色する。土坑SK734は、御所小路町に面し1587（天正15）年の島津氏侵攻による火災で焼失した武家屋敷と推定される敷地を片付けた際の火災処理土坑であるので、この華南三彩魚形水注はそのとき焼け落ちた屋敷の中で使われていた貴重な文房具であると考えられる。



第6-5図 7次調査SK734出土遺物（1/2）

註34 註32、五野井隆史「豊後府内の教会領域について」P48～49

註35 田中裕介「中世大友府内町跡第7次調査区」『豊後府内』5（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告8）、2006



# 遺物觀察表

10次I区調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

挿図No.	器 種		生産地	法量 (cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第2-5図-1	苺花	皿	中国(京徳領)	(9.7)	(2.8)	2.8	SD001	C群	
第2-5図-2	苺花	皿	中国(京徳領)	(9.8)	(2.8)	2.9	SD001	C群	
第2-5図-3	苺花	碗	中国(京徳領)	-	4.8	(1.8)	SD001	E群	
第2-5図-4	苺花	碗	中国(京徳領)	-	-	(4.4)	SD001		
第2-5図-5	苺花	碗	中国(京徳領)	-	-	(4.4)	SD001		
第2-5図-6	苺磁	皿	中国(龍泉)	(10.2)	-	(2.5)	SD001		
第2-5図-7	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(3.5)	SD001	蓮弁	
第2-5図-8	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	4.2	(2.7)	SD001		
第2-5図-9	白磁	皿	中国	-	(7.4)	(1.8)	SD001		
第2-5図-10	白磁	瓶	中国	(3.6)	-	(3.1)	SD001		
第2-5図-11	天目	碗	瀬戸英濃	-	3.0	(1.4)	SD001		
第2-6図-12	陶器	登	備前	(3.8)	-	-	SD001		36
第2-6図-13	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD001	中世5期b~6期?	
第2-6図-14	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD001	近世1期	
第2-6図-15	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD001		
第2-6図-16	陶器	大甕	備前	28.0	-	-	SD001	SK006 No.10.39.44.45.52.61、表探、北壁一括資料と接合	36
第2-6図-17	京都系土師器	皿	在地	12.8	-	2.5	SD001	内面一部煤痕	
第2-6図-18	京都系土師器	皿	在地	(14.0)	-	2.3	SD001		
第2-6図-19	京都系土師器	皿	在地	11.6	-	2.9	SD001	脚部	
第2-6図-20	京都系土師器	坏	在地	(11.0)	-	3.8	SD001		
第2-6図-21	土師質土器	小皿	在地	7.6	5.2	1.5	SD001	灯明皿、煤付痕	
第2-6図-22	瓦質土器	香炉	在地	-	-	-	SD001		
第2-6図-23	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD001		36
第2-7図-24	瓦質土器	鉢	在地	34.0	-	-	SD001		36
第2-7図-30	土師質土器	甕	在地	-	-	-	SD001	古墳時代	
第2-10図-1	苺磁	碗	中国(龍泉)	(15.0)	-	(4.6)	SD010		
第2-10図-2	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(2.6)	SD010	蓮弁	
第2-10図-3	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	(6.0)	(2.8)	SD010		
第2-10図-4	土師質土器	皿	在地	7.1	5.8	2.4	SD010		
第2-10図-5	土師質土器	皿	在地	11.5	6.2	2.3	SD010		
第2-10図-6	土師質土器	皿	在地	10.6	5.3	3.7	SD010		
第2-10図-7	土師質土器	小皿	在地	12.1	6.3	2.5	SD010		
第2-10図-8	陶器	卸皿	在地	-	-	-	SD010		36
第2-10図-9	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SD010		
第2-10図-10	瓦質土器	香炉	在地	(9.4)	(8.6)	6.3	SD010		36
第2-10図-11	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD010		
第2-12図-1	土師質土器	皿	在地	8.9	5.3	2.4	SD028	顕著な口ク口目	36
第2-12図-2	土師質土器	皿	在地	12	(7.0)	2.8	SD028	顕著な口ク口目	
第2-14図-1	土師質土器	皿	在地	12.8	7.7	2.8	SK004		36
第2-14図-2	土師質土器	皿	在地	13.2	7.3	2.8	SK004		
第2-17図-1	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK006	近世1期 ナナメスリメ	36
第2-17図-2	瓦質土器	火鉢	在地	43.8	32.0	29.0	SK006		36
第2-22図-1	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	(4.6)	(2.0)	SK012		
第2-22図-2	苺磁	皿	中国(龍泉)	-	-	(3.5)	SK012		
第2-22図-3	京都系土師器	皿	在地	(8.7)	(2.6)	2.1	SK012	内面口縁部煤痕、灯明皿	
第2-22図-4	土師質土器	皿	在地	-	5.5	(1.6)	SK012		
第2-22図-5	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SK012		
第2-24図-1	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(4.1)	SK015	人形手	
第2-24図-2	苺磁	瓶(把手)	中国(龍泉)	-	-	-	SK015		
第2-24図-3	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK015	中世5期~6期	
第2-28図-1	土師質土器	皿	在地	11.2	6.5	2.9	SK019		36
第2-29図-1	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK022	中世4期	36
第2-32図-1	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK026		36
第2-34図-1	陶器	大甕	備前	-	-	-	SK027		36
第2-37図-1	瓦質土器	土鍋	在地	32.0	-	12.6	SK030		37
第2-39図-1	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	(6.3)	(3.6)	SE014		
第2-39図-2	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(1.7)	SE014		
第2-39図-3	苺磁	皿	中国(龍泉)	-	-	(3.0)	SE014	鍋蓮弁	
第2-39図-4	白磁	碗	中国	(9.6)	(3.4)	2.6	SE014		
第2-39図-5	白磁	皿	中国	-	-	(3.4)	SE014		
第2-39図-6	土師質土器	皿	在地	13.5	(7.9)	3.8	SE014		
第2-39図-7	土師質土器	小皿	在地	5.0	3.5	1.3	SE014		
第2-39図-8	土師質土器	皿	在地	-	5.4	(1.1)	SE014		
第2-39図-9	土師質土器	皿	在地	-	(5.5)	(1.5)	SE014		
第2-39図-10	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE014	中世4期	
第2-39図-11	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE014	中世5期?	37
第2-39図-12	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE014	中世5期?	
第2-39図-13	陶器	搦鉢	備前	(34.6)	-	-	SE014	近世1期	
第2-39図-14	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE014	中世5期b~6期	
第2-39図-15	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE014	中世3期	37
第2-42図-1	苺花	瓶?	中国(京徳領)	-	-	(1.8)	SE017		
第2-42図-2	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(2.1)	SE017	蓮弁	
第2-42図-3	苺磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(2.4)	SE017		
第2-42図-4	陶器	舟徳利	朝鮮	-	-	-	SE017		
第2-42図-5	陶器	搦鉢	備前	-	(11.3)	-	SE017		37

遺物観察表2

10次I区調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)

挿図No.	器種		生産地	法口 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第2-42図-6	京都系土師器	皿	在地	(12.7)	-	2.5	SE017		37
第2-42図-7	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	-	1.9	SE017		
第2-42図-8	京都系土師器	皿	在地	(16.6)	-	2.4	SE017		
第2-42図-9	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SE017	脚部	37
第2-47図-1	土師質土器	皿	在地?	15.0	7.3	3.0	ST009	白色系	37
第2-48図-1	青磁	皿	中国(龍泉)	(12.4)	(5.2)	3.2	ビット	4-B区 P059	
第2-48図-2	陶器	天目	中国	-	(4.6)	(1.6)	包含層	1-B区	
第2-48図-3	陶器	漆鉢	備前	-	-	-	包含層	1-B区 中世6期	
第2-48図-4	土師質土器	小皿	在地	7.3	4.3	2.0	ビット	4-A区 P002	
第2-48図-5	土師質土器	皿	在地	8.2	5.0	1.9	包含層	1-B区 灯明皿、煤付皿	
第2-48図-6	土師質土器	耳皿	在地	1.8	3.1	1.6	包含層	一括	37
第2-48図-7	土師質土器	燗台	在地	-	(7.2)	4.1	ビット	5-B区 P010	37
第2-48図-8	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層	5-B区 P010	37
第2-49図-18	古代土師器	坏	在地	(12.3)	8.0	3.8	包含層	5-A区	
第2-49図-19	土師質土器	甕	在地	19.2	-	-	包含層	3-B区 古墳時代前期	
第2-49図-20	縄文土器	浅鉢	在地	-	-	-	包含層	3-B区	
第2-49図-21	縄文土器	深鉢	在地	-	-	-	包含層	4-A区	
第2-49図-22	縄文土器	深鉢	在地	-	-	-	包含層	3-B区	

10次I区調査区遺物観察表(瓦)

挿図No.	器種	材質	部位	法口 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ	厚さ				
第2-8図-32	丸瓦	-	-	長さ (14.9)	幅 (13)	厚さ 2	-	SD001			
第2-8図-33	埴	-	-	長さ (18.7)	幅 (16)	厚さ 3	-	SD001			
第2-49図-16	埴	-	-	長さ (14.5)	幅 (13)	厚さ 4	-	ビット	4-B区P056		

10次I区調査区遺物観察表(銅銭)

挿図No.	銭貨名	初鋳 造年	国・王朝名	重量 (g)	直径 (mm)	凹体	遺構名	備考	図版 No.
第2-42図-11	開元通寶	621	唐	2.1	2.4		SE017		
第2-49図-17	-	-	-	1.9	2.3		ビット	4-B区P033	

10次調査区 | 区遺物観察表 (土製品・石製品・金属製品)

挿図No.	品種	材質	部位	寸法 (cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.
				口径	長さ	器高	幅	厚さ	孔径				
第2-7図-25	碗	鉄製品	-	口径	10.0	器高	2.0	-	-	94.7	SD001		36
第2-7図-26	不明	鉄製	-	長さ	4.2	幅	4.0	厚さ	2.0	-	SD001		36
第2-7図-27	刀子	鉄製品	-	長さ	30.7	幅	2.6	厚さ	0.30	134.4	SD001		36
第2-7図-28	砥石	流紋岩	-	長さ	12.9	幅	7.1	厚さ	4.60	-	SD001		36
第2-7図-29	石臼	凝灰岩	上臼	高さ	9.7	-	-	-	-	-	SD001		
第2-7図-31	石斧	頁岩	-	長さ	(6.0)	幅	5.4	厚さ	(3.50)	-	SD001		
第2-10図-12	土鐘	土製	-	長さ	4.5	幅	1.1	孔径	0.35	-	SD010		
第2-18図-3	石臼	安山岩	上臼	径	36.4	高さ	8.0	-	-	-	SK006		36
第2-37図-2	不明銅製品	青銅製	-	長さ	4.1	幅	1.0	-	-	-	SK030		37
第2-39図-16	土鐘	土製	-	長さ	5.0	幅	1.0	孔径	0.30	-	SE014		
第2-42図-10	砥石	石英粗面岩	-	長さ	(4.5)	幅	6.7	厚さ	4.20	-	SE017		37
第2-44図-1	鋸先	鉄製品	-	長さ	33.7	幅	18.3	厚さ	2.70	-	SE017		37
第2-44図-2	犁ヘラ	鉄製品	-	長さ	30.0	幅	-	厚さ	1.30	-	SE017		37
第2-45図-3	鋸先	鉄製品	-	長さ	34.0	幅	15.7	厚さ	1.70	-	SE017		37
第2-47図-2	釘	鉄製品	-	長さ	4.8	幅	0.6	厚さ	0.60	-	ST009		
第2-47図-3	釘	鉄製品	-	長さ	4.3	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-4	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-5	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-6	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-7	釘	鉄製品	-	長さ	2.0	幅	0.4	厚さ	0.20	-	ST009		
第2-47図-8	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-9	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-10	釘	鉄製品	-	長さ	3.9	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-11	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.2	厚さ	0.20	-	ST009		
第2-47図-12	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-13	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
第2-47図-14	釘	鉄製品	-	長さ	3.9	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-15	釘	鉄製品	-	長さ	5.0	幅	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
第2-47図-16	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-17	釘	鉄製品	-	長さ	2.9	幅	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
第2-47図-18	釘	鉄製品	-	長さ	2.8	幅	0.3	厚さ	0.30	-	ST009		
第2-47図-19	釘	鉄製品	-	長さ	4.0	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-20	釘	鉄製品	-	長さ	4.5	幅	0.4	厚さ	0.40	-	ST009		
第2-47図-21	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	-	ST009		
第2-47図-22	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	-	ST009		
第2-47図-23	釘	鉄製品	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	-	ST009		
第2-48図-9	土鐘	土製	-	長さ	(3.5)	幅	1.6	孔径	0.30	-	包含層	2-B区	
第2-48図-10	土鐘	土製	-	長さ	5.0	幅	1.3	孔径	0.40	-	包含層	5-B区	
第2-48図-11	土鐘	土製	-	長さ	5.2	幅	1.2	孔径	0.30	-	包含層	5-B区	
第2-48図-12	土鐘	土製	-	長さ	5.1	幅	1.5	孔径	0.40	-	包含層	5-B区	
第2-48図-13	滑石製スプーン	滑石製	-	長さ	5.5	幅	4.8	厚さ	1.70	-	ビット	P001	37
第2-48図-14	砥石	砂岩	-	長さ	9.7	幅	8.2	厚さ	5.10	-	ビット	4-B区P056	
第2-48図-15	不明石製品	軽石	-	長さ	2.6	幅	2.7	厚さ	1.70	-	ビット	3-B区P010	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器①)

挿図No.	器 種		生産地	法量 (cm)			遺物名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第3-5図-1	苜花	壺	中国	-	-	(8.8)	SD111	ラマ式透弁 208、209、210と同一個体	
第3-5図-2	苜磁	皿	中国(京徳鎮)	-	-	(1.9)	SD111		
第3-5図-3	白磁	皿	中国	(13.0)	(6.6)	2.4	SD111		
第3-5図-4	陶器	皿	肥前	-	(4.6)	(2.1)	SD111		
第3-5図-5	陶器	鉢	備前	(21.6)	8.0	(11.4)	SD111	中世5~6期?	38
第3-5図-6	京都系土師器	皿	在地	(12.9)	-	1.8	SD111		
第3-5図-7	京都系土師器	皿	在地	(11.4)	-	2.2	SD111		
第3-5図-8	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	-	2.2	SD111		
第3-5図-9	京都系土師器	皿	在地	(10.7)	-	1.9	SD111	粘土痕?有	
第3-8図-1	苜磁	碗	中国(龍泉)	-	4.5	(2.0)	SD113		
第3-8図-2	苜磁	碗	中国(龍泉)	-	-	(3.1)	SD113	透弁	
第3-8図-3	土師質土器	皿	在地	7.9	(4.8)	2.3	SD113		
第3-8図-4	土師質土器	皿	在地	11.5	(5.4)	3.2	SD113		
第3-8図-5	土師質土器	皿	在地	11.8	6.0	2.8	SD113	灯明皿、煤付皿	
第3-8図-6	土師質土器	皿	在地	11.8	(5.9)	2.5	SD113		
第3-8図-7	土師質土器	焼地登窯	在地	(4.9)	-	1.8	SD113		
第3-8図-8	瓦質土器	火鉢	在地	-	(5.0)	-	SD113	脚部	38
第3-8図-9	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD113		38
第3-8図-10	瓦質土器	埴	在地	-	-	-	SD113		38
第3-11図-1	苜花	皿	中国(京徳鎮)	-	(5.8)	(1.6)	SD116		
第3-11図-2	苜磁	壺	中国(龍泉)	(4.4)	-	(4.0)	SD116		
第3-11図-3	陶器	壺	中国	(17.0)	-	(2.5)	SD116		
第3-11図-4	白磁	皿	中国	(14.2)	-	(4.1)	SD116	口剥げ	
第3-11図-5	白磁	碗	中国(京徳鎮)	-	4.4	(1.6)	SD116		
第3-11図-6	陶器	撥鉢	備前	-	-	-	SD116		38
第3-11図-7	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	-	2.0	SD116		
第3-11図-8	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	-	2.4	SD116		
第3-12図-9	京都系土師器	皿	在地	12.5	-	2.1	SD116		
第3-12図-10	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	(5.9)	2.0	SD116		
第3-12図-11	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	-	2.7	SD116		
第3-12図-12	京都系土師器	皿	在地	12.7	-	3.0	SD116		
第3-12図-13	土師質土器	皿	在地	12.6	6.6	3.4	SD116	顕著な口ク口目	
第3-12図-14	土師質土器	皿	在地	12.4	7.2	3.0	SD116	顕著な口ク口目	
第3-12図-15	土師質土器	坏	在地	12.3	6.8	3.3	SD116	顕著な口ク口目	
第3-12図-16	土師質土器	皿	在地	12.0	6.4	2.4	SD116	顕著な口ク口目	
第3-12図-17	土師質土器	皿	在地	11.6	(6.6)	3.1	SD116		
第3-12図-18	土師質土器	皿	在地	11.4	5.5	2.6	SD116	顕著な口ク口目	
第3-12図-19	土師質土器	皿	在地	10.9	6.2	2.6	SD116		
第3-12図-20	土師質土器	皿	在地	9.7	5.5	1.9	SD116	顕著な口ク口目 灯明皿、一ヶ所煤付皿	
第3-12図-21	土師質土器	皿	在地	8.1	4.4	1.9	SD116	顕著な口ク口目	
第3-12図-22	土師質土器	皿	在地	7.4	4.3	2.0	SD116	灯明皿、一部煤付皿	
第3-12図-23	土師質土器	坏	在地	7.1	4.6	2.9	SD116		
第3-12図-24	土師質土器	小皿	在地	4.3	2.6	1.3	SD116		
第3-12図-25	土師質土器	燭台	在地	-	(6.2)	3.7	SD116		38
第3-12図-26	土師質土器	燭台	在地	-	-	5.0	SD116		
第3-12図-27	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD116	脚部	38
第3-12図-28	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD116・117		38
第3-13図-1	白磁	皿	中国	-	-	(3.4)	SD117	口剥げ	
第3-13図-2	苜磁	皿	中国(京徳鎮)	-	(7.4)	(1.2)	SD117		
第3-13図-3	陶器	撥鉢	備前	-	-	-	SD117	近世1期 ナナメスリメ	
第3-13図-4	京都系土師器	皿	在地	13.4	-	2.3	SD117	内面黒斑有	
第3-13図-5	京都系土師器	皿	在地	13.0	-	2.4	SD117		
第3-13図-6	京都系土師器	皿	在地	12.8	-	2.5	SD117		
第3-13図-7	京都系土師器	皿	在地	12.7	-	2.5	SD117		
第3-13図-8	京都系土師器	皿	在地	11.2	-	2.3	SD117		
第3-13図-9	京都系土師器	皿	在地	10.5	-	2.3	SD117		
第3-13図-10	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	2.0	SD117	口唇部ナテによる特徴	
第3-13図-11	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.1	SD117	内外面口縁部煤付皿、灯明皿	
第3-13図-12	土師質土器	皿	在地	12.1	5.8	2.9	SD117	顕著な口ク口目	
第3-13図-13	土師質土器	皿	在地	12.1	6.1	3.2	SD117	顕著な口ク口目	
第3-13図-14	土師質土器	皿	在地	12.0	6.2	3.3	SD117	顕著な口ク口目	
第3-13図-15	土師質土器	皿	在地	11.7	6.9	3.1	SD117	顕著な口ク口目	
第3-13図-16	土師質土器	皿	在地	10.9	5.5	3.0	SD117	顕著な口ク口目	
第3-13図-17	土師質土器	皿	在地	9.2	4.8	2.6	SD117	顕著な口ク口目	
第3-14図-18	土師質土器	皿	在地	-	5.9	(1.9)	SD117	顕著な口ク口目	
第3-14図-19	土師質土器	皿	在地	13.1	7.1	2.6	SD117		
第3-14図-20	土師質土器	皿	在地	12.4	6.7	3.4	SD117		
第3-14図-21	土師質土器	皿	在地	11.4	6.4	2.4	SD117		
第3-14図-22	土師質土器	皿	在地	8.5	4.6	2.1	SD117	顕著な口ク口目	
第3-14図-23	土師質土器	皿	在地	8.4	4.8	1.9	SD117		
第3-14図-24	土師質土器	皿	在地	8.1	4.6	1.8	SD117		
第3-14図-25	土師質土器	小皿	在地	4.5	2.7	1.3	SD117		
第3-14図-26	瓦質土器	角火鉢	在地	-	-	-	SD117		38
第3-14図-27	瓦質土器	鉢	在地	-	(17.4)	-	SD117		38
第3-14図-28	土師質土器	燭台	在地	-	6.6	4.1	SD117		38

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表(土器・陶磁器②)

插图No.	器 種		生産地	法目 (cm)			追償名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第3-15図-1	苺花	碗	中国(景德鎮)	-	4.5	(1.9)	SD118		
第3-15図-2	苺花	碗	中国(龍泉)	(14.8)	-	(4.8)	SD118		
第3-15図-3	苺花	碗	中国(龍泉)	-	(6.2)	(2.0)	SD118		
第3-15図-4	苺花	碗	中国(龍泉)	-	(5.4)	(2.5)	SD118		
第3-15図-5	陶器	壺	中国	-	-	(4.0)	SD118		
第3-15図-6	白磁	皿	中国	(12.4)	(6.6)	3.1	SD118	被熱	
第3-15図-7	白磁	壺	中国	-	7.6	(3.5)	SD118		
第3-15図-8	陶器	碗	朝鮮?	-	(5.0)	(1.7)	SD118		
第3-15図-9	陶器	壺	備前	-	4.8	-	SD118		38
第3-15図-10	陶器	摺鉢	備前	(28.4)	-	-	SD118	近世1期	
第3-15図-11	陶器	摺鉢	備前	-	-	-	SD118	近世1期 ナナメスリメ	
第3-15図-12	陶器	摺鉢	備前	-	-	-	SD118	中世6期	
第3-15図-13	陶器	大甕	備前	-	-	-	SD118		
第3-15図-14	陶器	大甕	備前	-	-	-	SD118		
第3-15図-15	京都系土師器	皿	在地	13.0	-	1.9	SD118		
第3-15図-16	京都系土師器	皿	在地	12.8	-	2.8	SD118		
第3-15図-17	京都系土師器	皿	在地	12.3	-	2.3	SD118		
第3-15図-18	京都系土師器	皿	在地	10.7	-	2.0	SD118	内面布目痕?有、口唇部に強いナテ	
第3-15図-19	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.0	SD118	内外面口縁部に煤痕、灯明皿、2期	
第3-16図-20	土師質土器	燗台	在地	-	(6.8)	5.9	SD118		
第3-16図-21	瓦質土器	火鉢	在地	36.4	-	-	SD118	基礎No.9.9A基礎、10A北と接合	
第3-19図-1	土師質土器	皿	在地	10.1	5.4	1.9	SK101	灯明皿 頸首なロクロ目	
第3-19図-2	土師質土器	皿	在地	12.1	5.9	2.5	SK101	灯明皿、黒斑	
第3-20図-1	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	-	2.3	SK102		
第3-20図-2	京都系土師器	皿	在地	(12.7)	-	2.2	SK102		
第3-20図-3	京都系土師器	皿	在地	(11.1)	-	1.8	SK102		
第3-22図-1	土師質土器	皿	在地	12.3	(6.6)	2.9	SK103	頸首なロクロ目	
第3-22図-2	瓦質土器	羽釜	在地	15.6	-	-	SK103	SK104No.43,SD116-SD118と接合	
第3-25図-1	苺花	壺	中国(景德鎮)	-	-	(5.6)	SK104	ラマ式蓮弁 207、208、210と同一個体	
第3-25図-2	苺花	皿	中国(景德鎮)	-	-	(2.8)	SK104	F群	
第3-25図-3	白磁	碗	中国	(12.6)	(7.1)	3.3	SK104		
第3-25図-4	苺花	碗	中国(龍泉)	-	(6.0)	(2.7)	SK104		
第3-25図-5	苺花	碗	中国(龍泉)	-	4.8	(3.9)	SK104		
第3-25図-6	陶器	壺	備前	(13.8)	-	-	SK104		39
第3-25図-7	陶器	摺鉢	備前	-	-	-	SK104	近世1期	
第3-25図-8	陶器	摺鉢	備前	-	-	-	SK104	近世1期 ナナメスリメ	
第3-25図-9	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	2.4	SK104		
第3-25図-10	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.6	SK104		
第3-25図-11	京都系土師器	皿	在地	11.8	-	2.8	SK104		
第3-25図-12	京都系土師器	皿	在地	10.7	-	2.3	SK104	内外面煤付痕、灯明皿	
第3-25図-13	土師質土器	燗台	在地	7.0	(8.3)	5.4	SK104		39
第3-25図-14	土師質土器	皿	在地	15.8	8.7	3.3	SK104	ロクロ目	
第3-25図-15	土師質土器	皿	在地	13.1	7.2	2.8	SK104	ロクロ目	
第3-25図-16	土師質土器	皿	在地	13.0	6.9	3.1	SK104	ロクロ目	
第3-25図-17	土師質土器	皿	在地	11.6	(6.5)	2.7	SK104	ロクロ目	
第3-25図-18	土師質土器	皿	在地	11.2	(6.0)	2.5	SK104	ロクロ目	
第3-25図-19	土師質土器	皿	在地	8.4	4.8	2.1	SK104	ロクロ目	
第3-25図-20	土師質土器	皿	在地	7.7	3.8	2.2	SK104	ロクロ目	
第3-26図-21	土師質土器	皿	在地	-	6.3	(2.2)	SK104	ロクロ目	
第3-26図-22	土師質土器	皿	在地	-	5.2	(2.4)	SK104	ロクロ目	
第3-26図-23	土師質土器	製塩土器	在地	-	-	-	SK104	六連式焼塩用製塩土器	
第3-26図-24	瓦質土器	埴	在地	-	(4.6)	-	SK104		
第3-26図-25	瓦質土器	香炉	在地	-	-	-	SK104	脚部・龍の顔	39
第3-26図-26	瓦質土器	香炉	在地	-	14.7	-	SK104	龍の顔	39
第3-28図-1	京都系土師器	皿	在地	10.7	-	2.4	SK115		
第3-28図-2	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK115	脚部及び底部	39
第3-30図-1	陶器	摺鉢	備前	-	-	-	SK120	中世6期	
第3-30図-2	土師質土器	小皿	在地	7.6	5.1	1.7	SK120		
第3-33図-1	京都系土師器	皿	在地	13.2	-	2.6	SK125		
第3-33図-2	京都系土師器	皿	在地	(13.8)	-	2.4	SK125	外面黒斑有、口縁部キズ?	
第3-36図-1	土師質土器	皿	在地	11.4	6.0	2.6	SP003		39
第3-41図-1	苺花	碗	中国(龍泉)	-	-	(3.7)	SE126	鍋蓮弁	
第3-42図-1	苺花	碗	中国(景德鎮)	-	(4.0)	(2.7)	包含層	7-C区	
第3-42図-2	苺花	壺	中国(景德鎮)	-	-	(4.6)	包含層	10-A区ラマ式蓮弁 207、208、209と同一個体	
第3-42図-3	苺花	壺	中国(景德鎮)	-	-	(5.6)	包含層	8-A区ラマ式蓮弁 207、209、210と同一個体	
第3-42図-4	苺花	碗	中国(龍泉)	(13.8)	-	(4.9)	包含層	7-C区	
第3-42図-5	白磁	皿	中国	(11.4)	(6.0)	2.9	包含層	基礎1	
第3-42図-6	白磁	皿	中国	-	(4.2)	(1.8)	包含層	8-C区	
第3-42図-7	陶器	壺	中国	-	(6.0)	(3.6)	包含層	7-C区 被熱	
第3-42図-8	陶器	皿	中国	-	(3.0)	(0.5)	包含層	7-C区 ヒスイ釉	
第3-42図-9	陶器	不明	中国	-	-	-	包含層	7-C区	
第3-42図-10	陶器	瓶	肥前	-	4.0	(2.5)	包含層	7-C区	
第3-42図-11	陶器	碗	不明	(10.8)	(4.0)	5.9	包含層	9-A区	
第3-42図-12	京都系土師器	皿	在地	12.8	-	2.3	包含層	9-A区 基礎内	
第3-42図-13	京都系土師器	皿	在地	12.9	-	2.6	包含層	9-A区 基礎内	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表（土器・陶磁器㊦）

挿図No.	器種		生産地	法量 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-42図-14	土師質土器	皿	在地?	17.6	-	2.9	包含層	8-C区	
第3-42図-15	土師質土器	小皿	在地	8.0	-	1.7	包含層	8-A区 基礎内	
第3-42図-16	土師質土器	小皿	在地	6.6	4.6	2.1	包含層	7-C区 灯明皿、粘土接合痕?	
第3-42図-17	土師質土器	小皿	在地	7.9	4.5	1.7	包含層	10-Z区	
第3-42図-18	土師質焼埴器	蓋	在地	(5.2)	-	2.2	包含層	9-A区 基礎内	
第3-42図-19	土師質焼埴器	蓋	在地	4.3	-	1.5	包含層	表探	
第3-42図-20	土師質焼埴器	蓋	在地	5.1	-	1.8	ピット	6-A区	39
第3-42図-21	瓦質土器	香炉	在地	(12.8)	14.4	(9.8)	包含層	基礎1	39
第3-42図-22	瓦質土器	不明	在地	-	8.6	-	包含層	9-A区 特殊土器 (磁器の模倣形態か)	
第3-43図-53	土師質土器	製埴土器	在地	8.4	-	-	包含層	基礎1・2 六連式焼埴用製埴土器	
第3-43図-54	土師質土器	製埴土器	在地	12.2	-	-	包含層	トレンチ 六連式焼埴用製埴土器	
第3-43図-55	土師質土器	製埴土器	在地	-	-	-	包含層	7-B区 六連式焼埴用製埴土器	
第3-43図-56	古代土師器	壺		-	5.7	2.8	包含層	8-A区	
第3-43図-57	土師質土器	罍	在地	12.3	-	15.5	包含層	7-A区 古墳中期	
第3-43図-58	土師質土器	高坏	在地	16.5	-	-	包含層	7-A区 古墳前期	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表（瓦）

挿図No.	器種	材質	部位	法量 (単位cm)					重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ	高さ	厚さ				
第3-17図-28	軒丸瓦	-	-	長さ	(6.3)	幅	(11)	厚さ	2	-	SD118	
第3-17図-29	埴	-	-	長さ	(14.2)	幅	(15)	厚さ	2	-	SD118	
第3-26図-33	埴	-	-	長さ	(8.5)	幅	(10)	厚さ	4	-	SK104	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表（銅銭）

挿図No.	銭貨名	初鋳 過年	国・王朝名	重量 (g)	直径 (mm)	四体	遺構名	備考	図版No.
第3-14図-33	永泰通寶	1408	明	3.1	2.4	-	SD117		
第3-17図-30	洪武通寶	1368	明	2.2	2.2	-	SD118	11-A区	
第3-43図-59	大観通寶	-	-	2.7	2.4	-	包含層	10-Z区 P04	

10次Ⅱ区南調査区遺物観察表（土製品・石製品・金属製品・木製品）

挿図No.	品種	材質	部位	寸法 (cm)						重量 (g)	遺構名	備 考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ	孔径	底径	器高				
第3-5図-10	土鏡	土製	-	長さ	6.2	幅	2	孔径	1	-	SD111		
第3-5図-11	砥石	石英粗面岩	-	長さ	4.0	幅	3	厚さ	2	-	SD111		38
第3-12図-29	土鏡	土製	-	長さ	4.4	幅	1.4	孔径	0.30	-	SD116		
第3-12図-30	土鏡	土製	-	長さ	(4.4)	幅	1.4	孔径	0.80	-	SD116		
第3-14図-29	茶臼	砂岩	下臼	長さ	(4.5)	幅	(13.5)	厚さ	(2.90)	-	SD117		38
第3-14図-30	土鏡	土製	-	長さ	5.0	幅	1.2	孔径	0.35	-	SD117		
第3-14図-31	不明	陶製	-	長さ	4.6	幅	0.4	厚さ	0.40	-	SD117		38
第3-14図-32	宝篋印塔	凝灰岩	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	-	SD117		38
第3-16図-22	土鏡	土製	-	長さ	7.1	幅	2.0	孔径	0.90	-	SD118		
第3-16図-23	椀	漆器	-	口径	13.5	底径	6.3	器高	4.50	-	SD118		
第3-16図-24	椀	漆器	-	口径	-	底径	8.9	器高	-	-	SD118		38
第3-16図-25	折敷	木器	-	長さ	30.0	幅	3.0	厚さ	0.80	-	SD118		38
第3-16図-26	下駄	木器	-	長さ	19.9	幅	10.5	厚さ	2.70	-	SD118		38
第3-17図-27	下駄	木器	-	長さ	19.9	幅	10.5	厚さ	2.70	-	SD118		38
第3-26図-27	土鏡	土製	-	長さ	5.6	幅	2.3	孔径	0.40	-	SK104		
第3-26図-28	土鏡	土製	-	長さ	(5.4)	幅	1.7	孔径	0.30	-	SK104		
第3-26図-29	土鏡	土製	-	長さ	4.4	幅	1.4	孔径	0.30	-	SK104		
第3-26図-30	鶴の羽口	土製	-	長さ	(6.0)	幅	4.3	厚さ	4.10	-	SK104		39
第3-26図-31	弁	陶製	-	長さ	13.2	幅	1.2	厚さ	0.20	13.0	SK104		39
第3-26図-32	石臼	石製	上臼	高さ	11.3	-	-	-	-	5400.0	SK104		
第3-31図-1	土玉	土製	-	長さ	2.7	幅	2.5	孔径	0.30	-	SK121		
第3-43図-23	土鏡	土製	-	長さ	6.7	幅	1.9	孔径	0.70	-	包含層	7-C区	39
第3-43図-24	土鏡	土製	-	長さ	6.5	幅	2.0	孔径	0.80	-	包含層	7-A区	
第3-43図-25	土鏡	土製	-	長さ	6.1	幅	1.8	孔径	0.80	-	包含層	基礎	
第3-43図-26	土鏡	土製	-	長さ	6.0	幅	2.0	孔径	0.85	-	包含層	基礎4	
第3-43図-27	土鏡	土製	-	長さ	5.8	幅	2.0	孔径	0.80	-	包含層	9-A区基礎	
第3-43図-28	土鏡	土製	-	長さ	5.5	幅	1.0	孔径	0.40	-	包含層	10-A区北	
第3-43図-29	土鏡	土製	-	長さ	5.5	幅	1.1	孔径	0.25	-	包含層	9-A区基礎	
第3-43図-30	土鏡	土製	-	長さ	5.2	幅	1.2	孔径	0.35	-	包含層	9-A区基礎	
第3-43図-31	土鏡	土製	-	長さ	5.1	幅	1.8	孔径	0.85	-	包含層	9-A区基礎	
第3-43図-32	土鏡	土製	-	長さ	4.9	幅	1.5	孔径	0.30	-	包含層	7-A区	
第3-43図-33	土鏡	土製	-	長さ	4.8	幅	1.8	孔径	0.70	-	包含層	10-A区北	
第3-43図-34	土鏡	土製	-	長さ	4.7	幅	1.5	孔径	0.50	-	包含層	8-A区	
第3-43図-35	土鏡	土製	-	長さ	4.7	幅	1.4	孔径	0.50	-	包含層	9-A区	
第3-43図-36	土鏡	土製	-	長さ	4.6	幅	1.3	孔径	0.35	-	包含層	7-B区	
第3-43図-37	土鏡	土製	-	長さ	4.6	幅	1.7	孔径	0.80	-	包含層	7-B区	
第3-43図-38	土鏡	土製	-	長さ	4.5	幅	1.3	孔径	0.35	-	包含層	7-B区	
第3-43図-39	土鏡	土製	-	長さ	4.4	幅	1.3	孔径	0.40	-	包含層	10-A区北	
第3-43図-40	土鏡	土製	-	長さ	4.2	幅	1.9	孔径	0.80	-	包含層	基礎	
第3-43図-41	土鏡	土製	-	長さ	4.1	幅	1.9	孔径	0.70	-	包含層	10-A区	
第3-43図-42	土鏡	土製	-	長さ	3.9	幅	1.2	孔径	0.35	-	包含層	7-C区西トレンチ	
第3-43図-43	土鏡	土製	-	長さ	3.7	幅	1.9	孔径	0.75	-	包含層	表探	
第3-43図-44	土鏡	土製	-	長さ	3.2	幅	1.8	孔径	0.80	-	包含層	8-B区	
第3-43図-45	鶴の羽口	土製	-	長さ	8.1	幅	(6.5)	厚さ	3.20	-	包含層	7-A区古代包含層	39
第3-43図-46	分銅	陶製	-	長さ	5.4	幅	3.5	厚さ	3.50	268.5	包含層	11-A区 年秤用	39
第3-43図-47	銅製品	陶製	-	長さ	1.3	幅	1.7	厚さ	0.80	7.0	包含層	11-Z区 把手か	
第3-43図-48	砥石	石製	-	長さ	(3.2)	幅	3.4	厚さ	(0.40)	-	包含層	9-C区	
第3-43図-49	砥石	石製	-	長さ	(2.5)	幅	(2.0)	厚さ	(5.30)	-	包含層	基礎1・2	
第3-43図-50	砥石	石製	-	長さ	(7.2)	幅	(5.4)	厚さ	1.00	-	包含層	東トレンチ	
第3-43図-51	石臼	石製	上臼	高さ	12.7	-	-	-	-	1800.0	包含層	基礎1・2	
第3-43図-52	石椀	黒曜石	-	長さ	5.3	幅	5.8	厚さ	3.80	-	包含層	7-A区古代包含層燧石産黒曜石	



第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表（土器・陶磁器①）

挿図No.	器種		生産地	法圍 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-11図2	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SF151	双頭鉄手亀雲文刻印	
第4-11図3	陶器	鉢	備前	-	-	-	SF151		
第4-11図6	陶器	甕	備前	-	-	-	SF151	中世5期	
第4-11図7	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SF151	中世6a期	
第4-11図8	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SF151	近世1a期	
第4-11図10	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SF151	中世5b期	
第4-11図11	京都系土師器	皿	-	(10.8)	-	2.0	SF151		
第4-11図12	白磁	碗	中国 (景德鎮窯)	-	-	-	SF151	毛彫り文様	
第4-11図13	陶器	甕	備前	-	-	-	SF151		
第4-11図15	土師質土器	不明	-	2.5	4.0	3.4	SF151	土鐘もしくは紡錘車か	
第4-11図17	底部系切土師器	小皿	-	(7.2)	1.7	(6.0)	SF151	灯明皿 口縁部に埋付筋	
第4-11図21	土師器	皿	-	12.6	2.3	6.0	SF151	河野C-3 16世紀後半	
第4-11図22	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SF151	菊花文	
第4-12図23	瓦質土器	掃鉢	-	-	-	-	SF151		
第4-12図26	青磁	瓶	朝鮮	-	(11.6)	-	SF151	象嵌	
第4-12図29	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SF151	中世5期	
第4-12図30	陶器	甕	備前	-	-	-	SF151		
第4-12図31	土師器	甕	-	(17.0)	-	12.0	SF151	古墳前期 口縁部を故意に破砕	
第4-12図32	中世須恵器	鉢	-	(20.0)	-	-	SF151	中世	
第4-12図33	須恵器	甕	-	(25.0)	-	-	SF151	古代	
第4-12図34	須恵器	甕	-	-	-	-	SF151	内側格子目の当貝痕跡	
第4-12図35	内黒碗	碗	-	-	(9.4)	-	SF151	古代	
第4-12図36	古代土師器	坏蓋	-	-	-	-	SF151		
第4-12図37	古代土師器	坏	-	-	(9.6)	-	SF151		
第4-16図1	底部系切土師器	坏	-	-	6.2	-	SD165	被熱	40
第4-16図2	底部系切土師器	小皿	-	7.6	5.1	2.2	SD165	灯明皿 口縁打欠 被熱による剥離	"
第4-16図3	底部系切土師器	小皿	-	7.0	4.2	1.7	SD165	灯明皿 埋付筋	"
第4-16図4	底部系切土師器	小皿	-	(7.8)	5.0	2.6	SD165	口縁部全周打欠	"
第4-16図5	青磁	皿	中国	-	(7.0)	-	SD165		
第4-16図6	青磁	皿	中国	-	(8.5)	-	SD165		
第4-16図7	青磁	碗	中国	-	-	-	SD165	C-Ⅱb類 雷文帯	
第4-16図8	青花	筒形碗	中国 (景德鎮窯)	-	(4.6)	-	SD165		
第4-16図9	陶器	甕	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図10	陶器	大甕	備前	(48.8)	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図11	陶器	甕	備前	-	-	-	SD165	中世6期	
第4-16図12	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5b期	
第4-16図13	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図14	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図15	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図16	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図17	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期 使用痕	
第4-16図18	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD165	七宝文	
第4-16図19	瓦質土器	火鉢	-	(42.6)	-	-	SD165		
第4-16図20	瓦質土器	火鉢	-	-	(35.6)	-	SD165		
第4-16図21	瓦質土器	掃鉢	-	-	-	-	SD165		
第4-16図22	中世須恵器	鉢	-	-	-	-	SD165		
第4-16図23	瓦質土器	碗	-	-	3.4	-	SD165		
第4-16図24	底部系切土師器	坏	-	12.8	7.6	3.45	SD165		
第4-16図25	底部系切土師器	坏	-	(12.6)	7.8	3.1	SD165		
第4-16図26	底部系切土師器	坏	-	(12.6)	7.6	3.2	SD165	胎土海部郡産 口縁打欠	
第4-16図27	底部系切土師器	坏	-	(11.4)	6.8	3.5	SD165	口縁部を故意に破砕	
第4-16図28	底部系切土師器	皿	-	(11.2)	(5.8)	3.3	SD165		
第4-16図29	底部系切土師器	坏	-	(12.4)	-	4.0	SD165		
第4-16図30	底部系切土師器	坏	-	(13.4)	(5.8)	3.3	SD165		
第4-16図31	底部系切土師器	坏	-	(12.0)	(6.0)	3.1	SD165		
第4-16図32	底部系切土師器	皿	-	(9.6)	5.2	2.2	SD165	灯明皿 口縁部に埋付筋	
第4-16図33	底部系切土師器	小皿	-	(8.4)	(7.2)	1.3	SD165	14世紀	
第4-16図34	底部系切土師器	小皿	-	7.8	5.7	2.2	SD165	河野B類 灯明皿 口縁部に埋付筋	
第4-16図35	底部系切土師器	小皿	-	7.2	4.4	2.2	SD165	灯明皿 埋付筋 口縁打欠	
第4-16図36	底部系切土師器	小皿	-	7.3	4.7	2.6	SD165	口縁部を故意に破砕	
第4-16図37	底部系切土師器	小皿	-	(8.4)	5.2	2.2	SD165	内面口ケ口痕	
第4-16図38	底部系切土師器	小皿	-	(6.8)	4.0	2.0	SD165	口縁打欠	
第4-16図39	底部系切土師器	小皿	-	(6.8)	(4.6)	2.4	SD165		
第4-16図40	底部系切土師器	小皿	-	(8.0)	(7.0)	2.3	SD165		
第4-16図41	底部系切土師器	小皿	-	7.2	4.4	2.7	SD165		
第4-16図42	底部系切土師器	小皿	-	(8.2)	(4.2)	1.55	SD165		
第4-16図43	底部系切土師器	坏	-	(11.4)	5.5	3.1	SD165		
第4-16図44	底部系切土師器	坏	-	(11.2)	6.0	2.9	SD165		
第4-16図45	底部系切土師器	坏	-	(12.8)	(5.6)	3.3	SD165		
第4-16図46	口ケ目土師器	皿	-	(10.6)	(4.0)	3.0	SD165	板状圧痕 被熱による赤変	
第4-16図47	口ケ目土師器	皿	-	(11.0)	(5.4)	3.1	SD165	板状圧痕? 2次被熱	
第4-16図48	底部系切土師器	坏?	-	-	(6.8)	-	SD165		
第4-16図49	口ケ目土師器	坏	-	11.4	5.9	3.4	SD165		
第4-16図50	京都系土師器	小皿	-	(8.0)	-	2.05	SD165	灯明皿 口縁部埋付筋	
第4-16図62	青花	皿	中国 (景德鎮窯)	(11.9)	3.9	2.8	SD165	C群	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表（土器・陶磁器②）

挿図No.	器種		生産地	法図 (cm)			遺物名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-16図63	襖袖陶器	壺	中国	(10.4)	-	-	SD165		
第4-16図64	陶器	壺	備前	(24.0)	-	-	SD165		
第4-16図65	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図66	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD165	中世5期	
第4-16図67	陶器	搦鉢	備前	(28.0)	-	-	SD165		
第4-16図68	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD165	中世6a期	
第4-16図69	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD165	菊花文	
第4-16図70	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD165	後藤A類	
第4-16図71	瓦質土器	鍋	-	27.6	-	12.1	SD165		
第4-16図72	底部糸切土師器	坏	-	-	6.0	-	SD165	口縁打欠	
第4-16図73	底部糸切土師器	坏	-	(12.2)	(6.8)	2.7	SD165		
第4-16図74	底部糸切土師器	小皿	山口	(10.6)	(6.2)	1.7	SD165	大内系 板状圧痕	
第4-16図75	段々土師器	皿	-	-	5.4	2.1	SD165	板状圧痕 口縁打欠	
第4-16図76	底部糸切土師器	坏	-	(18.8)	(8.2)	3.9	SD165		
第4-16図77	底部糸切土師器	皿	-	(7.0)	(4.4)	2.5	SD165	口縁部を故意に破碎	
第4-16図78	底部糸切土師器	坏	-	(13.0)	-	2.7	SD165	板状圧痕?	
第4-16図79	口ク口目土師器	皿	-	14.8	7.9	3.5	SD165	板状圧痕	
第4-16図80	京都系土師器	小皿	-	9.1	-	2.05	SD165	1期 灯明皿 煤付皿	
第4-16図81	京都系土師器	皿	-	10.4	-	2.0	SD165	1期	
第4-16図82	京都系土師器	皿	-	(11.8)	-	2.5	SD165	2期 2次被熱	
第4-16図83	京都系土師器	皿	-	14.0	-	2.3	SD165	2期 口縁打欠	
第4-16図84	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	2.2	SD165	2期 口縁打欠	
第4-16図85	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	2.3	SD165	2~3期	
第4-16図86	底部糸切土師器	小皿	-	8.7	-	2.0	SD165	2期 灯明皿 煤付皿	
第4-16図87	土師器	燗台	-	(7.0)	-	5.0	SD165	A類	
第4-16図95	須恵器	坏蓋	-	(16.0)	-	-	SD165		
第4-16図96	古代土師器	坏蓋	-	-	-	-	SD165	8世紀	
第4-16図97	須恵器	坏身	-	(12.8)	8.2	3.9	SD165	8世紀後半	
第4-16図98	陶器	甕	備前	(22.0)	-	6.8	SD165		
第4-16図99	須恵器	壺	-	(20.7)	-	(6.7)	SD165		
第4-16図100	土師器	甕	-	(10.8)	-	(5.5)	SD165	胎土海部部もしくは北九州産 企紋型	
第4-16図101	土師器	高坏	-	-	-	-	SD165	古墳前期	
第4-16図102	白磁	碗	中国	-	-	-	SD165		
第4-16図103	陶器	皿	瀬戸美濃	-	-	-	SD165	おろし皿	
第4-18図1	底部糸切土師器	小皿	-	8.5	4.8	2.2	SD255		40
第4-18図2	底部糸切土師器	小皿	-	(8.6)	(4.8)	(2.2)	SD255		40
第4-20図1	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SE300	菊花文	
第4-20図2	瓦質土器	大塚	-	(46.5)	-	-	SE300		
第4-20図3	底部糸切土師器	小皿	-	-	(6.8)	-	SE300		
第4-20図4	底部糸切土師器	小皿	-	(7.2)	-	-	SE300		
第4-20図5	底部糸切土師器	小皿	-	(7.2)	-	-	SE300		
第4-22図1	底部糸切土師器	小壺	備前	(13.2)	-	-	SK256	中世4~5期	
第4-22図2	陶器	甕	備前	(40.6)	-	-	SK256	中世2b期	
第4-22図3	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SK256		
第4-22図4	底部糸切土師器	皿	山口	(13.8)	6.0	3.6	SK256	大内系	
第4-22図5	底部糸切土師器	大皿	山口	(22.0)	(8.6)	-	SK256	大内系	
第4-22図6	底部糸切土師器	坏	-	-	6.4	2.2	SK256		
第4-22図7	底部糸切土師器	坏	-	(12.4)	(7.8)	4.2	SK256		
第4-22図8	底部糸切土師器	坏	-	(12.6)	(4.0)	3.3	SK256		
第4-22図9	底部糸切土師器	坏	在地	(13.8)	(7.2)	4.4	SK256		
第4-22図10	底部糸切土師器	坏	-	-	-	-	SK256		
第4-22図11	底部糸切土師器	小皿	-	(7.2)	(4.6)	2.6	SK256		
第4-22図12	底部糸切土師器	小皿	-	6.2	4.5	2.0	SK256		
第4-22図13	土師器	燗台	-	5.3	5.3	3.8	SK256		
第4-22図16	白磁	碗	中国 (同安窯)	-	(4.7)	-	SK256		
第4-23図1	底部糸切土師器	小皿	-	7.4	4.8	2.2	SK298	口縁打欠	
第4-23図2	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK298	中世3ないし4期	
第4-23図3	口ク口目土師器	坏	山口	(15.2)	(6.0)	3.4	SK298	大内系	
第4-23図4	底部糸切土師器	坏	-	-	-	-	SK298		
第4-24図1	白磁	皿	中国	(13.8)	-	-	SK286		
第4-26図1	白磁	碗	中国	-	-	3.8	SK199B		
第4-26図2	底部糸切土師器	坏	-	11.7	7.0	3.9	SK199B		
第4-26図3	底部糸切土師器	皿	山口	-	6.4	-	SK199B	大内系 板状圧痕	
第4-26図4	底部糸切土師器	坏	-	-	6.0	-	SK199A		
第4-26図5	底部糸切土師器	坏	-	11.1	6.0	3.5	SK199A		
第4-26図6	底部糸切土師器	坏	-	(14.4)	7.8	4.0	SK199A		
第4-26図7	底部糸切土師器	坏	-	11.7	6.6	4.1	SK199A	口縁打欠	
第4-26図8	底部糸切土師器	坏	-	11.8	6.6	4.1	SK199A	口縁打欠	
第4-26図9	底部糸切土師器	坏	-	11.1	7.3	4.0	SK199A	口縁打欠	
第4-26図10	底部糸切土師器	坏	-	-	-	6.4	SK199A	口縁部、胴部を故意に破碎	
第4-26図11	底部糸切土師器	皿	-	7.7	4.6	2.7	SK199A	灯明皿 煤付皿 口縁打欠	
第4-26図12	底部糸切土師器	皿	山口	-	7.0	-	SK199A	大内系	
第4-26図13	底部糸切土師器	皿	山口	-	(7.4)	-	SK199A	大内系 板状圧痕	
第4-26図14	口ク口目土師器	皿	山口	(13.6)	(5.4)	2.4	SK199A	大内系	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器③)

挿図No.	器 種		生産地	法量 (cm)			遺物名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第4-28図1	冑磁	碗	中国	(16.0)	-	-	SK203		
第4-28図2	底部系切土師器	小皿	-	7.0	4.6	2.1	SK203	灯明皿 煤付箱	
第4-28図3	底部系切土師器	小皿	-	-	(4.4)	-	SK203		
第4-29図1	底部系切土師器	小皿	-	(8.2)	5.2	2.1	SK212	灯明皿 口縁部に煤付箱	
第4-31図1	冑磁	碗	-	-	-	-	SK251	口縁部逆反り	
第4-31図2	華南三彩	盤	中国	-	-	-	SK251		
第4-31図3	瓦質土器	火鉢	-	(51.0)	(40.0)	15.5	SK251		
第4-31図4	瓦質土器	鉢	-	(14.7)	-	-	SK251		
第4-31図5	瓦質土器	搦鉢	-	(21.6)	(12.0)	7.8	SK251		
第4-31図6	瓦質土器	德利	-	(8.6)	-	-	SK251		
第4-31図7	瓦質土器	甕	-	-	-	-	SK251		
第4-31図8a	瓦質土器	搦鉢	-	-	-	-	SK251		
第4-31図8b	瓦質土器	搦鉢	-	-	-	-	SK251		
第4-31図8c	瓦質土器	搦鉢	-	-	-	-	SK251		
第4-31図9	底部系切土師器	坏	-	(11.8)	(8.7)	3.0	SK251	板状圧痕	
第4-31図10	底部系切土師器	坏	-	(13.2)	(8.8)	3.2	SK251	板状圧痕	
第4-31図11	土師器	坏	-	(12.0)	(8.8)	4.0	SK251		
第4-31図12	底部系切土師器	小皿	-	8.0	6.0	2.2	SK251	灯明皿 煤付箱 口縁打欠	
第4-31図13	底部系切土師器	小皿	-	(7.2)	4.6	2.55	SK251	灯明皿 煤付箱 板状圧痕	
第4-31図18	古代土師器	坏蓋	-	14.6	-	2.2	SK251		
第4-31図19	須恵器	坏身	-	(12.2)	(8.6)	4.1	SK251	8世紀末	
第4-31図20	古代土師器	坏身	-	(13.6)	(9.6)	3.4	SK251		
第4-31図21	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK251		
第4-31図22	京都系土師器	皿	在地	(14.6)	-	(2.2)	SK251	2期 擦熱	
第4-35図1	底部系切土師器	坏	-	-	8.6	(1.9)	SD239	板状圧痕	
第4-35図2	底部系切土師器	燭台	-	(7.0)	6.5	5.0	SD245	A類	
第4-38図1	白磁	皿	中国	-	(7.8)	-	SK247		
第4-38図2	陶器	大甕	備前	(45.2)	-	-	SK247	中世5期	
第4-38図3	口ク口目土師器	坏	-	11.5	6.2	2.7	SK247	口縁打欠 2次擦熱?	
第4-40図1	冑磁	碗	中国	-	(5.4)	(3.0)	SK266A		40
第4-40図2	口ク口目土師器	皿	-	(14.4)	(7.4)	3.1	SK266B		*
第4-40図3	底部系切土師器	皿	-	14.4	7.6	3.55	SK266B	板状圧痕 黒斑	*
第4-40図4	底部系切土師器	皿	-	13.4	7.4	3.5	SK266B	板状圧痕	*
第4-40図5	底部系切土師器	小皿	-	(8.5)	(5.0)	2.45	SK266A	灯明皿 煤付箱	*
第4-40図6	底部系切土師器	小皿	-	7.7	4.9	1.9	SK266A	灯明皿 煤付箱	*
第4-40図9	須恵器	坏蓋	-	(9.4)	-	(1.4)	SK266		
第4-40図10	古代土師器	坏	-	(14.0)	-	(3.6)	SK266		
第4-40図11	陶器	甕	備前	-	-	-	SK266	近世1期	
第4-40図12	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK266	2期	
第4-41図1	口ク口目土師器	皿	-	(11.4)	(5.4)	2.5	SK227		
第4-43図1	冑磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SK189	C-II類 帯文帯、ラマ式連弁	
第4-43図2	陶器	甕	備前	-	-	-	SK189	中世3~4期	
第4-43図3	陶器	甕	備前	-	-	-	SK189	中世5期	
第4-43図4	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SK189		
第4-43図5	瓦質土器	鉢	-	-	-	-	SK189	防長系	
第4-43図6	底部系切土師器	坏	-	-	4.9	-	SK189		
第4-44図1	冑磁	碗	中国	(14.0)	-	-	SK193		
第4-44図2	底部系切土師器	皿	-	(11.8)	(6.6)	2.6	SK193	口縁打欠	
第4-44図3	口ク口目土師器	坏	-	(11.2)	(5.6)	2.8	SK193		
第4-44図4	口ク口目土師器	小皿	-	7.5	4.5	1.5	SK193	煤付箱 2ヶ所打欠	
第4-47図1	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD140	中世4期	
第4-47図2	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD140	中世5期	
第4-49図1	瓦質土器	不明	-	-	-	-	SE235	格子状の刻印	
第4-49図2	底部系切土師器	坏	-	13.0	(9.8)	4.0	SE235		
第4-49図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE235	1期	
第4-49図4	瓦質土器	甕瓶?	-	(8.8)	-	-	SE235	甕瓶あるいは水瓶 菊花文	
第4-49図5	須恵器	皿	-	-	-	-	SE235		
第4-51図1	底部系切土師器	小皿	山口	-	(4.4)	-	SE144	大内系	
第4-51図2	底部系切土師器	-	-	(12.6)	(9.8)	4.1	SE144		
第4-51図3	底部系切土師器	小皿	-	8.2	3.4	2.5	SE144	灯明皿 煤付箱	
第4-51図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE144	2期	
第4-53図1	冑磁	碗	中国	-	-	-	SE291	剣先連弁文	
第4-53図2	瓦質土器	香炉	-	(9.0)	-	-	SE291	菊花文刻印	
第4-53図3	底部系切土師器	坏	-	-	(5.8)	-	SE291		
第4-53図4	京都系土師器	皿	-	(13.2)	-	1.9	SE291	1期	
第4-54図1	底部系切土師器	小皿	-	(7.0)	5.0	2.3	SK238		
第4-54図2	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK238	口縁打欠	
第4-55図1	底部系切土師器	小皿	山口	-	(5.6)	(1.5)	SK243	大内系	
第4-57図1a	瓦質土器	瓦灯	-	-	-	-	SD265		41
第4-57図1b	瓦質土器	瓦灯	-	-	-	-	SD265	穿孔あり	*
第4-57図1c	瓦質土器	瓦灯	-	-	-	-	SD265	穿孔あり	*
第4-57図1d	瓦質土器	瓦灯	-	-	-	-	SD265		*
第4-57図1e	瓦質土器	瓦灯	-	-	-	-	SD265		*
第4-57図2	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SK265		
第4-57図3	底部系切土師器	小皿	-	-	-	-	SK265		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器④)

挿図No.	器 種		生産地	法 国 (cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第4-57図4	底部系切土師器	小皿	-	(8.0)	(6.0)	2.0	SK265		
第4-60図1	白磁	碗	-	-	-	-	SK285	B-IV類	
第4-60図2	白磁	小皿	-	(9.4)	-	(2.4)	SK285	D群 15世紀	
第4-60図3	土師質土器	燗台	-	-	5.6	4.2	SK285	A類	
第4-61図1	口く目土師器	皿	-	(14.6)	(7.2)	2.15	SK163		
第4-62図1	京都系土師器	皿	-	(12.9)	-	1.9	SK190		
第4-64図1	京都系土師器	皿	-	(13.2)	-	2.6	SK191	1期	
第4-64図2	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK191	1期	
第4-64図3	京都系土師器	皿	-	(11.8)	-	(2.2)	SK191	2期	
第4-66図1	底部系切土師器	小皿	-	(8.2)	-	1.6	ST192		
第4-66図2	京都系土師器	皿	-	(13.2)	-	2.4	ST192	1期	
第4-66図3	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	2.0	ST192	1期	
第4-66図4	京都系土師器	皿	-	12.6	-	2.2	ST192	1期	
第4-68図1	陶器	皿	瀬戸美濃	(11.1)	-	-	SD284	大塚3期	
第4-68図2	京都系土師器	小皿	-	(9.6)	-	2.0	SD284	2期	
第4-68図3	京都系土師器	小皿	-	(10.0)	-	2.1	SD284	2期	
第4-69図1	京都系土師器	小皿	-	(10.0)	-	-	SX164	2期 内外に煤付着	
第4-69図2	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SX164	2期	
第4-71図7	京都系土師器	皿	-	(12.6)	-	2.55	SE234	2期	
第4-71図8	京都系土師器	小皿	-	(10.0)	-	2.2	SE234	2期	
第4-71図9	白磁	碗	-	-	-	-	SE234	B-IV'類	
第4-73図1	底部系切土師器	皿	-	12.7	6.0	2.4	SK224	口縁打欠	41
第4-73図2	京都系土師器	皿	-	11.4	-	1.9	SK224	2期	
第4-73図6	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK224		
第4-73図7	白磁	碗	中国(景德鎮窯)	-	5.0	-	SK224	C群 蓮子碗	
第4-73図8	瓦質土器	火鉢脚	-	-	-	-	SK224		
第4-73図9	瓦質土器	碗	-	-	3.5	-	SK224		
第4-73図10	底部系切土師器	皿	-	-	5.5	-	SK224		
第4-73図11	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK224		
第4-73図12	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK224		
第4-73図13	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK224		
第4-73図14	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK224		
第4-75図1	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	-	7.2	-	SK232		
第4-75図2	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SK232	口縁に二条の突帯	
第4-75図3	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SK232		
第4-75図4	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	2.2	SK232	0期	
第4-75図5	京都系土師器	皿	-	(11.4)	-	1.9	SK232	1期	
第4-75図6	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	-	SK232	1期	
第4-75図7	京都系土師器	皿	-	12.6	-	2.2	SK232	1期	
第4-75図8	京都系土師器	皿	-	(15.0)	-	-	SK232	1期 口縁打欠	
第4-75図9	京都系土師器	皿	-	(13.0)	-	2.6	SK232	1~2期	
第4-75図10	京都系土師器	皿	-	(12.0)	-	-	SK232	2期	
第4-75図11	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	-	SK232	2期	
第4-75図12	京都系土師器	皿	-	(12.8)	-	-	SK232	1~2期	
第4-75図13	京都系土師器	皿	-	(13.8)	-	-	SK232	2期	
第4-75図14	京都系土師器	皿	-	(13.2)	-	-	SK232	2期	
第4-75図16	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	SK232	晩期後半	41
第4-75図17	陶器	火鉢	-	-	4.5	-	SK232	上野高取系 葛灰釉	
第4-76図1	唐織陶器	四耳壺	中国	10.0	-	-	SK278	接合資料20	
第4-76図2	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK278	2期 るつばに転用	
第4-78図1	瓦質土器	火鉢	-	(31.6)	-	14.2	SK293	接合資料15	
第4-78図2	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK293	1期	
第4-79図1	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK267	2期	
第4-82図1	陶器	掃鉢	備前	(23.2)	-	4.9	SD118	中世4期	41
第4-82図2	陶器	罍	備前	-	-	-	SD118	中世4~5期	
第4-82図3	陶器	罍	備前	-	-	-	SD118	中世6期	
第4-82図4	瓦質土器	火鉢	-	(37.8)	-	(11.5)	SD118	双頭磁手電雲文刻印	
第4-82図5	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD118	突帯貼付	
第4-84図1	陶器	壺	備前	-	-	-	SD117	中世6期	
第4-84図2	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD117	中世6a期	
第4-84図3	陶器	平鉢	備前	(27.4)	-	-	SD117		
第4-84図4	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD117		
第4-84図5	瓦質土器	掃鉢	山口	(27.8)	-	-	SD117	防長系	
第4-84図6	京都系土師器	皿	-	8.8	-	1.8	SD117	灯明皿	
第4-86図1	白磁	皿	中国	(12.0)	(6.4)	3.0	SD116	E-2群 16世紀	
第4-86図2	白磁	棧花皿	中国(龍泉窯)	(13.4)	-	-	SD116	16世紀	
第4-86図3	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	(12.6)	(7.4)	2.8	SD116	E群	
第4-86図4	陶器	罍	備前	(41.4)	-	(9.0)	SD116	中世3期	
第4-86図5	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD116	中世5期	
第4-86図6	陶器	掃鉢	備前	(23.0)	-	-	SD116	中世6A期	
第4-86図7	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD116	中世6A期	
第4-86図8	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SD116	中世6A期	
第4-86図9	瓦質土器	掃鉢	山口	-	-	-	SD116	防長系	
第4-86図10	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD116	双頭磁手電雲文刻印	
第4-86図11	底部系切土師器	皿	-	(13.0)	(5.6)	2.9	SD116		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)

挿図No.	器種		生産地	法目 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-86図12	京都系土師器	小皿	-	9.4	-	2.3	SD116	2期	
第4-86図17	古代土師器	坏蓋	-	(25.4)	-	(3.9)	SD116		
第4-88図1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	(7.4)	-	SD250	底部裏に赤色顔料の施し	42
第4-88図2	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	(7.8)	-	SD250	内面に文様、口縁部に刻目	
第4-88図3	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD250		
第4-88図4	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	(6.8)	-	SD250		
第4-88図5	青磁	碗	中国(龍泉窯)	(12.0)	-	-	SD250		
第4-88図6	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(9.4)	-	SD250	B1群 唐草文	
第4-88図7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD250	F群	
第4-88図8	青花	皿	中国(漳州窯)	(10.0)	(4.0)	2.7	SD250	C群模倣	
第4-88図9	青花	碗	中国(漳州窯)	-	(4.6)	(1.45)	SD250		
第4-88図10	青花	碗	中国(漳州窯)	-	(5.4)	-	SD250	接合資料36	
第4-88図11	陶器	壺	中国(磁州窯)	-	-	-	SD250	白地鉄絵襷襦袢 龍鳳文	42
第4-88図12	陶器	壺	備前	(13.2)	-	-	SD250		
第4-88図13	陶器	鉢	備前	(17.0)	(13.8)	12.7	SD250	接合資料16	42
第4-88図14	陶器	甕	備前	(34.8)	(30.8)	68.4	SD250	中世5期 接合資料35	
第4-88図15	陶器	甕	備前	-	-	-	SD250	中世6期	
第4-88図16	陶器	甕	備前	(51.2)	-	(10.7)	SD250	中世5期	
第4-88図17	陶器	甕	備前	-	-	-	SD250	中世6期	
第4-88図18	陶器	甕	備前	(54.4)	-	-	SD250	近世1期	
第4-88図19	陶器	甕	備前	(54.4)	-	-	SD250	近世1期	
第4-88図20	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD250	中世3~4期	
第4-88図21	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD250	中世4b~5a期	
第4-88図22	陶器	掃針	備前	(29.0)	-	-	SD250	中世5b期	
第4-88図23	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD250	中世6期	
第4-88図24	陶器	掃針	備前	(33.0)	-	(10.0)	SD250	近世1a期	
第4-88図25	陶器	掃針	備前	(31.8)	12.4	13.7	SD250	近世1a期	
第4-88図26	中世須恵器	掃針	-	-	-	-	SD250		
第4-88図27	瓦質土器	脚付火鉢	-	-	-	-	SD250	脚部貼付 獸脚に穿孔	
第4-88図28	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD250		
第4-88図29	瓦質土器	火鉢	-	(38.0)	(34.6)	-	SD250	接合資料6	
第4-88図30	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD250		
第4-88図31	瓦質土器	火鉢	-	-	(33.6)	-	SD250		
第4-88図32	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD250		
第4-88図33	瓦質土器	鉢	-	-	-	-	SD250		
第4-88図34	瓦質土器	鉢	-	-	-	-	SD250	接合資料1	
第4-88図35	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	多重菱形文刻印	
第4-88図36	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD250	獸脚	
第4-88図37	土師質土器	鍋	-	-	-	-	SD250		
第4-88図38	底部糸切土師器	坏	-	12.1	7.4	4.5	SD250	口縁打欠	
第4-88図39	底部糸切土師器	小皿	-	7.6	4.0	2.0	SD250	口縁打欠 河野A類	
第4-88図40	口ク口目土師器	皿	-	-	(6.6)	-	SD250		
第4-88図41	口ク口目土師器	皿	-	(15.6)	-	-	SD250		
第4-88図42	京都系土師器	小皿	-	(10.0)	-	1.5	SD250	2期 灯明皿 煤付蝋	
第4-88図43	京都系土師器	小皿	-	(8.4)	-	1.9	SD250	灯明皿 口縁打欠 煤付蝋	
第4-88図44	京都系土師器	小皿	-	8.4	-	2.0	SD250	1期 内外一部煤付蝋	
第4-88図45	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	-	SD250	2期	
第4-88図46	京都系土師器	皿	-	(13.4)	-	2.1	SD250	2期	
第4-88図47	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SD250	2期	
第4-88図48	京都系土師器	小皿	-	(10.2)	-	2.4	SD250	2期	
第4-88図49	京都系土師器	小皿	-	(8.2)	-	1.8	SD250	2期	
第4-88図50	京都系土師器	皿	-	(11.4)	-	2.9	SD250	3期	
第4-88図51	底部糸切土師器	燗台	-	-	7.4	-	SD250	5類	
第4-88図52	土師質土器	燗台	-	(6.8)	4.6	6.0	SD250	A2類	
第4-90図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(5.0)	-	SD270	E群 饜頭心	
第4-90図2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(4.8)	-	SD270	E群 饜頭心	
第4-90図3	陶器	碗	朝鮮	(13.4)	(5.6)	6.3	SD270		
第4-90図4	陶器	甕	備前	-	-	-	SD270	中世5期	
第4-90図5	陶器	甕	備前	(54.4)	-	-	SD270	近世1期	
第4-90図6	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD270	中世4b期	
第4-90図7	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD270	中世4b期	
第4-90図8	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD270	近世1b期	
第4-90図9	陶器	浅鉢	備前	-	-	-	SD270		
第4-90図10	陶器	碗	唐津	(11.4)	(4.6)	6.7	SD270	鉄袖 曇灰袖 口縁部皮蝋	43
第4-90図11	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD270		
第4-90図12	瓦質土器	壺	-	-	(9.0)	-	SD270	双頭虎手竜雲文と雷文刻印	43
第4-90図13	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	2.0	SD270	3期	
第4-90図14	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	(2.3)	SD270	3期	
第4-90図15	京都系土師器	小皿	-	(5.3)	(2.2)	2.1	SD270		
第4-90図20	須恵器	坏蓋	-	(14.3)	-	3.7	SD270	7世紀前半	
第4-90図21	須恵器	円面硯	-	-	-	-	SD270	8世紀	43
第4-90図22	古代土師器	甕	-	-	-	-	SD270	企救型	
第4-92図1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	(8.0)	-	SD131	C-IIb類	
第4-92図2	燒埴陶器	鉢	中国	(28.6)	(13.6)	-	SD131	B類 接合資料11	
第4-92図3	陶器	壺	備前	(18.0)	(20.2)	(17.05)	SD131	接合資料14	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑥)

挿図No.	器種		生産地	法田 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-92図4	陶器	甃	備前	-	-	(19.1)	SD131	近世1期	
第4-92図5	瓦質土器	風炉	-	(20.0)	-	(16.6)	SD131	接合資料2	43
第4-92図6	底部系切土師器	坏	-	12.9	8.6	3.4	SD131	河野2類	
第4-92図7	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SD131	1期	
第4-92図8	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SD131	1期	
第4-92図9	京都系土師器	小皿	-	7.2	-	1.6	SD131	2期	
第4-92図10	京都系土師器	坏	-	(10.6)	-	(3.7)	SD131	3期 口縁打欠	
第4-97図1	底部系切土師器	小皿	-	(8.0)	3.9	2.7	SD230	灯明皿 口縁部煤付筋 河野A類	
第4-97図2	底部系切土師器	小皿	-	(7.2)	4.0	2.4	SD230	河野A類	
第4-97図3	京都系土師器	皿	-	(10.8)	-	2.9	SD230	3期	
第4-97図4	陶器	甃	備前	(16.8)	22.2	58.4	SK261	接合資料22	43
第4-97図2	陶器	甃	備前	13.5	15.0	23.5	SK261	接合資料3 樹描波状文	44
第4-97図3	陶器	甃	備前	(36.8)	-	(5.5)	SK261		
第4-97図4	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK261		
第4-97図5	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK261	1期	
第4-97図6	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	2.4	SK261	2期	
第4-97図7	京都系土師器	皿	-	(8.6)	-	2.0	SK261	2期	
第4-97図8	底部系切土師器	皿	-	(12.0)	6.35	2.3	SK261	京都系土師器を模倣	
第4-98図1	黒褐釉陶器	甃	中国	(14.2)	-	(15.2)	SD292	接合資料19	44
第4-98図2	焼締陶器	鉢	中国	(35.6)	-	(11.7)	SD292	C類口縁 接合資料8	*
第4-98図3	瓦質土器	搦鉢	-	-	-	-	SD292		
第4-98図4	底部系切土師器	小皿	-	7.3	4.4	2.3	SD292	口縁部打欠	
第4-98図5	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	2.25	SD292	2期	
第4-102図16	陶器	甃	備前	(39.8)	-	(7.1)	SE148		
第4-102図20	甕	碗	中国(龍泉窯)	(12.4)	-	-	SE148	細線蓮井文	
第4-102図21	陶器	短頸壺	備前	(34.8)	24.4	40.9	SE148	接合資料4	44
第4-102図25	甕	鉢	中国(龍泉窯)	(11.6)	-	(2.2)	SE148	蓮井井文	
第4-102図26	荷花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(5.0)	-	SE148	E群 饅頭心	
第4-102図27	荷花	皿	中国(涪州窯)	-	(16.5)	-	SE148	接合資料25	
第4-102図28	底部系切土師器	小皿	-	(8.6)	(6.4)	2.1	SE148	灯明皿 口縁部煤付筋	
第4-102図29	底部系切土師器	小皿	-	(8.4)	6.0	1.9	SE148	河野B類	
第4-102図30	京都系土師器	皿	-	(10.8)	-	(2.4)	SE148	1期	
第4-102図31	京都系土師器	小皿	-	(9.6)	-	2.0	SE148	1期	
第4-102図32	京都系土師器	小皿	-	(9.2)	-	1.9	SE148	1期 口縁打欠	
第4-102図33	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	(2.1)	SE148	2期	
第4-102図34	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	2.6	SE148	3期	
第4-102図35	土師質土器	土鍋脚	山口	-	-	-	SE148	防長系	
第4-103図1	荷花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK264	B1群	44
第4-103図2	焼締陶器	搦鉢	中国	(17.2)	(6.6)	-	SK264	接合資料18	*
第4-105図1	京都系土師器	小皿	-	8.6	-	2.0	SK236	1ないし2期 被熱による剥離痕 口縁打欠	
第4-105図2	荷花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK236	B群	
第4-105図3	底部系切土師器	皿	-	(13.0)	(8.0)	2.0	SK236	京都系土師器を模倣	
第4-105図4	京都系土師器	皿	-	(12.6)	-	2.2	SK236	2期	
第4-105図5	京都系土師器	皿	-	(14.4)	-	2.7	SK236	2期	
第4-105図6	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	2.6	SK236	3期	
第4-105図7	土師質土器	燗台	-	-	8.4	8.0	SK236	B類 口縁打欠	
第4-107図1	白磁	皿	-	(11.8)	(6.5)	2.95	SK252	E-1群	
第4-107図2	荷花	碗	中国(景德鎮窯)	(11.8)	-	-	SK252	E群 饅頭心	
第4-107図3	荷花	碗	中国(涪州窯)	-	(4.8)	(2.5)	SK252		
第4-107図4	荷花	碗	中国(涪州窯)	(12.8)	-	-	SK252		
第4-107図5	青釉陶器	小皿	-	-	(4.0)	-	SK252	翡翠釉	
第4-107図6	陶器	天目碗	瀬戸美濃	-	3.2	(1.0)	SK252	口縁全体打欠	
第4-107図7	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK252	中世6a期	
第4-107図8	京都系土師器	皿	-	(13.2)	-	(2.4)	SK252	2期	
第4-107図9	京都系土師器	皿	-	(16.0)	-	2.7	SK252	2期 口縁打欠	
第4-107図10	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	2.2	SK252	2期	
第4-107図11	京都系土師器	皿	-	(12.2)	-	(1.95)	SK252	3期	
第4-109図1	甕	棧花皿	中国(龍泉窯)	(12.9)	(6.4)	3.1	SK269		
第4-109図2	荷花	碗	中国(景德鎮窯)	(11.6)	-	-	SK269	E群 饅頭心 口縁内面に四方梅文	
第4-109図3	荷花	皿	中国(景德鎮窯)	(13.0)	-	(1.7)	SK269	B群	
第4-109図4	荷花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK269		
第4-109図5	荷花	小皿	中国(涪州窯)	(10.8)	(4.8)	2.8	SK269	景德鎮窯C群模倣 基蜀底 口縁打欠	
第4-109図6	褐釉陶器	四耳壺	中国	-	-	-	SK269	外面へラ記号	
第4-109図7	陶器	渦線皿	瀬戸美濃	(12.0)	-	(2.1)	SK269	大窯3期	
第4-109図8	陶器	甃	備前	-	-	-	SK269	中世6b期	
第4-109図9	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SK269	近世1期	
第4-109図10	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK269	1期	
第4-109図11	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK269	3期	
第4-109図12	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK269	3期	
第4-109図13	土師質土器	鍋	-	-	-	-	SK269	河野B-II類	
第4-111図1	陶器	甃	備前	(12.0)	-	-	SK279		
第4-113図1	甕	菊花皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK263		
第4-113図2	甕	碗	中国(龍泉窯)	-	4.8	-	SK263	B-IV類	
第4-113図3	荷花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK263	接合資料20	
第4-113図4	荷花	碗	中国(景德鎮窯)	(12.0)	6.4	2.6	SK263	E群	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑦)

押図No.	器種		生産地	法図 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-113図5	苺花	碗	中国(澗州窯)	30.8	(14.0)	7.6	SK263		
第4-113図6	苺花	碗	中国(澗州窯)	-	5.2	(1.5)	SK263	口縁全周打欠	44
第4-113図7	底部糸切土師器	小皿	-	(5.9)	4.9	1.75	SK263	15世紀	
第4-113図8	底部糸切土師器	皿	-	(11.0)	(5.8)	2.9	SK263	京都系土師器を模倣	
第4-115図1	陶器	掃針	備前	-	-	-	SK229	中世6期	
第4-115図2	瓦質土器	火鉢	-	(48.6)	-	-	SK229		
第4-115図3	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SK229	2期 灯明皿 煤付蓋	
第4-116図1	京都系土師器	皿	-	(13.0)	-	-	SK273	1期	
第4-118図1	白磁	多角坏	中国	-	-	-	SK262	D群	
第4-118図2	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(12.5)	(5.8)	5.7	SK262	接合資料13	
第4-118図3	陶器	水差し	備前	(20.8)	(14.2)	17.6	SK262	茶器の可能性 接合資料7	44
第4-118図4	陶器	壺	備前	(13.6)	-	-	SK262		
第4-118図5	陶器	壺	備前	(39.6)	-	-	SK262	中世6a期	
第4-118図6	陶器	壺	備前	-	-	-	SK262	中世6期	
第4-118図7	陶器	壺	備前	(56.8)	-	-	SK262		
第4-118図8	陶器	壺	備前	-	(41.2)	-	SK262		
第4-118図9	陶器	壺	備前	-	(20.0)	-	SK262	接合資料27	
第4-118図10	陶器	壺	備前	-	-	-	SK262		
第4-118図11	京都系土師器	皿	-	(14.4)	-	2.2	SK262	2期	
第4-118図12	京都系土師器	小皿	-	-	(9.2)	2.1	SK262	2期	
第4-121図1	白磁	碗	中国	-	-	-	SD141	E-1群	
第4-121図2	苺花	碗	中国(澗州窯)	-	(5.6)	-	SD141	薄子碗を模倣	
第4-121図3	苺花	碗	中国(澗州窯)	(14.0)	4.7	7.5	SD141	被熱により変質	
第4-121図4	焼締陶器	鉢	中国	(21.2)	-	(3.7)	SD141	A類	
第4-121図5	陶器	鉢	中国	-	(13.2)	(2.0)	SD141	わずかに上げ底	
第4-121図6	陶器	皿	唐津	-	-	-	SD141	絵唐津皿 1590~1610年	
第4-121図7	陶器	壺	備前	-	-	-	SD141	中世6期	
第4-121図8	陶器	壺	備前	-	-	-	SD141	中世6期	
第4-121図9	陶器	壺	備前	-	-	-	SD141	近世1期	
第4-121図10	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD141	中世5a期	
第4-121図11	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD141	中世6a期	
第4-121図12	陶器	掃針	備前	(26.0)	-	-	SD141	近世1期	
第4-121図13	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD141	近世1期	
第4-121図14	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	外面雷文帯刻印 突帯貼付	
第4-121図15	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	被熱による剥離が激しい	
第4-121図16	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	菊花文刻印 突帯貼付	
第4-121図17	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	多重菱形文刻印	
第4-121図18	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	巴文刻印	
第4-121図19	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD141	菊花文刻印	
第4-121図20	瓦質土器	鉢	-	(25.6)	(12.6)	8.35	SD141	玉縁状口縁 高台貼付	
第4-121図21	瓦質土器	釜	-	-	(14.4)	-	SD141	底部に煤付蓋	
第4-121図22	瓦質土器	釜	-	-	-	-	SD141		
第4-121図23	瓦質土器	釜	-	(14.4)	(16.4)	18.75	SD141	鐙付 下部煤付蓋	
第4-121図24	瓦質土器	鍋	山口	-	-	-	SD141	防長系	
第4-121図25	瓦質土器		-	-	-	-	SD141	小型箱形土器	
第4-121図26	口ク口目土師器	皿	山口	-	-	-	SD141	大内系	
第4-121図27	底部糸切土師器	坏	-	12.6	6.8	2.3	SD141		
第4-121図28	底部糸切土師器	皿	-	(12.6)	(6.3)	3.4	SD141	河野A類	
第4-121図29	底部糸切土師器	坏	-	-	6.9	-	SD141	河野A類	
第4-121図30	底部糸切土師器	坏	-	(13.0)	(6.8)	3.0	SD141	河野A類	
第4-121図31	底部糸切土師器	小皿	-	(8.8)	(4.8)	2.1	SD141	被熱による剥離が激しい	
第4-121図32	底部糸切土師器	小皿	-	(7.8)	(4.4)	2.6	SD141	河野A類	
第4-121図33	口ク口目土師器	皿	-	-	6.8	(1.5)	SD141		
第4-121図34	口ク口目土師器	皿	-	-	6.4	(1.5)	SD141		
第4-121図35	口ク口目土師器	皿	-	(11.0)	(5.8)	3.0	SD141		
第4-121図36	口ク口目土師器	皿	-	-	(5.3)	-	SD141	焼成前の穿孔4箇所	
第4-121図37	口ク口目土師器	小皿	-	(9.0)	(5.0)	1.9	SD141		
第4-121図38	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	2.2	SD141	2期	
第4-121図39	京都系土師器	皿	-	13.2	-	2.9	SD141	2期	
第4-121図40	京都系土師器	小皿	-	(10.6)	-	(2.0)	SD141	2期 灯明皿 口縁煤付蓋	
第4-121図41	京都系土師器	皿	-	(12.8)	-	(2.5)	SD141	2期	
第4-121図42	京都系土師器	坏	-	(11.4)	-	3.7	SD141		
第4-121図43	京都系土師器	小皿	-	8.6	-	2.3	SD141	2期 灯明皿 全体に煤付蓋	
第4-121図44	京都系土師器	小皿	-	(8.6)	-	2.0	SD141	2期 被熱による剥離	
第4-121図45	土師器	燗台	-	-	6.4	4.4	SD141	A2類 穿孔が貫通	
第4-121図54	陶器	掃針	備前	-	(13.0)	-	SD141	メンコに転用	
第4-121図59	黒色土器	碗	-	(8.4)	-	(1.8)	SD167	A類 古代	
第4-123図1	苺花	碗	中国(龍泉窯)	-	(7.0)	3.5	SD167		
第4-123図2	苺花	碗	中国(景德鎮窯)	(11.6)	-	-	SD167	E群 罍頭心	
第4-123図3	苺花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD167	F群 外面に錆	
第4-123図4	陶器	胎徳利	備前	(4.8)	-	-	SD167		
第4-123図5	陶器	短頸壺	備前	(10.6)	-	-	SD167		
第4-123図6	陶器	壺	備前	-	-	-	SD167	2ないし3期	
第4-123図7	陶器	壺	備前	-	-	-	SD167	3ないし4期	
第4-123図8	陶器	掃針	備前	-	-	-	SD167	6a期	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器⑤)

挿図No.	器 種		生産地	法量 (cm)			遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径	器高			
第4-123図9	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD167	双顔顔手電燈文刻印	
第4-123図10	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD167	菱文 菊花文刻印	
第4-123図11	瓦質土器	火鉢	-	(33.0)	(31.6)	8.5	SD167		
第4-123図12	瓦質土器	火鉢	-	-	-	-	SD167	方格文刻印	
第4-123図13	瓦質土器	鍋	山口	-	-	-	SD167	防長系	
第4-123図14	京都系土師器	小皿	-	(12.4)	-	1.7	SD167	1期	
第4-123図15	京都系土師器	小皿	-	(8.6)	-	2.35	SD167	1期	
第4-123図16	京都系土師器	小皿	-	(8.3)	-	1.9	SD167	1期	
第4-123図17	京都系土師器	小皿	-	-	-	-	SD167	1期	
第4-123図18	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	(2.2)	SD167	2期 口縁一部打欠	
第4-123図19	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SD167	2期	
第4-123図20	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	(1.8)	SD167	2期	
第4-123図21	京都系土師器	皿	-	(11.8)	-	2.2	SD167	2期	
第4-123図22	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SD167	2期	
第4-123図23	京都系土師器	小皿	-	(8.0)	-	(2.1)	SD167	2期 灯明皿 煤付箱	
第4-123図24	京都系土師器	小皿	-	(8.4)	-	2.15	SD167	2期 灯明皿 煤付箱	
第4-123図25	京都系土師器	小皿	-	(8.0)	-	1.6	SD167	2期 灯明皿 煤付箱	
第4-123図26	京都系土師器	小皿	-	9.0	-	2.0	SD167	2期 灯明皿 煤付箱	
第4-123図27	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	2.3	SD167	3期	
第4-123図43	古代須恵器	坏身	-	-	(10.0)	-	SD167	8世紀	
第4-123図44	古代土師器	坏蓋	-	-	-	-	SD167		
第4-125図1	白磁	皿	-	(12.6)	(6.4)	2.65	SD168	16世紀後半	
第4-125図2	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD168		45
第4-125図3	青磁	棧花皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD168	15世紀代	
第4-125図4	青磁	菊花皿	中国(景德鎮窯)	(12.4)	(6.1)	2.8	SD168		
第4-125図5	青磁	皿	-	(12.6)	(8.0)	3.1	SD168	16世紀後半	
第4-125図6	五彩	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD168		
第4-125図7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(11.0)	-	SD168	E群	
第4-125図8	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD168	F群	
第4-125図9	黒褐釉陶器	蓋	中国	(10.6)	-	(2.4)	SD168		
第4-125図10	陶器	甕	備前	-	-	-	SD168	中世4~5期	
第4-125図11	陶器	舟徳利	備前	-	(4.8)	-	SD168		
第4-125図12	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD168	中世5期	
第4-125図13	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SD168	中世5b期	
第4-125図14	陶器	搦鉢	備前	(28.8)	-	-	SD168	近世1a期	
第4-125図15	陶器	天目碗	瀬戸美濃	-	-	-	SD168		
第4-125図16	底部糸切土師器	小皿	-	7.8	5.0	1.5	SD168	河野B類	
第4-125図17	京都系土師器	皿	-	(12.0)	-	-	SD168	1期	
第4-125図18	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SD168	4期 被熱による黒変→増焔に転用か	
第4-125図24	古代土師器	甕	-	(13.2)	-	-	SD168	被熱による赤変	
第4-127図1	白磁	皿	-	-	(4.6)	-	SE147	16世紀	
第4-127図2	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE147	中世6b期	
第4-127図3	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	SE147	中世6b期	
第4-127図4	京都系土師器	小皿	-	(10.3)	-	2.3	SE147	2期	
第4-127図7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.8)	-	SE147	B群	
第4-127図8	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	(2.5)	SE147	2期	
第4-127図9	京都系土師器	皿	-	13.4	-	(2.0)	SE147	2期	
第4-127図11	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.4)	-	SE147	F群 外面に錆 鈎皿	
第4-129図1	陶器	甕	備前	(48.6)	-	(6.5)	SE210	中世5期	
第4-129図2	陶器	甕	備前	-	-	-	SE210	近世1期	
第4-129図3	瓦質土器	茶釜	-	(14.6)	-	(11.8)	SE210	接合資料21	
第4-129図4	京都系土師器	小皿	-	(9.4)	-	2.0	SE210	1期 口縁部1箇所打欠	
第4-129図5	京都系土師器	小皿	-	(9.0)	-	1.9	SE210	灯明皿 口縁に広く煤付箱	
第4-129図9	瓦質土器	火鉢	-	(37.2)	(30.4)	30.2	SE210		
第4-129図10	京都系土師器	皿	-	-	-	-	SE210	1期	
第4-129図11	京都系土師器	皿	-	(12.0)	-	(2.1)	SE210	2期	
第4-130図1	陶器	碗	朝鮮	(16.6)	-	(3.6)	SE218	彫三島 接合資料9	45
第4-132図1	白磁	皿	-	-	(6.4)	-	SK231	接合資料23	
第4-132図2	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	-	-	-	SK231	頸部のみ	
第4-132図3	青白磁	瓶	中国	-	(7.2)	-	SK231		
第4-132図4	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK231	C群 外面唐草文 蓮子碗	
第4-132図5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK231	E群 總頭心 内面四方瘡文	
第4-132図6	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK231	E群	
第4-132図7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(9.2)	(5.0)	2.65	SK231	E群	
第4-132図8	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(9.8)	-	(2.0)	SK231	E群	
第4-132図9	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK231		
第4-132図10	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(9.8)	(5.2)	2.8	SK231	E群	
第4-132図11	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK231	F群	
第4-132図12	青花	鉢	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK231		
第4-132図13	青花	碗	中国(漳州窯)	-	-	-	SK231		
第4-132図14	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	2.1	SK231	1期	
第4-132図15	京都系土師器	皿	-	(10.8)	-	(2.4)	SK231	2期	
第4-132図16	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	(2.7)	SK231	2期	
第4-132図17	京都系土師器	皿	-	(12.0)	-	2.5	SK231	2期	
第4-133図1	京都系土師器	皿	-	(11.2)	-	2.0	SK215	2期	



第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土器・陶磁器◎)

挿図No.	器種	生産地	法度 (cm)			遺構名	備考	図版No.	
			口径	底径	器高				
第4-133図2	京都系土師器	皿	-	-	-	SK215	2期		
第4-133図3	弥生土器	-	-	-	-	SK215	口縁肩部に帯がけの刻み目		
第4-137図1	草南三彩	盤	中国	-	-	SP213		45	
第4-140図1	黒褐釉陶器	蓋	中国	-	-	SK180			
第4-143図1	土師質土器	甗	-	-	-	SK246	奈良時代		
第4-144図1	瓦質土器	鍋	-	-	-	SP195	煤付甗		
第4-144図2	京都系土師器	皿	-	(12.4)	-	2.0	SP240	1期	
第4-147図1	磁器	小皿	中国	-	-	-	SD138	翡翠釉	
第4-147図2	陶器	碗	唐津	-	-	-	SD138	藁灰釉	
第4-150図1	陶器	碗	唐津	-	3.8	-	SD145	18世紀前半	
第4-150図2	陶器	小坏	唐津	-	3.0	-	SD145	18世紀後半	
第4-150図5	白磁	小坏	中国	-	(2.9)	-	SD145	16世紀	
第4-150図6	青花	碗	中国	-	(4.2)	-	SD145	E群	
第4-150図7	青花	碗	中国(温州窯)	-	4.6	-	SD145	全周打欠	
第4-150図8	陶器	舟德利	備前	-	-	-	SD145		
第4-150図9	陶器	甗	備前	-	-	-	SD145	中世2期	
第4-151図1	白磁	皿	肥前	-	(6.4)	-	SK146	18世紀後半	
第4-151図2	陶器	搦鉢	唐津	-	-	-	SK146		
第4-151図3	陶器	碗	唐津	-	4.8	-	SK146	砂目碗。口縁全周を打ち欠く。	
第4-152図1	陶器	碗	唐津	(12.7)	-	-	SP142	藁灰釉	
第4-153図1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	B6区	D類	
第4-153図2	青磁	碗	中国(龍泉窯)	(13.0)	-	-	B6区	B-IV類 細線連弁文	
第4-153図3	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	B6区		
第4-153図4	陶器	鉢	唐津	(8.4)	-	-	B6区	絵唐津 向こう付け	
第4-153図5	京都系土師器	皿	-	(11.6)	-	-	B6区	中世2期	
第4-153図6	白磁	皿	中国	-	4.3	-	C6区		
第4-153図7	白磁	皿	中国	-	-	-	B7区		
第4-153図8	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(10.0)	2.9	2.4	B7区	C群 葎蜀底	
第4-153図9	陶器	皿	唐津	-	-	-	B7区	絵唐津	45
第4-153図10	陶器	鉢	唐津	-	(5.0)	-	B7区	絵唐津	
第4-153図11	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	B7区	中世6期	
第4-153図12	京都系土師器	皿	-	(12.6)	-	1.9	B7区	1期	
第4-153図15	青磁陶器	小皿	-	-	-	-	C7区	翡翠釉	
第4-153図16	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	C7区	中世5a期	
第4-153図17	陶器	甗	備前	-	-	-	C7区	中世6期	
第4-153図18	陶器	皿	唐津	-	-	-	C7区	絵唐津	
第4-153図19	陶器	変形碗	唐津	-	-	-	C7区	絵唐津	
第4-153図20	陶器	皿	唐津	-	(3.1)	-	C7区	胎土自唐津	
第4-153図21	京都系土師器	小皿	-	(9.0)	5.6	1.6	C7区	板状圧痕	
第4-153図22	京都系土師器	小皿	-	(7.6)	-	-	C7区	2期 灯明皿 口縁部煤付甗	
第4-153図23	京都系土師器	皿	-	-	-	-	C7区	4期	
第4-153図26	古代土師器	小甗	-	(13.4)	-	-	C7区		
第4-153図27	白磁	皿	中国	-	-	-	B8区	模花皿	
第4-153図28	青磁	香炉	中国	-	-	-	B8区		
第4-153図29	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	B8区	B類	
第4-153図30	青花	碗	中国(州窯)	-	-	-	B8区		
第4-153図31	陶器	甗	備前	-	-	-	B8区	中世5期	
第4-153図32	陶器	水注	備前	-	-	-	B8区	根合資料18	45
第4-153図33	陶器	皿	唐津	-	(5.1)	-	B8区	灰釉	
第4-153図34	陶器	皿	唐津	-	-	-	B8区	灰釉	
第4-153図35	京都系土師器	小皿	-	(7.6)	-	1.8	B8区	1期	
第4-153図36	京都系土師器	小皿	-	8.5	-	2.0	B8区	2期 灯明皿 口縁部煤付甗 打欠	
第4-153図40	古代土師器	皿	-	(15.0)	-	-	B8区	8世紀	
第4-153図41	陶器	皿	瀬戸美濃	-	-	-	B8区	B-3期 卸皿	
第4-153図42	陶器	壺	-	(18.0)	-	-	C8区		
第4-153図43	京都系土師器	皿	-	(13.5)	-	-	C8区	1期	
第4-153図44	京都系土師器	皿	-	(8.4)	-	-	C8区	1期	
第4-153図45	京都系土師器	小皿	-	(8.3)	-	1.9	C8区	1期	
第4-153図46	京都系土師器	小皿	-	(9.35)	-	1.7	C8区	2期 煤付甗	
第4-153図47	京都系土師器	坏	-	-	-	-	C8区	4期	
第4-153図50	青磁	皿	中国	(10.6)	-	-	B9区	模花皿	
第4-153図51	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	B9区	E群	
第4-153図52	陶器	碗	唐津	(8.8)	-	-	B9区		
第4-153図53	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.4)	-	B9区	Ea群	
第4-153図54	磁器	碗	-	-	-	-	B9区		
第4-153図55	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(12.0)	-	-	B9区	鉄釉	
第4-153図56	陶器	皿	瀬戸美濃	(11.2)	(6.4)	2.2	B9区	大窯3期 渦巻皿	
第4-153図57	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	B9区	近世1B期	
第4-153図58	陶器	碗	唐津	-	4.8	-	B9区	絵唐津	45
第4-153図59	京都系土師器	皿	-	(15.6)	-	-	B9区	2期	
第4-153図60	京都系土師器	大皿	-	(21.0)	-	-	B9区	3期	
第4-153図66	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	C9区	C群 蓮子碗	
第4-153図68	瓦質土器	鍋	-	-	-	-	C10区		
第4-153図69	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	B11区	人形手	
第4-153図70	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	B11区	E群	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表 (土器・陶磁器⑩)

挿図No.	器種		生産地	法皿 (cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第4-153図71	母花	皿	中国 (京徳銀窯)	-	-	-	B11区 F群		
第4-154図1	弥生土器	甕	-	-	5.2	-	不明	弥生前期末 2次被熱	45
第4-154図2	土師器	甕	-	(13.0)	-	-	基盤、層中	古墳前期末~中期初め 布留式	#
第4-157図1	底部糸切土師器	小皿	-	9.6	5.0	1.9	ST268	海部郡産 河野E類	#
第4-157図2	底部糸切土師器	小皿	-	8.4	5.4	1.8	ST268	口縁部打欠 板状圧痕	#
第4-157図3	底部糸切土師器	坏	-	11.7	6.0	2.5	ST268	河野E類	
第4-163図1	底部糸切土師器	小皿	-	8.8	5.9	2.2	ST295	河野E類 灯明皿 口縁部煤付痕	
第4-174図51	京都系土師器	小皿	-	(8.6)	-	-	ST150	2期 灯明皿 口縁部煤付痕	
第4-174図52	京都系土師器	小皿	-	(9.0)	-	-	ST150	2期 灯明皿 口縁部煤付痕	
第4-174図53	京都系土師器	皿	-	(10.8)	-	-	ST150	2期	
第4-174図54	京都系土師器	小皿	-	(11.2)	-	-	ST150	2期	46
第4-174図55	京都系土師器	小皿	-	(9.0)	-	-	ST150	2期	#
第4-174図56	陶器	鉢	備前	(15.5)	-	-	ST150		
第4-174図57	陶器	大皿	唐津	-	-	-	ST150	絵唐津	
第4-174図58	京都系土師器	小皿	-	(8.0)	-	1.8	ST150	2期 板状圧痕 口縁部故意の打欠	
第4-177図6	白磁	皿	中国	(12.0)	-	-	ST149		
第4-177図7	京都系土師器	小皿	-	(11.4)	-	-	ST149	2期	
第4-177図8	京都系土師器	小皿	-	(8.2)	-	1.7	ST149	2期	
第4-177図9	黒色土器	碗	-	-	(7.6)	-	ST149	A類	
第4-177図10	京都系土師器	小皿	-	(12.0)	-	-	ST149	1期	
第4-177図11	京都系土師器	小皿	-	(8.4)	-	-	ST149	1期	
第4-177図12	京都系土師器	小皿	-	(12.2)	-	-	ST149	2期	46
第4-177図13	京都系土師器	皿	-	-	-	-	ST149	2期	
第4-179図1	陶器	插鉢	備前	-	-	-	ST152	中世6期	
第4-179図2	京都系土師器	皿	-	-	-	-	ST152	2期	
第4-179図3	京都系土師器	小皿	-	-	-	-	ST152	2期	
第4-183図2	京都系土師器	小皿	-	(8.2)	-	2.1	ST274	2期 口縁部打欠き	46
第6-5図1	華南三彩	魚形水滷	-	-	-	-	SK734	尾のみ残存 第7次調査	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表 (石製品⑪)

挿図No.	品種	材質	部位	寸法 (cm)				重量 (kg)	遺構名	備考	図版No.	
				最大径	口径	器高	厚さ					
第4-16図58	五輪塔	凝灰岩	水輪	最大径	25.0	口径	-	器高	(15.0)	-	SD165	
第4-16図59	五輪塔	凝灰岩	水輪	最大径	23.0	口径	-	器高	19.0	-	SD165	
第4-16図91	石臼	安山岩	下臼	口径	(38.0)	口径	-	器高	12.7	(10.5)	SD165	
第4-16図92	五輪塔	凝灰岩	空風輪	最大径	21.0	口径	-	器高	25.0	-	SD165	
第4-16図93	五輪塔	凝灰岩	空風輪	最大径	20.0	口径	-	器高	22.0	-	SD165	
第4-16図94	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	39.0	口径	35.0	器高	18.0	-	SD165	
第4-26図15	砥石	-	-	長さ	3.5	幅	3.0	器高	-	14.5	SK199	
第4-31図17	不明	結晶片岩	-	長さ	2.3	幅	2.3	厚さ	0.3	3.6	SK251	40
第4-40図8	不明	凝灰岩	-	長さ	-	幅	-	器高	-	-	SK266B	16世紀 石材に加工
第4-60図6	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	-	幅	-	器高	-	-	SK285	石材に加工
第4-60図7	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	-	幅	-	器高	10.0	-	SK285	石材に加工
第4-60図8	五輪塔	凝灰岩	-	長さ	-	幅	-	器高	19.0	-	SK285	石材に加工、全面に被熱
第4-60図9	五輪塔	凝灰岩	-	長さ	22.0	幅	20.0	器高	15.0	-	SK285	建築石材か
第4-60図10	五輪塔	凝灰岩	-	長さ	20.0	幅	(26.0)	器高	15.0	-	SK285	石材に加工
第4-82図8	人面朱磬	円磬	-	長さ	-	幅	4.0	厚さ	4.0	-	SD118	41
第4-84図7	茶臼	安山岩	下臼	口径	-	幅	-	器高	10.8	1.5	SD117	
第4-86図16	茶臼	花崗岩	上臼	口径	-	幅	-	器高	10.0	1.5	SD116	石材は関西からの搬入品
第4-88図87	石臼	和泉砂岩	上臼	口径	(38.0)	幅	-	器高	14.6	10.0	SD250	
第4-88図88	石臼	安山岩	上臼	口径	-	幅	-	器高	9.8	1.25	SD250	
第4-88図89	五輪塔	凝灰岩	空風輪	最大径	-	幅	-	器高	-	-	SD250	
第4-88図90	宝塔か宝篋印塔	凝灰岩	層輪	最大径	-	幅	(9.7)	器高	1.25	-	SD250	
第4-88図91	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	-	幅	41.0	器高	23.0	-	SD250	石材に加工
第4-88図92	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	-	幅	16.0	器高	20.0	-	SD250	石材に加工
第4-88図93	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	-	幅	35.0	器高	20.0	-	SD250	
第4-88図94	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	-	幅	36.0	器高	22.5	-	SD250	
第4-88図95	五輪塔	硬質安山岩	火輪	最大径	-	幅	38.0	器高	21.0	-	SD250	
第4-88図96	五輪塔	硬質安山岩	水輪	最大径	-	幅	-	器高	-	-	SD250	
第4-88図97	五輪塔	凝灰岩	地輪	最大径	(30.0)	幅	30.0	器高	16.0	-	SD250	
第4-88図98	五輪塔	凝灰岩	地輪	最大径	-	幅	31.0	器高	20.0	-	SD250	
第4-88図99	一石五輪塔	硬質凝灰岩	-	最大径	-	幅	-	器高	47.0	-	SD250	空風輪を欠損
第4-88図100	建築石材	凝灰岩	-	最大径	(31.0)	幅	(33.0)	器高	14.0	-	SD250	
第4-88図101	加工石材	凝灰岩	-	最大径	-	幅	-	器高	12.0	-	SD250	
第4-88図102	加工石材	凝灰岩	-	最大径	27.0	幅	(25.0)	器高	19.0	-	SD250	
第4-90図19	砥石	-	-	最大径	(8.7)	幅	3.7	厚さ	3.8	0.212	SD270	
第4-92図14	砥石	粘板岩	-	最大径	9.2	幅	3.3	厚さ	1.1	0.413	SD131	
第4-97図16	石臼	安山岩	上臼	口径	-	幅	-	器高	9.6	1.5	SK261	
第4-97図17	石臼	安山岩	下臼	口径	-	幅	-	器高	10.0	4.5	SK261	
第4-101図1	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	20.0	幅	36.0	器高	24.5	-	SE148	石材に加工
第4-101図2	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	29.0	幅	28.0	器高	12.5	-	SE148	石材に加工
第4-101図3	五輪塔	凝灰岩	火輪	最大径	38.0	幅	36.0	器高	23.0	-	SE148	石材に加工
第4-101図4	五輪塔	凝灰岩	地輪	最大径	32.5	幅	32.0	器高	24.0	-	SE148	石材に加工

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(石製品②)

挿図No.	品種	材質	部位	寸法 (cm)						重量 (kg)	遺構名	備考	図版 No.
				最大径	幅	器高	口径	厚さ	底径				
第4-101図5	五輪塔	凝灰岩	地輪	最大径	28.5	幅	25.0	器高	24.0	-	SE148	石材に加工	
第4-101図6	五輪塔	凝灰岩	地輪	最大径	(34.0)	幅	34.0	器高	15.0	-	SE148	石材に加工	
第4-101図7	加工石材	凝灰岩	-	長さ	32.5	幅	31.0	器高	12.0	-	SE148		
第4-101図8	加工石材	凝灰岩	-	長さ	(33.5)	幅	(25.0)	器高	10.0	-	SE148		
第4-101図9	加工石材	凝灰岩	-	長さ	(21.0)	幅	(20.0)	器高	11.0	-	SE148	被熱	
第4-101図10	加工石材	凝灰岩	-	長さ	(35.0)	幅	(18.0)	器高	11.0	-	SE148	研磨	
第4-101図11	加工石材	凝灰岩	-	長さ	(33.0)	幅	(25.0)	器高	12.0	-	SE148	手斧痕か'明瞭	
第4-101図12	加工石材	凝灰岩	-	長さ	(28.5)	幅	(18.0)	器高	11.0	-	SE148	研磨 底面敲打痕	
第4-101図13	加工石材	凝灰岩	-	長さ	(26.5)	幅	(19.0)	器高	12.0	-	SE148		
第4-101図14	加工石材	凝灰岩	-	長さ	-	幅	(22.0)	器高	11.0	-	SE148		
第4-101図15	加工石材	凝灰岩	-	長さ	-	幅	(41.0)	器高	10.0	-	SE148		
第4-102図22	砥石	-	-	長さ	16.0	幅	5.9	厚さ	4.5	0.978	SE148		
第4-102図24	加工石材	凝灰岩	-	長さ	42.0	幅	39.0	器高	2.0	-	SE148	五輪塔地輪を再加工	
第4-113図13	石臼	凝灰岩質安山岩	上臼	口径	33.0	幅	-	器高	7.9	(2.7)	SK263		
第4-121図58	宝篋印塔	凝灰岩	-	長さ	-	幅	-	器高	-	-	SD141	基礎か笠部	
第4-123図42	砥石	結晶片岩	-	長さ	(12.4)	幅	4.9	器高	1.2	0.116	SD167		
第4-127図6	石臼	安山岩	上臼	口径	(34.0)	幅	-	器高	8.5	3.0	SE147		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(土製品)

挿図No.	品種	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.
				長さ	幅	高さ	口径	厚さ	底径				
第4-11図9	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.7	幅	1.5	10.6	SF 151	B類			
第4-11図18	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.6	幅	1.6	8.9	SF 151	B類			
第4-11図19	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.4	幅	1.4	6.6	SF 151	両端欠損			
第4-12図24	管状土鐘	土師質	-	長さ	5.2	幅	2.2	22.3	SF 151	A類 片端欠損			
第4-12図25	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.0	幅	1.8	12.8	SF 151	B類			
第4-12図27	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.0	幅	1.2	6.9	SF 151	A類			
第4-12図28	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.9	幅	1.6	8.1	SF 151	両端欠損			
第4-22図14	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.5	幅	1.8	13.1	SK256	B類 胎土海部産			
第4-31図15	管状土鐘	土師質	-	長さ	5.5	幅	2.1	20.9	SK251	A類 端部へラ調整			
第4-31図16	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.7	幅	1.3	6.0	SK251	B類			
第4-40図7	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.5	幅	1.4	6.8	SK266	B類			
第4-43図7	管状土鐘	土師質	-	長さ	5.4	幅	1.2	6.6	SK189	B類			
第4-61図2	土鈴	土師質	-	胴径	3.2	高さ	4.1	16.8	SK163	完形		41	
第4-64図4	管状土鐘	土師質	-	長さ	(4.8)	幅	1.4	8.4	SK191	B類			
第4-64図5	管状土鐘	土師質	-	長さ	(2.7)	幅	1.2	3.7	SK191	A類			
第4-86図13	棒状土鐘	土師質	-	長さ	(3.7)	幅	0.95	5.0	SD116	先端に穿孔			
第4-86図14	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.9	幅	1.6	14.5	SD116	B類			
第4-86図15	管状土鐘	土師質	-	長さ	5.2	幅	2.1	23.5	SD116	A類			
第4-88図85	管状土鐘	土師質	-	長さ	5.7	幅	2.25	24.4	SD250	A類			
第4-109図15	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.7	幅	1.1	1.1	SK269	A類 端部へラ調整			
第4-115図4	管状土鐘	土師質	-	長さ	5.6	幅	2.0	23.0	SK229	B類			
第4-121図52	管状土鐘	土師質	-	長さ	6.9	幅	1.9	22.7	SD141	A類 両端へラ調整			
第4-121図53	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.35	幅	2.25	9.5	SD141	A類 寸胴形式			
第4-123図32	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.75	幅	1.1	3.3	SD167	B類 小型			
第4-123図33	管状土鐘	土師質	-	長さ	(4.2)	幅	1.2	6.4	SD167	B類 一部欠損			
第4-123図34	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.6	幅	1.4	8.9	SD167	B類			
第4-125図19	管状土鐘	土師質	-	長さ	(4.4)	幅	2.1	17.6	SD168	A類 上部欠損			
第4-125図20	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.5	幅	1.3	8.4	SD168	A類 両端へラ調整			
第4-125図23	円筒埴輪	-	-	長さ	-	幅	-	-	SD168	古墳時代		45	
第4-132図28	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.9	幅	2.6	23.9	SK231	A類 寸胴形式			
第4-132図29	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.4	幅	2.5	26.3	SK231	A類 寸胴形式			
第4-132図30	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.0	幅	2.5	22.9	SK231	A類 寸胴形式			
第4-132図31	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.2	幅	2.2	20.8	SK231	A類 寸胴形式			
第4-132図32	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.2	幅	2.3	17.0	SK231	A類 寸胴形式			
第4-153図13	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.7	幅	1.5	10.5	B7区	A類			
第4-153図14	管状土鐘	土師質	-	長さ	6.2	幅	1.7	18.1	B7区	A類			
第4-153図24	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.5	幅	2.4	25.6	C7区	A類			
第4-153図37	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.3	幅	1.85	12.7	B8区	A類			
第4-153図38	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.8	幅	1.3	8.9	B8区	A類			
第4-153図39	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.8	幅	1.5	8.7	B8区	A類			
第4-153図48	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.6	幅	1.9	12.6	C8区	A類			
第4-153図61	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.1	幅	2.4	22.7	B9区	A類			
第4-153図62	管状土鐘	土師質	-	長さ	4.3	幅	2.5	24.7	B9区	A類			
第4-153図72	管状土鐘	土師質	-	長さ	3.9	幅	1.7	8.6	B11区	A類			

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(銭貨)

挿図No.	銭貨名	初鑄 遡年	国・王朝名	長さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備 考	図版 No.
第4-11図1	元豊通寶	1078	北宋	2.1	25.0	行書	SF151		
第4-16図60	元豊通寶	1078	北宋	3.0	24.0	篆書	SD165		
第4-16図90	熈祐通寶?	1056	北宋	0.6	-	真書	SD165		
第4-24図2	元符通寶	1098	北宋	-	-	篆書	SK286	「符」のみ	
第4-57図5	不明	-	-	-	-	-	SK265	「寶」のみ	
第4-60図5	天聖通寶	1023	北宋	1.9	24.0	篆書	SK285		
第4-71図1	不明	-	-	2.2	24.0	-	SE234	「祥」「元」「寶」のみ	
第4-71図2	不明	-	-	-	-	-	SE234	「元」のみ	
第4-71図3	洪武通寶	1368	明	-	-	-	SE234	下部欠損	
第4-71図4	洪武通寶	1368	明	2.9	23.0	-	SE234		
第4-71図5	不明	-	-	3.2	24.0	-	SE234		
第4-71図6	不明	-	-	2.1	23.0	-	SE234		
第4-73図3	紹聖元寶	1094	北宋	3.1	24.0	-	SK224		41
第4-73図4	不明	-	-	2.0	24.0	-	SK224	「元」「通」「寶」のみ	#
第4-75図15	至道元寶	995	北宋	2.7	25.0	行書	SK232		
第4-79図2	皇宋通寶	1038	北宋	-	-	篆書	SK267		
第4-82図7	永樂通寶	1408	明	2.0	25.0	-	SD118		
第4-88図86	不明	-	-	-	-	篆書	SD250	「通」のみ	
第4-97図15	紹聖元寶	1094	北宋	1.9	23.0	行書	SD261	周囲を削り小さくしている	
第4-102図36	元符通寶	1098	北宋	2.5	24.0	篆書	SE148		
第4-110図1	元豊通寶	1078	北宋	1.8	24.0	行書	SK156	星形孔	
第4-116図2	祥符通寶	1009	北宋	2.3	23.0	-	SK273		
第4-121図55	景德元寶	1004	北宋	3.6	25.0	-	SD141		
第4-121図56	祥符通寶	1009	北宋	2.1	26.0	-	SD141		
第4-121図57	元豊通寶	1078	北宋	2.8	24.0	篆書	SD141		
第4-123図36	天聖通寶	1023	北宋	1.8	25.0	篆書	SD167	一部欠損	
第4-123図37	不明	-	-	-	-	-	SD167	「宋」「通」のみ 皇宋通寶と推測	
第4-123図38	元豊通寶	1078	北宋	2.1	25.0	篆書	SD167		
第4-123図39	不明	-	-	2.4	24.0	-	SD167	「平」「元」のみ	
第4-123図40	不明	-	-	4.6	24.0	-	SD167	「元」「寶」のみ	
第4-123図41	洪武通寶	1368	北宋	2.3	25.0	-	SD167		
第4-125図21	不明	-	-	2.3	25.0	-	SD168	「通」「寶」のみ	
第4-125図22	不明	-	-	2.3	24.0	-	SD168		
第4-127図5	不明	-	-	-	-	-	SE147	1/2欠損 「國」「寶」のみ一唐園通寶	
第4-129図6	淨化元寶	990	北宋	3.2	24.0	草書	SE210		
第4-129図7	永樂通寶	1408	明	4.6	25.0	-	SE210		
第4-129図8	不明	-	-	3.7	24.0	-	SE210		
第4-141図1	不明	-	-	-	-	-	SK220	「元」のみ	
第4-153図25	元祐通寶	1086	北宋	2.8	24.0	篆書	C7区		
第4-153図49	不明	-	-	-	-	-	C8区		
第4-153図63	熙寧元寶	1068	北宋	2.3	24.0	篆書	B9区		
第4-153図64	大安元寶	1085	遼	2.9	25.0	-	B9区		
第4-153図67	紹聖元寶	1094	北宋	2.5	-	篆書	B10区		
第4-153図74	不明	-	-	-	-	-	B11区	「寶」のみ	
第4-154図3	天禧通寶	1017	北宋	2.8	25.5	真書	損乱		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品①)

挿図No.	品種	部位	法面(単位cm)			遺構名	備 考	図版 No.
			長さ	幅	厚さ			
第4-11図4	-	-	長さ (6.0)	幅 (3.8)	厚さ 3.0	SF151		
第4-11図5	-	-	長さ (11.7)	幅 (9.5)	厚さ 2.8	SF151		
第4-11図14	平瓦	-	長さ (8.0)	幅 (11.6)	厚さ 2.1	SF151		
第4-11図16	-	-	長さ (11.8)	幅 (7.0)	厚さ 2.4	SF151		
第4-11図20	軒丸瓦	-	長さ (9.9)	幅 (7.0)	厚さ 2.1	SF151		
第4-16図51	雁振瓦	-	長さ (11.3)	幅 (14.3)	厚さ 1.8	SD165		
第4-16図52	隅切瓦	-	長さ (9.5)	幅 -	厚さ 2.4	SD165	内面布目 胎土海部産	
第4-16図53	平瓦	-	長さ (13.0)	幅 21.0	厚さ 1.6	SD165	胎土海部産 離れ砂付筋	
第4-16図54	-	-	長さ (6.2)	幅 (7.2)	厚さ 1.55	SD165	胎土海部産	
第4-16図55	-	-	長さ 21.0	幅 14.9	厚さ 2.45	SD165		
第4-16図56	-	-	長さ (8.5)	幅 (5.5)	厚さ 1.8	SD165		
第4-16図57	-	-	長さ (19.7)	幅 22.0	厚さ 2.3	SD165		
第4-16図88	軒丸瓦	-	長さ (29.4)	幅 12.7	厚さ 2.0	SD165		
第4-16図89	平瓦	-	長さ (6.3)	幅 (11.8)	厚さ 2.2	SD165	胎土海部産 離れ砂付筋	
第4-22図15	平瓦	-	長さ (17.0)	幅 (19.0)	厚さ 1.8	SK256		
第4-31図14	平瓦	-	長さ (13.8)	幅 (14.4)	厚さ 2.0	SK251	胎土海部産 離れ砂付筋	
第4-58図1	-	-	長さ (9.3)	幅 (9.9)	厚さ 2.0	SK272	胎土海部産	
第4-60図4	-	-	長さ (8.7)	幅 (12.3)	厚さ 2.1	SK285		
第4-82図6	軒平瓦	-	長さ -	幅 -	厚さ -	SD118		
第4-88図53	軒平瓦	-	長さ -	幅 -	厚さ -	SD250		
第4-88図54	平瓦	-	長さ (18.7)	幅 (11.7)	厚さ 2.1	SD250	煤付筋 二次被熱	
第4-88図55	-	-	長さ (8.4)	幅 (8.5)	厚さ 2.8	SD250		
第4-88図56	-	-	長さ (11.2)	幅 (10.1)	厚さ 1.6	SD250		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品②)

挿図No.	品種	部位		法田(単位cm)				遺構名	備考	図版No.	
		長さ	幅	長さ	幅	長さ	厚さ				
第4-88図57	-	-	長さ	(10.9)	幅	(9.3)	厚さ	1.6	SD250		
第4-88図58	-	-	長さ	(8.4)	幅	(8.0)	厚さ	2.3	SD250		
第4-88図59	-	-	長さ	(10.6)	幅	(9.0)	厚さ	2.3	SD250		
第4-88図60	-	-	長さ	7.9	幅	8.2	厚さ	1.8	SD250		
第4-88図61	-	-	長さ	(10.5)	幅	(13.8)	厚さ	2.5	SD250		
第4-88図62	-	-	長さ	(9.1)	幅	(11.4)	厚さ	2.3	SD250		
第4-88図63	-	-	長さ	8.1	幅	10.0	厚さ	2.0	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図64	-	-	長さ	10.0	幅	8.3	厚さ	1.8	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図65	-	-	長さ	13.3	幅	12.2	厚さ	2.15	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図66	-	-	長さ	(8.2)	幅	(9.0)	厚さ	2.0	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図67	-	-	長さ	(8.2)	幅	(9.1)	厚さ	1.8	SD250		
第4-88図68	-	-	長さ	(7.6)	幅	(10.3)	厚さ	2.15	SD250		
第4-88図69	-	-	長さ	(8.75)	幅	(9.9)	厚さ	2.0	SD250		
第4-88図70	-	-	長さ	(16.3)	幅	(10.5)	厚さ	1.95	SD250		
第4-88図71	-	-	長さ	(8.6)	幅	(13.3)	厚さ	1.9	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図72	-	-	長さ	(13.15)	幅	(8.1)	厚さ	2.2	SD250		
第4-88図73	-	-	長さ	(9.8)	幅	(11.2)	厚さ	2.1	SD250		
第4-88図74	-	-	長さ	(11.0)	幅	(11.9)	厚さ	2.2	SD250		
第4-88図75	-	-	長さ	(14.4)	幅	(12.7)	厚さ	1.65	SD250		
第4-88図76	-	-	長さ	(16.9)	幅	(17.5)	厚さ	2.3	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図77	-	-	長さ	(6.6)	幅	(11.6)	厚さ	2.0	SD250		
第4-88図78	-	-	長さ	(12.1)	幅	(10.2)	厚さ	1.85	SD250		
第4-88図79	-	-	長さ	(11.2)	幅	(13.3)	厚さ	2.0	SD250		
第4-88図80	-	-	長さ	(6.6)	幅	(10.7)	厚さ	2.4	SD250		
第4-88図81	-	-	長さ	(7.7)	幅	(6.1)	厚さ	2.0	SD250		
第4-88図82	-	-	長さ	(11.6)	幅	(11.7)	厚さ	2.2	SD250	胎土海部郡産	
第4-88図83	-	-	長さ	(12.5)	幅	(12.8)	厚さ	2.0	SD250		
第4-88図84	-	-	長さ	(14.5)	幅	(10.6)	厚さ	1.8	SD250		
第4-88図103	平瓦	-	長さ	(8.5)	幅	(6.5)	厚さ	-	SD250	古代	42
第4-88図104	平瓦	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	SD250	古代	#
第4-88図105	平瓦	-	長さ	-	幅	-	厚さ	-	SD250	古代 内面布目	#
第4-90図16	-	-	長さ	(8.8)	幅	(10.8)	厚さ	2.15	SD270	胎土海部郡産	
第4-90図17	-	-	長さ	(11.5)	幅	(7.9)	厚さ	2.2	SD270	力半目	
第4-90図18	-	-	長さ	(11.4)	幅	(11.6)	厚さ	2.1	SD270		
第4-90図23	古代平瓦	-	長さ	(5.6)	幅	(8.0)	厚さ	2.2	SD270	内面布目 外面格子目タタキ	43
第4-90図24	古代平瓦	-	長さ	(5.1)	幅	(6.9)	厚さ	2.0	SD270	内面布目 外面格子目タタキ	#
第4-92図11	-	-	長さ	(15.1)	幅	(15.4)	厚さ	3.6	SD131		
第4-92図12	-	-	長さ	21.4	幅	(13.5)	厚さ	2.4	SD131		
第4-92図13	-	-	長さ	(14.4)	幅	(9.55)	厚さ	2.1	SD131	胎土海部郡産	
第4-97図9	-	-	長さ	(7.6)	幅	(6.3)	厚さ	2.0	SK261		
第4-97図10	-	-	長さ	(9.0)	幅	(7.2)	厚さ	1.9	SK261		
第4-97図11	-	-	長さ	(12.8)	幅	(16.1)	厚さ	1.8	SK261		
第4-97図12	-	-	長さ	(12.3)	幅	(9.1)	厚さ	2.05	SK261		
第4-97図13	平瓦	-	長さ	(10.1)	幅	(5.1)	厚さ	1.8	SK261		
第4-97図14	-	-	長さ	(7.1)	幅	(8.1)	厚さ	2.0	SK261	胎土海部郡産	
第4-98図6	-	-	長さ	(13.1)	幅	(9.9)	厚さ	2.0	SD292		
第4-102図17	-	-	長さ	(11.0)	幅	(7.2)	厚さ	2.1	SE148		
第4-102図18	-	-	長さ	(7.6)	幅	(12.3)	厚さ	2.25	SE148		
第4-102図19	-	-	長さ	27.2	幅	21.4	厚さ	2.1	SE148		
第4-102図23	-	-	長さ	(11.4)	幅	(10.5)	厚さ	2.15	SE149		
第4-109図14	-	-	長さ	(15.3)	幅	(12.4)	厚さ	2.4	SK269		
第4-111図2	-	-	長さ	(7.25)	幅	(13.5)	厚さ	1.9	SK279		
第4-113図9	-	-	長さ	(6.85)	幅	(10.6)	厚さ	3.9	SK263		
第4-113図10	-	-	長さ	(8.8)	幅	(16.3)	厚さ	2.2	SK263		
第4-113図11	-	-	長さ	(9.0)	幅	(14.4)	厚さ	2.1	SK263		
第4-113図12	-	-	長さ	(7.1)	幅	(5.9)	厚さ	2.0	SK263		
第4-118図13	平瓦	-	長さ	(17.3)	幅	(13.2)	厚さ	1.7	SK262		
第4-118図14	平瓦	-	長さ	(12.5)	幅	(12.3)	厚さ	1.8	SK262	胎土海部郡産	
第4-118図15	-	-	長さ	(11.5)	幅	(13.5)	厚さ	2.3	SK262		
第4-118図16	-	-	長さ	(9.6)	幅	(13.2)	厚さ	2.1	SK262		
第4-118図17	-	-	長さ	(17.1)	幅	(11.3)	厚さ	2.2	SK262		
第4-118図18	-	-	長さ	(10.5)	幅	(13.3)	厚さ	2.5	SK262		
第4-118図19	-	-	長さ	(14.7)	幅	(11.7)	厚さ	2.1	SK262	胎土海部郡産	
第4-118図20	-	-	長さ	(12.7)	幅	(15.3)	厚さ	1.95	SK262		
第4-118図21	-	-	長さ	(4.3)	幅	(4.9)	厚さ	2.0	SK262		
第4-118図22	-	-	長さ	(6.8)	幅	(8.3)	厚さ	1.8	SK262		
第4-118図23	-	-	長さ	(4.0)	幅	(11.2)	厚さ	2.1	SK262		
第4-118図24	-	-	長さ	(7.9)	幅	(7.2)	厚さ	1.95	SK262	胎土海部郡産	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(瓦製品③)

挿図No.	品種	部位	法量(単位cm)						遺構名	備 考	図版 No.
			長さ	幅	高さ	厚さ	長さ	幅			
第4-118図25	-	-	長さ	(7.1)	幅	(8.0)	高さ	2.0	SK262		
第4-118図26	-	-	長さ	(5.1)	幅	(5.7)	高さ	2.0	SK262		
第4-118図27	-	-	長さ	(26.6)	幅	(14.7)	高さ	2.4	SK262	接合資料38	
第4-118図28	-	-	長さ	21.4	幅	(20.7)	高さ	2.3	SK262	接合資料39	
第4-118図29	-	-	長さ	(17.2)	幅	(12.7)	高さ	1.8	SK262		
第4-118図30	-	-	長さ	(24.8)	幅	(15.9)	高さ	2.3	SK262		
第4-118図31	-	-	長さ	(13.3)	幅	(9.2)	高さ	2.1	SK262		
第4-118図32	-	-	長さ	(14.0)	幅	22.0	高さ	1.8	SK262		
第4-118図33	-	-	長さ	(15.0)	幅	(10.1)	高さ	1.9	SK262		
第4-118図34	-	-	長さ	21.9	幅	(19.3)	高さ	1.7	SK262	胎土海部郡産	
第4-118図35	-	-	長さ	(12.6)	幅	(11.8)	高さ	2.2	SK262		
第4-118図36	-	-	長さ	(11.0)	幅	(11.5)	高さ	2.0	SK262		
第4-118図37	-	-	長さ	(9.1)	幅	(10.9)	高さ	1.9	SK262		
第4-118図38	-	-	長さ	(11.6)	幅	(17.9)	高さ	1.9	SK262	胎土海部郡産	
第4-118図39	-	-	長さ	(10.8)	幅	(7.0)	高さ	2.3	SK262		
第4-118図40	-	-	長さ	(11.9)	幅	(13.9)	高さ	2.0	SK262		
第4-118図41	-	-	長さ	(11.6)	幅	(12.5)	高さ	1.9	SK262		
第4-118図42	-	-	長さ	(11.8)	幅	(9.4)	高さ	1.9	SK262		
第4-118図43	-	-	長さ	(9.5)	幅	(6.3)	高さ	1.8	SK262		
第4-118図44	-	-	長さ	(12.0)	幅	(12.5)	高さ	2.0	SK262		
第4-118図45	-	-	長さ	(6.5)	幅	(7.1)	高さ	2.1	SK262		
第4-118図46	-	-	長さ	(8.4)	幅	(6.3)	高さ	2.1	SK262		
第4-118図47	-	-	長さ	(7.6)	幅	(8.9)	高さ	2.1	SK262		
第4-118図48	-	-	長さ	(8.4)	幅	(11.0)	高さ	1.9	SK262		
第4-118図49	-	-	長さ	(7.4)	幅	(10.9)	高さ	2.3	SK262		
第4-118図50	-	-	長さ	(11.4)	幅	(8.9)	高さ	2.15	SK262		
第4-118図51	-	-	長さ	(11.0)	幅	(10.1)	高さ	2.15	SK262		
第4-118図52	-	-	長さ	(13.55)	幅	(13.35)	高さ	2.1	SK262		
第4-118図53	-	-	長さ	(10.6)	幅	(17.75)	高さ	2.15	SK262		
第4-118図54	-	-	長さ	(10.6)	幅	(5.4)	高さ	1.95	SK262		
第4-118図55	-	-	長さ	(12.2)	幅	(15.35)	高さ	2.0	SK262		
第4-118図56	-	-	長さ	(12.5)	幅	(11.9)	高さ	2.1	SK262	胎土海部郡産	
第4-121図46	平瓦	-	長さ	(6.9)	幅	(10.4)	高さ	2.4	SD141		
第4-121図47	-	-	長さ	(7.8)	幅	(11.9)	高さ	1.8	SD141		
第4-121図48	-	-	長さ	(13.4)	幅	(9.3)	高さ	2.2	SD141		
第4-121図49	-	-	長さ	(5.3)	幅	(5.1)	高さ	1.95	SD141		
第4-121図50	-	-	長さ	(10.2)	幅	(6.0)	高さ	3.0	SD141		
第4-121図51	-	-	長さ	(10.2)	幅	(4.9)	高さ	2.2	SD141	胎土海部郡産	
第4-123図28	-	-	長さ	(17.3)	幅	(11.0)	高さ	1.7	SD167	胎土海部郡産	
第4-123図29	-	-	長さ	(9.5)	幅	(15.2)	高さ	2.0	SD167		
第4-123図30	-	-	長さ	(12.6)	幅	(5.6)	高さ	2.0	SD167		
第4-123図31	-	-	長さ	(11.0)	幅	(12.0)	高さ	1.9	SD167	胎土海部郡産	
第4-127図10	-	-	長さ	(10.1)	幅	(7.8)	高さ	2.0	SE147		
第4-132図18	平瓦	-	長さ	(9.8)	幅	(10.7)	高さ	2.1	SK231		
第4-132図19	-	-	長さ	(18.7)	幅	(12.5)	高さ	2.1	SK231	胎土海部郡産	
第4-132図20	-	-	長さ	(8.0)	幅	(7.7)	高さ	2.05	SK231	胎土海部郡産	
第4-132図21	-	-	長さ	(9.2)	幅	(8.4)	高さ	2.2	SK231		
第4-132図22	-	-	長さ	(10.1)	幅	(13.5)	高さ	2.2	SK231		
第4-132図23	-	-	長さ	(8.1)	幅	(8.2)	高さ	1.9	SK231		
第4-132図24	-	-	長さ	(15.0)	幅	(12.1)	高さ	2.1	SK231	胎土海部郡産	
第4-132図25	-	-	長さ	(11.2)	幅	(8.8)	高さ	2.1	SK231	胎土海部郡産	
第4-132図26	-	-	長さ	(5.2)	幅	(5.3)	高さ	1.7	SK231	胎土海部郡産	
第4-132図27	-	-	長さ	19.5	幅	(21.5)	高さ	1.9	SK231	胎土海部郡産	

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(金属製品①)

挿図No.	器 種	材質	部位	法量(単位cm)						重量(g)	遺構名	備 考	図版 No.
				長さ	幅	高さ	厚さ	長さ	幅				
第4-55図2	金具	銅	-	長さ	1.6	幅	1.2	高さ	0.3	0.6	SK243	錘	
第4-123図35	キセル	-	壺首	長さ	(6.4)	幅	(6.5)	高さ	0.65	6.2	SD167		
第4-149図1	キセル	銅	火皿	長さ	(1.75)	幅	1.5	高さ	6.5	3.0	SK177	近世初頭	
第4-150図3	キセル	銅	吸口	長さ	(6.3)	幅	8.5	高さ	8.5	3.3	SD145		
第4-150図4	金具	銅	-	長さ	7.4	幅	0.8	高さ	0.35	10.9	SD145		
第4-151図4	銅	銅	-	長さ	(1.65)	幅	0.4	高さ	0.35	0.3	SK146		
第4-153図73	金具	銅	把手	長さ	(3.9)	幅	3.5	高さ	3.5	3.5	B11区		
第4-160図1	鉄釘	鉄	-	長さ	(2.3)	幅	-	高さ	0.35	-	ST157		
第4-169図1	鉄釘	鉄	-	長さ	(2.7)	幅	0.7	高さ	0.5	2.2	ST130		
第4-169図2	鉄釘	鉄	-	長さ	(2.2)	幅	0.5	高さ	0.4	0.7	ST130		
第4-169図3	鉄釘	鉄	-	長さ	5.8	幅	0.85	高さ	1.15	8.2	ST130		
第4-169図4	鉄釘	鉄	-	長さ	(3.6)	幅	0.7	高さ	0.8	4.0	ST130		
第4-169図5	鉄釘	鉄	-	長さ	5.4	幅	0.6	高さ	3.5	3.0	ST130		
第4-169図6	鉄釘	鉄	-	長さ	(4.3)	幅	0.45	高さ	0.45	2.0	ST130		
第4-169図7	鉄釘	鉄	-	長さ	4.0	幅	0.5	高さ	0.5	1.8	ST130		
第4-169図8	鉄釘	鉄	-	長さ	(3.6)	幅	0.7	高さ	0.8	2.7	ST130		
第4-169図9	鉄釘	鉄	-	長さ	(4.5)	幅	0.8	高さ	0.6	5.5	ST130		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(金属製品②)

挿入No.	器種	材質	部位	法国(単位cm)						重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ				
第4-169図10	鉄釘	鉄		長さ	(3.25)	幅	0.6	厚さ	0.65	1.4	ST130		
第4-170図1	鉄釘	鉄		長さ	(4.6)	幅	0.5	厚さ	0.6	5.4	ST135		
第4-173図1	金具	鉄		長さ	8.5	幅	3.0	厚さ	3.0	-	ST150	2と対で使用	45
第4-173図2	金具	鉄		長さ	(7.7)	幅	3.0	厚さ	(2.1)	-	ST150	1と対で使用	"
第4-173図3	金具	鉄		長さ	(3.0)	幅	2.0	厚さ	2.0	-	ST150		
第4-173図4	金具	鉄		長さ	(3.1)	幅	2.9	厚さ	0.7	-	ST150		
第4-173図5	二股金具	鉄		長さ	(3.1)	幅	3.0	厚さ	-	-	ST150		45
第4-173図6	二股金具	鉄		長さ	(3.6)	幅	3.2	厚さ	-	-	ST150		"
第4-173図7	二股金具	鉄	先端	長さ	-	幅	-	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173図8	鉄釘	鉄		長さ	(5.6)	幅	0.3	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173図9	鉄釘	鉄		長さ	(3.3)	幅	0.8	厚さ	0.8	-	ST150		
第4-173図10	二股金具	鉄		長さ	(3.2)	幅	3.5	厚さ	0.65	-	ST150		45
第4-173図11	二股金具	鉄	先端	長さ	(2.3)	幅	0.5	厚さ	0.6	-	ST150		"
第4-173図12	二股金具	鉄	先端	長さ	-	幅	-	厚さ	0.5	-	ST150	鉄	
第4-173図13	鉄釘	鉄		長さ	(2.2)	幅	0.4	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173図14	鉄釘	鉄	頭部	長さ	(2.0)	幅	0.3	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173図15	二股金具	鉄	先端・頭部	長さ	(1.5)	幅	0.4	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173図16	二股金具	鉄	先端	長さ	-	幅	-	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173図17	二股金具	鉄		長さ	-	幅	-	厚さ	-	-	ST150	鉄	
第4-173図18	鉄釘	鉄	頭部	長さ	(2.5)	幅	0.4	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173図19	二股金具	鉄	先端	長さ	-	幅	-	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173図20	鉄釘	鉄		長さ	4.1	幅	0.5	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173図21	鉄釘	鉄		長さ	(2.3)	幅	0.2	厚さ	-	-	ST150	鉄	
第4-173図22	鉄釘	鉄		長さ	(1.3)	幅	0.2	厚さ	-	-	ST150		
第4-173図23	鉄釘	鉄		長さ	(4.8)	幅	0.2	厚さ	0.15	-	ST150		
第4-173図24	鉄釘	鉄	先端	長さ	(1.5)	幅	(0.15)	厚さ	(0.15)	-	ST150	鉄	
第4-173図25	鉄釘	鉄		長さ	(4.0)	幅	0.2	厚さ	-	-	ST150		
第4-173図26	鉄釘	鉄		長さ	(1.9)	幅	0.15	厚さ	-	-	ST150		
第4-173図27	鉄釘	鉄		長さ	(4.3)	幅	0.2	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173図28	鉄釘	鉄		長さ	(3.1)	幅	(0.7)	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173図29	鉄釘	鉄	先端	長さ	(2.4)	幅	0.9	厚さ	0.25	-	ST150		
第4-173図30	鉄釘	鉄		長さ	(2.5)	幅	0.3	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173図31	鉄釘	鉄		長さ	(3.0)	幅	(0.8)	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173図32	金具	鉄?		長さ	(2.9)	幅	(0.9)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173図33	鉄釘	鉄		長さ	(3.0)	幅	0.3	厚さ	0.3	-	ST150		
第4-173図34	鉄釘	鉄		長さ	(3.6)	幅	(0.8)	厚さ	0.5	-	ST150		
第4-173図35	鉄釘	鉄		長さ	(4.1)	幅	(0.4)	厚さ	0.4	-	ST150		
第4-173図36	鉄釘	鉄		長さ	(5.4)	幅	(0.13)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173図37	鉄釘	鉄		長さ	(2.9)	幅	(1.5)	厚さ	(1.5)	-	ST150		
第4-173図38	鉄釘	鉄	頭部	長さ	(2.55)	幅	1.0	厚さ	0.25	-	ST150		
第4-173図39	鉄釘	鉄		長さ	(4.1)	幅	(1.1)	厚さ	0.8	-	ST150		
第4-173図40	鉄釘	鉄	頭部	長さ	(2.15)	幅	0.85	厚さ	0.25	-	ST150		
第4-173図41	鉄釘	鉄		長さ	(1.4)	幅	0.15	厚さ	-	-	ST150		
第4-173図42	鉄釘	鉄	先端	長さ	(2.6)	幅	0.2	厚さ	0.15	-	ST150		
第4-173図43	鉄釘	鉄		長さ	(4.3)	幅	(1.3)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173図44	鉄釘	鉄		長さ	(4.0)	幅	(1.3)	厚さ	1.0	-	ST150		
第4-173図45	鉄釘	鉄		長さ	(3.1)	幅	(0.4)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173図46	鉄釘	鉄	先端	長さ	(3.2)	幅	0.2	厚さ	0.2	-	ST150		
第4-173図47	鉄釘	鉄		長さ	(2.9)	幅	0.3	厚さ	-	-	ST150		
第4-173図48	鉄釘	鉄		長さ	(3.1)	幅	(0.2)	厚さ	(0.2)	-	ST150		
第4-173図49	鉄釘	鉄		長さ	(4.6)	幅	(1.1)	厚さ	0.6	-	ST150		
第4-173図50	鉄釘	鉄		長さ	(2.6)	幅	0.2	厚さ	0.2	-	ST150		
第4-177図1	鉄釘	鉄		長さ	(6.0)	幅	1.0	厚さ	1.0	-	ST149		
第4-177図2	鉄釘	鉄		長さ	(3.3)	幅	0.8	厚さ	0.8	-	ST149		
第4-177図3	鉄釘	鉄		長さ	7.9	幅	0.6	厚さ	0.6	-	ST149		
第4-177図4	鉄釘	鉄	頭部	長さ	(1.6)	幅	0.15	厚さ	0.15	-	ST149		
第4-177図5	鉄釘	鉄		長さ	(3.6)	幅	0.6	厚さ	0.6	-	ST149		
第4-181図1	鉄釘	鉄		長さ	(2.5)	幅	0.4	厚さ	0.2	-	ST260		
第4-181図2	鉄釘	鉄	頭部	長さ	(1.5)	幅	(0.2)	厚さ	(0.2)	-	ST260		
第4-181図3	鉄釘	鉄		長さ	4.1	幅	(0.2)	厚さ	(0.2)	-	ST260		
第4-181図4	鉄釘	鉄		長さ	(3.6)	幅	-	厚さ	-	-	ST260		
第4-181図5	鉄釘	鉄		長さ	(3.1)	幅	2.5	厚さ	2.5	-	ST260		
第4-183図1	鉄釘	鉄		長さ	(2.05)	幅	-	厚さ	0.5	-	ST274		

第10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(木製品)

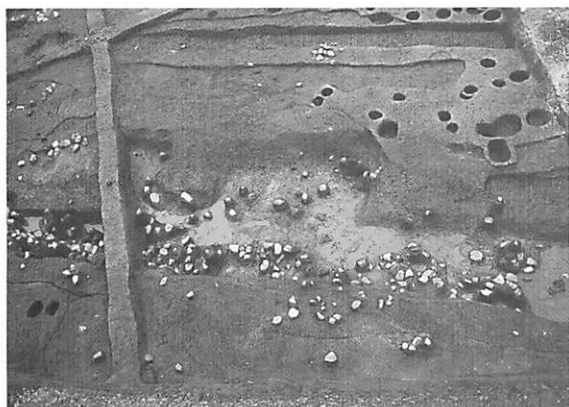
挿入No.	器種	材質	部位	法国(単位cm)						重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ				
第4-16図61	不明	-	-	長さ	11.25	幅	4.9	厚さ	7.0	-	SD165		
第4-153図65	木桶	-	蓋 or 底	長さ	23.7	幅	5.6	厚さ	1.0	-	B9区		

10次Ⅱ区北調査区遺物観察表(その他)

挿入No.	器種	材質	部位	法国(単位cm)			重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第4-73図5	小玉	ガラス		長さ	0.25	厚さ	0.4	-	SK224	41
第4-182図1	小玉	ガラス		長さ	0.2	厚さ	0.3	-	ST257	46

# 写真図版

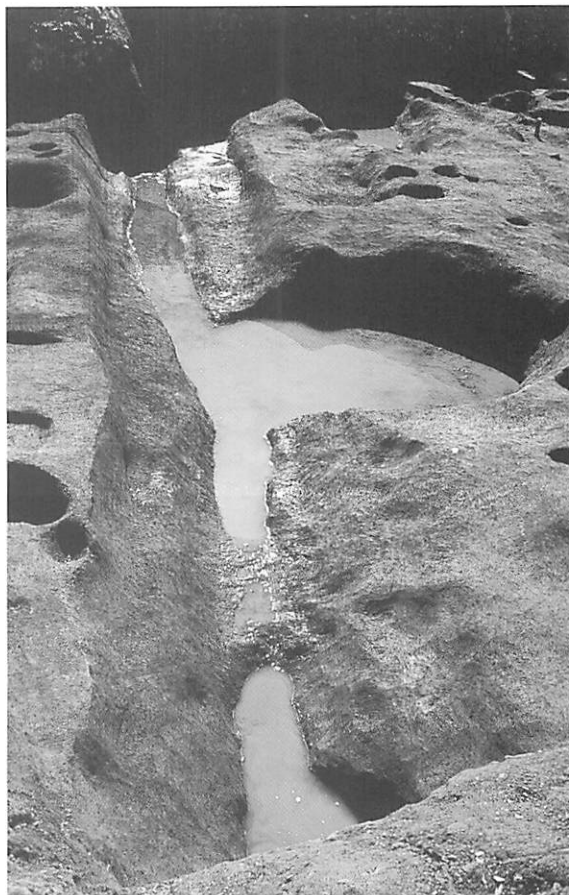




SD001 遺物出土状況（東から）



SD001 遺物出土状況（東から）



SD001 完掘状況（北から）



SD010・SD028 遺物出土状況（南から）



SK004 遺物出土状況（北から）



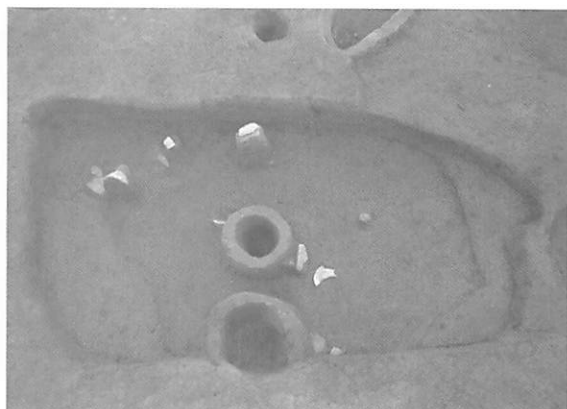
SK005 遺物出土状況（南から）



SK005 完掘状況（南から）



SK006 遺物出土状況（北から）



SK007 遺物出土状況（南から）



SK008 遺物出土状況（東から）



SK012 焼土・炭検出状況（東から）



SK012 遺物出土状況（東から）



SK013 遺物出土状況（北から）



SK015 遺物出土状況（東から）



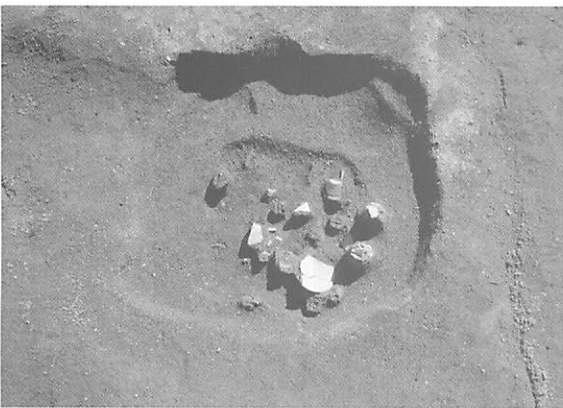
SK022 遺物出土状況（西から）



SK027 遺物出土状況（南から）



SK030 遺物出土状況（北から）



ST009 遺物出土状況（北から）



ST009 遺物出土状況（南から）



ST009 遺物出土状況（北から）



ST009 完掘出土状況（北から）



SP01（4-B区）滑石製スタンプ出土状況



SE014 完掘状況（北から）



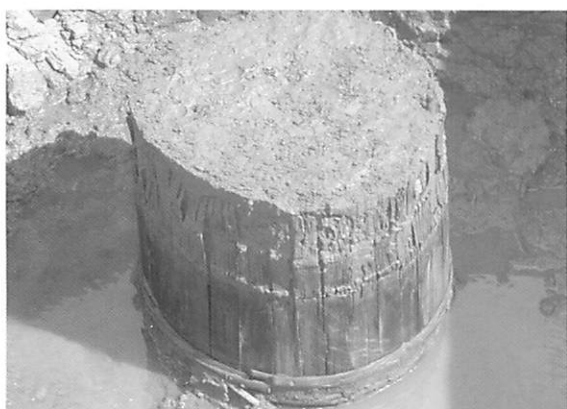
SE017 検出状況（北から）



SE017 井側検出状況（北から）



SE017 土層断面図（合成写真）



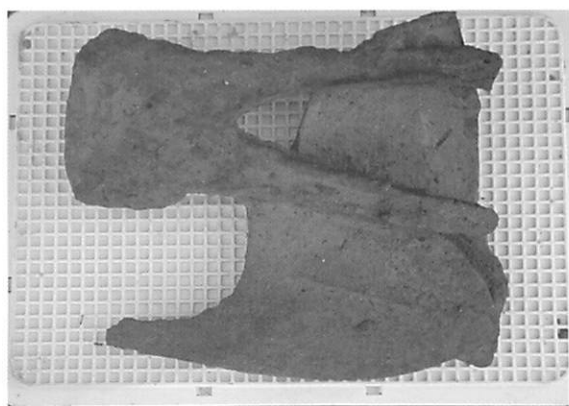
SE017 桶側2段目検出状況



SE017 桶側箍検出状況



SE017 桶側4段目検出状況



SE017 井筒内出土鍬先・犁先・犁へら



SE126 井側検出状況



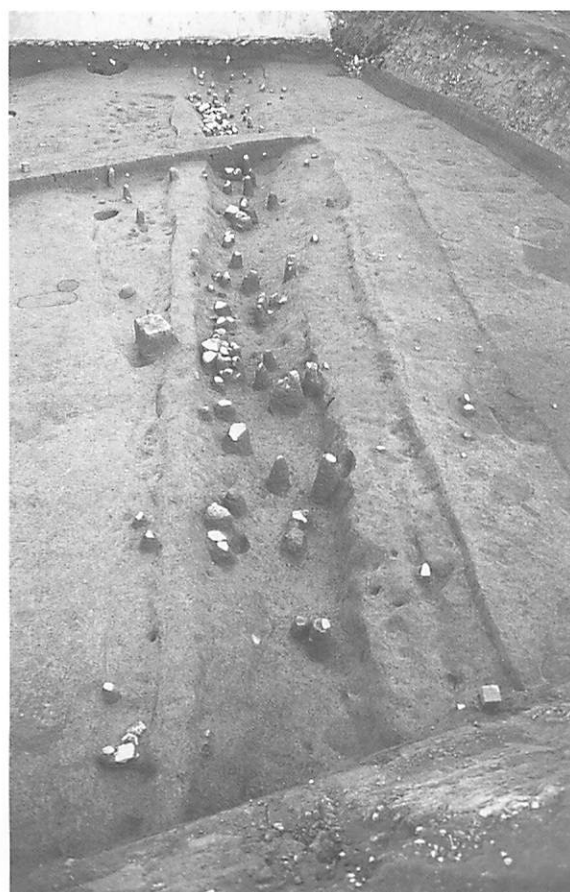
SE126 井側南隅横棧支柱



SE126 井側南側横棧接合部



SE126 井筒



SD111 遺物出土状況(西から)



SD113(基礎3)遺物出土状況(北から)



SD113(基礎4)完掘(北から)



SF116・SF124(西から)



SF116・SF124(北から)



SF116・SF124(石敷)



SD116 完掘状況(西から)



SD116 京都系土師器出土状況



SD116 近世1期備前系陶器挿鉢出土状況



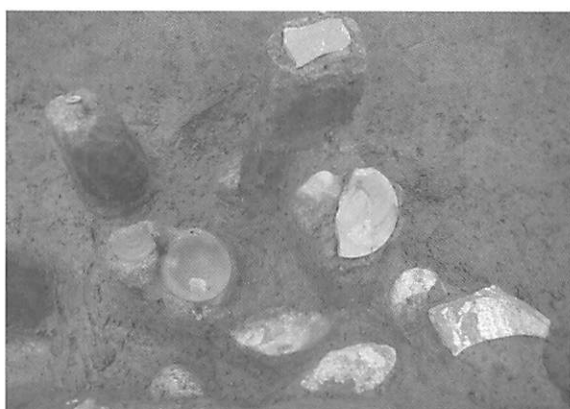
SD117(11-A区) 遺物出土状況(東から)



SD117(11-A区) 在地系土師質土器出土状況



SD117(11-A区) 在地系土師質土器出土状況(拡大)



SD117 (10-A区)遺物出土状況



SD117(10-A区) 永楽通寶出土状況



SD117(10-A区) 京都系土師器出土状況



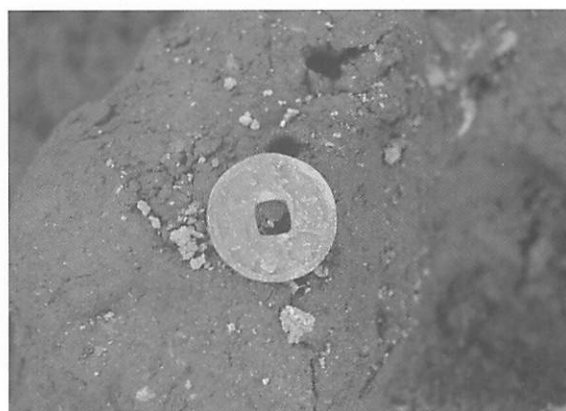
SD117 完掘状況(西から)



SD118(9-A・10-A区) 遺物出土状況(西から)



SD118 下駄出土状況



SD118 洪武通寶出土状況



SD118 折敷出土状況



SD118 完掘状況(西から)



SD118 完掘状況(西から)





SK101 遺物出土状況(北から)



SK104 遺物出土状況



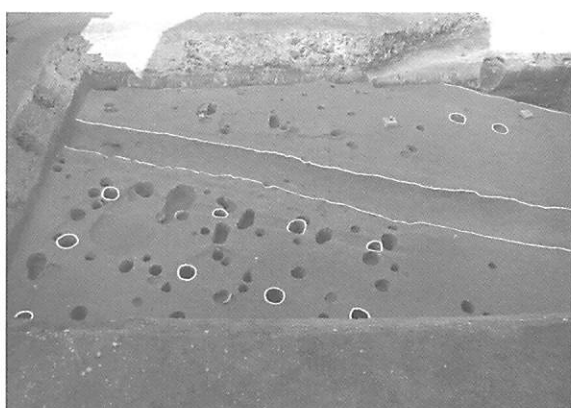
SK104 遺物出土状況(東から)



SK115 遺物出土状況(南から)



SK120・SK121 遺物出土状況(東から)



SB001・SP001・SP002・SD111(南から)



SP003 遺物出土状況



古代包含層遺物出土状況



10次Ⅱ区北  
調査区全景



10次Ⅱ区北調査区  
全景  
(西から、大分川をのぞむ)



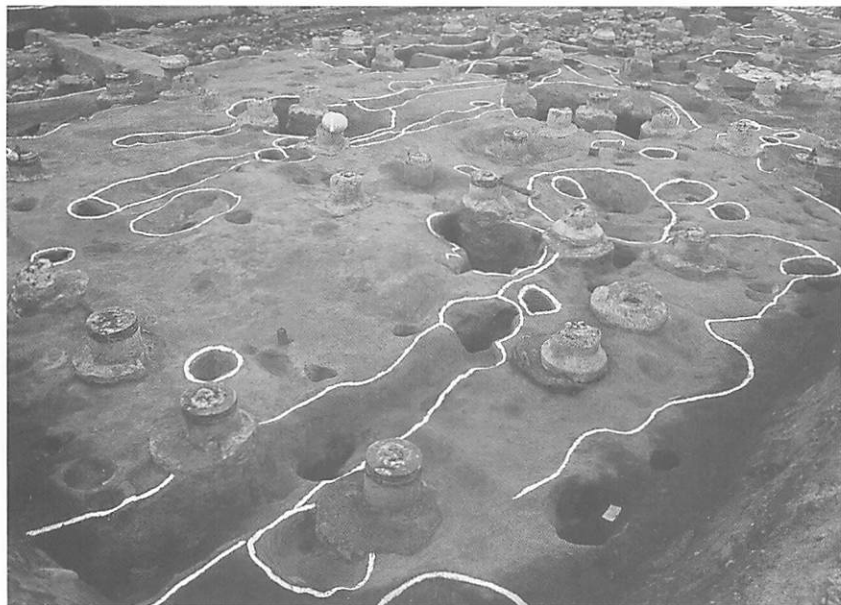
調査区東半  
(南西から)



調査区東半  
(南から、第4南北  
街路がみえる)



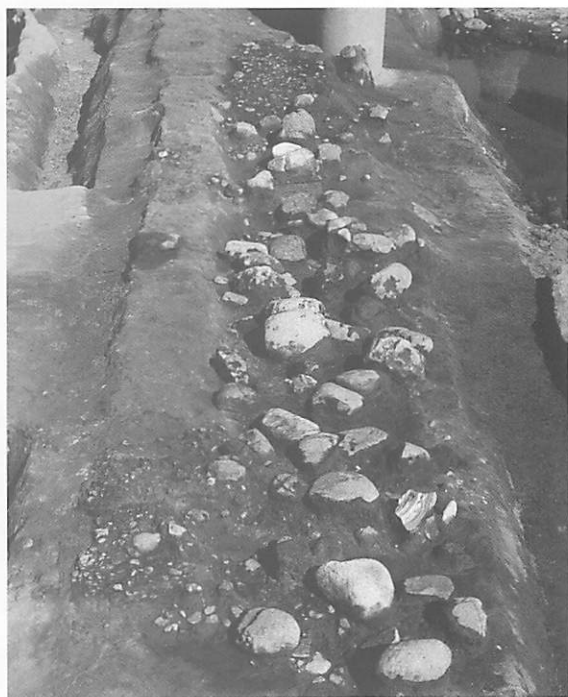
調査区東半  
(南から、線路のむこうは  
ダイウス堂推定地)



東区(中町に面した町屋の遺構)



道路SF151 上層



中層



SF151 第1面検出状況



SF151と両側溝、SD167とSD168



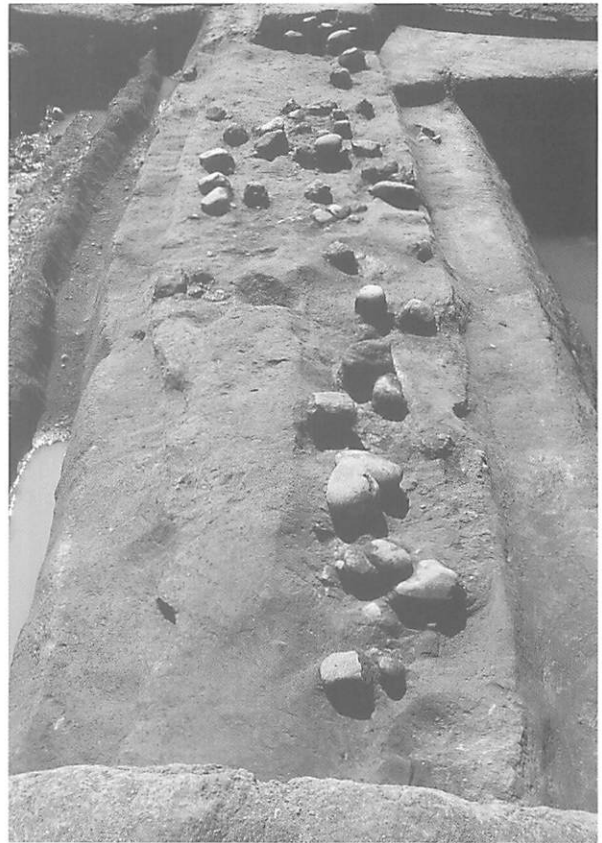
道路SF151 西半上層



第1面の検出状況(C7区付近)



中層道路面(C8区付近)



下層道路面(C8区付近)



側溝にはさまれた道路(C8区)



東半(SD165の矢板例がみえる)



近世の石列SX138 (北から)



SX138 (西から)



近世の溝SD145 (道路SF151の上で検出)



SD145



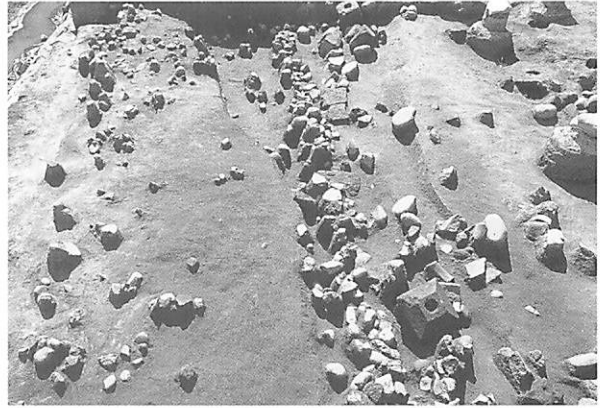
道路SF151と南の溝SD118



溝SD117 (右は道路SF151上層)



SD167と道路SF151 (B8区)



SF151とSD141、出土状況 (東から:A10区)



溝SD141、出土状況①



SD141、出土状況②



溝SD270と道路SF151 (西から:B9区、A10区)



SD270 出土状況 (東から:A9区、A10区)



溝SD270と溝SD250 (東から、B7区)



道路SF151と溝SD270 (東から、A10区)



北側側溝群と道路SF151 (東から、B10区)  
(SD165からSD270、SD250に移るにつれて底が高くなる)





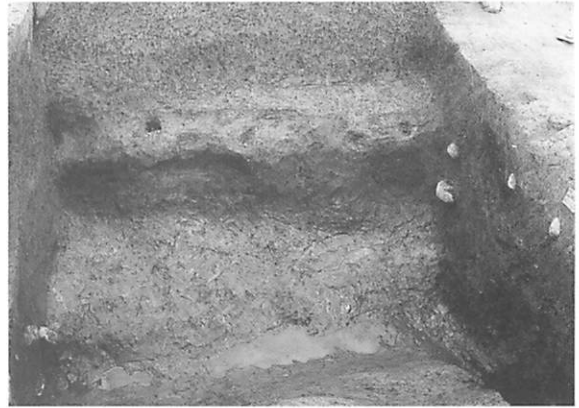
溝SD165、矢板痕跡（第3矢板列、B9区）



SD165、第4矢板列の杭痕（B8区）



SD165、矢板痕



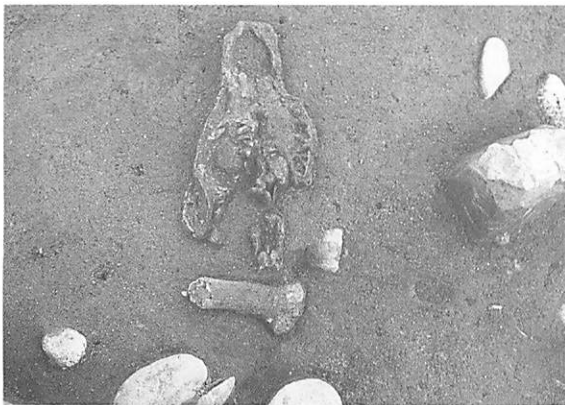
SD165、第4矢板列の木杭痕（C7区）



SD165 完掘状態（西から、B9区）



同左（西南から、B9区）



SD165、動物骨出土状態



SD165、第4矢板列の堀形内埋置土師器群



溝SD189 (南から、南2区)



溝SD194 (B6区)



井戸SE300 (15世紀)と井戸SE210 (東から)



井戸SE235 (16世紀第2四半期) 北から



SE235の井筒



井戸SE144 (16世紀第2四半期)



井戸SE234 (16世紀第3四半期)



SE234の井筒



井戸SE148検出状態（まだ土坑と考えていた時点）



SE148 井筒と破壊の跡が出現



SE148 石組井筒をこわして塞いでいる



SE148 井筒内大石で塞ぐ



SE148 石組井筒出土状態



SE148 井筒2段目の石組



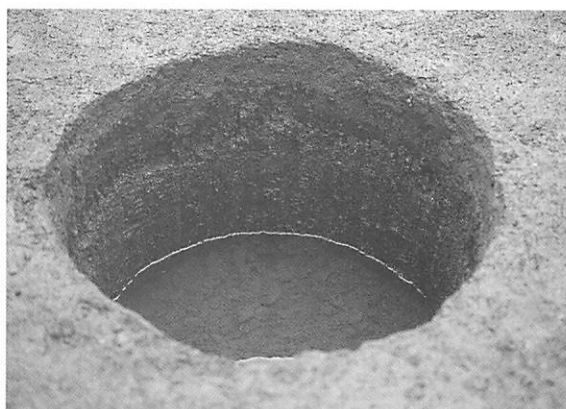
SE148 石組の基礎出現



SE148 井筒基底の桶出土



井戸SE210 (16世紀第4四半期)



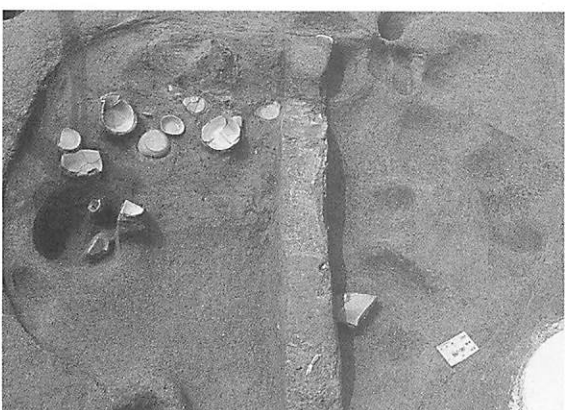
SE210の井筒桶



土坑SK226 (古代)



土坑SK256 (15世紀前半)



土坑SK199 (15世紀前半)



土坑SK212 (15世紀)



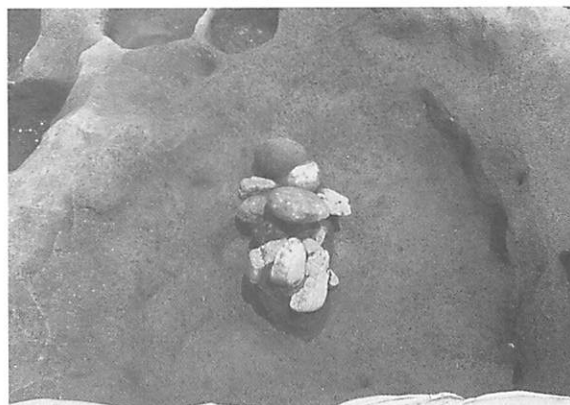
溝SD239 (16世紀第1四半期)



土坑SK266 (15世紀～16世紀代第1四半期)



土坑SK227 (16世紀第1四半期) 出土状態



SK227完掘状態



土坑SK193 (16世紀第1四半期)



土坑SK238 (16世紀第2四半期)



土坑SK265 (16世紀第2四半期)



土坑SK272 (16世紀第2四半期)



土坑SK285 (16世紀第2四半期)



土坑SK163 (16世紀第2四半期)



土坑SK164 (16世紀第3四半期)



土坑SK224 (16世紀第3四半期) 祭祀遺物出土状況



SK224 出土状況細部 ①



SK224 出土状況細部 ②



土坑SK232 (16世紀第3四半期)



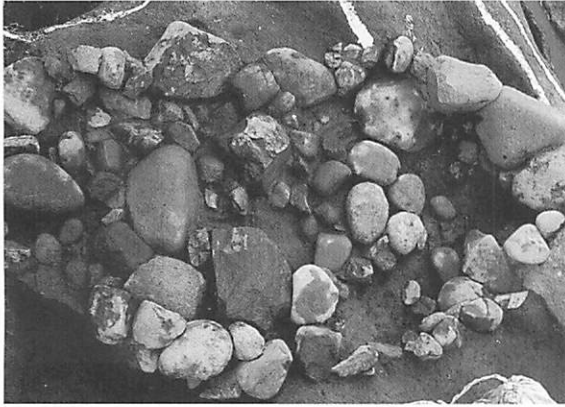
土坑SK293 (16世紀第3四半期)



溝SD230 (16世紀第4四半期前半)



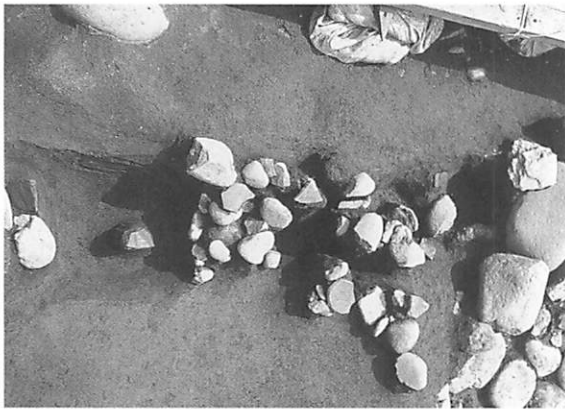
土坑SK261 (16世紀第4四半期前半) 出土状況



SK261 埋土除去後



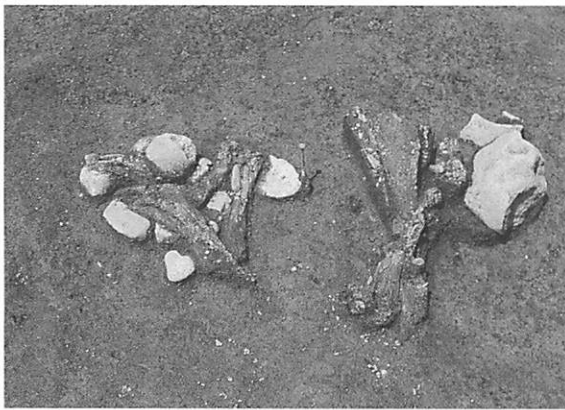
SK261



溝SD292 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK236 (16世紀第4四半期前半) 出土状態



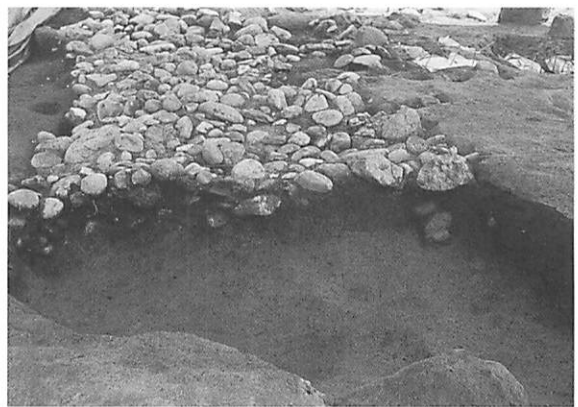
SK236 動物骨出土状態



SK236 土器出土状態



SK236 完掘状態



土坑SK269 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK279 (16世紀第4四半期前半)



土坑SK263 (16世紀第4四半期前半)



SK263 断面



SK263 完掘状態



土坑SK229 (16世紀第4四半期前半)



SK229 完掘状態



土坑SK262 (16世紀第4四半期前半) 出土状況

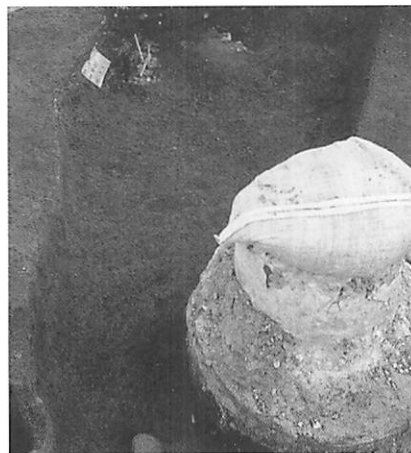


土坑SK231 (16世紀第4四半期後半)





土坑SK215 (16世紀第4四半期後半)



土坑SK237  
(16世紀第4  
四半期後半)



土坑SK220



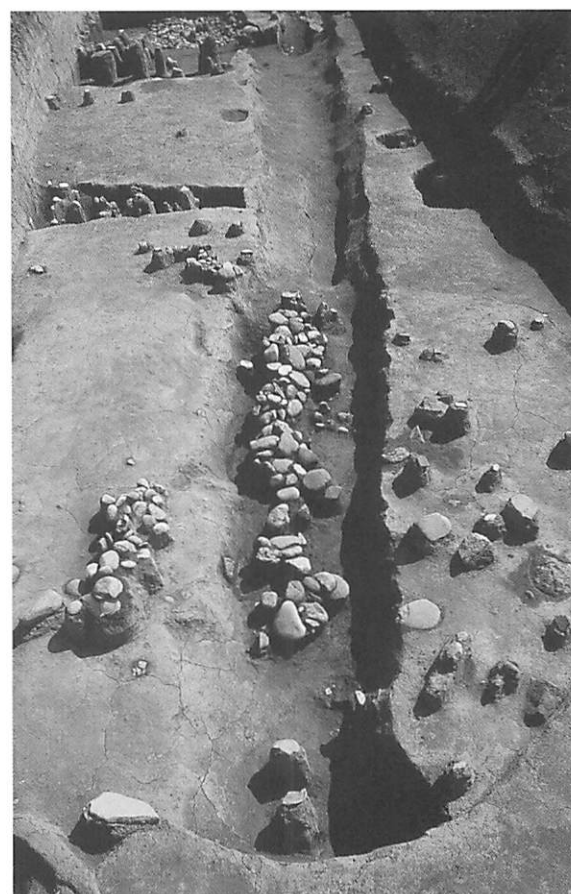
現地説明会 (2002.8) ①



墓地の区画溝SD131 (東から) 2001年度調査時



SD131



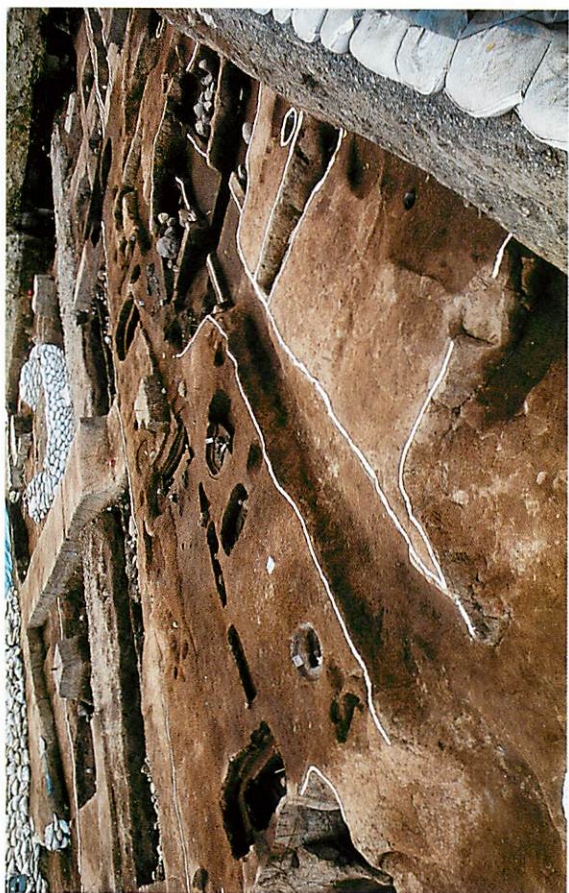
SD131 (西から)



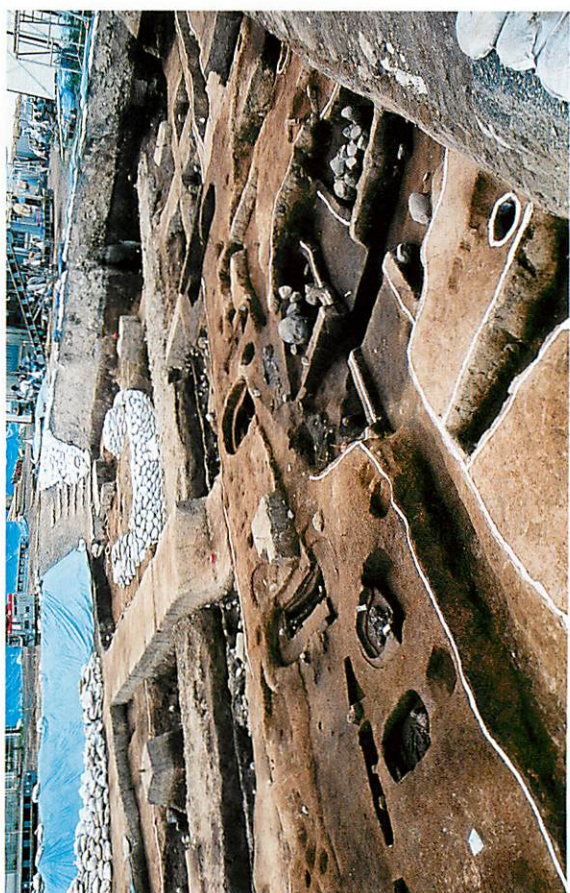
墓地全景 (南から)



墓地全景 (西から)



墓地全景 (北東から)



墓地全景 (北東から)



墓地西部 (南から)



墓地中部 (南から)



墓地中部 (南から)



墓地東部 (南から)



1号墓ST130 (南から)



ST130 (北から)



ST130 木棺



ST130 北半 (東から)



ST130 全景 (西から)



2号墓 ST135 (西から)



3号墓ST268 埋葬状態



3号墓ST268 棺底出土状態 (東から)



4号墓 ST1150 埋葬状態 (南から)



4号墓 ST150、西側板・角材痕跡



4号墓 ST150、東側板・角材痕跡



4号墓 ST150、北小口板角材痕跡



4号墓 ST150、金具12、出土状態



4号墓 ST150、金具1、出土状態



4号墓 ST150、金具2、出土状態



4号墓 ST150、金具11、出土状態



4号墓 ST150、釘25、出土状態



5号墓ST154  
埋葬状態



6号墓ST157  
埋葬状態



7号墓ST158  
埋葬状態



8号墓 ST149 埋葬状态



8号墓ST149 木棺出土状态



8号墓ST149 棺盖落下状况



8号墓ST149 木棺底部





8号墓ST149 北小口、角材出土状态



8号墓ST149 南小口角材出土状态



9号墓ST152  
埋葬状态



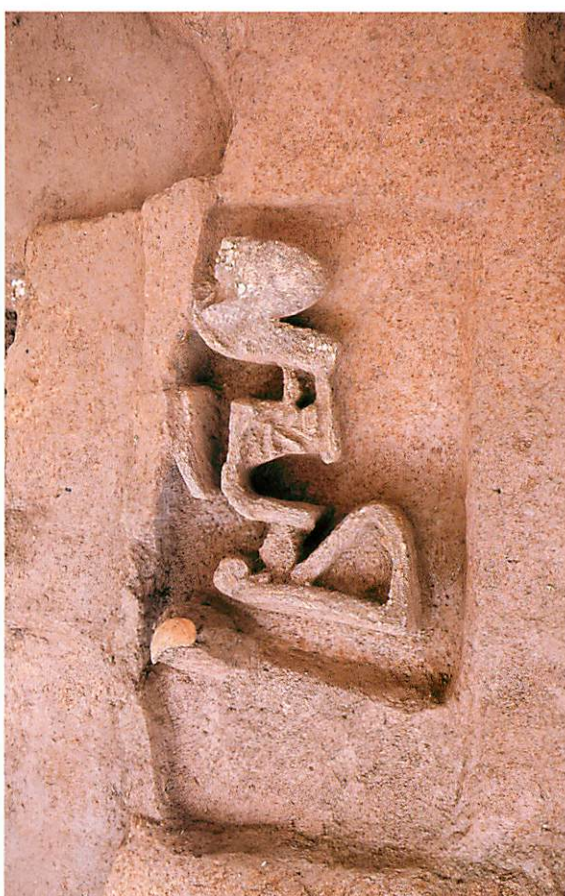
10号墓ST260  
埋葬状态



11号墓ST257出土状態(南から)



11号墓ST257ガラス玉出土状態



12号墓ST274埋葬状態



13号墓ST289埋葬状態



14号墓ST295埋葬状態



15号墓 ST296、人骨出土状態



18号墓 ST290



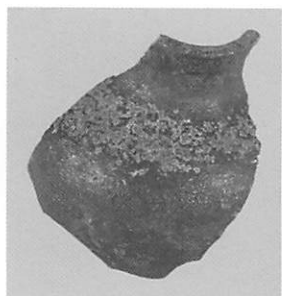
16号墓 ST297、出土状態



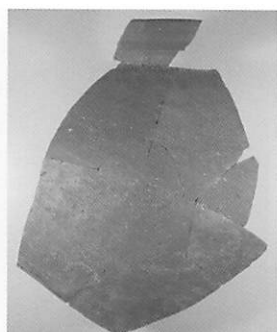
調査風景（夏の夕暮れ）



現地説明会②



2-6-12



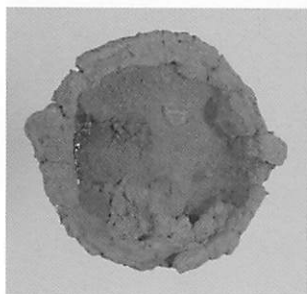
2-6-16



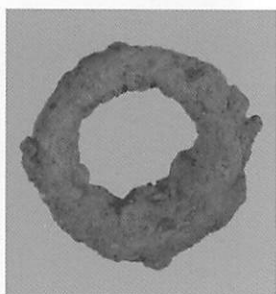
2-6-23



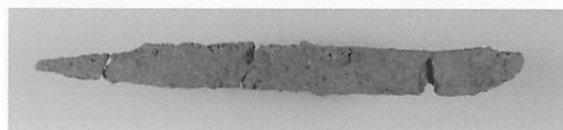
2-7-24



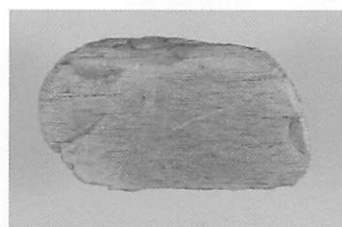
2-7-25



2-7-26

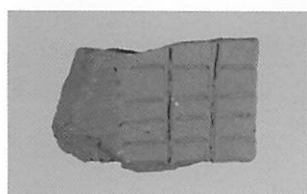


2-7-27



2-7-28

SD001出土遺物 (第2-6図~第2-8図)



2-10-8



2-10-10



2-12-1

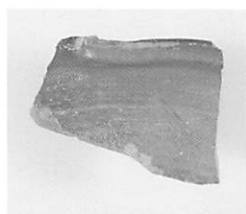


2-14-2

SD010出土遺物 (第2-10図)

SD028出土遺物  
(第2-12図)

SK004出土遺物  
(第2-14図)



2-17-1



2-17-2



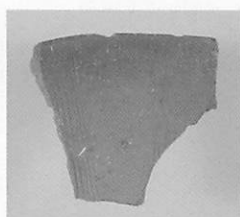
2-18-3

SK006出土遺物 (第2-17図・第2-18図)



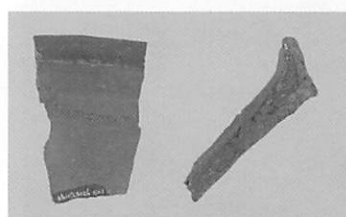
2-28-1

SK019出土遺物  
(第2-28図)



2-29-1

SK022出土遺物  
(第2-29図)



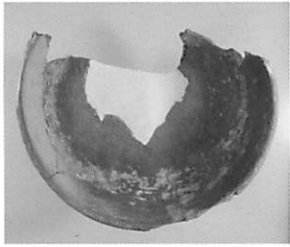
2-32-1

SK026出土遺物 (第2-32図)



2-34-1

SK027出土遺物  
(第2-34図)



2-37-1

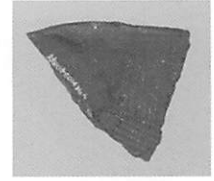


2-37-2

SK030出土遺物 (第2-37図)



2-39-11

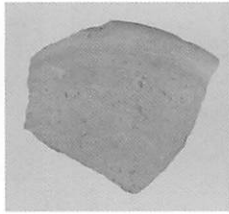


2-39-15

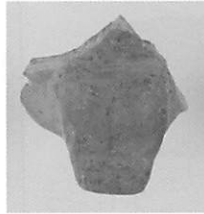
SE014出土遺物 (第2-39図)



2-42-5



2-42-6



2-42-9



2-42-10

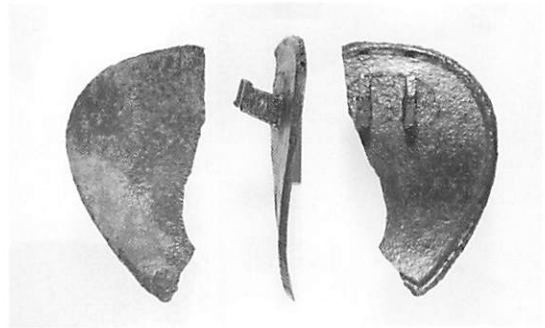
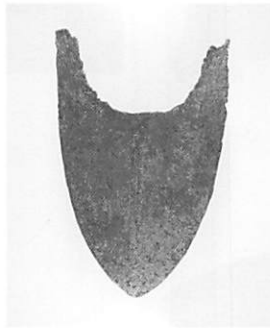
SE017出土遺物 (第2-42図・第2-44図・第2-45図)



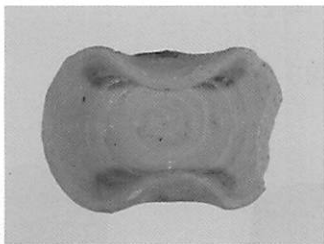
2-45-3



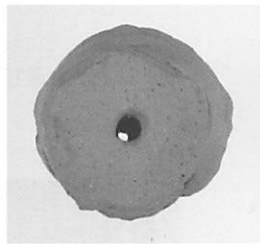
2-44-1



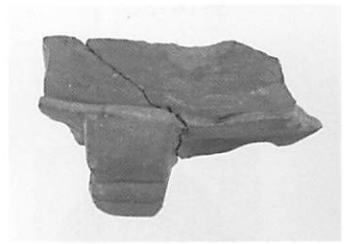
2-44-2



2-48-6

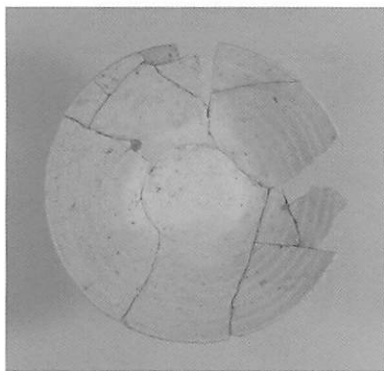


2-48-7



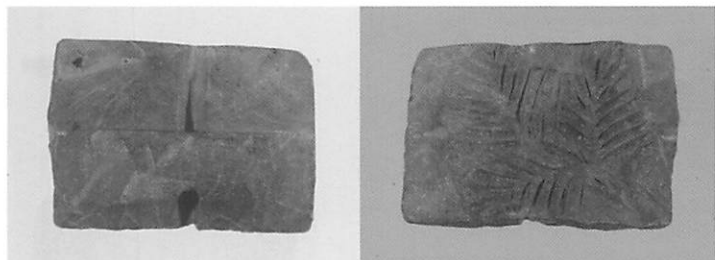
2-48-8

包含層・ピット出土遺物 (第2-48図)

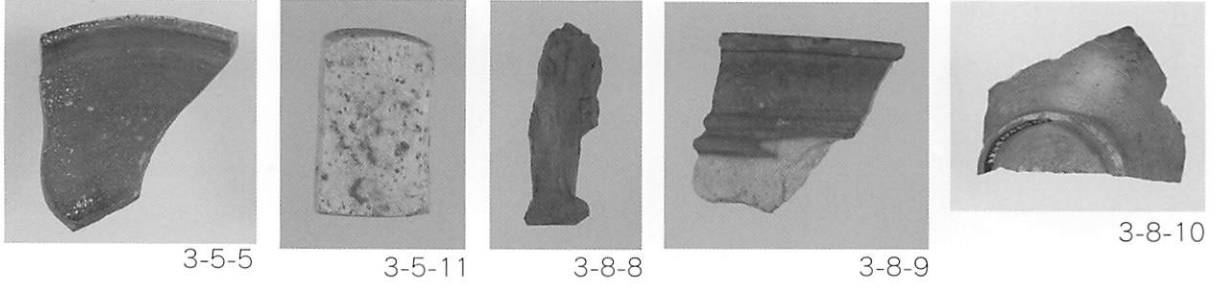


2-47-1

ST009出土遺物  
(第2-47図)

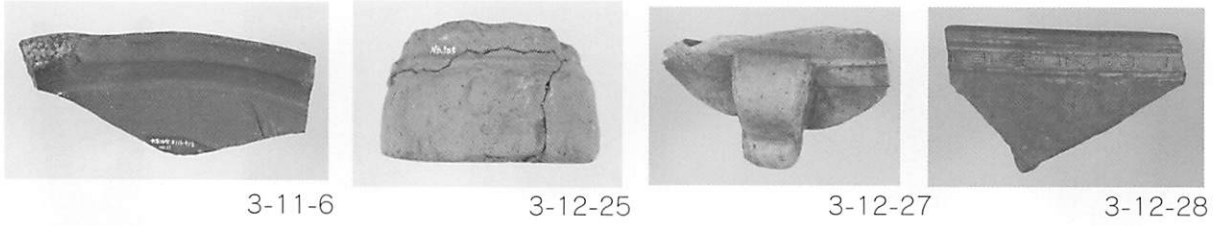


2-48-13

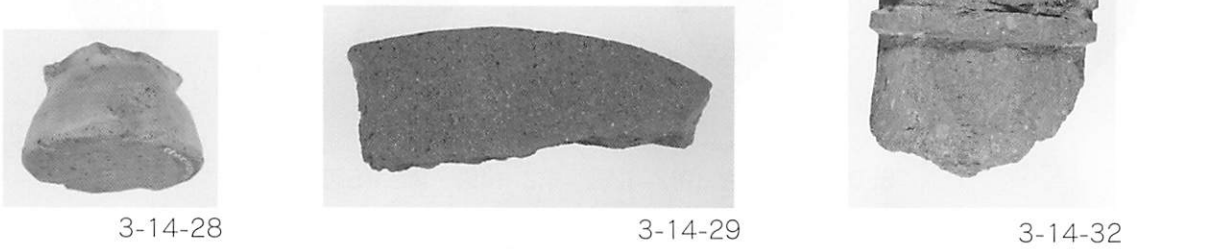


SD111出土遺物 (第3-5図)

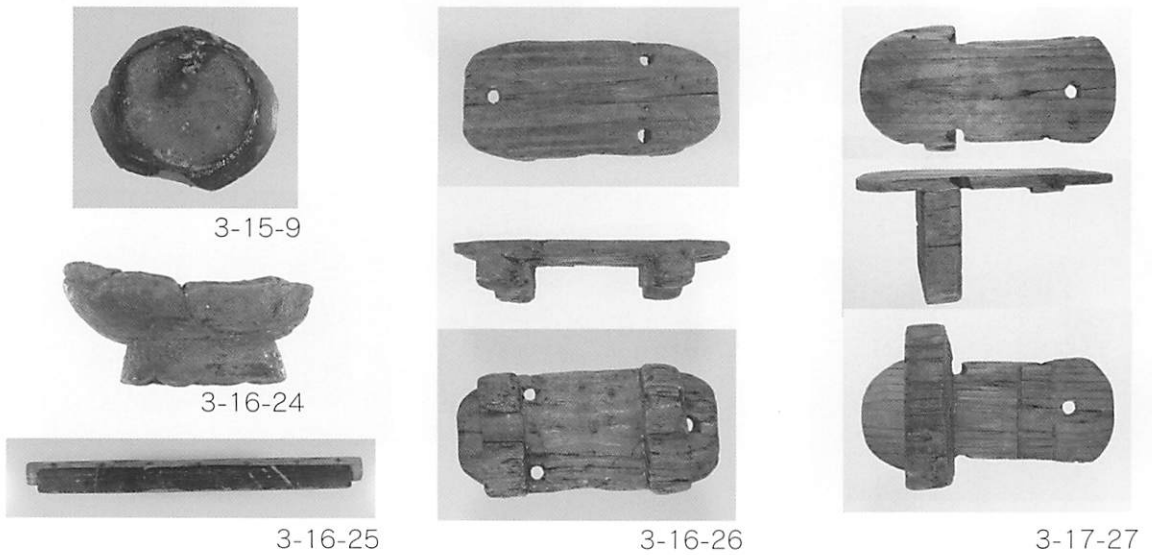
SD113出土遺物 (第3-8図)



SD116出土遺物 (第3-11図・第3-12図)



SD117出土遺物 (第3-14図)



SD118出土遺物 (第3-15図～第3-17図)



3-25-6



3-25-13



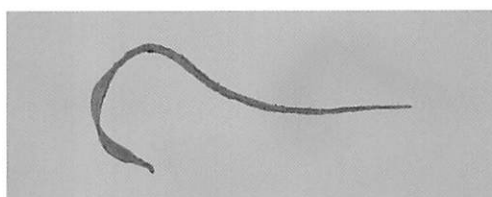
3-26-25



3-26-26



3-26-30



3-26-31

SK104出土遺物 (第3-25図・第3-26図)



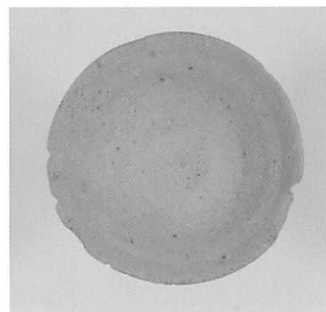
3-28-2

SK115出土遺物  
(第3-28図)



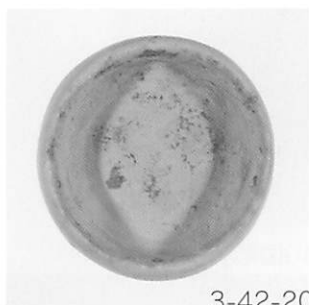
3-31-1

SK121出土遺物  
(第3-31図)

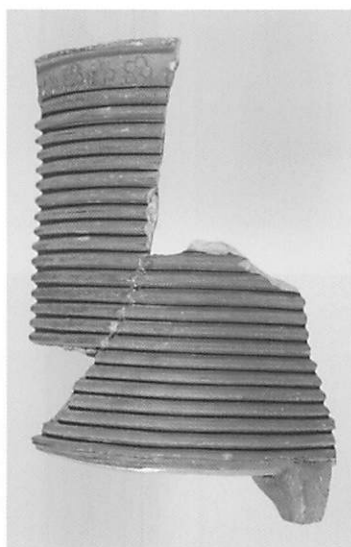


3-36-1

SP003出土遺物  
(第3-36図)



3-42-20

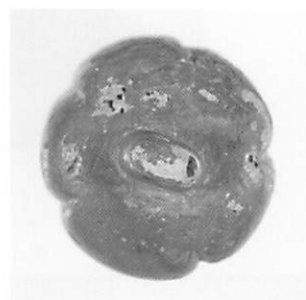


3-42-21

包含層出土遺物 (第3-42図・第3-43図)



3-43-45



3-43-46



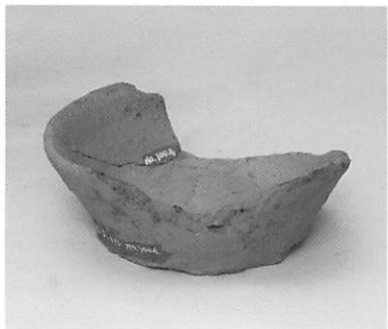
SD165 出土遺物 第4-16图1



第4-16图2



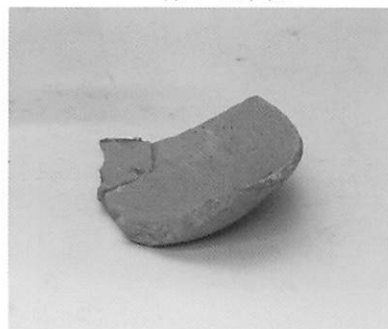
第4-16图3



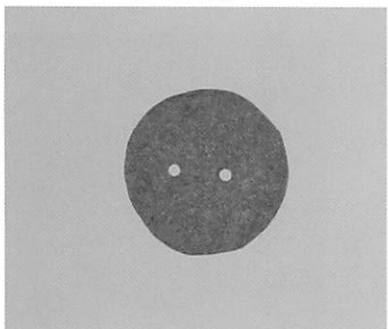
第4-16图4



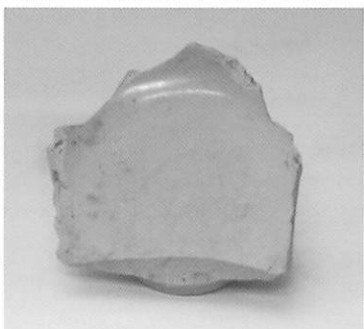
SD255 出土遺物 第4-18图1



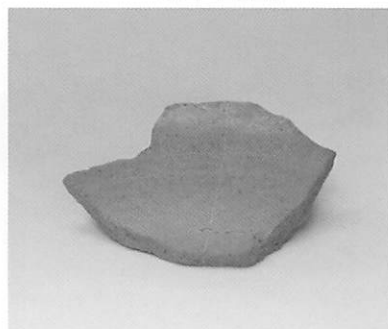
第4-18图2



SK251 出土遺物 第4-31图17



SK266 出土遺物 第4-40图1



第4-40图2



第4-40图3



第4-40图4

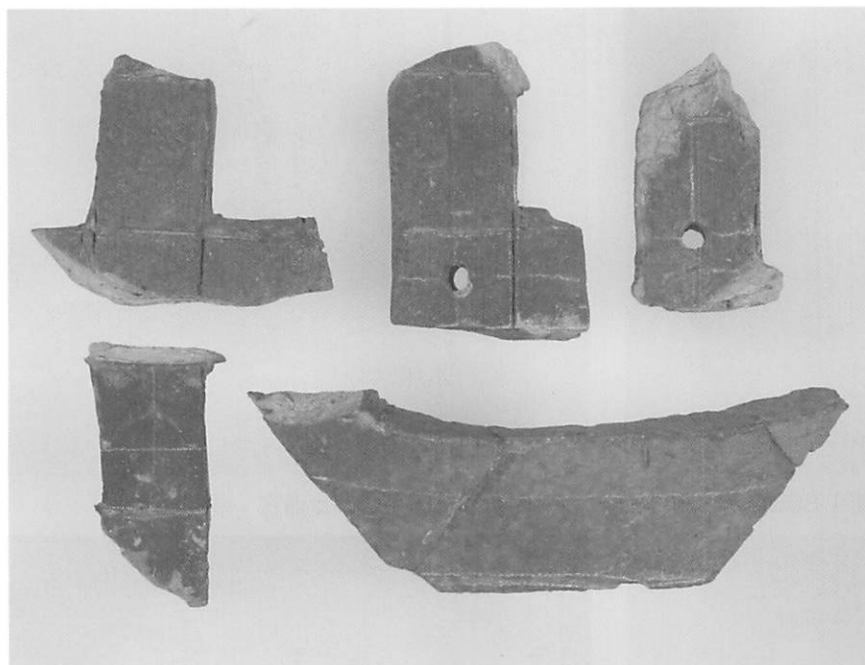


第4-40图5

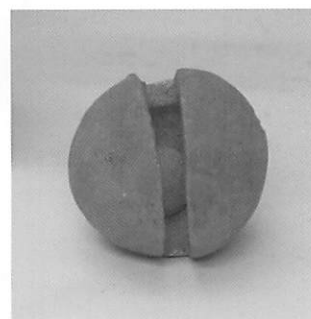
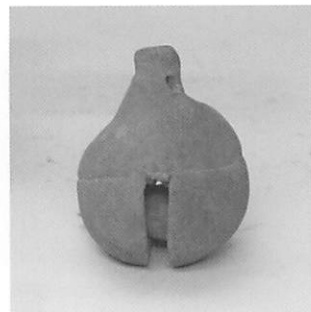


第4-40图6





SK265 出土遺物 第4-57图1



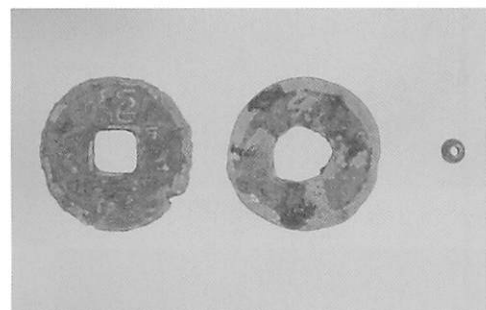
SK163 出土遺物 第4-61图2



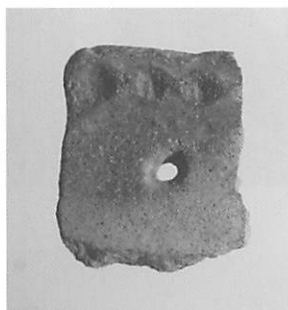
SK224 出土遺物 第4-73图1



第4-73图2



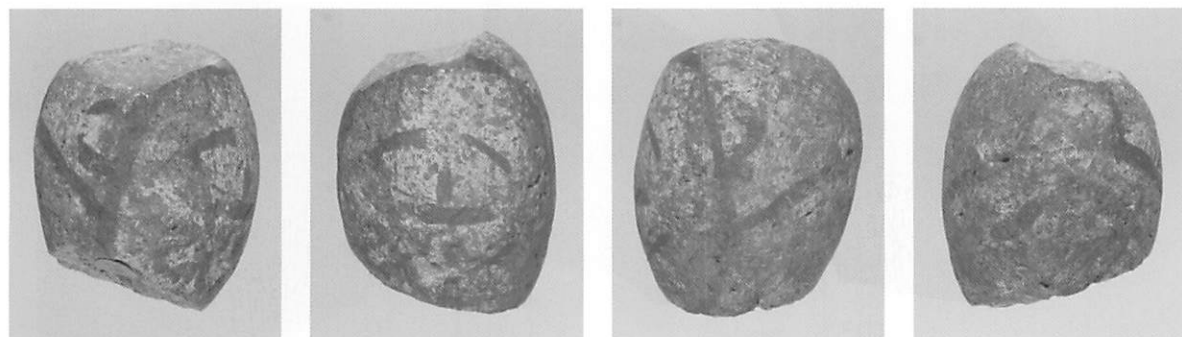
第4-73图3·4·5



SK232 出土遺物 第4-75图16



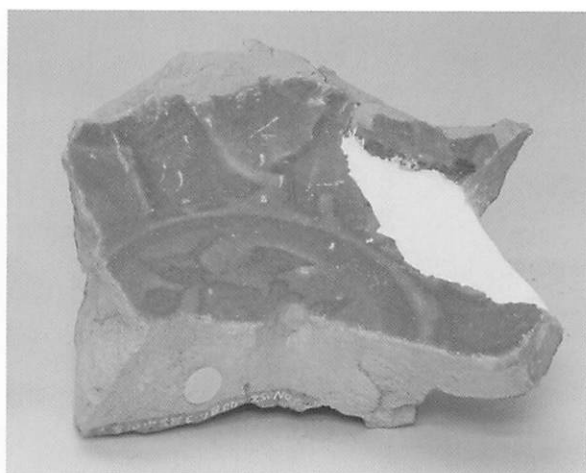
SD118 出土遺物 第4-82图1



第4-82图8



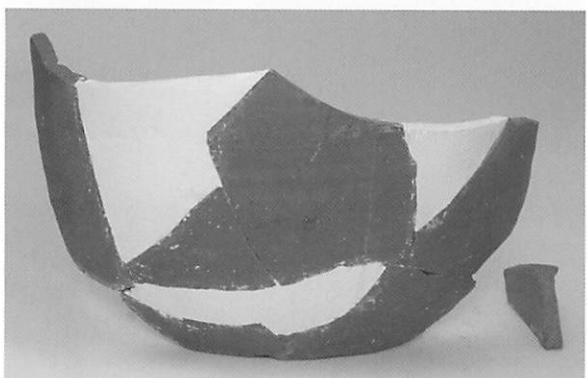
SD116 出土遺物 第4-86图16



SD250 出土遺物 第4-88图1



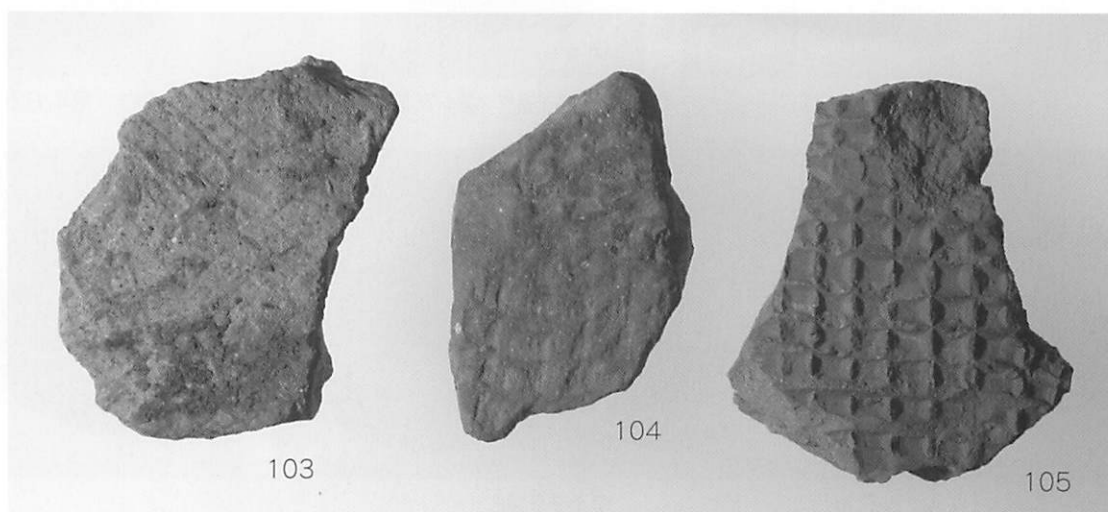
第4-88图11



第4-88图13



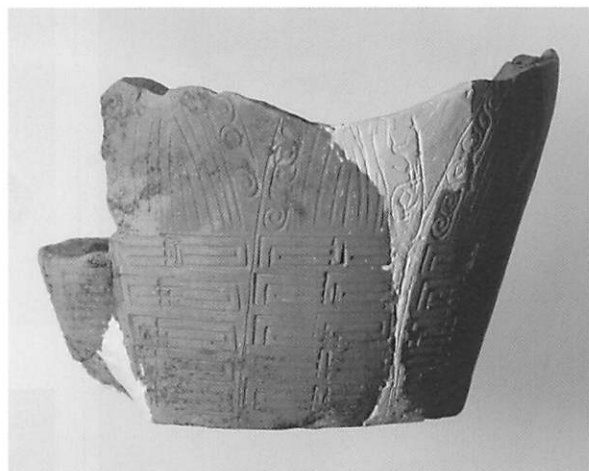
第4-88图99



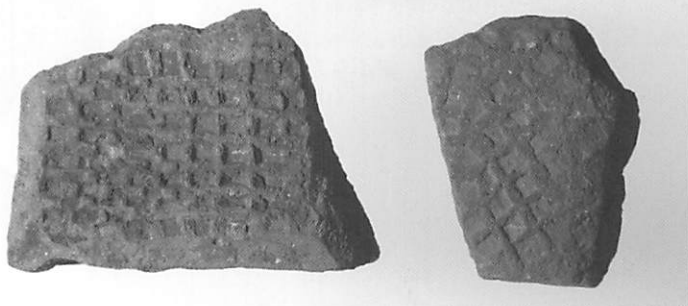
第4-88图



SD270 出土遺物 第4-90図10



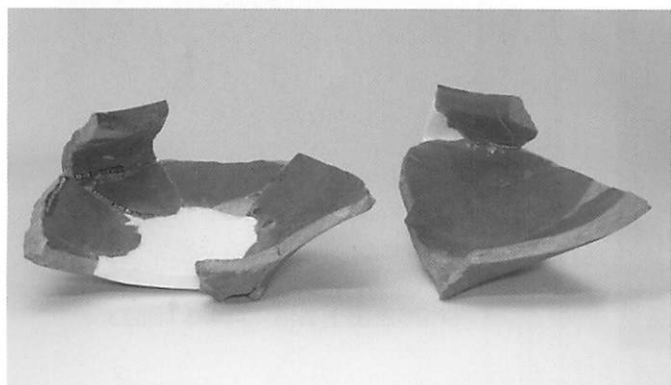
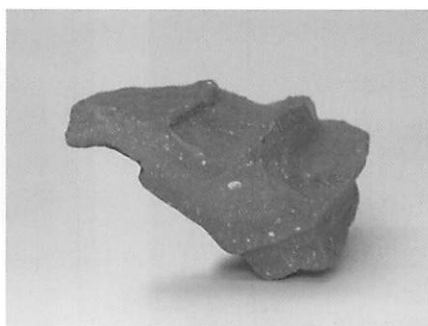
第4-90図12



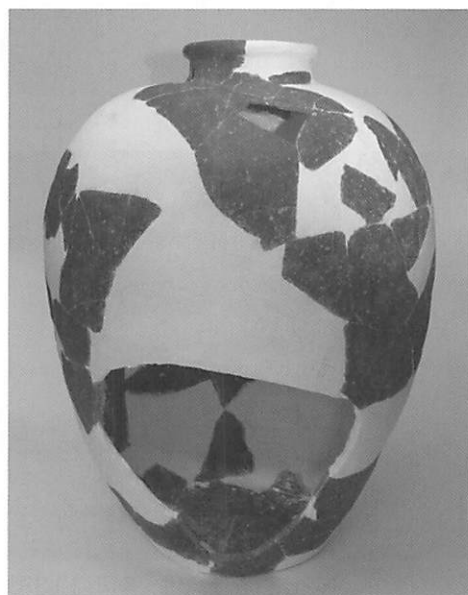
第4-90図23・24



第4-90図21



SD131 出土遺物 第4-92図5



SK261 出土遺物 第4-97図1



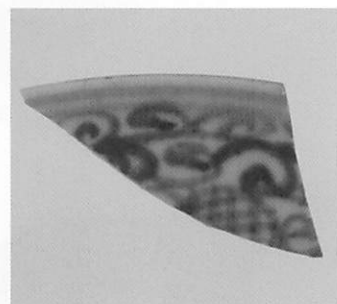
SK261 出土遺物 第4-97图2



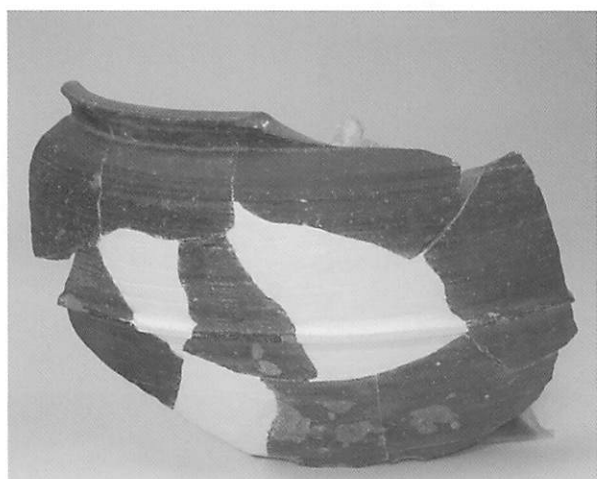
SK292 出土遺物 第4-98图1



第4-98图2



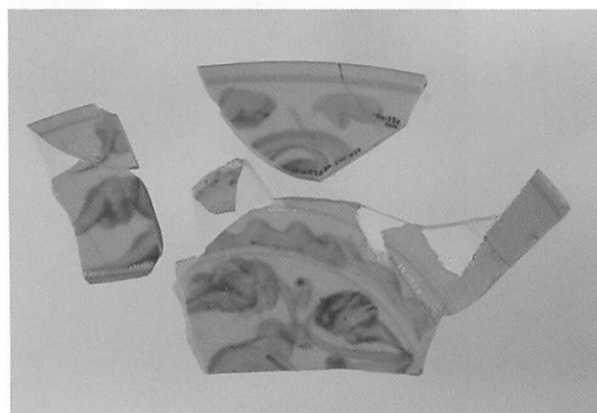
SK264 出土遺物 第4-103图1



SE148 出土遺物 第4-102图21



第4-103图2



SK263 出土遺物 第4-113图5



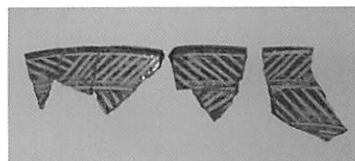
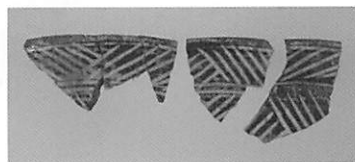
SK262 出土遺物 第4-118图3



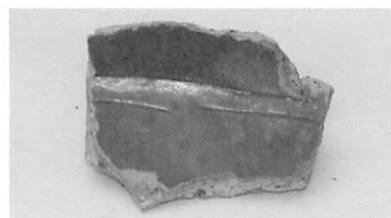
SD168 出土遺物 第4-125図2



第4-125図23



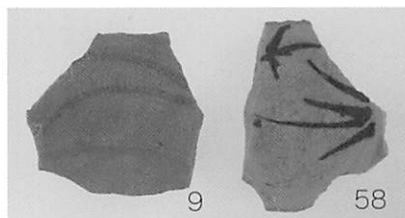
S218 出土遺物 第4-130図1



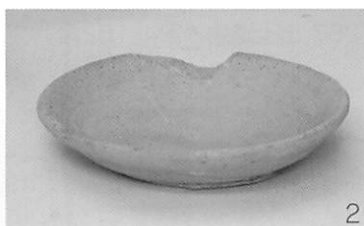
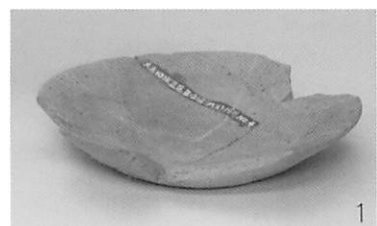
ST213 出土遺物 第4-137図1



第2層整地層出土遺物 第4-153図32



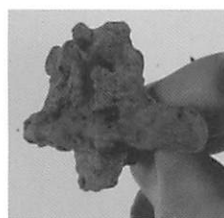
第4-153図



ST268 出土遺物 第4-157図



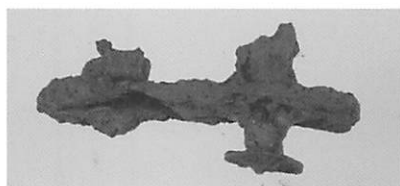
ST295 出土遺物 第4-163図1



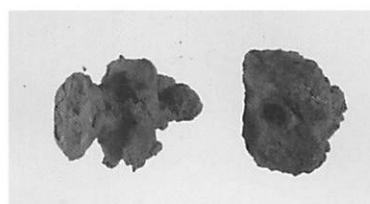
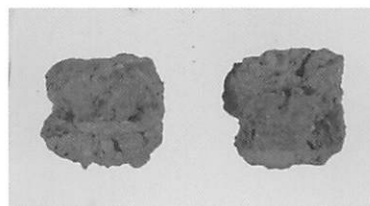
ST150 出土遺物 第4-173図1



第4-173図2



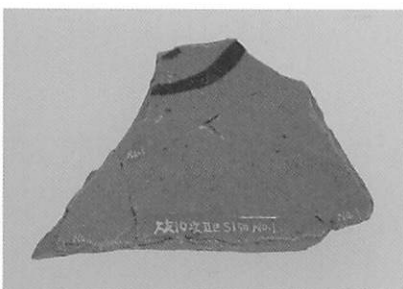
第4-173図10



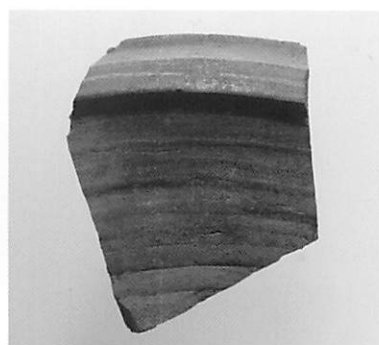
第4-173図5・6



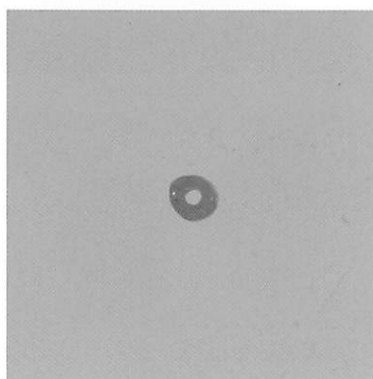
ST150 出土遺物 第4-174図56



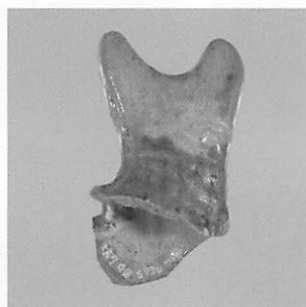
第4-174図57



ST152 出土遺物 第4-179図1



ST257 出土遺物 第4-182図1



7次調査 SK734 出土遺物 第6-5図1

## 報告書抄録

ふりがな	ぶんごふない6 ちゆうせいおおともふないまらあとない10じちようさく
書名	豊後府内6 中世大友府内町跡第10次調査区
副書名	大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	5
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	坂本嘉弘、田中裕介、後藤晃一、山崎文子、田中良之、魯提眩、平尾良光
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田字ピワノ門1977番地
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちゆうせいおおとも 中世大友 ふないまらあと 府内町跡 第10次調査	おおいたしうえの 大分市上野 ろくぼうきたまら 六坊北町	322	51	33° 13′ 32″	131° 37′ 20″	2001年 7月 ～ 2002年 9月	約2,000	大分駅 周辺連続 立体交差 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友 府内町跡 第10次調査	中世都市	中世	墓地・柱穴群・ 溝・道路・土坑 ・井戸	古代須恵器・土師器・円面 硯。中世貿易陶磁・備前焼	中世 横小路と中町関 連の町屋遺構、イエズ ス会府内教会付属墓地 と推定される墓地を検 出

要 約	<p>中世大友府内町跡第10次調査区は、府内古図による第4南北街路に面する上町および中町にあたり、そこから西に延びる道路と道路北側には顕徳寺ダイウス堂と記載されたイエズス会府内教会の敷地にあたと想定されていた。調査の結果、15世紀後葉から17世紀初頭まで改修を繰り返しながら使用された東西道路と中町の町屋、東西道路を挟む区画の変遷が明らかとなった。</p> <p>とりわけ中町背後の道路北側には16世紀後半の墓地が存在し、その埋葬内容と位置からイエズス会府内教会の附属墓地である可能性が高いことが指摘される。</p>
-----	--

---

---

## 豊後府内6

中世大友府内町跡第10次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第15集

平成19(2007)年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113  
大分市大字中判田字ピアノ門1977番地  
TEL (097) 597-5675

印刷 株式会社インタープリント  
〒870-0945  
大分市大字津守563-7  
TEL (097) 568-8123

---

---